THE CENTRAL REVIEW

中央公論

10-1925

十月號

第四十年第十一號 第四百五十三號


二十分して鏡を御覧
生々した美しい黒髪に染る
去らが
赤毛染
ナイス
本舗 大阪 東京 丹平商會藥房
ナイスの特長
■タツタ二十分で
■自然の色艶に染まり
■剝ず褪ず、用方簡易
ナイス

見よ!

現代

◎近時の世相を凝視めて……一荒芳德

○百折不撓私が今日を築くまで……數名士

○川島洋紙店主の成功物語……松井郷人

○良い子供はかうした親から……芦田惠之助

◎好況時代は何時來るか……石山賢吉

○世界の新思索新思潮
○三助から見た裸體美
○襲い來たる生活苦の種々
○日本音樂の話
○天下に推奬さし隱れた偉人
○入學隨意常識大學
▽趣味多き園藝
▽日本婦人の美德
▽美術シーズン來る
▽趣味の名士
▽世界の大勢
▽名士苦心談
▽學生町から見た當世學生氣質
▽奇談珍談
◎滑稽ラヂヲ大會

○新内閣運命豫斷

◙夫婦仲をよくする呼吸……
◙日本全國模範村めぐり
◙講道館柔道の譽……
○世渡の道……
○海外成功美談……
○不老長壽法の新發見……
○現代名士說話集
○面白科學の話……
○牛涎漫語……
○十年計畫一家繁榮策……

此の壯觀！十月特大號

◎早速整爾評傳……草澤學人

◎政治教育の話……下村宏

◎大會社大銀行の歡迎する人物……橘東生

大評判の小說と講談

○長篇小說 不滅の光……長田幹彥

○探偵小說 死の寶庫……紀潮音

◉實業講談 三井王國……大瀧鞍馬

◎小說 青葉の頃……上司小劍

◎世界奇談 大金脈……伊藤銀月

◎脚本 炎に生く……三上於菟吉

○武勇講談 田中兵助……半井桃水

○家庭小說 夏草……加藤武雄

○怪奇小說 戀の驕猿王……笹野雪彥

◯高野式の人工蠕動健康法

◎家庭を愉快にする主婦の心掛

◉金儲の研究並に實例

◉名士の五分間演說例

◉社會時評……

特別三大附錄

世界の大勢と日本の現狀

その脚下を知り周圍を究め相互關係を察する事がより強く樂しくより有意義に生くる所以である。抑へ難き新人の進路を照す燈明臺はこれ！

成功に必要なる常識百般

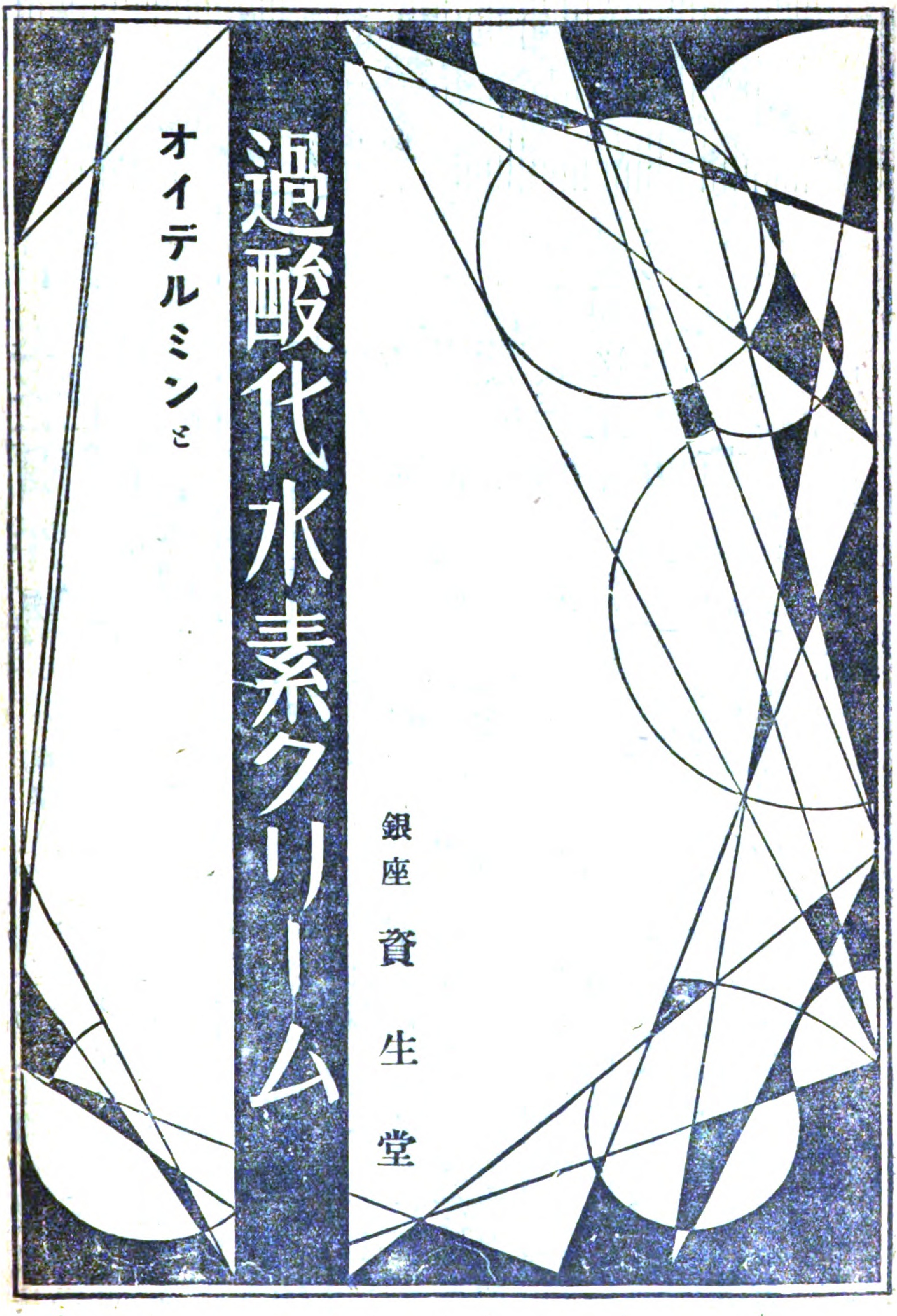
理屈一片で世は渡れぬ人を悅服さすには微妙な常識が要る些細な言行から嫌はれも好かれもする場合が多い。本篇は一讀千金の活寶典！

劍の恋涙の恋熱火の恋

戀に哭く英雄、情熱に燃ゆる佳人幾多戀の最高潮を描寫して濃艶深刻！篇々悉くこれ筆者心血結晶絢爛佳麗凄愴狂亂の一大繪卷！

定價 壹圓五拾錢（送料五錢）

東京本鄕 大日本雄辯會發行（振替東京二三九三〇）


オイデルミンと
過酸化水素クリーム
銀座資生堂

其食糧政策確立の急務

▼説苑


含嗽用に一番よいクラブ水齒磨
効力舶來品以上の齒の爲に一番よい
クラブ煉齒磨
CLUB
DENTAL CREAM
クラブ煉齒磨
CLUB Dental Cream



秋晴　　平福百穗筆

虛弱者を強健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは入大醫學博士の御推奬と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血强壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上强力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黃病、腺病及肺結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後快復期姙婦、授乳婦、產後、虛弱羸瘦者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

效能	品名	瓶	分量	價
補血强壯榮養增進劑	單味ブルトーゼ	小瓶	半月分	金二圓
		大瓶	一月分	金三圓
神經性疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶	半月分	金二圓三十錢
		大瓶	一月分	金三圓八十錢
腺病質特効補血强壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶	半月分	金二圓三十錢
		大瓶	一月分	金三圓八十錢
健胃補血强壯劑	キナブルトーゼ	小瓶	半月分	金二圓三十錢
		大瓶	一月分	金三圓八十錢
呼吸器系疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶	半月分	金三圓五十錢
		大瓶	一月分	金五圓五十錢

賣捌各地藥店

說明書進呈

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

發賣元

本舖 藤澤友吉商店

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府西小門町四十二

農村問題大系

豫約募集・見本贈呈

◇二年間の周到なる編纂準備と、壓倒的大規模計畫の下に完成されたる本大系は全篇十二冊、何れも皆農學界農政界の權威的大老新進により畢生の力を傾倒して作られたるエッセンスの再凝集である。

◇事實は雄辯に語る。農村問題の知識、而もすぐ實際に役立つ知識を綜合した叢書として、學究的、通俗的、興味的なる世界に唯本大系あるのみ。

見よ！此壯觀！！農村問題解決の鍵は與へられたり

第一篇	農村社會問題	東京帝大教授 農學博士	那須皓
第二篇	農村自治	前内閣書記官長 衆議院議員	小橋一太
第三篇	農村財政	衆議院議員	清水長郷
第四篇	農業經濟	京都帝大教授 法學博士	河田嗣郎
第五篇	農業金融	東京朝日主幹	牧野輝智
第六篇	農業經營	農事試驗場長 農學博士	安藤廣太郎
第七篇	農業土地問題	京都帝大教授 農學博士	橋本傳左衛門
第八篇	米穀問題	前[illegible]商務次官 貴族院議員	上山滿之進
第九篇	農村副業問題	日本產業協會長 貴族院議員	道家齊
第十篇	產業組合問題	產業組合中央會會頭 貴族院議員	志村源太郎
第十一篇	小作問題	協調會理事 法學博士	氣賀勘重
第十二篇	農村教育	帝國農會副會長 法學博士	矢作榮藏

◇**體裁** 布表裝製本堅牢函入特製四六判毎卷三百頁◇**行刊期日** 大正十四年十一月より毎月一冊宛刊行大正十五年十月完結◇**豫約代金** 全卷一時拂金貳拾圓（送料一圓八拾錢）毎月分冊拂金壹圓八拾錢（送料十五錢）外に入會金壹圓九拾五錢、但し入會金は最終刊行分に當つ、外に隨意選擇豫約に應ず◇**詳細**は内容見本に就いて御了諒を乞ふ◇**豫約〆切**十月十五日限り

豫約元 東京市本鄉區弓町 振替東京九六七八 合資會社 **日本評論社**


お讀みなさい
この廣告!
お讀みなさい
サクラビールは
品質第一等
酵母が上等で
ヴヰタミンが多い
「營養ビール」
お讀みなさい

大正十四年

中央公論

十月一日發行

十月號

第四十年　第十一號

第四百五十三號

新眞政論の振興

普通選擧制の施行に由て始めて政治は國民の問題となつた。婦人參政權の認められぬ今日斯く云ふに語弊ありと難ずる論者あらば、少くとも、普選に由て政治は國民のものとなり掛けたと謂て差支あるまい。選擧權が少數の有産階級に限て與へられて居る限り、如何に政治的興味乃至智識が廣く普及しても、國民の大多數は政治と何の實際的關繫もない。獨身者に取て育兒法は到底机上の空論たるを免れぬではないか。また實施はしないにしろ、選擧權といふ花嫁をあてがはれて國民はこゝに始めて嫌でも應でも家庭の經營を現實の問題とせざるを得ぬことになつたのだ。

政治が國民のものとなれば政論がまた自ら國民の好んで迎ふる所となるは論を待たぬ。是に於て「國民の爲の政論」といふことが問題になる。政論は今日まで隨分我國に於て盛であつた。が、今までの樣な政論はその儘今後の國民の有つべき政論たるを得やうかどうか。

從來の政論は、時として實際政客の政論であり又時として學者思想家の政論であつた。政客の政論なり學者の政論なりは同時に國民の政論たり得ないと云ふ道理はないが、事實の上に於て前二者は概して國民の利益――少くとも其の政治的利益――とは頗る緣の遠いものであつた。こゝに少しく本誌の嘗めた經驗を語ることを許されたい。本誌は創刊以來數十年の間其の奉仕的事業の一として健全なる政論の提供に努めて來たが、其始め好んで政論を爲す人は殆んど實際政治家に限り、而して彼等の論說はその最も純精なるものと雖も概して各自の政治的立場に根源する多少の偏執より脫することが出來なかつたやうだ。この弊は政黨の發達と共に益ひどくなる。之ではならぬと思案を換え、今度は學者思想家に政界の公平なる批判を求めたが、之が丁度社會の要求にも適合したと見え大に世上の歡迎を受けた。之より今日の盛運を見るに至り、苟くも社會公共の問題を取扱ふ雜誌

頃にして今日[illegible]て埋めらるゝといふ有様となつた。政論が政客の手より學者の手に移つたことは其自身既に一大進歩であるのに、昨今はまた之等學者思想家の不斷の努力に依て稍見事に發達しつゝある。誠に喜ぶべき現象であるが、さてこゝに愈普選の實施を見政治が文字通りに國民のものになるといふ段に至ると、之等學者思想家の政論にまた一種の缺點を氣付かぬ譯には行かぬことになる。是れ吾人が此際別に「新政論」の振興を說く所以である。

今日思想家の政論に缺くるところは政治的進化の時間的並に空間的背景を無視――少くとも輕視――することである。云ふまでもなく政治は――國民の現實の問題としての――活きた社會を對象とする。之を人體に譬へるなら政治は病理學や解剖學でなくて實に對症療法そのものだ。從て其の手段は白紙に文字を書くやうなものであつてはならぬ。其人の過去の經歷や現在の狀態に依て自ら制限せられざるを得ぬものである。日本がどんな風であればいゝかのユートピアを說くのでなく、今の日本をどうしてどこへ持つて行くべきかが政治の問題である。最も餘りに歷史を顧慮し過ぐれば因循となり、餘りに現狀に執着し過ぐれば姑息になるの弊は大にある。けれども斯くありたいといふ狀況を其儘全部實現させうといふのは、革命的政治觀の信徒でない限り、そは畢竟目的に裏切るものたるを知らねばならぬ。有名な西洋の政治家は謂つた、或る問題を失敗に陷らさうと欲せば、該問題主張者の說を極度に誇張せるものを取て標準とし、之に據て却て彼の主張を微温と攻擊するに限ると。頗る味ふべき言であると思ふ。

要するに思想家の政論は今日の所やゝもすると其の實現を希望する全綱目の羅列であり又其の即時實行の要求である。机上の研究としては成程完全なものたるを得やうが、之を活きたものに適用するには其間自ら順序があるべきだと思ふ。其の活きたものにつき更に歷史的に分析的に構成發展を詳査して適當に之を目的地に誘導するの順序をつけるのでなくては本當の政論とはならぬ。この本當の政論を振興さすことが今や普選の實施に嗣いで起るべき當今の急務ではあるまいか。（九・六、千虎俚人）

中央公論
第四十年第十一號
十月號
第四百五十三號



ミリタリズムと藝術的感覺

長谷川如是閑

一　戰爭と原始的の藝術的感覺

ミリタリズムと藝術的感覺といふ標題は、全く沒交渉な二つの命題を無意味に連結させたかの如くであるが、然し社會がミリタリズムの組織に支配された場合は、その社會人の感覺がその支配狀態に影響されないといふことは考へ得られない。藝術的感覺は畢竟社會的感覺の一つの狀態である。從つて社會組織がそれの決定條件をなすものであることは、生物學的條件が生物心理を決定するのと異らない。藝術はその表現に就いて藝術的感覺に依存する。官能的藝術

は殊に直接に感覺の條件によつて決定される。より高級な藝術も亦その藝術的感情が生活の條件に依存するものであることは、根本的に認められなければならぬ事實である。藝術的感情がミリタリズムの支配の下において當然にその影響を受けたこと、並びにそのことが一般の認識を免かれてゐる事情についてここに研究しようとするのである。

藝術は想像による創造である。想像はすべて知覺に根柢するものであるが、知覺は元來孤獨の個人的現象ではなく、社會的に共通性を持つてゐるものである。從つて正しい知覺が社會的に構成されると同じく、その知覺に基く想像が社會的に構成される。さうしてそれが組織化されて概念構成の形を取れば所謂科學的叡智として社會的に成立する。而して若し知覺が具體的に想像として再現される場合は、それが如何なる形を取らうとも、所謂藝術的想像の要素を包含してゐるのである。故にやや複雜な想像はそれ自體藝術的である。如何に簡單なものであらうとも、全く想像の作用に影響されないといふことはあり得ないのだから、記憶による再現は藝術の初歩的な動因である。元來記憶そのものが、さうして若しその想像が社會一般の想像心を刺戟する場合には、そこに藝術的效果が現はれる。私達が唯他人の容貌を淡然と想ひ浮べる場合でも、そこに想像の作用が加はつて、それが社會的普遍性を持つてゐた場合には、――例へばそれが或る特殊の人間的性格を想像せしめるやうな場合には――その想像自體が一つの初歩的な藝術の動因をなすものである。唯、私達は表現の技術を持ち合はさないために、それが藝術品として表現されることを得ないのである。

藝術の最も簡單なものは、刹那的の言語又は動作の藝術であるが――歌謠、舞踏等――この簡單な藝術は、想像力の作用が本能的に言語又は動作に表現されるのであつて、藝術的自覺は伴はないが、それが藝術の要素的性質を持つてゐるものであることは發達した藝術と同じである。何かの事物又は事件の知覺が記憶によつて再現される場合に、

原始的心意に於ては、殊に想像的要素が加味される。——如何に發達した心意に於ても、全く想像を加味しない再現はあり得ないが——甚しい場合には、記憶であるが現在の知覺であるかが區別出來ないこともある。これは知覺そのことが過去の記憶を基礎とする感覺だからである。故に或る出來事が『歴史』として組立みたてられる前には、必らず藝術的の歌謠又は物語——想像の勝つた記憶——として表現されたのである。然し、歌謠、物語となる前には、動作による表現でそれを物語つたであらうと推察される。然らば即ち歴史の最も原始的なものはこの藝術的の動作——一種の舞踊——であり、それが記述の方法に移つて物語風の想像的歴史が起る。——日本の舊劇に於て物語と舞踊とを伴ふ『所作事』の如きは恐らく右と同じ系統に屬するものと思はれる。即ち動作による物語の時代の遺風である——社會的に強い刺戟を與へた出來事は自然界の出來事でも人間界の出來事でも、必ず具體的の再現形式を取つて物語られる。雷の響きは、それと同じやうな模倣的動作で物語られそこから雷神のやうな空想が産れる。これは藝術的表現の最初の形式あるが、發達した藝術的創造に於いても同じ要素が發見されるのである。

この藝術的表現の原始的性質が、發達した藝術に於つてもその要素的の部分を形づくつてゐるものであることは、藝術的創造の『眞實性』が、今日もなほ原始時代と同じ性質で信仰されてゐること——藝術的錯覺を現實の知覺以上に眞實とすること——によつてもわかる。

想像は常に知覺を超越しようとするが全く知覺的根柢なしには決して構成されない。元來想像は知覺に基く一つの心的結合である。けれども人間をして想像せしむる心の作用は、その心の働きの所産であるところの心像を單なる心理作用として認識する外に必ずその客觀的確實性を信仰する態度を人間に取らせる。心は人の作つた幻影を幻影として認識することを肯んじない。心が心自らの生んだものを、心に先在する絶對的存在であると信ずるのも、その傾向の現れで

あるが、野蠻人が自分の幻影を絶對的眞實として認識する心意は、後の形而上學的心意と同一のものである。
藝術は右のやうな信仰的態度の上に成立つ想像の絶對性に依存するものである。さういふことが單なる個人的現象であつた場合には、精神病的錯覺と同一である。社會一般が承認しないやうな主觀的產物の確實性を固執する者は精神病者と認められる。之れに反して社會一般がその眞實性を承認する場合には、そこに宗教が產れ、藝術が生れる。故に宗教的乃至藝術的想像と精神病的想像との間には、截然たる限界がないと思はなければならない。この限界は社會の健康狀態が異なるに從つて常に移動するのである。

宗教にしろ藝術にしろ、錯覺なしには成立しないが、然し、その錯覺が或程度まで病的錯覺に近くして尙ほ且つ社會的に成立するといふについては、必ず特殊の理由がなければならぬ。それは、藝術的錯覺が宗教的迷信と同じやうに、その特殊の錯覺狀態によつて、新らたな生存意慾を呼び起す點にある。生存といふ事實は人間的行動並びに心意の絶對條件であるが、人間的意識は決して、常に必ずしもこの生存事實の科學的認識に根據するとは限らない。生存行動が科學的認識に依存する場合にも、意識だけは迷信的に構成されることがあり得る。例へば、水力をもつて車を動かすことを現に科學的に行つてゐる人間も、それは水の『精』が車を動かしてくれるのだと考へることを得る。よりよくこの物理作用を利用するためには、さういふ迷信を離れなければならないが、行動が科學的法則に依據して進展する場合にも、人間の意識は、まだまだ迷信的境地を彷徨する場合が多い。しかも、その迷信は、錯誤的意識ではあるが、その意識が科學的行動を信仰せしめる楔子となつて、人間をその行動の生存的方向に押し進める。神の守護があると信じて勇敢な行動を取り、不定な生產行動を安心して取るだけの信念を得る。天文氣象に關する科學の發達しない時代には、春、種を蒔いても、秋に實るや否や全く不安なのであるが、しかし神が守ると信ずることによつて、安心して種を蒔くことを

得る。つまり、迷信的心意も亦人間を生存行動に押し進める心的旋條として人間に發生したのである。從つてさういふ迷信は、ある時代には――その現象に關する科學の發達しない時代には――社會的に成立し、それを破壞するものはタブー破りとして罰せられるのである。藝術的錯覺もそれと同じく、ある社會現象又は自然現象に關し、人間の生存行動の意慾がその現象の上に能動的に働く場合の心的先驅條件として成立する心像である。故にその表現は、社會一般に對し、新らたな生存意慾を示唆する効果をもつのである。

藝術的創造はそれ故に、生活を超越した心意の所産ではなく、社會的集團の想像本能を刺戟するやうなあらゆる現象が藝術を決定する。故に社會狀態の異なるに從つて常に異つて働らくところの藝術的心意そのものの他に絕對的の藝術的心意なるものがある譯ではない。藝術的心意の『本體』なるものを發見しようとするのは、「光あれ」と叫んだ者が誰であるかを詮索するのと同じ原始的信仰の要求である。

そこで藝術は社會的集團に於ける人間的心意を最も强く刺戟する現象によつて決定される。最初は自然現象が最も强く人心を刺戟した。所謂人事的現象が鋭く知覺に上るのは後のことである。それも初めにはあらゆる人事的現象の動因を自然的現象に歸着させたのである。自然の人間に對する威力のみが人間によつて知覺された。從つて人間的威力でもそれを解釋する場合には自然の威力に基けたのである。これは近代の唯物的哲學と或る共通點を持つた心意である。

自然界の現象に次いで强く社會的に人間の心意を刺戟したものは、自然現象と同じやうな物理的危險性を有つた出來事である。卽ちそれは戰爭であつた。戰爭の前は恐らく狩獵であつた。狩獵は人間の動物に對する戰爭であり、戰爭は人間の人間に對する狩獵であつた。從つてこの戰爭といふ現象が藝術の最初の刺戟となつたのである。最も初步的な藝

術は、この戰爭といふ現象に起源を持つのである。藝術とミリタリズムとの腐れ縁はそこから始まつたのである。

これは藝術がミリタリズムに特に密接の關係を持つてゐるのではなく、唯原始時代に於ける最初の藝術的心意が特にその時代相としての戰爭狀態に刺戟されたのである。原始時代でもその時代相を異にする場合に於いては、違つた現象が初歩的の藝術的刺戟を形造つてゐたのである。平和的の原始部落に於ては戰爭の代りに牧畜收穫等に伴ふ生活現象を最も初歩的な藝術的刺戟として持つてゐたのである。

戰爭も牧畜も收穫も、人類繁殖の必然の過程である。從つて更に之れを遡れば性的行動に歸着する。戰爭の最も單純な、最も原始的のものは、群的性行動に基く生殖戰爭である。從つて最も早い藝術的刺戟は、この群的の性的行動であつたに相違ない。この原始的藝術の動機は發達した藝術の動機として依然として重要な地位を占めてゐるのである。文明國の戰爭も或る意味の繁殖戰爭であるやうに、發達した藝術も性的要素を離れて解釋することは出來ない。戰爭が初歩的の藝術的心意の動因をなしたのも性的昂奮と戰爭との原始的關係を計算に入れて考察しなければならないことである。生殖季節と藝術的昂奮との關係は、收穫季節と藝術的昂奮との關係を解釋する鍵であらう。初歩的の藝術的心意がミリタリズムに刺戟されたといふことは、原始的社會に於て戰爭が性的昂奮に關聯してゐたといふ事情に依つて解釋されねばならぬ事實であらう。かういふことはもつと精確な研究を待つて始めて云ひ得ることであるが、そこに解釋のヒントが得られることをいふのは強ち妄斷であるまいと思ふ。

藝術はその藝術的心意の作用が、強度の社會的知覺であるから、最も人心を強く刺戟する社會現象がその動機をなすものである。ミリタリズムはそれが人間世界の文明を刺戟する最初の機會をなし、文明あつて後の人間社會を數千年間支配した結果、種々の方向から藝術的生活を左右したのである。次ぎにはミリタリズムが藝術生活上にどういふ効果を

持つたかを觀察して見よう。

二　軍事的行動系統に於ける機能と藝術的感覺

人間は社會的に生活するに當つて、一定系統の行動を反復する傾向を持つものである。本能はこの反復行動の最も根抵深いものであるが、後天的の經驗によつても、一定の環境に於いて一定の生活傾向が現はれるのは即ちこの反復性によるのである。生存の効果を持つ行動が反復されることは極めて簡單な生物から人間に至るまで共通の現象である。所謂イズムなるものは、この反復性の複雜に進化したものである。それは行動又は思想の上に於いて、一定傾向を固執する信仰的態度である。それが想像的根柢による場合には、宗教的乃至形而上學的イズムとなり、知覺的根柢を持つ場合には科學的イズムとなる。而かも苟くもイズムとなつた以上は、それが一つの信仰的態度であることは、科學的イズムも宗教的イズムに異らない。軍事行動の反復は、行動上のイズム、思想上のイズムを生み出し、――その行動並びに思想の宗教的信仰、科學的信仰を生み出し、――一つの生活傾向としてのミリタリズムが成立する。信仰的意識の絶對性がそれに伴つて、軍事行動が神化され、軍事行動の絶對的性質が種々なる複雜な信仰態度となつて現はれる。ミリタリズムの藝術はさういふ畑に生ひ立つた果實である。

如何なるイズムも社會生活に於ける現實的動因を持つてゐないものはない。生活を超越し、思惟を絕し、自然と人間とを超越した絕對的境地の發見も實は現實世界の根柢の上に築かれた人間的心意の產物である。何等か人間生活の根據なしにさういふ想像は成立しない。一切の生活機能を離れた純粹感情も實はそれ自ら人間生活の上に機能的作用を持つものである。ミリタリズムの信仰もその機能上の作用を離れては成立たない。ミリタリズムの心意が藝術的に發展する

場合にも、軍事行動の機能と密接に關係するのである。ミリタリズムの藝術は、軍事行動の生活技術である。その發達した形に於て全く軍事行動の機能を離れて終つてゐるやうに見ゆるものでも、その出發點に於いて、軍事的行動の機能を持つてゐるのである。

一體軍事的行動とはどういふ種類の行動であるかについても、愼重に考へねばならぬ。單なる腕力的行動がそれであるかの如く考へられてゐるが、實は物理的の力は軍事行動に於ける一つの手段であつて、最も簡單な生活に於いてもそれが戰鬪行動の全部ではない。腕力の強い者が常に征服するかといふに、決してさうは行かない。生物進化の研究者が認める通り、組織が腕力以上の征服上の効果を持つ。組織は一つの協同動作である。協力的行動は腕力による結合ではない。無數の蟻が大蛇に向つて襲撃を試むる時に、蟻同士は腕力によつて結合されてゐるのではない。蟻を組織立ててゐるものは腕力ではないが、その組織は軍事行動上に於いて重大な働きを持つものである。而してこの組織は決して戰鬪行爲にのみ必至的のものではなく、牧畜耕作のやうな行動に於いても缺くべからざるものである。從つて人間はこの組織的の威力に對して、絶對的の信仰を持つ。組織されないものを人間は決して重大視しない。あらゆる社會的行動は即ち組織的行動であるといふ事實は、組織に對する人間の信賴を基礎づけてゐるものである。軍事行動はこの組織の形式並びに實力を、最も強い度合で表示する機會である。

人間が群集に威壓される心理も亦右に述べた事情による。ミリタリズムは即ちこの事情を極度に利用する。而してミリタリズムの表現がこの組織そのものの表現である場合が多い。旗幟しのやうなものが最も重大な軍事的シンボルであることは、今日のそれも原始時代のそれに於けるが如くである。

この組織力を表現する形式がミリタリズムの藝術の最初のものであつたが、これは藝術が生活上の機能に必須の關係

を有つ一例にすぎない。それはそのシンボルによつて、敵方に一定の錯覺を起させる。そのイリユージョンは發達した觀念による數の威力と同じ効果を持つところの、群的現象に關する具體的の錯覺となつて、敵は自分の錯覺に脅かれて、恐怖的となり、戰ふ前に既に屈服の狀態に置かれる。即ち組織が標榜するシンボルは相手がこちらの群の威力を知覺する媒介物となつて、腕力以上の力が征服に働くわけである。このシムボルは元來宗教的な魔術的の形を取るものであるが、藝術は或る場合にそれと同じ効果を働くのである。鬨の聲が戰鬪ダンスと伴つて後に軍歌となり軍事的舞踊となつたのもその理由である。古代神話又はその後の物語等に於いて往々舞踊又は歌謠が爭ひを決定したといふ傳說の殘つてゐるのもその一例である。

ミリタリズムの藝術をそのいろいろの現はれに於て觀察すると、右の事情によつて、それぞれその戰爭上の機能を發見するのである。

藝術を假りに色の藝術、形の藝術、言語及び動作の藝術に分類すると、前二者は繪畫、彫刻、建築等所謂造形藝術であり、後の二つは詩、劇等を含む所謂文學的藝術であるが、ミリタリズムに於いて此等の各種の藝術がそれぞれ特殊の發達を遂げる。繪畫の最も原始的なものは、狩獵及び戰爭に關するものである。又言語動作の藝術にしても、戰鬪的のものが最も發達した原始藝術であつた。前に言つた如く、社會的感覺が刺戟を受けた場合に藝術的再現が起るのであるから、戰爭以外に藝術の動機をなす現象はいろいろあつたに相違ない。舞踊の如きは性的衝動によつて、性行動の豫備動作又はその再現として早くから行はれたに相違ない。性行動は群的であり季節的であつたが故に、舞踊も亦群的であり、季節的であつた。その昂奮狀態は戰鬪による昂奮と關聯し、又それと同じやうな陶醉的効果を持つたのであるが、所謂藝術の形で

その單純な機能的制限を離れて、特に藝術的の言語動作を構成するに至つたのはミリタリズムのそれであつた。物語が生殖に關係する所謂創世記的神話に初まり、次第に英雄神の戰記として發達したやうに、藝術も生殖に起り、戰爭に發達したと云へる。日本の原始的舞踊たる久米舞ひも戰鬪的舞踊である。何等の藝術を持たないやうな今日の黑奴の部落に於いても、戰鬪ダンスは存在する。さういふことは必ずしも野蠻時代に限つたわけではない。低級の藝術的生活にある民族に於いては、そこで最も藝術的なものはミリタリズムの藝術である。日本の維新後の藝術の如きも亦さうであつた。軍歌のやうなものが一番早く發達し、軍人の行動が最も文化的であり、軍旗、武器、軍人の服裝、擧動、紀念物等が兎に角も生活の他の部分を拔んでて藝術的(?)に構成されたのである。すべての藝術的傳統が破壞され、新たな藝術的傳統がまだ起らない社會狀態に於て軍人社會だけはどうやらかうやら新たな藝術的傳統を先づ造り出したのである。無論それらは藝術的と呼ぶには餘りに末梢的の形式的のものであるが、しかしその末梢的の藝術的形式を兎に角舊傳統によらずに組立てたものは、ミリタリズムが最も早かつた。市民の新らたなエチケットがまだ物にならないうちに、軍人のエチケツトが出來上つたのを見てもそのことがわかる。

それは日本の維新の革命後の社會に於て、前に云つた如く、組織の力が軍事的集團に於いて比較的完全に完成されたからである。社會の他の方面に於ける組織が一向に物にならないうちに、軍事的集團の組織が完成したのである。この組織力をもつて敵を威嚇する色彩、形相及び言語動作が即ち明治時代のミリタリズムの藝術となつて表はれたのである。それは野蠻人のミリタリズムの藝術ほど內容的に藝術性を持つてゐないものであるにせよ、社會の他の方面に於いては、それだけの形式藝術を生み出すことさへ出來なかつたのである。軍歌が詩に先驅したのも同じ現象である。

軍事行動は右の說明によつて察せらるる通り、腕力を要素としながら、腕力に終始するものではない。腕力が要求する効果を惹起すものが凡べて軍事行動に包含さるる。即ち威嚇、詐術、暗示等は軍事行動と密接して、それなしには軍事行動そのものが成立しない。獅子のミリタリズムは威を包含するのである。腕力の發動は物理的の力量を要すると同時に、腕力を誇示する威嚇的の色彩、形相、音聲、態度を包含する。相撲が四股を踏み、氣合をかけ、動物が牙を鳴らし、唸り聲を發するやうな動作は、ミリタリズムの特徴である。これは個的威力又は群の協同を誇示する甲冑や、旗差物や鬨の聲や軍歌や示威的行軍やと同じ性質のものである。それが最もエフェクチイブであつた場合に、敵はそれに威嚇されて、所謂戰はずして潰へるのである。

それ故に軍事行動は、これを分析すると、現實に機能的な行動――直接の戰鬪行動――と威嚇作用と暗示作用と陶醉作用とを包含するのである。如何なるミリタリズムも、唯現實の戰鬪行動だけから成立つてゐるものはない。必ず威嚇陶醉の働きを持つ。軍事行動のイズムは寧ろ右の最後の陶醉作用を中心としてゐるとさへ考へられる。ミリタリズムは腕力に強壓されることに於いて完成するものではなく、ミリタリズムの威嚇作用に陶醉することに於いて完成するものである。而してこのミリタリズムの陶醉作用を働き出すものが即ちミリタリズムの藝術である。

色彩、形相、言語、動作、これを要するに繪畫的、詩的、劇的藝術がミリタリズムと必然の關係に於いて發達した事情を、それらの各部に亘つて精細に研究することは非常に興味のあることであるが、ここで企て及ぶ仕事ではない。ここではただその要素的性質を二三の例示によつて指摘して見ようと思ふ。

三　ミリタリズムと官能の藝術

元來藝術をもつて全然生活利害を超越する享樂生活であるとする見地は、藝術の効果を社會生活に於いて遊離するだけの有機的生活を生活してゐない生活者の心理である。即ち社會を純享樂的に生活する人の心理である。すべての藝術的享樂は單純なモルヒネ的陶醉ではなく、その陶醉が新たな意欲を働き出すところに意味があるのである。モルヒネの陶醉は生活意欲の衰滅であるが、藝術的陶醉はそれが更らに强烈な生活意欲を刺戟することによつて、新たな血液を生活の脈管に注入するのである。ミリタリズムの藝術もミリタリズムの生活意欲に能動的の力を與へる藝術的陶醉である。

それには藝術が生活の機能と密接に關係せねばならぬ。全く生活上の機能を離れたところに藝術の眞髄が存するといふ見地は、非生活者の、藝術に對する主觀的態度に過ぎないのであり、決して藝術そのものの性質がさうであるのではない。ミリタリズムの藝術はミリタリズムの機能から出立して、そのイズムに十分に働く特徴をもつて發展する。

ミリタリズムが支配する社會に於ては、軍事的の行動系統が生活行動の優位を占める。行動系統の優越性は、實際その行動が組織的に最も有力な支配的地位を占めることから成立する。意識の優越は意識の錯誤の上に成立つことがあるの概、實際その意識が社會に何等支配力を持つてゐない場合にも、その意識の優越が成立つ。例へば非常に專門的な宗教的で念、哲學的思想は實際その社會に何等の支配力を持つてゐない場合にも、特殊の意識的錯誤によつてその意識の優越性が一般に承認される。さういふものに少しも支配されない社會がそれの優越を承認するところに意識の錯誤がある。故にこの場合は、社會が一朝この錯誤から免れると、苦もなくその優越を否定する。これに反して、ミリタリズムの優越は、實際の支配力に基礎するものであるから、これを否定しても尙ほ且つその支配から免れることは出來ない。從つて、ミリタリズムの支配下にあるものが、ミリタリズムを否定するのは、その强制に反抗する意識としてであつて、その意識が如何に强烈であつても、彼等は事實その支配から脱れることが出來ない。故に軍國的支配の下にある社會に於ては、その支配に同

化する心理が、所謂生物學的順應の過程に近いのである。從つて軍國國家の人民は、その生活意識としてミリタリズムのそれを決して體得しないものまでが、ミリタリズムの生活情調に一致する心理狀態となる。武人に虐げられてゐる農夫は、生活意識としては武人のそれを決して受け容れないに拘らず、武人階級の生活感情を盲目的に尊重する。

人間の感覺は元來その生活の組織に依存するものである。平和な生活組織の下に生きるものは、平和的な生活の感覺を培養する。戰鬪的生活の組織下にあるものは、鬪爭的の感覺を發達せしめる。如何なる軍國國家に於いても、農夫の生活は平和的の組織に立脚してゐるのであるが、而かも彼等が軍國的支配の下にある限り、彼等の社會的感覺が、ミリタリズムの特徵を帶びる。彼等の道德的感覺が勇猛、剛毅、殘忍等暴力に伴ふ感覺を意識的に尊重する。從つて彼等の藝術的感覺が軍國的浪曼主義に傾くといふやうなことは、如何なる軍國國家に於いても、一様に存在する事實である。唯、絕對的のミリタリズム的感覺は、到底軍人階級以外の平和階級に於いては涵養されない。從つて藝術的感覺に於いても極端に軍國的のそれは平和階級には理解されない。

その極端な例は、武器に關する藝術である。如何なる軍國組織の下に於いても、造形的藝術は先づ武器から發達した。さうして武器に於いてその最高の表現を取つた。原始時代の石斧から、極端に發達した日本刀に至るまで、その例から洩れない。藝術品としての刀劍の趣味は、武人以外の階級には決して徹底的には理解されない。それは刀劍に關する藝術的感覺が武人以外には、決して武人階級に於けるが如くに發達することが出來ないからである。

藝術を假りに官能の藝術と生活の藝術とに分けると、前者は感覺的の藝術であり、後者は感覺以上の生活情調の藝術であるが——この區別は決して學問的正確とは云はれない、唯全く便宜上の分け方である。——刀劍に關する藝術は即ち官能の藝術である。從つて特殊の感覺が培養されてゐないものには、決して刀劍の藝術は理解されない。日本人の中

でも日本刀の藝術的價値を理解し得るほどの官能を持つたものは極めて少數である。一般の人々に取つては刀劍は唯物凄い人斬り庖丁である。タゴールが曾て日本に來た時、或る刀劍家が自慢のつもりで名刀を拔いて見せた時に、タゴールは非常に不愉快な顏をして、自分の鼻先きにつきつけられた拔身の日本刀を、百姓が強盜につきつけられた場合に示すと同じやうな顏色で、辟易しながら眺めたといふことである。誰も知る通りタゴールは藝術的感覺の極めて高度に發達した文化人である。謂はば極めて高級の藝術的感覺を持つた詩人である。が、日本刀の感覺は高級の藝術的感覺であるといはれ、又確かに官能の藝術として高級の發達を遂げたものであるに拘らず、それがタゴールには全く理解されなかつたのである。日本の百姓も、恐らくタゴールや私達と同じく、さういふものを鼻先きにつきつけられた時には、薄氣味惡い感覺が先に立つて、官能の藝術としてそれを理解する餘地は持たないであらう。

タゴールや百姓やが、何故に刀劍の藝術を理解しないかといへば、それは刀劍といふやうな殺人器具が、彼等詩人や百姓の生活に於いて何等機能的重要さを持つてゐないからである。彼等の生活に於いて何等の機能を持たないものについて、彼等の感覺が高級に發達するといふことは有り得べからざることである。官能はそれが生活の機能上の意味に於いて發達するのである。生存の上に重要な機能を持つものほど、それに對する人々の官能が發達する。甲冑が威儀を示す一つの機能を持つてゐたのは、古代的の軍國組織の下に於いてである。甲冑は古代の武器を防ぐに適した機能を持つことによつて、それを生活の上で重大視しなければならない階級に於いて、甲冑に關する感覺が、纖細に發達したのである。その傳統を紹け繼ぐ今日の日本の軍人でさへ、もはや甲冑が今日の軍事上の行動に何等の機能をも持たないことになると、もはや甲冑によつて威嚇される心理、即ち甲冑に關する傳統的心理が失はれ、今日それを一齊に及んだものを見ても、少しも威壓を感じないで滑稽を感ずるのである。彼等が今日甲冑の威嚴を感じようとすれば、それが重大な機

能を軍事上に持つてゐた時代の生活心理を理解して、假りにその時代の心理を踏襲するといふ過程によるのである。即ち骨董的生活心理に入り込んで初めてそれが可能なのである。タゴールが刀劍の藝術を理解しないのは、彼等の傳統の中にすら殺人器具が重大な生活機能を持つた過去を見出し得ない上に、軍國的殺人行爲によつて常に威嚇された階級の生活意識を傳承してゐる人であつたからであらう。

即ち藝術的感覺は嚴重に生活機能に依存する。今偶然に擧げた刀劍の例について更に考へて見ても、刀劍の官能美を構成する要素を、專門家は極めて高級の教養された感覺によつて鑑賞してゐるのである。例へば匂ひの美、反りの曲線美、鎬の曲線美、其他局外者には到底鑑賞するとの出來ない官能的藝術の美感を刀劍そのものが具有してゐると主張する。而かもこれらの刀劍美は、美學者の形而上學が說明してゐるやうな、人間固有の美的感覺の發揚でも何でもなく、實は刀劍の殺人に於ける機能に依存して發達したものである。匂ひは、彼等の說明するところに據ると、日本刀の鍛冶法の發達によつたものであつて、硬軟兩樣の鐵片を交互に何片も何片も重ね合せて、それを鍛錬した結果現はれた文理であるといふ。然らば畢竟刀劍の要求する最も完全な金屬的性質を造り出さうとした結果――刀劍の機能を最も完全に發揮し得る合金を造り出さうとした結果――現はれた文理である。その文理に美感を感ずるのは、その機能に順應する人間的心理である。もしその文理が刀劍の機能を妨げる刀劍鍛冶上の缺點を表はすものであつたならば、決してその文理は刀劍藝術に於ける美感としては感覺されないのである。反りの如きも同じ道理であつて、打ち下す方法によつて武器を使用する場合は、或る角度を持つ方が直線に比して遙かに銳利であることは、物理學的に證明される。突く方法による場合には直線が有利である爲めに、突く武器は直線である。刀劍の反りは、打ち下す武器として發達した場合の機能に依存してゐるのである。物理的に刀劍の機能を助ける反りが、藝術的に刀劍の曲線美を構成してゐるのである。

殊に長大の刀は曲線を持つために鋒尖に於いて非常に重量を減する。その利害が古刀から新刀に及ぶに從つて、反りの度を增すに至つた所以である。然しそれにも一定の局限があるが故に、餘りに反りを增すと刀劍の機能が妨げられる。すると極度に反りを持つた刀劍が刀劍美の官能の法則に違反して美感が損ぜられることになる。刀劍美の官能の法則に合致するものが最もよく刀劍の機能を働くといふところに、藝術的感覺の根本的性質を說明する意義がある。鎬の線が刃と峯との中間の何處の邊を占めたならば、幾何學的に最もこれに美感を呈するかといふことは、やはり何の邊に鎬があつたならば一番刀劍の機能をよく働くかといふことによつて決定されてゐるのである。鎬は刀劍の平面の硬度を增すために案出されたものであるさうだが、それと切れ味との關係に就いて一番好い位置にある時に、やはりそれが幾何學的美感に一致するのである。元來幾何學的の美感は最大吸引線と最小抵抗線との最も適當に塩梅されたものであつて、その均齊美は即ち一種の平衡狀態を表はしてゐるのであるが、生活の機能が感覺を決定するのも、畢竟その平衡狀態に依存してゐると見ることが出來る。官能美はその意味から機能的であると考へられる。

が、さういふ官能特殊の發達は、その機能を特に理解する生活組織の下に於いてのみ發達するのである。身體に彩色して猛獸や敵を威嚇することの出來た時代でなければ、身體の彩色に藝術的美感を結びつけることは出來ない。さういふ機能を失へばさういふ美感も失はれる。ところが人間が衣服を着て、氣象に抵抗することになると、衣服が生活上の重大な機能を持つことになる。從つて衣服に關する藝術的感覺が發達する。何方にも絕對的の美的權威がある譯ではなく、機能の變化に伴つて美感も變化するのである。

野蠻人は骨骼の逞しさを誇示して敵を威嚇するために、肋骨の上に彩色をしたのであるが、さうしてそれが藝術的感覺に一致して美感を害したのであるが、後に衣服が發達するに及んで、文明の軍人は野蠻人よりも更らに滑稽なことを

してそれが美感に一致すると考へたのである。即ち衣服の胸に肋骨なりに太い紐を縫ひつけて、野蠻人が肋骨の上に彩色したのと同じことを行ひ、さうしてそれが衣服の美感を構成すると考へたのである。既にその機能が失はれたに拘らず、それが傳統的の感覺として殘存することは、畢竟その昔それが極めて重大な生活上の機能を働いたことの附力である。ミリタリズムの官能美にはさういふ骨董的美的感覺が多量に働いてゐるのである。野蠻人が禽獸を威嚇した羽毛の飾りの付いた被り物等が、文明の武人の兜や今日の軍帽に依然として殘存してゐるのは、曾て重大の機能を働いたが故にそれが官能的に美感を構成するに至つたことの結果である。

野蠻人に美麗な布を與へると、それを衣服として利用することをしないで、ズタズタに引き裂いて頭部や裸體の各部の飾り物にするといふことが人間の、美感を實用よりも尊ぶ例に引かれるが、實はその美感も亦實用即ち生活の機能上の働きに基いてゐるのである。より舊い時代に强烈な色彩、又は不思議な形で猛獸又は敵を威嚇することは、衣服を纒ふことよりも重大な機能上の働きを持つたのである。それが極めて舊い時代であつたが爲めに、その心理が遺傳的に野蠻人並びに文明人に傳承されてゐるのである。

ミリタリズムの美的感覺は、ミリタリズムの機能に原因してゐる。その感覺に基くミリタリズムの官能藝術は、重大な軍事上の機能をもつて發達してゐるのである。

四 ミリタリズムの藝術の特徴

藝術と宗教との關係については、既に充分に認められてゐるのであるが ミリタリズムが藝術的生活を可なり有力に決定してゐることは、割合に注目されてゐない。それはミリタリズムが宗教ほど有力に藝術を支配しなかつたからでは

なく、寧ろ餘りに廣く支配してゐたからである。宗教的想像は、元來、神秘的又怪異的に構成され、一般の生活意識から飛び離れた特殊の形態を持つて表現される傾きを持つ。而してさういふ傾向は後代に至るほど甚しくなる。時代が進めば進むほど、宗教的想像は生活意識を離れた特異性を以つて生活意識に對立する。從つて宗教藝術を構成する宗教的感覺は、一般の生活上の感覺からは際立つた特異性を持つて表はされる。それが宗教藝術を特に際立つた形に作り上げ、それが、宗教の藝術に對する影響を顯著にするのである。これに反してミリタリズムは、それが日常生活を支配する關係の上に於いて、宗教のやうな神秘性も怪異性も示さずに、平凡な人間的現象として日常生活に混在してゐるのである。つまりミリタリズムの感覺は、ミリタリズムの支配によつて日常の生活感覺に紛れ込んでゐるのである。明かにミリタリズムが影響した生活感覺も、その淵源にミリタリズムの潜在することが氣付かれないのである。例へば佛像のやうなものは、明かに宗教的想像が藝術的表現をもつて表はれたことを認識されるが、普通の空想人物の像を描いた繪畫は、誰もそれがそのままではミリタリズムの影響を受けてゐるとは感付かない。ところが多くの場合では確かに受けてゐるのである。例へばミリタリズムの支配の下に於ては畫家が空想人物を描く場合に その肖像の表現しようとする性格は、大抵武士的人格のそれである。人間的性格が、多くの場合軍人的性格を標的として構成される。百姓町人の性格が人間的相貌乃至人間的性格を表現してゐるものとは認められないで、武人の相貌乃至性格のみが人間的のそれであると考へられる。日本その他の封建時代の藝術的感覺がそれであつた。それは確かにミリタリズムの影響を受けた感覺であるに拘らず、誰もがさういふ肖像畫を見ても、それがミリタリズムの影響を受けてゐることを感知しない。而かもこれは啻に肖像畫ばかりのことではない。宗教藝術と雖も軍國國家の支配の下に於ては、ミリタリズムの影響を免かれてゐるのは少い。それは古代神話の軍神がミリタリズムの再現であると同じやうに、宗教的感覺も亦その時々の生活の

組織に依存するのものだからである。宗教的想像も、亦想像の原則に支配されねばならぬのである。しかもさういふ影響をうけるのは、決して宗教や藝術のみに限つたことではなく、道德的の感覺の如きは殊に甚しくそれに影響される。ミリタリズムの支配の下に於いては、社會道德は影をひそめて——社會の下層にのみ行はれて——軍事行動の道德と、軍國的支配の道德とが　道德意識を占領する。而して道德意識が決定的にミリタリズムに左右されてゐたといふことに氣付いたのも極めて近代のことである。現にヒューマニティーの根本性質に依存すると考へられてゐる感覺や感情が、實はミリタリズムの生活利害に根柢したものであることはいまだ充分に認められてゐるとはいはれない。それにも拘らず、日常生活の多くにミリタリズムが働き出してゐると同時に、一切の文化的所産にそれが作用してゐることは確かである。從つて官能的のそれでない所謂文藝と稱せられる藝術的産物が、どれだけミリタリズムに影響されてゐるかは想像に餘りある。詩、小說、劇等に内在する感覺や情操に、細かにそれを求めたならば、殆んど如何なる文藝上の作品にも、多少ともミリタリズムの影響の見出されないものはないかも知れないが、形式からして全然ミリタリズムに依存するものが、如何なる國の文藝上の作品にも多量に存在するのである。殊に初期のそれがさうである。如何なる國に於ても、文藝的の記錄は先づ軍談的神話の記述に始まつてゐるが、それは文化が始めに先づ軍國階級に起るからである。しかもその階級的生活が完成すると、その階級に於いても軍國行動が下火となつて、文化的教養が發達するに至り、そこから文藝もミリタリズムを離れることとなる。文化が軍國階級に起るといふことと、一般文化的教養が軍國階級の手に行はれ、その影響をうけるといふことから、社會的にも先づ軍國的文藝が起り、それが高級の鑑賞を値する藝術の地位を占める。非軍國階級の教養は、その時代に於いては、極めて初歩的の詩歌、俗謠の類を産むに止まり、決して精練された文藝を産み出すことは出來ない。無論、精練された階級文藝よりも、俗間の歌謠の類が一層深刻な意味で藝術的なの

であるが、然しそれは極めて粗朴的な感情であつて、藝術的に精練された感情ではない。ミリタリズムの組織の下に於いては、精練された藝術は先づミリタリズムを中心として起る。支那の舞樂は題材、素材、形式、動作、氣分等に於いて充分軍國的特徴をもつて起つたが、日本の劇的藝術も、軍國文化の所産たる申樂から起つたのである。

申樂の發達した能樂は　我が軍國階級が極度に宗教的昂奮を感じた時代に起つたため、その特徴の宗教的であるとは一般に認められてゐるが、しかし この宗教心は戰國時代の或る時期に於ける産物で、丁度中世紀に十字軍の病的現象が起つたのと似通つてゐる。戰亂の生活は、その不安定狀態が宗教心の最も有力な客觀的條件であるから、ミリタリズムの時代には必らず宗教的昂奮が烈しい軍國行動に繼起するのである。最近の世界戰爭の後にも歐洲一般に心靈主義が勃興したのである。從つてあの能樂に現はれた宗教心そのものが、ミリタリズムと離るべからざる、而してミリタリズムなしには決して起らない生活情調なのである。能樂の宗教心が、ミリタリズムの下に於てでなければ決して起り得ない形式のものであるとは、それを讀むものの直ちに觀取し得るとである。現に行はれてゐる二百數十番の能樂のうちの八十番内外は、題材に軍人又は軍國生活を取扱つたもので、その外のものも祝言能とか源氏物とか、非軍國的題材を取扱つたものを除けば、宗教的のものと雖も多くはミリタリズムの生活意識に根據したものであるといひ得る。ただその形式だけは、更らに古い時代の祭祀藝術の形を保つてゐるが、内容的には全くミリタリズムに化してしまつてゐるのである。

然し、かやうな極端に階級的の藝術は一般民衆の非軍國的生活に渾然溶け込むことは出來ないので、社會的にもつと民衆的の藝術が要求され、淨瑠璃歌舞伎等の發達となつた。がそこでも亦その根本的要求と喰ひ違つたやうな所謂時代物がその初期に於て繁榮するのである。これは一般の教養が軍國的支配に影響されてゐたため、民衆は己れ自身のものを見出す前に、上層階級の生活意識の模倣による軍國的藝術を鑑賞するのである。而して、いつまで經つても、その軍國

的精神が一般生活の日常に織り込まれてゐる限り、荒事時代物等が民衆的に持て囃やされることが續くのである。

しかも時代が進んで、社會が一般に軍國的行動を離れた平和時代に入ると、生活感覺が軍事行動のそれから平和生活の協同行動のそれに轉ずるので、平和的葛藤が藝術的動機を爲し、所謂世話物の勃興となる。而してそこでは必らず、ミリタリズムの生活意識が、社會的生活意識と撞着する過程を題材とすることが一般に行はれる。近松の世話物の特徴もそこにあつたことが認められてゐるが、これは強ち日本ばかりのことではない。

かういふ經過は、歴史上屢々繰り返される。明治維新の後は、その革新當時の軍國的行動が支配してゐたために、新らたな藝術はやはりミリタリズムの影響をうけたものから發程した。時代物が『活歴』とか『史劇』とかいふ新らたな用語例の下に、さも新らしいものの如くに勃興したのである。征南役や日清日露の役やは、このミリタリズムの一般的支配の下に於ける歴史的事實であつたが、そのミリタリズムの歴史は、やはり文藝をも支配したのである。而して新たな世話物が起つたのは極めて最近のことで、而かもそれは西洋の近代主義の産物の輸入によつて開始されたのである。しかし、此事は、足利時代の申樂が支那劇の輸入によつて發達したと同じ事情で、外來文化によつて新らたな生活の示唆をうけることとは、大化革新以來の——或はその以前からの——日本人の得意の筆法だつたのである。

而して明治時代の世話物も、近松のそれと同じく、ミリタリズムの軍國的情調と撞着する道徳意識を高調したのであつて、たとへそれが外國の借物だつたにせよ、當時の日本の時代の進化に或る程度まで吻合してゐたのである。たとへばイブセンその他の社會劇は、ヨーロッパの各國人の近代意識を表現したことによつてそこに行はれたが、それと同じ意味に於て、日本人も亦支那劇の能樂に於けるやうに、イブセン劇その他のヨーロッパの近代劇の影響をうけたのである。

五　ミリタリズムの藝術のミリタリズム否定

以上に說いたところによつてミリタリズムの藝術は國家發生の初期又は新たな時代の初期に於いて主として繁榮したものであり、歷史的にそれが初步的の階段に於いて發達したものであることが明かにされた。即ち社會がその或る時期に於いて特に鬪爭的であつた時代を經過して發達したものがミリタリズムの藝術である。藝術の初步的なものは概して官能的であるが、ミリタリズムの藝術に於いては殊に官能的の部分が一定の特徵を持つて發達する。即ち官能の藝術的誇張がミリタリズムの藝術の一特徵ある。

精神狀態としてのミリタリズムは、一般に誇大妄想的である。腕力としてのミリタリズムには物理的の限界があつて、武力でも機械力でも、一部の人間が特に他の人間を懸け離れて無限の發展を期待することは出來ないが、ミリタリズムの心理は、その物理的限界を超越して、自由の飛躍を試みることが出來る。英雄神の信仰並びにその神話がそこから發達する。それと同じやうにミリタリズムの藝術は、官能の誇張を恰かも色並びに形の怪異性が敵を威嚇するに役立つた場合のやうな形式で發展せしめる。旗指物や甲冑に種々なる不思議な色彩並びに形相を案出したのも、亦ミリタリズムの上に一定の機能を持つたのであるが、——それによつて敵を威嚇したのであるが——ミリタリズムの藝術は、その機能から出て、それを離れて官能の誇張を何處までも發展させる。この誇張がミリタリズムの藝術的感覺の基調である。

支那の舞樂の服裝、假面、武器等の色や形は、右に述べたミリタリズムの藝術の特徵を最もよく發揮したものである。刺戟の强い色、野蠻的乃至精神病的怪異性を持つた顏色、服裝等は何れも初めに或る機能に基いて發生した基本事實を、唯極端に誇張しただけである。而してその誇張の形式がミリタリズムに於いて或る一貫した原則を持つてゐるか

に見える。それは宗教的想像の誇張が一定の原則を持つてゐるのと似てゐる。宗教的想像はそれが宗教藝術の形を取ると、必ず宗教的心理の特性を示唆するやうな性質を帶びるものとなるのである。例へば宗教畫は全能者に對する歸依、恐怖、歡喜乃至その正反對の惡魔的心理を暗示する性質を持つ。ミリタリズムの藝術はそれと似通つた特徴を軍事行動の心理によつて表現するのである。即ち宗教畫が佛と惡魔とを示唆するやうに、ミリタリズムの藝術も亦一方に軍事行動の正を示唆すると同時に、その反をも示唆する。例へば能樂をミリタリズムの藝術として考へて見ても、あの面や衣裳の色彩及び形相の誇張的性質は野蠻時代又は古代の戰裝の性質と一致してゐるのであるが、しかし、その誇張が自ら軍事行動の機能から出てその機能を妨げるやうな他の極端に奔つてゐる。甲冑が餘りに威嚇的に發達すれば、腕力的行動の自由を妨害するやうに、ミリタリズムの藝術の誇張的性質は、ミリタリズムの否定として發展する。舊劇の荒事師の服裝が、軍事的威嚇を目的とする野蠻的な感覺の誇張と同じ性質で誇張されて、例へば『暫』のやうな扮裝となつてしまふと、身體の自由をさへ失はしめるに至るのである。ミリタリズムの藝術はその藝術的感覺の誇張に於いてミリタリズムの反をなすに至るのである。

ミリタリズムの藝術が動作に表はれた場合にも、亦同じやうなことが發見される。日常生活に於ける動作の自然さは、決してミリタリズムの藝術の感覺と一致しないのである。ミリタリズムの感覺はその誇張的なことを特徴とする。ところがその誇張は必ずしも軍事行動の機能的目的で行はれないで、その機能的性質と相反する方向に發展する。例へば英雄豪傑の行動は、暴力的に極めて活潑な動作を働くのが、その軍事行動としての機能である。ところがその英雄豪傑の動作を、ミリタリズムの藝術がどんな風に表現してゐるかといへば、芝居の殿樣を見れば分る通り、一歩足を前に進めるに相當の時間を要するやうな歩き方をし、手を擧げるにも、頭を廻らすにも、口を利くにも、極めて緩漫に、恰かも法則

的にその運動時間が定められてゐるかの如くに動作する。實際の軍國的君主が果して芝居の殿様の如く動作したか何うかは明かでないが、とにかくミリタリズムの藝術的感覺は、軍事行動の機能的性質とは正反對に重々しい、緩慢な動作として表はれる。武人階級の藝術たる能樂が、武人の戰鬪行動とは正反對なのろのろした法則的の動作から成つてゐるのもそれである。さういふ風に、感覺の誇張が自己否定に陷るといふ特性を、ミリタリズムの藝術は持つてゐるのである。

ミリタリズムの藝術的感覺の誇張性は、自ら人間生活の自然性に背馳した方向に發展する。そこからミリタリズムの藝術は極端な作爲的形式そのものに依存することとなる。すべて官能の藝術が誇張的に發展すると、ヒューマニテイーの自然性を離れて一定の感覺の典型が築き上げられる。丁度小笠原流といつたやうな具合に、機能的な生活動作を一方では極端に誇張し、他方ではそれを固定せしめて、自然的な生活と全然別な、作爲的な生活典型を作り上げる。さうしてそれが、それだけが藝術的であると考へる。貴族的藝術の大部分はさういふ特徴を持つてゐる。それは貴族的文化そのものがミリタリズムの文化だからである。

それは初めには機能から出立したのである。丁度相撲の四股を踏むやうなもので、元來は格鬪の豫備行爲だがそれが極端に形式化すれば、唯四股を踏むといふ特別の行動典型が相撲と沒交渉に成立することとなる。そしてそれが極端に發達して土俵入りといふやうな特別の動作的藝術が成立つ。かういふことはすべてのミリタリズムの藝術を通じて、貫してゐる特徴である。

この特徴が更らに逆に軍國的生活を刺戟して、そのミリタリズム的精神及び行動に新らたな活力を與へるのであるが、他の一方では、ミリタリズムの支配によつてその藝術の變化が非軍國的階級の生活意識に影響し、一般民衆の生活感覺を歪ませるのである。百姓町人が彼等の生活、彼等の社會それ自體からは産み出される筈のないやうな意識狀態に置

かれるのは、宗教的階級の教化又はミリタリズムの教化に支配された場合である。それが人間の或る本能に偏れた場合には、特に根强く民衆に喰ひ込む。例へばミリタリズムの闘爭的本能は、人間本來の闘爭的本能の傾向に一致するので、發育期の青年の本能的傾向に冒險談が一致するやうに、劇、小說、詩等のミリタリズムの闘爭的特徴に關するものが、一般民衆の間に受け容れられる。中世紀の武人階級のロマンティシズムの徹底的な情調は到底一般民衆の理解するところとはならないが、唯彼等の最も初歩的な闘爭行動の藝術的表現は、如何なる國、如何なる時代に於いても、一部の民衆の藝術的憧憬の的となる。さうしてその藝術的感覺が現實の生活感覺を刺戟して、一般民衆の間にミリタリズムの精神と行動とが横溢するに至るのである。震災當時に日本の民衆が驚くべき軍國的行動を朝鮮人に對して一致して執るに至つたについては、平生民衆の間に融け込んでゐたミリタリズムの藝術的感覺に多分の責任があるわけである。

民衆はミリタリズムの生活に於いて徹底してゐる階級ではない。從つてミリタリズムの階級それ自身は、彼等の感覺の藝術的誇張によつて正から反へと轉ずることを得るが、民衆はそこまで行けない。武人階級それ自身は弓馬刀鎗等の武術を藝術的感覺に移轉せしめて、その機能を妨げるやうな小笠原式の典型を産み出すことが出來る。即ち正から反へと進み得る。これに反して民衆は決して弓馬刀鎗の生活に徹底するものでないから、それを藝術的感覺に移轉せしめて小笠原流にまで轉化せしむる動因を持つてゐない。即ち民衆はミリタリズムを模倣したところで、何處まで行つてもミリタリズムの藝術に徹底することは出來ない。それは何時までも外國品を賞玩するやうな態度を以つてミリタリズムの藝術に對する外はない。民衆は劇に於いて何うしても時代物から世話物へと移らなければ、彼自身の劇を持つたとは感じない。彼等自己の生活の外に、それと隔絕した作爲的生活典型を、藝術の世界として持つことは出來ないのである。これに反してミリタリズムの階級は作爲的生活典型に於て彼等の藝術的感覺が滿足すると考へる。

民衆と武人階級との、この差異は何に基くかといふに、これは民衆に於いては彼等の現實の生活自體が社會的生活組織として成立する性質のものであり、これに反して武人階級の現實の生活は——軍事行動の生活は——それ自體が社會的て協同の生活を内容付けるものでないからである。從つて武人階級はそのミリタリズムの生活を誇張した感覺によつそれの自己否定を完成せしめ、即ち劍を小笠原流にまで持ち來すことよつて初めて平和的生活の組織の中に軍事行動を持ち込むことが出來るのである。民衆は彼等の生活の肯定によつて社會を見出し、武人階級は彼等の生活の否定に於いて社會を見出すのである。ミリタリズムの藝術的感覺がミリタリズムの鬪爭的機能を否定するやうに發展する微妙な作用は、そこに社會的意義を發見するのである。

藝術は畢竟生存意欲の擴張として作用するところに、その社會的意義がある。以上述べたところを總括すれば、ミリタリズムの藝術的感覺も亦詰まるところ、ミリタリズムの生活を、その感覺的誇張によつて肯定から否定へと押しやり、そこに鬪爭的階級を社會的協同の平和的伴侶たらしめる作用を持つのである。

けれども、前にいつた如く、ミリタリズムの生活感覺は、それが結局に於いて自己否定として發展するにしても、一般社會の藝術的衝動と異る範疇に終始するのである。軍國階級の道徳が自己否定の傾向を持つた儒教のやうなものとして發達したにしろ、その儒教は畢竟軍國貴族の生活の範疇に終始する道徳意識であつて、奴隸階級即ち生産階級の道徳と根本的に意識の傾向を異にする。社會の道徳は結局この軍國道徳を破壞する方向に進展する。ミリタリズムの藝術は結局ヨリ社會的の藝術によつて破壞される。それは舊劇の時代物が近代的の社會劇によつて取りつて代はられるのと同じである。宗教藝術が既に過去のものであると同じく、ミリタリズムの藝術も、もはやその歴史的價値だけが認められるに止まるのである。

我が農業經濟行詰の史的檢討と轉換の方向

高橋龜吉

我が農業經濟の行詰るや、之に對する方策の研究發表せられるもの、實に數ふるに遑のない程である。併しながら、結局、われ〳〵は、歷史を離れては、適切にして、實行性ある、新しき農業對策を生み出すことは出來ない。然るに、いま我が農業問題に對する論策の傾向を伺ふに、さうした歷史的な研究が、最も缺けてゐるのではないかとの懸念を、多かれ少かれ感ぜざるを得ない。

この論文は、さうした意味で、我が農業の維新以來に於ける榮枯盛衰の原因を調べて、現在の行詰が如何なることを意味するかを問ひ、而して、現在の我が農業が現に辿りつゝある方向に卽して、將來の農業問題の解決策の如何なるものであるかを窺知せんと試みたものである。しかし乍ら、未だ私のこの研究は極めて不完全であつて、多くの欠陷に滿ちてゐると思ふが、諸彥の御指導によつて、將來、かうした研究の完成せんことに希望を繫いで、この論文を發表する。

（一）我が農業經濟盛衰の大觀

德川封建制度の下に於て極度に行詰つた我が農業經濟は、維新革命以後、資本主義經濟の發展すると共に、新に發達の境地を見出し、茲に驚くべき長足の進步を遂げた。しかし乍ら、その發達は、いま各種の材料によつて按ずるに、大體に於て、日露戰後に於てその頂點に達し、爾後、歐洲大戰中の異例を除

き、已に停頓乃至衰退期に入れることを發見する。いま、我が農業經濟が何故に、此の時に於て行詰るに至つたかの理由は後に述べることにして、先づその行詰の大勢を見るに、例へば、明治三十九年乃至大正三年頃迄の期間に於て、麥、豆、粟、黍、蕎麥等の穀類其他の農産にして、その産額の最高に達し、爾後衰退又は停頓せるものが著しく目に付く。更に之を農産物價と其他の物價との比較から云ふも、同じことが推論出來る。例へば、農商務省調査の物價指數中、穀類（米、大麥、裸麥、小麥、大豆、小豆、小麥粉の平均）は、最も良く農産物價の推移を代表するが、之と其他の類別物價指數とを比較するに、明治三十三年十月を基礎とせる（一〇〇とせる）指數に從ふと、三十九年に於て始めて「其他の食料及嗜好料」のために凌駕せられ、爾後大體に第二位に落ちたるを除けば、其他の五類別（衣料、建築材料、肥料、燃料、雜品）並に總平均よりも常に高位を續けて、大正四年頃迄この位地を續けてゐる。即ち、それだけ農家の懷勘定がよくなつたことを意味する。しかし、いま明治三十三年乃至三十八年平均を基礎にして見ると、第一表の如く、三十九年乃至四十三年平均に於ては、穀類の一一三に對し、總平均は一一八の高位を示して、已に、この時に於て農産物價よりも、その他の物價の騰貴率の方が大となれることを發見する。即ち、物價の比較から見て、農業經濟の位地が日露戰後に於て始めて不利となり、爾後、大體にこの不利の位地を續けてゐることが分る。然り、當時已に、我が國は農村疲弊の難問題に當面して、識者はその對策について議論を鬪はしてゐたのであつた。

（一）穀價と其他物價との比較

平均	明治三十三年を基礎 穀類平均	明治三十三年を基礎 總平均	明治三三—三八年平均を基礎 穀類	明治三三—三八年平均を基礎 總平均	明治三九—四三年平均を基礎 穀類	明治三九—四三年平均を基礎 總平均	明治四四—大正四年平均を基礎 穀類	明治四四—大正四年平均を基礎 總平均
明治三十三年	一〇〇	一〇〇	…	…	…	…	…	…
三三—三八年	一一八	一〇四	一〇〇	一〇〇	…	…	…	…
三九—四三年	一三三	一三三	一一三	一一八	一〇〇	一〇〇	…	…
四四—大正四年	一五七	一三九	一三二	一三五	一二八	一〇五	一〇〇	一〇〇
大正五—八年	二五二	二二九	二三四	二三二	一八九	一八八	一六一	一七八
九—一二年	二七三	二八二	二三一	二七四	二〇五	二三一	一七四	二一五

然るに、その後歐洲戰爭と云ふ特別事情が介入して、世界的に農業經濟の位置は繁榮を呈したるため、農村疲弊の問題は一時姿を消した觀があつたが、戰後世界の經濟の平態に復すると共に、戰時中の不自然なる繁榮の反動と相俟つて、茲に、我が農業經濟は、一層の行詰に面したのである。而して、この歐洲戰後の農業經濟の行詰は、一般の我が經濟と同じく、大體に大正八年を繁榮の終として、九年以來漸く目立つに至つてゐる。

例へば、いま、特別事情にある北海道を除ける內地の農場戶數及び耕地面積について見るに、これ迄兩者とも增加一方であつたものが、農家戶數は大正九年の五百二十九萬八千戶を頂上に爾後始めて減少に轉じ、十二年に於ては五百二十六萬六千戶を算するに過ぎない。更に耕地面積は大正八年の五百二十五萬六千町を最高にして爾來減少を續け、十二年現在は四萬三千町減の五百二十一萬三千町である。又之を用地價格から見るも八年の一反七百六圓を頂上に爾後激落してをり、小作爭議の頻發し始めたのも亦大體に九年以後のことである。

然らば、我が農業經濟は、何故に、幕末に於ける行詰から轉換して日露戰爭頃迄に至る繁榮を贏ち得たか。その繁榮が何故に日露戰爭後に於て已に一應行詰り、歐洲戰後に於てその行詰が激成せらるゝに至つたか。而して、我が農業經濟自身は、この行詰に、直面して、現にいま如何なる對抗策を採りつゝあるか。それが、以下に於て私の述べんとする所である。

(一) 維新後の農業の發展と其理由

(一)ノ一 維新後農業發展の根因

德川封建制度の末期に於て、極度に行詰れる我が農業經濟が、維新以來一轉して長足の進步を遂げ、爾來日露戰爭前後迄約四十年間(明治十四年から十七年の不換紙幣整理時代の不況を除き)の繁榮を續け得た理由を茲に明かにすることは、自然また、日露戰後に於て我が農業經濟の現在の如く行詰に至つた歷史的背景を暗示する所以である。いま簡單に維新直後我が農業經濟の發達せる根因について見るに、之を大凡次の四項に歸すことが出來ると思ふ。

一、海外貿易の解放のために、最も有利な農業を開發し得たこと。

二、鐵道及汽船等の交通の發達のため有利の販路の開拓せられたこと。

三、商工業の發達、即ち農業以外の人口の增加のために農產品を有利に販賣し得たこと。

四、加ふるに、封建時代の苛斂誅求並に各種の制限は撤去せられ、歐米の技術及科學の移植採用せられたこと。

いま、これ等四つの根因が互に因となり果となり合つて、如何なる現象を我が農業に起したかと云ふに、之を引つくるめて云へば、(イ)これ迄、交通の不便のため、又は販路の制限せられたるため、一定の程度以上に農業開發の餘地のなかつた地方に、盛んに農產の增加したこと、及び(ロ)これ迄專ら米作又

は其他の穀物本位に制限せられてゐた我が農業が、海外輸出又は內地の他地方へ移出可能となりたるために、各種の特用農産を盛んに營むに至り、農業は地方的に著しく分化すると共に全國としては極めて多樣化したことであつた。

(二)ノ二　農産の增加

農産が增加するためには、云ふまでもなく、農業が引合ふ狀態に置かれねばならないが、維新以後、それは賣價と生產費との兩方面から齎らされた。先づ商工業が發達して、農業以外の人口が著增したことは、それだけで、農產物價の騰貴すべきことを語つてゐる。蓋し、商工業の發達は一方に於ては農產品に對し高價を支拂ふ能力の發達を示し、他方に農產に對する需要增加を意味するからだ。加ふるに、海外販路の開拓につれて、輸出の途が開けたのであるから、兩々相俟つて、農產物價は騰貴した。然るに、商工業の發達、外國貿易の發達の結果は、農家の購入すべき日用品の物價を比較的に低廉にし、加ふるに鐵道其他の交通の發達は、更に之を著しく助長した。しかも、これ等有利の事情の下に於て、農家は新に歐米の農業科學及技術を極力輸入模倣し得るの機會に會つた。この秋に於て、これ迄封建制度の下に於て、奴隷の如く壓迫せられ、苛斂誅求せられて、殆んど企業心を失つてゐた百姓は解放せられて、「これからは我等の天下である」と云ふ新しき希望に燃えて、地主、小作人の區別なく何れも農事の改良發達に努力した。願るに、當時にあつては、今日と異り、地主と雖も宛も手工業時代の親方の如く、その殆んど全部は、自ら耕作に從事し、從つて農事の改良進步は、專ら、これ等資力を持合はしてゐる地主を中心として行はれたものである。蓋し、德川封建時代に於ては、耕地の賣買禁止其他の事情のために割合に大地主なるもの少く、加ふるに、公租の苛斂誅求のために、地主と雖も小作米のみによつて生活するの餘裕なく、何れも自作し來れる習慣が、維新以後もそのまゝ繼行せられたものである。

いま、以上の如き、農產需要の增加、農產物價の騰貴、農事の改良、鐵道其他の交通の發達等の事情が相俟つて、我が農業を如何に發達せしめたるかの著例として、米の產出、輸移出入、米價等に關する數字について見るに、即ち、米價は不換紙幣整理に基く特殊の反落を除けば、明治一六―二〇年の一石平均五圓七十錢六厘から逐年鰻上りに著騰して、明治四一―大正一年平均十六圓臺に於て、一先づ頂點を打つてゐる。(即ち略十六圓臺に於て茲に始めて十ケ年間保合つた)　而して、米の作付段別、一段當り收穫高、及び產米高は其間累年著しき飛躍を告

げてゐながら、尙人口の增加、米食の普及の結果、日清戰爭以後少なからぬ米の輸移入を必要としてゐる。

しかし乍ら、以上述べたるが如き農產の販路の增加、米價の騰貴、農事の改良、交通の發達等の事情が相俟つて、我が農業の發達せる樣は、鐵道の開通と肥後米の縣外輸出の增加との關係、並に米產の增加の實際によつて、更に、ハツキリと之を描き出すことが出來る。即ち、明治十九年に於ては、肥後米の縣外輸出は僅かに七萬九千石、收穫高九十八萬二千石に對し八%九に過ぎざりしものが、明治二十四年七月九州鐵道の熊本に通づるや、爾後縣外輸出は二倍、三倍し、四十年六月八代人吉間の開通せし後の四十三年に於ては、縣外輸出は六十二萬九千石に達して、明治二十年前後の收穫高の約六割五分に達してゐる。しかし、此間收穫高も亦約百五十萬石に激增せるため、縣外輸出は四一%八に止つてゐる。

(二)ノ三　農業の分化と多樣化

明治維新以後、幕末の行詰から一轉して、我が農業經濟の發達したる他の樣式は、我が農業の地方的に著しく分化しながら全國としては極めて多樣化したことである。抑々、德川封建制度の下に於ては、當時の支配階級即ち武士階級の利益に關係最も大なりしものは、所謂五穀就中米であつた。從つて、幕府は極力、五穀就中米の耕作を奬勵し、その他の特用農產物の栽培を極力阻止する政策を採つたものである。例へば、矢野友一の著になる「日本農政史」は之を次の如く記してゐる。

『……煙草、桑、菜種等の特用農產物は、田租其他の關係上直接必要品と認められず、却つて一種の奢侈品と見做されたので、其の栽培には非常の制限を加へ、すべて本田畑に作ることを嚴禁し、五穀の妨碍とならぬ荒地或は山野の新開地にのみ作ることを許された。……次に五穀を廢し蠶を專らにすることも亦幕府の好まざる所であつたが、嘉永安政の頃から諸國、田に桑を植付くる風習が漸次盛んとなつたから、元治元年四月天下に令して之が嚴禁に力を盡してゐる。……。併し幕府は必しも此等を絕對に禁制したと云ふのではない。只、國家經濟の根源たる五穀の妨害となるを恐れ、之に一種の制限を加へたばかりで、本田畑新田畑にあらざる所は、むしろ奬勵するの傾向があつた。尤も幕府の初期は勸奬の範圍が只稻作のみに限られてゐたけれども、享保の頃から既に其の方針が一變し、諸種の農產物を移植することを大に奬勵するの氣運に向つた。しかし本田畑は五穀の外使用することが出來ないから、これと同時に荒地及び空閑地の利用が盛となつた。……』

以上の如く、幕府の禁令あるにも拘らず、幕末に近づくに從ひ、本田畑に特用農產物を栽培するものの增加したこと、及び享保以後に於て、本田畑以外に限るとは雖、特用農產其他各種の農作を勸奬するに至つたことは、それ自ら、封建時代に於ける五穀就中米作偏重の農業が片輪になつて行詰れるに至つた事實の反證である。然るに、維新の革命の結果、農事に於ける斯る制限の全廢せられると共に、海外貿易の解放のため、蠶絲、茶、薄荷、木蠟、椎茸、葉煙草、樟腦、人參、牡丹皮、五倍子、百合根、藍、絲瓜、花莚、和紙、除蟲菊等の特用農產品又はその製品の輸出せられるもの多く、從つてそれ等の價格著騰して著しく有利となり、その栽培大に盛んとなるに至つた。加ふるに、運輸交通の發達は、從來一地方の消費のみに限られたる蔬菜、果樹等の栽培を、之に適したる地方に於て盛んに行ひ、之を東京大阪其他の消費地に送荷し、進んでは海外に輸出するを、有利とするに至つた。例へば、馬鈴薯、甘藷、キヤベツ、玉葱、南瓜、大根等の蔬菜類、蜜柑、リンゴ、葡萄、梨の如き果樹の如きそれである。

斯樣のわけで、なる程、海外貿易の解放と共に、棉花、藍、甘蔗等の栽培は輸入品に壓倒せられるに至つたが、しかし、之を全體として見れば、我が農業は著しく地方的には分化し單一化したが、全國的には極めて多樣複雜な內容を呈することゝなつた。このことは例へば、各種重要農產品の作付段別中、米の作付段別の占むる割合が、後に示す如く、米作に對する政府の異常の奬勵にも拘らず、大正八年頃まで減少一方であつたことによつて最もよく證明し得る。右の如き傾向は、穀類と其他の農產との作付段別の割合を見るに及んで、更に著しく現はれる。例へば第二表に示すが如く、我が重要農產品作付反別總計中、穀類の占むる割合は明治三十六年七四%五一を占めしが、大正二年には七〇%四〇に、大正八年には六五%八八に減少してゐる。思ふに明治三十六年以前に於ては更に右の傾向は著しかつたであらうと思はれるが、それを究むる統計のないことを遺憾とする。

(二) 穀類と其他重要農產品との作付反別の全體に對する割合比較

	明治三十六年又八四一年	大正二年	大正八年	大正十二年
米	四一・四五%	四〇・四六%	四〇・二七%	四三・〇二%
大麥	九・五三	八・三四	六・九四	六・五四
裸麥	九・七二	九・六二	八・三八	七・六八
大豆	六・七四	六・三五	五・五七	五・八二
粟	四・一五	二・四〇	一・九三	一・六四
稗	〇・九九	〇・七四	〇・六五	〇・五一

黍	〇・三五	〇・四八	〇・三八	〇・三五
蕎麥	二・四二	二・〇三	一・七七	一・六四
小計	七四・五一	七〇・四〇	六五・八八	六七・一六
其他	二五・四九	二九・六〇	三四・一二	三二・八四
合計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

（備考）其他の中には四十一年のものを含む、その他は三十六年。

云ふ迄もなく、斯の如く、我が農業が、地方的には、その地方に於て最も有利とする農産に集中すると共に、全國的には著しく多樣化して來たことは、それだけ我が農業を有利にし、農業經濟を發達せしめたものであるが、しかし、斯樣の多樣化の傾向にも、之を有利とする限度がある。即ち、前掲第二表に於ける穀類の割合が大正八年以後逆に增加（しかもその原因は米作の割合增加のみに歸する）したことは之を語るものであるが、これについては後に述べることにする。

（三）日露戰爭以後に於ける我が農業經濟の凋落と其原因

（三）ノ一　日露戰後農業凋落の根因

（二）に於て述べたるが如き、明治維新以後長足の進步を遂げた我が農業が、日露戰後に於て、已に、一應その發展の頂點に達し、爾後我が農業は凋落期に轉入せることは、（一）に於て概述した所であるが、この眞相を更に最もよく端的に語り得るものは、明治三十八年、非常特別稅法による地租增徵に對する均衡の名に於て、從來無稅又は五分なりし米（從來無稅）麥及麥粉等に對し、悉く從價一割五分の輸入關稅を創始したことである。蓋し、これによつて、この時已に、我が農業經濟は、輸入關稅の保護を必要とする位地に凋落してゐたことを最も明かに看取し得るからである。

いま、日露戰後に於て、斯く我が農業の凋落期に轉入せる原因如何と云ふに、私は之を次の五點に歸し得ると思ふ。

一、我が農產物價の比較的騰貴已に頂點に達し、海外農業品輸入の壓迫を感づるに至つたこと

二、我が工業の對內的發達漸く頂點に達し、爾後の發達は主として之を海外發展に俟つ外なきに至るや、對外競爭上一定程度以上の農產物價を支拂ふ能力なきに至つたこと。

三、從來農事の改良進步の中心であつた地主階級が、過去の巨利のために遊食階級化して、農業に對する新たなる資本と力との注入が涸渇したこと。

四、農村過剩人口の捌口の縮少したこと。

五、土地に報酬遞減の法則が少からず作用し始めたこと。

六、農村の自給自足經濟が解體しながら、之に對する對抗策の未だ發達しなかつたこと。

右の六點中、(五)の土地の報酬遞減の作用は、未だこの時までは表面に具體的には現れなかつたから、之は後の節に於て詳述することとし、玆には殘りの其他について、以下述べることにする。

(三)ノ二　海外農産輸入品の壓迫

元來、その國の農業品の物價は、農業以外の人口の增加するにつれて、特に騰貴するの理であること說明を要する迄もない。蓋し、土地には限りがあつて、農業に對する需要の增加につれて、增産し得ないことがその主因である。しかし乍ら、今日の國際經濟の下に於ては、斯樣に、その國の農産物價が、需要の增加につれて或る程度まで騰貴すると、それ以上は騰貴の余地なきに至る限度がある。それは、海外に於ける低廉なる農産品の輸入競爭である。我が國に於ては、その限度が大體に、日露戰爭前後に於て來たのであつた。このことは、我國は明治二十五年頃までは一年平均二三十萬石の米を輸出し來つたものが、明治二十六年乃至三十年平均に於て逆に三十三萬三千石を始めて輸入し、爾後、三十一—三十五年平均に於ては百三十七萬石、三十六—四十年平均に於ては約四百五十萬石を輸入してゐる。而して、明治三十年に終る五ヶ年平均の米價は九圓三十四錢四厘にて、その前の五ヶ年平均相場六圓八十三錢に比し約三七%を著騰したが、次の五ヶ年平均(三十五年に終る)に於ては、三二%の騰貴に縮り、更にその次の五ヶ年平均(四十年に終る)に於ては一六%の騰貴に著減し(十二圓三十六錢六厘より十四圓三十三錢八厘)、更にその次の五ヶ年平均(大正一年に終る)に於ては一二%五の騰貴に止り、(十四圓三十三錢八厘より十六圓十三錢二厘)玆に米價の騰貴は一先づ頂點に達した。即ち次の大正六年に終る五ヶ年平均の米價は十六圓八十二錢六厘にて、明治四十一——大正二年平均の十六圓十二錢二厘と略ぼ同價に保合つたのである。しかも此間、物價總平均指數は、明治三十六乃至四十年平均一一五・二から、四十一年乃至大正一年平均一二三・八となり、更に大正二年乃至六年平均に於ては一四六・八に飛躍してゐる。之によつて一般物價の騰貴せるにも拘らず、農産物價は此の時に於て、已に外品輸入の壓迫線上に露出し、從來の、然り從來の如き一般物價の騰貴率以上の騰勢を、玆に挫折して、却つて、一般物價の騰貴に遙かに下廻るに至れる有樣を容易に看取し得る。事實、日露戰爭を劃期と

して、それ迄増加しつゝあつた農産の輸出は、爾後減少に轉じ、それと共に、それ迄増加の遲々であつた農産の輸入は、日露戰爭前後より急激に増加するに至つてゐる。

兎に角、以上によつて、從來、我が國都市人口の増加につれて、飛躍的に騰貴し來つた農產物價が、日露戰爭前後より外品の競爭線にまで已に騰貴し盡して、爾後漸くその騰勢を鈍り、日露戰後に於て、遂に外品輸入のために、その騰勢の行詰に陷れる有樣を明かに認め得るであらう。之れ已述の如く、日露戰後に於て、已に、我が國に農村疲弊の問題の起るに至つた第一の根因である。

（三）ノ三　我が工業の對內的發展の行詰

以上の如く、日露戰後に於て、我が農業は、已に外品との競爭線上に露出して、その壓迫を蒙るに至つた。しかし乍ら、この時に於て、この外國農產品の壓迫を、より强度の輸入關税によつて緩和し得なんだわけは、我が工業が、この時代に於て、對內相手の發展に漸く行詰り、爾後の發展を海外の販路に求めざるを得ざるに至つたからである。蓋し、若し、我が工業にして尙ほ對內相手に發展の余地大なる場合に於ては、一方農產品に厚き保護關税を與へると共に、他方工業製造品にも等しく厚き保護關税を與へることによつて、勞働者を搾取して地主及び資本家兩方の採算を有利になし得るのである。所で、その國の工業が、對外相手の發展を必要とするに至るや、外國產業との競爭の必要上、極力生產費を低下せねばならず、しかも此際に於て保護輸入税は何の役にも立たない。故に於て、商工資本家は寧ろ、農產品の關税廢止を强要すべき必要に迫られるものであるから、農產品に對する輸入税の増率乃至新設に、從來の如く無關心であるわけには行かず、極力之に反對せざるを得ないからである。

この外、周知の如く、我が工業の對外發展が、當時、豫期の如く順調に進まずして、國內は戰後の不景氣に陷つたことも又、農村過剩人口の都市への捌け口の減少を意味する。しかもこの時に於て、從來、年々、一萬乃至二萬人の移出民を送り出してゐた我が國は、北米、布哇其他の我國移民の入國禁止政策のために、過剩人口の捌口を閉さるゝに至つた。以上が日露戰後に於て、我が農業經濟の困難に陷るに至つた第二の根因である。

（三）ノ四　地主の寄生蟲化及び農業資本の涸渇

維新以來に於ける我が農業發達の根因の一つが、地主を中心

とする農事の改良進步に在つたことは已に述べた通りである。所が、其後、一方に地代收入の增加と農業利益の增大とのために地主の懷中豐富となり、他方に土地の兼併漸く旺んとなりつゝある時に於て、幕末以來自ら鋤鍬をとつて農事に親しみし地主の家長は老ひ又は死亡して、富裕に育てるその子供が之に代るに至つた。實にこの地主の家庭に起れる變化は、延いて我が農業經濟の根柢に、左の如き變化を起したのであつた。

一、自ら農業に從事せずして、小作料に寄生する多くの地主階級を生んだこと。

二、從つて、これ迄、小作料の少からぬ部分は、農事の改良進步の資本として投ぜられたものが、今や、それ等の小作料は、殆んど全部農業以外に投資せられるか、又は地主の贅澤なる徒食生活の財源となるに至つた。

三、しかも、親しく農業に專念する小作人又は自作農の多くには、生活に餘裕なく、資力足らず、從つて、必要なる農事の改良進步をなすに足る資力と智力とに欠けてゐた。云ふ迄もなくその結果は農業の退步であり、少くとも農業が時勢の進步に取殘されることである。

抑々、過去に於て、地主が農社會の中堅をなし來つたわけは、彼等が、常に卒先して、勤勉力行、農事の改良進步の中心となつて來たからである。否々、始め彼等が農村に於て行様な重要な役目を演じたことが、彼等を地主と云ふ位地に置いた根因である。而して、小作料なるものは、之を社會的に云へば地主に斯樣な役目を演ぜしむるために、小作人が釀出したものに外ならない。換言せば、今日の小作制度に於ては、地主の手許に釀出された小作料に頼る外に、農業の改良進步に必要な資本を賄ふ方法は、農業經濟にはない仕組である。然るに、今や、地主は、土地を小作人の耕作に委して農業に遊食寄生し、或は、贅澤なる生活に、或は、株式米その他の投機に、當然農業に投ぜらるべき貴重の資本（小作料）を消費して失ひ、しかも尙ほ不足するや、小作料の引上げすら敢てするものがあるに至つたのである。喩へば、昔し大名が、年貢米を農業の改良に費やさずして、之を奢侈な生活に濫費し、尙ほ足らざるは苛斂誅求したるに左も似てゐる。斯る大名の下に於て農業の常に荒廢したるが如く、斯る地主の下に於て農業は衰退せざるを得ない。之れが、日露戰爭を略ぼ轉機として迎つた我が農村の出來事である。

(三)ノ五　農家の自給自足經濟の解體と之に代る副業の不利

元來、農業は季節的に繁閑甚しく、從つて、古來、農家は所謂農閑期を利用して、種々なる自給自足經濟の方法を本業と組合はしてゐたのであつた。例へば、棉から絲を紡いで、之を織り、着物やシャツやパッチや足袋やを自給し、酒や醤油や油やを自足せしが如くである。然るに、維新以來交通の發達其の他によつて、交換經濟發達するや、昔農家が農閑期に於ける勞力によつて、自給自足してゐた多くのものは、今や、之を市場から購入するを便利とするに至つた。さうなると、農家は、一方には斯様な品物の購入のために貨幣を要し、他方には農閑期の勞力の利用法がなくなつた。所謂、農家の副業は斯様な事情に善所するために起つたものであつた。所が、斯様にして、農家の副業となつたものは、初め有利であつたものも、後ちには中間商人のために甘い汁を吸はれ、又、最も有利の方面は工場工業化される（例へば製絲が工場化し、製織が工場化せしが如き）と云ふ様なわけで、農家の副業として殘されたものは、最も割の合はないものとなるに至つた。

他方に於て、自給自足經濟を捨てゝ交換經濟に移つた結果、農家が市場から購入せねばならなくなつたものゝ物價は、前に述べたるが如く、日露戰後より漸く騰貴著しく、斯様のわけで、農家は新に買ふことになつた品には高く拂はねばならず、その代りに働く副業に對しては極めて低廉な報酬しか與へられずして、その甘い汁は商人や工場主に搾取せられることとなつたのである。日露戰後に於て、農村の疲弊が漸く世の注目を惹き、之れと共に、農家の副業が世の問題となるに至つたわけは茲に在る。

併し乍ら、思ふに、この點に關する農業經濟の困難は、これ迄、農家が自給自足經濟に永く安住せる結果、その自給自足經濟が解體して、交換經濟の渦卷きの中に放り込まれながら、依然、自給自足經濟時代の考方に囚はれて、交換經濟に善所する方法を知らないことに根因する。從つて、其後農家が漸く交換經濟の何物なるかを知るに至るや、之に善所する方法も自ら發達しつゝあつて或は組合組織による販賣、購入、加工等の運動によつて、中間利益の搾取を除かんとし、或は、副業そのものゝ經營を改革して、最有利のものとなすなど、漸く交換經濟に對する農業經濟の適應策は發達しつゝある。が、この點については後に詳述することにして、茲には單に以上概說せし所に止める。

（四）歐洲戰後に於ける我が農業經濟の行詰と農業內容の革命

（四）ノ一　歐洲戰爭に由る我が農業經濟の不自然なる繁榮と其の反動

（三）に於て詳しく述べたるが如く、我が農業經濟は日露戰後に於て、その繁榮の頂點に達し、已に下り坂に入つた。しかし、この我が農業凋落の趨勢は、間もなく、歐洲戰爭と云ふ變態的世界經濟の介入せるために、一時全くその影を潛め農村は稀有の繁榮に陶醉するに至つた。いま、そのわけ如何と云ふに、要するに左の二點に歸する。

一、農産物價の暴騰したこと。

二、商工業の異常の發展に由つて、農村勞力の需要の激增したこと。

農産物價が騰貴したるわけは（一）歐洲戰爭のため、世界の農産が激減して、農産需給の國際關係より物價を高めたこと、（二）內地商工業の異常の活躍のために、內地購買力の激增せることゝの二つに負ふ。而して、斯く、農産物價の暴騰せることによつて、農業經濟の繁榮せること云ふ迄もないが、しかも、歐洲戰爭が、農業經濟を更に一段と繁榮せしめた他の主因は、商工業の異常の發達によつて、高賃銀を以つて、農村の過剩勞力を、旺んに吸收したことであつた。

所が、歐洲戰後、世界の經濟が漸次常態に復するや、先に、我が農業經濟に繁榮を齎らした以上の如き原因は消滅して、農産物價の崩落、農村過剩勞力の需要の激減、都市失業者の歸農等、農村經濟は再び、歐洲戰前の困難狀態に復するに至つた。否々、戰後の我が農業經濟の困難は、單に戰前のそれに再び歸つただけではない。それ以上、新に多くの問題を背負ひ込むに至つたのである。例へば、その主なるものを擧ぐれば、

一、戰時中の繁榮時代に農家及地主の生活程度が著しく向上したこと。

二、戰時中の地價暴騰時代に田畑を購入せるものは、いまや、農産物價の崩落のために、資本利子の壓迫に著しく惱むに至つたこと。例へば勸業銀行の調査に從ふと、大正二年の田畑賣買價格全國平均は一反三百二圓なりしもの、八年には七百六圓に奔騰し、十四年には五百六十圓に暴落してゐる。

三、しかも、戰時中土地を高價に轉賣したもの、又は農産物價の暴騰に浴したるもの等の巨利を收得した者は、多くその資本を、株式其他の投機に消耗したこと。

以上の結果、我農業經濟は如何なる影響を受けたかと云ふに、（一）農業人口の生活を賄ふためには、從來よりも多額の利

得を必要とするに至つたこと、（二）農業資本に對して負擔する利子が加重して來たこと、（三）しかも農業經濟に於ける資金の供給は減少して、必要な資本投資が涸渇するに至つたこと、と云ふ三大困難を新に加へたことゝなつた。歐洲戰後の我が農業經濟の行詰が歐洲戰前のそれに比し、著しく深化し來れる主因は即ち玆に在る。加ふるに、次節に述ぶる如く、小作人は、歐洲戰事中一旦向上せるその生活程度を再び低下せしむることを肯へんぜず、その代りに、之を地主に轉嫁せんとする思想の革命を來たしたのである。斯くして歐洲戰後に於ける我が農業經濟の行詰は、一層の複雜を呈するに至つた。現に、（一）に詳述せし如く、大正八九年以來、北海道を除く內地の農家戶數も耕地面積も、從來の增加一方の歷史を一轉して減少しつゝある。

（四）ノ二　農產內容の單一化傾向

以上に述べたるが如き理由で、歐洲戰後從來の我が農業經濟の位地が困難となるや、我が農業は、この戰後の新たなる事情に適應せんがため、その內容に少からぬ革命を起すに至つた。即ち、我が農業經濟が明治維新以來長足の進步を遂げたる形式は（二）ノ三に述べたるが如く、農業內容の多樣化であつたが、いまや、逆に我が農業は單一化しつゝある。按ずるに、歐洲戰爭を頂點に、我が農業經濟の發達行詰るや、戰後に於て、先づ多大の打擊を蒙つたものは、外國農產の輸入競爭に最もヒドく暴露せられた農產であつた。從つて、これ等の農產は、其種の農作に特に最も適してゐる耕地にのみ栽培せられ、その他の耕地のものは、より有利の他の農作に移るに至つた。この事とは、第三表に示す如く、一反當りの收穫高が今日尙ほ增加しつゝあるものは、大麥、大豆、豌豆、稗、蕎麥、菜種等の如き、その農產の衰微著しきものに主として限られるが、之に反し、一反當りの收穫高が已に減少しつゝある農產は、米、小麥、甘藷、馬鈴薯等、その農產が今尙ほ增加しつゝあるか、乃至は停頓しつゝあるものに主として限られることによつて之を證明し得る。

（三）主要農產物作付反別一反步當收穫高

增加の部

平均	大麥	大豆	豌豆	稗	蕎麥	菜種	葉煙草
明治一二—一六	石 〇・九一	石 〇・五二	石 ……	石 〇・九三	石 〇・四五	石 ……	貫 ……
二二—二六	一・〇七	……	……	……	……	……	……
三二—三六	一・二八	〇・六六	……	一・二四	〇・六六	〇・七三	三三
四二—大正二	一・五八	〇・七三	〇・九七	〇・八九	〇・七七	〇・七四	三八
大正三—七	一・三三	〇・八一	〇・八八	一・三五	〇・七五	〇・七三	四二
八	一・八四	〇・八二	〇・七二	一・七六	〇・八五	〇・八二	四四

	米計	裸麥	小麥	小豆	栗	甘藷	馬鈴薯
一二	一・三九	〇・八一	〇・八三	一・六八	〇・八八	〇・七五	七四
減少の部							
明治一二―一六	一・二〇石	〇・七九石	〇・六〇石	…石	〇・七五石	一八八貫	八四貫
二二―二六	一・四〇	〇・八四	〇・七一	…	…	…	…
三二―三六	一・四八	〇・九五	〇・七八	〇・六九	〇・九九	二六三	一六七
四二―大正二	一・六九	一・一四	一・〇三	〇・七〇	一・一二	五三〇	二六〇
大正三―七	一・八五	一・一六	一・〇八	〇・六〇	一・二〇	五五七	二七一
八	一・九六	一・一八	一・一六	〇・六〇	一・五四	五七二	五一五
一二	一・七六	一・〇四	一・〇六	〇・六五	一・二七	五四五	二四三

以上の事實は即ち、我が農業經濟が、外國輸入品の壓迫强き方面を捨てゝ、外國輸入品の競爭力最も弱き方面にのみ集中しつゝあることを示すものであることは已述の如くであるが、いま、如何なる農産が、後者の資格を具へてゐるかと云ふに、細かく見れば果實、蔬菜の如き腐敗し易く運搬困難なるものをその尤とするが、しかし、我が農業經濟上、最も重要なるものにして右の資格を具へるものは米と桑とである。蓋し、米は日本人が日本米に特殊の嗜好を有することゝ、政府特殊の保護とのために、他の農産に比し外國品の競爭を受くること少く、それだけ高價に販賣し得、桑は内地の養蠶業がいま或る種の獨占的性質を有するために高價を保ち得るからである。以上の如き變化の結果、近來我が農業は、益々米と桑（養蠶）とに集中せられ單一化されるに至る傾向が旺んである。例へば、第四表によると、全國の耕地面積の中、米作の占むる割合は、大正八年までは減少しつゝあつた。即ち、明治三十七年の五四%四〇から大正八年には五一%一三に減少してゐる。それだけ、米作以外の農産が増加した反映であつて、大體に、この時期までは、我が農業が、内容の複雜化、多樣化によつて發達し來つたことを示すものである。

然るに、大正八年以後は、米作の占むるこの割合が反對に每年増大し、大正十二年は八年の五一%一三に對し五二%一二を示してゐる。即ち、之によつて大正八年以後我が農業が、他の農産に於ては益々不引合となりて、米にのみ集中しつゝあることを看取し得るものであるが、しかし、右の傾向を更にハツキリ知るには、いま尚農業開墾期にあつて、内地農業とは著しく事情を異にせる北海道を除ける内地のみについて見ればよい。第四表の下段は即ち之を示すものである。

之に由ると、耕地全體に對する米作反別の割合は、明治三十七年の五七%七八から、四十三年の五六%九八で一應その減少を止め、爾後その割合を增大して大正六年には五八%一四に增加してゐる。即ち、之を内地のみに限つて云へば、我が農

は、日露戰後(明治四十三年)に於て已に、米作以外の農業は不引合に陷り、大正六年頃までは、米作のみに集中しつゝあつたことを窺ひ得る。然るに、大正六年以後は歐洲戰爭による異常の繁榮のために、米作以外の農作に於て增加し、その割合は、六年の五八%一四から八年には五七%六七に減少した。而して、歐洲戰爭による我が農業の多樣化はこの八年を以つて終り、爾後、再び米作の割合は增加して、十二年に於ては、八年の五七%六七より五八%八に增加してゐる。しかも、他方桑の作付反別も此間激增した結果、米桑反別合計の我が耕作反別總計に對する割合は、明治三十七年の六四%三一から、大正十二年は六八%二六に增加し、大體に我が農業土地の約七割までは、米と桑とに利用せらるゝに至つたことを發見する。

(四) 米及桑の耕地全體に對する割合

	全國			北海道を除く内地		
	米 %	桑 %	米桑計 %	米 %	桑 %	米桑計 %
明治三七	五四・四〇	六・一四	六〇・五四	五七・七八	六・五三	六四・三一
四〇	五三・四五	七・一九	六〇・六四	五七・五七	七・七六	六五・三三
四三	五二・一七	七・八二	五九・九九	五六・九八	八・五八	六五・五六
大正二	五二・二九	七・八〇	六〇・〇九	五七・七二	八・六九	六六・四一
五	五二・〇八	七・八九	五九・九七	五八・〇九	八・九〇	六六・九九
六	五一・八〇	八・一七	五九・九六	五八・一四	九・三〇	六七・三〇
八	五一・一三	八・六一	五九・七四	五七・六七	九・九一	六七・五八
九	五一・三八	八・七八	六〇・一六	五八・〇四	一〇・一六	六八・二〇
一〇	五一・四〇	八・七八	六〇・一八	五八・〇六	一〇・一七	六八・二三
一一	五一・五三	八・四二	五九・九五	五八・〇二	九・七六	六七・七八
一二	五二・一二	八・七六	六〇・八八	五八・〇八	一〇・一八	六八・二六

斯く、我が農業が單一化しつゝあることは、他方に於て、我が農業がいよ〳〵一方に偏し、從つて、農業勞力の利用の平均が破られて、勞力需要の繁閑がいよ〳〵甚しくなることを語るものである。從つて、また、我が農業經濟に於ける副業の位地を益々重大ならしめつゝある。事實、次に述べるが如く、我が農家の副業は、斯樣な農業經濟の變化に適應するため大なる變化を起しつゝある。

(四)ノ三 副業の單一化と本業化

以上に述べたるが如く、我が農業の單一化しつゝあることは、他方に於て、農繁期に於ては集約的に勞力を必要とするが、農閑期に於ては集約的に勞力に過剩を來たすことを意味する。從つて、これ迄に於ては、比較的僅かの過剩勞力を切れ〳〵に利用し得れば足りた農家の副業も、今日に於ては、相當期間引續いて農家の有する全勞力を利用し得る副業を必要とするに至つた。斯く、副業の農業經濟に對する位地の重大化したと云ふことは、必然に又、農家の副業に對する勞力觀に大なる變化を

伴起せしめざれば止まない。と云ふ意味は、元來、農家の副業に對するこれ迄の態度は、遊んでゐる勞力を利用して、いくらでもよい儲けたいと云ふに在つた。從つて、副業の勞力に對する報酬と云ふことは、比較的に呑氣に考へられてゐたのであるが、今や、左樣な呑氣なことを許さず、如何なる副業が最も引合ふかに至大の注意を拂はざれば生活が立ち行かないと云ふ所にまで、副業の位地は重大化して來たのである。しかも、米作偏重の農業と旨く交織され得る有利の副業はさう種類のあるわけでもなく、斯殘のわけで、米作との關係比較的に最も都合よきものに我が農家の副業は益々集中するに至つたのであるが、就中養蠶に對する集中が最も著しい。例へば、農家戸數全體に對する養蠶戸數の割合は、明治三十九年には二六%なりしものが、大正一年には二八%となり、十一年には三四%に達し、桑園の畑反別總計に對する割合また、明治三十九年の一四%六から、大正一年一六%一、十一年一七%二に著增してゐる。第五表は即ちこの變化を詳示するものである。

(五)養蠶業の農家及畑地に對する割合

	養蠶戸數の農家戸數全體に對する割合	桑園反別	同上の畑地全體に對する割合
	%	%	%
明治三九	二六	三六四、七二七	一四・六
四一	二七	四一二、四四四	一五・七
四三	二七	四四二、五四二	一六・一
大正一	二八	四五五、六二六	一六・一
三	二七	四五〇、二九九	一五・七
五	三二	四六五、五一〇	一六・〇
七	三五	五〇八、九九五	一六・八
八	三五	五三三、五二〇	一七・一
九	三五	五五四、五八六	一七・五
一〇	三三	五五五、〇九九	一七・五
一一	三四	五一二、八三五	一七・二
一二	―	―	―

斯く、農家の副業が、集中し單一化する傾向の大となるに從ひ、自然に、副業そのものが本業化して來ることも容易に考へ得られる所である。尠くとも、これ迄の副業に對するとは全く別な、即ち本業に對すると殆んど同一な職業心理を持つて、所謂「副業」に從事するに至つたのである。このことは又、養蠶業に於て、就中養蠶業の最も旺んな地方のそれに於て、最も代表的に之を示し得る。例へば、いま我が國に於て、その地方の全農家の約六割近く(正確に云へば五六%七)が養蠶に從事してゐる主要養蠶地方と、其他地方(農家の養蠶せるもの二六%一)とに就いて養蠶經營の推移を見るに、主要養蠶地方に於ては掃立蠶種一枚當りの收繭高は、なる程每年增加しつゝはあるが、しかし、其他地方のそれに及ばない。例へば、明治三十三

年に於ては、蠶種一枚當りの收繭高は兩地方ともに二貫五百七十匁であつたが、大正十二年に於ては、主要養蠶地方の三貫七百十匁に對し、其他地方は實に四貫六百五十匁である。しかし乍ら、之と養蠶戸數一戸當りの收繭高について見るに、大正十二年に於て、主要養蠶地方は四十五貫八百匁を產出しつゝあるに對し、其他地方は三十貫六百四十匁を產するに過ぎない。例へば、第六表がこの關係を詳示する。

(六) 養蠶技術の營利的本業化表

	一戸當蠶種掃立枚數 主要養蠶地方(枚)	一戸當蠶種掃立枚數 其他地方(枚)	一戸當收繭高 主要養蠶地方(貫)	一戸當收繭高 其他地方(貫)	掃立蠶種一枚當收繭高 主要養蠶地方(貫)	掃立蠶種一枚當收繭高 其他地方(貫)
明治三三	一二・三七	六・四九	二五・六六	一三・三	二・〇七	二・〇五
四〇	一五・四二	七・三三	三二・四五	一七・二	二・一〇	二・三五
大正　三	一七・〇七	七・九二	三九・一三	二一・二三	二・二九	二・六八
八	一五・七八	八・二四	四六・九三	二八・七六	二・九七	三・四九
一二	一二・三六	六・五八	四五・八〇	三〇・六四	三・七一	四・六五

(備考) 一枚は二十八蛾。主要養蠶地方とは、埼玉、群馬、茨城、福島、山形、長野、山梨、岐阜、愛知、靜岡の十縣である。

いま、養蠶業の經營に、何故に斯樣の差異が起つたかと云ふに、主要養蠶地方に於ては、養蠶業が益々本業化されて行く結果、一人の勞力を以つて、最も多くの收益を擧げることを目標にして養蠶が行はれる傾向が大となつた。さうなると、これ迄の副業心理に於ては、出來るだけの養蠶に念を入れて、一枚の蠶種から、出來るだけ澤山の繭を採らうと云ふ風であつたが、今度は、一枚の蠶種から收繭せられる高は少々減少してもかまはない。一人の勞力で出來るだけ多くの養蠶を行ひ、結局、一人の勞力に對する收益を最大にしようとする考へ方になつた。この結果、元來ならば主要養蠶地方の方が、養蠶技術の進步してゐる筈であるにも拘らず、前記の如く、蠶種一枚當りの收繭高に於て却つて「其他地方」に劣り、一見、其他地方の方が養蠶技術に進步してゐるかの如き反對現象を起すことゝなり、その代りに、一戸當りの收繭高に於て、主要養蠶地方の方が遙かに「其他地方」に優るに至つたのである。

斯くの如く、副業が本業化して行くことは、(それは單に養蠶のみに限らず、その他の副業に於てもさうであるが) 云ふまでもなく、我が農業經濟が、耕作本位の農業から、牧畜(蠶養も或る意味の牧畜である)や、工業やを同位地に組合せた、耕牧又は耕工乃至は耕牧工交織の農業經濟に進化しつゝある。最も注目に値する農業經濟に於ける內部革命の進行しつゝあることを語るものであつて、我が農業經濟の前途の發展樣式を研究するものゝ看過してはならない事柄であると思ふ。

(五) 我が農業經濟の辿りつゝある甦生の新方向

我が農業經濟の行詰るや、農業それ自身の裡に、之を打開せんとする新たなる運動の起りつゝあることは、以上述べたる所に於て、その一端を已に或る點までは明示もし、暗示もして來たのであるが、茲には、更に、我が農業經濟の現に辿りつゝある斯様な運動の方向にして、以上に漏れたる所を一つに纏めて、我が農業經濟の現に開拓しつゝ進路を改めて暗示することにし、併せて、之によつてこの論文を結ぶことにする。

(五)ノ一 地主及資本家階級の搾取除去の傾向

いま、我が農業經濟の行詰打開策として、現に試みられてゐる運動の中、最も根本的で最も社會の注目を惹いてゐるものは、小作人が地主の搾取を出來るだけ除去せんとする運動である。所謂、小作爭議の頻發と農民組合運動の勃興の基調は之れである。

元來、地主が小作料を徴收し、今日の社會的地位を占めるに至つたわけは之を一言に砕いて云へば、その初め、地主が農村進歩の中心勢力として自ら鋤鍬をとつて農事の改良發達に努力し、小作人より徴收したる小作料も亦、地主の奢侈に徒費せられること少く、專ら農事の進歩開發に利用せられたからである。然るに、斯様に農業經濟の進歩發達上、地主が大なる役目を演じたる時代は已に去つて、今日に於ては、地主の多くは、農業は一切小作人委せにして、自らは少しも農業に與はらざるのみならず、小作料の殆んど全部は奢侈な生活に濫費せられるか、又は他の投機に徒消せられて、農業の進歩開發と云ふが如きことは地主の頭から、地主の財布から、全く忘れられ去つたのである。このことは、已に他の側面から(三)に於て詳述せる所である。

斯様のわけで、昔は、農業上重大な役目を演じてゐた地主が、今日に於ては、農業經濟の上に何等の役目をも務めないのみならず、その奢侈な生活を賄ふことに濫用せられてゐる小作料の徴收のために却つて、農業經濟上の巨大な障害となるに至つた。現に、今日に於ては、いま突速、我が農業經濟から地主が全く無くなるとするも、我が農業は些の不便も困難もなく、却つて、地主と云ふ負擔のなくなることのために、農業經濟は逆に繁榮する事情に在る。それほど農業經濟に於ける地主と云ふ機關の作用は社會的に退化して、宛も人體に於ける盲腸の如

きものに墮し去つたのである。

玆に於て、我が農業經濟の一度び行詰るや、それの打開策として、一番先に槍玉に擧つたのが、有害無益の地主に對する整理運動であつて、即ち、小作料低減の要求がその運動の樣式である。之を喩へば、一の工業會社が行詰つて、整理の必要の起るや、一番先に整理の斧鉞が、何等の働きのない機關に來ると少しも異る所はない。無論、さうした方向に、農民の頭が向いたと云ふには、さうした行動を理論づける色々の思想が手傳つたことは之を否み得ないが、しかし、さうした思想が、枯草に火をつけたるが如く燃え擴つたわけは、已に地主の地位が、上述の如く退化し、枯れ上つて、マッチ一本あれば野原全體を火と化し得る素地が出來上つてゐたからだ。小作爭議の頻發を「思想の惡化」「惡思想の宣傳」等に歸するが如きは、本末を轉倒するも甚しいと云はねばならぬ。

所で、行詰れる農業經濟の打開策として地主の搾取を輕減乃至撤去せんとする運動は、如何なる方法に訴へてゐるかと云ふに、

一、小作爭議、農民組合運動等の力によつて、直接小作料の低減を要求するもの、

二、小作權を確立することによつて、地主の耕地に對する所有權を制限せんとする要求、（その方法としては或は政治運動によつて立法に訴へ、或は組合運動によつて直接行動に訴へてゐる）

三、地主に對する租稅を特に重課して、間接に地主の搾取を吐出させんとするもの、

等であつて、この外、主張としては、土地の國有等が叫ばれてゐるが、未だ實行期には熟してゐないやうである。

農業は地主の外、交換經濟となるに及んで、更に商工資本家からも搾取を受けてゐることは前にも述べた通りである。從つて、行詰れる農業經濟の打開策として、地主の搾取を除去せんとする運動の起れると同じく、商工資本家の搾取をも除去せんとする運動の旺んに起るは之亦自然である。いま、その重なるものを見るに、（一）は農家自ら産業組合の活動に依らんとするものと、（二）は政治手段に訴へんとするものとである。先づ、（一）の産業組合に依らんとするものとしては、（イ）組合による直接の販賣及購入、（ロ）農産原料の組合による加工及びその販賣、の如き方法に訴へられ、現に各方面に於て少からぬ發達を示しつゝある。轉じて（二）の政治手段に訴へんとするものには、（イ）米の專賣、（ロ）肥料の公營の要求等がその重なるものである。

（五）ノ二　農業經濟に於ける勞力評價の向上傾向

これ迄の我が農業經濟に於て、特に注目に値することは、農家がその勞力を、採算なしに、單に傳統に從つて、無暗に過勞しながら、結果に於て却つて勞力を濫費し粗末に扱つてゐたことであつた。然るに、一方には彼等の生活程度漸く向上し、他方には我が農業經濟漸く行詰つて、生活困難の加重し來るや、農家の勞力利用に對する打算は甚しく鋭敏となり、これにつれて、我が農業經營の內部に少からぬ變化を齎らすに至つた。

その一端は已に前節の三に於て、農家の副業に對する態度が、剩つた勞力を小遣とりに利用するのだと云ふが如き粗笨の考へから、如何なる經營が最も一人當りの勞力に對し報酬が最大であるかと云ふ、本業としての綿密なる打算に移りつゝある事實によつて示した所であるが、この傾向は又、舊來の農家の本業である耕作についても之を認めることが出來る。その具體的な證據は、農家一戸當りの耕作反別が、漸次に増加しつゝあることであつて、例へば、第七表の如く、北海道を除く內地のみに就いて見れば、農家一戸當りの耕作反別は、明治四十一年には九反五畝七分であつたが、大正二年には九反七畝八分に増し、十二年には九反九畝となつてゐる。更に北海道を含んだ全國のものについて見るに、同じ期間に、これ〳〵一町一畝七分、一町六畝四分、一町一反一畝に増加してゐる。

（七）農家一戸當り耕地反別累年表

年次	北海道を除ける內地 農家戸數	耕地面積（町）	農家一戸當り耕地反別（町）	北海道を含む全國 農家戸數	耕地面積（町）	農家一戸當り耕地反別（町）
明治四一	五、二六九、三四四	五、〇四二、七四八	〇・九五七	五、四〇八、三六三	五、五〇四、三三五	一・〇一七
四二	五、二六二、〇七九	五、一〇八、六三八	〇・九七〇	五、四〇九、四九九	五、六二六、六二七	一・〇四〇
四三	五、二六五、五六〇	五、〇七四、六二八	〇・九七七	五、四一六、九五七	五、六五二、六六二	一・〇四五
四四	五、二六五、七四八	五、〇五二、一七七	〇・九六四	五、四一九、九九二	五、六九六、九〇五	一・〇五二
大正一	五、二七七、七〇七	五、一〇一、六〇〇	〇・九六七	五、四三八、〇五一	五、七一九、一一〇	一・〇五一
二	五、二七九、三八七	五、一六三、七八三	〇・九七八	五、四四三、二一九	五、七九三、八〇八	一・〇六四
三	五、二八六、三七五	五、一六一、九一九	〇・九七六	五、四五六、二三一	五、八一五、六九五	一・〇六五
四	五、二七七、九三八	五、一七三、八九一	〇・九八一	五、四五一、一八九	五、八五九、一七〇	一・〇七四
五	五、二八〇、七四五	五、一八五、二五二	〇・九八二	五、四五七、七九三	五、八九六、四七六	一・〇八〇
六	五、二八二、六〇四	五、二〇六、三三七	〇・九八五	五、四六六、三六一	五、九五三、八七五	一・〇八九
七	五、二九一、四五一	五、二三一、九〇四	〇・九八九	五、四七六、七八四	六、〇三七、〇〇八	一・一〇三
八	五、二九三、九三八	五、二五九、七七一	〇・九九三	五、四八一、一八七	六、〇七一、八八九	一・一〇七
九	五、二九七、七九七	五、二四五、二〇六	〇・九九〇	五、四八四、五六三	六、〇八四、三七六	一・一〇九
一〇	五、二七五、五〇九	五、二四三、三三九	〇・九九四	五、四五五、六八一	六、〇九七、九三六	一・一一七
一一	五、二六三、〇五〇	五、二三七、三六〇	〇・九九五	五、四三九、四〇九	六、〇九〇、三九四	一・一一九
一二	五、二六六、四九一	五、二二二、五七三	〇・九九〇	五、四四〇、〇三〇	六、〇五九、〇三三	一・一一〇

元來ならば、人口は増加して過剩の傾向にあり、しかも耕地

の開墾は之に伴はないのが日本の現狀であるから、農家一戸當りの耕地は減少すべき筈であつても、決して增加すべきわけではない。しかも、尙ほ、以上の如く一戸當りの耕地の增加しつつあるわけは、思ふに耕作農業そのものが、著しく採算的になり、その結果、不引合のものは他に轉業し、農事に專業するものは、その全勞力を最も有利に利用し得る點まで、耕地を擴げんとしつゝあるからであらう。去り乍ら、斯く、一戸當りの耕作地は以上の如く漸次增加しつゝありとは雖、一戸當り一町足らずでは尙ほ余りに過少である。この點から云へば、今後尙ほ一戸當りの耕地は今日の尠くとも數倍に增加せねばならないのであるが、しかし、斯樣な趨勢が果して實現し得るか否かは、農業以外の我が產業が今後幾何の人口を吸收し得るか否かに主として懸る問題であるが、今の處、それに大した望を繫ぐことは出來ない。斯樣のわけで、農家一戸當りの耕地の增加の傾向は、今後、いよ〱農家の痛感し來る點であるに違ひないが、しかし、それが何處まで實現せられ得るかは多大の疑問に掩はれてゐる。が、兎にも角にも、農家をして、一戸當りの耕地面積の擴大の必要を認めしむるに至つた自覺そのものは、若し、耕地の增大が不可能となれば、之に代る他の方法に、その解決を求めざれば止まないであらう。玆に其他の方法とは、已に前節三の副業の本業化の傾向に於て述べたるが如く、農業經濟そのものを農牧、農工、又は農牧工業の組合せたるものに改造して、耕作以外に、本業的に勞力の利用を最も有利にすることであらう。

已に斯樣に耕作以外に、本業的に農家の勞力を有利に利用し得る方途がありとすれば、次いで起る必然の傾向は、耕作に費やす勞力を出來るだけ節約して、之を他に有利に本業的に利用せんとする運動である。云ふ意味は、農業勞働に對する器械の應用である。事實、農業勞力に對する評價の向上するや、これ迄、旺んに奬勵せられながら、實現することの困難であつた農業機械の利用は、近來極めて旺んである。

思ふに、我が農業經濟今日の行詰を打開する最も有力な方法の一つは、以上實際の推移が敎へる如く、農家の勞力を、傳統的な農產と耕作法とから解放して、科學と器械との利用を十分に行ひ、斯くして効率の大となつた勞力を、最有利な產業に最も有利な方法で本業的に振向けることを極力促進することであらう。この點から云ふて、我が農業政策が依然傳統的に米作本位に固執してゐることは此際最も反省すべきことであると思ふ。(附記、この論文は、いま私が、日本の經濟全體に亘つてその實相の解剖を試みんとしてゐる計畫の中の一つをなすものである。」

近代政治闘爭に於ける言論の說得過程の社會心理的考察

板倉進

一 政治的言論

民衆の勢力の增進と丶もに、政戰上の武器としての言論の重要性は愈々加はりつゝある。第五十議會を通過した新選擧法は、買收、脅迫、その他の腐敗的手段に對して一層嚴重な罰則を規定してゐる上、明かに、所謂「戶別訪問」並びに之に類似の如何はしき運動方法に關する禁止條項を設けて、選擧運動は專ら、演說、文書、圖畫等に依る公正な言論戰に依るべき原則を宣明してゐる。この原則が實際に於て果してどの程度まで維持されるものであらうかは、無論非常に大な疑問であらう。が併し、「曲りなり」にも普通選擧法と呼ばれてゐる新法に依て、舊法による三百萬の選擧人の數が、兎も角一躍千萬臺に激增される結果は、從來或は公然に、或は隱密に行はれてゐた所の、言論以外の種々の惡辣な選擧運動の方法に依て投票を贏得るといふことは、もし、猶ほその餘地が存し得るとしても、實際には相當に困難を增すことになるであらう、といふことは甚だ明かである。單に選擧人の數の增大に關してばかりではなく、亦選擧人の質の上に於ても、從來からの有權者と、新法に因て新たに選擧權を獲得すべき前者の倍餘に相當する大衆との間には、根本的に極めて重大な相違が存することが有理に考へられる。我國の現狀の下に於ては、縱し全無產階級の人々が總てその當然なる階級意識に充分に眼覺め、且つ彼等の組織を完成してゐると言ひ得られるには、尚ほ若干の距離があるにもせよ、——また縱し彼等が議會を通じて合法的に其の階級的利害を表現しようといふ運動、即ち全無產階級政黨へ大同團結しようとする運動が、最早その萌芽以上に進んでゐるといふことすら、多少

の躊躇なしには主張し得られないにもせよ、――さうしたことのすべてが、餘り遠くない將來に於て押しも押されもせぬ事實として現れるべき社會的必然の道程上に在るといふことは、現在に於ても安全に言ひ得られるのである。もし然うなつた曉に於ては、從來のブルジョア候補者が其の卑劣な、奸惡な手段を弄して己れの爲めに投票を集め得る餘地は、投票者の大多數を占めるべき無產階級の間に之を見出すことが、次第に困難になるであらう。

その時に當て尙ほ、無產者は金力の誘惑に對しては脆い者であるから……といふやうなことを正氣で懸念する者があらうとは考へられない。斯樣な臆測を下すことは、今後當然增進すべきものと豫想され得る無產大衆の階級的自覺とは、本質的に相容れない沙汰である。或は亦、無產階級自身が多衆の勢力に賴らうとする誘惑に陷りはしまいかなどゝいふ杞憂も、組織された無產階級にとつては一顧の價値もない笑草である。少くとも、議會主義、合法主義を排して直接行動主義一點張りで押通さうとする、革命的社會主義の惡夢に酩醉してゐる極左的急進分子が今後の社會運動の主流を支配する勢力とならない限り、却つて反動的、保守的な舊政治的勢力の側にこそ其の惧れがあるものといふべきである。我國の無產階級運動が數年前の直接行動主義から、一轉換を遂げて、次第に議會運動の方向へ動きつゝあるのは、何人も之を疑ふことの出來ないほど顯著な眼前の大勢ではないか。

選擧運動に於て、直接間接に金力を以て投票を買收したり、暴行脅迫を用ひて投票を強制したり、或は私的情實に據て投票者の良心を麻痺せしめたりすることが不正である、といふことは改めて言ふまでもないことである。扨てしかし乍ら、演說、文書、圖畫等を廣義の言論と解して、之に依て選擧民の心意に訴へ、其の投票を己れに吸收しようといふ運動方法が、右に反して如何なる場合にも公正なものに限つてゐるか？と言はゞ、必ずしも言下に『然り！』と即答し得られない根據も亦同時に存してゐるのである。

私は今演說や文書と併せて、新選擧法に所謂「圖畫」をも「廣義の言論」の中に無雜作に引括めて了つたが、圖畫といつても此こでは無論何等かの「意味」を表すものと考へられるのであるから、繪畫を言論の仲間入りさせたからといつて、さう大して亂暴な沙汰ではないかもしれない。が併し、繪畫と言論とでは、何となく別種の二者であるやうな氣持ちも一方ではするのである。言論と云へば、兎に角何等かの推理過程を表してゐる

もの」やうに感ぜられるらしいのに反して、繪畫と聞くと、數個の繪畫が系統的に配列されて、一種の推理的過程を構成するといふやうな場合も考へられないことはないが、多くは候補者の肖像だとか、宣傳のポスターだとか、個々孤立的な印象を觀者に與へるにすぎないのが、最も普通に起つて來る場合である。從つて最も普通の場合に於ては、或る特定の繪畫に由つて一度觀者の內心に生ぜしめられた印象は、たゞそれだけのものとして終り、尙ほその上に屢々、それがやがて意識の表面から永久に消えて行きさへもするのである。がしかし、時としては、或る特定の繪畫が觀者の意識の裡に於て、それからそれへと無數の觀念聯合を次々に派生せしめて行き、その進展の經路は亦或る程度まで豫見を許すだけの蓋然性を具へたものであるやうな場合も、決して絕無だといふ譯ではない。從てまた巧みに計劃された繪畫は、それに由て觀者の內心に生起すべき一系の觀念聯合の出發點に於て、其の進路を決定することを得て、而して所期の目的を達成することに或る程度までは成功し得るものである。けれども其の觀念聯合たるや、多く情緒的の、寧ろ極めて漫然としたものであつて、之を因果關係と稱し得る程度には達してゐない、若しくば因果關係によつては結合されてゐない、所のものであつて、其の進展の過程を推理の過程と呼ぶことは許されないものである。そこにまた、繪畫と言論の本質的な、若しくは重大な程度上の、相違が存すると見られる理由も全然ない譯ではない。

だが、それは兎も角として、實際上に於ては、選擧運動に用ひられる言論の——ばかりでなく一般に、政治上、社會上、乃至宗教上等、多衆に對して訴へられる場合の言說の——大概は、その論理的價値に於て、繪看板や廣告ビラと大した逕庭を示さないのを常とするものである。縱しまた、何等かの言論が、それ自體としては如何に論理的なものであるとしても、それが聽衆の內心に結ぶ效果に於ては、必ずしも常に合理的であるとは限られず、等しく繪畫の與へる情緒的印象と類を同じくするもので、原始的な衝動とか本能とか、乃至漫然とした觀念聯合とか、無意識的若しくは半意識的な心理の作用に過ぎぬ場合が多いものである。從て、論理的な言說が聽衆に依て亦合理的に受取られないことの起る半面には、嚴密な推理過程を踏まない言論が、聽衆の或る特殊の心理的機構に投合することに依て、却て如何にも尤もらしく容認せられ、其の手段的價値を大にしてゐる場合が屢々であり得るのである。「聽衆の心を掴む」辯士は能く成功するのである。そこに言論の說得過程を科學的に——若しくは問題が問題だけに、社會心理的に——精密に檢

討することを必要とする根據が見出されるのである。

二　説得の方式

言論は無論政治上の武器として正當なものの一つであり得るといふことに就ては疑ない所であらう。併し乍ら、それが常に無條件的に然うであるとは、必ずしも常に云ひ得られるとは限らない。言論が公正なものであるが爲めには、それ相當の條件を必要とするものである。

此こに私は言論の合理性に就て考察を試み度いとおもふのである。言論の合理性、と云つても甚だ漠然たるものであるが、言論それ自體の合理性に關しては暫く之を措き、言論の進展の次序が、亦聽衆の心理の進展の過程に依て正しく反映され、追隨されてゐるか否か、即ち言論と聽衆との關係、換言すれば、言論の「説得過程」の合理性、——この一點を特に檢討してみようといふのが、本篇の目的なのである。

一般に多衆に向て演説するといふやうな場合は、教室で學生に講義をしてゐるといふやうな場合とは大に趣きを異にするものである。ところが、後者の場合でさへ曾て學生であつた頃の私自身の經驗では、講義の冷やかな論理の進行を忠實に追ふことよりも、寧ろ時折講義の中に挿入される餘談や諧謔等の方へ、より多く私の注意の焦點を奪はれることの方が屢々であつた。隨て放課後の私の記憶に於ては、其の爲めに講義そのものの脈絡等は寸斷されて了つて、所々特に印象的な片言隻句が、ど孤立的に殘つてゐるに過ぎぬ。講義の内容とか論理上の價値とかよりも、講師のユーモアやウイットの故に其の講義に愛着する、もつとひどくなると、講師の人物に對する好惡に由て講義そのものゝ評價を試みようといふ危險にさへ陷らうとする、半意識的な誘惑に屢々戰慄したものであつた。私は無論、私(並びに私と同傾向の少數の學友連)の此の經驗を以て、善良な模範學生——それは多くの點で人間離れのしてゐるものであるが——に迷惑な言ひがゝりをつけようとしてゐるのではない。が、しかし私は、私達の右の經驗は、文部省とか學校當局などゞ創造した概念的學生を除ては、案外に普遍性に富んだものだといふことが、必ずしも誇張的でもなければ、見當違ひでもないと考へるのである。それは兎も角のこととして講義とか學術講演とか、所謂「講壇」から放送せられる所の言説は、聽講者の理智的論理的心理過程に對して之を訴へてゐるものであり、もしくは、少くとも然うであるべき筈のものとされてゐるといふことだけは、拒めない事實である。それにも拘らず、その聽者の側に於ては、右に例示したやうな心理反應がそれに依つて

喚起されることは、少くとも決して稀れに起る現象ではないのである。

だとすると、講壇上の言論以外の、演壇とか街頭とかから多衆の聽者に向つて試みられる言論に於て、その說得過程上の不合理的方面が極度に强調されるのは、先づ第一段には、別に不思議とすべきところはないとされるのが、當然だといへるのである。もとより演壇若しくは街頭の言論にしても、聽衆の理智的論理的心理過程に訴へるものと一般に信じられてゐることは事實だが、しかしそれは唯さう『信じられ』てゐる——しかも漠然と無意識的にといふまでのものに過ぎないのであつて、實は大抵の場合、それから甚だ遠いのを普通とするものである。

演壇や街頭の言論は、學術上の言說等と異つて、多く直接實踐的の目的を持つたものであつて、殊に端的に聽衆の意志決定に交渉するものである。意志の決定は必ずしも常に熟慮的な理智的過程に據つてゐるものではない。寧ろ無意識的もしくは半意識的な衝動や本能や情緒的な信念等が、一層直接的な、一層强大な勢力を意志決定の上に及ぼすものである。勿論これは、或る意志決定が現に行はれる一定の時點を限て言つて居るのであつて其の無意識的若しくは半意識的な意志決定の諸心理的要素が形成されるに至るまでの過程に就て論ずることは、また問題が別になる。が、特に言論の說得過程に伴はれる意志決定の過程そのものだけを考察に上せてゐる私の今の場合には、その點にまで觸れねばならぬ必要もあるまいと考へるから、茲にはそれを省略する。

で、或る一定の時點を限て、そこに行はれる意志決定の過程に就て云へば、理智的な推理や意識的な觀察の結果——知識——は、そのまゝでは直接に行爲の動因となり得ない、即ち意志に對する命令權を有しないものである。それは信念に對して材料、或は基底を供することによつて、たゞ間接にのみ意志決定上に影響を及ぼし得るに過ぎない。而も斯ういふ理智的な信念こそは、無意識的な迷信から區別されるべき意識的の正信であるのだが、その鞏固の度に於ては中々情緒的の盲信を凌駕することは困難なものである。此こに於て問題は、此の意識的な正しい信念を產出しようと試みる所の、間接的な合理的迂路によるべきか、或は直接に無意識的な衝動とか情緒的信念とかを刺戟鼓舞することによつて、即座的の效果を期待すべきか、說得者の意志を被說得者の內心に移植しようとする目的に對する、手段の便宜に關するものとなる。

縁日商人とか夜店商人とかの路傍の雄辯が、行人の步を止め得ることが續く限りは、亦言論の說得過程がその不合理性で

脱することの出來ないものだといふことが、そこに或る程度に證明されてゐるものと見ることが出來る。政談演説會などといふものでも、それに一度出席したことのある人は、自身のその會衆の一構成員としての經驗を正直に反省してみることによつて、露店商人の快舌に釣り込まれる顧客を嗤笑する資格を必ずしも充分に具有しない所の自分自身を發見することが出來るであらう。説得過程の考察は半面に於ては一種の「聽衆心理學」である。形式論理學は此こでは無用の學といつてよい。暫く之を學校教師と學生の群に預けておくことにしよう。

ル・ボンは「説得の方式(grammaire)」の根本要素として左の四階梯を擧げてゐる。即ち、第一、聽衆に暗示を與へ之を威壓する所の魅力(prestige)、第二、論議を免れる所の無證明の斷定(affirmation)、第三、斷定された事柄をば確乎たるものとして容認せしめる所の反覆(repetition)、第四、最も強力な個人的確信をも急速に最も脆弱なものに化する所の心的傳染(Contagion mentale)(Le Bon, La psychologie politique, p. 136)の四要素が之である

三　魅力

右に列擧したル・ボンの所謂説得の方式に於ける諸要素は、衝動とか情緒とか、換言すれば人間の行動の習慣的動機に對してのみ訴へる所のものである。すなはち、それは知識を確立しようといふことの上にではなく、信念を創設しようとすることの上に適用されるものなのである。知識と信念とは全然別個の二者である。例令、此の兩者は如何なる場合に於ても其の間に少しも交渉を有し得ぬ所の、全く無關係なものであるてふことは云ひ得ぬまでも、實用的には――殊に唯今の考察が關する限りに於ては、信念の大部分、恐らく其の殆ど全部、は知識以外の機緣によつて成立するものである。人は凡て容易に信念を獲得するものである。而も、其の知識の根柢の上に立つといふものは鮮少である。説得の方式は、乃ち、情緒や衝動をその根基として社會心理的に形成される所の輿論の創設に對して、乃至信念の創設に對して、役立つのみである。此の輿論乃至信念からして、無數の吾々の行動の過半が派生する。之を産む所の者は能く吾等の主人公となるのである。

聽衆の理智に對してのみ訴へる所の辯士は、馬鹿正直な論理學者が想像するやうに、人を信ぜしめることも、其の耳を傾けしめることも決して出來るものではないのである。教室に於てさへも、無味乾燥な論理の連續は、平凡な非模範的學生の大部分をして、動ともすれば倦怠に陥らしめがちの危險性に富んで

なるものであることは、既にこれを述べた。更らにまた、所謂大向ふを唸らせる所の人氣は何によつて生ずるか？ 其の由て來る所は聽衆自身に於ても之を自覺しない。能く聽衆の心を摑む者は、能く聽衆の無意識界を支配する者である。辯士の態度とか、風貌とか、音聲とか、又感動的な語調とか、印象的な文句とかは、聽衆の無意識的乃至半意識的な衝動とか、本能とか、情緒とかを刺戟して、此こに人と言葉との持つ神秘的な魅力を生ずるのである。

或る場合には、說得者の人物そのものが、言葉以上に聽衆に訴へる所が多いものである。此こでは如何に之を言ふかは問題でない。何人が之を言ふかゞ重大なのである。人には所謂持つて生れた徳得で、たゞ何となく對者に好感を施すとか、親愛な情を懷かせるとか、といふものがある。又その反對も無論存在する。斯ういふ先天的、個人的な魅力は、非常に多種多樣な範圍と程度に亘て存在して居り、此こに之を一般化し、法則化することは、ちよつと私などの手には餘る。或は全然科學的考察の對象とはなり難いものかもしれない。例へば同じ微笑と云つても、一々個性を持つてゐる樣に思はれるのである。量的な差等といふよりは寧ろ質的な種別として見られるやうな、曖昧模糊とした筋肉の微動間の相違は、各々その人に獨得な微笑の「型」を成してゐる。單に顏面的の局部的運動のみに止らず、顏全體の容貌とか、更に大なる全身的な姿態とか、習慣的に定つて其の微笑を洩すといふ場合とか機會とかの外部的な事情とか、種々の隨伴的な諸條件が、その人〱の「型」の特殊性を助けてゐる、といつた工合で、ちよつと捕捉に困難である。その他、ちよつとした癖などが人を特徴づけ、且つ非常な魅力となつてゐる場合は多々ある。兎に角、斯ういふ個人的な特殊な魅力が、所謂雄辯の重要な一要素を成してゐる場合があるといふことは云ふまでもない。

右の樣な先天的——後天的修練の結果、即ち人爲的技巧である場合も無論考へ得られるが、それが魅力（prestige）といふまでになつてゐるのは、自然的のもの、生得のものに多い——な個人的魅力の外に、爵位勳等、官職公職私的職業、社會上學藝上その他の稱號とか肩書とか、それ等の外部的象徵物とか、その人の名聲とか定評とか、或は生活の環境とか樣式とか、その全部を列擧するまでにもあたるまいが、斯ういふ後天的、外部的に人に附隨してゐるものゝ魅力といふものを考へることが出來よう。

この種の魅力の根柢となつてゐるものは、時代とゝもに進化、少くとも變遷してきてはゐる。今日の少年は日露戰捷時代の

少年達の樣に、馬上の將校の服裝や、其の胸間の勳章などに多大な魅力を感ずることはないであらう。上陸した海軍士官の短劍や半マント姿が、一時は彼女等の先輩の憧憬の的であつたことなどを語つたなら、當今の女學生は却て噴飯するかもしれない。實際、宮内官の儀服や裁判官の法服等の樣に、例令、吾黨内閣の餘慶によつて首尾よく高官の位を贏得て、無理算段した金ピカの大禮服で旗日に風を切る、愛すべき野人が存しないわけではないにしても、そのこともともに、一の歷史的記念として、今日では全く過去の時代の遺物として、滑稽感以外大した感興を喚り得なくなつてゐるものもある。

と云つて、併しながら、それの同類項が總て消え去つたか、若しくは消え去らうとしつゝあるかといへば、個々の魅力は舊い時代とゝもに滅びて逝くが、全體の「種」としては斷じて死滅しない。陳いものゝ後には復新たなる魅力が生れて、新しい人心を蠱惑しつゝある。元帥大臣の肩書が今日の大衆に何の感興を與へもしないものであるかもしれないが、博士教授の肩書は、少くとも小さな雜誌社や出版書肆等には、今日でも相當歡迎されるものらしい。誇大な廣告を負うて世に出たが故に、大書肆に依て出版されたが故に、能く大著たり、名篇たるの世評をば贏得るであらう。博覽達識の眞價を發揮してゐる場合も元より有らうけれども、本質的には殆ど價値の少ない單なる衒學、或は虛しき篤學の表明に過ぎないやうな「博引傍證」は、能く空疎な内容をして、所謂「學術的」な良著であるといふ印象を、讀者に與へることを得しめるであらう。又既得の人氣や名聲は、その由來とは獨立してさへ、大な魅力の根源となつてゐる。或る大なる勞働爭議に關係して急に世間に名を賣るに至つた人が、それに無關係な小說書をそれ以上賣上げた。或る有名な無政府主義者がファーブルの「昆蟲記」を飜譯して相當の賣行を得た。其の變死の後、實篤な某學究の手に該書の續卷が繼承飜譯され、而も其の譯筆は遙かに前者を凌ぐものがあるに係らず、初卷だけ依然として善く賣れ、後者の續卷の方は少しも賣れない。出版店主の慰藉に應へて、洒落な新譯者が「それぢや、日本橋の上から釣でも垂れませうか」と笑つたとか。何事で有名にならうとも構はぬ。戀愛事件で大學教授を棒に振れば、高等數學どころか初等數學さへ忘却して了つた門外漢に、難解な理論物理學書を購はせることが出來ようといふものである。それは兎も角として、政黨屋の政談演說なんどてんで聽くことを恥辱に心得るらしい所謂「文化人」等でも、知名な學者とか「新人」とかの言說に對しては、遂ひうつかりと沒批判的に聽從する危險がある。

此等の魅力の個々のものに就ては、その歴史的起源は或は計畫的のものもあり、亦單なる偶然に過ぎぬ場合もある。また、或る程度に於て合理的な事由によつて發生してゐるといへる樣なものも、中には無論存することであらう。併しながら、一旦發生した以上は、その起源には必ずしも拘ることなく、それだけで獨立した一存在となり、或る共通性を具した一般的の一事實となるのである。斯る魅力は一種の非合理的の情緒的な判斷形式の誘因となる所のものである。すなはち、先づ人を判じて、而して後に間接に其の言を斷じようといふ筆法である。此の筆法が常に必ずしも不合理なものであり得ないことは無論である。けれども、此の場合之を言ふ者の魅力が何等の論理的標準となり得るものでないことも亦明白である。にも係らず、實際に於ては、それが便宜なるが故に、例へば、花婿の人格性行を骨折つて調査検討する面到を省くことを得て、「學士樣なら娘をやる」ことに極めた方が手取早く事が決着するが故に、その人の具有する魅力が標準となり得る所の判斷の一形式が存在して居るのである。魅力が刺戟誘發してゐる所の本能とか衝動とか情緒的觀念聯合とかは、即ち魅力が之に訴へてゐる所の無意識乃至半意識界は、其の魅力を具してゐる人の言説を正當とする所の暗示の感受性が極めて大いものである。極端に之を言へば、未だ聞かない先に其の言を信じてゐるのである。政治者の人物の魅力は、其の言論の無條件的肯定、無批判的認容の心的態度を、先決的に聽衆のうちに用意せしめてゐるのである。

従て、斯く準備された聽衆に對する言論には、無味乾燥な論理は無用である。全體の因果的脈絡よりも、部分的、局所的な言葉の魅力の方が、聽衆の心を更に強く支配するのである。井然とした理路は、もし能く聽衆の理解を招來し得ることがあつても、大概その場限りのもので、深切なる感興を惹起し得るものではない。演説會場の外にまで印象を遺す所のものは、却て散亂した斷片的な文句である。「西にレーニンあり、東に原敬あり」などゝ見得を切つた、その名文句（？）だけが生殘つて、議論の殘りの部分は總て忘却の大海中に沈んで行くのである。更に後には、その言葉が發せられた時機や、言つた人までも、世人の記憶から失はれる日もくることであらう。

言葉の内容とか論理的價値とかから獨立して、言葉そのものゝ「勢ひ」とか「調子」とかといつたものが、大な魅力を持つ。「板垣死すとも自由は死せず」とか、「自由か、然らずんば死を」とか、「萬國のプロレタリーよ、團結せよ」とか、「祖國を救へ」とか、「全無産階級」だとか、「近代人」だとか、「科學的」だとか「歴史的必然」だとか等々といふ語句は、何とはなしに

或る人々に對して快い響きを持つのである。一部分確かにその語句の意義の聯想に基くものであるかもしれないけれども、而もそれは――その歴史的起原に於ては兎に角――明白に情緒的な魅惑に屬するものである。たゞ何となく調子がよく感受されるといふのである。

四　説得の限界

私は、以上に掲げたところの、説得過程に於ける魅力の役割に關する私の論述に於て、説得者が聽衆の上に絶對權を以て臨む專制君主のやうなものであるとの印象を與へはしなかつたかを虞れる。しかもそれは、唯楯の半面を示したものに過ぎないものである。それは恰度、群衆心理の解説の場合に屢々引合ひに出される催眠術の實演に於て、施術者が被術者の上に持つ支配力の能働的作用の一面を强調したやうなものである。が、事實上に於て、催眠術の施術者が被術者に對して持つ支配力の根源が却て被術者の心的基礎の上におかれてゐるものである通りに、言論の説得過程に於ける、上述の如き魅力の理論的起原――個々の歷史的發生の具體的動因ではなく、その發生を可能ならしめる所の根本原因――にしても、それは却て之を聽衆の心理の上に於て發見するものである。そこに説得の限界が、偶然として確立されてゐる。そしてその點を明かにしておくことは、言論の説得過程の全面の眞相を摑む上に於て、缺くべからざることである。

催眠術の發達がまだ幼稚であつた時代には、その施術者の與へる暗示が、絶對的性質のものだとのやうに考へられてゐた。即ち、暗示の根源は全く施術者の側に存するものと憶斷され、從て施術者の欲する所を何事でも被術者をして行はしめることが可能である。換言すれば、被術者は全然施術者の意志に從て行動する所の單なる機械に過ぎぬものである、といふ風に考へられてゐたのであつた。而して此の憶説を裏切る樣な實驗上の事實は、總て催眠狀態の不完全に歸して説明されてゐた。それ故に、その樣な反對事實は、斯術の進歩とともに當然除去され得べき障碍に過ぎなかつたのである。然るに、その後の催眠現象に關する研究の進歩は、遂に施術者の與へる暗示の效力には一定の限界が存することを發見するに至り、今日では催眠現象に於ける暗示の性質に關して相對的の考が行はれるに至り、從來の舊い絶對的な觀方を全く顚覆して了つたのである。即ち、施術者は、如何に完全な催眠狀態に陷つてゐる所の被術者に對してでも、決して其のおもひ通りに何事でも行はしめることが出來るといふものではない。被術者は自分自身の意志を執行

ずるのであつて、斷じて他人の意志を代行してゐるものではない。而して施術者の與へる暗示に對して、之に從ふべきか從はざるべきか、其の取捨選擇を行ふ自由を被術者に於て留保してゐるものである。すなはち、自己に好都合な、もしくは何うでも差支へのないやうな暗示に對しては之に從ふを常とするが、已れに不利な暗示は決して之を受けることをしない、ものであることが觀察されるのである。外見的に從屬關係が示される所と全く主客顚倒して、暗示の根據は却て被術者の側に之を求められねばならぬのである。

但だ施術者は被術者の行動の動機に干涉し得るのみであつて、被術者の行動そのものに就ては全く無力なものである。被術者は全く自分自身の行動を、自分自身の意志に因て行動してゐるものであるが、其の行動を惹起するに至る機緣をば、之を施術者に對して全く負ふものである。被術者は、例へばスヰッチを切られないモーターの樣なものである。一旦スヰッチが切られて了へば、以後の運轉は敢て他力を俟たないのであるが、何者かに依てスヰッチが切られないうちは、自發的に作用を開始するといふことは出來ないので、それが切られるまでは、何時までも休止の狀態を保つ、といつたやうなものである。其のスヰッチが施術者の暗示に依て切られるまでは全く受動的であるが、一度切られた後の被術者は或る程度まで能他的に動くのである。所で、其のスヰッチを切る手が、普通の精神狀態の下では無數に存するが、催眠狀態の下では之が施術者の與へる所の暗示のみに限定される、即ち、被術者の心的活動の端緒が施術者の暗示に局限され、其の他にも前者の意志活動の機緣となり得るものが無數に存在するにも係らず、後者の暗示のみを殘して、他の一切の環境から前者を遮斷する、從て施術者の暗示に由て開始された心的活動の系列は、一時他の諸系列から分離されて、獨立して意識の表面に浮上り、反對觀念の系列に依て干涉抑制されることが無く、その效果は通常の心理狀態の場合に比して大に高められる、この或る一つの意識の流れが殘りの總ての流れから人爲的に一時分離される現象が、催眠現象と呼ばれてゐるのである。此の限りに於ては、被術者は施術者と相對的な立場に置かれるものである。

聽衆心理――群衆心理の一の適用としてゞあるが――は、一種の催眠心理と見做されることを得べきものである。すなはち、上段に催眠現象に就て試みた敍述は、或る程度に於て、言論の說得過程に於ける說得者と聽衆の間の心理の交涉に就ても、亦妥當するものであることが觀察されるのである。極く概括的に一言すれば、前節に述べた魅力の一效果として一種の催

眠狀態に陷つてゐる所の聽衆は、催眠現象の場合ほどに完全な意識の分離は行はれないまでも、その心的活動の範圍を非常に狹く制限されて居り、その意志活動の動機に於ては全く受動的なものであるけれども、この意志の決定要素は依然として聽衆自身の側に之を保留してゐるものであつて、此の點に於て聽衆は却て說得者に向て能動的に働きかけさへもするので、此こに說得可能の限界が考へられねばならぬのである。

然らば斯樣な聽衆の意志決定の要素となるものは何であるか？それは催眠術に於ける被術者の場合と同樣、矢張り聽衆の內心に存在する所の利害感であることは、經驗事實の觀察から歸納し得られることである。普通「利害感」といへば、意識的な理智的打算を伴ふたものに限る傾向が覗はれるのであるが、之は必ずしも無意識的なものであることを障げないものである。否、寧ろその大部分は無意識乃至半意識界に沈潜してゐるものの方が、通常の狀況に於いては多いのである。吾々の日常生活に於ても、一々意識的な理智的判斷を俟つて其の意志を決定してゐるといふ行爲の數は、無意識的な衝動的乃至習慣的行爲の數に比すれば、殆ど問題にならぬ位少數である。併し後者の場合でも、其の各行爲は意志の決定を缺除してゐるわけではなく、無意識的もしくは半意識的にもせよ、ほんの瞬間的ではあるが、必ず意志の決定作用に依てそれは先行されなければならない。而してその意志が利害感に依て決定されたものであるといふことは、行爲として表れた結果が、一見之を裏切つてゐる例も決して尠くない。

現實の利害とは何等の交涉を有せぬ、若しくは全然相反しさへするやうな、衝動的行爲とか習慣的行爲とかは、一々具體的に實例を擧げる必要がない位に、吾々の經驗の中に極めて普通に見出される事實である。しかし、斯う云ふ種類に屬するものでも、なほ之を發生論的に其の起原に溯つて考察するときは、進化の過去の或る階程に於て、實際の利害と交涉を持つて生れ出た心的反應が、爾後の必要に依て反覆繼起されて固定するに至り、其の必要の已に消滅した後代にまで殘生してゐるものである、と想像され得ない樣なものは一寸發見に困難であるのである。即ち、器官の退化に對比され得べき現象は、矢張り之を觀念に就ても觀察されるのである。個々の具體的場合に於て、實際の利害に對して一々意識的に起された心的反應が、その利害關係の累積に隨て、後には自動的、反射的な習慣となり衝動となつて固定し、無意識界に沈潜するに至り、此等の習慣乃至衝動の集積が、遂に一の「利害感」を形成するやうになつてきたものであるとも考へられるのである。換言すれば、無意識界と

は「利害感」の確立された所の心理狀態である。而して、その利害感は現實の利害關係に對しては必ずしも整理されてゐるものではない。その中には退化した器管の場合と同樣に、既に現在に於ては不用、若しくは有害にさへなつてゐるものも可成り包含されてゐるものである。此こに說得の可能と其の限界が暗示されるわけである。

斯樣な無意識的利害感の決定要素、即ち聽衆の行動の最終的決定要素は、云ふまでもなく物質的經濟的の利害關係である。如何なる雄辯巧舌も、聽衆の內心に一の新たなる利害感を直接に創造し得ることはないものである。但だ、もし被說得者の實際の利害關係と相反するやうなことを說得しようと企てる場合には、現實の利害に對して未整理の儘に殘されてゐる所の、既成の利害感中のあるものを利用して、之を計畫的に刺戟することに依て、聽衆の心理を巧みに操縱することが可能であり、所期の目的を達することに成功し得る餘地はなほ存し得る次第である。如何なる場合に於ても斯樣な既成の利害感を度外視して、之に據ることなしに、別途に由て聽衆を說得しようとする企圖は、總て水泡に歸せねばならぬものである。こゝに於て說得者は一面に於て聽衆を說得しつゝ、他の半面に於ては却て後者の利害感に依て制肘せられつゝあるといふ奇現象を呈するもので、所謂木乃伊取りが木乃伊になる場合も亦あり得ないことではない。言論の說得過程は非創造的過程である。新たに生まれ出でしめる作用ではなく、既に存するものを喚び起す作用である。

斯く言論の說得力の根源は全く聽衆の內心に潜んでゐる。說得者は却て被說得者の利害感に依存するものである。而して其の利害感は說得の現狀以外に於て用意されてゐるのである。それ故に、聽衆心理の無意識界のどこかに巢喰つてゐる利害感に立脚して言へば、ある候補者が政見發表演說會を開催するとき、會衆は彼の政見の開陳を俟たず之に贊同してゐる者と、未だ其の發表を聽かざる先に之に反對してゐる者との二部から成立つてゐるといふことが出來るのであつて、徹頭徹尾白紙の態度でその會に臨み、演說を聽いた後に贊否を決すると言つたやうな連中は、絕無僅有だと言つていいのである。そして、恐らく實際に於ては、斯の種の會合の常として、候補者の黨派に屬してゐるか若しくは其の味方の面々である所の彼の後援者の大部分と、彼の反對派、敵黨である所の妨害者の一部分から成立してゐるやうな場合も屢々あることであらう。實際的な老熟した運動屋連に依て演說會の價値が極く低くふまれてゐるのは、主としてさうした場合の觀察から出發してゐるものである

うした場合には、候補者は自己の所見を開陳するどころか、却て聽衆の意見を强ひられるやうな結果となるのである。從つて、もし他により有利な運動方法が許されるとすれば、言論の政戰上の武器としての效力は極めて微弱なものと見做されるやうになるかも知れないのである。いづれにしても、言論が最も確實な効果を發揮するのは、平常に於ける意識的な理智的な用意の、補助的手段としてのみ利用される場合に於てだといふことは、まづ動かないところだといふことが出來よう。

縱しまた、練達した技巧を用ひて、實際其の利害に反する所に聽衆を說服せしめ得たとしても、說得者は決して聽衆の利害感の最後者の決定力を把持するものに非ざる限り、それは一時的のものであつて到底永續的性質のものではあり得ない。言論が最も有力に利用される場合、而して其の計畫的危險のプロバビリティーが最も大な場合は、聽衆の實際の利害と反對の關係に立つ樣な說得者が、聽衆の利害感を彼自身の利害に牽强することよりは——無論その方法も出來るだけ利用するであらうが、寧ろ彼自身のそれを聽衆の利害感に附會することに依て、說得過程の限界内に在て猶ほ且つ巧みに聽衆の心理を瞞着し了せ、能く聽衆と共同一致の利害關係に立つものであるといふ印象を附植して、先づ己れ自ら聽衆の側に味方たるかの樣に一見せしめて、其の實却て後者を自己の味方に引入れることに成功する場合であらう。之も亦到底永續的なものであるとは云はれないまでも、從來實用上最も大な成功率を示してきてゐるものであつて、最も警戒を用ひられてよい所のものである。フランス大革命に於て、まんまとブルジョアの手先を承つた彼のプロレタリアの失望の如き失望は　此の世界からその跡を絕つことこそ、望ましい限りであるが、今日我邦に於ける既成ブルジョア政黨の看板塗替の奸策の如きすら、例令永久的にではないにしても、或る程度の成功を見ることは決して無いものであらうとは、——從て我邦現下の政治過程の自然的な進運を、即ち無產新興勢力の自然の發展を阻碍することが斷じてあり得ぬものであらうとは、——誰か之を明言することを得よう！

五　斷定、反覆、心的傳染

思想の過渡時代に當て權威を以て斷定するものがあれば、大本教の如きへと雖も人心が歸する。大衆の說得に當て論證の無力であることは、既に反復的に述べた。ここに論理と證明に代る所のものは魅力と暗示である。聽衆の心理に作用してゐるものは、意識的、理智的な推論の過程に非ずして、無意識的、情緒的な觀念聯合の過程である。辯者は單に、聽衆の内心に既に確

立若しくは形成されてある或るものを刺戟することを必要とするに過ぎない。それは、無證明の斷定で充分こと足るのである。聽衆がそれを無條件的に容認するか、しないかは、言論の魅力が聽衆の信頼を充分贏得るか、否かに依存する。更らにまた、斯く斷定された言說を、更に確乎たるものとして、說得の現場の後までも永續させることは反復に依る。「反復」は印象を深刻にする最もポプユラーな手段である。廣告の秘訣は、同一の體裁で屢々之を反覆することに在る。最もポプユラーな商品は斯の如く廣告されたものであることを、吾々の日常の生活經驗の上に、容易に見出し得るであらう。說得者の斷言を聽衆の忘却の深淵から救上げる者は實に反復の效である。議論の脈絡の如きは聽衆にとつては無關心事である。演說の公式は恐らく下の如くであらねばならないであらう。「甲は乙なり。何となれば甲は乙なるが故に。故に甲は乙なり。」演說を聽了つた後で聽衆の印象の上に殘存するものは、「甲は乙なり」てふ結論のみであらう。而もその結論は、當然それに到達した所の推理に依て導れてゐたものであつた筈であつた——但し其の推理は忘れて了つたが——と當然と考へられてゐるのみで、それを辯て聽きはしなかつたのであつた、といふ事實は如何にも考へつかれずに過されることであらう。

一概に聽衆と云つてのけても、之を形成してゐる個々人に就て吟味するときは、必ずしも常に同質的な一團體であるといふことは出來ない。此こに所謂心的傳染 contagion mentale の機構が働出すのである。群衆の間に於ては、信念とか情緒とかいふものは黴菌以上の傳染力を持つのである。一の斷定が屢々反覆されて充分に强力な病源體と成り、忽ちにして聽衆の間に傳染して、之を同病同質のものに化了するのである。而して之は無論聽衆以外にまでも蔓延傳播し得て、所謂宣傳には不可缺の一要素となつてゐるものである。實に此の心的傳染の現像が無くしては、基督教とか、回教とか、佛教とかの大宗教も、決して其の廣汎なる流布を見ることが出來なかつたであらう。或はまた、史上許多の大革命の突發に與つて力となつたものも、實にこのコンタジオンである。人類の文明そのものも亦コンタジオンの存するに據つてゐるものである。

社會現象の上に異常な影響を與へてゐる所の、彼の模倣の現象はコンタジオンの單なる一結果に過ぎない。コンタジオンの現象は廣く動物の社會に亘ても觀察されるのであるが、人類も亦他の諸動物と等しく天性模倣性を有する。此の模倣性は過去に於ける進化史上の或る必要に由て發生して來たものであるか

もしれない。兎に角、大衆を指導する所のものはモデルであつて、理論ではない。アメリカに於ける有閑階級の青年紳士の服飾は、イギリスのプリンス・オヴ・ウェイルスにモデルを有するさうである。それが再轉して、日本のハイカラ紳士は、更にそのヤンキーのお洒落をモデルにして毛布(ケット)の様な洋服を一齊に及ぶのだとか。丸ビルの女は丸ビルの女の一様な型を持つてゐる。下町娘は下町式の、山手の奥さんは山手式の、一見して判明するやうな共通の好尙を示してゐる。東京とか大阪とか、所謂流行の中心點に於けるそれは、更に大都會以外の全國に於ける婦女子の流行のモデルとなる。又、例へば現代の流行と元祿時代のそれとを比較すれば、其處に判然たる類型的差異が認められる。年功の宿屋の番頭は、旅客の地位、身分、職業等を一目に判斷して誤ることがないのである。此等は總てコンタジオンの機構の存することによつて起る所の結果に外ならない。

所謂時代精神といふものも、長期に亘るそれの形成の過程を離れて、單に或る時點に於けるそれの完成の際の樣式だけに就いていへば、少數の指導者の所信が民衆に傳播した結果である。此のモデルとなる少數者の所説は、いふまでもなく民衆の既成の信念と餘り懸隔したものであつてはならない。といふのは、前者の模倣が後者にとつて非常に困難なことゝなるからである。「時代の先覺者は時代に先んずること正に半歩でなければならない。一歩を先んずれば已に進みすぎるものである」とか「大言は俚耳に入らず」とか「天才は時代に容れられない」とかいふのは、這間の消息を穿つたものである。指導者の所信の根據となるものは即ち時代の利害關係であらねばならぬ。之を示教する者は更に指導者の背後にある理智である。而して其の理智は指導者自身のものである場合もあるが、また他者のそれであることをも妨げない。但だその理智の示教は直接に民衆にまで到達すべきものではなく、指導者の説得を通じて始めて通俗化され、民衆の信念となり得るに過ぎないのである。言論の説得過程は斯の如くして間接的に合理的といひ得るものであることが出來る。併し乍ら、言論の行使は常に必ずしも斯く正當に行使されるものとは限らず、却て眞實の利害を隱蔽せんが爲めに、欺瞞的に行使される危險の多いものであることは、既に前節に之を説いた。

六　理智の職能

今日では理智の偏重から招來される所の危險は既に滅びてゐる。所謂主智主義は、少くとも理論の上では既に過去のものに屬してゐる。然し實際上その反動は遙かに行過ぎてゐる觀がある

る。意志とか本能とかの主位は恢復され、理性の從屬性は確定されるに至つたが、單に此の點に停止せず、更に理性の本來の職能までを無視しようとする所の、所謂主意主義的反動の危險性が新たに發生するに違つてゐるやうに思はれるのである。乃ち、今日は寧ろ理智の不當な閑却から大な危險が招來されてゐるものではあるまい乎。例へば、勞働階級の一部の人々の間に釀成されてゐる知識階級に對する不當な反感の如きは、主として理智本來の職能と所謂主智主義とを混同する——此の混同は知識階級の一部の不當な指導意識の中にも發見される——所の誤解に基因してゐるものゝ樣に思はれるのである。固より勞働階級の階級的行動を指導してゐるものは、勞働者階級自身の意志であつて、知識階級の理智は前者の意圖の下に從屬すべきものである。知識階級こそ却て勞働者階級に依て指導されるべきものであることは明かである。併しながら、その目的を判然と意識し、それを達成すべき手段を講ずるに當て、勞働者階級は、知識階級の理智的職能を閑却することは、少くとも賢明な策と云ふことは出來まいと考へられる。但だ、此の點に於ける知識階級のサーヴイスは、反對に資本家階級に對しても提供され得るものであり、また事實上非常に多大なる程度に於て提供されてゐるものでもある。勞働者の知識階級に對する反感は、此の點に由來する所も少くないであらう。元來、知識階級などといふのは、言葉そのものが示す所である。知識は決して階級形成の素因となることを得べき筈のものでない。知識階級一部の僭越な指導意識の如きは、舊式な主智主義的錯覺の生んだ惡夢に過ぎない。兎に角、主意主義的反動は更に理智の職能の正當な是認にまで引き戻されねばならぬ必要があるものであらう。

私は、併しながら、此の理智の職能を全然度外視して、說得過程の非理智的、無意識的心理機構を說いて來たのであつた。之は果して正當であつたか？換言すれば、理智的說得、意識的推理に依る說得は全く有り得ぬものであるか？私は、もしそれが可能であるとしても間接的にのみである、と答へたのであつた。即ち理智の論理的成果は、主として、上來說述してきたやうな非理智的心理機構を通じて、仲介的にのみ民衆の内心に到達するものであることを云つておいた。（第五節末段參照）此の仲介が、果して不用になる日がくるかこないかは暫く預るが、如何なる說得過程も決して被說得者の意志決定に直接干涉するものではなく、單にそれの參考を間接的に提供するに過ぎない。而して理智は、實は、其の職能を以て發生するに至つたものであり、現實の利害關係に矛盾しない意志決定に對する、最も誤ることなき指針を發見提供するものは實に理智である。そ

の理智的推理の過程は、無意識界に於ける意志決定に對しては無力である。併し乍ら、無意識的意志決定、並びにそれに於ける説得の方式の背現實的危險性に由て、意識的行動と共に、前者に代るものとして生れ出たものこそは理性の論理である。理性の職能は感覺の延長であり、その補正である。この認識的職能の限界を超えるものは、唯理論的遊戯や主智主義的妄想に墮せねばならない。理智的認識は決してそれ自身で終局的目的であり得るものではない。科學は街頭に出て始めてその使命を全うし得るものである。もし講壇と意識的な學生とが、街頭と無意識的な聽衆とに移され得るならば、而して之のみ能く新しき利害關係の進展に併行し得る所の、創造的説得を遂げ得べき唯一のものであらねばならない。

私は非常に概括的にではあつたが、言論の説得過程の心理的機構の大要を明かにしたつもりである。而して私は之を説得者の技巧的利用のためにではなく、被説得者の警戒と用心とのために捧げたいと望んでゐるものである。

文　獻

Graham Wallas, Human nature in politics. Part I.

G. Le Bon, La psychologie politique. Livre III, ch. II.

" , Psychologie des foules. Livre II.

Tuckey. Treatment by hypnotism and suggestion.

etc.

支那關稅會議に直面して

經濟學博士　太　田　正　孝

一

天高うして秋十月、その二十六日を期して、ペキンに關稅特別會議開かる。いはゞ、ワシントン會議のつゞきである、また、ある意味において、パリー會議からの連續とも見られ得る。差し當り、ワシントン九箇國條約できめられた支那の關稅增率につい

ての問題を議するのが、その名目であるからである。そしてまた、この會議には、支那から、[illegible]稅自主權の承認の討議を要求せられ、それはとりもなほさず、パリー會議をはじめワシントン會議にくりかへされ、いままた力づよい主張を以て議題とせられんとしてゐるからである。ヨーロッパ戰爭おさまつてこゝに五年。その間、世界外交の舞臺におけるわが國の立場は、なかなかにむづかしいものがあつた。しかも、成功として數ふべきものが一つだになく、みな失敗のくりかへしであるとは、口さがない私どもの批評のみではない。さるにても、いまこゝに、すぎにし夢のうらめしきふしぶしを思ひつゝ、ふたたび重大なる國際會議に向ふ。政府の方寸と、國民の覺悟と、はたして如何。

まづ、議題の第一をみる。

いまの支那の關稅は、五分の稅率になつてゐる。いまさら說明するまでもなく關稅には、輸入に對してかけるものと、經濟の進まぬ、或は財政の豐かでない國においてするやうに輸出に對してかけるものと國境でかけるものと未開國などにしかない國內の通過に對してかけるものとがある。支那には、そのすべてのものがあるがこゝに問題とする五分の稅は、輸入についてのみいふのである。それは、千八百四十二年の英清通商章程千八百五十八年の英清テンシン條約並に通商章程。千九百二年の[illegible]年のシャンハイ稅率會議を經て、今日にいたつたものである。そしてこの八十年の長きにわたつて、ずつと五分に釘づけられ、いまはたゞ名義だけでなく、いはゆる現實の從價五分になつてゐるのにすぎない。しかるに、千九百二十二年のワシントンにおける支那の關稅に關する九箇國條約で、それを增率することが協定せられた。しかもそれは、別してこと新らしい問題ではない。支那には、釐金稅といつて、國內に於ける貨物の移動につれて課稅せらるゝ地方廳の收入となる國內關稅がある。それが、いかにも貿易の發達を妨げて居るので、それを廢止しやうといふ考へがあり、それをやめるならば、從價五分の外に七分五厘の附加稅を以てし、都合一割二分五厘としてもよいといふことの條約を結んでゐる。いはゆる裁釐加稅といふ取極めである。イギリスとの千九百二年九月五日のいはゆるマッケー條約の第八條、アメリカ合衆國との千九百三年十月八日の條約第四條第五條、わが國との間の千九百三年十月八日の追加條約第一條に、このことを定めてゐる。その裁釐課稅の準備のために開くのが、こんどの會議の目的である。尤も、釐金稅をやめることは、支那財政の關係、地方廳の關係などで、すぐとは行へない。よつて、さうな

るまでの間、有税輸入品に對して附加税として一律に二分五厘都合七分五厘をかけることを認めたのである。さらに奢侈品については、『過度に貿易をさまたげることなくして、一層の增課を負擔し得るものと認めらるゝもの』に對して、その總附加税は從價五分を限度としてかけられ得ることを認めた。かやうな附加税をかける期日などをきめるのも、こんどの會議である。つまり、いまの現實五分税を、最高加税一割二分五厘とする準備について、またその道行きとして七分五厘の加税をするについて協議するといふのである。ワシントン會議で、何等の對價なく、たゞ暫行的にもせよ二分五厘の附加税をみとめたのは、いかにも面白くない失敗であるといふものもある。尤も、增率とする條件は、釐金税廢止だけではない。そのほかに支那が條約で、いろ〳〵のことを約束してゐるが、それを行はしめることである。しかし、支那は、なか〳〵行はない。よつて各國は、その履行方法を講じて、その準備をしやうといふのである。いろ〳〵の約束といふのは、たとへば日支條約についてみれば、貨幣制度の創設・度量衡の統一・司法制度の改正・工業所有權の保護制度などである。これらは、いづれも重大なる、いまの支那の力では、これを行ふことは或はむづかしいとみるが當然である、各國といへども、輕々しく手のつけられないやうなもので、本當にこれを解決するのは、强い中央政府が出來てからのことであらう。——とにかく、かやうな目的で開くことを約束したのが、こんどの會議である。この會議は、九箇國條約が實施せられた後三箇月以内に支那で開くことになつてゐたのであるが、支那とフランスとの間に、いはゆる『金フラン』問題があつて、その解決がつかず、從つて、フランスの批准がおくれたのであるが、その問題も片付き全部の批准も漸く八月五日になつてワシントンに寄託ずみとなり、また、さきほどから、外貨排斥のためになやまされてゐた國内のさわぎも落着きかけたので、こゝに、この會合を催すに至つたのである。——しかし、支那からの通牒には、會議の目的は、これだけになつてゐない。

それが、議題の第二である。

手つとり早く申せば、關税自主權の要求である。片務的に束縛せられてゐる税權を恢復し、みづからの權力によつて、關税を定めるやうにしたいといふのである。そこは、支那流に、『税率上の束縛を除去すべきある種の決定あるべきを希望す』といふやうに、いかにも上手に、用意ぶかく書かれてゐる。しかし、これを要求する意思は强い。私は、便宜上第二の議題といつたが、支那としては、第一位においてゐるやうである。また、支那の顏色をみる國にして、その肩をもつて、ゆくものが

あるかもしれない。現にアメリカの如きは、事前にこの要求の出るを知つて下引したとさへ傳へられてゐる。イギリスの[illegible]ら、アイルランドや、エヂプトや、トルコに對して最近にとつた手段と同じく、或は機に應じて早がはりするではないかとも、とり沙汰せられてゐる。さなきだに、支那自身からいへば、民族自覺の世界的さけびの耳に入らぬわけはなく、國際的にわるく取扱はれてゐることの反感のいたくしいことを悟らぬものとてはなからう。パリにさけんで、容れられず、ワシントンに要求して、斥られ、わづかに同情的に暫行的の二分五厘附加稅をみとめられたにすぎない。この附加稅も、各國は對價なくして與へたといふが、支那ののぞむには、そんな程度のものではない。關稅權をみづから握ることである。こんどの會議も、一方に附加稅を、他方に自主權を要求するのは、矛盾であり、手ぬるいとペキン政府を論難してゐる支那新聞もあるほどである。とにかく、宣傳もする。運動もつづける。たとひ、こんどは私のいはゆる第一議題だけでをはるとしても、こののぞみは、すてない。機を問はず、時あるごとに主張するであらう。その成るべきことを思へば、時の問題であるといふにすぎない。しかも、關稅自主權の要求は、治外法權の撤廢にもつながる。總じては、不對等條約を、とり去るのにある。――この意味において、治外法權を議する司法制度調査委員會が開かれん[illegible]、みづからの力に他國の力をみとむるときは[illegible]早くとりさりたいといふのが、支那國民の年來のさけびである。努力である。思へば、四千年の古き歷史を有する支那は、われらが四半世紀前に漸くして取去りしこの喜びを、いまに得んとして、もがきつゝある。われら、よくそれに同情する。しかも、各國との立場もある。どう取扱ふべきであらうか。

會議における問題の主點は、定まつたであらう。

二

しかし、問題の重要性については、いま一應しらべて見なければならぬ。それは、支那から見ても、列國から見ても、さらにまた、その双方の考へがまとまるかといふ點からみても、大切な問題であるにちがひない。

支那にとつて、關稅を增率するといふことは、收入を得る立場からも、切にこれをのぞんでやまない。多額にのぼる借款を返す財源としても、あるひはいろ〳〵の改革事業に手を下すにも、先だつたものは、何といつても金であり、しかも、とりやすく、入りやすい關稅を得たいからである。さらに、關內の[illegible]

業を保護して發達せしむる立場からしても、關稅のかきねを高めねばならぬ。なるほど、いまの低い關稅によつて、各國からの安い物を得られることは、數多くの消費者から見れば都合がよく、必ずしも利益がないとはいへない。さりながら、いまのまゝにしておいては、いつまでも外國品のために壓倒せられ、おこるべき産業もおこり得ないことになる。豐かな原料をもつてゐながら、それを外國にやつて、みづからはその製造されたものを買つてゐてはいつまでも自國の産業を向上せしむることが出來ない。つまりは國産の奬勵のためにも必要である。私は近來しきりに支那でおこるイギリスやアメリカやわが國の貨物を排斥する運動も、もとづくところは、さういふ點に、ふかくねをおろしてゐるのではないかと思ふ。言葉をかへていへば、農業國の地位から、次第に工業國にのぼりたい。けれども、五分稅といふごとき低い關稅では、到底外國品のはいつて來るのを防ぐことが出來ない。それを遺憾としてゐるのであるとみるのが正しいと信ずる。いふまでもなく、わけもわからぬ人達の、いたづらにさわぎまわる排外運動もあらうが、大勢としての理論は、そこにあると見なければならぬ。しかし、增率は、暫行的の二分五厘の附加稅は別として、結局の目的とする一割二分五厘の加稅となるには、釐金稅の廢止などを條件としなければならぬ。その國内關稅は、いふまでもなく内國商業のうへにも害があり、外國貿易品の交通上からも――購買力を弱くするなどの點からみて、よくないにきまつてゐる。これを廢することは、なかなかむづかしいことではあるが、どうしても成しとげねば、いつまでたつても、いまの産業策を立てなほすことは出來ない。トルコをみよ。彼れでさへ、從價三分の輸入稅を高めるについては、國内關稅を廢したではないか。そして八分となり、千九百七年には、一割一分にまで高むることが出來得たではないか。ましてや、それを廢した代りとして附加稅を增し得るといふ財源もあるではないか。いふまでもなく、この問題は稅制一般の改革問題ともからみ、地方財政とももつれてゐる面倒な問題である。しかも、釐金稅をやめたことによる減收を附加稅によつて補ひ得ないとするも、直接稅の新設などによつて少なからぬものを合理的に課稅し得る餘地も多いではないか。ロバート・ハートの如きは、地租だけ改正しても、支那の財政をまかなふに足る財源を得るといつたほどである。それらの改革をするについても財源がなくつてはならぬが、とにかく、國内關稅廢止の誠意と實行とが伴はなければ、關稅問題は、一歩も進むことが出來ない。――すゝんで關稅自主權の問題にいたつては、少くとも、いまの支那政治家の考へでは、第一議案より

も重要性を置いてゐる。各國の、口には強いことをいひながら、甘き支那の寶庫の鍵に近づきたいといふ腹をよんだからといふのみではない。それは、支那の名譽としても、とらねばならぬ。トルコや、シャムでさへ得たものを獨立國の體面からも、恢復しなければならぬ。關稅增率は、いはゞ關稅自主權要求から見れば、低い段階に過ぎない。ワシントン會議の名目を超えて、これを要求するのは、決して矛盾ではない。各論よりも、總論原則をきめてもらひたいといふことになるからである。

ひるがへつて、各國の立場からみた、こんどの會議の重要性は、どうであらう。

こゝに、各國といつても、それは、あとにも述べるやうに支那との貿易交通にふかい關係をもつてゐるイギリスと、アメリカと、わが國とである。あるひはフランスも加へられるが、主たるものは、前三者である。しかも、これらの國は、いままでは同一步調で支那に對して來た。同一步調といふよりも、イギリスのやりくちどほりについて來たといふのが、當つてゐるであらう。

支那が諸國の扉を開いて通商をはじめてから即ち、イギリスとのアヘン戰爭にまけて千八百四十二年のナンキン條約をむすんでから、今日まで、對外關係はイギリスの外交政策が根ぶかく植へつけられてゐる。治外法權による司法權の束縛、片務的な關稅自主權の束縛みなイギリスのはじめたものである。尤も、わが國は、日清戰爭の前までは互ひに治外法權をみとめてゐたのであるが、この戰爭に勝つてから、列國と同じく支那と不對等の條約をむすぶことになり、手つとり早くいへば、イギリスの政策の仲間入りをしたのである。いな、日清戰爭にやぶれてからは、支那は、從來にも增して、通商地を擴張するやら、外人に海關管理をせしめることになるやら、いろ〳〵と外國の壓迫を受け入れねばならぬやうになつたのである。各國から申せば、低い稅率と、みづからの國の權力を引のばした治外法權の繩ばりをよい根城として支那と交通してゐるのである。けれども、イギリスのやりくちに從つてゐるとはいひながら、各國の支那に對する利害關係が、同一であるといふのではない。こゝろみに、その貿易額をみる。大正十二年の統計によれば、

日本……………二一一、〇二〇（海關兩）
アメリカ合衆國……一五四、四四〇
イギリス…………一二〇、三九〇

となつてゐる。さらに問題となつてゐる關稅の立場からみる。千九百二十一年の統計によれば、有稅品の輸入額に對する關稅の步合は、三分四厘見當であつたが、千九百二十二年の一月十

七日から實施せられてゐる現實五分税のため一分六厘見當――即ち千三百五十四萬八千七百兩の増加となつて、わが國は三百二十五萬餘圓を負擔することゝなつたのである。さうして、その百分比をみると、

ホンコン	二五	イギリス	一六
日本	二四	インド	四
アメリカ	一九	その他	一二

となつてゐる。しかもホンコンについては、わが國の負擔額が大部分を占めてゐるのであるから、わが國が重要な關係にあることは、益々明かである。これは支那に對する關係でいふことであるが、各國みづからの貿易額からみれば、イギリスもアメリカも、支那以外に少なからぬ市場を持つてゐるにかゝはらず、わが國の輸出關係においては、アメリカに對するとともに甚だ大切な地位におかれてゐる。わが國の輸出貿易の二大方位の一つである。これを百分比に割りあてゝみれば、千九百二十三年において、支那への輸出は、

日本……一八・八〇
イギリス……三・四三
アメリカ合衆國……二・六〇

といふことになる。さらに、この内容をさぐつてみると、わが國の立場は一層明かになる。即ち、イギリスの支那へ輸出するものは、高級な綿製品とか毛織物類をはじめ、器械、器械製品、建築材料など、いはゞ精工品である。アメリカからするものも、機械その他、ほゞ同じものである。しかるに、わが國からは、その百萬圓以上のものをみるも、綿絲、綿織物、メリヤス、毛織物、紙類、ガラス、ゴムタイヤ、洋傘、絕緣電線、マッチ、ランプ、機械及その部分品などである。いはゞ半製品もしくは粗製品と名付くべきものである。言葉をかへていへば、國産奬勵の旗印のもとに、關税によつて自國の産業を保護せんとする支那にとつては、差し當りの目當てとせらるべきものである。さういふものが、わが國の貿易中大切な地位にある對支輸出品である。――かやうに、わが國にとつて對支輸出は大切である。ことに紡績業者などが關税増率をやかましくいふのは現實五分税とせられたためでも、綿絲布は、五割八分（その他の從價税品も二割七分）も増税せらるゝことになつたからである。しかも、眼を轉じて、支那の輸出の各國に對する關係をみればどうであるか。これは、あとにも引あひに出すやうに私の議論に對して關係があるから、少しくのべて置かねばならぬ。いま、支那から輸出する高の千九百二十三年における百分比をとつてみると、

日本……………一〇・三三
アメリカ合衆國…………一一・一二
イギリス…………四・五九

になつてゐる。即ち、わが國は、はるかに他の國よりも、多くを支那から輸入してゐることが、わかる。しからば、その品物は、何か。曰く、生鐵、銑鐵、曰く、豆粕、大豆、米、鹽など。原料にあらずんば食糧品。これなくては、わが製造工業は出來ぬ。鐵工業は出來ぬ。國民生活の第一である米その他の農產物を獲るにもひどく。米といひ、鹽といひ、シヤンハイ玉子といふごとく、すぐ口に入るものさへある。わが國が工業國になればなるほど、原料を要することと多くなればなるほど、人口が増加すれば増加するほど、この關係は、ますます深くなつて來るものといはねばならぬ。しかるに、イギリスにせよ、アメリカにせよ、そのみづからの國にもたらす輸入額の少ないうへに、かやうな原料や食糧品を得てゐない。みづからの植民地からとるか、しからずんば、みづからの國で生產してゐるものである。一言にしていへば、わが國の對支關係は、輸出入ともに重大な關係にあるが、イギリスや、アメリカは、さほどでないといふことになる。その利害の厚薄ある國が集つて、一つの結論を見出さうとすることが、そもそも問題である。

問題の第二である關稅自主權に對する各國の立場からみた必要性はどうであらうか。相手國の立場を別にしてみれば、みづからの國の品が、相手國で相手國の自由に課稅が出來ぬやうになつてゐることは、都合がよいにちがひない。けれども、いつまでも、その狀態をつゞけることは出來ず、いつかは、これをみとめねばならず、しかも、第一議において、よりよい立場におかれやうとすれば、來るべき關稅自主權の支那に認めらるゝ日を考へておかねばならぬことになる。即ち、いまの片務的な關稅條約は、一時的のものと觀念しなければならぬ。いかに便宜なものであるとはいへ、一時的の重要性にすぎないことをよく呑み込んでゐなければならぬ。

かうなつてみると、この會議の議題の重要性を知つたつぎには、各國のこの會議にのぞむ態度を見きわめておかねばならぬことになる。とりわけ、わが對支關係は、第一次的のもので、第二次的にどうなつてもかまはぬといふ性質のものではないから、問題は第一議案のときはどうする、關稅自主權承認問題のときは、どうすると、ふところを二つにきめて、各國の腹を、まづ以てさぐつてみなければならぬことになる。

三

人の腹をさぐることは、私の力のよくすることでない。ただ、過去のやりくちと、きれぐに見たり聞いたりしたことを材料として歸納してみるのにすぎない。しかし、大切なことである。

まづ、イギリスのふところにはいつてみる。支那が開國してから今日までの間に、その勢力をひろげたことは、驚くべきものである。税權によつて右の手をしばり、法權によつて左の手までしばつてしまつた。支那の自由をしばつて、みづからの翼をひろげて來た。資本もつぎこんだ。金も貸した。領土も得た。事業も植えつけた。とくに、いまこゝに問題となつてゐる關税については、海關制度によつて、みづから實際に課税徴收の采配を振るひ得る立場を得てゐる。その收納せられた多額の金も、みづからの息のかゝつたホンコンシャンハイ銀行の金庫をくゞつてゐる。まことに、うらやましい地歩を、しつかりとにぎつてゐる。しからば、この會議を、どうおよぐだらうか。第一議となる增税の問題は、イギリスの貿易が、わが國のやうに第一次的のものでなく、課税せられただけは轉嫁の出來る見込みのあるものであり、支那のこれから保護しようとする粗工業とは、ほとんど關係のないものである。まして課税による增收入は、借款の整理に振りむけられることにでもなれば、却つて都合がよくなる。かう考へてみると、こんどの暫行的の二分五厘の加税も、奢侈品による一割二分五厘までの税も、イギリスにとつては、さほど苦しいものではないといはねばならぬ。會議の模樣によつては、少しぐらゐは、このうへに增してもよい――否さういふ風評さへ傳はつてゐるほどである。その會議の模樣といふのは、主として第二議の關税自主權の恢復問題にかゝつてゐる。イギリスとしては、むしろ、このことを、いたく頭痛にやんでゐるにちがひない。なぜなれば、支那に結局不平等條約の撤廢なり修正なりをみとむることゝなれば、自己の屬領や殖民地にもひどき弱氣を示すことにならねばならぬからである。もとより理づめから申せば、支那の條約を守る考へと力とが問題であるが――とにかく自己の對外政策の立場からは、なるべく、この問題には深入りしたくないと思ふにちがひない。現に、さきほどの上海事件についても、言を左右にして、フランスとまづい立場になつても、やつぱり自己の主張を固執してゐるのをみてもわかる。かやうな意味において、話の模樣では、この際、第一の議題に對しては、むしろ寬大なる態度をとるのではないかとみるのが妥當であると信ぜられる。一言にしていへば、イギリスは、狡智なる現狀維持をしたいといふのが、その腹であるやうに思ふ。しかし、彼は、いはゆる外交上手であ

る。旗色がわるいと見、行きつまつたと悟れば、掌をかへすやうに早がはりする。最近のエヂプト政策・トルコ政策・ロシア政策みなそのやうであつたといひ得るからである。この點もよく心得てゐなければならぬ。

ここへゆくと、アメリカの立場は、イギリスよりも自由である。第一議案に對してさほど苦しくない立場にあることは、イギリスとかはらない。第二議案の關稅自主權問題については、さきにものべたとほりアメリカは事前に支那の提案を知り、これを手引きしたではないかといはるゝほどである。さらに近くは、國務卿ケロッグ氏は、ミシガン州のデトロイドに開かれた法學協會で、支那のこんどの會議の議題は、なかなかに廣がるべく、決して局限せらるべきものではないことを述べ、私のいはゆる第一議案たるワシントン會議できめられた問題のみに制限せられる必要はないといふ意味にとられてゐるほどである。一言にしていへば、アメリカの態度は、力ある引まわしの出來得る地位にあり、各國の最もおそれてゐるところである。

かやうに、イギリスは、關稅自主權もしくは不平等條約撤廢の不利のためには、あるひは關稅の增率については、豫定よりも與へてかまわぬ態度をとり、アメリカに至つては、進んで關稅自主權をも、恩をきせて認めかねまじい態度をとつてゐると觀取せらるゝ。しからば、わが國にとつては、どうであらうか。それは、つぎにのぶることとして、表面だけからみると、いづれの國も、同じく協調の態度をとつてゐるやうにみえる。さうして、みなやわらかく出てゐる。たとへばわが國の回答にあるやうに、「關稅問題に關する諸條約の改訂について、支那政府の提起せらるゝこととあるべき何等合理的提議に對しては、右特別會議におけると將來の會議におけるとをとはず、これを考慮し且つ討議するを辭せない」といふのを以ても、その意向は察せらるゝ。

とにかく、いづれに重きをおくにせよ、提起せらるべき議題の二つあることを覺悟し、そのいづれに對しても、最善の態度を定めておかねばならぬ。

四

しかも、そのいづれの議題に答ふるにもせよ、また、主張するにもせよ、正義人道の立場をはなれることは出來ない。大局から見定めなければならぬ。また、東洋の平和と經濟的運命かゝる中心問題であることを忘れてはならぬ。

まづ、第一議題の增稅案について考へる。かへりみれば、いままで、わが國は、支那の關稅增率については、反對ばかりつ

どけて來た。とくに、最も深い關係ある紡績業者は、強く反對して來た。とりわけ大阪の斯界の人たちの心組みは、最も強かつた。これも、現實五分税の場合にも、綿絲布に對して五割八分を増したことを思ふと、その立場も察してやらねばならぬ。なほ、その場合の從量税を算出する基礎が、千九百二十一年十月から二十二年三月までの平均價格によつたので、當時の物價が、アメリカやイギリスにくらべて、ズント高かつたから、わが國の商品は、イギリスやアメリカの優良品よりも重く課税せられたことを思ふと、同情せらるべき地位にある。こんどの會議は、暫定としても、さらに二分五厘を、裁奢課税の場合には一割二分五厘にまで達するのであるから、その貿易上にうくる打撃の相當に大きいことを覺悟しなければならぬ。なほ、ワシントン會議では、いままで安奉線による支那への輸入に對しては三分の一を減税せられてゐたのであるが、この陸接國境における減税の特典もとられることになり（支那關税に關する九箇國條約第六條）、海境においてかけられるものと同率にされてしまつた。これがため、それまで、わが國は、營口や大連を經由する支那貨物よりもよい立場にあつたのを、それからはむしろ營口や大連に壓倒せられることになつて、わが國の對滿貿易には、いたく〳〵しい打撃を與へるであらう。そのうへに朝鮮及南滿洲鐵道の收入の少なくなることも豫想しなければならぬ。けれども、それらのことは、すでに定まつてゐることであるから、いまさら、なげいても致方がない。しかし、附加税率を決定するに當つては、すぐる會議で採用せられた標準價格が――さきにものべたやうに――わが國に對して不利であつたことを思ひうかべて、相當考慮するところがあつてほしい。また、奢侈品については、高率の附加税をかけ得ることになつてゐるが、條約にも「過度に貿易を阻礙することなくして一層の増課を負擔し得るものと認め」らるゝものであることの條件があるから、篤とこの點に留意して、絹綿繻子や縮緬など特にわが對支貿易を害するおそれあるものに對して制限を設けることを忘れてはならぬ。また暫行的の課税も、その實施期日は、現實從價五分税の影響が緩和せられた時期をみて、決定するやうに努力しなければならぬ。

しかし、かゝる條約上の細かい問題を別にして、それらの負擔を増し、暫行的には七分五厘課税、裁奢加税のときには一割二分五厘となるべき前提のもとに、いままでどほりわが國の對支貿易がつゞけられ得るかといふことを考へてみなければならぬ。この點については、朝野の意見も大體一致してゐる。即ち、從來のいはゆる粗工業は、そのこれを行ひ得るものは、な

るべく支那に移さなければならぬといふにある。この意味において、紡績業の如きすでに移業を試みたものもある。その他の染織工業、機械工業、化學工業などにも、移出し得るものを見出し得ようが、あまりに細かいことは、こゝには省く。しかし、このことは、右から左へといふやうに、たやすくゆかず、なかなかむづかしいことであり、ことに支那における法人經營の工業には、いろいろの障碍があるから、それをのぞくやうに、こんどの會議で主張しなければならぬ。なほ、これらの仕事を支那で行ふについては、勞働者の待遇などについても心しなければならぬ。私は、こんどの青島や上海におこつたさわぎを見、彼等の要求をしらべてみて、わが當業者の態度が完全なものでないことは、彼等から「將來勞働者をなぐつてはならぬ」といふやうなことを申出てゐるのを見てもわかる。安い賃銀と、長く働かすことによつて、その當時の利によつて、ながく事業をつゞけて行かうとは、さもしい心掛けである。共存共榮の特色は、口さきばかりでは、いけない。能率の增進、生産費の節約は、工場法規の有無にかゝはらず文化的にやつてゆかねばならぬことを、切に注意しておきたい。それにしても、とにかく、これからは、支那でも新工業が保護せられることになるであらうから、それを維持する立場からも、ゆめゆめこれらのことを忘れてはならぬ。かやうに、支那に新工業を移すと同時に、わが國は、國内においても、出來得るかぎり、工業能率を高むるやうにして精工業をする域に進ましめねばならぬ。さらにこゝに言葉を強めて說かねばならぬことがある。わが國は、原料食料を支那に得て、これらを加工製造して再び支那に向けるものが少なくないといふ意味で、また、輸出にも輸入にも第一次的の立場におかれてゐる意味で、支那と工業もしくは産業同盟を結ばねばならぬことである。その方策としては、ほとんど無盡藏ともいひ得る原料や食料が、たやすくわが國に入るやうにしたいこともその一つである。この意味で輸出稅や、鐵礦條例や、防穀令などをやめてもらはねばならぬ。また、居住營業の自由を得ることも、方策の一つであらう。尤も、いまのやうに生命や財産についての安全保障のないことから申せば、差し當りは、いまの商埠地を擴げるとか、商業取引の盛んな都市を新に商埠地として開放せしめるよりほかない。ことに列國が租界に立てこもつて、コンプラドルを相手にいはゆる坐商貿易をしてゐるのとちがひ、わが國は、支那の奥地にまで直接の取引をすることが必要でもあり、利益も多く、そのこれを爲す長所をもつてゐるからである。また、特許、意匠、商標などの工業權の保護を充分に保障せしむることも必要である。

なほすゝんでは、支那原料による加工再輸入に對しては免稅するとか、その輸出のとき稅をかけておいたならば、再輸入のとき戾してやるやうな方法にまで進めたい。かやうにして、本當に支那と結ばねばならぬ。私が第一次的の貿易關係にあることをくりかへして申したのは、結論をこゝに持つて來たかつたからである。そしてこれらのことは、出來得るかぎり、こんどの會議なり、そのわが國のみに關するかぎりにおいては、直接に彼と交渉しなければならぬ。なほ、增稅から、裁釐加稅から、やがては關稅自主權にまでゆくことを思ひ、いまの海關稅制度のやうに、その長官たる總稅務司をイギリス人の獨占とせず、稅率の適用上の問題についても、とかく上級者たる邦人が少ないために損失を見ることが多いから、邦人を關吏とくに上級者に採用するやうに主張しなければならぬ。それは、少なからぬ稅額を負擔するわが國としては當然の要求であると信ずる。また、關稅の預入れを、さきにのべたやうにホンコンシャンハイ銀行に限定せず、輸入額に應じてわが國の銀行にも取扱はしめることとなれば、對支貿易の金融上にも助けとなるにちがひない。私は、第一議案に對しては、これらのことを主張したい。さりながら、わが國の對支輸出品に相當する支那の工業に對して生産稅を課せよと主張するものがあるが、私はとらない。關稅の引上にせよ、銀相場の變動にせよ、わが工業に影響することはいふまでもないことであるが、支那の事業に生産稅をかけよとは、內政干渉といふ意味からも贊成することが出來ない。

また、增收關稅の處分についても、これを直に支那にやるのは、却つて惡用せられ、燒石に水をかけたやうに消えてしまふであらうから、それはとらぬ。これは、さしづめ借款の擔保にあてるがよい。そして直に借款の整理にあてるよりも、これを以て、支那の財政を救ひ、通商條約上のいろ〳〵の義務を行ふことの出來る準備に用ふるにしくはないと思ふ。うたかたの泡の如くつかはれたいはゆる西原借款の如き、回收の途を得るに越したことはないが、また、關係者の立場とふところ（特殊銀行などの）には同情するが、それよりも、貿易上・國際經濟・國民生活の永遠の立場からみて、上述のやうな目的につかふべきものではないかと思ふ。

問題は、も一つある。その關稅自主權の承認については、日英米三國は直ちにそれを許さないことに協定が出來たとも傳へらるゝが、にはかに信じがたい。あぶないことを信じてかゝるよりも、私は、理詰からいつても、むしろ短的に、これをみとむべし、率先してみとむべしと主張したい。正義と平等と親善の誠意からは申すまでもない、いつかは與へらるべく、アメリ

カにその嫌があるではないかともみられるからである。いつまでもイギリスの尻馬に乘つて、法權と稅權の二つの繩によつて、利害の深い隣人に迫ることは、拙であると信ずるからである。關稅自主權をみとめれば、支那が勝手に稅を高めると思ふは、あまりに猜疑がふかい。それは、かの千九百十七年末支那政府が大總統令第二十八號で公布した國定關稅條例をみてもわかるからである。この條例は、いまは無條約國にしか用ふるすべもないが、これによれば

奢侈品……從價三割乃至十割
無益品……從價二割乃至三割
實用品……從價一割乃至二割
必要品……從價五分乃至一割

とみとめてゐるからである。與へる喜びは早からしめる。そして、やゝもすれば疑はれんとし、口さきばかりよといはれた共存共榮の實をあぐるのも、いまである。冷かに考ふれば、わが國にとつて第一次的の對支貿易は、稅率問題より百尺竿頭一步を進めたる關稅自主權を率先してみとめるが勝であると信ずる。支那の排斥運動を轉ぜしめ內政改革に力をむけしめるに越したことはない。そして優越權を得て、親しく彼れと互惠關稅——さきにのべた工業同盟の立場から考へて——を結ぶのが利である。利害關係と立場において異るものが、互に會商することは意味をなさぬ。もとより協調は、むやみに破れとはいはぬ。しかし、國存立の第一次的の問題について、益なく他に和し、外にゆづるには及ばぬ。支那とても、わが國がかつて、不平等條約の厄からのがれるにあたり、これをロシヤフランスにみとめしむるに立ち、まづ以てイギリスをして承認せしめた歷史をかへりみるならば、そのいづれによるべきかは、おのづから明かとなるであらう。

私の考へは、理に落ちすぎたかもしれぬ。單獨に支那と手を握ることなどは、義和團事件から今日までつながつてゐる外交團——白人優越權の名殘りとさへいはれてゐる——との關係もあり、外交の理法にあはぬといふかもしれぬ。しかし、利害の異るものが集り、第一次的の立場で考へねばならぬものと、第二次的第三次的に考へてもよい國と、どうして合理な話がまとまり得られやうか。國と民との立場を考へず、たゞ協調これことゝしイギリスの尻馬にのり、關稅自主權の承認をさけ、あるひは、アメリカに出しぬかれて承認せられることにならば、それこそ三たび日の外交の失敗をかさねねばならぬ。

こんどの會議に全權として選ばれた人たちの物色などについても意見があるが、いまさらどうにもならぬ。

いまとなれば、あくまで、理と、力と、さらに大切な熱とを以て、この會議を押しとほしてもらひたい。極東外交の榮冠は、さうしなければ得られないと信ずる。世界外交の失敗の恥は、さうしなければそゝがれないと信ずる。（完）

——一四・九・一四朝稿——

米食人種たる日本國民と其食糧政策確立の急務

非瑞穂の國の食糧政策

中澤辨次郎

一

米は大體に於いて東洋の特産物であつて、小麥の如く世界の
何處でも生産されると云つた普遍性のある作物ではない。同時
にその需要も小麥の如く世界的ではなく、東洋人の大部分と歐
米亞の一部の者に消費されるに過ぎない。殊に我々日本人の常
食として居る日本米は、更らに特殊の需要供給關係にあるもの
である。一言にして言へば日本米は日本人の食物であつて、日
本人以外の米産國民と雖も日本米は餘り好まない、一種特有の
性質ある米である。從つてその供給範圍は大體に於いて日本内
地に限局されて居り、亦その消費も日本内地に限局されて居
る。米そのものが既に小麥に比して世界的でなく、世界の局部
的需要品であるのに、日本米はそれ以上更らに限局された食糧
である。斯樣な特異な米を主食として居る我々日本國民に對し
て施かされる食糧政策には自ら特異な政策を必要とする。殊に
米なるものは、其の作柄が、今日科學の進歩せる時代に於いて
も、依然として天候に支配される所の多い作物であつて、人爲
の力では如何ともすることの出來ない或る要素が過分にある。
此の點から鑑みるに我が國の食糧政策には更らに重大なる使命
が發生せざるを得ない。然し乍ら我々日本人が米を主食として
居ると云ふ慣習には、麥食人種には獲得することの出來ない大
なる强味がある。其の一つは稻は極めて强烈なる日光を吸收し
て生育する作物である關係から、他の主要穀物より我々が、利
用して甚だ大なる發熱量を有すると云ふ點にある。即ち米の[illegible]

當り收量の發熱量は麥類の約二倍に及んで居ると云ふことである。（本誌七月號拙稿參照のこと）更らに亦米作は麥作等に於いて到底見ることの出來ない大なる天然の遺利を獲得し得る作物であることに顧みねばならぬ。即ち夏期に於ける空電現象に依る空中窒素の利用されることや、灌漑水中に含有して居る有機分及び無機分の利用される點である。斯くの如き遺利は水を必要とする作物以外には到底利用し切れない天然の恩惠である。然し乍ら此の强味を有する米には他面に於いて可なり大なる弱點を持つて居る。第一には世界的食糧でない結果、世界の何處からでも供給を仰ぐことが出來ない。と同時に亦、生産が過剩しても世界の廣きに渡つて、之れを供給し得る需要を持たない。此の不便を持つ作物が而も一年草であり、同時に最も適當なる貯藏期間が、殆んど一年に限られて居る點にある。（實際は一年以上の貯藏に耐ゆることは言を待たないが、味、並に費用の點から顧みて一年內外が、最も適當して居る）例へば今年大なる不作が發生した爲に、慌てゝ外米を買ひ入れて貯藏しても、明年豐作であれば直ちに其の處分に當惑する場合が決して尠くはない。即ち此の點から鑑みると日本の米は豐作過ぎて當惑するし、不作過ぎて亦困惑する、極めて厄介な作物であり、面倒な食糧である。此處に於いてか我が國に於ける爲政者は米を中心とする食糧政策を施く場合、屢々大なる困難に當面し、或る時は品川沖に萬俵の米を沈めて米價維持政策を施いたり、亦或る時は不作凶作時の非常政策に手拔りがあつた爲め、一妹の主が、挂冠の止むなきに到つたことさへある。近くは大隈內閣が豐作に當面して米價維持政策に手を燒き、寺內々閣が食糧不足に當面して米價調節從つて米穀供給政策上の手拔りの爲め、有名なる米騷動を起せるが如き、如何に我が國の米を中心とする食糧政策が難點の多いものであるかを物語つて居ではないか。

二

更らに亦爲政者が我が國に食糧政策を施かうとする場合、最も厄介であると思ふ點は、日本人が日本米そのものに特殊な嗜好、と言ふより一種哲學的な動かす可からざる信念上の嗜好を持つて居る點であると思ふ。如何に米穀が不足し、如何に米價が騰貴しても、出來るものなら日本米を食べやうとする。例へ外米が、此の場合輸入されたとしても、外米に對しては日本人は何時でも第二義的な需要しか持つて居ない。然かるに日本米に對しては何時でも第一義的な需要を持つて居る。從つて若し爲政者が此の點を等閑に附して米勞不足の場合、外米政策を施い

た所で、その外米政策に大なる効果を認めることは到底出來ない。

従つて日本人の日本米に對する强い執着心の下に食糧政策を施かうとする場合には、第一に農業政策に立脚して、米作の安全を期することであり、米穀の漸増的增收を期することである。增加する人口の爲には、其の隙立てとして、國家自ら出來る丈けの開墾政策を施くことであり、而して尙ほ且つ米の不足を生じた場合には、間接食料たる菓子、餅、飴糊其の他に內米使用を厳禁しなければならぬ。特に彼の酒釀用として用ゐられる米（四百八十萬石）の如きは一切中止せしめ、之れ等の代用にこそ外米を振り當て可きである。斯う言へば今日の非科學的釀造を傳統して居る酒業者からは大なる反對に逢ふかも知れない。けれども今日の釀造科學は、內米の澱粉たると、馬鈴薯の澱粉たると、はた亦外米の澱粉たるとを問はず、殆んど同樣な釀酒目的を果すことが出來るまでに發達して居ることを知らぬ者の反對か、然らずんば、知つて居て內實的には斯くの如き方法を利用し乍ら、表面を糊塗する手段として之れに反對する位ひのものであるから、爲政者が食糧政策を施く場合に於いては、斯くの如き反對に何等の顧慮する必要はない。更らに進むでは或る場合、或る期間には一定の酒釀中止か制限を斷行する位ゐの覺悟がなければならない。

我が國の食糧政策を今後徹底的に實施しやうとすると斯くの如く或る特定業者に對して或る種の制限が加はることは、到底避けることは出來ない。それは日本米に特殊の嗜好を持つ日本國民の國民的生活の發展の前には、寧ろこうすることを迎へこそすれ、妨げてはならない。と同時に日本國民永遠の發展の爲には、國民全體に對しても、更らに好意の食糧的コントロールをする必要がある。

三

其の方法は、日本人が從來極めて强い信念上の食糧として居る米に對する嗜好を、不可知裡に轉換する手段を講ずることが、我が國今後の食糧政策上、重大なる任務となるであらう。何となれば我が國は、私が今此處に事新しく申し述べる迄もなく、國土が狹小である上に、大部分は到底今後と雖も經濟的耕地となし得ない山嶽丘陵を以つて充たされて居つて、其の上に非常に人口が稠密を極めて居るから、如何に米穀の增收を農業政策に待つとしても、それだけでは今後の需要に對する適當供給の見込は立ち得ない。現に我が國の國土總面積は二萬四千九百九十六方里（町步にして三千八百八十七萬四千町步）ある

が、現在耕地として利用されて居る面積はその內僅かに一割五分の六百十萬町歩弱に止まる。斯様に國土總面積に對して如何にも狭小なる耕地であり乍ら、今日まで白耳義、和蘭、英國に次ぐ世界第四位の稠密なる人口を養つて來られた唯一の理由は、既述の如く我々國民が米食人種であり、我が國の國土が耕地の二分の一を水田として居り、水稻を重要農業として居つた關係に由來するのである。然し乍ら最早今日に於いては我が國の水田が我々國民を給養するに、今日以上幾何もその餘地を止めない時期に到達して居る。勿論今日以上米作に多少の增收餘地はある。然し乍ら次第に增加しつゝある人口を顧みる時、其の人口を無限的に維持する能力あるとは受け取れない。況んや我が國に殘されたる開墾餘地の如き、田畑併せて僅かに二百萬町歩弱であり、此の內田となし得る見込地は七十七萬町歩弱に止まるから、此の一點から推斷しても開墾政策には何時かは行き詰る可き運命がある。殊に我が國の最近の狀勢から鑑みるに、一方耕地の開墾が行はれゝば、殆んどその面積に比例する耕地潰廢が行はれて居る。即ち文化の進運に伴ふて、住宅若くは工場敷地、鐵道軌道若くは新道路敷地、若くは水路、河川等の敷地、亦は荒蕪地となる面積が、一萬町歩內外に上つて居る。然かるに開墾面積は年に依り多少の變化はあるが大體に於いて二萬町歩乃至二萬四五千町歩に過ぎないから、耕地擴張に依る米の增收の如き、極めて微々たるものであり、特に潰廢される耕地には優良耕地が多く、新擴張耕地は總べて經濟可耕地以下の土地である點に顧みれば、我々は決して此の政策に大なる望みを懸ける譯には行かない。

四

其處で問題は結局我々日本人の日本米に對する特殊嗜好の轉回策と云ふことが可なり重大なる問題となつて來る。日本米でなければ我々の主食品とするに足らないかの如く、國民一般にコビリ付いて居る米に對する信念乃至執着を、米以外の穀物にも振り向けさせる敎化政策、指導政策が此處に必要となつて來る。一體我々が食物を攝ると云ふことは、勿論食物の有する營養分を攝ることに依つて我々の生命の糧とするものである。更らに進むで言へば食物を攝ることに依つて、日常百般の活動をなし、亦それに依つて失ふエネルギーを補充すると共に、更らに將來の活動力を蓄積するにある。從つて之れ等の各要素が得られるなら、如何なる食糧でも選ばないかと言ふに、そうではない。我々は日常食糧を攝ること、そのことそれ自身に對しても特有の趣味を感ずるものである。從つて我々は單に食物を口

から計り食べるものではない。口で食べる外に眼でも食べる。亦耳でも食べる。鼻でも食べる。手でも食べて居る。斯う言へば或る人は可なり奇矯の言を弄するではないかと言ふかも知れない。が若し我々の食物に對する嗜好が單に口舌で味つて好まい不味いと言ふ丈けであるならば、我々の食物に對する嗜好は、何萬年か前の動物的生活時代と相距ると遠からぬ嗜好ではないかと思ふ。我々の嗜好は今日左程までに原始的程度に止まつては居ない筈だ。現代の我々は食物を單に口舌で食べて好まいと云ふ外に、手で愉して、適當の軟かさを持つたものでなければならないと思ふ。亦食物そのものに適當の風味があつて、鼻が之れを受け付けるものでなければならない。更らに目で見て適當の色澤を有することが必要であり、同時に目及び耳に氣持ちのよい環境の作られてあることも必要であり、必然に耳に屆く食事瞬間の音が用便の音であつたりすることを排する。大體斯様に我々の食物に對する五官の働きはデリケートになつて居るから、例へ我々の主食に對する嗜好の轉回政策を講ずるにしても、その教化政策の指導方則は、斯くの如き五官の作用を念頭に入れたものでなければ意義を爲さない。

私の信ずる主食轉回政策は、大體以上の事柄を考慮の裡に入れて網み出され可きものだと思ふ。亦今日の調理法を改良進歩させることに依つて、今日一般が振り向いても見ない食物に對する嗜好も喚起される（例へば外米の如きもカレーライスにすれば内米より風味が宜しい）し、亦世界的食糧である小麥の如き、パン食を普及することに依り主食的地位に導くことも可能である。要するに我が日本の今後の食糧政策は、米のみを依然として主食とする方針の下には、確然たる政策樹立の餘地は無い。主副の見解を打破した米麥其の他の穀物を混食とする見解の下にのみ、正しい食糧政策を施し得る可能性がある。而して之れに配するに、食糧の資源を海陸兩面に向つて立體的に開發することである。斯くの如くすることに依つて動物性食糧に於いて、植物性食糧に於いて、恐らく今日以上個々の資源は言ふ迄もなく、量そのものも豐富ならしめることが出來るであらう。唯だ問題となるのは此の場合に於ける増收食糧及新食糧需要、從つて消費法を如何に指導すべきかと言ふことであり亦それの貯藏法（乾燥か冷藏か）の研究如何にある。

五

我が國の一部に於いては、今日でも古米から言ひ傳へられた瑞穂の國の美稱に幻惑されて、米は有り餘る國だ。少くとも產米に努力すれば米を不足させないでも濟まされる位ひに感謝す

して居る者が尠くはないらしい。我が國の食糧問題の上から其さに考へると此の位ひ危險なる安心はない。既に我が國は明治三十年を一期劃とした過去から年々大なる米の不足國となつて居る。多い年は一千萬石、少ない年でも一二百萬石、最近に於ける平均では約五百萬石の不足を告げて居る。即ち我が國は「瑞穗の國」から「衰穗の國」に陷つて居るのだ。更らに亦その米產額の如きも內地は勿論、朝鮮、台灣の植民地まで合計して七千二百二十萬石の生產がある丈けであつて、之れを世界の總產額六億六千三百九十三萬石に比較して見ると纔かに一割一分にしか當らない。國は大きいが生產方法の極めて粗笨である、支那の如きは約三億石の大生產であつて、世界總產額の四割五分四厘を占めて居る。從つて絕對產額の上から言へば、最早瑞穗の國の美稱は、支那に讓らねばならないし、亦單位面積上の生產額で言ふならば、我が國より遙かにスペインに於ける生產技術が優秀であるから、其處に瑞穗の國の美稱を讓る可きである。即ち麥食人種であるスペイン人の一ヘクタール當り（之れは約我が一町弱　即ち〇・九九一七四ヘクタールが我が一町）の生產額が平均二十四石一斗であるにも拘らず、我が國に於いては一町當り十七石六斗（以上何れも白米）であつて、反つて米食人種從つて米作人種を以つて誇つて居る我々の栽培技術の方が劣等であつたと言ふことが最近の調査に依つて明かになつた。

斯樣に我が國に於ける米作技術は、最早他國のそれに比して餘り自惚れすることの出來ない狀態にある。從つて國民一般が產米國の美稱に幻惑して、日本米そのものに對して、其の將來に於ける供給資源の途等を何等顧みず、徒らに迷信的強い嗜好を持つと言ふことは、大いに考へねばならない。殊に我が國の最近に於ける米の消費額は、印度並にアフリカ方面の比較的文化の程度の低い人種の消費量と殆んど徑庭のない大消費額に上つて居る。例へば海峽植民地では一ヶ年一人當りが一石二斗九升六合であり、佛領ギネアに於いては一石二斗七升一合であるが、我が國は之れに次ぐ世界第三位の消費額で一石一斗四升二合の多きに上つて居ること等も顧みねばならない。

六

最後に殘る問題は食糧の關稅政策を如何にすべきかと言ふことである。

由來國民の日常生活に必需な食糧品の如きは、出來る丈けその價格を低下する總ゆる施設が講ぜられて居なければならない。例へばそれの生產に要する原料品の如きは、最低廉價で農

民の手に渡されねばならぬ。而して生產されたる米穀は生產費の許るす最低價に於いて一般消費者に渡されねばならない。若し國家の政策に此の方針に反る政策があつたなら、その政策は一日も速かに撤廢することを心懸けねばならぬ。此の見地から言ふと食糧品特に穀物に對する關稅の如きは撤廢されて無稅であらねばならない。然かるに我が國に於いては原則として穀物には關稅を附することになつて居る。關稅を附することに依つて農業生產が保護されるものかの如き考へで居るらしい。然し乍ら熟々考へるに我が國の穀作特に米作者の如きは、關稅の如きに保護される部分は極めて少ない。若しあるとすれば米の大賣却主である大地主階級位ゐの者である。其の他の農民は、小作農は勿論自作農と雖も、關稅のあることよりも、土地の資本利子が低下されること、並に生產に要する總ゆる原料費のより低價で購入される方が、利益であることを百も承知して居る。

現に之れが實證は、關稅復活亦は引き上げ運動が何時でも地主側のみに依つてなされ、ホントウの農民側からは、此の運動が起らないと言ふ一例に依つても、それが覗はれる。元來關稅設置の目的は國內生產者保護の必要上からである。然かるに我が國に於ける關稅は最早生產者を保護するには足らないで、反つて一般消費階級の負擔を高める一因となる計りだ。斯くの如き意味の保護關稅ならば、最早一日も早く撤廢して消費者階級の負擔を輕減しなければならない。況むや我が國に於いては最近米に於いて五百萬石、小麥に於いて四百萬石近くの大不足を告げて居る國柄ではないか、從つて我が國の實狀をホントウに內省した食糧政策を施かうとするならば、苟も食糧品價格の騰貴を意味するやうな一切の政策を放擲して、國民の生活上に振り懸かる一切の障害を取り除かねばならないものだと信ずる

(九月十二日夜記)

食糧政策上に於ける實際的方針の確立

安部磯雄

內國貿易、外國貿易に於て其目的とする處に就いては別に變りはない。第一に有無相通ずるといふ點がそれである。即ち一方

に有餘るものを、全然それの缺乏してゐる處に之れを供給することに依つて互に相補ふことは今日の經濟生活上缺くべからさることである。然るに貿易は有無相通ずること丈けが重要な目的ではなく、假令兩方に同じ物が出來るとしても、甲の場處で作るより乙の場處で作る方がより多く利益がある場合には、利益のある處で其物を多く作り、利益を得る見込の少い場處に向つてそれを供給することを便宜とする。今日內國貿易、外國貿易は此便宜の目的に從つて行はれてゐるのである。尤も貿易は利益ばかりあつて弊害が全くないかといふに必しもさうでない。內國貿易でも、外國貿易でも競爭が激甚になると其處に多くの弊害の伴ふことが見出されるのであつて、殊に外國貿易の場合に於て甚だそれが多いことを知るのである。併し今日多くの人の考へる處に依ると、內國貿易に就いては暫く之れを措くとしても、單に外國貿易だけに就いていふならば、二個の相反せる思想がある。其一は外國貿易を行ふ上に於て飽く迄も自然の競爭に任せる自由主義で行かうとする立場であつて、貿易市場に於て最も廉いものが結局最後の勝利を占むるのであるから、殊に內國品より外國品の方が廉價にして優良なる場合には後者は遠慮なく輸入せられて、前者は競爭に打負かされることになるのであるが、此貿易上の自然競爭に立脚するのが自由貿易主義の思想である。之れに對して內國の産業を保護する必要に基いて、某程度まで外國品の輸入を防止する目的で、海關稅の高き障壁を築かうとするのが保護貿易主義である。此二個の相反せる主義の良否を直ちに決定することは困難であるが、今日實際の事實を見れば、英國は自由貿易主義で飽く迄も押通して來てゐるが、其他の國は程度の相違はあるが皆保護貿易主義を實行してゐる。乍併純理から云へば、自由貿易主義が最も合理的であつて、貿易を行ふ以上其自由競爭に放任することは當然でなければならない。關稅の障壁を設けて外國品の輸入を防止する位ならば、初めから外國貿易を行はざるに如かないのであつて、故に純理論的には自由貿易主義が最も徹底してゐるのである。內國貿易に於ては關稅の障壁がないから、其處では完全に自由貿易主義が實行されてゐる。從つて國內に於てはそれぞれ最も自分の得意とする處の物を作つて相互に之れが交換が行はれてゐるのであつて、即ち甲の土地は米を作るに適し、乙の土地は豆類を作るに適してゐるならば、兩者は其得意とする處に從つて互に作つた物を交換するのである。之れは經濟學上所謂地理的分勞である。若し之れが非常に經濟的であるならば、此意味を押擴めて世界各國の場合に應用すればそれは極めて合理的である。換言すればそれは世界全體が地理的分勞を實行すること

である。譬えば印度とか暹羅、安南の熱帶國は主として米を作り、米國や露西亞は麥を作る、又ブラジルはコーヒーをジヤバ、キユバ、ハワイは砂糖を、日本は國中の田畑を桑畑として世界中の要求する生糸を作ることになるとすれば、それは世界中が地理的分勞を行ふことになるのであつて、其結果は世界全體の經濟力の增加を見るに至るに相違ない。斯く考へ來れば貿易上の自由主義は單に合理的であるのみならず眞理であるといふことが出來る。

茲に於て我々は更に特別の問題に入る。日本人は永い間米を主要なる食物としてゐる國民である。而て日本は南の果てから北海道の中部位に至るまで米を產し、米作は我國に於ける農業の主要なる部分を占めてゐる。併し一度我々が世界的分勞といふことを考へた時に、先づ問題となるのは日本は果して米を作ることが有利であるか否かといふことであつて、換言すれば日本の土地と氣候は米作に適當であるか否かといふことが考究の題目となる。此疑問に對しては誰しも否と答へるに相違ない。何故ならば日本の米作の成績は南部支那や印度に到底及ばないことは明白な事實であるからである。云ふまでもなく米は暖國に適當してゐる農產物であるから、北海道あたりで之れを作るのは假令それが出來ても有利でないことは分り切つたことである。印度、暹羅、安南に於ては一年間に米を二度作ることが出來るといふやうなことは日本に於ては到底望むことが出來ない。併し或人は云ふかも知れない。暹羅、安南から來る米は所謂南京米と稱して質が惡いと。如何にもさうであるが、併し之れは耕作法の宜しきを得ざることとの特殊の事情に原因するので、決して斯くの如き國々に米作が適してゐないといふ事實を語るものではない。斯かる國で米を作る場合には日本に於けるが如き丁寧なる耕作法を用ひぬ。又肥料を多く用ふることもしない。若し印度や、暹羅で日本に行はれる如き耕作法を用ふるならば、確かに品質の良好なる米を作ることが困難でないに相違ない。此點から考へれば日本は將來國內に於て米を作るといふこと、或は之以上に水田を作るといふことがありとすれば、これは決して經濟的に有利でないことは明かである。日本人が從來と同じく米を主要食物とすることを飽く迄も繼續するならば、寧ろ米は主として外國から仰ぐことにして、我國は一層生產に適當せる生糸をより多く作るか、或は其他の商工業に全力を注ぐ方が賢明な策でなければならない。英國の如きは其實例の主なるものであつて、農業よりも商工業の方が自國に有利であると見て、思ひ切つて農業は第二位に置いたから、必要なる食糧品は大部分外國に仰ぐ方針を執つた。之れは英國が自

由貿易主義に立脚してゐるが爲めであつて、純理上英國の此遣り方は最も賢明であると云へる。尤も今日では英國に於ても農業を盛にしなければならないといふ議論が時々起るが、併し英國が果して昔の農業國に再び立返ることが可能であるかといふに、それは到底出來ぬ相談である。若し英國が自國の農業を盛にする政策を執るならば、必然に保護政策が要求されねばならない。其結果は國内に輸入される穀物に關税を課する爲めに當然穀物の價が騰貴する。果して然らば英國の勞働階級を中心として一般消費者が之れに反對することは火を踏るよりも明かである。從つて英國に於ては保護政策を行ふことは到底不可能である。若し穀物の價格を騰貴せしめずして自國の農業を奬勵することが出來るならばそれは行はれ得るが、併しそれは殆んど考へ得られないことである。何故ならば英國の土地と氣候は決して穀物を作るに適して居ない。而も東に露西亞あり、西に合衆國あつて、共に農業上に於ける大なる競爭者である。此競爭者に打克つことが出來ぬ以上英國は依然として商工業國たるべく運命づけられてゐるものと云はなければならぬ。若し我國が自由貿易主義を執ることになれば丁度英國と同じ筋道を辿つて行くに相違ない。純理論からすれば寧ろさういふ風になることが日本の利益であるが、併し實際問題としては日本は未ださういふ決定的な政策を執ることは望めないのであつて、今日の狀態に於ては日本は寧ろ保護政策に傾いて居り、貿易上明かに保護貿易主義である。今保護貿易主義の立場を執るには二つの理由がある。第一は戰爭を豫想した場合である。若し世界全體に絶對に平和が保障されると假定したならば、恐らく孰れの國と雖も自由貿易主義を執つたに相違ない。併し戰爭が何時突發するか知れぬ不安なる國際間の狀態に於いては、如何なる國と雖も第一に考へるのは食糧問題である。其國が戰時中に於て國民を養ふに足る丈けの食糧品を持たなければならぬ必要が、結局自給自足の目的を基礎として政策を樹てなければならないので、現在我國の如き外國から米を仰ぐ狀態に在る事は政治家の神經を非常に惱まして居るのであるが、此事あるがために我國に於いては常に農業を保護しなければならぬ必要が考へられて居るのである。甚しきは農業本位で行かなければならぬと主張する者もある位であつて、さういふ人々は常に日本が英國の如くなることを望んで居ないのである。第二は人口問題に關してである。人口が次第に増加する現在の趨勢に於いては、一方に於て内地に於ける穀物の生産の増加が之れに伴はなければならないことは當然である。併し我國の如き土地面積に限りある場處に於いては、無限に人口の増加に從つて食糧の生産の増加を

計ることは到底不可能である。茲に於て爲政家に依つて種々の政策が案出されるのであるが、先づ第一に誰の頭にも浮ぶのは植民の問題である。人口が增加すればそれに從つて外國に植民するといふことは最も普通に考へられることであるが、併し此事は日本にとつては既に決定的な問題となつてゐる筈である。何んとなれば日本は外國に國民を送り出すことは事實上不可能なことが證明されてゐるからである。今日米國や濠洲が日本人に對して固く其門戸を閉す以上、我々日本人の行くことの出來る場處は單に滿洲か西伯利の方面に限られて居るが、併し斯くの如き場處に日本の勞働者なり、小作人が移住出來ないといふ理由は、彼の地に於ける勞働者の賃銀が日本內地に於けるそれに比較して非常に廉いことを見れば直ちに了解の出來ることである。斯くの如き事情から現在我國は人口の調節問題を考へなければならぬ立場に在るが、外國を依賴しないで我國の面積に相應した人口を支へて行く政策を決定することになれば、結局我國は保護貿易主義を採用することにならざるを得ない。何故ならば自國で生產する食糧が支へ得る程度の人口を持つことになりさへすれば、外國から從來の如く食糧の供給を仰ぐ必要がなくなり此政策を決定する以上外國から輸入される米に對しては現在の如く課稅して、內地の農業を保護することは當然であるからである。私は純理論としては自由貿易主義に賛成する者であつて、世界の文明が或程度迄進步すれば必ず自由貿易が完全に行はれる時代が來ると信ずるが、現在の狀態を以てすれば我我は寧ろ自給自足主義で行くべきであつて、殊に人口問題の如きは之れを外國に對する植民に依つて解決せんとする如き依賴主義を棄てゝ自分の國民は自分の國內で養ふ方針を確立することが現在に於ては最も賢い策であるとする以上或程度の農業上の保護政策は認めなければならない。尤もさういふ場合に米の生產は個人の手に任せないで之れを國家自らの經營とし、日本の如きも國家が投資して新らしき土地の開墾を助成する等の方法を執ることの必要あるは勿論である。斯くの如くして一方に米の生產を增加し、同時に他方に於いて人口の增加を阻止する方法が將來否やでも應でも講ぜられなければならない時代が來ることを信ずるのである。

食料問題に就いては、猶我々の考へなければならない一の重要なる問題がある。日本人が米を主要食物としたといふことは傳統的の事實で今更らこれを如何ともすることは出來ないが、此事は實は日本人にとつて非常に不幸な事であつたと思ふ。若し日本人が南洋あたりから來たものとするならば、其祖先が昔米を食物としてゐたゝめに、熱帶から溫帶に移住した後も米を常

食とするに至つたものであらう。違つた氣候、違つた土地に來住した時に、日本人は其土地に適した穀物を作ることを心がけたならば今日のやうな不便を見ることはなかつたであらうが、今日我々は或意味に於いて米のために少からぬ困難を感じて居るのである。日本人は米に代るべき食物を食ふ習慣をつけられるかどうか、之は重大なる問題であるが、將來猶日本人が米を常食とする習慣を通すならば確かに一層多くの不便と困難とを感ずるに相違ない。個人經濟の立場から考へても、理屈は同じで、若し一家族が魚は食ふが肉や野菜は好かないといふことがあれば一家は或場合に忽ち不便と困難を感じるに至るであらう。譬へば暴風雨等のために魚が不獵になると、忽ち食ふものに差支るであらうし、又魚の價の騰貴に依つて直ちに一家の經濟に影響を受けることもあるに相違ない。若し其家族が魚肉、野菜の孰れでも自由に食ふことが出來るならば、一種類の食糧品が高くなれば他の食糧品を消費することが出來るからそれは個人經濟の上から云つて重要な問題である。これを國民全體に押擴めて考へても亦同樣である。米でなくてはならないといふ考は偏見であつて、米も好し、麥も亦好しといふことになれば國民生活の上に於いて甚だ便利である。第一麥は米に比較すると世界中に於いて産額が一番多く、而も産額が多ければ多い程價格の變動が少いといふ特色がある。米は凶作時に於いては直ちに價格に影響するが、麥の生産は世界的であるがために、世界の一部分の凶作は其全體に對して殆んど影響がないと云つてい丶。故に日本人は米食人種としての習慣から全く解放されて、米麥の孰れをも食し得る國民となれば、現在の困難なる食糧問題は餘程緩和されることゝ思ふ。次いでに米に代るべき食糧品の一つとして馬鈴薯のあることも注意しなければならない。馬鈴薯は同じ一反歩に之れを作るとすれば小麥に比較して殆んど六倍の收穫がある。(但し此場合馬鈴薯は重量で計るから、馬鈴薯は小麥に比べて水分が多いので、水分を引去れば三倍位に當るであらう)而も馬鈴薯は榮養價に富み、食糧品として適當である。アダム・スミスの「國富論」の中に面白いことが書いてある。それはロンドンに來て居る愛蘭人が概して男子は體格よく、十分に勞働に堪え得られる資質を有してゐるが、婦人も亦一般に非常に美しく、ロンドンの娼婦の中には愛蘭人が多い、これは要するに愛蘭人が馬鈴薯を常食として居ることに原因して居るといふことを云つて居るのであるが、日本人としては食糧問題を考へるに當つて、一つの興味ある參考として注意すべき點である。日本人でも農學者の中には盛に馬鈴薯を奬勵して居る人がある。或學者の如きは東北地方に於いて米を

作ることは非常な間違ひであるといふことを云つて、東北地方の氣候の不良なること、秋に早く涼しくなるために米の發育の不良なること、平均十年に一回位凶作が來ること等を指摘し、米に代ふるに全部馬鈴薯を作ることになれば間違ないとして其耕作を奬勵して居る人がある。食物の嗜好は一々人間の趣味、習慣に從ふものである。故に小供の時代から食物に對して趣味と習慣性を作れば之れを嗜好品とすることは困難ではない。馬鈴薯も亦其料理法と相俟つて美味なる食料品たり得る。或人は之れを巧みに料理すれば米の代用品[illegible]。我々は食料問題を考ふるに當つて斯かる微細なる點にまで十分注意を拂ふならば現在の此困難なる問題は案外容易に解決することが出來ると信ずる。

食糧問題と大陸發展策

有元英夫

食糧問題に對する國民的苦鬪

わが國民は神代の昔しから今日まで常に食糧問題のために慘憺たる苦鬪を續けて來た。わが國に個有の科學、藝術、產業の顯著なる發達を見なかつたのは、全く國民が食糧獲得のために全力を傾注して敢て他を顧るの餘裕がなかつたことも慥にその一原因であつて、「農は國の本なり」といふ語は昔から一般の知識階級が用ゐた標語であるが、かく農を以て國の本とし、農のために全力を濺かねばならぬ國柄であればこそ、近代まで殆んど半未開國として東洋の一隅に存在してゐたことを思へば農が國の本であるのは我國としては必ずしも難有いことでも無かつたやうに思ふ。

元來わが國は決して農業國たるの他國に比し優越なる要素を備へてゐるのではない。地勢からいつても廣漠たる大平原がある譯でなく、僅かに河川の流域に於ける沖積層に幾分の平野が所々あるに止まり、大量の農產物を產すべき大沃野は之を見る

ことが出來ない。それならば地味が肥沃であるかといへば、歐洲諸國の土壤に比して決して優つて居らぬ、寧ろ或る要素は我國の土壤中には可なり缺如してゐるのであつて、わが國が氣候溫和、地味肥沃と自謗してゐたのは世界的に廣い知識を持たなかつた時代の形容に過ぎない。尤も氣候溫和といふことは間違のないところであるが、その氣候溫和たるや人間の生活には頗る好適の條件を與へるが、反之農業上には氣候溫和が却つて農業國たるの價値を著しく低下してゐるのである。尙ほ我國の氣候が濕潤に過ぐること、毎年必ず低氣壓が我國を見舞ふこと等は農業上頗る不利な點である。かくの如くわが國は農業國としての條件が比較的劣つてゐたからこそ、是非とも農を以て國の本として、一生懸命で食糧問題の解決に努力せねばならぬ運命を持つてゐたのである。わが國が世界に稀なる農業國である抔と考へてゐる人もあるかも知れぬが、それは大ひなる間違である。

如何に我國民が食糧問題のために苦闘を續けたか、それは歷史に殆んど上されてなく、歷史家にしてそこに着眼するものが殆んど無いが、食糧問題は決して今日にはじまつた問題ではない、却つて昔しに遡るほどこの問題は國民の經濟生活に深刻なる影響を與へたのである。

米に對する嗜好心の發達

わが國は昔しから米食種族と雜穀食種族との二つに分れ、米食種族は貴族軍人等の上流階級で雜穀食種族は主として農民であり、從つてそれは下流階級に屬してゐたのである。下流階級が上流階級の生活樣式に憧憬を持つのは人情であつて、米食の如きは下流階級にはこの上もない羨望の的であつた。けれども上流階級は農民の米食を禁じ、また米食をなし得るだけの經濟的餘裕を與へぬやうに苦心した。故に下流階級の人々は機會さへあれば米食の生活に移らんとを希望して已まなかつた。かくの如く米食はもと貴族の食料であり、國民は擧げて米食に對し强烈なる熱愛心を持つに至つたがため、我國人の味感は米について特殊の發達を遂げ、從つて商品としての米は味覺を以てまづその品位を定むるやふになつたから、生産者たる農民は消費者たる上流階級から收穫增收を强要せらるゝばかりでなく、味の點について種々の要求を受くるが故に農民は二重の壓迫を感じなければならない。かくして我國民の間に米食の風が都鄙を通じて盛んとなりつゝあるばかりでなく、その嗜好に對する味覺能力も漸次向上し、同じ米でも下等米や外國米ではもはや滿足せぬ人々が多くなつたから、こうした事情によつて食糧問題

は益々困難を告ぐるに至つたのである。若し我國民が、外國米でも何でも米でさへあれば好んで食し得るやうになれば、食糧問題の解決も比較的容易であるかも知れぬが、かく米食に對する品質的嗜好が發達しては益々以て國民は食糧問題のために苦しまざるを得ぬわけである。

農業奬勵も代用食奬勵も不徹底

近頃よく米に代るべき食物について研究し、之を奬勵する者もあるが、之は全く實行不可能の事であつて、例へば麥食の如きも、一般に普及に容易なる如くでその實なかく困難なのは、我國民性とも稱すべき米食に對する愛好心が歴史的に發達して來た結果であるから、米食を廢せしめやふとしたところで、一時的には行はれるかも知れぬが、永久に實行するのは不可能であるといふ理由によるもので、まして同じ米でも味覺に對する欲求が益々發達せんとする狀態を無視して、米に代るべき常食を奬勵することによつて食糧問題を解決せんとする如きは寧ろ無謀の擧と云はねばならぬ。假りに代用食を國民に奬勵せんとするにしても、上流階級または都會人が率先して之を實行するやふに仕向けて後に、はじめて一般國民に之をならせるやふにするのが至當であるにも拘らず、嘗て行はれた如く、まづ農民に向つて馬鈴薯食や麥食を奬勵する如きは全く矛盾の甚だしきもので、いくら宣傳に力を入れても、到底成功する筈がない。

食糧問題解決の一方法として米產增殖に全力を濺がんとする主張もあるが、もと農業國として優越なる條件を具備して居らぬ我國內地に於て、いくら農業を奬勵したところで、これ以上大して米の生產額を增すといふ方法も立たない。しかも我國の人口は年々六七十萬人も增加しつゝあるが、一人當り一年の米消費量平均一石としても、年々六十萬石の米の增收を求めなければならぬ。しかも國民生活の向上と共に一人當りの米の消費量も年々增加しつゝある狀態を考へたならば、いくら農國本を主義として一生懸命農事の改良發達を圖つてもそれだけではとてもその根本的解決は望まれないであらふ。

食糧問題の解決が、農業の發達によるも、將又代用食の研究によるも望みがうすいものとするならば、勢ひ茲に國民の一部を外國に移す、即ち植民事業の振興を圖るか、或は外國から豐富に食糧を安全なる方法を以て經濟的に輸入し得るといふ手段に考を向けなければならぬことになる。

大陸の農業植民

食糧問題解決のための植民は勿論農業植民でなければなら

ぬ、殊に、出來るならば米作地に植民して、その生産米を內地に輸入し得るやうな方法が立てば頗る結構である。國民の一部が他國に移住することそれ自身が內地食糧の節約になるけれども、その數量は大したことはない。かゝる意味に於ける米作植民に最も適するのは先づ手近にある滿蒙西伯利亞方面である。是等の地方には近時我國民の手によつて幾分米作事業の端緒を開き、その地方が米作に適し、しかも產米が日本米に近い品質のものであることが明かとなり、たゞ經濟的に發展の餘地があるか否かについて問題が殘されてあるのみであるから、相當の方法を講じたならば、是等の地方の米作は日本人の手によつて發展せしめることは必ずしも不可能ではない。尤もそれは到底個人の力では及ばないから國家的事業として計畫すべきは勿論である。

我國は農業の改良發達のために每年巨額の經費を投じつゝある。勿論その額は他の經費、例へば軍事費なぞに比すれば問題ならぬほどの僅少なるものであるが、もと〳〵農業國たるの資格のない我國の內地に於て、いくら之を硏究奬勵して見たところで、これ以上農業を發達せしめ、農產物の增收を圖る如きは、經費のみ多くを要して經濟的効果は遞減する結果になりはせぬか、少なくも米作の如きは如何に耕地を擴張し、收穫の增加を圖つても、その結果は大して顯著に現れ得ない事情を考へたならば、若しこれ以上國家が食糧問題解決に經費を投ぜんとするなら、寧ろそれは農業植民の方に費つて、大陸に於ける米作の發達を促した方が得策ではないかといふ說も强ち捨てたものでもないと思ふ。尤も內地の農業奬勵に對しもつと多くの經費を投じ、更に農業植民に經費を投じ得る餘裕があるならばそれに越したことはない。

併し植民政策によつて食糧問題の解決を策するにしても、これまでのやうな方針では到底見込がない。何となれば、これまでの我國の植民は主として個人の金儲けが中心となり、食糧問題といふやうな國家的意義を持つて行はれたことがないから、植民事業に對する政府の保護も一二の移民會社に多額の經費を補助し、移民を保護するのでなくして會社の經營を保護する如き結果を來し、これまで移民が移民會社のために苦しめられた幾多の例を殘してゐるから、政府はかゝる營利本位の移民會社に種々の援助を與へる代りに、何等か移民そのものを保護する方法を取つたならば、もつと國家的植民事業は發展するに違ひない。例へば組合組織によつて移民を行ひ國家は產業組合に種々の援助を與ふる如く、移民組合に對して金融その他の援助を與へるならば、これに對する一層保護が徹底するであらふ。滿蒙

の農業移民にしても單に東拓會社の如きに任して置いても駄目であるから、更に産業組合法による移民組合を組織して、國民**自らの自治的努力によつて彼地に移民を企つれば将来必ず好結**果を持來すものと思ふ。勿論之が實行には國家は相當の經費を投ずることを惜しんではならない。大陸方面が日本人の手によつて經濟的に米作の發達を見るに至つたならば、人口過剩に苦しんでゐる農村の人々は進んで大陸に移住し、かくして却つて内地の農村も救濟され、移住者も自由の新天地に活躍することが出來、行く人も殘る人も共に幸福の生活を樂しみ得る。滿蒙は日本人の農業移民に適せぬといふ議論も可なり有力で、また實際現在それを裏書する種々の例を見るが、國家的援助によつて相當の施設をしたならば、必ずしも悲觀すべきものではない、勿論過去の歴史に鑑みて、容易にそれが成功するものとは思はぬが、日本人が農業植民によつて食糧問題を解決しやふと思へば今のところ大陸發展より道が無いのであるから、この方面についてもつと積極的の研究調査を試みる必要があらふ。

支那の防穀令を撤廢せしめよ

我國が耕地狹小のため食糧問題に苦闘しつゝあるにも拘らず、お隣りの支那は尨大なる土地を包有し、巨額の米を産出しつゝある。しかも支那の産米は品質に於て日本米に大して劣らないから、**所謂外國米とは違つて日本人の口に適する米を巨額に産し、しかも價格が頗る低廉である。**のみならず、何しろ大國であるから、少し豐作であれば、千萬石や二千萬石の米を輸出する位は何でもないほどの能力を持つてゐるから、我國は支那米の輸入によつて食糧問題を解決せんとするのは頗る都合の好いことで、しかも簡單に行ひ得るのであるが、惜しいことには支那には防穀令といふものがあつて、國外に米を輸出出來ないことになつてゐる。故に之によつて我國が利益を受くることは今のところ絶對に出來ない。

支那は廣大なる沃土を持ち、農業國として發展の餘地頗る大でありながら、農業の技術は頗る幼稚で、この點に於ては我國よりも遙かに後れてゐる。且つ防穀令のために米の價格が向上しないから、農家の收入は頗る貧弱で、彼等の生活は日本の農家よりもずつと低く、今でも徳川時代の農村の程度の文化しか持つてゐない。かく支那の農業が少しも發展せず、農民の經濟が向上しないのは、全く防穀令の存在するためで、防穀令は、米の消費地たる北支那地方の人々には都合が好いけれども、南支那の農民にとつては、經濟的發達の一大障害となつてゐる。この防穀令なるものは支那農業の發達上非常なる惡法であるか

ら、早晩撤廢されることゝは思ふが、我國としては寧ろ積極的に支那に對して防穀令の撤廢を求め、日支經濟的提携の一手段たらしむべきである。隣りの支那に於て食糧が豐富で、今は豐富でなくても、農業の發達を圖れば豐富に食糧を生産し得るにも拘らず、日本が食糧問題に苦しんでゐる如きは、國際上の關係はあるにしても、全く人類生存上の不自然な現象である。故に我國が支那に對して極力防穀令の撤廢を要求するならば獨り人道上から我國の食糧問題解決に資せしめんためばかりでなく、支那の農業を刺戟してその發達を促進し以て農業國としての富源を開發し支那の國民の經濟的向上を圖らんがためである。

要するに我國民が米食といふ慣習に囚はれてゐる間は永久に食糧問題と苦闘せねばならぬ。けれども國内で苦闘を續けることは最早徒勞である。寧ろ海外發展、即ち植民と國際的交渉によつて之を解決すべく努めねばならぬ。このために日支の經濟的提携は頗る緊要なる問題として愼重に研究せねばならない。尤も海外發展といつても過去の如く資本主義的組織の下に徒に資本家の懷をこやすやうな手段では到底發達の見込が無い。滿蒙の農業植民にしても、支那の防穀令撤廢にしても、利權に對する資本家の飛躍を一蹴して國民と國民との間に人類の幸福世界の平和といふ大きな目的の下に交渉を進めなければならぬものと思ふ。

食糧政策の確立

法學博士　堀江歸一

一

食糧問題が經濟上に、社會上に重要なる關係を有することは論を俟たない。一國の土地が豐饒であつて、其處に産出される食糧の豐富である一方に、之を需要する人民の數が多くないとか、人民の數は相當に多くつても、其産出に係る工藝製造品を

外國に輸出して、後に外國から食糧の供給を受けることが出來るとか云ふが如き場合には、特に食糧問題の議す可く、論ず可きものはないのであるが、是等に反對する事情が起つたとしたならば、必ず食糧の供給不足、供給の缺乏に伴ふ價格の騰貴に依つて、食糧の消費者が生活上に困難を訴へることは、論を俟たないのである。

然らば食糧價格の騰貴が都會の消費者を苦しめることは、必至の勢であるとして、一方に此事は其反對の地位に立つ農村の生産者に利益を與へ、一方の利益に依つて、他方の損失を相殺する働きを生ずるかと云へば、大體論としては、斯くも見られる。現に我國に於て農村が價格の騰貴した米を賣つて、繁昌して居る時代には、都會の下層に居る消費者は米の購入に所得の大部分を投じて、生活難に苦惱すると云ふ現象が認められる。然しながら社會全體の生活を健全ならしめよう、常調を保たしめようと云ふ見地から云へば、一方の損失が他方の利益に依つて償はれるからと云つて、之を平然たる態度の下に眺めることは不可なりとしなければならないのみならず、右の如き觀察に對しても、自ら或る限度の存するものがある。食糧價格の騰貴が通貨の膨脹とか、一般生活程度の上進とか云ふが如き原因から、生ずる場合には兎に角、産出額の不足から生ずるとしたならば、食糧の價格は騰貴しながら、斯く産出された食糧品に依つて、地方に於ける農民に從來と同樣の繁榮なる生活を營ましめるを得ざることゝ爲る。啻に然るのみならず、地方農民の間にも自己の生活を營む爲めに、他から米を買入れる者があり、内地米を賣つて外國米を買ふ者もある。自己の産出する米を賣ると共に、其一部を殘して、自家の用に充て、一年を通じて、常に賣る可き米を備へて居る者は大農又は中農の上位に居る者であつて、他の小農殊に小作農に爲れば、收穫期から、翌年二三月頃までに、米の殆ど全部を賣却して、自己の生活に必要なる物資を購ひ、其以後に於ては、米其ものをも購つて、生活を送らなければならない。而して我國には此種小作農が全國を通じて、頗る多數を占めるのである。果して然らば我國に於て米價が騰貴する、殊に其騰貴が供給不足の關係から來る場合であるとすれば、其地方の農民多數に對して、有利であるとは斷定するを得ない。殊に我國に於ける米價の變動には亂高下の伴ふことを以つて、一の特徴とする。此事たる、畢竟米が小麥と異なつて、國際的商品に非ずして、孤立的商品であり、凶作に當つて、國内の供給如何に缺乏したからと云つて、同質の米を外國から輸入して、其缺を補ふを得ないと共に、如何に豐作の爲めに、國内の供給過剩を告げたからと云つて、其一部分を外國

に輸出するを得ないと云ふ大なる缺陷を有することに基く。斯くて端境期に於ける天候の如何が、農家の一年間に亙る勤勞を意義あるものたらしめるか、其れとも無意義に終らしめるかを決定すると共に、一年間に亙る米價の騰落を支配するに就て、大なる力を持つことゝなる。米價の決定に就て、餘りに自然が大なる威力を持つことは吾人の驚嘆する所である。固より我國民に米穀の供給される源泉は内地生產、朝鮮米移入、臺灣米移入、外國米輸入の四種に分たれるけれども、是等の内で最も重要なるものは内地生產の分であつて、然も其數量が極めて短き期間に於ける天候の如何に依つて決定され、需要に對して時に甚だしき不足を告げると共に、時に多大の過剩を生ずるとすれば、米價の安定せざることも亦敢て怪むに足らないであらう。

二

米價の時に騰貴し、時に下落することは、我國に於て、農村全體の經濟を混亂せしめる所以と爲るのであつて、殊に其騰落の變の甚だしき場合に然るを見るのである。世人の内には、近年地方の農民が純朴の精神を失ひ、總てに於て投機を事とする、都會に於て經濟上の好景氣を告げるや、地方農民の内には都會と連絡を通じて、株式投機に狂奔する者があると云ふような非難を試みるようであるが、從來の如く米價の變動の劇烈なる狀態を示す場合にては、農家の米を賣却すること自身が大なる投機的取引であつて、如何なる時に幾何の米を賣るのが利益であるか其れも一時賣控へて、他日を持つのが更に利益を大ならしむる道であるか、農家として日夕考へなければ、一家の經濟に大なる影響を及ぼす以上は、更に一歩を進めて彼等が株式投機に從ふのも、亦當然の成行であると認められる。近來我國の農村には小作爭議の著しきを見る。固より小作人の團結が鞏固と爲り、農民殊に勞働者の都會移住が行はれ、加ふるに農業其ものの利益の充分に收められざる今日に於て、此事あるのも、敢て異とするに足らないであらうが、若しも米價が從來の如く劇變せず、或る程度に安定して居つたならば、我國の農村の如きも、經濟上に於て餘程安んずる所を得たことゝ考へられるのである。

三

玆に於てか食糧政策を確立すると云ふ問題は第一、如何にして我國民に供給される食糧を豐富ならしめるか、第二如何にして内地に於て產出される食糧の價格を公正確實のものたらしめるかと云ふ二個の問題に歸著するのである。第一の問題に就て

考へるに既に述べた如く、我國に於て米の供給される源泉は內國臺灣朝鮮外國の四種に分たれるのである。內地においても耕地整理、反別擴張、植付其他の改良等に依つて、從來以上に產額の增加を期することは或は實現し得るとしても、固より或る限度があり、價格の騰貴の伴はざるを得ざる以上は、產額增加を期するを得ない。斯の如きは供給を豐富ならしめる趣意に適するといふを許されないであらう。

斯くて食糧の供給を豐富ならしめるに就ては、植民地並に外國の產米增加に依賴することを必要とする。此點に就て第一に着目されるのは臺灣朝鮮米であり、殊に朝鮮の如き、農業を以つて殆ど唯一の產業として居る次第であるから、一方で治水事業を完成し、不時の災害に依つて、田畑の荒廢する弊を防ぐと共に、他の一方で內地人の資本を誘導して、農事改良に力を致さしめることとしたならば、假令從來の如く朝鮮や滿州に於ける需要に應じたとしても、其以上に尙ほ內地人に對する供給を豐にするだけの朝鮮米の產出されることが望まれるであらう。

四

更に我國に於ける食糧の供給を豐富ならしめるに資するものは、外國米の產額增加である。假に支那が防穀令を撤廢して、米の輸出を自由にする一方に、邦人の資本に經營をなさしめて農業に遷へて、米作を盛にするとしたならば、我國の食糧問題に於ける局面を轉換せしめるに足るであらう。支那にして近年の如く農業國を以て滿足せず、自國の經濟を或る程度まで工業化することを必要とし、此點に於て百方運動して居る以上は、其方便として如何にして國內に於ける資本の供給を豐富にするかと云ふ問題を解決しなければならない。農業國の狀態に居りながら、資本の供給を增加しやうとするのは、聊か困難なるが如くであるが、其有力なる方法と爲るものは、原始的產業から產出される物資を無限に外國に賣却するの一事であつて、此事を除いては、支那をして工業的に、又資本的に自立するの道に就かしめるを得る工風はない。然るに支那が從來動もすれば鎖國的經濟の陋習を脫するを得ず、米に對しては勿論、鐵鑛に對しても開掘制限、輸出禁遏の方針に出でるのは、立國の大計を誤却したものであつて、日本の如き宜しく支那に向つて、其誤りを匡し、自由の經濟政策を取らしめなければならない。斯の如くして自ら我國をして食糧の供給を豐富にし、又其價格を低廉にし、以つて食糧政策の確立する機會に就かしめるを得ることゝ爲るのである。

然しながら斯く外國から廉價なる米穀が豐富に內地に輸入さ

れ、其結果として内地の米價の低落することは、勢の免れ難き所であるが、其場合に内國農業の蒙る打撃は之を如何にするかと云ふ問題が生ずる。今日と雖も、我國の農業は全體から見て、疲弊困憊して居る、其爲めに社會上に種々の面白からざる事相を生じて居るのも、亦事實であるが、其れにしても農村が潰滅する悲運にまで到來しないのは、一方に諸地方の農村に養蠶業、製絲業、織物業等の副業の行はれ、他の一方に或る時期に、穀物價の騰貴する以上に、米價の騰貴することがあるからである。然るに今、外國米の供給の豐富と爲り、又其價格の低廉と爲る勢が繼續して行はれ、内地に於ける米價の下落することが確定的事實と爲つたならば、我國の農村殊に穀物の産出を主たる事業とする農村は如何にして其命脈を維持するを得るごあらうか。農業を以つて、國の大本とするが如き古風な考を懐く者はないとしても、農業を外國米の輸入に依つて、衰微するに任せる、然も短日月の間に衰微する勢を馴致して、顧みないと云ふことに就ては、其處に大なる問題を生ぜざるを得ないのである。

五

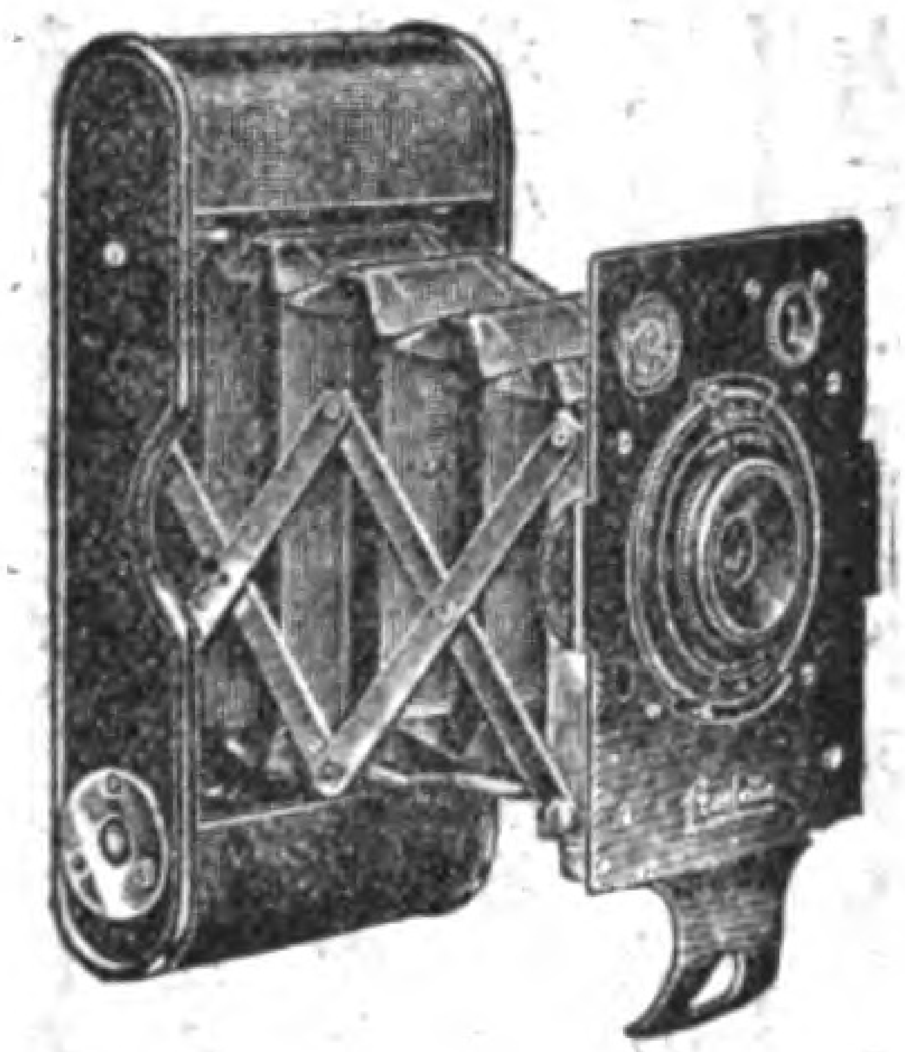
従來我國に於て、米の輸入に相當の輸入税を賦課したのは之に依つて國内の米價を或る程度に維持し、以つて内國の農業を保護する目的に出でたものである。近年に至り凶作時に課税を免除する一方に、豐作時に之を賦課し、恰も往年英國の穀物條例に於て行はれたスライデキング、スケールと同様の制度を見ることゝ爲つたのも、要するに内國農業の保護と國民生活上の負擔に於ける緩和とを或る點に於て、調節せしめる趣意に基くものと考へられる。斯る制度の運用に於ける適否は姑く措き、我國に於て外國米の輸入を自由にしない、或る場合に臨んでは、課税に依つて、其輸入を遮斷する方針を取つて、憚らないと云ふことの明瞭なる場合には、外國の米産地方に於ては、我國を以つて各自の地方に産出される米に對する正規の需要者を以つて見るを得ず、隨つて我國に供給することを目標として、米を産出しない、偶々産額過剩の場合に、日本に於て、米を需要すれば、之に應ずるが、特に日本に供給する目的を以つて、過剩と爲る程度の米を産出することに勉めないのである。我國に於て凶歉に際し、大に外國米の輸入を必要として、外國市場に於て、若干の買付を爲せば、直に其價格に騰貴を來して、外國米の故を以つて、必ずしも低廉なる價格を以つて、輸入するを得ないと云ふ嘆聲を生ずるのも、要するに此邊の事情に據るものと考へられる。

故に食糧政策確立の見地から、外國米の供給を必要とする以上は、我國は外國米に對する輸入税の如き、之を撤廢するは勿論、今後永久に斯る課税を爲さゞる方針を宣明し、外國の農業者をして安んじて我國の年々需要する米の分量を推算し、之に應ずる供給を爲すだけの生産を營むに至らしめなければならない。唯曩に述べた如く、此方針の下に、外國から廉價なる米が盛に輸入され來つた場合に、其内國の農業に及ぼす打撃を如何にして緩和するやと云ふことが一個の問題として殘るのであつて、其れには過渡的手段として、國家の力を以つて、米の最高最低價格を公定し、米價をして兩者の範圍内に高低せしめる方法を取るの外に、適當なる道が見出されない。兎に角食糧問題に關する議論は隨分紛糾して居るし、又實際に米價の變動は急劇であつて、其變動の起る度毎に、社會に容易ならざる影響を及ぼしつゝあるに拘らず、根本政策の確立せざることは、私の遺憾とする所である。供給の饒多と價格の確實との二つを目標として、根本政策の定められるのは、今日の急務であつて、私が概略ながら所見の一端を述べた次第である。

THE NEW

VEST POCKET CAMERA

"PEARLETTE"



パーレット出づ!!
パーレット出づ!!

新時代の要求に適應した

完全無比のベストカラメ

M・A附 十七圓

デルタス F6.8附 二十五圓

特徴

一、他のベスト型カメラに比し最も輕量なること

二、堅横何れにも直に三脚を取り付け得らるゝこと

三、オートフネーカス式なれば補助レンズなくして極近撮影自在なること（實用新案登錄濟）

構造體裁共に他より絕對優越す

東京 本町二丁目　**小西六本店**　支店 大阪長堀橋



新劇回顧錄

長田秀雄

一　小序

我が國に新劇の運動が勃興したのは、さう古いことではないやうに吾々は考へてゐるが、坪内博士の文藝協會と、小山内氏、市川左團次氏の自由劇場とが、共に明治四十二年に設立されたといふ事實から考へると、既に十七年の昔である。成程さう云へば、當年新しき演劇の理想の下に若々しく立ち働らいた人々も、多くはもう初老を越えて鬢髮の白きを歎じてゐる。

然るに、新らしき演劇はまだ〳〵名のみであつて、事實劇界を風靡してゐるのは、舊歌舞伎劇の勢力である。元來、凡ての藝術のうちで、演劇ぐらゐ保守的なものはない。それもその筈である。文學や、美術や、音樂は、一部の有識階級を相手としても十分存立して行けるが、演劇は復雜な、そして設備に非常な金子のかゝる藝術であるだけ、成るべく多くの觀客を吸收して行かなければならない。だから、どうしても保守的になりがちであるのは、已むを得ない譯である。

一方には自動車と倶樂部と、そして、オッフィスの生活を送つてゐる紳士があるかと思へば、一方には未だに閑寂な四疊半程で苦茗をすゝりながら、俳句でも作つてゐやうといふ閑人があるのが現在の日本の國民の生活である。國民の思想と、生活とが、現代のやうに區々になつてゐる時代は、恐らくこれまでなかつたであらう。かういふ生活と思想の混亂時代は、決して演劇に對して惠まれた時代といふことはできない。劇界の主潮を支配する興行師と俳優とは、かういふ時代に冒險的な演劇の革新に努力するほど愚かではない。即ち謹んで父祖傳來の歌舞伎劇

の孤壘を守り、今年は默阿彌、來年は南北と、徳川末期の夢の國を電燈の光眩き鐵筋コンクリートの劇場で、蒸返し擴げて見せてゐる。

陳套な歌舞伎劇が、現代と何ういふ交渉があるかなどゝ今更開きなほるまでもなく、芝居が既に離れかゝつた人心をつなぐ爲にどれほど苦勞をしてゐるかといふことを考へれば、既に歌舞伎劇の現狀ももう長いことはあるまいと思はれるであらう。早晩劇界にも革命がくるであらうといふことは、識者を待つまでもなく。既に當事者が痛感してゐるところである。現代の人心はキネマとラヂオと。そしてスポーツとに熱中してゐる。丁度徳川明治の人々が、芝居と角力に熱狂したのと同じ狀態であらう。しかし、人間の肉體が亡びない限りは、彼自身の線と肉聲とを生で見せる演劇の藝術が、人々の感興を惹き得ない理由はないと、私は信じて疑はないのである。

演劇革新の運動は、これまで歌舞伎劇の發達と共に影の形に添ふが如く常に現はれてきた。その度に革新を志した天才の豐かな俳優や作者が、歌舞伎劇のうちに新生命を切開いてきたのである。閑かな鎖國の夢に耽つてゐた徳川時代は、それでよかつた。即ち國民生活の全部を抱擁した藝術が、歌舞伎劇であつたから、革新の運動は、つねに却つて歌舞伎劇の內容を豐富にしたのである。

然るに、突如として維新の大業が現はれて、國民の生活は全く一變した。即ち生活の樣式が、次第に歌舞伎劇からはみ出してきたのである。しかし、明治の維新はまだ／＼外面的であつたが爲に、生活の形式は變つたが、思想の上にまでさしたる變化はなかつたと云つてもいゝ。且つ加ふるに太陽が沒せんとする時、却つて斜光を華やかに投ぐるが如く、歌舞伎劇の最後を飾る幾多の名優が輩出したために、當然息を引取るべき歌舞伎劇が玆に四五十年の餘命を伸し得たのである。

無論、明治の年代にも屢々演劇革新の叫びは擧つた。例へば市川團十郎を中心として、末松謙澄、依田學海、福地櫻痴、其他伊藤、井上、大隈の政治家連、澁澤、大倉、安田の實業家連、又學者としては外山、穗積、和田垣など殆んど一代の名士を集めた演劇改良會が、明治十九年八月設立され、十月三日一ツ橋の講堂に於いて演劇改良の意見を演說したやうなのが、それである。演劇改良會は當時の極端な歐化熱から生れたもので、今から思へば餘程可笑しな點もあるが、しかし當面の人たちは可なり熱心であつた。外山正一氏の如きは會員の肩書を以て、「演劇改良私考」といふ著作をすら發表したくらゐであつた。そして、築地の大枝樓に發起人が集まつて、依田學海、川

尻寶史 兩氏合作の「吉野拾遺名歌譽」といふ脚本の本讀をした。劇場關係者でその席上に列つたのは、市川團十郎と、有名な興行師の先代守田勘彌とであつた。改良會の意見は全然在來の芝居とはちがつて、床（ちよぼ）、花道、廻舞台などの廢止を强調し、尙ほその上に舞台上の男の役は男優に、女の役は女優に演ぜさせようといふのであつた。

一方、坂本町の銀行集會所へ、改良會の發起人のうち澁澤榮一、福地源一郎、安田善次郎、大倉喜八郎、千葉勝五郎、穗積陳重などの諸氏が集まつて、協議の末劇場を新築することを論議した。そして、英國人コントル氏に新劇場のプランを作らせた。そのプランは間口百八フート、奥行二百五十フート、三階建、煉瓦造りで、位置はなるべく停車場附近に選定するとのことであつた。この新劇場は資本金二十五萬圓の株式會社であつた。

演劇改良會は團十郎以外の俳優其他守田勘彌等劇場内部の人たちが、外面は兎も角も、心の中では贊成しなかつた爲に遂にその理想は實現することができなかつた。が、しかし、その翌々年明治二十一年になつて、又形を變へて現はれてきた。それは演劇矯風會である。會長は田邊太一氏で、此度は團十郎と菊五郎とが贊成をした。そして、七月の八日に鹿鳴館に於いて發會式を開いた。當時の鹿鳴館は朝野の紳士淑女の華やかな交際場であつた。舶來のシャンデリアの輝く下で高貴な紋章を誇んで、明治初年の日本人たちが、古めかしい洋裝でシャンパンの醉ひに任せて恣に踊り狂つた場所である。この鹿鳴館を中心としたのが、明治文化史上、並に政治史上に有名な所謂鹿鳴館時代である。その時の來賓は、皇族方を始め要路の貴顯紳士で、妃殿下は勿論、令夫人同伴であつたから總員一千餘名に達して、非常な盛會であつた。守田勘彌はこの會に對しても、矢張り反對の意見をもつてゐた。さて、開會は午後一時卅分、番組（プログラム）の通り花柳師弟の「四季三番」を先づ第一に演じ、終つて休憩、それから立食の饗應に移つた。そして、餘興として、團十郎の娘實子、ふき子が作歌稅所篤子、節附杵屋正次郎夫妻、團十郎振付の踊を踊つた。それが濟むと、高浦正風作歌の「かざしの菊」を團十郎が踊り、物集高見作歌の「水の江」を菊五郎が踊つて大喝采を博した。

矯風會は其後十二月廿三日第二回を久松町千歲座に於いて開いた。その日は東京の名題役者全部を以て、三幕ばかりの狂言を演出する筈であつたが、いろ〳〵の事情で、「先代萩」と「鞘當」を上演した。出演の俳優は、團十郎、染三郎、小團次、權十郎、家橘、福助、壽美藏、松助、八百藏、時藏、團右衞門、鶴藏、勘五郎、新藏、秀調、女寅、源之助、菊五郎な

ど、名題役者全部の豫定であつたが、福助だけはその場になつて出演しなかつた。

矯風會は其後、明治二十二年九月十四日規約並に正副會長等を改め日本演劇協會と改名した。そして、演劇のみでなく、演藝全般に亘つて、毎年一回十一月を以て諸藝の演習會を催し、又十二月上旬を以て、演劇の演習會を催し、文藝委員諸氏の新作を上演することとした。會長は子爵土方久元氏で、副會長は子爵香川敬三氏であつた。左にその役員を擧げてみよう。

□事務委員　岡倉覺三、岡野碩、太田原則孝、高田早苗、下村善右衛門、森川文藏、關直彥。

文藝委員　岡倉覺三、依田百川、高田早苗、坪内雄藏、黑川眞頼、山田武太郎、古河默阿彌、小中村淸矩、饗庭與三郎、森田文藏、森林太郎、關直彥、關根正直、鳥居忱、尾崎德太郎、川尻寶岑、須藤光暉。

伎藝委員　市川團十郎、市川左團次、花柳勝次郎、豐澤團平、放牛舍桃林、常磐津小文字太夫、尾上菊五郎、河東文次郎、談州樓燕枝、高野茂、寶山左衛門、鶴澤豐造、中ノ島柯璧、山瀨松韻、松島庄五郎、松永鐵五郎、松永和楓、藤間勘左衛門、荒木古童、杵屋正次郎、淸元延壽太夫、游覓葉、岸澤式佐、都一中、桃川如燕、竹本綾瀨太夫、三遊亭圓朝。

演習委員　間野秀俊、守田勘彌、田村成義。

理事　岡野碩。

會計　大谷木保爾。

日本演劇協會の規模は、頗る大きかつたが、その成績としては僅かに一二回の演習會を催したのみで、いろ〳〵の事情から遂に立消えになつてしまつた。

この矯風會と殆んど同時に、先年の演劇改良會の理想であつた新劇場が立つことになつた。それが即ち大震前の歌舞伎座である。舞臺の構造、建築位置、株の額面などは改良會の案とは多少の相違があつたが、大體に於いては改良會の理想を實現したものと云つてよい。この劇場は當時政論家として、又新聞記者として盛名一世を風靡してゐた福地櫻痴居士が、演劇及び脚本の改良にその手腕を伸し、當時の大資本家千葉勝五郎氏と結托して、計畫した事業である。千葉勝五郎氏は銀行を信用することができないので、常に十萬圓の大金を懷ろに入れて歩いてゐた。そして、深夜人が寢靜まつてから、土藏の中に入つて燈燭で紙幣の皺を延してをつたといふ逸話が傳へられてゐた人である。兎に角、富豪としては一風變つた男であつた。

歌舞伎座の座主は千葉勝五郎、福地源一郎の兩人であつた。

開場は明治二十二年十一月二十一日。狂言は「俗說美談黄門記」默阿彌作、櫻痴居士補。大切所作事「六歌仙」であつた。開場に先立つて、座主から左の刷物を配つた。

謹啓　當歌舞伎座の儀は昨明治二十一年九月を以て新設の許可を得て土木の工事に着手致し漸く此節に及び落成仕候に付來明治二十三年新春に至り開場式を執行ひ引續き新舊の演劇を興行し改良の實を擧げ可申候然るに當座の建築は舞臺其外にも改良を加へ一般の事柄に至るまで從來の舊習に泥まざる樣に可致目的に候得共新規の事にて百事不調に付彼是遷延罷在候處諸君より本年中に逮て開場致候樣にとの御勸めに從ひ演習かたがた所謂舞臺ならしの心得を以て不取敢此一場を當冬に興行仕候間此段御承知の程奉願候尙開場式の儀は其節に至り改めて御披露可奉申上候謹言

歌舞伎座々主敬白

再伸　當座附茶屋の儀は御案内料として上等棧敷一間に付金五十錢づつ並に土間中等棧敷一間に付金四十錢つゝ御客樣より別段に申請茶煙草敷物の料に充て候間茶屋帳場へ御茶代並に雇人共へ御祝儀等の御手當は御容謝被下度且御飲食物の儀は兼而代價を定め品物を吟味致させ置候尤御註文の外一切差出不申候筈に付此段も御承知の程奉願候

歌舞伎座の建築の模樣は、舞臺は横十二間、東西向正面共に棧敷は三階建で天井は、緊骨の蝙蝠傘を開いたやうな形であつた。天井の眞中には巨大な電燈を掲げ、舞臺前の欄間は高さ六尺、横二間通しで、鳥襷棧敷下の欄間は香客形を彫り、正面から左右の棧敷にかけて圓形に造つてあつた。これは舞臺を見るに便利な爲であつた。木材は凡て檜、杉、黑部杉を用ゐてあつた。又表懸りの前に檜板三枚を銅鋲にて掲げ開場の月日、大名題などを櫻痴が自ら筆を揮つた。

舞臺では下座の位置は、外の座と少しも違はなかつたが、チヨボ床は東西に分けて二ケ所にした。蓋し、當時としては壯麗無比の劇場であつた。歌舞伎座株式會社は、番附なども改良して、從來の鳥居風の繪を廢し、大蘇芳年の門人年方に描かせることゝした。無論、紋所、名つぼなどもなく、役者も從來の書出し座頭などといふ順を廢して、役名の位置高きもの、例へば「忠臣藏」では足利直義を第一とし雜色を末とするが如き順に並べたものであつた。

これだけの改良でも當時としては、なかなか大事業で世間の毀譽は區々であつた。この歌舞伎座に於いて、櫻痴居士と團十郎との提携が出來上つたのである。櫻痴居士と團十郎との提携は、團十郎の爲にも當時の歌舞伎劇の爲にも決して利益ではなかつた。

演劇改良會、演劇矯風會、歌舞伎座の新築と、劇界の機運が徐々に革新の方面に動いてゐると殆んど同時に、當時の大立物團十郎の活歷といふ一種の寫實主義が創始せられたのである。

今から考へれば、活歴は確かに一種の惡寫實であるが、これも當時の識者たちの新正面を開かんとする熱望の一つの現はれであつた。

矯風會が日本演劇協會と變つた時の役員諸氏の姓名のうちに、坪内逍遙森林太郎二氏の名が見える。恐らく兩氏が演劇の實際運動に手を出されたのは、これが最初であるであらう。

坪内博士の演劇革新運動は、後に記す。

これまで述べたところは、當時の新知識と、歌舞伎劇の專門俳優との結合によつて起つた運動であるが、前にも述べた通り、明治の時代思想と國民の生活とは、最早歌舞伎劇の樣式では如何に革新したとて表現し盡されるものではない。爰に於いて、大阪に新派の前身たる壯士俳優の一團が起つた。彼等は當時の青年の風潮に化せられて、政談演說に憂身を窶した連中であつた。今から考へると極めて幼稚ではあるが、板垣伯等の自由民權說に動かされて、國會建設の請願、政黨政治の實現の下に狂奔した人たちであつたゞけに、謂はゞ理想家肌の人間の寄合であつた。壯士芝居の創始者は、岡山縣士族の角藤定憲といふものであつた。無論、大した文學上の修養もなかつたが、兎も角彼は大阪に於いて、一篇の小說を書いた。その小說は「豪膽の書生」といふ題名であつた。彼はその自作の小說を其儘臺本として、壯士演劇といふものを組織しようといふ考へをもつてゐた。そこで、同志の書生二十餘名と共に大阪西區の新町座に於いて、旗揚興行をしようと企てた。當時大阪の東雲新聞を經營してゐるのは、佛蘭西歸りの奇才中江篤介氏であつたが、同氏はこの壯士演劇の擧を贊成して、後援者となつたのである。そして、六十日餘りの稽古を積んで、明治二十一年十二月三日漸く開場することになつた。狂言名題は「豪膽の書生」「貞操の佳人」「勤王美談上野曙」の三つであつた。左にその當時の役割並に俳優の名前を揚げる。

藝者小柳（國村民平）。法學生（横田金馬）。順野遠之助、樓主おのぶ、村上醫部、女房お秋、高杉滿芳（角藤定憲）。藝者品吉、奴吉助、娘光子、茶屋娘おかめ（神原清三郎）。河村長太郎、力士河の石、寶田五郎作、伊地知三郎（岩尾一）。父龍寬、商人櫻井、芳田台八郎（里松幸三郎）。山部義昌、吉村吾三郎、判士石山昇（森德吉）。消防組權助、百姓八藏、按摩六之市、壯士（柴山逸太郎）。淫賣娘おかつ、幇間豆八、近藤剛藏、茶屋の亭主（杉村周當治）。母お琴、娘おくに、、乳母小卷、吉岡判士（笠井粂次郎）。仲居おはる、車夫熊吉、杉本石太郎、岡村正行（池田友造）。車夫八藏、下郎吉平（有馬辰治）。等であつた。

大阪朝日、東雲の兩新聞社から緞帳及び旗幟等を送つて、可なり華々しく開場はしたけれども、結果は面白くなくて結局大失敗に終つた。

彼等はその失敗にも懲りず、矢張り同地に於いて自由童子又は浮世亭○○などと稱して、二輪加めきたるものを演じて當世を諷刺したり、政談演説をしたりして、一部の人士にもてはやされてゐたが、明治二十三年に至つて、大阪の素人芝居に可なり名のある中村天丸（實名金泉丑五郎）を顧問として一座を組織し、東京に現はれた。そして、芝の開盛座、横濱の蔦座等の小劇場で開演してゐた。彼等の演技はその實まだ大阪二輪加の域を脱しない程度のものであつたのである。

然るに、明治二十四年に至つて、福岡の人川上音次郎が主宰する壯士芝居の一團が、初めて東京の大劇場に現はれた。劇場は中村座、開場は六月二十日からであつた。狂言、一番目「板垣君遭難實記」中幕上「花柳噂存廢」下「監獄寫眞鏡」二番目「勸善美談兒手柏」であつた。この劇團の中には後年新派の俳優として名を成した藤澤淺次郎、木村周平等があつた。新派の策士川上音次郎は、愈よ興行が確定すると一緒に自分は馬に乘り、前後左右に一座の壯士を從へて、市中を練り廻り、華々しい披露を行つた。又開演の六日目に當時の劇界の大立物尾上菊五郎が、多くの門弟を引連れて見物に來たが、一座の俳優の辯論の巧みなのと、元氣の激しいのに感動したといふことが、當時の朝日新聞に出た。

川上の宣傳が圖に中つたのと、世人の好奇心を煽つたのとで、興行は意外の好成績であつたから、七月三十一日より繼續早やに第二回目を開場した。一番目は「拾遺後日連理梢」二番目は矢野龍溪氏の「經國美談」であつた。一番目は烏帽子直衣のものだけに自由がきかず失敗に終つた。が、二番目は西洋種のものであるだけに、どうやら無事であつた。世上の評判は、毀譽相半してゐた。

續いて十一月五日濟美館と稱する新らしい壯士芝居の一團が、當時の識者依田學海氏の指導に從つて、男女合同劇を吾妻座に於いて開演した。座長格の男は川上一派から分離した伊井容峯であつた。又女優のなかには元芳町の藝妓米八が千歳米坡と稱して、牛耳を取つてゐた。演物は一番目「政黨美談淑女操」中幕「豐臣太閤裂封册」二番目「名大瀧怨恨短銃」であつた。

この芝居は非常な評判であつた。殊に女優を使つたこと、狂言の取合せのよかつたこと、演出の方法が當時としては新らしかつたことが、世人の感興をそゝつたやうであつた。壯士芝居は女形の制度から劇場音樂の使方まで殆んど舊劇に則つて

ゐるのに、この一座だけが女優を用ゐ、殊に一番目は合方の鳴物を用ゐず、幕開きに汽車の音、馬車の喇叭、時の鐘、新聞賣子の鈴などを用ゐたのが、非常に耳新らしくてこれが新派劇に於ける男女合同の嚆矢である。俳優の技藝も既に大分進歩してゐた壯士芝居はかうして儼々乎として、中央劇壇に勢力を占めてきたのである。そこに彼等にとつては、甚だ仕合せなことが起つた。それは、明治二十七八年の日清戰役である。

既に國民の輿論に從つて憲法を制定し、國會を召集した日本は、明治二十六七年に至つて、漸く國力が充實してきた。日清戰爭は丁度その際に起つたのである。豐太閤の外征以來外國と事に構へた經驗のなかつた日本國民は、この戰爭に對して擧國一致で緊張した。當時私はまだ幼少ではあつたが、戰地の電報が號外で報ぜられる度に、周圍の人たちの異常に興奮した狀態が、今だにまざ／＼と目の前に見えるやうである。壯士芝居の創始者は元來時局に對する國民の興味を利用して、僅かに人心をつなたちいできた人たちだけに、決してこの機會を見逃さなかつた。殊に一代の策士たる川上は、戰爭勃發するや否や直ちに淺草座に於いて藤澤淺次郎、小織桂一郎、水野好美、高田實、伊井蓉峯、柴田善太郎、中野信近、深澤恒造等の何れも後年新派の巨頭となつた連中を集めて「日清戰爭」といふ外題の下に戰爭劇を開演した。そして、非常な大當りを取つた。無論、この戰爭劇は藝術として決して價値のあるものではなかつた。が、しかし、巧みに國民の心を煽つたがために、斯様な大當りを取つたのである。これまで書生芝居とか、壯士芝居とか云はれて、殆んど劇通の眼界に入らなかつた川上一座は、これに依つて劇界に於ける自分の地歩を固めた。そして、天下の耳目が彼等の上に集まると一緒に、彼等の技藝も自ら上達してきたのであつた。川上音次郎はその戰爭劇を打揚げると共に、演劇材料蒐集の爲め渡韓從軍を出願した。そして、歸つて來ると直ぐ市村座に於いて「戰地見聞日記」と題して、當時の戰況を多少文筆の嗜みある藤澤淺次郎に脚色させて上演した。「戰地見聞日記」も亦大當りであつた。

後年の新派はかうして戰爭劇を上演する間に、立派に基礎を造つてしまつた。明治二十八年の三月三日には、豫て建築中であつた川上の劇場が神田三崎町に落成した。

日清戰爭は明治二十八年に入つて、終結した。有利な條約で講和することを得た日本の經濟界には、未曾有の好景氣がやつてきた。川上音次郎は五月十七日から歌舞伎座に於いて、一番目「威海衞陷落」二番目「因果燈籠」を上演した。一座の番組は以前の通りであつた。歌舞伎座は前に述べた通り當時の劇界

に於いて、歌舞伎劇の本城ともいふべき日本唯一の藝術の殿堂であつた。川上がその歌舞伎座を乘り取つて、戰爭劇を開演したことは、即ち人氣に於いて舊派を凌駕した事實を示すものである。この芝居では淸國の海軍提督丁汝昌に扮した高田實が、一番評判が好かつた。二番目「因果燈籠」に於いては、小織桂一郎と藤澤淺次郎とが、大分歌舞伎劇の技巧を取入れてゐるといふ評を受けた。

その頃の壯士芝居は、丁度現代の新劇から出て、立廻りを賣物とする一派の俳優のやうなものであつた。川上一座のうちでも美貌を以て賣り出した伊井蓉峯は、一座と別れて山口定雄の一派と提携した。そして、明治二十九年二月十三日より市村座に於いて、「法衣屋おくま」「野中至」の二作を上演した。

靑年芝居の連中は最初角藤定憲が旗上をした時から、既に小說を脚色したものを上演してゐた。當時、まだ日本には新戲曲の道が開けてゐなかつたので、寫實的の現代戲曲が少なかつた結果、壯士芝居の連中は、それからもずつと續けて新聞小說を脚色上演してゐたのである。

「法衣屋おくま」は都新聞の連載小說であつたゝめ、新聞社の應援もあり、伊井蓉峯の人氣が盛んであつた當時だけに、芝居はなかなか好評であつた。

當時の演劇雜誌「歌舞伎新報」に門半子といふ人の劇評がある。少し長いけれども、爰に全文を揭載して、その頃の新派の舞臺の樣子を偲ぶよすがとする。

「俚諺に三年經てば三歲と云ひ、親はなくとも其の子は育つ。彼等壯士役者なるもの星霜玆に幾歲月を經て、堂々たる舞臺にて演ずるやうになりたりしは、手柄と云はんよりも、世間ほど不思議なは無し。實に三歲となりし技倆ありて然るか。予言ふ。予敢て言ふ無し、彼等は今まさに後へ年を取らんとせり、彼等の進步したりとせるものは、奈何せん、在來の劇を模倣するに過ぎずして、彼の新演劇改良演劇の本旨に違へり、惡人を惡人らしく扮し、道化を道化らしく扮するは、歌舞伎役者の糟粕ならずや。尤も昨日迄の素人らに望むは難かしき註文に似たれども、世の好奇心に浮かされて恬として恥る指を顧みざるは愚も亦笑ふべきの甚しき極と云ふべし。予注意す。爾壯士役者一派の者よ、其運命をして全からしめんと欲せば、須く去つて馬の脚となれ。爰に切瑳琢磨の觀客が凌ぎて、然るを新演劇を組織せよ。改良演劇をも組織せよ。深きより淺きに及ぼすは易けれど、淺きより深きに及ぼさんは遙かに難し。溺れて悔ひめ。流れて騷ぐな。世を痛と嗤ふとも悲しまざるべし。唯伊井付て予に言ふ。是で飯が食へるなら、是程樂た商賣はありませぬと。左もそふず左もあらん 猪尾介烏合して、跳廻り飛あるき、撲る蹴る。殺風景のありだけして、演劇なれば、車夫の喧嘩するも亦演劇なり、壯快なり、活潑なりと嬉しがるの徒、爾らは劇を見るの眼ありや。勝負の引例しも大切なる可く是等をして劇なりとせば、天下何物か劇にあらざる。予は評するに當りて一言す、予は所謂壯士演劇なるものを嫉ふ。渠らのなせる技を劇ならずとし

て、排斥す。然れ共善を善として、悪を悪として批判するは、勿論なり。傍に吹聴するは吾等が鐵面なるを卑しむ故のみ。予の駈付けたりしは二幕目狼藉會の場なりし。紫水兄先づ前に在りて、默然として見て居たりき。什麼です、些しは面白きか。然りとは感心したる様ですねと訊ぬれば、君まづいのに感心して居る所とは、予迄がいゝ面の皮なり。伊井の栗生淨道は、延命院日當と云ふ役廻りなり、いかにもしにくさうにて、氣の毒なりけり。殊に袈裟法衣を付けて、二回の幽になり、お猴を見て、花道際までツカ／＼と進み出るは何事ぞ。御山過ぎて大きに惡し。思入り位みにして欲しきものなり。解せぬは彼の墓地にして、今彌らの密會したる場所にてはなきか。通行する淨道の心解しむべく、あの急ぎ足にて來たるを見れば、必定お彌を追ふかの如きか。ヘタと行逢ひこれはの體なり。但し等覺院の通路は卵塔の外には無きか。左すれば密會が少しも生きず、予は今何ほ併に苦しむ。紫君爺匠の場に點頭の驚きも仰山過ぎたり。むきみ賣りとなりてよりは多少見直したれ共、生木を割かるゝ紫君に對して、冷淡なる愁傷至らぬ様覺えたりしお彌の文句を唱ふるはよし。然には南無阿彌陀佛／＼と繰返すが然る可きかと思ふ。法衣屋の手代となりてより口癖の、カラ、からしての擬續の間隙立つて善くなし。あれでは坊主の還俗せしと見えず。どうしても措大なり。何悪しきは驚きにつれて、說衣紋となり、揃へし兩足くの字なりたし、變にどり／＼と震はす氣障な癖あり。愼むべき事にぞある。紫水兄クス／＼と笑ひ、予も思はず吹出し恐らく笑はぬ者は無かりしなるべし。中幕故小柴氏は散々の不出來なり。演るも辛からんが、觀るも辛し。叩りに名士を傷く勿れ。大切の引力∥伊井榮峯は、其人とて爭はれず。中にも出來よかりしとそ宜なれ。小鳥楽と云へるは　其の以前仮役者と見たは僻目か。高橋蘿中紅一點、娟妓紫君宵狂言中第一の出來榮なり。松尾菜のおでん屋、澤田菜の女房と喧嘩の場、よく下等社會の眞情を寫し得たり。只予は女房のくやしがりて地だんだ踏むに、足を外輪にするが氣に入らず。此他帶にも襷にもならざるもの、ゴロ／＼と出れども、南瓜畠はまだしも興あり。煩しき事かな、煩さき事かな。山口の墓地の番付は藝者なり、いかにしても素人とは請取れず。母妹と身裝の違へる主從の相違なるべし。おきやんにもあれ、素人と藝者の化粧は、自ら其の間に一線を劃す可く、淨道をくどく仕草の如きはどこから見ても、藝者なり、予は採らず。交番所の場はむきみ賣りを追ふまでなれば、なんの事は無し。下手な開化の女熊谷と云ふ格にて、馬を車とし、扇を傘と思へば間違ひは無し。箸にも杭にもかゝらぬ所。むきみ屋の場になりて、淨道の捨次郎を恨みて、抓り色が變りし迄、其手を頻にあつるあたり、餘りわざとらしくして宜しからず。法衣屋の場になつて夫婦喧嘩の手練手管、よく泣きよくあやすは、愈々予をしてそれしやたらぬかと信ぜしめぬ。益々採らず。池の端吉田屋の場は、予既に注意したり、山口も同感なりし様なれば、愈々益々採らざる節の無きにあらねど、憎まれたきが本心ならねば、殊更云ふにも及ばざる可し。毒殺の場にアイタ／＼と腹を押へて子を孕みしにては無きか。蟲の據るのにては無きかと、毒を良人に試す、いゝ加減にして貰ひたし。臥の拵なり、是等け格別なる獄中の場にして、枚擧すれば紙面を汚すの恐れを以て、大概にして言はずとすべし。中幕故中夫人冥代子、ペソ／＼と泣いて計り、女丈夫の氣概少しも見えず。一言云ふては良人に抱きつき、二言目にはしがみつき、尋常の女にてもア、はせまじく、貞女烈婦の柔らしくして、予らたいに採らず。見るも胸わろき心地せられぬ。伊井の夫婦共熟慮せよ。可惜夫妻を努な汚せそ。況んや當日來られしを

や、大切の山口定雄、評する程の事もなし。嫁を轢くに臨みて云ふ。筋違裂なる法衣屋お熊は侗許す。其の不快なる脚色の、淫婦情に溺れて夫を殺すも遂には囹圄に罪せられ、勸善懲惡の要旨を結ぶを見れば、侗許して不問に附せん。然れ共掃除屋を出すに至りては、言語同斷不埒も亦極まれりと謂つべし。よし不作法なるは田夫野人として、許すにもせよ、末に何等の用かある、卒倒したる圭三郎の吐瀉せざるは、看客皆く承知するなり。奇を衒ふか、愚を玩ぶか、徒らに無用の者を出して、人の嘔吐を促す勿れ。咄又咄。小幕の大ざつまはあらずもがな。描き上に文句の描さもの凄きもなきをもの凄しとは、誰が誰ぞや、外に文字の無き世には非ず。其道の人に聞け。教へを斉まぬ人もあるめり。鵜の眞似をする烏の愚にも較べんか、かへすがへすも市村座はつまらなき演劇(?)なり。新演劇改良演劇などと誤解せし輩よ、爾等の運命は風に吹く花より脆く散る間を待つの命なり。否な方に散らんとしつゝあるなり。嗚呼。

明治三十年一月朔日より演伎座に於いて、伊井蓉峰、佐藤歳三、福島清、兒島文江の一派が「探偵實話山田實玄」中幕「吉富巡査」「嫗山姥」を出した。同一月五日より淺草座に於いて、福井茂兵衛、水野好美、靜間小次郎、村田正雄などが「蒲鉾屋殺し」中幕「曾我の對面」大切「矢矧日吉丸」を出した。又一方、川上座に於いては、川上音次郎、藤澤淺次郎、中野信近、柴田善太郎などが「八十日間世界一週」といふ狂言を、一月三十一日から上演した。壯士芝居は日清戰爭を經て以來、斯くの如く一時に三座開場する程の盛況になつた。この三座の上演脚本を見ても知られる通り、壯士芝居の存在が確立すればする程、彼等の演技と、脚本の選定が次第に舊歌舞伎劇と近づいてきたのは、實に不思議な現象と云はねばならぬ。それについて、當時の識者がどういふ批判をしてゐたであらうか、爰で顧みるのも亦一興であらう。

帝國文學に曰く、

『彼等が演ずるところの脚本は如何、滑稽的に非ずんば、探偵的の劣作なり。一として沒人情的、沒美的のものに非ざるはなし。加之、昨年の半頃より壯士俳優にして、舊劇を演じ以て顧客の媚を求めんとするの傾向出ぬ。伊井の日高川に於ける、山口の廿四孝に於ける、浪華の高田が忠臣藏に於ける、是れなり。舊劇を師とするは嘆し。されども平然此を演じて、舊俳優と相競はんとするに至つては、余が其意の何處にあるを知るに苦しむ。』

竹の屋は曰く、

『茶番的道樂的女釣り的の中幕物を出して、馬脚を現はすことを止め、壯士俳優特有の散髪物を選み、舊俳優が分廻しで丸を畫くやうに、古い狂言のお浚ひをしてゐる間に、新狂言專賣の店付を開くすべし。舊芝居には舊式舊例ありて、容易に素人の新作を舞臺に上せずといふ。此の隙間を教へて此から切込み新思想 新趣向の二旗を立てんと心懸くべし。』

川上音次郎は明治三十一年八月十三日歌舞伎座に於いて、伊井蓉峰、山口定雄の一派を除いた殆んど壯士俳優の大合同を企

てた。演物は一番目「又意外」二番「三恐悦」の二つであつたが、この芝居が大失敗に歸したので、債鬼に責められ自棄氣味と山氣半分とで、「南洋探檢」と云ひふらし、妻の貞奴、及び姪のおしげを引連れ、食糧を十分用意し、ボートに乘じて東京灣を出發した。元よりボートのことだから、激波の爲に進退の度を失ひ、漸く橫須賀の軍港へ吹き付けられた。そして、同所の役人から固く止められたけれども、どうしても聞入れないで、又橫須賀を出發し、兎も角も伊勢の某港まで乘着けたが、途中の辛慘に懲りて流石の川上も、最初の目的を思ひ切り京阪地方に二三回の興行を試みた後、神戸から汽船で上海、香港、印度洋を過ぎて歐洲大陸に行き、西洋の演劇の研究をするといふふれ込みで、出發してしまつた。そして、明治三十四年歐羅巴から亞米利加まで流浪した結果、散々の辛苦をなめて歸朝した。

同年二月十八日市村座に於いて、「洋行中の悲劇」「武士的敎育」の二つの脚本を上演して、歸朝記念の興行とした。一座の俳優は福井茂兵衞、藤澤淺次郎、山本嘉一などであつた。「洋行中の悲劇」は彼が米國流浪中困難の極に達し、シカゴの劇場の樂屋で一行の者が四日一食もせず、漸く三十弗の收入にありつき初めて食事をするといふやうな、實際の閲歷を、座附の作者花房柳外に脚色させたものであつた。川上がこの洋行の結果、日本の劇界に貢獻したところは只僅かに化粧法、フツトライトの設備、背景の洋風化などにすぎなかつた。

川上音次郎は暫らくして又第二回目の渡歐の途に上つた。川上の留守中七月十四日より明治座に於いて、伊井蓉峰、深澤恒造、福島清、河合武雄などが故三遊亭圓朝子原作「敎育演劇」と銘打つて一番目「鹽原太助」その中幕はセークスピア氏原作「該撒(シーザル)奇談」二番目伊原靑々園氏原作「小旦那藤三」を上演した。伊井蓉峰は中幕でアントニオに扮し、深澤恒造がシーザに、福島清がブルタスに扮したのであつた。脚本は坪内博士の飜譯を高山古瓶が脚色したものであつたが、當時星亨の暗殺事件があつたので、其筋の干渉が甚だしく、隨分無理な筋に改めたものであつた。明治三十六年になつて、第二回目の洋行から歸つて來た川上音次郎は、二月十一日より明治座に於いて、セークスピアの「オセロ」の飜案を上演した。一座の俳優は高田實、五味國太郎、藤澤淺次郎、川上音次郎、山本嘉一、山田九州男などであつたが、此時から彼の妻の貞奴が、女優として初めて舞臺に現はれた。尙其外女役者市川久米八が守住月華と稱して出演し、唯今の新舞踊家藤間靜江が內田靜江と名乘つて現はれた。川上は此の飜案劇の主人公台灣總督室鷲郎を勤め、陸軍中尉伊屋剛藏を高田實が勤めた。室總督夫人鞆音は川上貞

奴、伊屋剛蔵の妻おみやは守住月華が勤めた。此の脚本は原作の「オセロ」を江見水蔭氏が日本の世界に翻案したものである。川上は今度の芝居に於いて、初めて舞台装置其他全部に亘つて、歐羅巴の演出を模倣した。そして、川上一派の演劇を正劇と稱した。此年四月六日改良座と改稱した三崎町の川上座は火を失して、全部烏有に歸してしまつた。四月二十四日より本郷座に於て、新派の獨參湯と云はれる「不如歸」が初めて上演された。俳優は藤澤淺次郎、佐藤歳三、木下吉之助、中野信近などであつた。「不如歸」は最初大阪で上演したのを、今度東京へ持つて來たものであつた。木下の浪子、藤澤の武雄、佐藤の片岡中將などが評判になつて、非常な興行成績を擧げた。

この三十六年は明治の劇界にとつて、非常に紀念すべき年であつた。歌舞伎劇の末路を飾つた二人の名優團十郎及び菊五郎が、此の一年の間に死んでしまつたのである。團菊亡き後ちの舊劇といふ問題は、數年來識者の話頭に上つてゐたが、愈々二人が死んだ後殘つたのは、まだうら若い八百藏、羽左衛門、高麗藏、梅幸、芝翫等と老優としては團菊と並び稱された左團次であつた。歌舞伎劇は此時危く滅亡せんとしたのである。若し當時の新派が演劇藝術としても少し立派なものであつたならば、此際取つて代つて劇界の牛耳を握るのは易々たるものであつたであらう。殘念なことには新派の巨頭は、俳優としては相當の技倆を備へてゐたが、演劇全般に對する造詣が薄く、その上適當な指導者並びに戲曲家を欠いてゐたゝめ遂に新派劇を大成して日本の國劇となることが出來なかつたのである。

二　自由劇場の事業

明治四十二年は日本の劇界にとつて、紀念すべき年であつた。即ち當時劇界の耆宿として一代の敬意をかち得てゐた坪内逍遙博士が一生の事業として文藝協會を起され、又一方では新らしい劇學者として將來を嘱望されてゐた小山内薫氏が市川左團次と共に、自由劇場を設立されたからである。事實これまでの新劇運動、即ち演劇改良會から新派の擡頭に至るまでの運動は、徒らに聲ばかり高くして、その實は日本古來の傳統たる歌舞伎劇から内容形式共に、一歩も出てゐないと云つてもいゝくらゐのものであつた。當時の日本人の生活と思想とがまだまだ舊來の傳統から本當に離れてゐなかつたゝめ、彼等の生活に密接な關係のある演劇藝術も、只無自覺に革新を叫ぶのみであつたのである。然るに日本人は、明治三十七八年の頃第二回目の大戰役即ち露西亜との戰爭に打つ突つた。そして、露西亜に打勝つたと共に、國民としての彼等の自信が異常に昂まつた。

それと共に彼等は歐羅巴のレベルを以て自己を批判し始めた。明治維新以來、四十年にして初めて彼等に內面的の維新がきたのである。この內面的維新の結果は、先づ第一に文學に現はれた。それまでは硯友社一派の所謂軟文學が、文壇を風靡してゐたが、この時突如として若い文學者の群のうちから自然主義の思想が湧起つて、見る〳〵うちに殆んど奇蹟的な勢力を以て文壇を占領してしまつた。又一方には詩人の群から起つた享樂派の一派が、全然舊日本の傳統を無視するやうな態度で、感覺的な作品を發表し始めた。殆んど二十年間の私の文壇生活のうち、この三四年くらゐ文壇が思想藝術の熱情に燃えてゐたことはないやうである。今ふりかへつて考へて見ても、云ふに云はれぬ懷かしさを感じる。文壇の此の示威運動は直様演劇界を刺激した。二つの演劇運動が生れたのは、即ちかういふ時期であつたのである。

無論、劇界に於いても當時の情況が、新らしき何物かを要求してゐたのである。團菊歿後歌舞伎劇は、相當の勢力を維持してはゐたが、而も、觀客の頭には常にありし世の團菊の姿が描かれて居つたのである。一時、劇壇の牛耳を握り得るかと思はれた新派は、脚本の拂底と、舊派を延長したにすぎない上演の技巧、制度の爲に當時の人心から既に離れんとしつゝあつたのである。二つの新らしい運動はかういふ際に起つただけに、當時の人心を刺激したことは非常なものであつた。演劇を好む若き人たちの間には、この二つの新劇運動のことが、劃時代的な事業として喋々された。

坪內博士の文藝協會は、遂に決裂して藝術座と無名會と、舞台協會の三つに分れた。自由劇場の方は元來が左團次一派の舊劇俳優であつただけに、今尙ほ當時の座組のまゝ續いてゐる。從つて自由劇場の運動の方が、單純で敍述し易いから年代の順から云へば、當然文藝協會を先きにすべきであるが、私は先づ單純な自由劇場の運動を先に書く。

自由劇場が創立された時、同劇場の主事の小山內薰氏はまだ僅かに二十九才の青年であつた。小山內氏と共に事を起した左團次が、一つ年上の三十であつた。大學在學當時から演劇の研究に沒頭してきた小山內氏は卒業すると同時に伊井蓉峯の一座に入つて、舞臺裏の仕事をしたり、或ひは劇評を書いたり、又戯曲の飜譯、小說の執筆、演劇論の發表などをしてゐたのである。小山內氏と事を起した市川左團次は若い時分からの小山內氏の友人であつたが、父左團次の死後松居松葉氏と共に渡歐して、松葉氏の指導の下に歐羅巴の演劇藝術の實際を見て、歸つて來たのである。當時の左團次は演劇の革新運動と、父親の殘

した負債との爲に可なり苦しい立場に立つてゐたが、小山内氏と提携してこの冒險的な演劇の示威運動を起したのが、彼の劇團に於けるユニークな地歩を占める素となつたのである。自由劇場より少し早く生れた文藝協會は、先づ俳優學校を設置して素人のうちから新らしき時代の俳優を養成しようと企てた。然るに自由劇場はそれに反して、在來の俳優を、而も舊歌舞伎劇の俳優を使つて新らしく演劇の道を切開いて行かうといふのである。その當時の小山内氏の意見と思はれるものを爰に拔萃する。

俳優D君へ（これは明治四十一年の末に小山内氏から猿之助に送つた手紙の一部である）

「前略無形劇場の計畫も大分研究が出來て來た。名は獨立劇場としようと思つてゐる。で昨今經費の上について少なからぬ考慮を費してゐる。君は不足などは皆んなで出し合へばいゝぢやないかとよく言ふが、一回や二回はそれで濟んでも、三回四回となるとなかなかさうはゆかぬものだ。勿論、吾人の爲事は只時の永續のみを目的とするものではない。短命でも眞面目な生涯が送りたいのだ。併し、それにしても一回や二回で、倒れるのはいやだ。吾々が世間のもの笑ひになるのはいゝとして、吾々の抱いてゐる思想までを嗤はれるのは、如何にも殘念なことではないか。（中略） 一體僕等の爲事を非常に大仕掛なものゝやうに思つてゐる人が、世間にあるのは訝しい。何か興行演劇と對抗でもするやうに思つてゐる人がある。併し、僕等の爲事はそんな大仕掛なものでない。

只、劇場をもたない一個の小さな試演團體を組織して、志ある俳優の爲に、例ひ小さな道でもある一方に開きたいといふだけのことだ。

演劇用の脚本についても、讀者のM君などが、大層心配してくれてゐるやうだ。僕一個の考へでは當分は西洋の近代劇の飜譯を主として試演したいと思つてゐる。——それも成るべく一幕物から始めたい。

斯くして日本の劇團に脚本に於いても、演技においても、(眞の飜譯時代)といふものを興したいと思つてゐる——新時代の演劇的創作は、それから先の話だ。

併し、曾て君にも話した通り、西鶴を脚本化したものだの、近松のもので余り今まで演らないものなどは 傍ら研究して行きたいと思つてゐる。

只困るのは、試演してみたいと思ふ日本の社會劇の新派だ。これが誠に數が少ない。その少ない中でも秀でた作が多くない。これ、當分デパアトリイには入るまい。

僕が職業的俳優を盛に立てゝ行くといふ說は、實行の上から大分世の識者に危ぶまれてゐるやうだ。これは尤もな話だ。僕自身だつて、決して世の識者以上に今の俳優に望みをかけてゐるものではない。今の俳優に望みをかけてゐないからこそ、劇場といふ立派な組織を離れて、こんな貧しい計劃も立てゝゐるのだ。僕が役者を盛に立てると云ふ意味は（役者を素人にする）といふ所にあるのだ。

今日の劇壇に對する急務は、一方に於いては（素人を役者にすること）で、一方に於いては（役者を素人にすること）だ。T博士や、SH氏は、第一の事業に志があるらしい。僕等は第二の事業に從事しよ

うといふのだ。第二の事業と第一の事業とは、寧しろ平行して進んで行くべきもので、決して合錯綜すべきものではないと思ふ。現今の俳優に愛想をつかす程度は、第一の事業に盡す者も、第二の事業に從事する者も、同じでなければならぬ。

僕が現今の俳優にも千人に一人やそこらは、眞面目なものがあると云つたのは、（素人にならう）といふ志のある俳優のあるのを意味したつもりだつた。――Ｏ君もたしか一人だつたね。

脚本に對する理解力に至つては、さういふ眞面目な俳優でも、まだなか〳〵足りんと思ふ。さういふ方面は又眞面目な文學者や、劇作家の助けをかりて、だん〳〵に進んでゆかうではないか。

就いては會の相談役といふやうなものを十人ばかり作らへた。脚本の選擇から上場の方法まで、凡てこの十人ばかりの人に相談することにした。どうだ、これには異議があるまい。この中には俳優もゐる。劇評家もゐる。畫家もゐる。小說家もゐる。學者もゐる。脚本家もゐる。美術史家もゐる。』（後略）

その頃、吾々はまだ二十一二三の青年であつた。木下杢太郎や、北原白秋や、吉井勇、平出萬里、平出修、高村光太郎、茅野蕭々の諸君と一緒に、森鷗外、上田敏、與謝野寬氏を先達として、「昴」といふ文藝雜誌を作つてゐた。當時早稻田文學が自然派の中堅となつてゐたのに對して、主に詩人から出た「昴」の一群が、世間から享樂派と名づけられてゐたのであつた。森鷗外氏は「昴」誌上に獨逸の近代劇や、小說の飜譯を寄せてゐられた。木下杢太郎や吉井勇や私な、一方詩を作りながら將來自分たちの向ふべき戲曲の道を、あれかこれかと模索してゐた。小山内氏の新らしい運動は、忽ち吾々の間に傳つてきた。私たちが小山内氏の紹介で、初めて市川左團次に會つたのも、其頃のことであつたやうに覺えてゐる。そのうちに愈よ明治四十二年の秋になつて、自由劇場の開演が近づいたといふ評判が、吾々の耳に入つた。初め小山内氏の考へでは、無形劇場といふ名にするつもりであつたらしいが、何かの都合で自由劇場といふ名になつたのである。演物（だしもの）はイプセンの「ジョン、ガブリエル、ボルクマン」で森鷗外氏の譯ときまつた。そして、左團次一座の外に、河合武雄と宗之助とが、出演することになつてゐた。これはなんでも前の小山内氏の手紙にある相談役の會合の節、島崎藤村氏から出た案であるといふことであつた。自由劇場の開演はかういふ狀態で進んで行つて、愈よ十一月の二十七、八の兩日、大震災で燒けて今はもう跡形もない有樂座に於いて始まつた。開演までの內部の事情は、小山内氏の「自由劇場の試演を終へて」といふ一文があるから、その大部分を爰に掲載させて貰う。

自由劇場の試演を終へて

（前略）　河合君の役割はエルラといふのであつた。（河合君が其時大阪へ行つてゐた）。それから森美蔵君も出勤する筈であつた。だから役

割も今度とは少し違つてゐた。左團次君のボルクマン團子君（猿之助）のエルハルトは動かないところであつたが、他は大分違つてゐた。所が伊藤公の薨去や、高田の不快といふことが障りになつて、大阪興行の開場が四日間も延びることになつた。大阪を済してから上京しても、間に合はないことはないやうなものゝ、それではまるで稽古なしで、舞臺へ上らなければならない。普通の興行なら知らぬこと、今度のやうな舉に於いて、さういふことをすることはできない。乃で河合君は已むなく辭することになつた。藤美藏も同じく都合があつて、出られないことになつた。

かうなつてみると、今度は役者が足りない。ボルクマン夫人と、エルラとは宗之助君と莚若君（松蔦）とが、どつちか一役づゝ持つにしたところで、キルトン夫人に扮する俳優がない。秀調君なら一番適當してゐるだらうといふ話が出た。併し秀調君自身の事情が許してくれないので、それは駄目になつた。乃で初めは女優を使ふまいといふ考へであつたけれど、本人さへ眞面目に熱心にやるつもりなら、どうかやつてゆけないことはあるまいといふので、遂に河原崎の娘さんにキルトン夫人を當てることにした。

役割は大略決つたので、愈よ十一月十日頃から丁度明治座が始まつてゐるので。その樂屋で毎日九時から三時まで稽古することになつた。勿論、一方に普通の芝居をやりながらのことだから、その忙しさつたらない。（中略）おい／＼白廻しにも熟してきたので、愈よ立稽古といふことになつた。丁度其時千束町の猿之助君の家で、新築の舞臺が落成した。さういふ眞面目な事に對してなら、喜んで舞臺開きにお貸し申さうと言ふ。で、又毎朝九時から爰に集まつて、開演前の五日ばかりを立稽古に費すことになつた、道具などはそこにあり合せの椅子とか、テーブルとかいふものを用ゐることにした、かうして愈よ本稽古に取りかゝつてみて、私は初めて（こりや大變なことをしたと、感じた。思つたことの半分も、三分の一も現はれやしない。あゝいかしい演し物を選んでしまつた）と、幾度か歎息した。併し、いくら歎息してみたところで、もう乘りかゝつた舟た。今更おめ／＼後へ引くべきでない。私は人々を勵ました。――道具も入らない。背景も入らない。和服を着たまゝでいゝからやつてくれ、さうして、せめて、白のやりとりの呼吸だけでも出さうとつとめてくれと。

何しろあの通り長い白だから、單にそれを暗記するといふだけでも、非常な爲事である。それに、日本の芝居の白のやうに、無駄といふものが少しもない。從來の芝居であつたら、忘れたらいゝ加減にごまかすといふこともできたけれど、今度のはそんな場合には、飛ばすより仕方がない。忘れてはならない。忘れてはならない。といふだけでも、人々は熱心にならざるを得なかつた。初めはさういつた他動的の意味から、役者は勉強してゐたといふ風であつたが、脚本の力は實に恐ろしいもので、だん／＼その役々の精神が諒解されてくると、今度は自分の方の心持が、自然と本氣に眞劍にならざるを得なくなつた。左團次君は一身上の都合から、十分な稽古をつむことができなかつた。そして、こりや迚も駄目だと言ひ出した。稽古をすればする程、その色がだん／＼に出て來る。いつまでたつても際限がないやうに思はれる。今までの芝居とは全然趣きを異にしてゐる。然うしたものは少くとも二ケ月は稽古をしなければならない。僅少な日數の稽古ぐらゐでは、迚も公衆の前で演することはできない。今から考へてみると、曾て自分の演じた、（ヱニス）の法廷の場なぞは、實に慘々たるものであつたと。

併しながら、今となつてはどうあつても、日限を延ばすことはできない。乃で技藝の蕪雜不熟練なことは、開演前に私が十分口上を以て觀客に謝するやうにするからと說いて、强いて期間通りに芝居をやることにした。

愈よ開演するに至るまでの過程をお話すれば、大略以上の如くである。これから少し細かい方面に入つて、ステージングの苦心を述べよう。

先づ第一に困つたのは、自由劇場に關係してゐる誰もが、西洋で演ぜられた「ボルクマン」劇を見たことがないといふことであつた、(中略)

詮方盡きて在ミユンヘンなる私の友人醫學士大久保榮君の許へ手紙を出した。(ボルクマン)は今年になつてからベルリンでもミユンヘンでも演じられた。自然大久保君もこの芝居を見てゐる。私はその時の繪葉書が欲しかつた。併し、大久保君はいくら探しても、繪葉書を發見することができなかつた。仕方がなしに開演當時の新聞に出た評を切拔き、それに自分の書いたスケッチと、俳優の着附や動作を簡略に寫した手紙を添へて送つて來た。之れが私たちの今度の芝居をやるについて、大變な參考になつてくれた。私たちはイプセンの原稿に書いてゐるトガキと、此の大久保君の書簡以外は、凡て自分等の工夫でもつてあの芝居を演じたのである。

先づ背景と大道具のことからお話しよう。何よりも金をかけないといふのが主義であつたから、明治座あたりで使つた古い木でも洗へるだけは洗つて使つた。買はないでも自分等の周圍で間に合はせられるものなら、それも出來るだけ間に合せた。序幕の建築の陰影には間違つた部分があつたとて、それを描いた畫家は、不滿足のやうであつたが、大して目にもつかなかつた。

二幕目のゴブラン織には難がないが、形紙帖りの戸がハメの途中から切れてゐるといふことについては、建築家側なぞから非難があつた。併し、それはあれ々描いた畫家も初めから知つてゐたのだ。實際あつちには、あゝいつた構造があるんださうだ。さうして、それがまた剝落てるとか何々とか云はれるんださうだ、大久保君の手紙によると、ミユンヘンでやつた時は、この場には、天井からシャンドリエが下つて、壁の正面には暖爐が据付けてあつたといふ。どつちもイプセンの脚本には見えてゐないことだが、灯の點らないシャンドリエを下げるなぞはちよつと思ひ付きだ。併し、經費の點で矢張り原作の方に從ふことにした。床には絨壇を敷くとも敷かないとも斷つてないが、靴音が階下へ響くなぞといふこともあるから、壇と舞臺そのまゝを使つた。ピアノの位置は大久保君の手紙に從つたのだ。

三幕目は序幕と同じ道具だから、別に言ふことはない。四幕目は私の口上の中でも言つておいたが、獨逸あたりには機械仕掛けの引き舞臺といふのがあつて、だん〳〵に景色を變化させて行くやうに出來てゐる。イプセンはそれを應用した。有樂座では迚もそんなことは出來ない。ならうことならダアクチエンジで三度くらゐに舞臺を變へて見せればいゝのだが、それも萬事金をかけないといふ主義の爲に出來なかつた。それでああした門外と丘上の二場にした。門のところは原作では、家が右手にあることになつてゐるが、實演では左の方へ持つて行つた。それはミユンヘンで演じた風に從つたので、人物の動きなぞはこの配置の方が却つて都合がいゝのだ。フキヨールドの背景キリーの那威風土記に出てゐる繪を見て、私が工夫した。丘上の方で大分山路おヘツキリしすぎてゐるといふ非難があるが、あれは畫家が右馭のつ

もりで描いたに違ひない。それを造つた時分にはもう期日が迫つてゐて、私はそれを見分する暇がなかつたのだ。

有樂座の舞臺は外の劇場とちがつて、勾配がついてゐる　それだから道具の造りも、特別でなければならない。所が有樂座ではその勾配がどのくらゐあるのか、よく判つてゐないので、吾々は道具を造る前に、豫め舞臺の構造を調査してみた。さうして、透視法の法則に從つて、道具を造つた。さらいつた方面の仕事は、凡て畫家が引受けたので、道具方は全然その命令のまゝに働いたのである。

大道具のことはそのくらいにしておいて、今度は小道具に移らう。序幕の舞臺左方に垂したカーテンは、本郷座から借りて來たものだ、馬の尾で編んだ上覆をかけた長椅子といふ註文であるが、生憎それが見つからないので、普通の上覆をかけることにした。原作では後でグンヒルドが編物をしてゐることになつてゐるのだが、宗之助君は刺繍をやつてゐた。それは宗之助君がある西洋人にきいて來たんださうで、その西洋人はそれが爲に態々刺繍の道具まで宗之助君にくれた。岩村透氏の説などをきくと、あれはどうしても刺繍ではいけない。刺繍といふものは西洋でも大分贅澤な人間のすることで、編物をしてゐてこそ初めて零落してゐるといふ情が現はれて、そこに深い味が出てくるのだといふ。併し、その西洋人の好意に免じて、強いて抗議を入れるまでもないと思つて、そのまゝにしておいた。入口の所に暖爐がおいてあるが、あれを造ることをすつかり忘れてゐて、開演の前及舞臺稽古の當日になつてから。初めてそれに氣がつき　大急ぎで拵らへるといふ失態もあつた。沼田一雅氏なぞもあの暖爐に彩色する手傳ひをした。二幕目では家具は凡てアンピール式と斷つてある。本郷座でハムレットをやつた時、土肥春曙氏の座つた椅子なぞが、即ちアンピール式なのだ。併し、その式のばかりを集めるのがなか／＼困難であつたので、いろ／＼ごちやまぜになつてしまつた。ところが、芝居が濟んでから、記念撮影をするに皆なで寫眞屋へ行つたら、そこの椅子が大抵アンピール式で出來てゐたので、なアんだこんなところにあつたのかと思つた。今度この椅子の必要な時は、早速寫眞屋へ駈け付けようと思つてゐる。爰で使ふテーブルは明治座の食堂から持つて來たものだが、前幕に用ゐたのと同じ代物で、只前幕では卓布をかけ、此所ではむき出しのまゝ用ゐたといふ違ひがあるだけだ。卓布は新富座から、又ピアノは松本樂器店から成るだけ古いのを借りて來た。幕が開いた時フリーダはちよつとピアノを弾いてゐるが、それが爲にこの役に扮する松蔦は今年の正月からピアノを習ひに通つた。併し、松蔦孃は單にキイの上で手を動かすだけで、音は蔭でさせてゐた。金屬性のランプは伊井が新富座で『熱血』をやつたときに用ゐたもので、それを私が覺えてゐて、借りて來たのだ。椅子は樫の木とあるが、樫の木か何だか判らなかつたけれど、堅固な感じのあるやつを明治座から持つて來た。

衣裳はなるべく單純（シムプル）な色や感じを主とするといふ心持で、選んでみた。ボルクマンは舊式のフロックコートで下へ肉衣（ニク）を着た。初めは泥色のズボンを穿いたが、ゴブラン織りの下のハメの色と衝くといふので、鼠色のと變へることにした。終ひの幕に冠つて出る毛織帽は、私のを用ゐたのだ。グンヒルドは金茶のビロードの著附で、エルラは黒の絹布を着た。これは脚本に出るのとは反對になつてゐる。宗之助君の教はりに行つた西洋人の指圖なのださうで、其爲に鼠色の肩掛といふのも金茶と衝くので態と黒にしてしまつた。衣物の古びなどは迚も見せることはできなかつた。キルトン夫人は薄桃色の教會服に白

茶のヹアテルマンテルを着た。この揃らへは先づ申分がないのだが、慾を言へば、衣物の色がもつとハツキリと鮮やかなものでありたかつた。エルハルトの服はどうしようかと、いろ／＼に迷つたが、二十七日に左團次君の着て來たものが、面白かつたので、これにしようぢやないかと、早速それにきめてしまつた。縁取りの黒のモーニング。チョッキはよそから借りて來た。ネクタイはリョン絹で美術家結びにした。フリーダは扮裝が少し小さすぎるといふ非難があるやうだが、それは服が稍や短かすぎたゝめで、もうちつと長かつたらよかつたらう。併し、あれは左團次君の方で態と揃らへたもので、萬事儉約といふ方針から云つても文句は云はれなかつた。衣物の更紗もあまり日本式であつた。肩掛は左團次君が西洋から買つて來たものである。フオルダルは別に言ふ程のことはない。成るだけ舊式の洋服を着せたゞけだ。召使の衣物は市川旭梅がモリエルの悲劇の女中に扮した時に着たものを用ゐた。前垂(エプロン)は初め白にしたのだが、白では淋むさうな感じがするといふので、更紗に變へた。今度は物音の話。序幕で二階に足音や、物をずらす音の聞える所がある。それた初め天井(すのこ)でやることにしたが、それでは反音があまりに強すぎるので、二階で響くやうに思はれないから、床のある所に高い棚のやうなものを作つて、そこへ登つて、脚本を見ながら足踏みをすることにした。その音が少し強きすぎるので、あまり大袈裟ではあるまいかと思つたが、役者に訊いてみると、舞臺の上でミシ／＼言ふのが、いかにも凄くていゝといふので、そのまゝでやらせた。橇の鈴の音は岩村透氏が聞いたことがあると云ふ。氏の説によると、その音は開いた鈴(べる)の音でなくて、包まれたベルの音だといふので、取敢ず三番叟の鈴を用ゐることにした。大詰の橇のベルは特に銀製といふことが斷つてあるから、三番叟の鈴の外に坊主が托鉢の時に持つて歩く鈴を三つ針金でつないで、それらを兩方の手に持つてチャラ／＼鳴らした。號外賣りの鈴のやうだといふ非難もあつたが、實際あゝいふ音がするんださうだから仕方がない。ダンス・マッカーブルの曲は口上の時にも斷つておいたが、どうしてもその曲譜が發見されないので、據所なくショパンのフューネラルマーチで間に合すことにした。階上で彈くべきだが、それは仕掛が許さないからピアノを遠く離れた所において、音樂學校の卒業生に彈いて貰つた。それからノッキング（案内を乞ふ爲に戸口などを手にて叩くこと）であるが、之れは道具の扉其物を叩いたのでは張物なのだから、いゝ音がしない、乃で戸口には別に板をおいて、それを叩くことにした。足音を聞かせるのでも、今まではその傍まで來て、急にガタ／＼やつたのだが、それでは態とらしいと云ふので、見物には聞えても聞えないでも、成るだけ奥の方から駈けて來るやうにした。幕の開閉に用ゐるベルは私が銀座で八十錢出して買つて來たものだ。

光線が一番思ふやうにゆかなかつた。序幕は室内がランプの光に照されて、外は薄明(トワイライト)といふ心持で青と白との光を使つた。召使が別間へランプを持つて行つてから、その方をも明るくした。別間と廣間との境にある硝子戸には棧がはまつてゐるだけで、實際の硝子を入れてない。筒抜けなのだ。只別間の方の庭に向つた硝子戸だけには、薄い布を張つておいた。それへ雪がたまつて、大變面白く見へた。二幕目は光線が三段になつてゐる。初めがランプを點じてゐる所で、こゝが一番明るい。次にランプを消して急に暗くなる。それからエルラが蠟燭を持つて入つて來るので、中くらゐの明るさになる。ランプを消すところはフッと吹消すと同時に、電氣室でこの仕掛をして暗くすればいゝのだが、エルラが蠟燭を持つて來るところは非常に六つか

い。何しろ舞臺は暗くなつてゐる、それに道具の壁は布で出來てゐるのだから、幽かな蠟燭の光ではあるけれど、舞臺の方から見ると、壁の後ろがパッと明るくなつて、道具の桟が見える。蠟燭の光線が背景に當らないやうに、除物を作つて見たけれども、それでもまだ十分でない。仕方がないから蠟燭はエルラが戸を開けるとたんに莚若君の男衆が灯を點けることにした。

三幕目は言ふべきこともない。四幕目の門外では内の硝子戸を漏れて、灯蔭の映ずるやうに、赤い電氣を用ゐた。かうしたら内の内部が想像されて、深味が添はうだらうと思つたからだ。原作には『月折々雲の間より弱く照る』としてあるので、初日はやらなかつたが、二日には月を出してみた。さうして、海の上に月光の映ずるところまで出さうとした。さうしたら大失策をやつて、危らく火事にならうとした。くだらない道樂氣を起すものではない。丘の上では赤、青、白の光を使つたが、色が混げかゝつてゐたので、十分な效果はなかつた。ボルクマンがベンチの上に倒れると、舞臺を暗くする。それから後は召使の手にして來たランタアンで自然の光を見せようとしたのだが、思ふやうにいかなかつた。

私は口上を終へるとすぐ衣物を着かへて、音のしない靴を穿き、舞臺の背後に立つて、人物の出入から光線、音樂のことまで、一人で世話をした。その忙しさつたらなかつた。かういふ風にして試演は兎に角事なく終つたのだが、開演の一日前舞臺稽古の日などには、これで果して明日やれるものだらうかと、危ぶまずにはゐられなかつた。顧問役の某氏の如きは『今の俳優に近代思想が解されよう筈がない。かうなつてくると、技藝よりも教育の問題だ』とまで叫んだ。キルトン夫人は入の顔ばかり見てゐる。エルハルトは無闇に固くなつてしまう。私はできるだけキージイにキージイにやるやうにと注意した。これでも舞臺にかけてみると、どうにかやれたので、吾々も初めて安堵の胸を撫で下した。(後略)

自由劇場開演前の小山内氏初め、諸俳優の苦心は概ね前の一文に敍されたやうなものであつた。俳優は凡て一方に食ふための芝居をしながら稽古したのだから、その忙しさは實際ひどいものだ。小山内氏初め一同の心配したことは、何しろ序幕だけでも非常な長さだから、果して見物が飽きないで見てゐるだらうかといふことだつた。丁度その時分明治座では「先代萩」の「竹の間」をやつてゐた。ところが余程長いだらうと思つてゐた「ボルクマン」の序幕の稽古の方が、舞台の「竹の間」の濟まないうちに終つた。それを見るとあんな言葉の少ない淋しいものだつて、見物は默つて見てゐるんだ。例へ吾々の技藝は拙いにしてもイブセンのドラマは内容の充實し切つた白ばかりが列なつてゐる。それを喋つてゐるのだから、決して飽きさせる理由がない。と思つて、皆な勇氣を起したと云ふ逸話さへ傳はつた。

自由劇場第一回試演の役割を爰に掲げる。

明治四十二年十二月二十七日二十八日午後六時有樂座に於いて開演

ヘンリツク・イブセン作
森林太郎氏譯
『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』

役　割

ジョン・ガブリエル・ボルクマン、もと銀行頭取……市川左團次
グンヒルド、その妻……澤村宗之助
エルハルト學生、グンヒルドの息子……市川團子
エルラ、レントハイム、グンヒルドの同胞姉妹にして雙兒に生れしもの……市川莚若
フアンニイ・キルトン……河原崎紫扇
キルヘルム・フオルダル・會計役所の書記……市川左升
フリイダ、その娘……市川松蔦
グンヒルドの召使の女中……市川左喜之助

場　割

第一幕。ボルクマン夫人の部屋。
第二幕。階上ボルクマンの部屋。
第三幕。再びボルクマンの部屋。
第四幕。門外及び丘上。

主事　小山內薫

背景掛　和田英作、中澤弘光、北蓮藏、岡田三郎助

その他、幕の開閉は市川米藏が受持つた。舞台照明は明治座の電氣掛の松井といふ人であつた。美術學校教授の古宇田實氏は舞台上の建築の方面に力を盡した。

自由劇場の第一回試演は當時の劇界の危惧を裏切つて、非常な成功であつた。もう十七八年も以前のことであるが、私は未だ當時の感激を忘れることができないのである。十一月の二十七日といへば、もう可なり寒い時候である。私は外套にくるまつて「昴」の同人のうちの二三の人と一緒に數寄屋橋を渡つて、有樂座の入口に立つた。當時はまだ帝劇が出來上らないうちであつたから、有樂座が日本に於ける唯一の洋式の劇場であつた。私が入場した時には、もう場内には見物が一杯詰めかけてゐた。當時の文壇の先輩の人たちの顏が、澤山見えた。まだ戯曲の一つも書かず、專念詩作に耽つてゐた頃の私であつたから、顏は知つてゐても、親しくものを言ふやうな人たちは少なかつた。私の席は土間の眞中程であつた。稍や遲れて「ボルクマン」の翻譯をした森鷗外先生が、奥さんと一緒に入つて來られた。やがて、座席の喧騷を破つて、ベルの音が長く響き渡つた。私どもは思はず息を詰めて、舞台の方を見詰めた。舞台の左右のプロセニアムのところに丁度日本の懸行燈のやうな具

合に電氣が點いて、摺硝子の表に「1」の字が現はれた。今から思へば、ベルで幕を開けることや、舞台の左右に幕數の番號が出ることなど、何でもないが、當時歌舞伎座や新富座や、市村座のやうな純日本式の木造の舞台、柝子木でチラ〳〵と横に開く幕を見つけてゐた私たちには、さういふ些細なことすら、非常に目新らしく感ぜられた。

　ベルの響きと共に幕はキリ〳〵と卷き上つた。そして、僅かに脚本を讀んで想像してゐた「ボルクマン」の序幕が、そこに現はれた。

　場内は水を打つたやうにシーンとしてゐた。否な多少の喧騒はあつたかもしれないが、舞台に全心を集中した私には、何の音も聞こえなかつたのだ。序幕はボルクマン夫人の居間である。先年舞台で不慮の死を遂げた澤村宗之助が、ボルクマン夫人に扮して、そこで刺繍をしてゐた。雪の降りしきる夕方のことである。やがて、そこに白髪のエルラ、レントハイムが入つて來た。二人の間には露骨な憎悪の言葉か交はされる。

　キルトン夫人が入つて來る。——エルラとグンヒルドは男優が扮してゐるのに、キルトン夫人だけが女優であるために、なんとなく舞臺の權衡が取れなかつた。そして、脚本のトガキに「目立ちて美しく、恰幅よき貴婦人なり、年齢三十才ばかり」と書いてあるのに、全然それを裏切つた河原崎紫扇嬢の容貌態度は少なからず私たちの感興を殺いだ。

　續けて團子（猿之助）の青年エルハルトが、入つて來る。エルハルトも脚本で讀んだ感じとは全然違つてゐた。私たちは、

「思つたより喜熨斗のエルハルトは拙いぢやないか。」

「うん、あれぢア仕様がない。柄にない役だね。」

など〻批評し合つた。

　が、併し、當時の私たちは舞臺の上から戯曲「ジョン、ガブリエル、ボルクマン」を讀むに忙しかつた。そして、落着いて各個の俳優の藝を味ふ餘裕がなかつたのだ。二階からは八年間室内に閉籠つて、グンヒルドから「病氣になつた狼」と云はれた者ボルクマンの靴音が底氣味惡く響いてくる。キルトン夫人が華やかな聲を殘して立ち去つてしまうと、もう自分たちの一生をすつかり生活し盡してしまつたグンヒルドとエルラの二人の姉妹が、グルヒルドの生んだエルハルトを互ひに取らうとして爭ふ。エルハルトは歡樂を追つてキルトン夫人の後を慕つて行つてしまう。靴音がやんだかと思ふと、二階から沈鬱なピアノの音が響いてくる。ショパンの「フユネラルマーチ」だ。二人の女の爭ひは其儘續く。エルラはやがて「おやすみなさい」を言つて、立ち上つてしまふ。グンヒルドは床の絨壇の上に一

れて、二階の音樂をぢつと聞き入つたまゝ、

「おゝ、狼が又た吼える。病氣の狼が。エルハルトや、エルハルトや。どうぞ、この年とつた母を見捨てゝおくれでない。どうぞ歸つて來て、この母を助けておくれ。ほんに〳〵こんなにして生きてゐては、もう私の身體は長くもたないのだから。」と、苦しげに呻く。

ベルが鳴つて、幕が下りた。幕間に廊下に出た私たちは、すつかり興奮してしまつた。西洋流の短かい幕間が濟んで、ベルの音と共に第三の幕が開いた。

病める狼の住んでゐる二階の大座敷である。古いゴブラン織の壁には獵の圖が織り出されてゐる小さなフリーダがピアノの前に坐つて、丁度フユーネラル、マーチを彈き終つたところだ。中央の卓上のランプの光に照らされた左團次のジョン・ガブリエル・ボルクマンが、先づ私の眼に入つた。雪の如き白髮で、長い頬髯を生してゐる。

「うむ、イプセンの似顏でやつてゐるね。」

「ちよつと思ひつきだ。だが、西洋ではよく作者の似顏でやるさうだよ。」

「さうかなア。なか〳〵よく似てらア。」

など〻、私たちは話し合つた。

人の好い老書記フォルダルには左升が扮した。此場の左升の出來は、實に拔群であつた。フォルダルが引込んでしまうと、戸を叩く音が聞えて、灯を點じたる蠟燭を手に持ちエルラが現はれる。エルラは黑い外套を肩にまとつてゐる。このエルラが現はれる前に、左團次のボルクマンは戸を叩く音を聞くや否や、抽斗から小型の鏡を出して、七三に分けた白髮を搔き直したりなにかする仕科をするのである。イプセンの日常生活を書いた書物で、あゝいふ魁偉な容貌をしてゐながら、人に會ふ前には必ず鏡を見て、自分の容子を取りつくろつたといふことを讀んだ覺えがあるので、ボルクマンをイプセンとして取扱つた左團次の思付に、思はず微笑まさせられた。肺病の爲に殆んど死にかゝつてゐながら、深夜裸蠟燭を持つて八年ぶりに昔の戀人を訪ねて來たエルラは、非常に私たちを感動させた。殊に事業の爲に自分を捨てゝ姉妹を娶つたボルクマンに對して、彼女が怨言を放つ情景は實に素敵であつた。

「あなたは人殺しに違ひない。而も二罪倶發の人殺しです。わたくしの魂を殺すと共に、御自分の魂をも殺しておしまひなすつたのです。」

と、彼女が激しながら言ふところは、今でも耳目に殘つてゐるやうな氣がする。

これは余談だが、自由劇場の試演に刺激されて、私が處女戯曲「歡樂の鬼」を書いた時には、この女主人公の白を書く毎に、始終從若のエルラが目の前に浮んでゐた。彼女の影響から脱しる爲に非常な苦心をした程であつた。

私たちは開幕中殆んど時間の立つのを覺えないくらゐであつた。三幕目が濟んで、愈よ四幕目が始まらうとする時、舞台裝置を担任してゐた和田英作氏が、いかにも畫家らしい無雜作な風で私たち「昴」の同人の集まつてゐるところへやつて來た。そして、

「自由劇場の初日を祝ふために芝居がはねたら、どうぞ皆さん東洋軒の二階にお集り下さい。シャンパンをぬきますから。」

と、言はれた。まだ文學青年にすぎなかつた私たちが、文壇の大家と卓を供にして、自由劇場の主事と俳優其他の關係者の爲に祝福の宴を張るといふのは、當時の私たちにとつては、非常な光榮に感じられたから、無論私は直樣承諾した。

第四幕目が始まつた。左團次のボルクマンは、堂々としてゐて、可なり強い力を持つてゐた。茲でも左升のフォルダルが、また三幕目より一段とよい出來であつた。自分の娘の乘つてゐる橇に曳かれてビッコをひきながら、それでも娘の自慢を言つてゐる好人物の老書記を左升は巧みに現はしてゐた。事によつたらこの「ボルクマン」劇を通じて、左升のフォルダルが一番の成功ではないかしら、とさへ私たちには思はれたのであつた。

病氣になつた狼は小高い丘の上で、死んでしまつた。周圍の山には白雪が皚々と降り積んでゐた。ボルクマンは雄大な夢を心の裡に描きながら、而も死んでしまつた。冷たい彼の骸の前では、戀と憎しみの爲に一生を使つてしまつた二人の女の姉妹が、互ひに手を取り合つて心淋しい和解を遂げた。

芝居が濟むと、私は「昴」の同人たちと一緒に東洋軒の二階の方へ、人々の後を尾いて上つて行つた。二間ぶつ通しにした二階の部屋では雜然と椅子や卓が並べられてあつた。私たちは末席の方の椅子に腰を下した。そして、恐る〳〵一座を見廻した。島崎藤村氏や、柳田國男氏や、蒲原有明、岩野泡鳴、岩村透、徳田秋聲、田山花袋等の諸氏が中心になつて煙草の煙を吐きながら談笑して居られた。その側に舞臺裝置をした和田英作、中澤弘光、北蓮藏、岡田三郎助などいふ畫家の連中が疲れ果てたやうな顏をして、それでも嬉しさうに眼を輝かしてゐた。やがて、入口のドアが開いたかと思ふと、小山内薫、市川左團次の兩氏を先頭にして自由劇場の俳優及び關係者が、全部顏を落し、衣物を着替へて出て來た。自由劇場の連中は細々、

一つの卓にぐるりと坐つた。吾々の前にはシャンパンの盃が置かれた。やがて、ボーイたちがゴチャ〳〵に坐つた人々の間を、かき分けながら泡立つシャンパンを注いで廻つた。

今はもう故人になつた岩野泡鳴氏が立ち上つて、いつもの通り元氣のいゝ高調子で自由劇場の爲に一場の祝辭を述べた。そして、一同の者はシャンパンの滿を引いた。それが濟むと、小山内氏が直樣立上つて、自由劇場關係者一同を代表して、答辭を述べた。私たちは其時掌が痛くなるほど喝采した。小山内氏の答辭が濟むと、皆な自由劇場の連中は靜かに退席した。その後で又た談話が一しきり榮えた。

自由劇場の顧問になつてゐた文學者たちは、誰も舞臺稽古の日まではこれほどの出來を豫想することが出來なかつたらしい。中には舞臺稽古を見て、すつかり失望した人たちもあつたやうだ。それだけに人々の興奮は大きかつた。私にもう劇界で十四五年の生活を送つてゐるが、あれほど感激的な一夜は、それ以來一度も實驗はない。これは後で聞いた話であるが、其日の開場前に小山内君が舞臺の幕外へ立つて、奇抜な開會の辭を述べた時、柳田國男氏が少し後れて入つて來て、「や、パッショネートなところへやつて來たね」と言つたさうである。そして、ぢいつとその演說を聞いてゐたが、やがて考へ深く、「僕等にはこんな時代はなかつたよ」と、傍人に向つて言つたさうであ

其頃の藝術家は皆な貧乏であつた。そして、一體が率直であつた。自由劇場の連中が行つてしまうと、すぐ今夜の會の發起人である相當な大家たちが、帽子を持つて吾々末輩の所までシャンパンの代を集めに來た。

「や、いくらでもよござんす。失敬ですが、この中へ金を抛り込んでくれたまへ。」

と、かう言つてその人たちは帽子を差し出した。私は囊底を逆まにして、僅かばかりの銀貨と銅貨をその帽子の中へ入れた。

私たちは外に出た。そして　まだ納まらない興奮を何かに漏らさうとして　もう電車も通はないやうな深夜の街上を飲み廻つた。

この一回の自由劇場の試演で當年二十九歳の青年藝術家小山内薫氏は一躍して、劇界の寵兒になつてしまつた。翌朝の凡ての新聞は小山内氏と左團次の寫眞を掲げて、極力自由劇場の事業を賞讃したものであつた。試演は僅か二日であつたから、その翌晩も私は見に行つた。二日とも滿員で、かういふ芝居としては大成功であつた。

當時、「昴」の同人たちのうちに作劇の欲望が動いてゐたことは、前に述べた。一方、坪内博士の文藝協會を中心として、そ

こに集まつた若い藝術家の中にも亦劇作を志してゐる人たちがあつた。楠山正雄、秋田雨雀などの人々が、それであつた。文藝協會の公劇と自由劇場のこの試演に刺激されて、吾々の作劇熱は益々昂まつてきた。吉井勇、木下杢太郎、秋田雨雀の諸氏は、もうその時既に二三の劇を發表してゐた。殊に吉井勇の「午後三時」といふ敍情的な戯曲は、坪内博士其他の人々の稱讃を博した、一種の氣分劇であつた。私は自分の心持がハツキリ戯曲の方へ動いてくるのを感じた。丁度其時佛蘭西から歸朝した永井荷風氏が慶應の文科の先生になつて、傍ら「三田文學」を新らしく創刊される爲め、私にも寄稿を頼まれてゐたので、早速一幕の社會劇を創作しようと思つた。當時私たちに一番強い影響を與へてゐるのは、矢張りイブセンであつた。私は三ケ月ほどかゝつて、漸く一作を書き上げた。それは私の處女作「歡樂の鬼」である。

「ジヨン・カブリエル・ボルクマン」の批評は、數多く出た。概して好評であつたが、役者の演技については可なりとり〴〵の議論があつたやうである。島崎藤村氏は「演劇雜話」といふ題の一文の中で、かういふことを言つてをられる。

(前畧) 有樂座で『ボルクマン』を演した俳優が感情で役々を取扱はうとした嫌ひのあつたことは、從來の芝居を離れないやうな思ひをさせた。その爲に宗之助のグンヒルド、やゝもすると敵役のやうになりさうに見えた。蓮若のエルラも愁歎に流れようとした。兎に角脚本に忠實なといふことは、多くの欠點を補つて、從來の俳優本位の芝居よりも、確かに正しい道だといふことを思はせた。

從來の芝居に等閑にされたことで、今度『ボルクマン』の試演に一番よく目立つたのは、舞臺上の監督の行屆いたことである。芝居の評といふと、このマネージメントのことは、あまり言はれないが、どういふ思想に導かれて俳優があすこまで行き得たかといふことをも、考へてみねばならぬ。(中略)

それからかういふ芝居の興つてきたことが、刺激になつて、新らしい脚本を書くことや、新らしい俳優や、劇評家なぞが興つてくる初といふことになつたら、それこそ今までの夢は破れて行くであらう。劇界も面白いことなりかけて來た。

森田草平氏は『俳優無用論』の中で、かう言つてゐる。

(前略) 私はこの劇を見てゐる間、役者なぞといふものは殆んど眼中になかつた。始終イブセンとピタリと顏を見合せてゐるやうな氣がした。そしてイブセンの操つる糸によつて、自分の情調を支配されてゐるやうに感じた。この劇が愈よ高潮に達して、第三幕目の終り、三人の年寄が互ひに若いエルハルトを自分の方へ引付けようとして爭つたが、エルハルトは誰にも從はないで、キルトン夫人と共に駈落してしまひ、その後でグンヒルドが夢現の間にエルハルト、エルハルトと呼びながら、吾が子の後を追ひかけようとして、思はず戸口に立つてゐるエルラの腕に凭れかゝつて、姉妹が手を握り合ふその途端に幕が下りる。この邊りは何とも云はれぬ程面白かつた。併し、それは宗之助がうまいと思つたのでもなければ、蓮若がうまいと思つたのでも

ない。實にイプセンはうまいものだと、つく〴〵思つたのである
（中略）

之を要するに、今回の自由劇場第一回試演は、豫想外の大成功であつた。それは役者の手柄でもなければ、「背景のお蔭でもない。直接イプセン自身の效果である。從つてイプセン劇を初めて日本へ輸入した小山内薫、市川左團次兩君の手柄である。

自由劇場第二回試演は、翌四十三年の五月二十八、九日の二日間、矢張り有樂座を於いて開演された。左に其の役割と上演脚本を記す。

明治四十三年五月廿八日、廿九日午後六時有樂座に於いて開演

（一）「出發前半時間」一幕

フランク・エデキント（獨逸）作

森鷗外氏譯

役割（出演）

従者……市川團子
ホテルノ給仕……勝川吉松
オペラ役者ジエラルドオ……市川左團次
娘ロサベル・キヨウルヌ……市川鯱丸
小使……市川若藏
作曲家チュウリング……市川左升
ピアノの女教師……市川米三
貴婦人ヘレヱネマロウワ……市川莚若
ホテルの主人シユルレル……市川福藏
下女……市川米三

（二）「生田川」一幕

森鷗外氏作

役割（出演）

葦屋處女（あしやをとめ）……市川延若
その母……澤村宗之助
菟原壯士（うなひをとこ）……市川左團次
茅渟壯士（ちぬをとこ）……市川團子
僧……市川左升

（三）「犬」一幕

アントン・チエホフ（露西亜）、作

小山内薫譯

役割（出演）

地主ステパン……市川左團次
隣人イワン……市川壽美藏
ステパンの娘ナタリヤ……坂東秀調

とのプログラムでも見られる通り、今回の演出は全部一幕物

の排列である。そして、最初に演出されるフランク・エデキントの「出發前半時間」は「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」などゝ違つて、辛辣な諷刺的作品である。市川左團次のやうな藝風の役者が、果してこの戯曲に適すであらうかといふ點で、私たちは多大の疑問をもつた。のみならず「ジョン・ガブリエン・ボルクマン」は例へ少々役者の演技が拙劣でも、あの屑々として幕を重ねる毎に、漲つて來る脚本の力でどうやら見られるがこの「出發前半時間」のやうな諷刺的な作品は、餘程新しい劇術によらなければならない。又第二の「生田川」は森鷗外氏創作である。そして、古代の物語を、現代語を以て劇化した試作である。これまでこういふ古い物語を、現代語を以て劇化した詩人は、少くとも日本では一人もなかつた。自由劇場の俳優が果してどういふ白廻しで、この創作を演出するであらうか。第三に列べられたチエホフの喜劇「犬」は前の二作に比べると遥かに甘い作品である。喜劇として、その内容から言つても、手法から云つても、極めて通俗的なものである。折角初めてチエホフの劇を日本に輸入するならば　當時私たちが熱讀措く能はなかつたところの「櫻の園」「三人姉妹」「ワーニア叔父さん」のやうなものでも出して欲しい、と私たちは思つたのである。か、併しさうは言ふものの、少なくとも第二回の自由劇場の脚本の決定は、大體においては、可なり目論的なものであつた。玄人の連中であるとはいへ、あの貧弱な一座を以て、第一回の脚本とは全然違つたこの三種類の脚本を上演するといふとは隨分大膽な企てゞある。

當時の劇文學者は皆なまだ若かつた。少なくとも坪内博士と森林太郎氏を除いた以外のものはまだ二十から三十代の青年であつた。私たちはこの自由劇場の冒險的な企を非常な興味をもつて迎へたのであつた。

時は初夏．日暮時、丸の内で電車を乘捨てた私は、淺黄色の瓦斯の光にも心を躍かしながら、數寄數橋側に立つ堂々たる有樂座の大玄關に辿り着いた。先づ私は入口の雜沓に驚ろいた。場内へ入つてみると、廊下から座席かけて、爪も立ためほどの大入である。

日本の演劇の革新はきつと茲から起つてくるであらうといふやうな豫想が、この大入滿員を見てゐるうちに、私の心には力強く湧き出てきた。幸福な氣持で私は自分の座席へ入つた。

開演の前に第一回試演の時と同じくフロックコートを着た小山内薫氏が幕の前に現はれて、同氏獨特の氣の利いた口上を述べられた。小山内氏が引込むと、すぐ開幕のベルが鳴つて、フランク、エデキントの「出發前半時間」の幕が開いた。

オペラ役者ゼラルドオに扮した左團次は、地味な背廣を着て、眞黒な地頭で殆んど素のきゝ舞台へ出てゐた。少なくとも有名なオペラ役者で、そして、フランク、エデキントのグロテスクな諷刺劇の主人公である以上、もつと堂々たる格幅で、そして純粋の西洋人でなければならないやうに、私はその時考へた。舞台稽古の日左團次は睡眠不足と過勞の爲に、舞台で卒倒したと聞いてゐたが、仕合せと初日にはもうすつかり丈夫になつてゐた。この芝居にはイサベルキヨウルヌ、ピアノの女教師、ヘレエネ、マロウワ、下女と、四人の女性が出て來る。それ等の女に扮した俳優は皆な女形であつた。が、矢張り本當の女優でないと、具合が悪いといふことを私はしみ／＼感じた。左團次のオペラ役者は遺憾ながら、さう成功したとは言ひ兼ねる。劇がだん／＼進行して、左升の扮した老作曲家デュウリングが出て來ると、俄かに舞台が緊張してきた。左升は實にうまい。扮裝と云ひ、動作と云ひ、白廻しと云ひ、確かに一生屋根裏で立身出世を夢みながら、オペラを書いてゐる不遇な老作曲家を遺憾なく現はしてゐた。此前の「ボルクマン」の時のフオルダルと云ひ、この役と云ひ、性根に於いては余程似たところがあるが、演技に於いては全然異つたものであるのに、吾が左升は二つの區別を截然と立てた。而も双方とも成功してゐた。左升はえらいと、思はず私は叫んだ。

要するにこの「出發前半時間」は成功とは云へなかつた。一つは第一回の時より看客たる私たちの態度に余裕が出來てゐたゝめ、前の時ほど芝居に沒入することが出來なかつたゝめもらう。が、併しこの出し物が彼等に不適當なものだつたといふことは、爭はれない。第二に上演された森氏の一幕物「生田川」は、先づ舞台装置の美しさに驚ろかされた。この脚本は内容から云へば、さう大したものではなかつたが、兎も角も現代語で書いたといふところに、當時の吾々の全部の興味がかゝつてゐた。元來、舊劇出の俳優であるだけに、かういふものになると、演技の上の破綻はない。そして、吾々の興味をかけてゐた現代語の白廻しも、決して危惧したほど不自然には聞えなかつた。無論、これを書かれた森氏の細心な注意と、俳優の工夫とがかういふ結果を齎らしたのではあらうけれど、兎も角も吾々には成功に近い感じを與へた。幕が下りてから廊下へ出て煙草を喫しながら、私たちは

「もうこれからは史劇でも何でも、現代語で書くんだね。」

「さうだとも、古い言葉なんか使つたつて、仕様がありやしない。現代語で古い時代の味を出して行くのが、詩人の腕だ。」

などゝ話し合つた。

第三の「犬」は初めに言つた通りチエホフの作品の中でも、通俗的な喜劇であるだけに、さして私たちは期待もしてゐなかつた。左團次の地主ステパンは扮裝上の苦心も見えたし、一徹なそのくせ人の好い老人の姿を寫す點に於いては、成功してゐた。が、困つたのは、ステパンの娘ナターリヤに扮した秀調であつた。普通の女優ならば、さして六つかしい役でもないのだのに、先づ舞台へ出て來た樣子から既に錦繪で書いた紅毛人の娘の姿のやうな感じを與へた。そして、喜劇ではさう目立たない裏聲の使ひ方が、輕快な喜劇であるだけにぎごちなく、重苦しく不自然に聞えた。壽美藏のイワンは、一體に笑劇的な誇張が多すぎていやであつた。

明治四十三年十二月二日、三日の二日間第三回目の自由劇場は有名なゴリキイの「夜の宿」四幕と、吉井勇君の「夢介と僧と」といふ西鶴種の一幕物とを、正午十二時からマチネーとして興行した。その役割は左の通りである。

マキシム・ゴオリキイ作

小山内薰譯

「夜の宿」

役割

ミハイル・イワノヰツチ・コスチレフ、五十四歲、木賃宿の主人……市川吉松

ワシリサ、その妻、二十六歲……阪東秀調

ナタシヤ、妻の妹、二十歲……市川莚若

カドエデフ、右兩人の伯父、巡査、五十歲……市川喜三郎

ワシカ・ペペル、二十八歲……市川左團次

アンドレイ・ミトリツチ・クレシヤ、錠前屋四十歲……市川猿之助

アンナ、その妻、三十歲……市川米藏

ナスチヤ、娘、二十四歲……澤村宗之助

クワシニヤ、物賣女、四十歲位……市川左喜之助

ブブノフ、帽子屋、四十五歲……中村又五郎

サチン、四十歲位……市川壽美藏

男爵、三十二歲……市川荒次郎

ルカ、巡禮僧、六十歲……市川左升

アヨシカ、靴屋、二十歲……澤村源十郎

シイフコウブ、四十歲位、人足……澤村國之助

韃靼人、四十歲位、人足……市川島次郎

其他跣足の人、三四人、名なし、無言……

場割

第一幕。地下室の朝
第二幕。地下室の宵
第三幕。路次の夕
第四幕。地下室の夜

吉井勇氏作
「夢介と僧と」

役割

僧……市川左團次
夢介……澤村宗之助
吉三と呼ばるゝ青年……市川壽美藏
お七と呼ばるゝ少女……市川莚若

場所

「幻の家」と呼ばるゝ庵……

主事　小山内薰
俳優總代　市川左團次
背景係　和田英作、北蓮藏、岡田三郎助、青山熊治、辻永、松山省三、正宗得三郎、遊佃太郎
事務　木村錦之助、川上五郎、長谷川虎太郎

「夜の宿」は全部小山内氏の飜譯が出來ると、「三田文學」に掲載された。小山内氏は「夜の宿」の演出に就いて、大略次のやうな意味のことを言つてをられる。

先づ『三田文學』を手にしながら、俳優一同に『讀み合せ』といふものを幾回もやる。それから本なしで暗誦的に對話の稽古をする。だん〳〵に白廻しをつけて行く。白がいゝ加減固まると、立稽古にかゝる。私は舞臺へ出る人のアクションに就いては余り、口を出さない。成るべく一人々々のオリヂナリテイにたよることにする。尤も口を出さうとしても、その方の素養がないから、駄目なのである。只私は本を持つて立つてゐて、字の間違ひだの、白廻しの間違ひだのをコレクトするだけである。

背景はモスコウの藝術座でやつた時の寫眞を參考にして、先づ下圖を作つてもらう、地下室の天井は圓く造ること經濟が許さないので、只斜めに平らなものにしてしまう。幾ら寫眞を見ても、玄關口がハツキリしないので畫家と私の考へで、正面のアーチの下を玄關口に決めてしまう。寢臺や机は新たに作つて塗ることにするので、その寸法、下圖などを有樂座の大道具に渡す。寢臺も經濟が許さないので、數を少なくする。そして、その外は二重を置いて、その上を汚い布で包んでごまかす。三幕目の路次のところで下手に見える木賃宿の外の壁は、一つ屈曲すべきであるのを、繪の陰影でごまかして、一枚の張物にしてしまう、小道具でロシアの空氣を出すなどいふことは、なか〳〵容易なことではない。第一序幕の始めに物賣女のクワレ

ニヤが、サモアルの世話をしてゐるところがあるが、サモアルなどゝいふものはなか〳〵日本でちよいと得られるものではない。だから、無しで濟ますことにする。

男爵が擔ぐ天秤棒にも困つた。ロシアでやつた時の寫眞を手本にして、日本の天秤棒の兩端へ妙な形の木を付けて、幾らか西洋臭くすることにする。一幕目に使ふ象戯は獨逸製の安物を玩具屋で買つて來る。吊ランプは適當なものがなくて弱つたので、ブリキ製の笠に稍や形の面白いのがあつたから、それで濟ます。四幕目に使ふ置ランプは、小道具に造らせる。錠前屋の道具にも可なり骨が折れた。小道具は東京中を歩いて、五六十西洋の鍵ばかりを集めて來た。併し、これはくだらぬ骨折だと言つて、私は怒つた。鍵などは日本の鍵で一向差支へはない。帽子は余程ロシア式にしなければならなかつたが、日本ではそれもなか〳〵困難である。向うの勞働者の冠る海軍帽のやうな帽子の古いのを二つハルピンから送つて貰つたが、それは木賃宿の主人と、靴屋のアリヨシカに冠せることにする。この帽子は裏があかじみて臭く冷たい。それでも一つについて一ルーブルづゝ拂つたのだ。その外の帽子はみんな小道具の持つて來た中から選ぶ。靴は大體小道具の持つて來たもので間に合せる。ルカと帽子屋との穿く草鞋はハルピンから送つて來た本物である。脚袢は向うの繪や寫眞を手本にして木綿の布を巻き付けることにする。三幕目の空地におく槐は伊井蓉峰が新富座で南極探檢の芝居をした時に、使つたやつがあるからあれを借りることにする。衣裳ではロシアのシャツが得られないから困る。『白樺』の里見君が呉れた縁に赤い糸で刺繍(ぬひ)のしてあるロシアのシヤツ二枚はあるが、其の外には何もない。一枚はペペルに着せ、一枚は役者に着せて、あとは有り合せの日本物で間に合す。服は大低有り合せで間に合す。女の衣物はナスチヤとナタシヤとアンナーのは、ばどうにか間に合ひさうだが、ワシリサとクワシニヤの上衣に適當なものがない。乃で、ワシリサのは洋服を貸す柳原の岡部が持つて來た。赤い風呂敷にロシヤ更紗のがあつたから、それで拵らへることにする。クワシニヤの上衣と前掛及びワシリサの前掛は、ロシヤ更紗屋へ行つて、布を買つて來て縫ふ。ルカの外套は日本の陸軍の馬丁や、小使の着る黒いボタンの付いてゐるやつの腰を少し縫つてヒゲを付けて、いくらかロシヤ臭くする。アタマは例によつて大勝を頼む。大勝には一々ロシヤでやつた時の寫眞を見せて、説明をする。顔の拵らへはその人々の工夫に任せる。但し參考の爲めモスコーでやつた時の寫眞を渡す。二幕目と四幕目で唄ふ唄は譜に合せて拵らへた。序幕の初めの方にある遠くの物音は、私は二三の人と一緒にやることにする。ドイツでやつた時には蓄音機で犬の聲を聞かしたさうだから、俳優學校の生徒で犬の鳴聲の甘い人を頼んで來て、やつて貰ふ。三幕目の喧嘩の時、蔭でさせる器具の壞れる音は、四斗樽に瀬戸物の壞れを澤山入れておいて、キツカケで、私が舞臺の床へドシンと落す。

唄は齋藤佳三君に教へて貰うことにしたが、無理だつたから、凡て蔭で唄を合せることにした。三幕目の音樂も同君がやつてくれた、ナスチヤの話の間は唄なしでロシアの國歌を彈いた。ルカの話の間は讃美歌らしいものを齋藤君の友人と二人で、オルガンに合せて二部合唱にしてやつた。電氣は例によつて、明治座の丸ちやんに頼む。序幕は下手の窓からライムライトで、白い朝の光を中央の大机へ向けて注がせる。二幕目はランプの光に效果がある程度に於いて、舞臺は暗くする。アンナが死んでから又た少し暗くする。三幕目は防火壁の横に高い窓を作つて、そこからライムライトで樺色の夕日の光を斜めに射

水壁一杯に注がせる。そして、カーボンのつきる時分を待つて、この光をニューッと消して、フットライトから蒼白いッワイライトを注がせる。四幕目は二幕目より少し舞臺を暗くする。幕切れに巡禮が出て、役者が首を縮つたといふあたりには、殆んど眞闇になるまで、舞臺を闇くする。

凡ては舞臺稽古で試驗をして見る。

「夜の宿」は拔群の出來であつた。恐らく自由劇場のレパアトリイのうち、それが最も成功したものであつたであらう。元來、「夜の宿」といふドラマは、何となく日本の舊劇の世話物のやうな匂ひが、どこかに出てゐる。それだけに舊劇出の俳優にはやりよいといふ點もあつたであらうし、又この劇の登場人物が、凡て社會から放逐された人間、泥棒、浮浪人、巡禮、淫賣婦などであるだけに、日常の動作や言語が決して歐羅巴の紳士のそれと同じでない、寧ろ原始的な、素朴な、東洋の賤民のそれと大して變つてゐないといふ點も、その演伎を樂に私に鑑賞させた原因の一つであらう。併し、この戯曲が面白かつた第一原因は、何と云つても作家の天分が非凡だからである。

只、殘念なことは稽古に十分の日がとれなかつたり、役者の理解力の不足してゐたゝめに、動作と白とが十分にこなれ切つてゐなかつたことであつた。又これまでの二回の演出に比べて舞台監督の注意が隅々まで行き亘りかねてゐたといふことも、この演出の缺點の一つであつた。併し、小山内氏の肩をもつ譯ではないが、前二回の脚本を比べてこの「夜の宿」は複雜な點では非常な差がある。そして、徹頭徹尾非戯曲的な作品である。監督にはさぞ骨の折れたことであらうと思はれる。左團次のペペルはキビ〳〵した若い盗賊を現はした點では、遺憾がなかつたが、ルカ老人の説教に頭を下げる純な氣持が十分に出てゐなかつた。左升のルカ老人は舞台に現はれた時、何だか巡禮らしくないやうな感じがしたが、一體から云ふと可なり味のあるやり方であつた。尤もキリスト教といふものに全然馴染のない人がやるのだから、無理はないと思はれるけれども、兎に角この暗い「夜の宿」に光を齎らした敬虔な巡禮の性格が十分に現はされてゐたとは云へない。壽美藏のサチンは拙かつた。彼白から吐く警句に對して、實は理解がないやうに見えた。又石郎の帽子屋は上出來であつた。猿之助の錠前屋も可なりに演つてゐた。その外の人たちは皆な可もなく、不可もない程度の出來であつたやうである。

第三回の興行には、「夜の宿」の外に吉井勇君の「夢介と僧と」といふ一幕物を出してゐる。これは西鶴の小説を戯曲化したものであつて、作者としても餘りお得意のものではなかつたやうである。俳優の演出も亦不成功であつたといふより外に言

方はない。」

明治四十四年の春、私は一年志願兵として麻布の歩兵第一聯隊に入營してゐた。そして、浮世を外に毎日練兵ばかりさせられてゐた。その四月漸く第一期の檢閲が濟んで、多少兵營生活にも馴染んだ頃のことである。ある日曜日に家へ歸ると、其時分まだ早稻田の英文科に通つてゐた弟の幹彦が、

「二三日前に小山内さんから、兄さんの歡樂の鬼を今度自由劇場で演りたいと言つて來たよ。」

と、私に向つて言つた。

「歡樂の鬼」は前にも述べた通り私の處女戯曲である。その當時友人の間の評判はよかつたが、鬼に角あれが今劇界の人氣を一身に背負つて立つてゐる自由劇場で上演されるとは、私にとつては思ひもかけぬ喜びであつた。

「フウン。」

と、さり氣なく弟の言葉を受けておいて、さて、私は弟に問ひかけた。

「それで、西洋の物は何を演るんだ。」

「知らない。何でも小山内さんの話ぢや、日本の新進作家の一幕物を三つ並べるんだつて、言つてたぜ。兄さんのと、吉井君のと、秋田君のと……。」

私は早速承知したといふことを、弟を通して小山内氏に通じて貰つた。暫らくすると、新聞に自由劇場第四回の試演は、六月一日、二日午後六時から矢張り有樂座に於いて開演する。演し物は長田秀雄氏作「歡樂の鬼」一幕、秋田雨雀氏作「第一の曉」一幕、吉井勇氏作「河内屋與兵衛」一幕、マアテルリンク作「奇蹟」二幕に決つたといふ通信が出た。私は早速小山内氏に向つて、目下入營中の爲め、日曜以外には寸暇もないから、演出に就いては全部あなたにお任せする。どうか宜しくお願ひ申すといふ手紙を送つた。この手紙は人が寢靜つてから暗い五燭の電燈の下で走書をしたのであつた。この手紙を書いてしまうと、すぐ私は鐵のベットに身を横へた。晝間の練兵で無茶苦茶に勞れた身體も、流石に自分の戯曲の第一回上演が近いたと思ふと、眠られなかつた。私は毎日練兵が濟むと、酒保へ行つて新聞を見た。そのうちに役割が發表された。即ち左記の通りである。

明治四十四年六月一日二日午後六時有樂座に於いて開演

(一)長田秀雄氏作「歡樂の鬼」一幕

法學博士遠藤亨……………市川左團次
夫人敏子……………………市川莚若
檢事、津田三吉……………市川猿之助

醫師、亘理愼太郎……市川荒次郎
下女、みよ……市川莚蔦

(二)秋田雨雀氏作「第一の曉」一幕

三五郎……市川猿之助
平四郎……中村又五郎
行雄……壽美藏
八重……市川莚若
乳母……市川市十郎

(三)吉井勇氏作「河內屋與兵衛」一幕

河內屋與兵衛……市川左團次
その父……市川市十郎
その母……中村又五郎
妹、おかち……市川莚若
長崎の商人……市川荒次郎
ドン・フアン・テノリオ……市川左團次

(四)マアテルリンク作「奇蹟」二幕

森鷗外氏譯

聖者、アントニュス……市川左團次
婆キルジニイ……市川猿之助
甥ギュスタアフ……市川荒次郎
甥アシル……市川壽美
醫師……中村又五郎
技師……勝川吉松
僕ジヨセフ……市川若藏
女主人オルタンス……市川莚若
警部……澤村源十郎
巡査……市川島次郎
署長……市川市十郎
客……米三、莚蔦、莚平、島藏、樂三郎、左喜藏

愈よ當日の六月一日になつた。入場切符は聯隊に送つて來た。乃で早速中隊長と週番士官に夕刻から外出を許可してくれるやうに賴んだ。中隊長は默つて私の言ふことを聞いてゐたが、やがて僅かな鼻下の髯をひねりながら、

「さうか、君の書いた小說を芝居でやるんだね。」

と、訊ねた。戲曲と小說の區別を說明しようかと思つたが、面倒臭いので、私はやめた。

「よし。外出を許可してやらう。」

と、かう言つて、外出許可の木の札を與れた。私は恭々しく

敬禮をして、廻り右をして士官室を出た。

六月一日は晴れた美しい日であつた。午後から私たち志願兵一同は、手旗信號の演習を課せられてゐた。私はいや〱その演習に出席してゐた。演習は敎官によつて頗る熱心に續けられた。そして、四時になつてもまだ濟まなかつた。私はだん〱苛々してきた。乃で、四時半を打つと一緒に、志願兵の列から離れて、私は敎官の所へ行つた。そして、事情を話して、すぐ外出さしてくれと賴んだのであつた。敎官は許してくれた。私は外出用の服に着替へ劍を吊ると一緒に、殆んど駈けるやうにして營門を出た。そして、電車で有樂座へ行つた。入營中のこの半年間、夜電燈が點いてから外出したとは一度もなかつた。私は電車の中で東京の市街の初夏の夜の美しさを、貪るやうに享樂した。重い兵隊靴を引摺つて、有樂座の大玄關を上ると、丁度そこに吉井勇君が立つてゐた。

「オ、よく出て來られたね。」

と、吉井君は笑ひながら、かう言つた。

私は吉井君の後をついて、吾々「昴」の連中の陣取つてゐる二階の坐席へ行つて見た。そこには北原白秋、木下杢太郎などいふ連中と一緒に丁度その時來朝してゐたベルリンの博物館の、東洋美術の係をしてゐる、グラアゼル博士夫妻も坐つてゐた。夫婦とも若い人だつたが、良人は溫厚な學者であり、細君は歐羅巴の近代劇の通であつた。細君は私の軍服の姿を見て、

「シュミツトボンも兵隊へ行きました。あの人は兵隊から出ると、思想がすつかり變りましたから、あなたもきつと變るでせう。」

などゝおせじめいた事を云つてくれた。

廊下には相變らず文學者たちが、一杯立つてゐた。私の兩親も弟の幹彦に連れられて、不肖な子供の芝居の上演を見に來てゐた。私たちが席に著くと、吉例によつて瀟洒な小山内氏が幕外に現はれた。今度は日本の作家の物を主に試演するといふ口上を述べた。

小山内氏は事實自由劇場のヒーローであつた。見物の人たちは小山内氏が出て來ると、雷のやうな拍手を浴せかけたものであつた。やがて、ベルの音と共に幕が開いた。「歡樂の鬼」の上演の成績は、先づ成功と云つてもよかつた。只、左團次の扮した主人公の線があまりに太かつた。グラアゼルの細君は私を顧みてあなたの芝居はイプセンの模はうだとやツつけた。私は憤然として色々辯解した。續いて、秋田君の「第一の曉」の幕が開いた。「第一の曉」は今でも私は秋田君の創作のうちで、傑作の部に屬すべきものであると、信じてゐる、作者の素直な正しい

魂が、その儘叙情的な句となつて、舞臺の上に漲つてゐるやうな芝居であつたが、殘念なことには演出が拙かつたので、期待したほどの面白味がなかつた。今ではもう普通興行でもやることだが、この芝居では舞臺を全部眞黒な布で仕切つた。有樂座の舞臺が淺いのと、俳優の演出が余りに現實的であつたゝめに、到頭完全なイリユージョンが出ないでしまつたのである。第三番目は吉井君の「河内屋與兵衛」である。この舞臺裝置の美しかつたことは、今もまだ目の前に殘つてゐる程である。河内屋與兵衛は吉井君の若い魂が、平凡な周圍に壓迫されて反抗的にほとばしり出た叙情劇である。吉井君の芝居が幕になると、木下杢太郎君や何かで當夜の作者吉井君と私のために、東洋軒の二階で盃を舉げてくれた。「奇蹟」が濟んで、友達に別れて日比谷へ出た時にはもう十一時半を余程越してゐたので、私は急いで電車に乘つた。外出の時間は十二時までゝあつたからである。そして、十二時キチ〳〵に營門をくゞつたのであつた。

左に島崎藤村氏の第四回試演に對する感想を掲げる。

(前略) 小山内薫初め其他の諸氏の非常な骨折で、今度で第四回目の試演を重ねた。私は柳田國男君、中澤臨川君等と同じ枡で見物した。長田君、秋田君、吉井君の新らしい作が、これまで外國の近代劇をのみ演じてゐた自由劇場の舞臺に上されたといふことは、種々な點に於いて、一般の看客にも多くの藝術家にも新鮮な刺激を與へたことゝ思つた。飜譯でない純粹の意味の新作が、舞臺へ登つたといふとは、これが初めてといふ譯ではないが、少くも私には秋田君の題あるやうに新らしい芝居の『第一の曉』らしくも感ぜられた。

『歡樂の鬼』は立體的に取扱はれた新畫に對するやうな寫實に近の空氣の中へ私たちを連れて行つた。背景の正面にある暗い硝子戸に電閃の光が映つたり、消えたりする樣な、舞臺に現はれた夫婦の心の空を窺はせるやうなものだつた。惜しいことには背景となるべき部屋の舞臺面が弘過ぎた。空虚になつた家庭の樣とは云ひながら、餘りに室内が淋しかつた。懊惱せる法律學者に扮した左團次の藝と、自從に入らうとした美しい細君に扮した延若の藝と相俟つて、此の劇の中にある一種誇張した氣分を惹起させた。この作の中にある一種劇的な誇張した氣分、それが新味のある舞臺上の效果を與へた。種々なる缺點があつたにも拘はらず。この效果は打ち消すことの出來ない強いものであつたと思ふ。

『第一の曉』を見て、先づ感じたことは、作者の氣質だ。これは實に爭はれないものだと思つた。言葉を變へて云へば、私はこの劇の作者に特有な素朴を感じた。その素朴は東北に生れた人でなければ見せてくれない樣なものだつた。この作には『歡の樂鬼』に見るやうな動作も少なく、『河内屋與兵衛』に見るやうな色彩にも乏しい。目に賭る芝居と云ふよりは、耳に聞きたいやうな芝居だ。これから來ようとする世界を豫想させるやうな、音樂に近い芝居だ。眞暗な背景に點々として見えてよいやうな提灯の光が、舞臺を駈けぬけて通つたのは、少なからずこの芝居の感じを傷つけたと思ふ。あの暗い舞臺面に、光に映る犀、

眼にうつる光といふものを俳優が遺憾なく現はすといふことは、容易であるまい。殊に私の行つた晩は電氣の應用が不十分であつたといふことが、作者に氣の毒な氣がした。『河内屋與兵衛』では、私は先づ豊富な色彩に心を惹かれた。故人菊五郎等が型を殘しておいた芝居、所謂書割を見なれた觀客も、茲では同じ丁髷の鬘を冠つた人々に全く別の芝居を味はせられた。舞臺へ出て來る舊時代の人物にも、吾々の身に近い親しさがあつた。海外から潮のしみて出るやうな古い〳〵商人の家庭で、珍らしい舶來品を持つて來て見せる長崎の商人や、もうこの家が厭やになつたと云つて、假寐をする與兵衛、すご〳〵消えるやうに引込んで行く親たちにも、それ〴〵面白い味があつた。殊に兄の心持を解するともなく解してゐるやうな妹に扮した蓮若の藝は、繊く自然に見えた。私は舞臺の上にいろ〳〵な畫を見付けた。舞臺其物が美しい畫だ。長崎の商人が取出して與兵衛に見せたオランダ風の畫帖、ドンファン　佇む窓から見えるセビルの夕景色、白明方の店頭の障子に映る朝の光、あれは皆な畫の中の畫だ。この芝居は終りに近づくに從つて、敍情詩を舞臺の上で味ふやうたものだと思つた。『歡樂の鬼』などゝはちがつて、兩親も妹も、美しい背景の裡に消えた。與兵衛一人の舞臺となつて、最後に『長崎へ』といふ若々しい聲が殘つた。終りへ行く程ドラマチツクでなくなつたやうに、私は感じた。（中略）要するに今度の試演には幾多の改良すべき余地があつたと思はれたに拘はらず、面白く且つ有益であつた。少し幕數が多すぎたと思つた。その爲に人數が少なく、役者の手が廻りかねたやうにも見えた。併し、かういふ數々の新らしい作と、純粹の意味に於ける飜譯劇を見せて看客の眼を開けて行かうとする主事及び舞臺監督者の苦心は思ひやられる。恐らく作者に於いても、幾多も不滿足は感じながら、この試演に對しては發明するところが多かつたであらう。確かに私は劇界の第一の曙光を望んだやうな氣がした。舞臺は吾々にとつて親しい館のやうになつた。朝に晩に逢ふ人たちの影もその中を通り過ぎた。これは今までの芝居には思ひもよらないことである。

島崎氏のこの感想錄には、マアテルリンタの「[illegible]」に對して、面白い意見があつたけれども、私は茲では日本の新作家の作品に對する氏の考へを主としたので、遺憾ながら略くことにした。

自由劇場の第五回試演は、帝國劇場で開演することになつた。そして、ゲルハルト・ハウプトマンの「寂しき人々」五幕を、演ることになつた。飜譯は例によつて森鷗外氏である。役割は次の通りである。

ゲルハルト・ハウプトマン（獨逸）作

森　鷗　外　譯

「寂しき人々」五幕

役　割

ヲツケラアト（男）……………市川荒次郎

ヲツケラアト夫人（姑）……………市川左外

ヨハンネス・ヲツケラアト（主人）……………市川左團次

ケエテ・ヲツケラアト（妻）……………市川壽美藏

ブラウン（畫家）……………市川猿之助

アンナ・マアル（女學生）……市川莚若
コルリン（牧師）……市川市十郎
レエマン（洗濯女）……阪東秀調
乳母……澤村源十郎
女中……市川米三
女小間物屋……市川若藏
停車場の人足……勝川吉松
……主事　小山内薫
背景係　岡田三郎助
家具係　梶田惠
橋本三右衛門

「寂しき人々」は五幕とも同じ舞臺面である。そして、時間や天候の區別はあるが、少しも芝居をしない芝居である。小山内氏はこれを上演する前に、かう言つて居られる。

□若しこの芝居を理想的に演ずるなら、初めから終ひまで少しも聲や身振りなどを大きくせずに徹頭徹尾低い聲で初めに演じ終らなければならない。

・ブラインは凡ての動作が涙を隔てゝゐるやうに演らなねばならぬと言つてゐる。併し、さういふ演じ方は余程うまい役者でなければ、出來ないことだし、看る人の方でも余程藝術的忍耐力を持つてゐなければ、飽きてしまうに違ひない。吾々は吾々の技藝を知つてゐるから、多少聲を太くしなければならぬことゝ覺悟してゐる。

市川左團次の藝風は、果して「寂しき人々」に向くであらうか。又この戯曲に出てくる二人の女性、ケエテとアンナ、マアルが、壽美藏と莚若即ち歌舞伎畑から出て來たこの二人の女形に、演こなせるであらうか。

この女形問題は、これまでいつも開演の度びに私の心に浮んだ疑惑であつた。そして、これまでの上演の結果第一回を除いては、常に多大の不滿を感じてきたのであつた。

上演の結果、矢張私は自分の豫想が裏切られなかつたことを、悲しまなければならなかつた。「寂しき人々」の演出の成績は、恐らく自由劇場の試演のうちで、一番悪かつたといつてもいゝであらう。私はこの芝居を看た時初めて自由劇場の俳優の技藝の方向を判然と知ることができたやうな氣がした。これはその當時和辻哲郎君も言つて居られたが、自由劇場の俳優にはイプセンのものや、ショオのもの、其他ネオロマンチシズムの作品などが、却つて向きはしまいかと思はれる。それからこれまでは比較的感じなかつたが、この自然主義的なハウプトマンの作を見た時、私は左團次を初め自由劇場の俳優たちの聲がいかにも大きく、そして荒つぽいかを痛切に感じた。これは平

生音響の上にあんまり顧慮の拂つてない日本風の木造の建物で、非常に誇張した演劇ばかりを演じつけてゐる爲であらう。役々の出來榮から云へば、市川猿之助のブラウンが先づ一等の出來であつた。左團次の主人公はよくなかつた。それからいつでも女形として密比較的好い成績を擧げてゐる莚若がアンナマアルといふロシア出の女學生に扮してゐたが、これも全然失敗であつた。莚若は寧ろヲツケラアトの妻ケエテに廻るべきではなかつたらうかと、私は思つた。マンナアアルはロシアの新らしい女である。そして、神經や感情の動き方の極めて鋭い性の女である。莚若のアンナは何と云つても、變にセンチメンタルで不愉快だつた。ケエテは性格としては可なり日本にも見かけ得るやうな、極く普通の型であるが、壽美藏の演出は極めてギコチなかつた。これまで自由劇場で常に成功を博してゐた不思議な俳優左升が、今度は女形に廻つてヲツケラアトの母親に扮してゐるが、キリスト教の精神に理解がないのと白廻や態度に下卑たところがあつたので、私たちの期待してゐた出來榮えを見ることができなかつた。荒次郎、市十郎は全然役違ひと評するより外仕方がないやうであつた。

舞臺裝置は四幕を通じて、比較的難がなかつた。光線の使方なども概してよかつたやうである。

明治四十五年四月二十七八日に自由劇場は、又帝國劇場で午後七時から試演の蓋を開けた。今回の演し物は此間歐羅巴で客死した劇詩人萱野二十一氏の書いた「道成寺」一幕と、マアテルリングの有名な五幕物「タンタヂールの死」を小山内氏が翻譯した物とであつた。左にその役割を掲げる。

萱野二十一氏作

「道成寺」一幕

役割

道成寺和尚妙念……市川左團次
僧徒妙信……市川左升
僧徒妙源……中村又五郎
僧徒妙海……市川荒次郎
誤ち求めて山に入りたる若僧……市川壽美藏
女鑄鐘師依志子……坂東秀調
三つの相に分ち顯れたる鬼女清姫……

モオリス、マアテルリング（白耳義）作

小山内薰譯

「タンタヂイルの死」五幕

役割

タンタヂイル……阪東秀調
イグレエヌ(姉)……市川松蔦
ベランジエエル(姉)……初瀬浪子
アグロワアル……市川左團次
女王の第一の侍女……市川荒次郎
女王の第二の侍女……市川壽美藏
女王の第三の侍女……市川左團次

場割

第一幕。城を見おろす丘の頂上。
第二幕。城内の一室。
第三幕。同前。
第四幕。前幕の室の前なる廊下。
第五幕。大なる鐵の扉の前。

……………………

主事 小山内薫
背景主任 岡田三郎助

萱野二十一氏は其頃このペンネームの示す通りまだ二十一か二の美しい青年であつた。氏は矢張り明治四十二三年頃與つた武者小路氏などの「白樺」の連中の一人である。「道成寺」は昔からある安珍清姫の傳説をホフマンスタアルのやうな筆致で書いた作品であつた。先づネオロマンチシズムの作品と云つていゝやうなものだつた。この作がまだ新戯曲の運動が始まつて以來二三年にしかならない明治四十三四年の時期に生れたことは、確かに一つの驚異であると私は今でも信じてゐる。マアテルリンクの「タンタヂイルの死」と云ひ、この作と云ひ、第五回の自由劇場の演し物は以前とは余程變つて來てゐる。これは五回の經驗に依つて、自由劇場が自分たちの進む方向に向つて心を苦しめた結果と見なければならない。第六回の試演は概して好成績であつた。殊に「タンタヂイルの死」の演出は、劇界に大きな反響を與へた。「タンタヂイルの死」については、阿部次郎氏は次のやうな評をして居られる。

『タンタヂイルの死』に移ると、こゝには中核を射る簡素なる表現がある。易々と舞臺を取扱ふ大家の余裕がある。同時に深く人の魂に徹する詩人の眞實がある。上場方法について云へば、いつもながら用意周到なる舞臺面に敬服する。第四幕目で廊の前面の柱が薄つぺらに輕く見えたのと、第五幕で鐵の扉の色が稍や暖かく感ぜられたこととを除けば、自分は少しも缺點が氣付かなかつた。役者では松蔦のイグレーヌとかつみのタンタヂイルが一番嬉しかつた。左團次（アグロワアル）には型に墮するなと前と同じやうな忠告をしたい。浪子（ベランゼエル）は形が惡く、心持も亦定りなかつた。三人の侍女の中での荒次郎の白が、耳立つてよかつた。

「道成寺」はこれを讀んだ感じでだけの、緊張した情景が舞台

には現はれなかつた。菅野君の詩のやうな美しい白が、初め若僧と妙信との問答から。和尚妙念が若僧を殺して再び舞台に現はれるまでは、力強く生きた言葉となつて響いたが、妙念の物語から先きの大事なクライマックスに至つて、遺憾なことには舞台が次第にだれて來た。一つは光線の研究が十分にいかなかつたゝめもあるであらうが、私は個々の役者の脚本に對する解釋が十分に行きわたつてゐなかつたことゝ、俳優の稽古の不足と、舞台の言葉としてはこの作の描寫が、俳優の動作を殆んど無視してゐるところに、この作の失敗の原因があるやうに思ふのである。

自由劇場は第七回の試演としてアンドレエフの「星の世界へ」を有樂座に於いて上演した。「星の世界へ」の上演の時にはもう演出者の熱情も、看客の興味も大分薄れてゐた時であつたし、それに「星の世界へ」は戯曲としても、決して傑作ではなかつたためこの試演は爲に散々な不評であつた。

それから程經てゐた自由劇場は「夜の宿」の再演をやつたが、其時は劇界の事情も變り、自由劇場も松竹合名社の所屬になつてゐたから、本來の自由劇場設立の意義から云へばもう全く滅亡したも同じことであつたのである。

自由劇場の生命は明治四十二年から四十五年までの四年間であつた。演劇の革新運動としては、あまりに短かい生命であつたが、併し自由劇場としては彼の生命を無意義に浪費はしなかつた。この四年間で七回の試演を開いて、そして混沌たる日本の劇界に八つの飜譯物と、六つの創作劇とを紹介した。前にも述べた通り、その當時即ち明治四十二三年頃が日本の劇界の覺醒期であつたゝめに、自由劇場と其他に有力な演劇團體文藝協會の二つが起つた。今にして回顧すれば此の二つの演劇團體は同じく演劇の革新といふ大目的に向つて、突進したが、併しながらその行方においては兩者は全然異なる道をとつてゐた。

自由劇場は純然たる演劇のラボラトリウムである。彼等は平生市井の劇場に於いて一般民衆の爲に、歌舞伎劇を上演し興行師に利得を得させて、そして彼等自身の口を糊して行きつゝあつた人たちである。彼等の道は行詰つてしまつた。乃ち彼等は自由劇場と云ふ研究室に閉籠つて、メスを揮つたり、書物を讀んだり、顯微鏡を覗いたりしたのであつた。彼等が若し彼等の生命とする普通興行の上に新生命を打開し得たならば、自づからその研究室は閉ぢられなければならないのである。尤も自由劇場の主事小山内氏の理想はこんな狹いことではなかつたであらう。併し俳優自身からすれば、正しくさういふ結果に到達しなければならないのである。

坪内博士の文藝協會並びにその後身たる藝術座は、全然これと違つた道を歩んだものだと云つていゝ。尙兩者の比較の細かな部分は、最後の結論に至つて、詳しく述べるつもりであるが、文藝協會及び藝術座はラボラトリウムとしてよりも、寧ろ一般民衆を相手とした普通の興行を目指してゐたやうである。尤も文藝協會にも立派な研究的の試演があり。藝術座にも研究的の

試演で成功したものがあつたが、大體の制度の立て方、對社會の狀態、脚本の選定、凡てから見て、さういふ傾向があつたのは、爭はれない事實であると思ふのである。

自由劇場は前述の通り演劇のラボラトリウムであつたから小山内氏は勿論左團次以下全部の俳優其の他の關係者が、純然たる研究者の態度で始終することができた。勿論これは小山内氏と左團次との聰明に負ふところが多いが少なくとも彼等の試演の際には、整然として一糸亂れずと云ふやうな美しい態度が見えたのである。文藝協會と藝術座とはこれに反して、坪内博士並びに島村抱月氏の立派な統率者を持ちながら、男女の關係や俳優相互の猜疑、經濟の問題などのために常に紛擾が絶えなかつたのである。

自由劇場關係者一同にとつては研究室たる自由劇場以外に彼等の本當の生活があつたのである。文藝協會と藝術座の關係者にとつては、文藝協會及び藝術座それ自身が、彼等の生活の全部であつた。

・

自由劇場が僅かに四年の生命をもつて、而も次第々々に衰弱して行つたのは、自由劇場が關係者全部の生活の主腦でなかつたからだと、私は思ふのである。即ち彼等は初めから二元の道を歩いてゐた。自由劇場の運命は之を歐羅巴の例に見ても多くは短かいものである。獨逸の自由劇場は僅か二年間の間しか存在しなかつた。そして、三年目にストリンドベルグの「伯爵令孃ユリエ」を上演すると一緒に亡びてしまつた。即ち彼等はイプセンの亡靈を以て活動を始め、ゲルハルト・ハウプトマンを同國の作家として發見した。そして、ストリンドベルグの自然主義的の戯曲で終つたのである。彼等は言つた。もう自由劇場の使命は完全に果されたのだと。成程、ベルリンの自由劇場は脚本制作上の制限を弘くした。新らしい題材を紹介した。コンベンショナルな性格の書分けを排斥した。そして、作者と役者のテクニツクが完全なイリユージョンに到達するやうに努力するやうになつた。言葉を換へて云へば、自然主義的な劇術を獨逸に興したことであつた。日本の自由劇場は主に歐羅巴の戯曲の紹介に力を盡した。無論、森鷗外氏や、私や吉井君、秋田君、萱野君の創作劇を招介したことはしたが、まだその時分は創作劇が興つてから日が淺かつたゝめ、創作劇が本當に熟してもゐなかつたし、それに大作も少なかつた。飜譯劇は之に反して皆な歐羅巴の傑作であつたから、日本の劇界に影響したことも非常に大きかつたのである。日本の自由劇場は獨逸や佛蘭西の自由劇場ほど斯界に大きな影響を與へることはできなかつたが、併し内面的に劇壇の人々を動かしたことは可なり大きいと思ふ。即ち、自由劇場は獨逸のそれのやうに自然主義的の劇術を創成することは出來なかつたが、劇壇の自覺を促して、それから幾多の劇作者を創り上げたのである。私はこれを自由劇場の最も大なる効績であると思ふのである。

文藝協會と藝術座の回顧については、何れ項を改めて又た書くつもりである。(次號完結)

芭蕉翁遺蹟めぐり

荻原井泉水

上野町

壕からきつたてに高く築き上げた城の舊い石と石とが、頽れかけようとする弧線を其老いた力一ぱいに支へて張りきつてゐる。私は、其上野の古城趾に立つた。東から北には、かなりな平野が見渡されるが、其果の山と山とが迫る彼方に柘植の里はあるのであらう。南には町の屋根が筱木細工のやうに、ぎつちりと隙間なく、しかも稻田を遶らした中にはまつてゐる。秋のほんがりとした朝、靜かに明るい光をたゝへて、本丸の廣場は淋しい位である。松が、松が、その纖細な葉を陽に透かし、櫻も亦處々にまじり立つて、其感じ易い葉が紅葉をするにはまだ少し早いが、はら〳〵と土に散つて、たまるといふ程でもないのを園丁がこくめいに掃いてゐる。その外に人はゐない。碑が一つ。

さま〴〵の事思ひ出す櫻かな　芭蕉

此の伊賀上野の城を預つてゐた藤堂新七郎良精の子、良忠に芭蕉は近侍してゐたのである。良忠は蟬吟と號して俳諧をたしなみ、同じ道を好む芭蕉（當時の宗房）とは普通の主從以上に親しくしてゐたのであらう。蟬吟が歿してから、芭蕉は無常を感じ人生をはかなんで隱遁の志を發したとも云ふ、又、彼が故鄕を脫奔したのは婦人の關係で主家にとゞまり難い事情の爲めだとも云ふ、是は何れも傳說であつて、確實な記錄とてはない又、彼の性情が元來、武門の仕に適しないので主君の死を機として文學の方面に向つたのではないかと私は想像もしてゐる。とまれ、彼が蟬吟の嗣たる良長（俳號、探丸子）に招かれて、「さま〴〵の事思ひ出す櫻かな」と吟じた、其時の心持の內容には、まことにさま〴〵の追憶が籠められ、量りがたい感慨に打たれた事であらうと思はれるが、そのさま〴〵の事がどんな

事かは、後世からは全く推測し得ないのである。又、彼が主家を脫奔したのは何歲の時か、それから直に何處へ赴いたかといふ事も、諸說がまち〳〵であつて、しかとは判定し難いのである。けれども、當時の芭蕉の境遇や行狀が、一つの陰影の中にあるといふ事は却つて面白い事ではないか、——と思ひながら私は其城趾の上に歩を遊ばせた——一體、人の一生といふものが、白日の中に干しひろげた鰯のやうに、隅から隅まで、明らさまであるとしたならば、其は餘りにも平面的で、ずいぶん殺風景なものであらう、人間の生活がしぜんに立稜的である以上は、しぜんに多くの陰影が出來てい〻筈である。それが其人を生きた人間らしくする。まして、芭蕉は、淸らかな月夜の道を歩んでゆくやうな人である。彼の藝術の味ひは靑白く澄みきつた月夜の冷たい情熱である。其道にも、彼自體にも月夜らしい陰影を多くもつてゐる事が、彼を如何にも彼らしくする。自分の生活を其儘、いみじくも藝術化した彼が其自傳に就て殆ど全く語らなかつたのは、彼の遠慮若しくは忌避ではなくして、その藝術的意圖、少くとも藝術的趣味から來たのではあるまいか。彼の行狀に就て知らざる筈はないと思ふ親しい門人達が此點に於て筆をつ〻しんでゐたのも面白い。たとへば一つの句を鑑賞する爲めに、其句の內容に關する事實を委しく知る必要は少しもない如く、否、事實の穿鑿が時には其句の餘韻を失はしめる事さへある如く、芭蕉といふ人を正しく味索する爲には、彼を陰影の多い生活の風景の中に生かすがよい、而して、ほのかに白い月光の明暗の間に歩ませるがよい。此城跡は今、町の公園として、階段なども新しく作られてゐるが、その傍に昔の儘に殘されてゐる石垣の間で、蟲がしげ〳〵と鳴いてゐる。芭蕉の時分の自然と魂とは此の石の暗い隙間から細い息を吐いてゐるのである。

芭蕉が爰に生れたといふ赤坂町の其家の跡は、其後、幾度建て直された事か知れない。今は普通の住宅として、しまうたやの軒を並べた中にある。其頃は、芭蕉の兄半左衛門が爰で手習師範をしてゐたといふ。芭蕉が江戶に出てから、初めて故郷の此上野に戾つたのは（異說もあるが）貞享元年の秋であつた。

長月の初め、故郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯果て〻、今は跡だになし、何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く眉皺寄りて、只命ありてとのみ云ひて、言葉はなきに、このかみの守り袋をほどきて、母の白髪おがめよ、浦島の子が玉手箱、なんぢが眉もや〻老いたりとしばらく泣きて、

手にとらば消えん淚ぞあつき秋の霜

母の遺髪を手にとつて泣いてゐる芭蕉の姿が見えるやうである。此時、彼は齢四十一。彼がいつ母を失つたか、それは判然しないが、其悲しみは尙ほ新しかつたに違ひない。私は十年程も前にも、彼の此文と句などを引いて、評論がましいことを書いた事がある。けれども、其はたゞ、此文字の意味を問題として、いたづらな文字を列ねたにすぎなかつたことをついでながら、こゝに懺悔したい。私は今年（大正十三年）漸くに齢四十一。而して今年の春、自分の母を失つた。それから、一所不住のやうな孤獨の生活をしてゐる。さうした今になつて、初めて、芭蕉が此の文を書いた時の心持が、ほんとうにぴつたりと自分にも解つた、といふ氣がするのである。

其時、彼は江戸を出る折の感懷を記して、

千里に旅立ちて路粮をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の聲そゞろ寒むげなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸をさす故郷

此の冒頭に依つて其道の記を「野ざらし紀行」とも、又、「甲子吟行」とも云ふが、今年も亦、めづらしく、干子は甲子。即ち、其貞享元年から四回目にめぐつて來た甲子の年に當る。私が思ひ立つて、芭蕉の故郷を訪ひ、其折の行脚の跡を辿らうと試るのもさういふ因緣を機としたのである。されば、季節も秋、舊暦で云へば、宛も「長月の初め」に當つて爰に來たのも、彼が久し振りで古鄕に戾つて、眼にした所の空の色、彼が聞いたであらう風の音、それと丁度、同じ季節の色の中に、彼に對する私が思慕の情を切實に味ひたいと思ふ痴念からなのである。

芭蕉の主君蟬吟公の別邸があつた跡といはれる「樣々園」、芭蕉が兄の家の後園に作つた無名庵を移した跡といふ再形庵などを、私は此土地の人であるRとCとに案内されつゝ、見てあるいた。そこらは町の北で、玄蕃町といふ名にも、傳へられてゐるやうな、昔の屋敷町の古い感じのする土塀が、處々崩れたまゝ兩側につゞいて、土塀の間に夫々の入口を持つた家がひつそりと住みついてゐた。此邊こそ芭蕉の時分と、さほど變つてゐないのではあるまいか、と思はれた。どことなく木犀の香りがする、秋は此木の强いかほりが實に好いものである、殊に旅にして――。殊に、古人の跡を尋ねてあるく心に通つて――。

芭蕉が故鄕に戾つて來た折には、彼の兄の家もあるが、その多くの門人の家に交る〳〵招かれるまゝ泊るのを常としてゐた

らしい。其中でも猿雖の東籬庵西籬庵、苔蘇の瓢竹庵、土芳の蓑蟲庵は彼が好んでもゐたし、彼の歿後、久しく保存されてゐたので、其四つを彼の無名庵と併せて伊賀の五庵と稱せられてゐる。然し、今日では何れも堙滅して、たゞ一つ蓑蟲庵だけが二百年前の其まゝに殘されてゐるといふ。其處へ當地のK氏が鍵をもつて案内してくれた。町の南の端で、東日向町といふ。庭には築山の亭があり、瓢形の池があり、小柴垣の外に道を隔てゝ、田圃がやゝ低く、ずつと一目にして、愛宕の杜を黑く茂らし、其の背に久米の丘陵を据ゑてゐる。

芭蕉翁をとめて

おもしろう松笠もえよ薄月夜　　土芳

此庵の主人が興じた心もうなづかれる。其松笠の松の木であるか、座敷の縁に近く、老いた松が一株、傳へて彼が愛したものといふのである。

私達は町はづれの藪の多い道なども步るきまはつた。そこらの家は多く藁葺の昔風で、どこの家にも柿の木がわつさりと實をつけて、たのもしげに薄く赤らんでゐた。

里ふりて柿の木もたぬ家もなし　　芭蕉

私はこゝに初めて、其昔の景色と彼の感興とを、そつくり其儘に受取つたのである。

芭蕉が遺墨として傳へるものも、T氏其他、愛藏家諸氏の好意に依つて、いろ〳〵と見せて貰つた。かなり早い時代のものらしいのが多かつた。早い時代のものは、然し、晩年の書風とは餘りに違つてゐるので眞とも僞とも云ひ定められなかつた。私の知己の畫家で、非常に自重して苟くも描かぬ人がある。こんなものを畫いたかと後世にいはれるのがいやだからと云ふ。他の一人は極めて磊落で、時にはなぐり書きをして平氣でゐる、而して若し、自分が後世に殘る程の作を出したならば、拙いものは皆僞作だと鑑定されるだらうといふ。是も面白い言葉である。芭蕉の書はとも角、彼の俳句にしても、貞享元祿以後の作と、其以前の作とは、殆ど別人のものと云つていゝ程である。それだけ彼は人間としても全く別の境地に踏入つたのである。彼の生活其儘が一つの藝術として完成されたる後年の芭蕉を「芭蕉」として思慕するものにとつては、其故に、彼の未成時代の、或る意味から云へば、非藝術的な生活はほんとうの「芭蕉」でないとさへ云へる。所謂、芭蕉の研究と稱して、彼が早い時代の事實の穿鑿をする事も、面白いには違ひない、私も閑の時は其仲間入りをさして貰ふこともあるが、私にあつては、結局それは一つの興味だけである。

元祿七年、芭蕉が死んだ年の其の秋、彼は最後として歸郷し、兄の後園に作られた無名庵に、此地の同人達を招いた。其折の馳走の獻立は隨齋諧話にも載つてゐるが、其の原草もこゝで見ることを得た。それは竹の繪を習つた反故の裏に書いたもので、今、表裝はしてあつても、其竹のすいて見えるのが面白い。獻立は

八月十五夜

一 芋煮入　酒　麩　蒟蒻

一 煮物　ごぼう　木くらげ　里芋

中猪口　操らり　くるみ

吸物　ゆ　つかみ豆腐　しめじ　めうか

肴　人參　燒初茸　しぼり汁　酢醬油　すり山のいも

くわし　柿

吸物　松茸

冷飯　とりざかな

質素ではあるけれども整つてゐる。さゝやかながら自分の小庵も新に營まれた。晩年の彼は、かなり足りてゐた風である。其夜は折から名月であつた。彼は感興の湧くまゝに吟じた。

名月にふもとの霧や田のくもり

又

名月や花かと見えて棉畑

其句は無名庵での作であらうが、其景を感じたのは、蓑蟲庵あたりであらうと思はれる。絹に淡墨を散らしたやうな、無雜作な表現ながら、月夜のほの明るい雰圍氣が、快くにじみ出てゐる。其は又、彼の魂のほの明るい淋しさなので、ほつと斯く云ひすてゝ、安らかに息づいてゐる老詩人の姿がこゝにある。

芭蕉の菩提寺にして、彼の故郷塚のある愛染院をも、私は訪ふた。

家はみな杖に白髪の墓參り　芭蕉

于蘭盆には斯う詠つて、八月には、かの名月の句を詠んで九月には奈良に遊んで、十月に大阪で死んだ。近江の義仲寺に埋葬される時、上野の門人、土芳、卓袋の二人が馳せ參じて其遺髮を乞ふて戾つて建てたといふのが此の故郷塚である。碑面には『芭蕉桃青法師墓』。雨露を厳ふだけの堂の屋根を葺いた堂の中にある。その邊りには、瀟洒としたかなめ垣をしつらへ、紫苑、カンナなどが手向草として植ゑられてゐる。堂の後ろは、大きな藪で、其の竹の鬱々として侘びしい緑を背にして

塚が實に處を得てゐる。もうやがて、早い時雨が竹の葉をサラサラと鳴らして訪れて來る頃であらう。

私はRの家に泊められてゐた。其夜はCも來て私達同人の消息など話しあつてゐた。Rの家は昔の外濠の内で、本丸の跡の裏手であるが、其二階から見える町の方の灯が柔い白い色につつまれて、ぼんやりと薄れて來た。

「あ、霧がおりて來ました。これが伊賀の名物の夜霧です」

Rは斯う云つた。「名月に麓の霧や田のくもり」の句を、私は又しても想ひおこした。二人は一日、町を歩るきまはつて疲れた脚を投げ出してゐたが、そこに秋の蚊が一二匹鳴き寄つて來た。

「蚊もこゝの名物ですね……」

Cは云つた。もう團扇はなくて、手にもつてゐる雜誌で追ひやつたりした。私は芭蕉が晩年の手紙に

「二十八日、伊賀へ上着申候、同姓喜び舊友ども日々かけ合せ候……伊賀同名方あつく蚊も多く候へば、夏中は膳所、折々は京へ出候へ……」

とある中の、「蚊も多く候へば」といふ言葉を思ひ出して、ほゝゑまれた。けふも、芭蕉の眞蹟を多く見せて貰つた中で、一番面白いのは手簡であつた。猿雖へ宛てた手紙の中に

「卓袋が赤味噌のとろろ汁も懷しく相成り候、京屋ぬき味噌くはるゝ時節と相成り候」

とある、伊賀の味噌といふのも上野の名物ださうである。

其翌る朝、其赤味噌の味噌汁を御馳走になつて、私は上野を立つて、西を指した。

吉野山

昔は吉野川の柳の渡と云つた北六田から六田へは、今は立派な橋が架けられてゐる。そこから新道が出來て、直に長峰へかからせられるが、吉野神宮の道で昔の道と合して、一歩一歩秋風の中に、眼界を濶くして行く。

顧ると、北に龍門岳、高取山、東に伊勢とを境する高見山が薄青く聳えてゐる。花に名を負ふてゐる山とて、さすがに櫻の木は多い。其黄ばみ、むしばんだ葉が枝にひら〳〵してゐると同じ程に、其は又、脚元にもはら〳〵と轉がつてゐる。野菊がそこに咲いてゐる、秋の日をほが〳〵と吸ふて、此山道の唯一の淋しい色彩である。やゝ、高く來ると、しぜんに、西の方の眺望が開かれる。金剛山、葛城山、其に續いて、やゝ低く、遠

くゝらくだの背の如き形をしたのが二上山である。——此の極めて特徴のある山は遠くてもぢきに見出される——私は此の日の朝、其の二上山の麓にも、芭蕉の吟蹟を尋ねて來たのである。

二上山、當麻寺に詣、庭上の松を見るに、凡そ千とせもへたるならん、大いさ牛をかくすともいふべけん、彼非情といへども佛緣にひかれて斧斤の罪を免れたるぞ幸にしてたつとし

僧朝顏幾死にかへる法の松

當麻寺は中將姫が爰に入つて菩提を得た寺で、其後、姫が感得したといふ藕絲の曼陀羅を本尊とする。芭蕉が句を寄せたる松といふのは中將姫が來迎の松と稱するものであつたかどうか、解らぬが、今日、外に大きな松とてはなく、其松も、嵐の爲めに倒されて、餘りに大きい爲めに、打起こす事が出來ず、切つてしまつたといふて、其の根ばかりが、さゝやかな屋根を作つて殘されてゐる。何と、芭蕉から「幸にして尊し」と讃へられた法の松も遂には斧斤を免れえなかつたのである。芭蕉は貞享甲子の秋九月上旬に故鄕の上野町を出て、江戸から其處まで同行して來た門人千里といふ者の故里である大和の國葛城郡竹内村に至りてとゞまり、程近い當麻寺に詣でたことは其紀行に記されてゐる。彼は、そこで、千里にわかれ、はじめて本當に獨りの旅人となつて此吉野山に踏込んで來たのである。

獨り、吉野の奥にたどりけるに、まことに山深く、白雲峰に重なり、烟雨谷を埋んで、山賤の家處々にちいさく、西に木を伐る音、東に響き、院々の鐘の聲、心の底にこたふ。むかしより此山に入りて世をわすれたる人の多くは詩にのがれ歌にかくる、いでや唐土の廬山といはんもむべならずや

彼の「甲子吟行」中の名齣である。其頃の吉野はまことに斯くの如き深山幽谷の趣の中に、隱遁の人なども跡をたゝなかつたのであらう。其の山相水態こそ、如何に昔のまゝであるとはいへ、大阪から六田まで一氣に電車の通ずる今日にあつて、こゝに二百年前の閑寂を求むるのは求むる方が愚かである。然しながら、此山の秋を尋ねて、櫻の落葉を踏みに來ようなどといふ物好きは、却つて往昔よりも現代の方が少いかもしれない。黑門から大鳥居のあたり、土産物などを賣る家はあるが、女たちは秋風に鼻を白まして、却つて、さうした店が全く無いよりも淋しいのである。

「皆樣驚いてはいけません、たゞで電燈がつきます」といゝ

スターが處々に貼つてあつた。今頃、民家に電燈をつけよといふ事を宣傳してゐる。現代は現代のまゝに、やはり此處はさすが吉野山だな、といふ氣がした。

宿は、私が宿を乞ふと、夫から雨戸が明けられた。緣側は木の葉が散つてゐるまゝに戸ざゝれてゐたと見える。女が箒などを持つて來るのを見て、私はだだつぴろい座敷の中に、一人、ぽつねんと脚を組んだ。掃いたあとの障子がさむ〳〵と明けてあつて、裏の方に大きな谿が見渡される、中の一目千本といふのださうな、花の頃の展望を主として建てたのであらうが、此の末枯の風情も亦面白い、みつしり茂つてゐたであらう櫻の木の葉がまばらになつた爲めに、谷の底から小さい家が現はれ、細い徑が現はれ而して、そこを、鞄をかけた子供が二人、身體をよせあつて、袴のない裾から短い足を動かして、奥の方へ歸つてゆく。其細い道ののびつてゆく方の高みに、一段の樹林があつて、たしかに堂と見えるものは如意輪寺である。

　　ある坊に一夜をかりて

　　砧打つて我にきかせよや坊が妻

私は芭蕉の此句の情景を心にうかべた。其時、芭蕉が宿を借りたのは、きつと、小さい坊であつたらうと思ふ。此處には竹林院、喜藏院などといふ大きな坊は今日にも殘つて、やはり參拜者の宿をするのであるが、昔は其等の大きな坊の外に小さな坊が數多くあつたものだといふ。大きな坊には格式もあつて、妻帶することは難しかつたであらうし、假令、妻君が居ても、人の目につくやうな所に出ては來なかつたであらう。「砧打つて我にきかせよや坊が妻」と斯う親しげに云ひかけた調子から見ても、妻君がまめ〳〵しく竈の下を焚いたり、又、泊り人に挨拶をしたりするやうな小さな坊を思はせる、住僧もやゝ年寄て、妻君も烟じみてをり、外に小僧もゐないといふ風な――。形ばかりの佛間と、外に二三間あるばかり、厨の外の軒の下に砧盤が置いてあり、槌がちよこなんと秋の夕日の影を長く曳いてゐる。柴などをボソ〳〵と片付けてゐる妻君の背ろ姿と其砧盤とが、芭蕉の眼にとまつた時、彼はふと興じて、此句を口ずさんだものであらう。口ずさみはしたが、言葉に出して、「砧を打つてきかして下さいな」などとは所望はしなかつたに違ひない。實際に彼が懇望して、又、妻君が實際に砧を打つたりしたのでは、それでは、もう俳句にならない。此句は、一つの情趣が外に向つて實感せられる代りに、内に向つて醱酵し、一つの昇華作用をなした處に出來たものである。いや、最初から實感を要求したものではない。「我にきかせよや」といふのは希求の

意味ではあるが、作者の氣持は決して其事を希求する如き意志的のものではない。意志的ではないが故に、此の希求を發した心其自體に於て、即ち其刹那に於て、既に滿足し、完全してゐる氣持、その氣持こそ俳句として出來てゐるまるみ、斷片語（フラグメンタル）の如く見えてゐて、しかも完全性（コムプリイトネス）をもつてゐる俳句の味である。

又、云へば、此句は芭蕉が平生の感情である。そのやうな深い山中にあつて、たま〳〵宿を借りた坊の妻に、勿論砧は音を聞く爲めのものではないが、さうした戯のやうに興じた事をして彼は旅情をなぐさめて欲しいとまで、所望したいやうな氣持、それは、淋しく生きる人間と人間とが、ほんとに心おきなく觸れあつた尊い親しみでなくて何であらう。さういふ親しみを、彼は平生、自然に對すると同樣に人間に對して持つてゐた、其感情が此句として流れ出たのである。又、云へば、此句は芭蕉が藝術的の幻想である、そのやうな晩秋の空氣をふるはせて、トツポン〳〵と音を立てる砧の面白さ、さびしさ、「西に木を伐る音東に響き」と彼は書く、其砧の音も亦、こゝで打てば、谺となつて、彼方の谷から反響するであらう、「山賤の家處處に小さく」と彼は書く、日が暮れてしまへば其家も見えないが、ホト〳〵と打つ砧の音こそ、こゝに家がある、人間が住んでゐるといふことをお互に知らせあふ、何といふ淋しい、面白い合圖ではないか、と彼は實際に打ちもしない砧盤から、幻のやうに砧の音を聽取したのである。

こんな事を私が考へてゐる時、宿の表では、トツポン〳〵と砧を打ち初めるではないか——これは宛もこしらへたやうに、私にとつて其の情景が都合好く出來すぎてゐる「弊」すらもある。私は表に近い縁側に出て見た。道の上に莚を敷いて宿の女中が二人、大きな砧盤を中に、槌を振りあつてゐるのである。後になつて、私は女中から砧を打つ話など聞いたが、

「きのふは一日、打ちました、もうしんどうて、腕がぬけるやうどすわ」

此處でも砧を打つのは秋に限るもので、其は夏中に使つた浴衣や布團のかはなどを洗濯してのりをして、其のこはばりを打ち柔げてしまふのだといふ。大きな宿屋などでは、其がかなりの勞作なのである。こゝの女中にとつて、砧を打つことは、我に聞かせよや」といふ風に云はれるやうな、感興的な遊びのやうな事とはまるで違ふのである。

如意輪寺へは、宿から近いといふ心安さに、日暮れかけてから出掛けた。其道は落葉がたまるまゝにしてあるので、歩るくとカサカサと音がして、蟲が鳴いてゐる。春は緋の毛氈でも

くらしい掛茶屋が二つ三つ、谷川を覗くやうに建てゝあるが、其屋臺は骨ばかりといふ風に見えて、川の音が耳に著しい。萓がすんなりと穗を出し、男郎花がによきによきと立つてゐる。而して女郎花は見えない。曼珠沙華が少しすがれてゐるが、此の赤さは實に淋しい、正行が「かへらじとかねて思へば」の歌をとゞめた如意輪堂は秋風に御格子を堅く鎖して、うす墨色に、ちんもりしてゐる。延元帝の塔尾御陵はその後ろの石階を登つた處、松の翠のこまやかな中に拜まれる。

山を登り坂を下るに、秋の日すでに斜になれば、名ある處處見殘して、先づ後醍醐帝の御陵を拜む

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

芭蕉の「甲子吟行」に斯く記されてあるのは此處である。芭蕉の當時は禁裡御貧素の頃とて、御陵なども掃苔の事が行きとゞかず、此句にある通りのしのぶ草が玉垣の內までも這ひ茂つてゐたものであらう、今は敷砂が白く清められホロホロと散つてゐる松の葉、櫻の葉すら數へられる許りである。それにしても、「悲哉北辰位高くして百官星の如く列るといへども、九泉の旅の路には供奉し仕る臣一人もなし、奈何せん南山の地僻にして萬卒雲の如くに集るといへども、無常の敵の來るをばふせぎとむる兵更になし、葬禮の御事、かねて遺勅ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正しくして、吉野山のふもと、藏王堂の艮なる、林の奧に圓丘を高く築きて、北向に葬り奉る、寂寞たる空山の裏、鳥なき日既に暮れぬ」とある太平記の文章に依つても、延元の昔の御事が今もなほ、まざ〳〵と偲ばれるのである。如意輪堂ではカン、カンカン、と初めは緩やかに、だん〳〵と急に、せき込むやうな調子で、暮の鐘を打ち初めた。それは軒に吊るしてある小さい鐘を小僧が丈伸びをしながら撞木でたゝいてゐるのだ、その小僧は先き方、私に寶物を案內しながら「花に寢てよしやよしののよしみづの枕の下にいははしる水」などと御醍醐天皇の御製を讀み上げてゐた子である。

藏王堂に私が來た時は、既にすつかり暗くなつて、十八間四面にして重層屋根入母屋造といふ廣大な其堂は、扉を堅く締めきつたまゝ、仰ぐと、杉の木立が黑々とそびえ、其梢と堂の高い屋根との間には紺紙のやうな空があつて、銀の文字のやうな星がまばらに現はれてゐた。

ギイエツ……むささびがすぐ上の枝で鳴く。

今、私が歩るいて來た谷の方を見ると、そこは一面の黑い海のやうで、ほつちりと灯が一つ。丁度、目の高さより少し高く

——其は如意輪寺の灯に違ひあるまい——ちらりともしないで、じつと澄みきつてゐる。

暗い石段につまづかぬやうにして、私は道に下りた、さすがに夜氣は寒い。向ふから、提灯が一つ、ふら〳〵と近づいてくる。是も句にしこは陳腐ながら夜寒の趣であるなどと思ひながら、摺れ違ふと、其灯は宿の男衆が私を探しに來た灯であつた。

西行庵の跡へは、朝寒の日が道しるべの石にさしてゐるのを見ながら登つた。大峯山の道である。金峯神社（奥の院）の物さびた祠を下から拜んで、右へ、杉の木立の深い感じにひたつて行くと、又、石が立つてゐて、そこからは庵の跡へ行くだけの小徑を下るやうになる。櫻もかなりある。所謂、奥の一目千本とは、此邊から奥の谷を指していふのださうだ。然し、道端に穗を出してゐる薄が、道を埋める程で、それは白く降つた雪とも見えて、胸のあたりまである深い雪を掻き分け掻き分け、行かねばならぬやうである。西行庵の跡といふ處は、そこに碑を立てる代りに、小庵を立てたといふ風である。もとの庵はこんな風でもあつたらうかと想像させるやうに、（否、花見の客の紛れ込んで見物に立寄る者などの爲めには、是こそ西行が住んでゐた其庵であると信じさせるやうに）如何にもまことしやかに、荒削の柱を立て、荒壁をつけ、粗末な窓を切て拔いてある。その壁の破れにまで、薄が穗をさし込んでゐることは云ふまでもない。

說法談文覺　・談兵服賴朝　　西行
靑山留錫處　　千古仰高標

薄の間にむつくりしたものに近づいて見ると、此の五言一對が石に書いてあつた。

とく〳〵と落つる岩間の苔淸水
汲みほすほどもなき住居かな

と詠じて、西行が之を汲んでゐたといふ淸水は其庵から程遠くない。杉の根元、岩が露出してゐる處に齒朶などが生ひかゝつて、割竹で水を導いてあるところは、今の人のたくみであらうが、永い年の間に自然に出來た土の凹みが、好い湛へ處となて、西行が又「淺くともよしや又汲む人もあらじ」と詠じた昔のまゝに、其は淺いけれども、淸くして澄んで、其水の上に、何といふ花か紫の美しい花が咲きこぼれて浮いてゐる。芭蕉は——西行思慕の心の深かつた芭蕉は——「甲子吟行」の途中に、先づ伊勢に道をまげて、西行が暫く閑居したといふ西行谷を訪ひ、「芋洗ふ女西行ならば歌よまん」と、彼なればこそ其情趣を、西行を取り範めたまゝの俳句とし、其から彼が此の

野へ踏み込んで來たのも、西行の遺蹟を尋ねようといふ希望を滿たしたい心が重なるものだつたらうと思はれる。

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町ばかりわけ入る程、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、さがしき谷をへだてたるいとたふとし、彼のとく〱の清水は昔にかはらずと見えて、今もとく〱と雫落ちける

露とく〱心見にうき世すゝがばや

と、芭蕉は「甲子吟行」に書いてゐる。西行が住んでゐた時、ほた〱と落ちてゐた清水は、其から後、近よる人もないのに、四百年の間、いつもほた〱と垂れてゐたのである。「昔にかはらずと見えて今もとく〱と雫おちける」と芭蕉が驚いた其心持はうなづかれる。西行が獨りさびしく、深い自然の懐を指して探り入つた詩歌の道は、其後、誰一人之を繼ぐものとてはなかつたが、其が俳諧といふものに姿を變へて、芭蕉の心に蘇つて來たのではないか。其は普通の意味に於ける傳統をついたものではないが、更に深い意味に於て血脈をついだものだとは云はれないだらうか。此の山中の一つの清水が、たとへ汲むものはなくとも、又、如何にも細い一すぢではあるが、綿々として絶える事がなく、續いてゐるやうに、自然の懐から泉み出る詩歌の生命は、ほんとうの詩歌の生命は、いかにも幽かにして、微かでありながら、決して涸れる事がないといふ事を、西行の清水が爰に正しく實證してゐるのではないか。誰でもあれ、此の詩の清水の微妙說法を聞き得たものは、はる〲吉野山の奥深くたどり入つた甲斐のあつたことを感じていゝと思ふ。芝居の大道具のやうに巧みに古ぐさく作つてある西行庵や、しやれた碑石などよりも――芭蕉が來た時には、そんな物は全く無かつたであらう、たゞ清水だけがあつたのだらう――此の天然のまゝの清水こそ、最も好く生きたまゝの西行を紀念し、最も雄辯に西行の藝術を禮讃するものだと云ふべきである。

川上村

「その大瀧で御尋ねになるといふのは、どんな方ですか」

西行庵の跡から、大峯山上道とも岐れて、大瀧へ出る細い山徑の檜の木の立の暗い中を行く時、宿から連れて來た案内の男は問ひかけた。

「さあ、どんな人か、何しろ初めて逢ふのだから……それに、女らしいけれども、或は男かもしれないのだ……」

私は答へたが、案内の男は「へえ?」とけげんな顔をした。

前夜、私は宿から其人に「アスヤマコエテオオタキニデルガク

コウニテアヒタシイカガ」と電報を打ち、其人からの返電に「オオタキヘアヒニユキマス」とあつた事は（此頃は電信がすべて無封である爲め）宿の者も知つてゐると見える、而して、其事に（何しろ宿の者は今は退屈しきつてゐるので）或る興味の眼を持つてゐるのかもしれない。で、私は更に案内の男に解るやうに、

「そんな人が向ふからも私に逢ひに來るといふのはをかしいやうだが、早い話が、私と同じ仲間といつたやうな人が日本國中の諸方にゐるのだ、お互に顏は知らないが、雜誌があつて、其上では前から知り合つてゐるといふ譯さ」

斯ういつたけれども、其男にはまだ合點が出來なかつたか、それとも或る秘密結社かなぞのやうに誤解されたかもしれない。其Sといふ號の人は、私達の同人としては、近頃、新しく入つて來たので、其句を見ると女らしく、且つ小學校の教師でもしてゐるらしく思はれるが、其號が男らしいので、或は男かも知れないとも思つてゐた。吉野の東麓、大瀧、西河といふあたりは芭蕉の句が遺つてゐるので、私は今度、吉野山と共に其邊を探つて見たいと考へ、其近くに同人はないかしらん、と層雲社の誌友名簿を繰つて、此Sといふ人がゐる事を知つたのである。Sの家は川上村といふ處で、地圖で見ると大瀧とは一里程を隔てゝゐる。東京からハガキを出し、大瀧まで出迎へるといふ返事は上野のR氣付にして貰つてゐたが、さて私が爰に來る日が前からは定められなかつた爲めに、前夜になつて電報を打つたのである。「逢ふ場所として學校を選んだのは、たにしろ、斯んな山中で未見の人と落合ふといふのも賴りないが、小學校ならば間違ひがなからう、若し、Sがそこの職員をしてゐるならば猶更都合がいゝとも思つたからである。

其路はかなり惡かつた。私は西行庵の附近で、下駄の爪先を左右とも大きく踏み缺いてしまつた。安井坂の茶店で、草履を用意しなければいけないといはれて求めて來た其と履き換へて小石がゴロ／＼と踏みすべる路を二里ばかり下ると、杉の木の間に蜻蛉の瀧が見える。其邊から路は廣くなつて、大瀧といふ處は、想像してゐたよりも大きな部落である。

大瀧の小學校といふのは大瀧よりも西河に近い方であつた。私は草履を再び下駄に穿きかへて、端折つてゐた裾をおろして案内の男を連れたまゝ學校の門をはいつて行つた。Sといふ人はすぐ解つた。玄關に立つて。人待ち顏をしてゐた。はたちばかりの女の人、學校の職員らしくもない、娘々した大きながらの帶をしめて、此邊では珍らしいのではないかと思ふ革のオペラバツタを提げて――。

時計を見ると、もう正午少しすぎてゐた。Sは朝から私を待つてゐたさうで、こゝで物を喰べる家のない事もないが、支度をしてあるのだから家へ來てくれと云つた。私は、西河の瀧などを見せて貰つて、すぐ下へ向はうとも考へてゐたのだが、斯うした山の深い處でも自働車が通つて、十分もあれば行かれるといふので、丁度、そこへ來た車に乘つた。吉野川に沿ふて、なほ上手へ馳せる。水はまつさをな色をして、山の木をふかぶかと映してゐる、その青く見えるのは木の翠りで、深く見えるのは其山の高さが沈んでゐる爲めかもしれない。或處では、岩にせかれて、薄い絹のやうな瀧になつて懸り、或處では、石をめぐつてさう／＼と鳴つてゐる。釣橋が架つてゐる。そこで私達はおろされた。もうこゝは、ほんとうに山と山とにぎつちりと抱きしめられた處である。

其釣橋を渡ると、山のなぞへに家がポチ／＼上へ上へとある。川上村の中の字、鳴谷といふ。坂を少し登つて、練塀がある。母家がある。「たゞいま、門の方を明けて下さいな。」お母さんらしい方が明けてくれる。そこは母屋の方からも渡つて來られる離座敷で、本箱、鏡、茶器、さらさを掛けた机、其上に私の「旅人芭蕉」が一冊、そこに坐ると其前の庭の小さな一本の木犀がぷんぷんとして匂ふのである。

吉野の山も、物さびて、靜かだつた。然し、そこは、大分現代化されてゐる。此の川上村に來て、はじめて私は昔のまゝの吉野山の幽玄な趣を見出したのである「こゝでどうぞ一晩、山の奥の淋しさをほんとうに味はつて見て下さい」とSも云ふのである。私達と志を同じくして新しい俳句の道にたずさはつてゐるものは、全國的に廣くはあるが、その數は多いとは云へない、多くないが故にお互に一層の親愛をすら感じる。その同志の一人が、斯うした山の中に、それもたつた一人、其道の友人もなくて、ひそかに、しかも紛れずに、私達の信ずる詩歌の流の一筋を汲まうとしてゐる。其事こそ、私が今度此の吉野の山深く來て見出したところの淋しくも嬉しい眞實でなくて何であらう。

「私、學校へ出てをりましたけれども、つい先頃、やめましたの、身體がどうしても惡いものですから……」

「それはいけませんね、どこが惡いのです」

「ろくまくなんです……けれども、斯うやつて、仕事がなくして一日ぼんやりしてゐると、ふさぎ込む許りで仕樣がない

のです」

「さうでせうね……」

私は御座なりに慰めるやうな言葉も云へなかつた。私への返事として、貰つた手紙の中には、「どんなにもがいても一生逢へないで終るのかとさへ思つてゐましたのに、目に見えぬ糸でつながれてゐるやうです、やつぱり今日まで生きてゐて好かつたと思ひます……」とも書いてあつた。初めて入社した人などからは、往々ひどく感傷的な手紙を貰ふことがあるが、此人のは一片の誇張ではない、病氣を持つた人か、又は煩悶を持つた人ではないかと、思はれたが、果してさうであつた。

「あ、私の荷物をあなたが持つといふのを、やつぱり持つて貰はないでよかつた、胸の病氣には重たい物を提げるのが一番惡いのですから」

「さうださうですね、でも女は女としてしなければならない事もありますし、養生ばかり出來ませんわ」

「周圍の人に其事の理解がないと困りますね、肩が張りはしませんか……、さうでせう、じややつぱり右の方に患部があるのでせう、そこへ辛子を張つて御覽なさい。」

私は辛子のとき方やのばし方を說明したりした。其時、雨がさあ〳〵と降つて來た。私が山を越えて來る時からも、催ふしてゐて、時々ホロ〳〵としぐれかけてゐたのであるが、前の山には、白いもや〳〵とした雲が煙のやうに、斑まだらに這ひまつはつて、如何にも山中らしい蕭々とした秋の烟雨の景色ではある。

私は地圖と共に懷に入れて來た「吉野山」(宮田青葉著)といふ本を出して見た。その最後の「川上郷」とある一章に「迦の渡より吉野川を上ること三里、東方高見山より發する小川を併す所、これ正に川上村の關門にして南北數十里、東西數里、全く大和山嶽の深谷にして溪畔直に岩壁となりて谷深く、兩山直に聳り立つて五千餘尺の連嶺となる、……和名抄に載せて賀美郷と云ふものにして南軍殘黨の巢窟加藤庄司、河野郷公文等此所に居りて最後まで吉野朝を守りしもの其誠忠や思ふべし」とある。それから「鹽谷は大西助五郎の中村彈正忠友を射止めたる所、對岸寺尾の路傍御首載石の標杭鮮かにして過ぐる人の腸底に腥風を起さしむ」ともある。Sの話に、その大西助五郎といふのはSの祖先だといふ、(なる程Sの姓は大西である)、赤松の殘黨が皇子を犯し奉つた時、川上村の住人、大西其他の面々が賊徒を追ひ討つた功に依り、御物具を賜けて下された。其の兜は、Sの藏に傳へてあるとも云ふ。Sの御父さんも

て、挨拶をした。いかにも大西助五郎の末裔といつた風な、いかめしい風采をしてをられる。此人から、私は鹿を捕る話、猪の話、猿の話、又、芭蕉が多分此邊の山中を通る時らしく

　日は花に暮れてさびしやあすならう

と詠じて、翌は檜になる、翌は檜になると云つて遂に檜にならぬのが淋しいと見られ、人生も亦斯くの如し、と彼をして歎ぜしめた、其「あすならう」は高原といふ處に澤山あるといふ話など、山中らしい事をいろ／＼聞いたのである

「お構ひしようにも御覧の通りの山家ですが、まあ、御ゆつくり滯在して下さい、それに此の雨ではどうにも仕方がありません……」

Sも言葉を添へて、前から其積りにしてあるのだからといふので、私は其好意に從ふ事にした。少し寒いので、行李からネルの下着を出して、袷の下に着込んだ。袖疊みにして押込んであつた行李の物を、Sは女らしく疊み換へてくれたり、又、脱ぎ棄てたまゝの私の下駄を片付けてくれたりした。其の裏の缺けた下駄にも蟲の聲はしよく／＼と鳴き透つて、床の下も、後ろの山もたゞ一面の洪水のやうな蟲の聲の中に、山家は暮れかけてゆくのである。

「もう驗溫時間じやないんですか」

私はSに云つた。Sは机の抽斗から驗溫器を取り出した。私は體溫表を手にとつて見た。

「成る程、之は成績が好くりあませんね、驗溫器が狂つてゐる事はないでせうね、一定時間以上に入れ過ぎることはないでせうね」

體溫表といふものは、人間の命のふしぎな淋しさをリズムにして見せるものだ，私の妻が生きて、病氣であつた頃、一日一日に

　體溫表しるしつゞける去年今年(コゾコトシ)とてなき

と作つた事もあつたが、當用日記と違つて、體溫表に表はれる生命のあへぎには正月も大晦日もない。

「どうして、こんな病氣になつたかと思ふと悲しくなりますが、奈良の學校にはいつたりした頃はずいぶん、無理勉强もしましたから、其が惡かつたのでせう。こつちへ歸つて、家にばかりゐると、何をのらくらしてゐるのだらうなとか、何とか、村中の噂の種になるのです，此邊の人は、生活に刺戟といふものがないのですから、他人の噂をつべこべ云ひあふのを仕事のやうにしてゐるのです，それを聞くのが本當につらくて、其爲めに學校へ出たりしたのでしたが……」

「然し、何よりも身體を大事にして、早く直さなくてはいけませんよ」

「え丶……けど、氣になるやうな事をきかされてゐては身體に矢張りよくありませんわ」

私の死んだ妻が世間口のきこえない所に行きたい、と云ひつづけてゐた事を、私は淋しく思ひ出させられた。

「奈良位な都會でも……知らない人ばかりの中で生活出來たら、どんなに氣易くて靜かでいゝでせうね…」

Sはさうも云つた、川上村の閑寂な山中が此Sにとつては喧騷に堪へないのである。而してたゞ、靜安を求めんが爲にのみ、此人は都會を戀ふてやまないのである。その心持はジョンソンの「ラッセラス」の中にも書いてあるが——。

夜になると、蟲の聲も愈しげくなつたが、其中に紛れずに吉野川の川音がざう〱と聞える。

「星が出ましたわ」

「雨がやんだんですね」

私達は緣側に立つて暗い空をしみ〲と眺めた。底の知れぬほどの暗さである。

「せめてもう一日位いゝでせう」

「けれど、これから奈良へ行つて佛樣を見てあるきたいと思ふから……」

私は又、缺けた下駄を穿いて釣橋を渡つて、そこで、上の方から自働車の來るのを待つた。

「まあ、きのう西河きりでお別れしたと思へば、あきらめられますけれど……」

Sはまだ、そんな事を云つてゐた。

「あなたは何しろ、安靜にしていなければいけないのだから、是以上、見送つてくれないやうに……」

私はさう云つて斷つた。川の其釣橋の邊ではやゝ深い谿をなしてゐるが、鮎などを漁るには、道から石を傳ふて流まで下りて行くのに、さして嶮しくないやうな勾配はあつて、そこらに雜草が生へ茂つてゐた。

「あの、山吹が一つ咲いてゐますわ」

Sは其雜草の中から山吹の返り咲を見出して、私に指し示した。芭蕉が西河へ來た時、其は春の頃だつたが、

ほろ〱と山吹ちるか瀧の音

の句がある。其話をきのふ、Sにしたらば、其邊は全く山吹の花の多い處だといふ事であつた。吉野山吹といふ名さへも得てゐるといふ事は、私も他の本で見た事もあるが、山中の處々

な空氣をふるはす瀧の音に觸れて、ほろ／＼と散るといふ其山吹の花びらは、きつと一重の瓣で、それに黄も薄い色をした淋しい感じのものに違ひあるまいと私は想像してゐたが、今、返り咲に依つて見られた其花は、私の思つてゐた通りのものだつた。

「や、こつちにも一つ咲いてゐる」

こんどは私がSに示したりした。さや／＼と吹き渡る秋の風の中に、此の病んだやうな花びらの色はほんとにいじらしい。

自働車はなか／＼來なかつた。私はSと、其釣橋の袂に立つで、對岸の村の方を見てゐた。字、鷹谷は家數僅かに十二三軒だといふ。それが山腹にあるので、殆んど一目に見られる。

「ほら、御覽なさい、あゝやつて皆な村の人がこつちを見てゐるでせう、何か珍らしいものを見つけたやうに、……これから、又、此事を好い材料にして、何かと私の評判をしようと思つてゐるのです……」

橋の向ひの袂から、すぐ黍畑があり、桑畑がある其中に、チヨボ／＼とある低い家では縁側に出て立つてゐるらしく、二階のある家では二階の窓から、おかみさん達の顔が、子供らしい好奇的な熱心さを以て、私達の方をじつと見てゐるのである。成る程、斯ういふ人達の視線の矢に常に射すくめられて居らねばならないSはたまるまいと思つた。そこへ自働車が見えたので、Sは手を擧げた。

「では、さようなら」

又、いつか、いや、再び逢ふことはないだらうとも思はれるSと、私は車上から挨拶を交はして、彼の淋しい顔と其後ろの山吹の咲いてゐる溪流とを見た。

奈良の佛達

奈良の秋色を探りつゝ、その古い都の古い佛を訪ねてあるきたいと思つて、私は吉野から轉じて奈良に來た。

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

まことに奈良には古い佛達が多さうである。其時、芭蕉が詣拜した寺々は何處であつたか解らない、或は單に概括的な感じを斯う敍したものかもしれない。「笈日記」に依ると、それは元祿七年の事である。名月の夜は上野の無名庵で月見の宴を設け（前頃「上野町」）、九月八日、支考、惟然、次郎兵衛の三人を連れて彼は上野を出た。笠置から川舟に載つた。木津から奈良には近い。其夜、猿澤の池の畔にて「ひいと鳴く尻ごゑ悲し夜の鹿」の一吟。翌九日は重陽である。さればこそ「菊の香や」の此句が出來た譯である。私が奈良に來たのも十月八日、舊暦

で云へば、宛も九月九日、前夜、猿澤池畔の八日の月は佳かつた。で、けふの重陽の節句を古人の因みとして、こゝの郊外の寺めぐりをしようと立ち出でた處である。

先づ般若寺へ――私は二月堂の方から、大佛殿の屋根の鴟尾の光を松の林の中に遠く見ながら、其裏道を歩るいた。寺の古い塀が處々剝落したり崩壊したりしつゝ、それでも立派に塀として兩側につゞいてゐる。子供が毀したり樂書をして汚したり、人の手を以てした跡は少しもなく、全く自然の手に依つていためられたので、しかも其後を人の手を以て修復しないで捨てゝある、斯ういふ塀は趣のあるものだ。殊に其内から靑い竹藪が、わつさりと其葉を垂らしてなどゐるところは――なまなましい新しい塀といふものは、如何にも外敵をふせぐといふ目的があからさまに押し出てゐて、いやなものだが――。

雜司といふ町に出る、奈良の北の端である。流があつて、菜など洗つてゐる前に、家並は町らしくつゞいて、御神燈が出てゐる。聞けば、手向山八幡の祭禮の爲めだが、それはもう濟んで、今は名殘として高張をつけてゐるのだといふ、子供があちこちに同じやうなゴム風船をもつて遊んでゐる。祭の縁日商人から買つたものであらう、子供等にもお祭の興味が失せないやうに、その風船が一二日はやぶれないでおればいゝが――。軒先に不斷掲げておくらしい献燈の出てゐる家もある、横に「火の用心」として、正面には「柳谷寺觀世音菩薩、二月堂觀世音菩薩、小房寺觀世音菩薩」――是も古佛の町らしい。

小川を越えてから坂にかゝる。そこは般若寺といふのが町の名になつて、鍛冶屋・蹄鐵所、革具、馬の鞍などを賣る店が並んでゐる。すべて京都から木津を經て奈良に入る街道口の情景。そのごちやごちやとした低い屋並の中に、般若寺の樓門の端然として、しかも厳めしからず、質素にして且つ整つてゐる其樣式は甚だ佳い。「般若寺」といふ扁額の文字もよくはまつてゐるが、もとは嵯峨天皇の宸筆勅額が掲つてゐたさうで（其額を私は奈良博物館で見たが）、樓門全體が其勅額を支持する爲めの裝飾といふ感じであつたらうと思はれる。樓門を嘆賞した私は、さて境内にはいつたが、驚いた事には、そこは雜草がぼうぼうと生へ茂つてゐて、正面に大きな十三重石塔があるばかり、といつてもいゝ（此塔はその大いさ本邦第一位のものと聞く）。本堂といふべきものはなく、僅かに低い一堂が、本堂に代つてゐるのであらうが、締めきつてある格子の間から中を覗いて見ると、中央に黑い御厨子、前に「文殊菩薩」と書いて懸けた白い提灯がフラフラとして、其外は、櫃や箱や提灯の殘くさ

のが物置場のやうにちらかつてゐる。再び境内を見渡すと雜草の外には立木がちらほら、その上に子供が一人二人、秋風に尻を吹かしてゐるのである。

昔、此般若寺のほとりは十八間戸と云つて、忍性律師といふ人が、世に容れられない癩者や、不具者を集めて救恤した處といふ。今は此處に煉瓦造りの堂々たる建物が見える、奈良刑務所である。同じく世に容れられないものを收容する所ではあるが――。

般若寺の坂を南へ戻つて、東大寺の轉害門の前から西へ行く。昔の一條街道である。聖武天皇佐保川御陵の前を過ぎ、興福院の一段と高い茂みを右手に見て、どこまでもまつすぐに行く。そこらは、右も左も田で、まだ水の殘つてゐる田では、蛙が鳴いてをり、水の干た田では蟲が鳴いてゐる。田の緣に植えた豆は其葉がむしばんでゐる。さうした田の中にポチ〳〵と家があるのが法華寺である。私は此の道すがらにも人に道を問いて、要領をえがたい思ひをしたが、人が法華寺といふのは其村の事で其村に其名の寺があるのだ、外の村でも大方さうである。つまり、天皇が一つの寺を創建される。山林、寺田が付せられる、僧が住む、香料屋が出來る、花屋が出來る、豆腐屋が出來る、寺の田地を耕す爲めの百姓が移つて來るといふ風にして、一つの村が作られて來たものであらう、それが今は、寺の衰微すると共に其村も貧しげに、おいてきぼりされたやうな百姓家ばかりになつてしまつたのである。

法華寺は聖武天皇の詔に依つて成つた國分尼寺の一つで光明皇后の建立と傳へ、皇后は御落飾後此寺に住せられたといふ。又、本尊十一面觀世音菩薩は皇后の尊影をうつしたものと云ふがこゝの本堂も暗く閉されてゐて其中を拜むことすら出來ない其前に石の献燈が一基、蘇鐵が一株。今にも崩れさうな古い鐘樓があり、河骨がびつしり生へた古い池がある。光明皇后が貧人病者の爲めに設けられたといふ浴室、横笛が尼となつて住んだ跡を紀念する横笛堂なども見たいと思つたが、境内の荒れてゐるのに引きかへ、庫裡はおごそかに靜まりかへつて、華族遊衞云々とある門標もいかめしく、又、現に尼公が靜かに住んでをられるといふので、一野人として、事々しく案内を乞ふのも遠慮されるのである。

西大寺は、法華寺を過ぎる一條街道をなほ西へ行き當つた處生駒山裾の東の麓にある。「十月一日より八日まで、光明眞言土砂加持大法會修行」と大書して、幕を打ち張つた門の内には、

すし、うどん、又は子供の玩具を賣る店がひろげられ、男が大勢何十枚といふ繪圖を持ちはこんでゐる。此寺は往昔、東大寺と並んで、境内に四十九の精舍と三百餘の殿堂が甍を並べてゐたといふが、數回の兵燹に罹つて、今は僅に金堂、愛染堂、其他が殘つてゐる許り。金堂では黃色い袈裟をまとふた僧が、佛前に莊嚴せられた佛器の間に坐して、默々と加持の修法をしてゐるらしい。遙かに控へた參拜の三四人も亦默々として、燭の光のみが此のつゝましい景色の中心として燃えてゐる。これは法會中、八日間は夜も徹して不斷に修せられるものだといふ、加持の土砂は凡ての穢を除くものであるさうで、其を分讓するといふ處には世話人らしい人が、まだ朝の事とて、到つてひまさうな顏を並べてゐる。愛染堂の本尊、一矢の愛染明王は蒙古襲來の時靈驗あらせられたと傳へて、今は求めるものに小さい矢を頒つてゐる。それを私は友への土產として一つ貰つて外へ出た。

秋篠寺を中心にした秋篠寺といふ村も亦淋しい處である。赤ちやけた黃色い土をこねて塀を作つてゐる。その側で土を踏んで練つてゐる。それが左官ではなくて、素人の青年らしい。其隣は家の外側も、此の黃色い荒壁である。納屋も此土をこてこてと堅めたものである。何れも不細工で、如何にも手作りといふ風に出來て堅まつてゐる。その壁に、秋の日がうす〳〵と照つたり曇つたりして、九十にも近いかと思ふ程の老婆が小豆を撰つてゐる。

「桑の畑を北へ行きやはりますと大きな門がありまつさ」

その老婆は私に敎へてくれた。牛が大きな首を振りながら、やつて來る。長い綱を引いた後ろには其車と人とがついてゐるのだが、牛も人も別々に步るいてゐるやうである。天秤をかついだ男が來る。輕いらしい籠の中から、秤の竿が出つぱつてゐる。すれ違ひさまに見るともなく見ると、破れた風呂敷から柿の赤い顏がのぞいてゐる。

其寺とても侘びしい。講堂が一つ、僅に有りし世の名殘をとどめて、昔は堂塔伽藍の間に對應照映の美を示してゐたであらう其堂が、今は、秋枯れの木立を背ろにし、きり〳〵と鳴く百舌鳥を棟にとめて、その單層四注本の屋根と柱の直線の交叉といひ、その黑く古びた色と云ひ、初めから斯ういふ繪畫的功果を出さうといふ意圖のもとに作られたのではないかと思ふほどに、しつくりと其周圍に調和してゐるのである。――庫裡とも見えない、番人が住むかといふ風な小さな家に「寺務所」と札がかゝつて、此寺に傳はる國寶のエハガキも硝子の中に出しこ

ある。その家から犬が一匹、ちよろ／＼と出て來て、人なつかしげに、又、物欲しげに、私にまつはつて離れないのである。

喜光寺ほど、然し、其程淋しく、荒れた感じのする寺は外になかつた。その寺へは西大寺から南へ、稻田の中の道に杖を曳くと、やゝ遠くに、松が數本、刈り殘されたかと思ふやうにちよぼ／＼と立つて、其間に重層作りらしい高い樓閣が紛れなく望まれる。斯うした場面には、其側に塔が聳え、鐘樓が隱見するといふ風な點景の欲しいものだが、其等の物は一切なく、たゞ一棟の樓閣だけが突兀として秋風の中に露はれてゐるだけである。しかも、其に近づいて一層驚いた事には、門もなく、敷石もなく、私は田圃の小徑をつたつて裏からはいつたが、表からの入口といつて定かでもないらしく、何か禁制を書いたらしい立札も倒れてゐるまゝ起すものもなく、堂の前にある少しばかりの芝生には草が生へて、黄色い蝶が一疋、ヒラ／＼と飛んでゐるばかり。

さて、其堂は――遠くから見えてゐた通り――重層尾根の五間四面、俗に鐘堂と呼ばれて名高いものといふが、太い柱には、膏藥を貼つたやうに、うめ木をして、其外にボコボコと穴が明いて、うそ寒い影がたまつてゐる。大きな風でも吹けば壁がゲソリと落ちさうである。此堂の本尊阿彌陀如來、勢至觀音の兩側士は行基菩薩の作であつて聖武天皇がこゝに詣拜せられた折には、光を放つて玉體を照らし奉つたといふ（喜光寺といふ名稱も其から起つたといふ）が、其の三佛とも今は其肌に埃が降つたやうに白く埃だらけになつて、燈明臺にもいつ灯がともつたことやら、花は枯れる世話のないやうに造花を挿してあるが、其の紙の花も季節遲れの牡丹で、しかもとうに色が褪せて、其燭臺と花挿とを載せた御机一基と鼎一鼎とにも塵は厚い。御格子ばかりで戶もおりず、秋の薄い光が堂の内までも差込む爲めに、其の侘びしい御佛の姿が、餘りに明らかに拜まれて、全く鎖し込めて暗い御堂を覗つた時よりも一層淋しい感じがする。此の阿彌陀佛は、今はや光明を發しさうにも思はれないが、それは此佛が埃だらけである爲めではなくて、佛の前に玉體を枉げて禮拜されるやうな歸敬の精神が今は失はれてゐるからであらう。

唐招提寺に來て、私は初めて、南都七大寺の一つにある寺の結構を、それも昔ながらではないが、稍其に近く覗ひ得たといふ氣がした。喜光寺からの道は垂仁天皇の御陵のこんもりとした茂みの裾を巡つて、廣くついてゐる。私は地圖を見違へて、

裏道へ出てしまつたので、茶畑の中を通り抜けたり、道もない處の柿の垂れてゐる枝を潜りぬけたりして、漸く、唐招提寺の塀へたどりついたのである。

南門を入ると、左右を松林に仕切つて、正面一ぱいに、土壇の上に建つた金堂が立ちふさいでゐる、どつしりと大きなものが現前してゐる姿である。ギリシアの神殿を思はせるとも稱せられてゐる八本の大柱が、靜かに屋梁を捧げて、くすんだ丹色と、壁の白色との對映も美しい。さて、一歩一歩その金堂に近づくと、此堂に依つて塞げられてゐた眼界が漸くに動いて、右手に鼓樓が現はれ、其後ろに禮堂がつゞき、更に金堂の裏手にまはると、其よりも更に大きい講堂が出現し、その後ろの高みには開山堂、左手の茂りからは塔頭の院々の甍が光つてゐる。私は左に往き右に往つて、此の廣い地域の中に、今は蜻蛉も飛ばない晩秋の靜かなる日影に浴し、そよ〳〵と吹き渡る風を、心ゆくばかり呼吸した。

金堂の内にある坐像金色の盧遮那佛は綿をもつて地となし、上に布十三反、漆十三反を重ねて作つたといふ、後に一千の小釋迦像を附してある。又、講堂内にある金剛界會の大日如來は開山和尚の指揮に依つて成つたもので、本朝密教の祖元を築いたものともいふ。私は其等の古佛を案内の爺さんに連れられて拜んだ。講堂の内に埃だらけになつてゐる佛頭（作者不詳）と菩薩頭（開山和尚隨徒作）との彫像が非常に佳い。私は立ちどまつて、句帖の端に其スケッチをした。

「どうも御待ち遠でした」

僧とも俗ともつかぬ案内の爺さんは、垢よごれをした單衣を二枚重ね着し、穢い手拭を腰にさげ、むつちりと怒つたやうな顏をして、其札に書いてあると同じ事を、口で述べるだけであつたが、私が斯う挨拶をすると、一寸聞きとれぬ樣に聞きかへしてから

「いや、いや、どうぞ御ゆるりと……」

と云つて、其から、につこりと好い機嫌になつて、禮堂の内では、「是はめつたに拜觀出來ないものだけれども……」などと斷つて、春日厨子の扉を開けて、赤栴檀の釋迦如來の御像を拜ましてくれ、又、わざ〳〵蠟燭をともして、暗い厨子内に畫かれた巨勢金岡筆と傳へる八相成道の圖まで近々と照らしてくれた。開山堂に祀られてある鑑眞和尚の御像は思託律師の作といふ。衣を寛くしていと安らかに結跏しつゝ、靜かに黙想の眼を閉じられてゐるかと思ふ程、其の盲いられた御瞼には却て、慈愛の心がにじみ出てゐるやうである。開山堂の前に、句碑がある。

若葉して御目の雫拭はゞや　　芭蕉

是は、貞享五年の夏、芭蕉が吉野紀行の途次、奈良を經て爰に詣でた折の吟で、「吉野紀行」には「招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十四度の難をしのぎ給ひ、御目のうち鹽風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拜して」と前書がある。鑑眞和尚は唐國揚州江陽縣の人、大和上といつた、聖武天皇の爲めに日本に來て傳法せんことを招請せられた時、和尚は云つた「思量するに誠に是れ佛法興隆有緣の國なり今我國同法の衆中誰か此遠請に應じて日本國に向つて法を傳ふる者有りや」、時に衆僧默然として一人も對へる者がなかつたが一僧が進み出て「彼の國太だ遠く生命存し難し、滄海淼漫百にして一の到る無し、人身は得難く、中國は生じ難し、進修未だ備はらず、道果未だ到らず、是故に衆僧緘默して對へ無きのみ」と。和尚は再び云つた、「是法事の爲めなり、何ぞ身命を惜まん、諸人去らずんば我即ち去らんのみ」、自分一人でも日本へ行くといふのである。そこで二十一人の弟子が從ふ事になつた、それから日本へ行く船を作りはじめた、處が弟子のうちに命の惜しいものが出來て、彼等の船を作つてゐるのは海賊に通ずるものだといふ密告をしたので、船は沒收されてしまつた、後、疑晴れて再び支度をして海に乘出すと大風に逢つて船は覆沒し、和尚は僅に身を以て免れた　斯樣に幾度か渡航を企てゝは妨げられたのは　天災の爲めでもあるが、又中國の人が和尚を日本へ送ることを惜しんだ爲めでもあつた。然し、萬難を排して和尚は遂に日本に來た、初め渡航を企てゝより十一年目で、日本の天平勝寶六年。その八年、和尚の爲めに此の唐招提寺が出來たのである。此の艱難を委さに記したものに大和上東征傳（群書類從第六十九）がある。芭蕉の文には潮風の爲めに失明したとあるが、傳に依ると、日本に渡らんと發願しつゝ遂に至り得ないかと悲泣したあまりに、眼に熱を病んで失明したと書いてある。兎も角、偉い和尚である。私は、寺の裏山にある和尚の墓へも詣でた。大きな松の枝をかざして靜かな寶篋印塔がある、私はそこで、しばらく、時雨に降りつめられた。

そこらは確かに、昔は塔頭の院々の並んでゐたところに違ひあるまい。煉塀が毀れたまゝにずつと續いて、處々に門の跡さへ殘つてゐるが、其塀の内には寺も家もなく、稻が實つて、蛙がギヨツ、ゴエツ、と獨逸語の發音のやうな聲を出してゐる。それは唐招提寺を出て藥師寺の北大門をはいつた處である。名高い藥師寺の塔がそこに見える。

塔は三重であつて、各層に裳層をつけてある。五重とも見

え、六重とも見える。それは塔の姿が水の面に映じて、層々の影がゆらぎつゝ重なりあふ所の形態からヒントを得て作つたものと云はれてゐる。まことに、此の塔を仰ぐ時は、空は大いなる水のやうで、今しも地上から湧出した一つの端麗なる結構がゆら／＼と伸び上りつゝ、こゝに佛土の荘嚴を指標してゐるかの如くである。さきに、一時曇した空はもうからりと晴れて、絹を裂くやうな百舌の聲である。

奈良郊外の古佛を訪ねる人は此の藥師寺を眼目とする。それは此三重の塔もさうだが、本尊藥師如來が日本古代の藝術品として實に比類のないものと稱せられ、フエノロサが之を見て鑄銅佛として世界第一の傑作であるといふ折り紙をつけてより、いよ／＼名高いものになつたからである。本尊は臺座とも一丈四尺、脇士の二尊は少し低いが、此の廣い金堂に無意味な空間を與へない程に堂々と大坐してゐる。それは、その大いさよりも、その作のもつ光である。仰げば、佛は莞爾として微笑してゐる。靜に衆生をみそなはすかの樣である。私達は斯ういふ古佛に對する時に、實にいゝ氣持がする、其氣持は佛のありがたさといふ事とも違ふ、これが其儘、眞正の佛だなどゝ信じてゐるのではない。これは正しく人間が造つたものに違ひない。そこだ、我々と同じ人間が作つたものであればこそ私には難有いのである。何故といふに、此佛を作らうといふ念願を發した時の其人の心の中に醱酵して來た所の佛性、而して、是程に美しく作りあげる事を得た程に、其人の心の中に完備してゐたる佛性、それが私達と同じ人間の心にあらはれた偽りのない事實であるといふ事を、此佛像が爰に正しく實證してゐるからである。此の藥師如來の微笑は、之を作つた人の廣い柔い心に浮き出た處の貴い微笑そのものでなくて何であらう。是は行基菩薩作と傳へる、恐くさうであらう。然し、其傳に誤りがあつて、是が一無名の人の作であつたとしても、其無名の人は決して一介の匠人でありえない。其人が如何に自然の大いなるものに歸敬し、其無窮の生命を象徴するものに禮讃の心を懐いてゐたかといふ事は、此一作を以て傳へられてゐる。而して此作に對する時、しみ／＼と其心が私に傳へられることが難有いのである。

私は藥師如來の微笑をまだ眼の前に見るやうに感じながら、西の京といふ電車の停留場に來た。そこに角柱が立つてゐた。

國寶世界一、諸病全癒、藥師如來

これには苦笑させられた。然し、笑ふことも出來ない。當今の神社寺院にある神でも佛でも、それが功利的に靈驗がある

でもしなければ、其處に參拜し、進んで志納をするものなどはないのである。佛はパンを要しないけれども、佛を守るにはパンを要する人間を要する。私は、唐招提寺の案内のぢいさんが云つた言葉を思ひ出した。

「なにぶん、びんくしてをりますので、たゞ質素にして、漸く保存してをります」

如何に數多の國寶や、立派な堂塔を擁してゐても、檀家を有せず信徒を有せざる寺の貧窮するのは當然である。國寶が埃だらけになるのは當然である。私は此一日、奈良の古佛を見てあるいた「菊の香や奈良には古き佛達」といふ、其菊の香などは何處の寺にもない。菊などを作つて、悠然として清閑を樂しんでゐられる筈はない。どこも秋風が吹いてゐるのである。

日本民權發達史論

白柳秀湖

賓元帥と奈翁

ヒンデンブルグが獨逸共和國の大統領に當選したからと云つて、直に軍國主義の復活を豫言したり、カイゼルの復辟を想望したりするのは、少し氣が早すぎる。歷史を繙いて見ればそれによく似たことは幾らもある。千七百九十三年の革命の後で、グイロッチンの血祭騒ぎに飽き切つた民衆の渇仰を一身に集めて、恐怖そのものの姿を、無秩序と無節制とに體現しつゝあつた、自由民權の墓場のやうな佛蘭西に、金冠まばゆく、嚴かに帝王の名乘りを擧げたナポレオンの如きその一例である。

ナポレオンが現はれた時、モブの狼藉と革命政府の亡狀とに愛想をつかし拔いて居た佛蘭西の民衆は、狂喜して之を迎へた。昨日までマルセイユの歌を合唱した當の民衆でさへそれであるから、所在に聲を呑み、息を凝して居た封建の殘存勢力が、此現象に接して如何にその愁眉を開き、如何に自ら慰めたかは想像に難からぬ。或るものは革命の終焉を叫び、或ものは帝政の復活を道ひ、更に或るものはブルボン家の再興を期待したに相違ない。

然るにそれが五十年と過ぎ、百年と過いて今日からナポレオンといふ人物を觀察し、ナポレオンのしたことを仔細に研究して見ると、ナポレオンは當時の民衆が想望したやうな超人的の英雄でなく、又、當時の封建的殘存勢力が期待したやうな獨裁政治の使徒、ブルボン家再興の前驅でもなかつた。

ナポレオンは今日でも一般の歷史家からは革命の反動的氣運に乘じて現はれた不世出の英雄として說明されて居る。併し吾吾の史的解釋からすれば、ナポレオンは決して反動的英雄でなく、革命を革命本來の目的に呼覺す爲に、現はれた佛蘭西商工主義の使徒である。ブルジョアジーの代表者である。彼は英雄の假面の下に、黃金の帝冠に隱れて當時の中產階級を中心とする商工本位の佛蘭西を建設する爲に現はれたものである。

ナポレオンが佛蘭西の皇帝として表面にした仕事は、歐洲の征服である。佛蘭西の國權擴張である。併しその實際に於いてした仕事は、既に久しい以前から佛蘭西にとつて最も恐るべき產業上の競爭者であつた英吉利の商權を大陸から驅逐する仕事である。ナポレオンのやつた大陸封鎖といふことは、英吉利を海上に孤立させて、その糧道を斷つといふのが目的であつた。勿論英吉利の糧道を斷つといふことは、漫然と之れを見れば單に戰略上の目的に出でたものと見られぬでもないが、併し、それは一面に於いて英吉利の商工立國の基礎を脅かすべき點も有效な、且つ最も聰明な手段であつたといふことを忘れてはならぬ。

英吉利の商工業にとつて、歐洲大陸ほど有利にして且つ確實な市場は他に見出されぬ。これは今も昔も全く同じ關係の下に置かれて居る。其處で英吉利に取つては歐洲大陸の中の或る一ケ國が商工業國として異常の發展をなし、歐洲大陸に於ける英吉利の商權を脅すといふことが何より恐ろしいのである。英吉利としては歐洲大陸を永久に自國の製造品を消費するお華客として保留したい。これが爲には何んな大きい犧牲を拂ふことも辭せぬ。現に英吉利は千三百三十九年に始まつて、千四百五十三年に終を告げて居る百年戰爭から、最近の世界大戰役に至るまで、終始一貫、此政策を持して歐洲大陸に臨んだものである。其間には佛蘭西を敵としたことがあり、西班牙と爭つたことがあり、和蘭と相對したことがあり、最後に獨逸と運命を賭して戰つたのであるが、其抗爭の最も久しきに亙り、且つ激甚を極めたものは佛蘭西であつた。

大陸封鎖の意義

英吉利も初めは農業牧畜本位の國であつた。さうして千七

獸皮、鉛、錫は英國の産物の主なるものであつたが、之等の原料を大陸に賣込む商業上の利益は盡く之をイースターリングと云つてハンサ同盟に屬する大陸商人の手に壟斷せられてゐた。加之、英吉利には其頃まだ工業といふものがなくその原料に加工した日常品の供給をすべて大陸に仰がなければならぬ二重の搾取關係に在つたのであるから、經濟上全く浮ぶ瀨がなかつたと云つてよい。

處が英吉利人はその後追々に覺醒して先づロンドンの近郊からハンサ同盟に屬する仲次商人を驅逐し、原料販賣の利益を自己の手に收むると同時に、對岸フランダーの地から機業を輸入し、自國の産出する羊毛に加工して、自國の毛織物を産出するやうになり、更に勵精努力して、逆に之を大陸に向つて輸出するやうにさへなつた。

千三百三十九年英王エドワード三世が佛國に對して、所謂百年戰爭を開始したのは、從來の歷史家によつて、英王がその血統上の關係から王位の繼承と領土の相續とを要求したものであるとされて居るが、實は佛蘭西に對して、對岸フランダーの商業權を奪つたものに相違ない。

百年戰爭の後、英吉利は宗教改革の名の下に西班牙と大西洋の制海權を爭ひ、尋いで和蘭の航海權を壓服し、玆に先づ世界の波濤を支配し、世界の富を吸收すべき活躍の素地を作つた。十七世紀の中葉から、十九世紀の末葉に至る二百五十年間の世界は、英吉利と佛蘭西との商權爭奪史であつたと云つて差支へなく、亞米利加大陸の植民に、印度の占領に、支那の侵略に、日本の開發に、兩者は常に馳驅して激烈な競爭を續け、佛蘭西が合衆國の獨立に聲援を與ふれば、英吉利も歐洲の神聖同盟を嗾かして、佛蘭西革命に壓迫を加へやうとする。佛蘭西が德川幕府を支持しようとすれば、英吉利は薩長を援助すると云つた形で、事毎に對峙し、その直接に間接に砲火を交ゆること數次の多きに及んだ。ナポレオン戰爭は即ちその長い久しい商權爭奪史の中の一齣である。

今、試にナポレオン戰爭當時に於ける英吉利の歐洲に於ける地位を見るに、モウ押しも押されもせぬ純無垢な資本主義國家で、世界の人口の三分の二以上を占むる有色人種の大部分を擧げてその賃銀奴隷とし、世界の土地の九割以上を占める有色人種の郷土の大部分を擧げて其工業原料の産地とし、英本土を以て世界人類の需用を一手に引うくる大製造工場に擬し、食糧の供給はすべて之を愛蘭若くは歐洲大陸の農業に俟たうといふ極めて蟲のよい、身勝手な理想の前に有頂天となつて努力をけてゐる時であつた。其處へナポレオンと呼ぶ佛蘭西商工主義

の巨怪が現はれて疾風の如く歐洲を席卷し、千八百六年十一月二十一日といふに大陸封鎖令を發し歐洲諸國に命じて英吉利との通商貿易を嚴禁した。是より先、彼はネルソンの爲に其艦隊をトラファルガーに擊破され、英吉利本土にその精鋭を上陸せしむべき望みを失つたのであるから、或は之が窮餘の一策であつたかも知れぬが、海上に孤立し、食糧の供給を絕たれた英吉利の苦惱は實に深刻極まるものがあつた。英吉利の經濟學は實に此苦惱の中から產み出されたものであるとさへ云はれて居る。

ナポレオンはかくして其佛蘭西商工主義の當面の敵手である英吉利の勢力を大陸から掃蕩することに努めたのみでなく、征服した歐洲各國に對しても凡そ佛蘭西商工業の障碍であると見たものは、すべて之を禁止し、若しくは或る拘束を加ふることに努めた。伊太利に攻入つた時、佛蘭西のゴベリン織を保護する爲に、伊太利の同じ機業を禁止した如きその一例である。斯くの如く見來ればナポレオンは決して革命の反動的氣運に乘じて起つた獨裁政治の使徒ではなく、英雄の假面にかくれ、王冠の威嚴を假りて全歐洲に革命の眞精神を宣傳し、且つ其結果を收拾しようとした佛蘭西商工階級の忠僕であつたと云ひ得る。

史的觀察の準備

佛蘭西革命は我が明治維新と同じく第三階級、即ち商工中產階級の革命であつた。國王及び貴族僧侶によつて支持された封建の遺制に對する新興資本主義の叛逆であつた。革命の主人公は都市に於ける最下級の勞働者や、地方に於ける悲慘な農奴ではなく、當時既に隱然たる勢力を爲し、資本の力を以て着々其權利を恢宏しつゝあつた都會の紳士、即ちブルジョアーであつた。併しながら革命の行程に於いて、事は多く意外の邊に發し、勢は全く豫想の外に走つて第四階級に屬する飢民の蜂起となり、兇徒の横行となり、野心家の之を利用し、之を操縱して勢を得んとするや、殺戮又殺戮、爭鬪又爭鬪、革命は遂にその軌道を逸して破壞そのものとなり、敵も味方も、玉も石も、盡く之をその業火に附して、佛蘭西の有らゆる文化を燒き盡し、國を擧げて自由の墓場と化し了らされば止まざるの勢を示すに至つた。

茲に於いてか、革命の主人公である商工中產階級は、其勢を遮り、其力を制して革命をその正しき軌道に呼戻し、本來の目的に向つて驅走せしむることの必要を感ずるに至つたのであるが、さて其仕事たるや容易でなく、尋常凡庸の人物のよく企て

及ぶべき所でない。此要求に應じ、此使命を果さんが爲にグイロッチンの血祭に狂ひ疲れた民衆の喝采を一身に浴びて、荒涼たる墓場のやうな佛蘭西に突如として出現したのが、ナポレオン、ボナパートである。

事實はそれが凡そ五十年を經過して見なければ眞相を知ることが出來ず、從つて之を歷史として記載することは出來ぬと或る史學の大家は云つて居るが、自分で自分の地位を決定し、古人と並べてその名を歷史の中に加へたいばつかりに歷史を書いたり、書物を編纂したりする日本の『文壇人』には洵に藥にして呑ませたいほどの適切な注意である。世間の事は往々接近して見るほどその眞相を捕捉するに難く、大體の形勢を摑むことの出來ぬものである。支那でも廬山に居るもの廬山を見ずとか云つて、大體の形勢といふものは、少し離れて見た方がよく分るものである。それは其筈である。政友會のことを原氏に問ひ、國民黨のことを犬養氏に叩き、それで誤りなき大體の形勢を捕捉し得るかといふに決してさうでない。原氏にしても、犬養氏にしても、個々の事實はよく[redacted]つて居る。[redacted]幷し[redacted]の事[redacted]所に至つては、其爲る所往々にして犬養氏一個の所見に過ぎず、原氏と時を同じくして事を共にし、それで或る一ツの事實に關して互の見る所が全く相反するのを見ると、人間の評基ほど頼み少いものはない。結局人間は自分で自分を知ることさへむつかしいのである。太陽が地球を廻轉するのでなく、地球が太陽を廻轉して居るのだとくれ〲教へてくれて居てさへ、朝日を見、夕日を送るたびにそれを忘れて太陽東に昇り、太陽西に沒すると書きもし、思ひもする。況んや人間、自分を載せて動いて居る時代の波、自分を操つて働かせて居る時代の力、それを正確に見るといふことは餘程の困難である。

世には敎化といふものがあり、傳統といふものがあり、時間的にも、空間的にも適當な距離を保ち、冷靜に、公平に、比較的正しい事物の形相を捕捉し得る立場に立つて居る人までも、とかく事件の渦中に卷込まれ易い。併し吾々が、その敎化に惑はされず、傳統に囚はれず、時間的にも空間的にも適當な距離を保ち、適當な立場に立つて或る事物を見るとすれば、吾々は達人にあらずとするも、比較的正確な事物の眞相を摑むことが出來る。佛蘭西のナポレオンばかりでなく、英吉利のクロムエルにしても、獨逸のル[redacted]テル[redacted]にしても、[redacted]て[redacted]つて時代を[redacted]し、その歷史の舞臺に現はれて來る姿もむき〲であるが、同じ方法によつて彼等を操つて居た背景の黑幕を去り、彼等を活躍させて居た奈落の構造を點檢すれば、その機關と、機關の操縱者とに全く同じであることを發見するに相違ない。

二種の中産階級

維新前後に現はれた日本の人物といふ人物が大かたはそれである。坂本龍馬、高杉晋作、西郷隆盛、板垣退助、木戸孝允、大久保利通、福澤諭吉、岩崎彌太郎、凡そこれらの人物は各藩から思ひ〳〵の姿で歴史の舞臺に打つて出で、各その得意とする所の伎を演じて、人生の揚幕の中に吸込まれて居る。彼等は個々の信念に生き、別々の行程をたどつた。併し三十年と過ぎ五十年と經て彼等の演じ去り、演じ來つた所を仔細に見直せば見直すほど、前幕と後幕との聯絡が明かとなり、場面と場面との關係がハツキリとして來る。さうして彼等は結局同じ舞臺に立ち同じ筋書の一役づつを受持つて居たものであるといふことが確實となる。彼等は今頃、恐らくは舞臺裏に落合つて、互に頭を掻きながら、オヤ〳〵こんな筈ではなかつた。かうと早く知つたなら、あんなに眞劍に角突合せて、喧嘩をするではなかつたと互に苦笑して居るに違ない。

歐洲で人民の權利をいふ場合には必ず市民とか、市民權とか云つて、都市の人民を限り、之を貴族、僧侶に隷屬した農民の階級と區別する。實際歐洲の歴史で見ると民權の發達といふも、實は都會の商工業者の下に使役された徒弟若しくは職人、職工の階級に至つては、全く之に與らなかつた。然るに、日本の歴史で見ると、一方に歐洲の歴史に見ると同じ都會の發達、及び之に伴ふ町人階級擡頭の事實が歴然として存在すると同時に、他の一方には領主と農奴（水呑百姓）との中間に一種の中産階級が發生し、成熟しつゝあつた事實を否定することが出來ない。其處で日本の民權發達史を說くものは、歐洲の歴史を演繹して、唯、都會の發達と、商工中産階級の擡頭とを說いたゞけでは、明治維新の原動力と、維新後に發達した政黨の正體とを十分に說明することが出來ない。歐洲では都會の商工中産階級が第一線に立つて政治革命を成し遂げた。然るに、日本では都會の商工中産階級、即ち町人は維新戰線の後方勤務をしたに止まり、第一線に立つて働いたものは地方の中産階級、即ち各藩の下士とか、輕格とか、鄕士とか、名主とかいふ階級に屬するものであつた。日本の民權發達史を說くに先ち、私は讀者に先づ此二種の中産階級に就いて、歐洲の歴史と少しく其表面の事情を異にする點を了解して置いて貰ひ度い。

西洋の歴史も日本の歴史も上古の社會組織が、領主と農奴との二階級から成り、その間に、領主にも附かず、又農奴にも位せぬ中間の階級といふものがなかつた點は全く同じである。尤も領主、即ち地主の方には、大小の差別が無限に分れて居り、

それが截然と血統即ち身分の上下に比例して排列されて居た。西洋では奴隷の方にも良賤の差別が甚だ多かつたやうであるが、日本には、良と賤と大體二つに分れ、賤は農奴として各家に配屬し耕作、土木其他の力役に驅使せられ、良は家を幾つか合せて大小の氏、即ち各部落に配屬し、或る特殊の技術を以て器械器具の製作に任じ、戰場其他の功によつて、破格の拔擢をされ、氏の子、即ち家人の列に加へられることもたまにはあつたらしい。かく日本の奴隷に良賤の等級が少かつたのは、此聯島に徙遷してから、後、存立競爭に値するほどの、異民種に遭遇せず、戰爭によつて、新しく奴隷を附加する機會が少かつたからであらう。

奴隷はすべてその從屬關係の生じた原因の遠く、茫乎として捕捉し難いものほど、その階級觀念が緩和され、差別的待遇の薄らいで、行くものである。日本の奴隷制度はその一例で、良賤ともに、その從屬關係の生じた、原因が明かでなく、歴史の始まる頃には、もうその階級觀念が大に緩和されて居たものらしい。歴史家の中には、大小の氏族と、賤民との間に良民といふ[illegible]の人民として、取扱ふ人もあるやうであるが、それは[illegible]世の社會組織に囚はれた見方で私はさうは思はぬ。上古の社會組織に良賤の民とあるのは奴隷の等級を云つたもので奴隷の外はすべて氏の子であつた。玆に一つの大氏があれば、その下に數多の小氏が包括せられ、小氏はまた數個の家から成つて居た。家は今日と異つて、三世、四世に亙り、六七十人から八九十人までの家族を包括して居たのであるから、一個の氏族は大小合せて、千人から二千人位の氏の子を率ゐ、賤民はそれぞれ其家に配屬し、良民はそれぞれ大小の氏、即ち部落に配屬して居たものらしい。

即ち日本の古い社會組織を要約して云へば、多くの家の子を率ゐて居る大小の地主と、各地主及び地主の聚落に配屬した良賤の奴隷と此二つの階級以外に、中間の階級といふものはなかつた。之は西洋の古い社會組織も同じことである。

有名無實の郡縣制度

之で各氏族間の身分と實力（土地及び奴隷を主とする財産）とが釣合つて行けば天下は永久に泰平無事なのであるが世の中のことは今も昔もさううまくは行かぬ。何か不事の大事件が起つて、[illegible]やうなことがあると、身分と實力との釣合が破れ、從つて舊來の秩序が亂れる、土蜘蛛征伐や、諸[illegible]師との戰爭は、幾分の奴隷を增加したには相違なかつたであらうが、未だ血統を基礎とする日本國の秩序に變動を起すまで

には在らなかつた。併し神功皇后の三韓征伐となるとその結果が大分大きかつたものと見える。舊來の秩序に可なり激しい動搖が生じて來た。之は日露戰爭や、世界大戰役で俄かに國富が增加し、經濟的支配力の所在が遷轉して舊來の秩序に動搖が生じたのと同じ事情であらう。仁德天皇から大化新制に至る約四百年間の大きい出來事を要約すると、大抵次の數項に歸することが出來る。

(一) 新文化の渡來
(二) 皇室の大土木
(三) 宮中風紀の紊亂
(四) 奴隸の使役、奴隸の刑戮、奴隸の戰鬪力等、之を要するに奴隸に關する記述
(五) 大氏族の僭上
(六) 大氏族の勢力爭ひ

此項目を瞥見したゞけで、三韓征伐が何を齎したかは直に分る。新附の領土、新附の奴隸、さうした俄かの富が如何に血統の尊卑を基調とする國家の秩序を紊り大氏族の驕慢僭上を來したか。雄略天皇の英邁も武烈天皇の峻嚴も竟に大氏族の跋扈を制することが出來ず、皇別大氏と、神別大氏とを相對峙せしめて、其勢力を殺がうとした朝廷の苦肉策も徒に事端を滋くしたのみで、結局蘇我氏の獨擅場となり、蘇我氏の信奉する佛教の教條を基調として國家の秩序を建直さうとされた聖德太子も、中途蘇我氏の弑逆に遭つて目的を果さず、中大兄皇子が、藤原鎌足と謀り、經世濟民の儒學に根據し、唐の郡縣制度に倣つて斷行した大化新制により、皇室は辛うじて一時大氏族の跋扈を制することを得たけれども、日本國民の經濟生活は當時まだ郡縣制度を施行するほどに成長して居らず、天武天皇の修正により、幾分地方の豪族を滿足させ、從つて少しはその生命を長引かせることが出來たものの、奈良朝の末となつては折角の郡縣制度も全く有名無實のものとなつてしまつて居た。

大化の新制により全國の土地は公有となり、從來、大小の氏族に隸屬した全國の人民は解放されたと歷史は語つて居るけれども、それは表面のことであつて、實際は土地も人民も依然として舊制のままで改革の精神は少しも行はれなかつた。唯、氏の子だけが、其身分の上下に關係なく、才智力量によつて、如何なる官職にも就くことが出來るやうになつた。之を普通に人民の解放と云つて居るが、氏の子は如何に地位の低いものでも奴隸とは全然身分が違つて居る。從來の歷史は『人民』とか、『良民』とかいふ文字を餘りに濫用し過ぎて居る。上古の國家に於いて人民と稱すべきものは奴隸の外にはない。大化の新

で、解放されたといふのは、此奴隷ではない。從來、氏長の支配に屬し、天皇は唯間接に之をしろしめされるに過ぎなかつた氏の子達が、天皇の直轄となり官職の前に平等にされたといふだけである。勿論、大氏族の長が、朝廷の御稜威を凌ぐやうになつたのは、其領有する土地と奴隷との力である。故に大化新制の精神から云へば、朝廷としては眞先に大小の氏族奴隷を解放させたかつたに違ひない。併しながら、當時の朝廷には、全國の大小氏族に對し、絶對的に奴隷の解放を命ずるだけの實力がなかつた。改革の背後に彼等の叛亂を鎭壓するに足るだけの兵力がなかつた。故に一命を施き、一制を行ふ毎に大氏長の顔色を窺ひ、戰々兢々として其怒に觸れざらんことをのみこれ努むるの有様であつた。全國の土地を公有とし國司を派遣して之を統轄させたのは立派であるが、舊來の領主、即ち國造をして之を監督させたり、國造をそのまま郡司に任命したりしたのは見苦しとも見苦しい妥協であつた。人民の解放とても其通り、各氏長の私有した奴隷に對しては一指も觸れず、氏の子を直轄するにしても、氏長と氏の子との私的從屬關係を絶ち、其公私の權利を保護する法律を與へなかつた爲に、奴隷は勿論、氏の子の解放すら、完全に行はれなかつた。

奴隷解放の表裏二面

斯くの如く、朝廷は法律命令により大小の豪族に奴隷を解放させるといふことは爲し得なかつたけれども、優渥なる勅諭により、若しくは皇族自ら率先して範を天下に示すことにより奴隷の解放を奬勵されたことは其後も幾度であつたかを知らぬ。併しながら、皇室がかく奴隷の解放を勸奬されたのは、奴隷の爲といふよりも、寧ろ之によりて豪族の勢力を殺ぎその跋扈を制せんが爲であつた。其處で豪族の大多數は頑として詔諭を奉ぜず、それぞれ地方に割據して益々奴隷を使役し、或は新田の開墾に、或は他の豪族との戰爭に、重賞をかけて、彼等を鼓舞激勵したので、彼等も感奮興起して主君の爲に努力し、身命を措まず忠勤を勵んだ。玆に於いてか、領主と農奴との間に於ける特殊の階級的觀念は、世の變遷につれて漸次に薄らぎ行き、地方制度の緩解に連れ、豪族が兵力を用ふること愈々盛なるに及んで、奴隷としての差別的待遇は自然に其跡を絶つに至つた。即ち、農奴の中の體質強健にして膂力衆に優れたるものは郎等として拔擢され、生きた盾として主君及びその一族の前に、立たせられた。さうして身命を賭して殊勳を立てたものがあれば身分を引上げて家の子（即ち氏の子）の階級に置き、姓を加

へ、名を賜ひ、以て他を激勵するの資とした。

然るに一方中央政府の地方官、即ち國司の支配下に置かれた農奴の運命は何うであつたか。何時の世でもさうであるが、地方官の人民を見るはとかく旅客の宿驛の人に對するが如く、少しも永遠の利害に就いて考へない。彼は己が在任中、人民から一粒でも多くの穀物を取立て、一尺でも多くの布を徵發して上司の御感に與り、榮轉の途を開きさへすればそれでよいのである。人民が何んなに困らうともそんなことは構つて居られない。中には短い任期の中に己れ一生の計を立てようとして搾れるだけ搾らうといふのもあらう。搾る方法としては其管內に於いて最も肥沃な土地を橫領したり、官から窮民に貸與さるべき租稻を着服したり、上司に賄賂して中央政府に輸すべき公租を胡魔化したり、有らゆる方法を以て私腹を肥したけれども、何がさて交通の不便な世で、淀川の河口から京都に上るだけで十三日、土佐から京都に上るには、風波その他の故障を考へて百日を豫想しなければならなかつた。又、常陸の國府から京都に上るに之も五十三日を要し、都鄙の間は全く隔絕し、一たび赴任してしまへば國司と云つても、實は國主同樣で、何をしたとて、人民の愁訴が闕下に達するといふことはなかつた。

其處へ初めの公有制度が追々に緩み、代々の天皇が別に勅を以て賜田を下される、天武天皇の時には功田の制が起る、元正天皇の時には三世一身の開墾地私有制度が始まると云つた有樣で、從來の豪族はもとより、國司も、郡司も種々な名義を構へて私領を造り、任期が滿ちてもその土地を去らず、權貴に託して再三、任期の延長を請ひ、果ては領主として地方に割據するやうになつた。地方がかやうな狀態の下に、在る處へ、中央政府から新に國司として赴任を命ぜられても實際は居るに所がない。大化の新制以前から土著して居る豪族があり、その間へ、國司の土著したのが割込み、更に新しい國司が赴任するといふのであるから、地方官の巾の利かなかつたことは察するに餘りある。其處で、後になると國司は任命をうけても、地方に赴任しない。目代といふものを派遣し、地方の豪族どもと折衝させて、好い加減に租稅だけを徵發することゝなつた。かやうにして最も弊害の多い代官政治が起つた。國司自身が赴任してさへ、任期に制限があつて見ると、其地方の人民に對する態度が冷淡になり易い處へ、目代となつては更に甚しい。取るものさへ取れば跡は野となれ山となれといふのであるから、人民は皮を去り、爪を剝ぐやうにして搾取される。それもよいとして、從來の豪族と、國司の土著したのと、新しい國司の代官と二重にも三重にも搾取されるに至つては、如何に働いて搾取され

だけの運命を負うて生れて來た農奴の子孫も、安んじて其土地に生を托することは出來ない。果ては土地を出奔し、男女相率ゐて山窩剽盜となり、遂には京都にまでも浸入して盛に劫掠を行ひ、畏れ多くも宮闕をさへ犯し奉るものがあるに至つた。延喜の治といひ、天曆の政といひ、日は管弦の響に暮れ、夜は朗詠の聲に明けてゆく平安朝も足一たび宮闕の外に出づれば、其處は全く鬼と强盜の世界であつた。

三莊太大、大江山、茨木童子、女賊瀧夜叉姫

其處へ行くと舊來の豪族は農奴を自分の私有財產として大切にすることを知つて居た。勿論彼等とて、農奴に對し、積極的に生活改善の慾望を充足させたわけではない。併し國司や國司の代官がしたやうに、彼等が土地を捨てゝ出奔するまでに苛酷な誅求をすることはしなかつた。牛馬の持主が、牛馬を勞はり、馬を憐むことを知つて居るやうに、舊來の豪族は、土地に附いた『寶』として、程よく農奴を愛撫することを知つて居た。其處で人民は齊しく國司や、國司の代官を厭はず、相率ゐて舊來の豪族に走つた。

されば此頃となつて代官の最も困つたのは人民の流離といふことであつた。彼等は窮餘の一策として盛に新奴隸の買入れをやつたらしい。勿論錢で買ふのでなく、少しばかりの布か、穀を出して買ふのであるが、誘拐者は喜んで諸國から若い男女を捜つて來た。今でも口碑に殘つて居る『三莊太夫』の話が明かにその輪廓を描いて居る。三莊は三個の莊園である。太夫は即ち其莊園の持主である權貴から莊園の管理を託された代官である。然るに此代官は、餘りに人民を虐待酷使し過ぎた爲に、人民が流離して新田の開墾や、作物の手入に事を缺くやうになり、誘拐者の手から新しい奴隸を買入れて之に苛役を命じたものと見える。かく觀察して來ると『三莊太夫』も唯のお伽話ではない。

『翁草』の著者は百姓一揆のことを記して『上古は知らず、中世にも野武士といへるありて落武者を剝取り、或は討取つて黨を結びしことも見えぬれども、それとは主意ちがひ、今の如きは應仁の頃より始まる』と云つて居るが、此頃の山窩草賊は決して落武者を剝取ると云つたやうな性質のものではなく、立派な百姓一揆であつた。陽成天皇の時には筑後の國司が殺され、延喜の治を以て稱せられる醍醐天皇の時でさへ、安藝の前國司伴忠行、上野の國司藤原厚載が百姓一揆の爲に殺されて居る。さうして一條天皇の時には之等の草賊が京都に入つて權貴の邸宅を襲ひ、財貨を掠め、婦女を奪ひ、果ては宮殿司廳に放火す

るなど兇惡の限りを盡した。都の人は之を「鬼」と呼んで恐れおののいた。

『袴垂保輔』といひ、『鬼童丸』といひ、『酒顚童子』といひ、『茨木童子』といひ、今日夢のやうな童話の材料として取扱はれて居るものも、當時に在りては、餘りに慘ましい現實であつた。農奴といひ、百姓といふを以て、直に今日見るやうな營養不良の小作人を聯想してはいけない。大伴氏や、物部氏の部下として戰場に驚くべき勇力を現はして居るものは多く奴隷である。併しながら之等の勇猛な、剛力な奴隷とて決して好んで山野に漂浪し、好んで劫掠を事としたものではない。彼等と雖、常作する所のない生活の不安は善く知つて居た。飢餓の辛さ苦しさは沁々味つて居た。それでホンの僅かな給養でも、召抱へようといふものがあれば直に猫のやうに柔順なものとなり、尾を振つてその主人の前に忠勤を誓ふのであつた。之は少し後れた鎌倉時代のことであるが、後鳥羽院の時、大殿(おほとの)、小殿(こどの)といふ盜賊の首魁があり大殿が捕へられて後、小殿も命を知つて高倉判官章久の許に自首して出たのを、源康仲その勇力に感じ命乞ひをして郎等とし、更に五十石の祿で之を德大寺大納言に推薦した。處が小殿はいたくその知遇に感じ、誠意を盡して主君に仕へ、大にその能力を發揮したといふ面白い物語が『古今著聞集』に據つて居る。

殊に注意すべきは、此頃の山賊盜賊に多く婦人の立交つて居たことで、女賊のことは『今昔物語』にも『古今著聞集』にも、著しく現はれて居る。農奴の土地を離れて流浪したものとすれば極めて自然の現象である。相馬の古御所に女賊『瀧夜叉姬』を配した淨瑠璃の作者が、材を此邊に取り、時代の空氣を現はしたものとすれば、之も面白い。

かやうにして國民の實際生活に根基せぬ羅馬的の郡縣制度は、奈良朝の頃から先づ崩れ初めて平安朝の末に至ると、モウ豪族割據の形勢が漸くにして成り、新しい封建制度の質が牢乎として拔くべからざるに至つた。源頼朝はかくして概略出來上つた日本の封建制度に、釘を打込むだけの使命を帶びて現はれた。

國民の經濟生活が未だ郡縣制度を施行するに足るほどに進步して居ぬ。交通の狀態にしても、貨幣通用の事情にしても、當時の日本は未だ何と云つても自給自足の封建制度を至當とするの現狀に在つた。朝廷も貨幣のことには早く着目されたものと見え、外國の制度に倣つて新貨を鑄造し、或は外錢を輸入し極力之が通用を奬勵されたけれども、一般人民は貨幣を嫌つて手にも觸れず、依然として物々交換の生活を營んだので、郡縣制度の施行は此點からも、多大の困難に遭遇し、世の中は、刻々

封建制度の皆に傾いて行つたのである。賴朝の出現により封建制度が固定して『安堵』の思ひをしたのは諸國の地頭ばかりでなく、國司や、國司の代官の苛政に苦しみ拔いて居た百姓も地頭以上に此新制度を歡迎したに相違ない。

八幡船の横行と都市の萌芽

かやうにして國民の實際生活に相應する自給自足の封建制度は成立した。鎌倉幕府の基礎が定まつてから、室町幕府の末に至るまで、支配者の階級、即ち地頭と地頭との間には新舊勢力の爭ひが絶えなかつたけれども、被支配者たる百姓の階級にはその生活にも、其心理にも何等取立てていふほどの變化は起らなかつた。地頭間に於ける新舊勢力の衝突は初めに賴朝の定めた地頭（御家人）と、承久の亂、文永、弘安の役を經て北條氏の新に補した地頭との間に先づ生じ、それが嵩じて元弘の亂となり、建武中興の番狂はせから延いて宮方と武家方との對立となつたけれども、領主と農奴との二階級を以てする社會制度、經濟組織の根本には何の變化も動搖もなかつた。

然るに此本補地頭と、新補地頭とが宮方と武家方とに分れ、鎬を削つて爭つて居る間に、後に至つて、武士の土著制度に大動搖を起し延いて農奴の地位に大變化を生ぜしむべき二つの注目すべき事實が成長しつゝあつた。その一は八幡船の外國貿易であり、他の一は、大軍隊の往來に刺戟された内地交通の發達及び、都市の萌芽である。

八幡船はもと瀨戸内海から九州の近海に出沒して、官船を剽掠したり、津々浦々を荒したりした海賊から起り、禪僧の往來から始まつた宋との交通、文永、弘安の役などに刺戟されて朝鮮、支那の沿海から、遠くは安南、呂宋の邊にまでも乘出し、盛に劫掠を行つたものであるが、彼國の事情に通ずるに從つて普通の貿易船となり、室町時代に入つては、周防の大内氏を始め、宗、大友、小貳、島津等西國の諸大名皆大船を浮べて明との貿易に從ひ、大に殷富をなした。此海賊がノースメンの北海、バルト海に於ける飛躍と殆どその揆を一にし、佛蘭西革命に先つこと百年にして見事に中産階級の革命を完成したアングロ、サクソンの前身であるヴアイキングと全く其勇敢趫捷の點を同じくして居るのも不思議と云つてよい。

西洋の都市の發達が十字軍の往來から起つたと同じやうに、日本の都市の發生も十字軍と時代を同じくした大軍隊の海道往來に基因して居る。源平時代は尚ほ騎馬戰が主であつたから、軍隊の組織も大して大規模のものではなかつた。併し賴朝が初めて上洛した時、遠州橋本の宿では遊君が打揃つて出迎へたと

いふから、此頃から東海道の宿驛はポツ／＼と賑つて居たものと見てよろしからう。文永、弘安の役から騎馬戰が廢れ、歩兵を以て軍の中堅とするやうになつてからは、鐵砲は未だ使用されなかつたけれども、軍隊の規模は著しく大きいものになつて居た。永享十年八月、將軍義教が上杉持房を大將として持氏追討の師を起した時は其兵十數萬騎と註せられ、二十三日に京都を出發して先陣が濱名の橋に達した時、後陣は尚ほ尾張の熱田にあつたと記述されて居る。兵數には幾分の割引を要するにしても、軍隊の大規模となり、其往來の大變な騷ぎであつたことは、十字軍の結果として地中海の諸港はもとより、內地交通の要衝までが一時に都市として發達した事實が聯想される。

貨幣經濟の發達と土一揆

西南日本からは外國との通商貿易により貨幣の流通、貨物の取引が盛に起つて來る。內地は內地で、大軍隊が海道を往來する度に、その宿驛は一區每にのびて行く春の若草のやうに發達する。さうして此二つの原因の落合つた處に、貨幣の流通といふ吾々の史的觀察からすれば、大變な事件が發生した。從來は朝廷が如何に勸奬されても、一般人民は錢を嫌つて顧ようともしなかつたものが、斯うした國民生活の進歩につれて、それが苦もなく流通するやうになつて來た。貨幣が通用するから旅行が樂になる。旅行が盛になるから交通が開ける。交通が開けるから商業が盛になる。商業が盛になるから、國民が益々貨幣の便利を知ると云つたやうな譯で原因と結果とが無限に循環して行つた所に、東西ともに歷史家から暗黑時代と呼ばれて居る中世紀の暗澹たる空を破つて近世文明の美しい光が輝き出た。

貨幣が流通し始めると、もう自給自足の封建制度は保たれぬ。武士も土地を離れるが、農奴もその幾分は土地を離れる。さうして其處に領主とも附かず、農奴とも附かぬ別個の新しい階級が生れる。それが商工中産階級である。

室町の末に至り、近畿に土一揆と稱する暴民が蜂起し、質屋（土倉）酒屋其他の富家を襲擊して狼藉を極め、政府に『德政』の施行を迫つたのは、之を民心の變兆として擧げんには、局面餘りに狹小の嫌ひはあるが、當時質屋、酒屋などの富家が既に農民の怨府として破壞された所を見ると、地方は兎も角も、京都及びその附近には、モウ貨幣が滯りなく流通し、商賈が既[illegible]として發達して居たことを窺ひ知ることが出來る。

義政の時、幕府の財政窮乏の極に達し、京都の質屋に課稅して之を主要の財源としたが、餘りに德政を頻發した爲に、質屋の倒產するものが多く、大に收入を減じたので、更に三百二十

七戸の酒屋に課税し、毎戸二貫八百文を徴收したとある。又、義政の夫人日野富子は幕府や諸大名が斯くして財政の窮迫に苦しみ、戰爭の被害や重税の負擔や飢饉の襲來で萬民に生色なき折柄をも顧ず、冷然として私財の蓄積に努め内裏の修理に藉口して京都の入口七ケ所に關を設け、夥しき收入を私した外に、近江の料所舟木にも關を設けたが、此所からは毎月六十貫の收入があつたといふ。而も富子はかくして蓄積し得た私財を、諸大名に貸付けて利子を取り、米倉を建て、米穀を買占め、其騰貴によりて利を營まうとした。畠山政長は富子から千貫の錢を借りて居たといふ。曾ては朝廷が貫典を以てその通用を奬勵されたにも拘らず、何人も振向いて見るものさへもなかつた錢が、此女流政治家により斯やうな醜態までも惹起されて居る所を見ると、今更のやうに貨幣經濟の發達の速かなるに驚かざるを得ぬ。

當時農民が蜂起して質屋、酒屋等の富豪を襲ひ、僭上にも幕府に對して、徳政の施行を強訴することが出來たのは、必ずしも人民の權利が認められたからではなく其背後に諸大名の軍役に疲れ、借財に惱むものがあつて絲を操つて居たからであらう。融通の出來ぬ土地を財產とする諸大名と、融通の自由自在な金を財產とする町人との暗鬪が既に此時に萌して居る。

鐵砲渡來の五大影響

近世の始、中世の終に至つて西洋の船が日本に渡來するやうになり、導線發火の小銃を傳へた。鐵砲の渡來が日本の戰術兵法の上に與へた影響は夥しいものであつたには相違ないが、併し近世の社會的進歩を一切鐵砲の渡來に歸するのは甚しい誤りである。鐵砲の渡來する以前に貨幣の流通といふ大きい事實が起り、それを根本原因として日本の社會は既に一大變化に面して居た。其處へ天文十二年に西洋から鐵砲が渡來し、それが驚くべき勢を以て全國に普及し、既に進行しつゝあつた社會制度の變革に非常に有力な動力を供給することとなつた。云はゞ春が來て、雪が消え、風が和らぎ、草も木も芽を出しかけて居た處へ、暖い雨がやつて來たやうなものである。鐵砲の渡來によつて促進された社會制度の變革は大體次のやうなものである

（一）既に大組織になりかけて居た軍隊を愈大組織とし、個人の格鬪力よりも、多數の團結力の方が重大視せられるやうになり（春日山日記、甲陽軍鑑、紀侯言行錄）從つて英雄豪傑の拔駈の功名といふものが極端に排斥せられ、（或場合は叛逆罪として）足輕（郎等）の地位が大に高まつたこ

と。

（二）戰術、兵法が根本的に變つた結果、門地とか、系圖とかいふものに拘らず、廣く社會の情僞に通じ、多數の人心を收攬するに長けたるものが新人物として拔擢せらるることとなり、元龜、天正の頃に至つては最も門地の低い階級から、幾多の偉材が現はれた爲に、舊い階級思想、差別觀念が殆ど全く一掃せらるるに至つたこと。

（三）大軍隊組織となり且つ鐵砲が使用されるやうになつた結果、小地頭の獨立が困難になり大地頭に併合せられるか、干戈を捨てて土豪の生活に入るか二者其一を擇ばなければならなくなつたこと。

（四）鐵砲渡來の結果、築城法も大革命に遭遇したが、城地選定の標準が根本的に變化し、それが前に述べた都市發生の傾向と合致した爲に、江戶、大阪、名古屋の如き新都市が急激に發達し、世を經るに從つて諸種の金融機關も整ひ、商業制度もなり、商工中產階級が蔚然として勢力をなしたこと。

（五）戰術及び築城法の變化に伴ひ、一家中の武士を城下に集中する必要が生じた爲、さらぬだに土著制度の崩れかけて居た封建制度はいよ／＼有名無實のものとなり、領主も其家臣も、全くその采地に對する興味を失ひ、町人階級をして愈乘ぜしむるの原因をなしたこと。

斯やうにして、地頭の中の一部分は大地頭との存立競爭に堪へ兼ね、戰爭の結果、兜を脫いで大諸侯の軍門に降るか、自ら干戈を捨て土豪として歸農するか、二者その一を擇ばなければならぬ運命の上に置かれた。此小地頭の土豪として歸農したものが、幕末に至り所在に蹶起して尊王攘夷の說を唱へ、藩論に拘らず、只管倒幕の一路に驀進し、維新の後は自由黨となつて藩閥政府に反抗し、板垣伯の隱退した後、伊藤公によつて、政友會に繼承せられ、漸次土豪階級としての色彩を脫し、原氏の時に至り、其最も資本家黨たる色彩を鮮明にした。

下總の千葉黨と土佐の長曾我部黨

下總佐倉の木內宗五郎が沼東三十六ケ村の割元名主として農民を代表し、新稅法による收斂の苦痛を領主堀田正盛の江戶邸に訴へ出で、聽かれざるに及んで時の老中久世大和守に直訴した事件は、日本の代表的民權運動として、自由黨の有志達から鬼の首でも取つたやうに囃し立てられたものである。それも無理はない。佐倉宗五郎の千葉黨と、自由黨とは全く兄弟分である。宗五郎はもと千葉氏の重臣、木內福左衛門といふものの後

である。千葉氏が小田原の北條氏と共に亡んで後源左衞門は附て其鷲山城の城代であつた關係から、下總國公津村に土着して世を忍んだ。之はひとり木內氏のみでなく、小田原落城の後關八州が家康の領有に歸した當初は、千葉氏の重臣どもが房總の野到る處に土着して、農民との間に舊來の主從關係を持續して新領主の威令は容易に行はれなかつた。自由黨系の政客であつた板倉中氏の如き最近物故した、岩崎家の女婿木內重四郞氏の如き、皆千葉黨の家から出たものであるといふ話を目賀田種太郞氏から聽かされたことがある。かやうに千葉の重臣どもは房總到る所に土著して、隱然小地頭の如き勢力を擁して居たが、德川氏は初めから之に壓迫を加へず、寧ろ之を懷柔し、之を利用して民政の資としようとした。之が源平時代であると、苟も敵の遺孽となると、根掘り葉掘りして之を檢擧し、片端から、首を刎ねてしまはなければ氣が濟まなかつたのであるが、近世に入ると前に述べた如き事情で、戰術兵法の上に大革命が起り、一敗地に塗れた以上は、最早再起はむづかしい。系圖と門地とで、兵を擧げることの出來たのは遠い／＼源平時代の夢で、今となつては、さういふもので大勢を動すことは出來ぬ。尤も昔とて系圖や門地だけで人が動いた譯ではないに極つて居る。動くべき內外の理由が十分に備つた處へ、其頃の人心に未だ強い反響をもつてゐた家の系圖を出して見せたり、大義名分の旗を揭げて見せたりしたので天下が靡然として響應したのである。併しそれにしても、其頃既に鐵砲とか、大砲とかいふ武器があり、後世のやうに交通が發達してゐたら、縱令一部の人心が響應したにしても再擧の成功は覺束なかつたのである。然るにその頃はさういふ武器がなく、郡鄙の間が隔絕して居たので、五百六百の手兵を集めて、險阻狹隘により、天下の兵を引うけて一ケ月でも二ケ月でも支持することが出來た。かくて一ケ月でも二ケ月でも支へて居る間には、檄文が四方に飛んで所在に義兵が起るといふので、容易に天下の形勢を左右することが出來たものであるが、近世になつてはそれが出來ない。其處で既に主家の一族が亡び、城も開渡して、家來は散々亂々になつてしまつたものを、昔のやうに草を分け瓦を捲つて索ね出し、根を絕ち葉を枯らさうとして却つて民心の離反を買ひ、禍を後に胎すといふやうな愚策はとらなかつた。餘孽が寺に入つて頭を圓めるとか、土着して百姓になるとかすれば征服者は見ても見ぬ振りをして過したものである。天正十八年小田原落城の後、德川家康が秀吉から關八州に封ぜられ、佐倉に久野三郎右衞門を置いてから寛永十二年堀田正盛の入城に至るまで前後四十有六年、此間佐倉は七代の領主を代へて居る。處が、此七代四十六

年の間、佐倉の統治者は曾て千葉氏の税法に手を觸れなかつた。之は關東の人心が特に兇暴で、亂を好むの風があつた上に、千葉黨の勢力の牢手として拔くべからざるものあるを憚つた結果に相違ない。文祿元年から、慶長五年まで佐倉の城主であつた武田信吉の如き、その餘りに千葉黨を懷柔し過ぎたといふのである。木内氏を取立てて、沼東三十六ケ村の割元名主とし、之に三人扶持を給したので、主家から注目されたのも此武田氏であつた。慶長五年には關ケ原の戰爭が家康の勝利に歸し天下の形勢も略定まつたので、慶長八年家康は先づ新に關八州の税法を定め、漸次之を實施して領内の税法を統一しようとした。土井利勝は慶長十五年から寛永十年まで二十四ケ年間佐倉を領し、其間には、大阪も亡び、天下は完全に徳川氏のものとなつたのであるが、それでも倘千葉黨の勢力を憚つて、新税法を實施しようとはしなかつた。かく代々の領主が千葉黨を憚り、一意その懷柔に努めた間に、春日局の縁故で取立てられた俄大名の堀田正盛が封ぜられると、突如として舊法を廢し、家康の新法を施行して一歩も假借しなかつた。堀田の方にも新規御取立ての大名だとて馬鹿にするなといふ氣の張りもあり、馬鹿にされはせぬかといふひがみもあつたらう。千葉黨の方にも、何を生意氣な成金大名奴といふ腹があり、三十六ケ村の名主どもはいよいよ木内氏を推して總代とし、江戸邸に對して猛烈な税法改止の運動を起すこととなつた。堀田が手を燒かねば、誰かゞ一度は熱い思ひをしたであらうし、佐倉は初めから一騷動なしには納まらぬ所であつた。それにしても佐倉の騷動で強く領主に反抗したのは、所謂水呑百姓の階級ではなく、後に板垣伯の吹き鳴らす民權論の喇叭に糾合せられて、自由黨の大傘下に集つた郷士とか土豪とか、名主とか、大庄屋とかいふものの階級であつた。千葉黨は地方に於ける中産階級の代表的なものである。

下總の千葉黨と全く其揆を一にするもので、土佐に長曾我部黨といふのがある。土佐は人も知る如く、もと長曾我部元親の割據した南海の別天地で此の國境には魚梁ケ瀬、劍、東西祖谷、三傍示、白髮、別子、甕ケ森、石槌、鬼城などの峻山峻峰が屏風を立てた如く東から西に連亙して内地との交通を遮斷し、南は所謂九十九洋の荒海、遠淺で風波が荒く、海岸線に屈曲がないので、港灣らしい港灣は唯一つ高知の浦戸があるのみである。斯様な國柄である所から土佐は攻めるに難く、守るに屈強の要塞をなし、剰さへ險惡急峻な大自然の中にはぐくまれた土佐人の氣質はいやが上にも勇猛精悍で、之を屈することは容易の業ではなかつた。長曾我部元親が、四國の中でも最も邊僻な、食糧に乏しい土佐を根據として其の威を全島に振ひ、殆ど

之を平定せんとするの概があつたのは、全く此峻嶮なる土佐と、勇悍なる土佐人とのお蔭であつた。

されば、關ヶ原の戰後、徳川家康が、元親の子、盛親を京都に拘禁し、井伊直政を派して土佐を平定させた時でも、長曾我部氏の殘黨は所在の山々谷々に立籠り、主家の再興を强訴して止まず、流石の直政も容易に之を鎮定することが出來なかつた。長曾我部黨の勢力は此時に始まり、後世山內氏の藩政に纏繞して牢乎拔く可からず、幕末に至り藩論を練磨し、薩長の討幕主義者と提携して明治維新の大業を輔翼し、土藩をして薩長と其名を齊しうせしめたのは、全く此長曾我部黨、土藩の稱呼に隨へば、輕格の働きであつた。

大砲で鎮壓した瀧山一揆

元和元年夏の陣に盛親が亡び、長曾我部氏の一族が悉く誅に伏して後も、土佐には舊主の恩顧を思ふ豪族どもが在々所々に立籠り、遠州の掛川から移封された山內氏の命を奉ぜず、一豐も之を懐柔する上に非常な困難を感じた。

一揆の最も頑强を極めたのは、本山村の高石左馬助と稱するものである。高石氏は後に赤穗に仕へた大石良雄の祖先である。本山村といふのは土佐國長岡郡に屬し、高石の家は土居（土爲に作る）から東方十五六町下津野といふ所に在る。吉野川上流の谷で懸崖絶壁屏風を立廻したる如く、急流奔湍に沿ひて纔に通ずる所、所謂一夫以て萬夫を支ふるに足るの天險である。高石左馬助は長曾我部氏の頃、北山の內で給田八十石を領したものであるが、その後隣境を併合して五百石程の土地を我ものとして居た。山內氏移封の翌年此地が山內刑部の支配となるに及び、刑部も左馬助の頑强はよく知つて居たので、懐柔の意味で本山で別に千石を給するにより、北山の分は一時代官所に預るべし、その代り、租税は御法通り上納せよといふので、元和八年十一月家臣に命じて之を督促させた。處が長曾我部元親の頃は戰國の習ひとして、手柄次第、所領は持切りで、租税を徴せぬ所が多かつたものと見え、高石は之を以ての外のことに思ひ、頑として命を奉じない。其處で刑部は本山村一郷に一人づゝの人質を取り、男女合せて三十三人之を高知に送つて更に租税の督促をしたけれども應じない。內々戰爭の用意に及び、遂に瀧山と云つて、土居から三里ほどの深山で、鳥も通はぬほどの難所、山の八合目ばかりに横十二三間、幅四間程の巖屈のあるのに立籠り、汗見川、大川內兩村のものをかたらつてそれ〴〵要所に配し、兵糧の用意はもとより女子供も山寨の中に取込めて鐵砲の玉込に使役し、山寨の下五十間ほどに萬を

以て材木を釣り、其上に大石を載せ、鐵砲に死角が生ずるやうになれば、それを切つて落す仕掛けにして、對手の來るのを待ちうけた。刑部も大に怒り、直に馬を馳せて敵陣に向つたが、さて容易のことでは打克てない。その中に此事が高知に聞え、野村因幡、山内掃部の兩人が手勢を引つれて加勢に來た。其處で三組のものが力を合せて嚴しく攻寄せたけれども、徒に死傷が多く、ホト／＼持餘した。止むを得ず大砲を用ふることになり、遠方から山塞に向けて鐵砲を發射したので、一揆も之には辟易し、濃霧に乘じて、山奥に遁去り、抵抗は止んだけれども、さて首魁らしいものは一人も縛に就かない。山男のやうになつて何時までも深山に隱れて居るので、北山五百石といふものは全く荒蕪地となり、山内家でも全く持て餘した。結局隣村豐永村の庄屋、五郎衛門の扱ひで、高石兄弟を除く一村のものには御咎めなしといふことになり、一同無事歸村して農業に就いたが、高石兄弟は元和九年の二月、雪の解けるのを待つて悠悠と讃州へ落ちた。多くの對手を殺し、散々に働いて命を完うした所を見ても、長曾我部黨の力といふものが、如何に屈し難きものあつたかを知ることが出來る。

金で買へた郷士の株

此長曾我部黨を根本的に瓦解したのは、山崎闇齋から蛙封と評せられた二代の忠義である。忠義は山内家歴代の君主中、稀れに見る剛情活議の人で、其信ずる所は何人の諫も容れず、斷々乎として之を實行し一歩も讓らざるの概があつた。一方に於い峻嚴苛酷な武斷政治を用ゐ、少しでも、抗抵干犯の色あるものは片端から刑戮を加へて假借しなかつたと同時に、歸順したものは之に士分の待遇を與へ、山内家の家臣として土着せしめた。玆に於いてか、所在の長曾我部黨は我も我もと相率ゐて山内氏に歸順し士分としての待遇を受けた。此時から土佐藩には輕格とか、下士とか云つて、支配者の階級にも附かず、又、水呑百姓の階級にも屬しない、一種中間のものが生じた。山内家譜代の家來で、遠州から移つたものは、上古の所謂氏の子、中世の所謂家の子で高知に邸宅を持ち城下生活をして居たが、二代忠義の時、新に山内家の家來の中に編入された長曾我部黨は、在來の土地に住み、在來の土地を領し、毎年正月二日に一度高知に出て、高坂城の馬場で、君前に馬術を演るすだけで武士としての格式を繋いで居たが、平日は全く晴耕雨讀、世の所謂郷士と少しも、變る所はなかつた。最も此輕格の中には追々高知に出で、城下生活を營み、極く低い役人に取立てられるものもあつた。輕格として山内家から給せられる祿はその家の株に附いて

居る石高に較べると今日の語でいふホンの煙草錢位のものに過ぎなかつた。例へば此輕格の出身である維新の志士、坂本龍馬の家はもと長岡郡瓶岩村字才谷といふ所にあつたが四代八兵衞守之の時高知に出て酒屋を開き、五代八郎兵衞正禎の時には藩廳に出仕して年寄役を勤めるやうになつた。七代の時八平直海といふものが家督を弟の八郎兵衞直清に讓り、自分は別に輕格の株を買つて本町一町目南側に一家を構へたが、此家には百九十七石入りの田地と別に山內家から給せられる十石四斗の祿米が附いて居つた。輕格としては身分が卑しく、士格即ち上士の前には何としても頭が上らなかつたけれども、收入の上から云ふと生中な武士は及ばなかつた。初め二代の忠義が輕格の身分を定める時には、之を百人に限つたのであるが、後には追々とその人數も增え、幕末に至ると、江戸に於ける札差、御家人等の株と同じく、金錢で賣買が出來るやうになつた。かく身分が金錢で賣買出來るやうになつたのは士の經濟が、金の經濟に兜を脫いだ何よりの證據で封建制度もモウ終焉に近づいたことを何よりも、雄辯に物語るものであつた。

輕格はすべて左傾した

階級制度の通則として、身分の差の近邇したものほど仲が惡い。それは少し身分の高いものが、少し身分の低いものと區別して取扱はれたいといふ小さい虛榮心、若しくは意地張りから起るので、奴隸にしても、奴隸を甚しく虐待したものは、身分の全然懸隔して居る貴族よりも、寧ろ普通の人民、若しくは、奴隸の中の良の部に屬するものが甚しかつた。軍隊で新兵酷めをするのは、下士よりも上等兵、上等兵よりも同階級の古兵である。部落を侮辱したり、迫害したりするのは、部落に遠く隔つて居るものよりも、部落と境を接して居るものが、最も甚しい。

土佐藩でも同樣の理由で、士格、即ち上士の階級は、特に其身分の相異を示したい意地張りから輕格のものを目の敵にした。士百姓、素町人となると全然身分が隔絶するので、餘り對手にもせぬが、輕格となると些細な事にも角を立て、理を非に曲げても押し通さうとした。此侮蔑、此迫害、それは實に輕格の人々の心魂に徹して忘れ得ぬ所であつた。

其處で嘉永、安政の頃に至り、社會の秩序を維持して居た幕府の紀綱が弛廢して來ると、此輕格の階級といふものは、藩論に拘らず飛出して尊王攘夷の說を唱へ、何でも好いから幕府を倒し、現狀を打破しようといふ薩長の志士に加擔した。薩長とても同樣で、身分の高いものは、舊來の秩序に眷戀して、佐幕

に傾いたり、公武合體主義を唱へたりして居たが、足輕若しくはそれに近い階級から新人物が飛出して盛に尊王攘夷を唱へ、それによつて現狀を打破し、幕府を倒さうと企てて居た。

土佐の輕格で藩論に反對し、薩長の對幕主義者と步調を合せて、熱心に尊王攘夷を主張したものは、坂本龍馬を始めとして、中岡愼太郎、吉村寅太郎、島本仲道、河野敏鎌、土方久元、平井收二郎などで初めは平井善之丞、小南五郎右衞門等がその首領の地位にあつたが、後には武市半平太がその牛耳を執るやうになつた。此尊王攘夷論者、若しくは討幕主義者に正面から反對したのは小八木五兵衞といふ頑迷固陋の守舊家で、舊例古格を墨守し、德川氏に忠勤を勵むより外には何も考へたことのない男であつた。其門閥家であつたことはいふまでもない。之は箸にも棒にもかゝらなかつた。

此他に討幕主義者と、佐幕主義者との中間を行く公武合體主義者があつた。公武合體主義の主唱者は輕格出身の吉田東洋である。吉田東洋は名を正秋、通稱を元吉といひ、父の光四郎は馬廻格であつた。其任命は二代忠義の時であつたといふから、輕格としては初めから破格の優遇をうけたものである。かやうにして東洋の胸裡には、モウ何時の間にか輕格としての反抗の血が失はれて居たものらしく、二十六歲の時、其才能を認められて船奉行に拔擢せられたのを初めとして、郡奉行となり、一時官を罷めて京攝の間に詩酒徵逐して居たが容堂から破格の拔擢を受けて大目付に任ぜられ、間もなく仕置役に轉じ、遂に藩政に參與するやうになり、容堂を說いて公武合體の溫和な改革主義に傾聽せしめ、熱心に開國進取の策を獻じ、之を施政の根本方針として實地に進まうとした。是より先、藩主容堂は小南五郎右衞門等の感化をうけて尊王攘夷の說に傾いて居た爲に、安政五年の大獄には、幕府の忌憚に觸れて謹愼を命ぜられた程どであるが、茲に至つて東洋の說に聽き、大に尊王攘夷派を壓迫するやうになつたので、東洋は武市半平太一味の燃ゆるが如き憤恚を買ひ、文久二年四月五日の夜城下帶屋町で那須信吾等の手に暗殺された。

東洋の死後其政策を繼承して、福岡孝悌、寺村左膳、神山左多衞等の同志と縱橫に畫策し、慶喜を二條城に說得して大政を奉還せしめ、一時見事に薩長の討幕主義を覆へしたものは東洋の甥の後藤象次郎であつた。後藤は板垣退助と共に立派な上士の出であるから、その公武合體主義に趨つたことに不思議はない。

茲に番狂はせは同じく上士の出身である板垣伯の對幕主義と自由民權論で、之は下士の階級から出た吉田東洋が公武合體主

義の主唱者となつたと好一對、やがて人事の複雜限りなきを示すものであらう。

明治六年の地租改正

板垣伯は元の姓を乾と云つた。乾は遠州天龍川の支流氣多川に沿ふた犬居村にその名が殘つて居るのに見ても分る通り、山內家譜代のチヤキ〳〵である。併し、此人は初めから薩長の對幕主義者と步調を合せ、後藤象次郎一派の公武合體主義に反對して居た。想ふにそれは後藤伯に對する假想敵關係もあつたのではないか。板垣伯の家は高知の中島町で、片町にある後藤伯の家とは極めて近かつたので、兩人は一歲違ひの腕白仲間であつた。それで後藤伯も板垣伯も吉田東洋の死後、齊しく拔擢されて大目付となつたが、板垣伯は後藤伯が武市一派の尊王攘夷派を壓迫したり、公武合體主義を唱道したり、極端に放慢な財政策を執つたりするが氣に入らず、間もなく大目付の職を捨てて江戶に赴き、專ら心を西洋の兵法に潛め私に事あるの日を期した。此間に後藤伯は福岡孝悌、神山左多衞、寺村左膳等と京都に出て得意の大芝居を打ち、見事に薩長志士の對幕主義を覆へしたが、朝廷には豫て薩長の討幕主義者と謀を共にして居る鎌足以來の英傑岩倉具視がひかへて居たので、忽ち其計畫の裏をかゝれ、形勢は急轉して、鳥羽、伏見の戰爭となつた。

若し此時板垣伯といふものがあつて土藩の爲に兵制の改革に任じ、薩長の諒解を得て居なかつたならば、土藩は明治政府から全く除外せられたのみならず、維新の大號令宣布の夜、藩主容堂が小御所の御前會議において慶喜の待遇問題で岩倉具視と激論を鬪はした行かゝりもあり、如何なる事態に陷つたかも知れなかつたのである。幸にして板垣伯があり、直に薩長と提携して東征の途に上ることが出來た爲に、土藩は危機一髮、恐ろしい落し穴の緣に踏止まることが出來た。かやうにして板垣伯は後藤伯の裏を〳〵と行き、何かな新しい局面を打開しようとして努めた形跡がある。

板垣伯は維新の後、西鄕隆盛の征韓論に贊成して官途を退いたが、國へ歸つてからも西鄕や、江藤や、前原のやうに政府の探偵政治に乘ぜられず、又、輕々に兵力を信ぜず、徐ろに天下の大勢を察し、民心の動く所を達觀して、明治六年の地租改正により激發された地方の中產階級、即ち鄕士、豪農の不平に著眼しつゝあつたのは、昨日までの武人とは全く別人のやうな出やうである。之を要するに板垣伯は後藤伯が一廉の政治家らしい顏をして京都の大舞臺に立ち、若しくは一廉の財政家らしい顏をして長崎の商法所や、大阪の藏屋敷を岩崎彌太郞に攞廻させ

て居る間だけ一介の武辨を以て甘んじ、土藩の爲に專心兵制の改革に任じて居たのである。京都の大芝居で後藤伯が一花咲かせ、それから餘り捗々しいことがないと見ると、今度は板垣伯が飜然武人としての生活を放棄して政治の舞臺に乘出して來た。さうして其自由民權論は、古澤滋、小室信夫、片岡健吉、林有造等の歸朝によつて、粉飾されたものであるにしても、その中心の著眼點、地方の鄕士、豪農を打つて一丸とし、明治六年、時の大藏卿大隈侯が租稅頭陸奧宗光をして行はしめた地租の改正で、彼等が著しく動搖して居るのに乘じ、旗揚げをしようといふ意を決したのは決して佛蘭西思想の飜譯ではない。若し之を飜譯と云ひ得べくんば、それは佐倉宗五郎のやつた新稅法反對運動の飜譯である。高石左馬助のやつた納稅拒絕運動の飜譯である。板垣退助といふ人は實に不思議な頭腦の持主であつた。

それにしても、かく後藤伯と板垣伯と兩々相對峙して進み、互に新しい工夫をして人の意表に出でた中に、後藤伯の守立てた三菱會社及び岩崎彌太郎と、板垣伯の守立てた自由黨とが火花を散して、戰つたのは何といふ皮肉であるか。

明治維新を解釋する土佐の三人物

土佐は不思議な國である。明治維新といふ中產階級の革命を完全にインタープレテートする爲に態々三個の人物を出してそれを各異つた方面に働かせて居る。一は坂本龍馬、二は板垣退助、三は岩崎彌太郎である。

（一）坂本龍馬は地方的中產階級の『感情』を代表し、自己階級の發展を妨げ久しく自己階級を脅迫して來た封建制度の殘骸を『破壞』する爲に猛進した。

（二）板垣退助は上士の階級に生れながら地方的中產階級の『智』を代表し、地方に散在する自己階級の實力を綜合して之を新しい社會制度新しい國家組織に適應する組織的の戰鬪力、即ち政黨として『建設』する事に努力した。

（三）岩崎彌太郎は地方的中產階級の『意志』を代表し、前記の二者がたどつたと全然別個の行程を經て、而も前記の二者が無意識に希望して居る、最後の目的を、最も直截に、最も簡捷に『體現』しようとして百折撓まず、有らゆる困難と戰つた。

岩崎彌太郎を守立つたものを大隈侯のみと思つて居る人があるならば、それは眞に三菱の歷史を知らないからである。岩崎彌太郎は土佐國安藝郡井口村の百姓の子で、初めその家は所謂輕格でも何でもなかつた。母が安藝の五藤家（山内氏の家老）

のお茶坊主、小野敬藏の女であることを考へ、有名な儒者岡本寧浦（安田浦の人）を小父に持つて居たことを思ふと唯の水呑百姓ではなかつたに相違ない。併し、二代忠義の時から認められた所謂輕格でなかつたことも確かである。ツマリそれ以下の浪人ものであつた。併し、安政元年彼が二十一歳で藩士奥宮周二郎の供をして江戸に出る時には、何ういふ都合によつてか彼は輕格の株を買つて居た。併し其邊の詮索は別として、彼が土着し、歸農した武士の子で、私のいふ地方的中產階級に屬するものであつたといふことは、彼が維新史の經濟的解釋を一身に體現して、僅々二三十年の間に日本一の大富豪に成り濟して居たゞけに頗る面白い事實であると思ふ。

彼は曾て小父高橋勝右衞門の世話で藩の國產方の下廻りを勤めたことはあつたが、それは官途の經歷などと取立てていふことの出來ぬもので、三十を過ぎるまで、依然井口村の貧乏郷士で全く失意の境涯に在つた。その彌太郎を取立てゝ、長崎商法所の留守居役に任じたものは實に後藤象次郎其人であつた。一體大藩の留守居役といへば家老格の人物が之に當るべきもので、現に彌太郎が赴任するまでは、後藤伯が仕置役といふ格でその經營に當つてゐた。處が、いよ／＼天下の風雲が急となり、自分が京都に上らねばならぬことゝなつた時、その後任に窮して彌太郎を取立てた。之は後藤伯が今まで長崎でやつて來たことを藩地の反對派に訐かれない用意であつた。馬廻り格の吉田東洋でさへ仕置家老になるまでには、船奉行、郡奉行、大目付などに歷任して居るのに彌太郎は、さうした履歷も經驗もなく直に長崎の留守居役となつた。併しながら留守居といふのは唯役目だけで彌太郎は依然井口村の郷士たるに止まり之に應はしい身分といふものがない爲に種々の故障を生じ、流石の後藤伯も之には困り果てた。其處で止むを得ず、藩主に申し出でて彌太郎を一躍馬廻格、仕置役といふことにして貰つた。英斷といへば英斷、無茶といへば無茶である。かくて彌太郎は仕置役に任ぜられると直に大阪の藏屋敷に轉じ、明治維新と同時に藩の小參事となり、大阪の留守居役といふ資格で事務を取つて居た。さうして明治四年の廢藩置縣と同時に、長崎時代から引繼いで來た公私の財產は勿論、大阪の留守居役として委託されて居た諸種の物產、現金、多數の船舶、地所、家屋その他一切の財產を擧げて之を個人のものとすることが出來た。勿論これには少からさる借金も背負はされた。併し一方に長崎時代から大阪時代にかけての土佐藩の財政に關する一切の重要書類は、其頃東京に居た大參事後藤象次郎の命令で、係の役人が之を高知の南河原といふ所で燒棄てゝしまつた。之が彌太郎の出發點

である。維新のドサクサ紛れに一介の郷士から大藩の家老格となり、更に明治四年廢藩置縣の時、借財もあつたが、併し莫大なる大藩の財産を盡く一個人のものとすることが出來た。彌太郎はその出發點に於いて既に表高二十四萬石、薩長と並び稱せられる大藩の富と力とを背負つて立つた黃金の大名である。併し二三十年の間に日本一の大富豪となり得たことに何の不可思議があらう。明治維新の後、彌太郎が大隈伯の庇護によつて利益を投げられたことも大したものであつたに相違ないが、世間の人は這個彌太郎の出發點に注意することを忘れてはならぬ。彌太郎の第一の恩人は大隈侯ではなくして後藤伯であつた。

幸徳秋水と福澤翁の身分及び思想

私は前に土佐は不思議の國であると云つた。然り實に不思議な國である。中產階級の仕事である明治維新を解釋するに最も都合のよい代表的の三人物を一藩で全部生み出したのは土佐ばかりである。併し不思議はそればかりでない。かくして中產階級の企てた近代國家建設の仕事が殆ど全部出來上り資本主義組織が成熟の域に入らんとする時、日本に於いて未だ曾て一度も歷史の表面に立つて働いたことのない第四階級、即ち上代の奴隸、中世の郎等、近世の水呑百姓、徒弟、職人職工の階級を代表し、改革の第一聲を揭げたものは、之も土佐が生んだ幸徳傳次郎である。德川家康が殺伐な人心を緩和する一策として正學を定めた朱子の學問には、「曾子眠翁」の思想が附着して居た。土佐を中心とする日本の地方的中產階級が、其政敵に對する戰爭の旗幟として輸入した佛蘭西流の民權思想には勞働無產階級の哲學である社會主義の思想が附着して居た。坂本龍馬といひ、板垣退助といひ、岩崎彌太郎といひ、幸德傳次郎といひ、何といふ皮肉な對象であるか。土佐は全く不思議な國である。

併しながら私は決して中產階級が土佐からばかり興起したといふのではない。例へば慶應義塾の福澤諭吉翁など、其新時代の文化を建設する上に於いても又舊時代の弊風陋習を破壞する上に於いても、維新の改革に致した功績の著大なる之を岩倉、木戶、大久保、西鄉、板垣等所謂元勳のそれと較べて少しも遜色を見ないのであるが、その志を立てた眞の動機は、土藩の輕格たりし坂本龍島、中岡愼太郎、吉村寅太郎等が士格の横暴に憤慨して起つたと同じく、中津藩に於ける上流階級の理不盡なる壓迫と凌轢とに憤懣措く能はず、歸りて再び鄕黨と相見えざるの決心を以て國を辭したのがもとである。(福翁自傳) 中津藩の階級は果して何に基因するものであつたか。私は不幸に

てまだ中津藩の古老に會つてそれを聽くの機會を有しないが福澤先生昵近者の談話によると、中津は大體五階級に別れ、福澤翁も、先頃物故した和田豐治氏も、五階級の中の最下位に屬したものであるとのことである。同じく階級といふ中に、官職の階級と、身分の階級とは大きに意味が違ふ。併し封建時代の常として之を區別して居る藩は極めて少く大抵は官職と身分とを一致させて居た。即ち家老の子は才智力量の如何に拘らず多くは家老となり、足輕の子は才智力量の如何に拘らず大抵足輕で終つた。故に中津藩の階級といふも、恐らく官職と身分との一致したものであつたらうと思ふ。又、身分の分れる原因は東西ともに、從屬の因緣に由ることで、それは千葉黨や、長曾我部黨の成立がよく其間の事情を物語つて居る。福澤翁の祖はもと信州福澤村の出身で、曾祖父友米といふ人の時に至つて初めて中津藩に仕へた。即ち福澤翁で僅に四代である。新參といふだけでも元老その他古參の階級から忍ぶべからざる壓迫と凌辱とをうけて居たこと、士藩の輕格に似たものがあつたであらうと思はれる。一體大村藩にしても、中津藩にしても、九州における小諸侯の家中に階級的觀念の旺盛であつたことはお話にならぬほどである。福澤翁の立志が階級制度の壓迫に基因して居るといふ自傳の敍述は維新史解釋の最もよい資料である。

明治初年の政治熱と實業熱

斯くの如く福澤翁は武士としては最も下の階級に屬し、上の階級から受ける不合理の壓迫と凌轢とを最も痛切に感じて居たのであるが、さて然らば根からの水呑百姓、根からの素町人といふものに對しては何ういふ考へを持つて居られたかといふに、之は所詮箸にも棒にもかゝらぬ。『豎子到底教ゆべからず』との觀念を持つて居られた。大平民主義の福澤翁、獨立自尊の福澤翁、痛言切語、時には情を矯めて舊來の武士氣質を笑殺罵倒された福澤翁の胸中に、最も熾烈な階級的觀念があつたといふことは如何にも受取り難いことであるが、實際は、素町人、水呑百姓といとゝモウ到底駄目であるといふ底意を持つて居られた。即ち上からは侮辱され凌轢されて來た翁が、武士道を笑殺罵倒する時には、經世經國の熱情の外に、曾て上の階級からうけた理由なき侮辱と、凌虐とに對する反抗の念が火のやうに燃えて居たことを忘れてはならぬ。併し、それと同時に、翁はまた水呑百姓や、素町人に對しては最も辛い當りかたをする武士階級の最下位に屬する人であつたといふことも忘れてはならぬ。

明治の初年慶應義塾に學生として學んだものはすべて士人の

不勉であつた。特に維新の改革に立後れた各藩の子弟が多かつた。其中に、唯二人平民の子が立交つて居た。それは犬養毅氏と牛場卓藏氏とであつた。翁は平民の子は遺傳の上から云つても駄目な筈である。平民の子が學問するなんど間違つて居る。併し犬養と、牛場とはさういふ中にも不思議に元氣で犯し難い所があるといふので、或る機會に兩人の素性を取調べて見ると、果して犬養は鄕士の子、牛場も苗字帶刀まで許されて居た大庄屋の子であることが判明したので、ヤツパリ素性は爭はれぬと物語られたといふことがある。

同じ頃のことであつた。翁は美澤進が酒屋の子であるといふことをきいて、酒屋の小倅が學問するなんど間違つて居る。國に歸つて濁酒でも造れと一喝を喰はされたといふこともきいて居る。

勿論之に就ては、翁がその頃西洋から新しく輸入された遺傳に關する學說など讀み、それに可なり强く動かされて居る時代であつたから、その方の割引も必要であらうが要するに翁には地方的中產階級の色彩の最も濃厚であつた。其處で翁の門下から出た秀才は、社會に送出されると、大かたは『實業』といふ美しい名に憬がれて資本主義建築の最も優れた、又最も忠實な技術師として働くこととなつた『實業』といふ語の起りは西南戰爭の後、政黨熱が勃興して、世人が餘りに政論や遊說に熱中し過ぎた反動で、當時『實業』方面に打つて出る人は、己達こそアノ空虛な政黨運動などとは全く反對の質實な、眞面目な道に向つて進むのだといふ誇りと自信とを持つて居たものである。然るにそれが今となつて犬養氏や、尾崎氏のやうに先生の訓薰を受けて政治方面に乘出し、十年一日の如く資本主義の前に『苦節』を捧げて來た老政治家と舞臺の裏で落合つた時の感想は何うであらう。

百姓一揆から民權運動へ

德川時代には百姓一揆といふものが隨分多かつた。中には天明年間山城伏見の文殊九助、丸屋九兵衛等のしたやうな、都市的中產階級の運動もあつたが、大部分は佐倉宗五郎によつて代表される地方的中產階級の運動で、ホントの農民、昔の語でいふ水呑百姓、今日の語でいふ小作人といふものは飢餓に迫つて暴動するか、鄕士、豪農の階級に利用されて竹槍席旗を押立てるか、孰れにしても自分自身で秩序あり、統制ある運動をすることは出來なかつた。

百姓一揆の方は佐倉宗五郎と時を同じうした若狹小濱の騷動(首魁松木莊左衛門)享和六年の羽州山形一揆(首魁落合村

平）寬延二年岩代桑折の一揆（首魁長倉村彥内）享保四年の紀伊國伊都郡高野山寺領の騷動（首魁戶谷新右衞門）天明三年の越後新潟一揆（首魁湧井庄五郎）延寶七年の上州沼田の騷動（首魁桃野村茂左衞門）享保五年の會津南山一揆（首魁小栗山喜四郎）元文三年の但馬生野銀山一揆（首魁小兵衞）寶曆六年の阿波の藍玉騷動（首魁高原村常左衞門）天保十三年の江州一揆（首魁大川平兵衞）といふやうに擧げて來れば數限りもない。併し、之等の農民運動は、其の原因から云つても首魁の性質から云つても千篇一律で、前に演繹した通りの軌道を規則正しく辿つて居る。

唯その中で佐倉の木内宗五郎一件は、事が幕府の一定した關八州の稅法に關係があつたゞけに局面が少し大きい。他の場合に至つては各藩の役人や、幕府の代官が、家康の教へて置いた百姓には贅澤を教へてもいかぬが、さりとて甚しく飢えさせてもいかぬ。有り餘らぬほどに、又饑えて亂せぬほどに搾取せよと教へたその手心を忘れたからで、之を民權運動として列示せんには餘りに問題が小さきに過ぎる。

佐倉宗五郎の一件と對比して面白いのは何と云つても前に述べた明治六年大隈侯と陸奥伯とでやつた地租改正である。維新の後、何とかして一定の稅法を立て、新政府の財政的基礎を固めなければならぬこと、之は當然の順序であつた。併し誰が此難問題を解決し得るか。日本も東北と西南とでは氣候も違ふ、地味も違ふ、物産も違ふ、それに各藩の稅法區々で、種々の習慣がそれに纏綿して居るのであるから、之は明治政府のやつた仕事の中で恐らく一番の難事であつたに相違ない。それを陸奥伯が大隈侯と相談して岩倉大使一行の留守中にバタ〳〵と片付けてしまつた。實に驚いた大英斷である。私は維新の改革の中で之が一番の急激な、殆ど亂暴に近い改革であつたと思ふ。其時租稅を課する對象として、地價（土地の時價ではない）といふものが出來た。此地價卽ち臺帳の制定が何うして公平に行くものであらう。明治六年を一期として、百姓一揆は到る所に起つた。邏卒を殺す、電線を切斷する、縣廳を襲擊する、實に恐しい騷ぎであつた。それを鎭臺といふ内地の人民を『假想敵』として設け置かれた兵隊さんが出かけて、片端から打殺してしまつた。

此鎭臺兵の放つた鐵砲の煙の消えた中から、自由民權といふ怪物が、簑笠の上に洋服を著け、竹槍席旗の代りに言論といふ武器を提げて躍出した。杉田定一でも、河野廣中でも、竹内正志でも、永田一二でも、之を要するに土地の素封家で、世が世なれば、佐倉宗五郎として働いた人である。杉田定一は越前國

波寄村の人で杉田仙十郎といふものの子、其家は慶長三年豊太閤檢地の時に、奉行伊藤丹後守により千百五十七石一斗三合之を反別として八十二町八反八畝一歩と外に山林幾百萬町歩とを書上げられた越前第一の豪農である。それで此杉田の家といふものは昔から福井侯の代官を凌ぐほどの勢力があつたもので、明治六年の地租改正の時には父子して縣廳に呶鳴り込み、明治十二年に檢地の仕直しをさせて足羽、吉田外七郡で毎年三萬八千九百六十四圓六十一錢（當時の金で）の地租を輕減させることに成功した

かくして勃興した民權運動は自由黨となり、政友會となり、最近官僚を驅逐して政府を乘取ることに成功したが、今となつては其地價も實際は幾十倍、幾百倍といふ騰貴で、反對に之を改正して値上する必要が生じて居るのであるが、議會には曾て此最も適切にして合理的な増税案が、政府の新しい財源として審議に上されたことがない。今度の普選で勞働無産階級の勢力が議會に現はれたとしたら、第一に提議すべきは地租の對象として明治六年に定められたまゝ一度も改正されたことのない地價の大修正であらう。土地臺帳の改造であらう。

資本主義政黨の三大分野

私が『浪人篇』を著した時、社會主義運動の頭目堺利彦氏はその序文を評して、君は『士族』の勢力といふものを餘りに重く見過ぎて居ると云つたことを覺えて居る。成る程私の説明のしかたも不充分であつたが、私が『士族の政黨』と云つたのは、以上述べた地方的中産階級の意味であつて、決して一般の武士階級を意味したものではない。私も曾ては西洋の歷史を日本の歷史に當て篏めて、町人階級、即ち都市的中産階級の勃興だけで明治維新を解釋しようとした。併し明治の政黨史をよく讀んで見ると、何うしても町人の力だけでは解釋の出來ぬ部分がある。薩長藩閥が室町時代の末から起り、徳川時代を通じて所謂百萬長者として榮えて來た京阪の門閥富豪（三井、鴻池、住友等）を兵站部として立てば、後藤伯や大隈侯は維新のドサクサ紛れに一躍して三井、鴻池に匹敵する程の大富豪となつた三菱を兵糧方として立ち、板垣伯は別に地方の郷士、豪農を糾合してその勝手元とするといふ有様で、大體の分野は維新の初めに既に定まつて居たのであるが、富豪を兵糧方として立つた大隈侯の改進黨（後の進歩黨　國民黨）にも多量の郷士、豪農が含まれて居り、藩閥が兵站部として利用した京阪の門閥富豪とて、元は郷士豪農から出たものであつた。

都市の發達に伴ふ町人階級の擡頭については是までも度々述

べて居るし、今茲に詳しく述べる餘地もないが、西洋の歴史で十字軍の苛役に堪へ兼ねて倒れた小諸侯が、都會に出て、有力な商人となつたやうに、日本の百萬長者も、水呑百姓や薬町人から成立つたものはなく、小諸侯が土著して農業に從事し、米の過剩の結果酒造を始め、酒屋で商賣の味を占め、それを本として種々の貨物を取扱ふこととなり、果ては江戸に出るとか、京大阪に出るとかして富豪となつたもので、其元はヤハリ土豪であつた。ツマリ豪農（地方的中産階級）から、豪商（都會的中産階級）への過渡期が酒屋で、酒屋といふものは日本歴史の上で餘程面白い研究項目である。

前に述べた土藩の志士坂本龍馬の祖先は明智光秀の一族、左馬介光春で、光春が江州坂本の城に亡びて後、妾の某なるものが、其子を携へて土佐に遁れ、長曾我部氏を頼つて長岡郡瓶岩村の才谷といふ所に土著した。坂本姓は江州の坂本に因んだものである。此才谷の坂本家は四代八兵衛の時（寛文）高知に出て才谷屋といふ酒屋を開業した。三井家の祖先は今も知る如くもと近江源氏の佐々木六郎高久といふものであつたが、享祿の頃、伊勢の松坂に土著して農に歸した。處が其子の高俊の時に至ると、元和年間先づ酒屋を手始めとして商業生活に入り、後には江戸に出て駿河町に呉服店を開くやうになつた。鴻池が尼子氏の臣、山中鹿之助幸盛の後裔で、主家滅亡の後、幸盛の二男善右衛門幸元が、攝津國鴻池村に土著したのに始まることは何人も知る通りである。幸元が造酒を業とし、清酒の醸造法を發明したといふことは有名な話である。かやうな次第で、鄕士、豪農といふものの中には造酒家が多く、隨つて自由黨は諸國の造酒家を網羅した形となり、明治十二年政府が西南戰爭の善後策として酒税の引上げを企つるや自由黨の別働隊として全國酒屋の團結が期せずして成立し、明治十五年の五月には酒屋會議といふものを大阪に開催して、散々に其筋を手古摺らせたものである。

かやうにして田舍から都會に移つた中産階級を哺育して今日の語で資本家階級と云はれるまでに成長させたものは何と云つても徳川氏の參覲交代制度と、江戸、大坂、京都・伏見堺、長崎等の大都市直轄制度とであらう。貨幣經濟の發達はそれでなくとも武士を領土から引離さうと引離さうとして居るのに、徳川氏が諸侯の掣肘策として制定した參覲交代制度は、諸侯をして益其領土に對する興味を失はしめ、多數の家來眷族を擧げて、江戸や、大阪の町人を賑はす爲の俸給生活者、即ち純然たる消費階級たらしめた。かやうにして因果は際限もなく循環して町人は彌々肥り、武士は益々痩せ、江戸に於ける札差、兩替

屋、大阪に於ける、藏元、掛屋の如き、全く武士階級の死命を制し得るのみならず、天下の形勢をも左右し得るものとなつてしまつた。(此詳細は他日に讓る)

鎖國令を發して貨幣の流通を國内にだけ限り、それによつて崩れかけた封建制度の形骸だけを維持しようとするほどに聰明であつた德川幕府が、何うして町人階級の取潰しを畫策せずに居られよう。淀屋辰五郎、中村内藏之助、錢屋五兵衛の缺所は個人の問題であるにしても、寛政の松平樂翁に端を發した儉約令の名による反都市的感情は天保の水野越前に至つて愈露骨となり、地方の振興、武士階級の繁榮の爲には縱令都會(御城下)は如何に衰微しようとも差支へなしといふ粉飾された德政令、醇化された一揆思想を露骨に發表するやうになつた。さうして冥加金の名による徴發若しくは收用が頻々として行はれるやうになつては、都市の中產階級も亦、地方の中產階級と同様に德川幕府を呪はざるを得なくなつた。

岩崎彌之助と松隈内閣

併し地方の中產階級は武士の片われだけに何と云つても戰鬪的精神にみち〳〵て居た。都會の中產階級も(此時はモウ資本家階級)薩長の兵糧方として引出され、手代を『宮様の御馬の前』に附して征東の途に上らせてからは、維新の改革に随分重大な部局を受持たされて居たが、その態度は何と云つても消極的であつた。其處へ行くと自由黨によつて代表された地方の中產階級は戰鬪力そのもので、德川氏の天下を覆へしてしまふと、今度は藩閥に突撃を開始したが、藩閥は巧にその鋭鋒を避けて、三菱を兵糧方とする大隈侯の改進黨にその地を讓つた。

自由黨と改進黨との正面衝突が始まつた。かくして兩者は水火の如くなつて爭つたが藩閥は常にそれを利用して漁夫の利を占めて居た。岩崎彌太郎が死んで弟の彌之助が三菱の主人公となり、表面政治に關係することを嫌ふやうに見せかけて、實は大隈侯を今一度世に出し、伊藤と聯立で滿腔の經綸を行はせに見たいといふ道樂氣を持つて居た。それは彌之助が明治十八年以後、外舅の後藤伯を手蔓とし、松方侯を經てメツキリ伊藤公と懇意になり、大隈侯と兩手に花の私交をつゞけて居たからである。

かやうにして伊藤公と大隈侯とは三菱を仲介として漸次接近しつゝあつたが、果然、果然、明治二十一年の二月には大隈が伊藤内閣に迎へられて外務大臣の椅子に就いた。大隈の推薦者は黑田であつたが、黑田の背後には松方が居り、松方の背後には後藤が居る。伊藤公が大隈侯と握手したことは、後藤伯の大

同團結以上に長閥を憤慨もさせ、又狼狽もさせた。長閥は奮つて猛烈に伊藤公を攻擊し、伊藤公は居堪らずして同年の四月樞密院に逃避した。其處で首相の椅子には黑田侯が直り、山縣公は監視の意味で內務の椅子に止まつた。彌之助は此內閣の時海防費十萬圓を獻じ、從五位勳四等に叙せられた。明治二十二年には憲法が發布せられ、翌二十三年には日本に初めての國會が開かれた。明治二十九年には日清戰役の功勞により、彌之助は正四位勳四等に陞み、男爵を授けられた。

日清戰爭の後、第二次伊藤內閣は三菱の諒解を得て戰後の財政を善くしようといふので渡邊國武を藏相の椅子から追ひ、三菱の親類の松方侯をその跡に迎へようとした。松方侯は此時もう何時の間にやら三菱の親類となつて居た。侯の次男正作氏が彌之助の長女繁子を娶つたからである。處が奈ぞ知らん此時松方侯と大隈侯との間にはチャンと默契が成立つて居り、單獨入閣は罷らぬといふ御宣託である。之は大石氏と犬養氏とが彌之助の意を受けて松方侯と大隈侯とを京都で會見させ十分に默契を成立させて居たからである。伊藤公も大隈を入閣させて又ぞろ長閥の總攻擊に遭ふのも面倒と卒然內閣を投出してしまつた。乃ち松隈內閣が成立した。私に云はせれば之が第二次三菱內閣である。此內閣の時岩崎家の女婿で、當時僅に二十九歲一個白面の書生に過ぎなかつた志村源太郎が工務局長に拔用せられた。彌之助は私かにシャンパンを拔いて此內閣の出現を喜んだと、彌之助に昵懇の或る名士が私に話してくれた。

彌之助が斯やうに暗中飛躍をして居る時、三井の方は何うかといふに、明治四十二年井上侯の世話で這入つた中上川彥次郎氏が、非常な大英斷を以て長閥との惡腐緣を絕ち、片端から整理をして行つたので井上侯の驚きはもとより、三井はスッカリ長閥の御機嫌を損じ、伊藤公の邸に親しく出入をして居た秋山定輔氏が『二六』で三井攻擊を始めるやうな情勢になつて來た。

資本主義的應仁の亂終る

明治三十九年西園寺內閣が、政友會の地盤に比較的利害關係の少い鐵道國有案を斷行して戰後經營を行はうとしたことは、松隈內閣以來、政界のことを我世とぞばかり望月の缺けたるともなく心得て居た三菱の激怒を買つた。何故となれば三菱は此時山陽、九州二大鐵道會社の大株主で鐵道國有案には絕對反對であつたからである。時の外務大臣加藤高明氏は憤然として職を辭し、三菱と政友會との間には猛烈な戰端が開かれた。世間から純粹の三菱內閣であると稱せられて居る今の政府に鐵道大臣である仙石貢氏は、當時九州鐵道に在つて三菱の利害を代

表して居たものであるが、鐵道國有が斷行されると同時に、三菱の外務大臣と稱せる豐川良平氏を味方とし、中野武營、片岡直温など三菱系統の實業家を中堅とする戊申倶樂部を組織し、政府の財政策に對して强硬な反對を聲明した。同時に三菱と桂公との間には最も濃厚な關係が生じて來た。西園寺内閣が『社會黨の取締緩慢』といふ名で毒殺されてから、三菱を背景とする桂内閣は四年の命脈を續け、猛烈に社會主義者を壓迫して遂に明治四十三年の大逆事件を迫出した。(大審院判決書)尋いで第二次西園寺内閣が成立したけれども、桂公が再び之を毒殺するに及び三菱と政友會との鬪爭は白熱狀態に入つた。從來情意投合の名の下に政黨を籠絡し得意の妥協政治を行つて來た桂公も、此上は妥協の途なしと見て同志會を組織した。大隈侯以來三菱とは切つて切られぬ關係ある進歩黨は別れて二つとなり犬養の喧嘩の對手である大石に伍した政治家は皆相率ゐて桂公の同志會に走つた。犬養と政友會との歩調は期せずして一致し更に犬養と關係の深い交詢社(慶應義塾出身者の社交倶樂部)即ち三井系統の實業家が擧つて犬養、尾崎の憲政擁護運動を援護するに及び、此戰爭は三菱對三井、早稻田對慶應の爭覇戰なるが如き奇觀を呈するに至つた。さうして時勢は桂公の同志會に非にして、政戰は全く憲政擁護派の勝利に歸し其間に大隈侯の出現等多少の紆狂はあつたにしても之を要するに桂公の後を承けて憲政會の首領となつた加藤子は、十年隱忍して、政友會の横暴を忍ばなければならなかつた。大正以來の政權爭奪戰は、實に資本主義政黨の應仁の亂であつた。

かくして三つの資本主義政黨が入亂れて、互に政權の爭奪に熱中しつゝありし間に、社會は暗潛默移して之等資本主義政黨の私爭により散々に蹂躪され散々に焚掠された戰場の下から全く新しい生々とした生命が芽を吹いて來た。それは近く普選の實行と共に出現すべき、勞働無産階級の勢力である

憲政會が十年逆境に沈淪した苦し紛れに心にもなく押立てこ旗幟とした普通選擧は意外な形勢の變化から意外に實現されることとなつた。曾ては官僚と提携するまでも、加藤とは和せずとの執意を事實の上に示した犬養も、普選に對する恐怖の前にひれ伏して三派合同の必然に降伏せざるを得なかつた。三十年の久しきに亘つて國民の眼を欺いて來た『民權』の正體が今となつて暴露した。貴族も、軍閥も、富豪も、大地主も、有らゆる勢力が合同して一となり、聲を潜めて新しい勢力の出現に備へようとしてもがいて居る。『勞働無産階級の勢力が政界に出現する時、既成政黨は政爭を止めて必ず一致團結する。』之は私が二十年前二十一歲から書きつゞけて來た演繹的筆法である。

マイクロフォンの前に立ちて

放送雜感

——せめて聲を誇る——

久米正雄

何しろ本放送になつてから、第一回の文藝講座だと云ふだけに、僕も餘り氣は樂でもなかつた。それ迄、芝浦の假放送時代に、名士たちの講演を聞いて、其如何にも紋切形であり、朗讀的なのが厭だつたので、自分ならずツと砕けて、親しみのある調子でやるのだがなア、と考へてゐたが、第一回と云ふだけに、さうは行かない氣がした。實際ラジオの講演で、餘り朗讀的であつては、活字で讀者に見える方が增しだ。そして、講演者が咳をしたり、云ひ直したりすると、其處に人間味が生じて來て面白かつたから、自分は初め原稿なしで、談話的にしようと思つた。が、若しそれが餘り間へたり、繰り返しが多過ぎたりしたのでは、壇上でやる時は愛嬌になつたり、胡麻化しがついたりする場合でも、ラジオでは困るだらうと思つた。それで、講演へ行く一二時間前と、鎌倉から上京する汽車の中で、準備の原稿を作り、それを一と通り讀んでみて、時間を計つた。そして彼是二十分以上になりさうな所で、原稿そのものの裾を端折つて、懐中し乍ら愛宕山へ行く事にした。思ふがまゝに書きつけて行つて、普通の原稿紙十三四枚にはなつたらう。

新橋まで小林君が、放送局の自動車で迎ひに來て呉れた。放送局へ行つて見ると、服部普白さんが、立派な放送部長顔をし

て居られ、長田幹彦氏が初めての文藝放送だと云ふので、心配して來てゐて呉れられた。長田氏に會つたり、前の玄文社の人達が多く居たので、やゝ氣安い感じになる事が出來た。が、あの『愛宕ホテル』の建物は、少し立派だつたので、固くなる傾向があつた。其處へ持つて來て、屋上から東京の晩景を俯瞰し、其處が漠然たる今夜の聽衆だと思ふと、妙に威嚇される氣がした。それから、謙讓で柔か味のあるしんみりした學者肌の北村さんに案内されて、ウエスターンの放送機を見せられ、魔法罎の大きなのより大きい眞空管が大小三ツ四ツ並んでゐるのを見せられゐると、更に怖くなつた。そして放送室の靴が埋る絨檀を踏んで、厭に音のない中へ入つた時、是は原稿を用意して來て、よかつたわい、と思つた。もう砕けて出鱈目を云ふ氣なぞは餘り無くなつた。が、固くなり過ぎても困るから、まア、せいぜい前置でも砕けてやつて、自然に硬軟を語尾で調整してやらうと決心した。

放送室には、京山さんや大羽さんや、聲でお馴染みのアナウンサア諸兄が居た。夜のニユースを放送する人が新聞社からの原稿を點檢して居た。

「どの位の聲でやるんです。」

と云ふと、アナウンサア諸兄が、聲を出して見て呉れた。大阪の公會堂でやる時よりは、ずツと聲を出し吝んでいゝなと思つた。あの位だつたら、二十分は大丈夫だらうと思はれた。聲だけには、稍々自信が持てた。

が、愈々時間が來て、ニユースと、東京市からの告知事項が終り、次にアナウンサアが紹介して呉れられると、僕はつい其の尾に從いて、それ以上の聲を出し初めて了つた。しまつた！と思つたが、今更小さくする譯には行かなかつた。で、それを押し通してゐると、十五分位にして、やゝヒユーと云ふ渇れが喉に生じ出した。で、私は一方の手で原稿紙を見乍ら、うまく間を永びかせないやうに、傍のコップを取上げては、藝當のやうに水を呑んだ。やゝ喉が直つた。そして二十分、やうやく、さう聞き苦しくない程度で、可なり大きく、發聲し得た。終ひの方は右の理由と、時間が無くなりさうなので、大に慌てたが、聲が辛うじて續いたため、幸ひに論旨も彌縫し得たやうな感じがした。

濟んでスタヂオの外へ出ると、長田氏が驅け寄つて來て、大變明瞭で聞へました、と喜んで呉れたので、僕も嬉しかつた。中央新聞にゐる武川君も、可なり好かつたですと云つて、喜んで呉れた。みんな少くとも、聲だけは賞めて呉れた。初めて大阪朝日の樓上で、人間社の講演會をやつた時、例の坂[illegible]の

一三氏が、矢つ張り僕の聲を賞めて呉れた事を思ひ出した。そして滿更でもないんだな、と大に自信を增した。

その二三日後、盛岡のある人からも、スーパーヘテロダインで聞いてゐて、アナウンサアより聲が明瞭だつたと賞めて呉れた。厚木の人からも、アナウンサアそこのけだと端書を貰つた。それから愛宕下に居る、遠藤と云ふ昔僕や山本が、殊に世話になつた啓成社の社長だつた人からも、久しぶりで元氣な聲を聞いて懐しかつたと云ふ手紙を貰つた。其他反響五ツ六ツ。もう此頃では、少し一生懸命に小說を書いても、二三通位しか反響はなし、それも久しく書かないので、さうした反響に殆んど接しなかつたが、珍らしく澤山諸所方々から、さう云ふ反響があつた。初めての事で、皆も興味を持つて注意して呉れたのだらうが、僕は、こんなに反響のあるものなら、つくぐ\もつと準備して、もつと立派にやるんだつたのに、と思つた。

其後、引續き他の文士諸兄の講演を聞いてゐるが、必ず、中途から電力を增して、聲をはツきりさせてゐるやうだ。して見ると論旨は知らず、聲だけでは僕のが一番よかつたと、大に自惚れてゐる次第だ。先づ加能作次郎でも出て、唄でも唱はない限りは威張れる。……と云つて、もう一度此の聲で講演をやりたいなどの欲望は、さらぐ\無し。たゞ、何かの時、アナウンサア代りに、開會の辭みたいなものを、もう一度述べて見たい。毎晩、アナウンサア諸兄が、耳の鎖鑰を握つた感じで、挨拶をするのが、僕には羨ましい。文藝春秋子の言ひ草ではないが、全く僕は食へるなら、アナウンサアに成りたい氣がする。……では是で、私の放送雜感を終ります。だんぐ\秋風が立つて來ました。皆さんのランプの廻りも、沁みりと明るい事でせう。陸上の方々の御健康と、殊に近海を航海して居られる諸君の、御安全を祈ります。左樣なら、御機嫌よう。K、U、M、E。……と云ふやうな、稍々文學靑年臭い美辭麗句で、僕がやるならもつとうまく。……

（九月十二日）

兩都放送所感

馬場孤蝶

今丁度大阪の放送を了はつて宿へ歸つて來たところだ。これで、東京での八月十七日の放送を加へると、二回目になる。皮きりはつらいといふ。何事も、全くやつたことがなくつて、最初の場合にはまるで見當がつかなくつて、やり憎いのは當り前だが、僕の場合に於てもやはりさうで、東京では何だかひどく妙な心持がして、始めからしまひまで不安であつた。

何にしろ、ヘンなお椀の蓋のやうなものに向つて、可なりな時間の間、相應に聲を高くして、獨りごとをいふといふわけのものなんだから、まことに張り合ひのないこと夥しい。

一番具合の惡るいのは、言葉を切つて、一節一節の間に置くポーズの見計らひである。普通の講演ならば、言葉を切つてから演壇を歩るいて、此方の位置をかへるとか、ノオトを見るとかするのが、皆一つびとつの所作のやうになり得るのだから、一寸何も云はずに默つてゐる位は何でもないどころか、或る場合にはさういふ沈默の間が聽衆の心を緊張させる效果をも持ち得ることがあらうと思はれるのだが、ラヂオの場合では、聽衆の前へ姿を見せては居らんのだから、ポーズが少しでも長びくやうでは一寸間が拔けることになるだらうと思はれる。そこで、なるべく間を置かないやうにしようとすると、可なり氣がせいて來る。ノオトを見るのさへ落々はしてゐられないやうな心持ちがして、如何にも窮屈で、言葉が暢びやかにはいかなかつたやうに思ふ。しかし、これはおもに最初の時の感じであつて、二度目は、さういふ點には相當に見計らひがついて、適度のポーズを置くことができるやうになつたと思ふ。

今一つは、僕は普通の講演の時には、演壇が廣ければ、なるべく歩いて自分の位置をかへるやうにするし、又眼も一ケ所へばかりは注がず、顔を二階へも振り向けるし、左側にも右側にも振向けるといふやうにして、聲を滿場へ配ばることにするのであるが、さういふ癖がついて居る僕などには、マイクロフォーンの前では、始終お椀の蓋のやうなもの丶眞中の鐵網を張つ

たやうなところばかりを見詰めてゐなければならんので、横眼一つ自由には使へず、極めて窮屈な心持であつた。

東京では、立つてゐても、腰をかけても、どちらでも宜しいといふのであつたので、立つてやつてみた。東京のマイクロフォーンは棒のやうなもの丶さきに着いてゐて、高かさは、伸縮自在になつてゐる。大阪のは、マイクロフォンが卓子の上へ乘せてあつて、講演者は腰をかけてゐなければならぬやうになつてゐる。それで大阪では腰をかけてやつてみた。

何うも立つて居るよりは、腰をかけてゐる方が餘程落ちつくことが出來るやうで、吾々には腰をかける方が勝手であるやうに思はれる。尤も大阪の方のは二度目なのだから、落ちつくところを得た原因の大部分は僕に幾分の經驗ができたがためでもあらうかとは思ふ。けれども、腰をかける方が落ちつくことができて、やりやすいことは確かである。

それから、聲の高低なんだが、これは大きい講堂での普通の講演の場合とはちがひ、先づ二百人程な聽集に話す位な心持ちで宜しいといふんださうだから、僕のやうなふだん高調子で話をするものに取つては、まことに樂である。

次ぎには、發音であるが、此れはなるべくゆる／＼と話すやうにすれば各語を明晰に發音することができると思ふ。しかし、さうすると、時間が直きに經つてしまつて、講演がま論のうちに時間が來てしまふことがありさうに思はれる。のみならず、餘り言葉の調子が緩るくては、話し方が平淡になり過ぎて、題材によつては、聞く方では興味がないことになるであらう。で、言葉の緩急には少し注意を要するかと思ふ。餘り早くごちやごちやとしやべつてしまつたのでは聞く方では困るに違ひない。

東京では、一寸した手控へをこしらへて持つてゐたのだが、普通の講演の場合より言葉の速度が自然緩くなるがために、思ひの外時がか丶つて、まだ話しのなかばに達しないうちに、もう約束の二十分のうちが十五分たつてしまつた。それで、直ぐ結論へと急いで、あと八分ばかりで話を了はつてしまつたが、何うも、僕等のやうな長い講演ばかりやるものに取つては、ラヂオの場合には、話の手廻はしに就て、前以つて少し考へて置かなければならぬと思つた。大阪の場合は、その考でいつたので、時間が短かすぎるとは感じなかつた。けれども、發音を明晰にするため、言葉を緩るく運んで行かなければならないラヂオのやうなものでは、三十分は講演者に取つては短かすぎるかと思ふのだが、されば云つて、吾々如き話上手でない者の話を受話器を耳にして一時間も聞いてゐるといふのでは、聞く方で

は到底辛抱のなることではあるまい。先づ二十分から三十分ぐらゐなところが丁度宜しいところであらう。さうすると、講演といふ程のものでなく、謂はば座談のやうなもので、一寸した感想を述べるくらゐにすればいゝのだが、又さうなつて來ると、餘程話し上手でなければいかぬわけである。われ〲どころでは、今のところ、講演の切れつぱしのやうなものをやるより外しかたがない。

散歩をしてゐる時、街上の店のラッパから漏れて來る講演者の聲は大抵ひどく切り口上に聞える。自分のもやはりそんな風に聞えるかも知れないので、それを面白く思はぬとは云へた義理ではないか分からぬが、餘り切り口上になるのは面白くない。これはさうしなくても、やれさうに思はれる。發音を正確にし、言葉の調子を緩るくして、言葉と言葉との繋ぎを切らずにやつて行けさうに思はるゝ。あの少し鼻聲じみた聲で切り口上になるのは一寸聞きづらい。

東京の放送室へは、講演ちうは誰もほかの人ははいつて來ない。大阪の方では、監督官のやうな者が後の長椅子にかけて厳然と構へ込んでゐる。一寸試験でも受けるやうな氣がする。アナウンサアも後の方にゐる。それから入り口の近くに又一脚長椅子があつて、その上へは、局に關係のある人が腰かけて聞くことができるやうになつてゐる。

人がはいつてゐないのがいゝか、聞きてのやうな者がはいつてゐるのがいゝか、これはどちらとも云へない問題であるが、大阪のやうになつて居るのも、又幾分の人間味が加はつて來て宜しいかと思ふ。大阪では女のアナウンサアを二人ぐらゐ使つて居るやうだ。僕の時はその一人がアナウンスしてくれた。なか〲いゝ聲であつた。

僕の感想は先づ大略以上の如きものだ。これから後、ラヂオで話をする人々に何等かの參考になるやうであつたら、本懐である。

（九月十日淀屋橋畔にて）

處女講演

宇野浩二

　僕はこれ迄に講演とか演說とか、さういふ大勢の人の前に立つて話をした經驗が一度もない。いつかも講演旅行と稱する友人たちの旅行團に加はつて、旅行そのものがしたかつたので、一所に行つたことがあつたが、その時にも到頭出なかつた。その時などはみんなと一所の宿屋にゐて、友人たちが一人殘らず、講演といふ程のものが出來ない人でも、折角一所に來たからといふので、挨拶ぐらゐに出たのであるが、それでも僕だけは妙なはにかみやで、どうしても出る氣にならないものだから、極力斷つた。これでは一と思ひに演壇に上る方が餘程樂かも知れないと思ひながら、矢張り腋の下から汗を出しながら斷る外はなかつた。その事をいつて放送局の人に幾度も斷つたり、無駄足を運ばしたりしたのであるが、これは普通の講演と違つて、目の前に人の顏は少しも見えないのだから、人見知りとか、はにかむとかいふのなら心配はない、といはれて見て、ふと、そんならやつて見ようかといふ氣になつたのである。講演馴れた人には、目の前に人の顏が見えないので隨分やりにくい、現にアメリカあたりでは、放送室の壁に聽衆の畫がかいてあるといふやうな話だが、僕にはそれぢや困るのだ、つまり普通の講演者の氣持とは全然反對の譯だつた。だから、僕が今度やつたのを講演と呼ぶことが出來るなら、ラヂオで處女講演をやつたのは恐らく僕が初めだらうと思ふ。僕と、その外には、放送局の小林君の話に依ると、久保田氏の「暮れ方」の放送に出た子役の白を受持つた某といふ少年が、ラヂオで初舞臺を踏んだのださうである。

　そんな譯で、隨分前から話がありながら、どんな事を喋るかといふことは少しも考へなかつた。唯ラヂオだつて、たとへ目の前に人はゐなくても、大勢の人に向つて喋ることには違ひないのだから、果して口がきけるだらうか、どうかといふことばかり考へてゐた。もつとも、そんな事さへ本當は考へないで、矢張り出る前の日あたりまでは、出ようとは決心してゐなかつ

たので、愈々その日になつて、新聞などに發表されてゐるのを見て、それで初めて愈々出なければならないなアと決心した位だつた。それで、あわてゝ講演の原稿を一二枚書きかけたのであるが、そこへ訪問客が來初めたものだから、到頭夕方になつて、放送局から迎への人が見えた時までに、原稿が出來なかつた。唯、以前に新聞に談話筆記で載せたものの切拔があつたのを、もしかの時の用意にと取つてあつたので、それを書きかけの原稿の中に狹んで出かけた。

前もつて小林君に賴んであつたので、ぎりぎりの時間に出かけた。だから、放送局に着くと、五分と待たないうちに僕の出る番が來た。僕には矢張り目の前に誰も人の顏が見えないのが氣安かつた。姿勢が惡くても、誰も見てゐるものがないからと思つて、卓子に片肘を突いて、一つ腹に力でも入れて落着かねばならぬと思ふ間もなく、既に自分の名と講演の題目が放送されてしまつたので、少しまごついた。これがラジオでなければ、その間が少し位途切れても、聽衆が顏を見て待つてゐるだらうが、（もつともさうなると僕は一層困つた譯だが、）沈默の時間が長いといけないと思つて、あわてゝやり出した。僕は放送の間中、一番氣にかゝつたのは、この言葉が途切れたら、聲だけで聞いてゐる人たちには一番迷惑だらう、といふ配慮だつた。そのために折角持つて行つた書きかけの草稿も、草稿の間に張りつけて行つた新聞の切拔も、話し初めに見る機會を失つたものだから、口から出任せに話し初めてしまつたので、後から草稿を見ようとしても、順序が滅茶苦茶になつてしまつて、役にも立たなくなつた。これは確かに言葉を切らさないようにと苦心したのと、最も主な原因は矢張り僕があがつたためであつたのだらう。

馴れた人たちがいふやうに、話してゐる最中に、始終乘り降りする電車の停留所の傍の藥屋の店頭のラジオや、その前に立つてゐる群衆やを思ひ出すとか、誰それが聞いて笑つてゐるだらうと思ふとかいふことは、初心な講演者であるところの僕には一つもなかつた。唯始終言葉をなるべく切らさぬことゝ、なるべく早口にならぬことゝ、しまつた、急いだので、草稿を見ぞこなつたので、話が前後したり、重複したりして困つたとか、そんなことばかり心配しながら、十五分ばかりが濟んでしまつたのである。

それで、講演の度胸でもついたかといふと、矢張り少しもつかない。ラジオなら又氣が向いたらやつてもいゝと思ふが、普通の講演はやつぱり出來さうにない。

マイクロホンのまへで

久保田万太郎

道灌山下の停留場のまへに酒屋がある。その店の前つ面にラウド・スピィカァがしかけてある。――ある晩、どこのかへりだつたか電車を下りると、ちやうど放送時間で、大ぜいの聽き手がそのまへに立つてゐた。

下りしなにわたしも、何の氣なし、そのなかにまじつて立ちどまつた。同業某氏の講演最中だつた。すでに自分のうへにも下りてゐる荷を、外の諸君はどう所理するかと、熱心にわたしは耳を傾けた。

と、不意に

『もう少し我慢おしよ。――これがすむとすぐ長唄だから……』

近くでさうした言葉が囁かれた。[illegible]とわたしはそのはうに眼を遣つた。――三十恰好の櫛卷にしたお内儀さん風の人が、四つ五つの女の子を背中にのせ、十一二になる同じく女の子の手を曳いてそこに立つてゐた。

そのとき以來、マイクロホンのまへに立つたら必ずその酒屋のまへの聽き手が眼さきに浮ぶに違ひないとわたくしは思つた。『もう少し我慢おしよ。――これがすむとすぐ長唄だから……』と、さうした聲の耳もとにさゝやかれるに違ひないとわたしは思つた。――とんだことを請合つたと、すくなからずわたしは昏迷した。

が、先月の十四日、いよ〳〵わたしの番となつて、夕方、行無く自動車で愛宕山へ運致されたとき。――そのときはまだそれが苦になつた。――そのあと食堂で蟲おさへの麥酒を飲んだとき。――二つ[illegible]」とゐた。

――時間が來て、いざ、放送室へ入つたとき、さうしてアナウンサアのO君が紹介をすましてわたしのはうへ合圖をしてくれたとき。わたしのまへにはたゞマイクロホンの眞つ黑な恰好があるばかりだつた。――そのうしろの何萬といふみえざる聽衆。――そんなこと、わたしには、とても空想さへ出來な

かつた。――信じようとさへ思へなかつた。

といふことは。

――まして況や一酒屋のまへの聽き手をや。

わたしはたゞ夢中で饒舌つた。――しか運命づけられたものの怖れをもつてたゞもう夢中に、原稿の行から行へ眼をうつした。――わたしの惡いくせの、わたしの最もいけない條件に置かれた場合の、舌の廻轉のだん／＼急速になつて行くのをはつきり自分に感じながら、わたしは、自分にその手綱を引緊めることが出來なかつた。――しかしわたしは「見當」を――わたし自身の料簡を失つた。

二十分といふ時間がどんなに長くわたしのうへに流れたらう？――わたしは體を汗に浮かして放送室を出た。

こんな莫迦なことは。――實際こんな莫迦なことはいつにも覺えがない。

さういふ外はない。

これを要するに、人間、無駄なことを――必要以外のことをいつたりしたりするのを封じられるほど、辛い、不仕合せなことはないと痛切に感じた。

無駄。――

「無駄」の貴さよ。

「無駄」の有難さよ。

二三日して淺草のうちへ行くと

『どうしてあゝお前は早口なんだ。』

顔をみるなり老父はいつた。

『みつともない。――氣をつけなくちやアいけない。』

『だつて、あなた……』

わたしは何の意味か分らなかつた。

『聞いたよ、お前の話を。――芝居の話を……』

『……………？』

『ラジオで、お前。――俺は聞いててハラ／＼した。』

わたしは憮然とした。――まさか生みの親に。――えうもない芝居の話を生みの親に。……

『長生きはさせたくない。』

わたしはつく／＼さう思つた。――うそもかくしもなく。

――ほんたうに。……

放送を終へて

高濱虚子

別にこれといふ感じもありませんが、日本音樂を放送する室を覗いた時の感じは、こんな風にして放送される事になると音樂界にもラヂオ音樂といふ風のものがだん〳〵發達して來るであらう、又ラヂオ劇といふやうなものも發達して來るであらうと直覺した事でした。其後放送局の小林君の話しにラヂオ劇といふことは既に放送局の人々の考にも上つて着手してをるといふことでした。又蓄音器に吹込むやうな喇叭か何かゞあるのかと思つてゐましたら唯棒の先に鰐口のやうなものがくつゝいてゐるのに向つて話すのを一寸變に思ひました。それから普通講演をする場合は聽衆の顏が目に入つて其自分の話すところが如何に聽者に響くとかいふことがすぐこちらに反響して來るのですが、それが何もない、唯空室の中で一人で喋つてゐるのですから一寸變なものでした。これは後の感じですが、考へて見ると、空中には千百億の聲が錯綜して響いてゐる筈なのが我等の耳が幸に近距離の物音のみを識別し得るので、其で喧しくなくてすんでゐるのである。然るにラヂオなどといふものが出來て來ると其遠い物音がグワン〳〵と響いて來る、今日は其物音を珍らしく思つてゐるが、しまひには却て耳を塞ぐやうになりはしないか、などと考へました。

ラヂィオ・ドラマの價値

長田幹彦

今かういふ問題を提出するのは、まだ時機も早過ぎるし、それに私のやうな藝術的考察力の鈍いものが、こんな大きな問題を取扱ふのは少々越權すぎるかも知れない。それは私としてもよく承知してゐるが、併し毎日のやうに、スタディオに立つて、一生懸命になつて研究してゐるものには、自然とどうもさうした疑問が湧き易いのである。

ラディオ・ドラマに對する藝術的な價値の批判は、多くの先輩、同好者、研究者の發言を俟つより他はない。きつと近い將來に、何か纏つた批評なり、意見なりが聞けるものと私は確信してゐる。

そこで私が先づ訴へ度いのは、ラディオそのものに對する根本的な不滿である。その一番最初のものはマイクロフォーンである。技術部の連中に訊くと、何んでも獨逸では、大理石で作られたマイクロフォーンや、或はコンデンサー・マイクロフォーンといふやうなものも續々發明されてゐるさうである。さういふものが我々の手に入るのは今の處何時になるか知れたものではない。從つて我々は當分の間は、あの不完全なマイクロフォーンに總ての運命を委ねて、時運の到來するのを待たなければならないのである。

マイクロフォーンはラディオの生命である。その貴重なものが、既に恐る可き幾多の缺陷をもつてゐるのである。炭素粒の中を流れる電流の雜音といふものは、絶對に取れないのである。顯微鏡をのぞく場合に、あの何んにも映らない或スペース、擴大される當體が入つて初めて作用の價値を生むあのレンズ、あれを見ると、私は人間の文化はまだ光の波動の時代であつて、もつともつと深遠な電波の時代にまではなかなか到達してゐないのではあるまいかとさへ思はれるのである。

聽取者がセットの前へ坐つた時、先づ第一に幻影を破られるのは、あの雜音である。あの雜音に依つて、或場合には全然劇的な氣分をのつけから破壞されてしまふ恐れがある。完全な鑛石式のセットへ、いゝ質のレシーバーをかけて聽取してゐる人人は多少でもさうした困難から解放されてゐるが、少くともラウド・スピーカーを用ひてゐる人達にとつてはあの雜音が致命的な情調破壞を演ずる場合が多い。

靜かな聲と音とによつて表現される最も重要な效果があの雜音の爲めに無價値なものになるとすると、私達はラディオ・ドラマに對して、或深い疑惑をもたずにはゐられないのである。多くの研究を經て、此れならばといふので放送されるエフェクトが往々にして何等の意味をもなさないのを實驗して私は可成失望してゐるのである。或時には、藝術といふものが機械文明の

發達と同時に、漸次と亡びていくのではあるまいかをさへ思はれる。その失望は隨分私の心を暗くするのである。

私は今迄いろいろなドラマの放送がある毎に、自らスタデイオに立つて、汗みづくになつて研究してみた。その中で一番容易くマイクロッオーンが受け入れて吳れるのは、單純な笛聲とか、ごく澄んだ人の聲だけである。從つて、少し複雜なものになると、もう頭から期待を裏切られる場合が多い。

それだけならばいゝが、もう一つ困るのは聽取者の所有してゐる受信設備の缺陷である。眞空管の數の多い機械は猶更さうである。さうなつて來ると、我々はどの程度までの電波を標準として演出をやつていゝか全く當てがつかなくなつてしまふのである。

而も臺白そのものゝうへに於ても、我々は一番困難な約束に、束縛されなければならないのである。多少でも思想の深遠な、言葉の面倒なものは、我々の聽覺が片つぱしから逸してしまふ。唯一言で盡きてゐる素晴らしい警句などを、そのまゝ聞き流されてしまふ程、情ないことはない。

これで何うして完全なラヂィオ・ドラマといふものが發達していけるだらう。私は幾度となくそんなことを考へて、ラディオ・ドラマを捨てようとしたか分らない。機械に無理があるのか、或ひは又電波そのものの研究が足りないのか。これは特に電氣學者に研究して貰はなければならない問題だと思ふのである。聲や音の色と質が變るといふやうなことは、もつともつと先の問題である。

兎に角多數を支配する機械文明に賴る藝術が、いかにその素質に於て、低下してゆくかといふ事實を、私は每日每日みせつけられてゐる。人間が無理なものを、無理に振り廻はさうとしてゐる矛盾がはつきりとみえてゐる。今の狀態では唯劇を聞かせるといふだけで、まだ感じさせる域に達してゐない。

併し一方から考へると、まだ何んだかこれだけで、或價値をきめてしまつてはならないやうな未練も起つて來る。今迄の舞台藝術の形式を捨てた、何か新らしい形のものが生れて來さうな氣もする。私にはまるで當てはつかないが、何んとなく期待をもつて前途をみつめてゐたいやうな心持ちもする。

私は小さな自分の力を傾けて、もつともつと研究してみる義務を感じてゐる。

放送機の前に立ちて

近松秋江

八月の初、東京放送局の依頼に應じて、はじめて放送機の前に立ちて、二十分間ばかり「高山樗牛氏を想ふ。」といふ題下に偶感を述べました。

この題の選擇は、いはゞ、ホンの出鱈目であつて、では何かいひませうと、放送局の人に、八月の五日午后七時半から放演することを受合つてゐたゝめに、のつぴきならぬ破滅になり、折柄自身、東海道の興津海岸に避暑してゐたので、恰も高山樗牛氏のことを想ひうかべ、餘方なく樗牛氏のことでもいつてみようと思つた次第であつた。けれども、いくら出鱈目といつても、既に一旦此の題に定めた以上は、その題について必ずしも出鱈目をいふと申す譯ではないのであつて、題意については、相當眞面目な偶感を述べたつもりである。但し、本來が餘興式の娯樂味に重きを置いてある放送の事でもあり、それに夏向きの場合であるから、一層砕けた、物のいひ様をする方がいゝとも思つたので、たゞひとゝほりの雜感漫語といつたやうなことを申したに過ぎません。

私は自分ではまだ放送機を――受話機を自宅に設備してゐないので折々餘處で聽いたことがあるくらゐのもので、徹底的にラヂオの娯樂的――又必要の用具としても――の價値が果して十分なるか否かを確めてゐないのである。――それといふのも、私が今まで聽いたところでは、どうも音聲が明瞭に聽き取れないのが最も遺憾な點であつて、いづれ、そのうち機械が段段精巧に改良せられるであらうとは思ふが、――――

ところが、その晩、實はどうかと思つて、危みながら放演した私の音聲は、なか〳〵よく透徹して、言葉の句切りなども、ちやうど適度であつたといふことを、済んだ後で放送局顧問の長田幹彦氏をはじめ、放送局一同の方々から賞讃にあづかつた次第で、自分も少々得意になつた譯であります。放演進行中、口を切つてから五六分立つた時にも、紙片に、

「音聲の調子が大へんによろしい。放送局員一同喜んでゐた

す。」といふ激勵の文句を書いて、そうつと私の手許に差出されたのを見ても、私は一層熱心に且つ大事を取つた次第でありました。

私の題材は、かりに十五萬人の聽演者があるとして、その中の、ほんの一少部分の人達にしか興味を持ち得ない種類のものでありましたが、その晩放送局を辭して、服部部長の自動車に送られ、長田氏と共に同氏の宅まで歸つて來ますと、長田家の女中達が玄關まで出迎へながら、

「唯今放送をお聽きしました。大變によく聽へました。」といつたので、私は、單に間近の放送局に於てのみならず牛込あたりまでも、よく聽えたかと思つて、種々歡待して下さつた放送局の人々の厚意にも幾分報いることが出來たと思つて安心しました。此の場合題材の如何よりも、――――そんな事は第二として、――――折角機械の前に立つて、聲が徹らなかつたりしては困ると思つてゐたのであつた。

すると、その翌日であつた。午后から一寸外出して夜遅く歸宅してみると、留守の間に、戸山腦病院主、杉村幹氏なる人から特使を以つて、わざ／＼書翰を寄せられ、昨夜の貴下の「高山樗牛氏」についての放送は、非常な興味を以つて愉快に聽きました。樗牛氏は自分の同郷の先輩である。とて、樗牛氏の手澤の存するドイツ書の小冊子一部と、樗牛氏が生前その弟齋藤信策氏に宛てたる葉書を一葉と惠贈にあづかつたのには、自分も痛く感激したのであります。

その葉書は、察するところ、樗牛氏が明治三十五年の晩秋逝去する少し前のもので、書中東京なる信策氏にあてゝ、鎌倉の療養地から、もう薬が盡きてゐるから、近日中これを持つて來てもらひたいといふやうな意味のことが書いてある。

私は早速、未見の人杉村氏にあてゝお禮の手紙を書かうと思つたが、何だか自分の筆蹟のまづいのに聊く躊躇してゐて、數日後にやつと思ひ切つて禮狀を出したのである。

その晩、靜岡地方にもこれが聽えるかどうか、イヤ空中に雷氣の多い時は、殊に箱根山に遮ぎられて關西には一寸通じにくいなどと話してゐたのであつたが、その後私は又興津の避暑地に歸り、靜岡にいつた時、同地の青年から、貴下は先日靜岡の新聞に「高山樗牛を想ふ」といふ寄稿をせられましたなあと話しかけられたので、否、そんなことはありませんと答へたが、すぐ思ひ浮んだのは、先日のラヂオの放送のことであつた。きつと靜岡の新聞がラヂオの放送を聽いて、これを又文章に直したものを掲載したのであらうと思つて、倍々ラヂオに興味を感じた次第であります。

放送局の人に聞くところによると、ラッパの附いた、高價な機械で聽くよりも、耳に當てる簡易な受話器で聽く方がよく聞えるといふことであるから、私も此の秋はその機械を設備しようかと思つてゐる。商賣にするのではないから、金のかゝらぬ、そのくらゐのもので澤山である。耳に當てゝ聽くのを、耳にぴつたり附けると、鼓膜を劈くほどの大きな音がして、とても當てゝはゐられない。それを手に持つて聽いてゐて丁度可い加減であることを、先夜、長田氏の處で實驗した。

何しろ空中放送などといふ、まるで魔術のやうなことが發明せられて、科學の力は段々宇宙の神秘を征服してしまふことになつて來た。夕方晩餐の後でラヂオの前に坐してゐると、もう殆ど寄席などへ出掛ける必要もないことになつて來た。私共市外に住んでゐる者にとつては、偶に寄席に行つてみたいと思つても、遠いので、つい、臆劫になるのであるが、こんなものが出來てもまだ古臭い材料で落語や講談をやつてゐると思ふと妙な時代錯誤の矛盾を感ずる。

（九月十二日）

放送巡業

小山内薫

日本で放送の巡業をしたのは、私達が始めてでせう。

例のラヂオドラマ「炭坑の中」を東京で放送してから間もなく、丁度築地小劇場が名古屋と大阪へ旅興行に出かけましたので、同じものをこの二箇所で放送したのです。

「炭坑の中」の放送には相當の設備が入るので、地方ではどうかと心配してゐましたが、幸に名古屋の放送局でも、大阪の放送局でも、こちらの註文通り親切に準備をしてゐてくれたので、どちらも唯一回のテストだけで、無事に放送することが出來ました。尤も、東京で放送する前に、二週間も愛宕山へ通つて、相當練習を積んでゐましたから、係りの者が十分馴れてゐたせゐもあつたでせう。

名古屋の放送局はお城の直ぐそばの閑靜なところに建つてゐます。總ての事務をここで扱つてゐると見えて、部屋の數も十分にあるやうでした。私達が食事をさせて貰つた二つの食堂なども十分にゆとりがありました。何にしても閑靜なのが放送局の所在地としては羨ましいと思ひました。晝間でもあんなに靜なのですから、夜などはどんなに靜だらうと思ひました。東京の放送局も場所としては實に上等ですが、あまりに解放的なせゐか、ちと人の出入が多過ぎるやうです。放送といふものは、やはり何者にも妨げられずに、靜に落ちついてやらなければ嘘でせう。彌次馬の禁物なのは、火事場ばかりではありません。

次ぎに特筆すべきは名古屋のマイクロフオンです。ここのマイクロフオンが日本で一番好いものだといふことは豫て東京放送局の北村技師長から承つてゐましたが、實際接して見て驚きました。雜音は絕對に出ないと言つて好いでせう。それに鋭敏なことは非常なもので、放送室に立ててある氷柱の溶けて落ちる點滴までがはひるのです。實に油斷も隙もならないマイクロフオンです。大事にしてあることも非常なもので、東京のや大阪ののやうに柱と臺で据ゑてあるのではなく、分厚なゴムスポンジを釣つて、その上にそつと載せてあるのです。

一體、放送者にとつてのマイクロフオンは神樣も同じで、これを莫迦にしてかかつたら、決して好い放送は出來ません。をかしなことを言ふやうですが、東京放送局のマイクロフオンなどは、日に依つて餘程機嫌の好い時と惡い時があるやうです。名古屋のマイクロフオンの前に立つた時は、實際私達は恐ろしいやうな氣がしました。

試聽室から放送室へ電燈設備で「良好」「中止」などといふ合圖が出來るやうになつてゐるのも便利だと思ひました。

大阪は假放送局で、三越呉服店の屋上に一時的な閣をしたものですから、手狹なことは申すまでもありません。さぞ爲事が爲にくからうと同情しました。それでも、放送室は相當の廣さを持つてゐました。天井も壁も一面にヒダを寄せた布が張つてありました。マイクロフオンは東京のと同じですが、感心したことは反響のない放送室で反響を出すやうな器械が設備してあつたことです。それは太鼓の皮のやうな皮を張つたワクで、それがどこへでも持つて行けるやうになつてゐるのです。しかも、それが二つもあつたので、反響を出す爲に私達が用意して置いて貰つた二つの大太鼓は殆ど用なしになつてしまひました。電燈設備で「良好」「中止」などといふ合圖が試聽室から出來るやうになつてゐるのは名古屋と同じでしたが、その上にも

つと便利なことは試聽室と放送室とが電話で連絡のとれるやうになつてゐたことです（尤も名古屋のやうな鋭敏なマイクロフオンを使つてゐたら、とてもそれは使へますまいが）。それから、もう一つ感心したことは、試聽室にいろいろな板が置いてあつて、それに「高聲に」とか「聲を低く」とか色々な注文が書いてあつて、それを小さな硝子窓から放送室の人へ見せることが出來るやうになつてゐたことです。それは實は、私も東京放送局でやつたことで、東京にはその用意がなかつたので、自分で半紙へ大きく色々な差圖を書いて置いて、レシイバアを耳にしながら、時々それをドアの硝子に押つつけて見せたものです。それがもう大阪では設備の一つになつてゐるので、一寸驚きました。

唯、場所が三越の屋上で、客の來るところですから、實際はさぞ煩さいだらうと思ひます。放送室の一方の壁に小さい硝子窓が二つ三つ列べて明けてありましたが、あとで聞くと、これは實際放送の樣子を三越のお客に見せる爲ださうです。私のやうな神經質なものは、とてもさう覗かれたら爲事は出來ません。幸に私達がやつたのは夜でした。

それから、これは大阪放送局に對する不平ですが、實際――それも三越がしまつてから――テストを終つて、一旦飯を食ひに外へ出て、それからもう一度歸つて、愈夜の放送にかからうとした時です。私が試聽室へはひつて、レシイバアを一つ借りようとすると、たつた二つあるレシイバアを二つとも局員が耳にしてゐて貸してくれません。そして、その言ふことがかうなのです――「もうテストが濟んでゐるぢやないか。」

これは亂暴です。いくらテストが濟んでゐるからと言つて、放送はその時々の成績に依るものです。スチユヂオのヂレクタアは放送の際、必ずレシイバアを耳にするか、ラウドスピイカアを前にするかしながら、絕えず放送室に向つて注意を與へなければならないものです。

そんなわけで、たうとう大阪では、どんな放送が出來たか、自分も知らずに放送をしてしまひましたが、幸にたいした失敗もなかつたから好いやうなものの、若し失敗でもあつたら、私の責任はどうでせう。

大阪放送局の御一考を煩はしたいと思ひます。（九月十四日）

時論

野古川生

無産政黨問題に對する吾人の態度

無産政黨問題に關する二三の質問　多くの讀者より最近無産政黨問題に關して質問を受けた。昨今問題になつて居る無産政黨準備運動に筆者も關係して居るかといふのが一つ、少くとも結成の出來た曉無論之に參加して熱心に盡力するだらうといふのが一つ、最も多數の質問は自分達も當然之に加入すべきものと思ふが如何といふのであつた。之に對する私の結論を卒直に述ぶれば、第一に無産政黨は急いで作るべきものでない、第二に出來ても無暗に之に加入すべきものでない、從て第三に自分は差當り右の運動に關係して居ないが恐らく將來も關係せぬであらうと云ふに歸する。

と云ふと如何にも無産政黨に同情のない言ひ方の樣だが其實決してさうではない。私は無産政黨の發生を心から冀望する一人である。其の健全なる發達は私の最も焦心する所である。それだから私は一個の國民として無産政黨に直接の關係を有たぬ樣にと戒心するのである。この點を明にするのがこの小篇の目的である。

無産階級運動と無産政黨との別　無産階級運動とは何ぞと云ふが如き細目の學究的說明は姑く措く。無産階級の擡頭し其の自覺に基ける各種の運動は將來の社會に對する一光明として無條件に之を助成すべきものなることを私は先づ許してかる。さて無産政黨運動は所謂無産階級運動の一分派には相違ないが本來はその目的を達する一手段として存在するものに過ぎぬ。此點に於て政黨運動は自ら其の運用に條件の附せられないわけには行かぬ。是れ無産政黨運動がその儘直に無産階級の爲の運動として無條件の承認を要請し難しといふ所以である。

況んや無産政黨運動は政黨運動としての本質上動もすれば無産階級の本筋より脱しがちのものなるに於てをや。

無産政黨運動はなぜ無産階級運動の本筋より脱し勝ちのものと云はれるか。其の主たる理由は二つある。一は政黨運動としての本質上其の主張に時に應じて種々の妥協が餘儀なくさるゝことである。出來合ひの衣物の様に實際の事情に應じて多少の切り盛りを許さぬのでは政黨運動にはならぬ。が、何處までが許し得べき妥協であるかの見定めがなかく困難だ。頑强に過ぐれば政界の落伍者たるを免れず、伸縮自在に過ぐれば遂に脱け難い墮落の淵に陷る虞がある。二者共に頗る無産政黨運動のあやまり易き所と謂はねばならぬ。第二は多少の妥協を必要とする結果主義政綱の具體的聲明に分派を生じ易く、從て全體を一つの意見にまとめることが困難になることである。而して政黨運動として本質上之等の分派はまたブルジョア政派に對抗して協同動作に出づるの必要も大にあるのだが、そこがうまく行くかが問題である。手短にいへば、分れて而して合するといふ六つかしい藝當が要求さるゝのだが、問題は其分るゝや公明正大の進退を期し得るや否や又合すべき必要の起つたとき小異をすてゝ大同に合するの雅量を示すや否やにかゝる。此點をうまくやらないと、啻に無産階級の要求を徒らに無效に終らしむるに留まらず、時として敵の乘ずるにまかせて結局社會の進運を停滯せしむることとなしとせぬ。斯う考へて見ると、無産政黨運動は無産階級に取つては勿論のこと社會一般の發達の上にも大切なものではあるが、舵の取り樣如何に依ては却て可なりの弊害を來さぬとも限らぬものである。

然らば之等の弊害を防ぐ方法はないか。ある。唯一つある。所謂民衆的監督がそれだ。而して民衆は實に監督者であるべきものなるが故に政黨に直接の關係をもつてはいけないと私はいふのである。

民衆と政黨との關係

民衆と政黨との關係に就て私が之れまで各種の機會に述べた所は其儘無産政黨の場合にもあてはまる。私は從來政黨は政治家の作るものであつて、政治專門家でない一般民衆は之に加入すべきでないと説いた。民衆が政黨に加入すると、政黨に取て所謂地盤なるものが出來、一方には地盤のあるのに安心して立派な政治をするといふ熱誠がゆるみ、他力には地盤の維持開拓のために種々の腐敗行爲を敢てするに至ると説いた。若し我々一般民衆が政黨に對して超然たる態度を維持し何れにもあれ良い方に贊成すると構へて居れば、各政黨は之等の投票を得る爲に嫌が應でもよい事を爲すに競爭せざるを得ぬことになる。政黨を淨め政界の健全なる發達を期する

唯一の良法は實に民衆一般の超然的態度に在りと主張して來たのであつた。この主張はいま無產政黨問題を論ずるに當ても些の變更の必要を認めない。

前にも述べた通り、無產政黨の前途には幾多の暗礁がある。此暗礁をうまく乘り切つて正しき針路を踏み外さゞらしめんが爲にはどうしても第三者の監視が要る。外部の批評と助言とがなければ乾度間違をやるにきまつて居る。而して此大切な役目を爲すものは實に民衆を措て外にない。故に民衆はどこまでも嚴正中立を守らなければならぬ。斷じて特殊の政黨と腐れ緣を結んではいけない。之がまた本當に政黨を活かす所以でもある。

また政黨に取つても斯うした超然的態度は本來決して不利益ではない筈だ。今まで地盤ときまつたものが今度は當にならぬことになるのだから一見非常に不利のやうにも見へやうが、自分を離れた民衆が必しも敵黨に鞍替するとは限らない。從來のやうに盲目的に或黨に投票するのではない。能く考へて良い方を襃賞しやうといふのだから、今まで陰險惡辣な方法で民衆を瞞着して居たものでない限り、少しも心配は入らぬ筈である。却て敵の黨を離れた民衆の投票が自分の方に來ぬとも限らない。自信のある政黨に取て何の不安もない筈である。却て事前の約束は當にならぬことにはなつたが良い事をしさへすれば幾らでも民衆的同情は殖へるといふ見込はあるではないか。斯うなると始めて政黨も自然に良くなり社會の健全なる進歩も期せらるゝのだ。故に私は繰返して云ふ、民衆の超然的態度は政黨の爲に同時にまた社會の爲に其の向上發達の不可缺條件だと。私が民衆に向つて無產政黨に關係するなと勸めるのを以て一概に政黨に同情なきの言とされては困る。

斯く論ずると玆に一つの反對說を立つるものがあるかも知れぬ。即ち私の說が民衆と政治家とを始めから分けて考へて居るのを指摘し之を根本の誤謬と論ずるものがあるかも知れぬ。政治家などといふ特殊の支配階級を認めるから民衆が彼等の乘ずる所となるのだ。政治は民衆の仕事だ、政治家は民衆の指揮の下に犬馬の勞を取る代辯者に過ぎざる筈のものだ。斯の理を押して行けば始めて政治家をして眞に民衆の用を爲さしむることが出來る。而して此目的を達する爲に民衆の政黨が必要になるといふのである。斯う云ふ考方は昨今相當に盛のやうだが、實は之が根本の謬見であると思ふ。腹の痛い痒いは患者本人に聞かねば分らぬ。併し如何して之を癒すかは醫者でなくては分らない。從來の醫者は患者を見もせず勝手に投藥したので、遂に民衆は其無責任を憤り醫者無用論を唱へ、甚しきは自分で醫療のことが分るやうな氣にもなつたのだが、本當のところは

矢張り醫者に頼まなくては分らぬのである。只問題はその醫者が絶へず誠實に患者と連絡を取て居るか否かに在る。政治に於ける亦然りで、従來の政治家が頼むに足らざりしとて一概に之を斥けるのは専門の智識なくして勝手に藥を手盛りする様なものである。政治は政治家にまかせる。只民衆は厳に其の監視を怠らない。之が理想的の狀況だ。而して政黨は政治家の作るべきもので民衆は直接に之に與るべからずとする論據も亦實にここに在る。

するとまた斯く論ずる人があるかも知れない。君の説の如きは無産階級政治運動の相當に發達した上ならいゝ。今は全民衆結束の力を以てブルジョアの金城鐵壁に當るべき時だ。假令それが正則でないにしても、敵の堅壘を倒す迄の繋ぎとして無産階級の全衆を結束するの必要はあると。一應尤もの様だが、少しく綿密に考へて見ると直ぐ是亦空言採るに取らぬ所以が分るだらう。

明治初期政治運動の經驗

之に付て想起すは明治初期の政治運動である。當時民間政客の旗幟たる藩閥打破は正に今日の社會改造であつた。あの頃の藩閥の勢力と蠻勇とはとても今日のブルジョア階級の如きものではなかつた。この金城鐵壁に當るには一人でも多くの力を結束するの必要ありとして、地方の豪紳は先輩の勸誘に應じて進んで政黨に加入するの責務を感じたが、其の結果ははたしてどうであつたか。「國民自由の權利」の爲と蹶起した彼等が第一に迷つたのは同じ目的を有する政黨が二つも三つもあつたことだ。第二に迷つたのは其等の政黨が互に烈しく反目してゐたことであつた。政黨が二つ以上あるといふ事實が既に自ら民衆の超然的態度を要求するものだのに、當時識者はこゝに氣附かず、各々好む所に依て入黨を強いたので、無垢の民衆までが遂に黨籍を異にするに由て烈しく反目する様になつた。斯ういふ所から我國の政治史は吾人に二重の苦き經驗を訓へて居る。一は民衆の超然的態度を棄てしめたが爲に政黨そのものゝ健全なる發達を妨げたことで、も一つは早くより反目の勢をなしたが爲に藩閥に對する威力も案外強からず又不當の方法を以てするに非れば全般的結束を見難きの風を馴致したとである。之等の弊に懲りたればこそ今日更始一新の政を行ひたいなどといふのではないか。然るに今また同じ誤りを繰返さんとするは何事ぞ。無産政黨だけはせめて踏み出しの第一歩から純正公明のものであらしめたいと思ふのである。

無産政黨結成の順序

無産階級の民衆は原則として政黨に關係す可らずといへば無産政黨は如何にして發生し得るか。私の考としては、無産政黨は決して作るべきものではない。少く

ども急いで作るべきものではないと信ずる。昨今新聞の報ずる所に依ると、日本農民組合其他の肝煎で此秋には無産政黨の出來さうな勢が見える。新聞の社說などにも普選の實施を見てなほ無産政黨の出來ないのはどうしたものかと、暗にプロレタリアートを煽動するが如き論も見える。私の考では政治運動は大に起つてよし又起らないのが噓だと思ふが、政黨の結成には機未だ熟して居ず。機に先じて之を作れば必ず其結果が面白くあるまいと思ふのである。

政黨を作れば政綱も定まる。政綱の定ることは夫れ丈門戶を狹くすることだ。人は感情の動物である。政黨既に成立して幹部の顏觸等が定まると、後に代議士にでもなつたものは主義立場を同うしても一寸それに這入り難いといふこともあるのだ。要するに早く政黨を作るといふことは門戶の狹き澤山の黨派を分立せしめる恐れがある。他日必要が起つても其の結束を甚だ困難ならしむる恐れが大にある。

故に私の考では、今日の政黨運動は之を轉じて單純な準備的政治運動となし、此際は將來の選擧の際に應ずべき物質上精神上の準備のみに專心する方がいゝではないかと思ふ。そしていよいよ總選擧のあつた時相當の人を擧げて之を議院に送ることの出來るやうに用意しておく。―斯くてこゝに既成政黨に屬せざる若干の勞働代表議員とでもいふ者が現れたとき、之等の人々が集つて俱樂部が作られ、之から漸を追て政黨を發達せしめるといふのが最も適當の順序であるまいか。斯くすれば同じ傾向のあらゆる人々を網羅するにかたくないのみならず既成政黨から從來の不滿に堪へ切れずして馳せ參ずるものもあらう。それぞれの主義主張に贊成のものは來れといふよりも、既成政黨の政策に慊焉たるものは來れといふ方は門戶が遙に廣い。門戶を廣くして多くの人材を集め、其上で政黨的結束を彼等に成さしむるといふのであれば玆に政黨としての力のこもつた本當のものが發達するに違ないと思ふのである。

●●●●●●●●●無産政黨運動家に對する希望　無産階級に取て政黨運動は無用ではない。併し無産階級の民衆一般は自ら進んで政黨を組織し或は參加してはいけない。政黨はどこまでも自家階級中の政治專門家に任かすべきである。而して民衆一般が無産政黨と直接の關係がないからとてブルジョア政黨の籠絡する所となる可らざるは云ふまでもないが、無産階級だから必ず無産政黨に投票すると固定するのは却て無産政黨を墮落せしむる所以である。故なくブルジョア政黨に籠絡せられざるの聰明を維持しつゝ場合に依ては之と結ぶこともあるべき位の自由の態度を失はず以て絕へず無産政黨を緊張せしむることが必要である。要す

るに無產階級運動と無產政黨運動とは二者混同してはいけない。互に獨立別個なる二つの運動として對立してゐなければならぬ。たゞ兩者常時適當なる取引關係に置かるゝを要するは云ふまでもない。

無產階級は政治問題の處理を無產政黨に托するの對價として其の物質的支持を引受くべきは、他の政黨と民衆との場合と同樣、當然の話だが、この點うまく行くかどうかは將來の問題だ。而して之等の點に無產階級を訓練指導することは今日何よりの急務といふべきである。この意味に於て私は今日無產階級內の有識者間に政黨運動の起るのを必しも喜ばない、寧ろ之等の人々が教育運動に熱中し他日の準備を今日に築かれた方がどれだけ有意義であるか分らないと考へて居る。

最後に私は繰返していふ。民衆一般の立場として政治運動に目を開くのは幾ら開いてもいゝが、無產政黨には斷じて這入てはならないと。（九・九）

無產政黨問題追記

どうせ出來るものなら、無產政黨は全國的に統一されたものが唯一ツであつて欲しい。二つや三つになることはなるたけ避けたい。而して一たび二つ三つ出來てしまうと、後之を一つに纏めるといふことは頗る困難になる。我々はとくに此事に注意して置くの必要がある。要するに政黨は急いで作ると二つ三つに分れ易い。現に政治研究會が分裂したの共產主義派に乘取られたのといふ噂があるではないか。先き頃新聞に見えた無產政黨準備委員の暫定綱領とやらを見ても、あゝした偏理突飛な主張に拘泥するのでは、政治家としての素質に富んだ人程之に參加するを難んずるだらうと思はれる。感情から云つても、將來の代議士が政治に經驗のない學校出だての政黨幹部の頤使に甘んずるだらうか。つまらぬ感情で動いてはいかぬと云つたつて事實がその通り行かねば仕方がない。只問題は斯くの如く放任して可なるや否やにある。而してこれ實に無產政黨運動の前途に取つて重大の關係があるのだ。枝葉の戰術に屬する一小些事と謂はば云へ、全國的に統一された唯一の無產政黨を得んと欲せば此事斷じて輕々に附していけない。故に曰ふ、無產政黨は決して其の結成を急ぐ可らず、而して無產階級代表の議員が出來た上で彼等に其の仕事を一任せよと。

他日無產階級代表の政治家たらんとする者から觀れば、政

は一日も早く出來た方がいゝ。殊に選擧に於て政黨のあるとないとが成功不成功に重大の關係がある。併し政治家一時の便宜は以て無產階級永遠の利害を犧牲とすべきではない。若し早く政黨を作り其の力を以て選擧に臨まん乎、其の結果は政治家が目前の效果を擧ぐるに急ぐのあまり、既成政黨の忌むべき常套手段を依然踏襲して政界の腐敗を來すことがないだらうか。然らでないとすれば、やがて選擧民の方が政治家の要求を煩累と感じて政治に對する熱情を冷却するに至るだらう。

就中私の最も憂ふる所は勞働組合の政黨化である。勞働組合が政治運動をやる、之は毫も差支はない。けれども勞働組合が其儘政黨となるは、都鄙の百姓町人が進んで政爭に沒頭すると一般、百害あつて一利もない。勞働組合の支持をうくる無產政黨の出來るは好ましいことだ。が、勞働組合そのものが政黨となつてはいけない。近頃唱へらるゝ無產政黨は、私の觀る所に誤なくば、勞働組合そのものを直接の踏臺とするものらしい。是れ私が特に無產政黨の急速なる結成に反對する所以である。（九・一一）

貴族院政黨化の可否

貴族院政黨化は免れず　貴族院がいつまでも樞密院のやうでありたい又あらせたいと云ふのは無理だ。何百人かの人が集つて國事を議するとなれば其が自ら政黨化するのは已むを得ない。但し貴族院の政黨化といふことには二つの意味がある。一つは從來政黨政派に非ずと誇り來れる院內諸團體の行動が其の實質に於て何等政黨と異ることなきに至れることで、他の一つは貴院議員が一團として又は個人として下院の諸政黨と直接に連繫するに至れることである。貴院最近の狀勢はこの兩方面共に著しくして居るが、私共の觀る所では之は當然の勢で少しも怪むべき所がなく且今更之を昔に引戻すことの出來ぬものであると思ふ。

貴族院政黨化を忌む傳統的迷信　貴族院の政黨化といふと、世人は何となく貴院面目の汚瀆を連想し又貴院本來の使命の好ましからぬ轉換を涔へたりする。尤も貴院諸團體の行動が下院政黨の云爲に似るといふことの中には、研究會がよくやると非難さるゝやうに、腐敗手段で多數を羅致するに浮身をやつすといふ類のことが問題になり、又下院の政黨と直接の連絡が開けるといふ現象の中には、今度の多額納稅議員選擧に現に澤山の實例を見たやうに、選擧應援と交換條件に入黨したといふ類の醜態もある。即ち貴院の政黨化を促した目前の事實が何等かの

腐敗行爲を伴ふ所から。識者はどうしても好感を以て之を迎ふるを躊躇するといふわけである。政界に於ては我輩も固より世と多數の識者と其感を同じうする。

けれども之は貴族院政黨化の實際の順序に醜怪なものがあつたといふだけの話で。之に依て直に政黨化其事を是否するのは早計であらう。貴族院の政黨化といふことは動もすると隱れたる腐敗を伴ふものだから大に警戒せよといふのはいゝ。併し腐敗手段に由らなくとも政黨化といふことは起り得る。故に政黨化そのものゝ可否はまた別の見地から攻究せられなければならぬのである。斯う云ふ立場から私は、今日の政黨化を導き來つた過程には大なる不滿を有するに拘らず、一片の理論としては政黨化を以て當然の歸結となし寧ろ之を歡迎するに躊躇せざるものである。

然るに我國には單純な理論としても貴院政黨化を否認せんとする議論がある。而も多くの人に信奉せられて居るだけそは中々有力な議論となつて居る。其說に曰く、貴族院は下院の牽制機關として憲法上特殊の使命を有するものである。民間の輿論は時として輕佻に陷り易い。之を反映する下院亦從て時に過誤に陷らぬと限らぬ。之を一方に控制して國家の針路を誤らしめさらんが爲に二院制度があるのだ。故に貴族院は其の本來の職掌上、下院政黨の分野に入つてはならないのだと。成程此議論は其の前提を正しいと許せば筋は通つて居る。が、一體その前提は正しいものかどうか。貴族院を牽制機關だといふやうな說は今日でも臆面もなく唱ふる者が多いが、それは實は五十年も前の陳腐の說だ。民間輿論の輕佻など、云ふことは、現に時代に遅れた守舊家から唱へられることあり、又特權階級の人々より爲にする所ありて叫ばれることもある。之等は固より取るに足らぬ。民智の低く制度も不備であつた昔の時代には一時さうした事實のあつたこともあるが、今日の社會は最早全然昔日の觀を改めて居る。而して今日の定說では、最高の政治的文化價値は之を貴族にたづぬ可らず又富豪にたづぬ可らず、專ら多數民衆の信頼する所に求むべしとなつて居り、價値の創造に與るものは少數の識者に違ないが、併し其示された價値のどれが最高最上のものかは斷じて多數の意向にきめよといふのが近代デモクラシーの公理である。從て民間の輿論に最後の信頼を置く能はずとして特權階級の監視牽制を必要とするなどの論に今頃傾聽するものはない筈だ。固より事實の發展は理論の如くうまくは行かぬ。實際の事實に即しての議論なら別に幾らも云ふことはあるが、單純な理論としては今日最早民間の輿論は第三者の牽制を必要としない。今日は却て民意の暢達といふことが必要

と呼ばれる時代である。民意の暢達といふ實際政治に適用すると、一つは民意が如實に下院に現はるゝを防ぐる諸原因を取除くことであり、又一つは下院の意思が其儘法律となるに對する有らゆる障礙を排除することである。貴族院改革運動などもつまりは此の要求から起つたのではないか。斯ういふ時代に貴族院は牽制機關だからなどいふ議論の存在を許すのは自家撞着の甚しきものである。

●●●●●●●● 貴院政黨化は差支なし　貴族院議員は顧問官ではない。その政治家たる點に於て下院議員と何等異る所はない。政治家である以上孤立しては仕事は出來ぬ。政黨を作るのは當然である。然るに我國の貴族院の人々が長い間政黨の名を忌んだのはどういふわけか。是れ憲政創設の當初我が先輩政治家が政黨を以て國家の敵なるかに云ひ觸らしたからではないか。今日はもはやこの謬言に遠慮する必要はあるまい。我々は寧ろ進んで彼等が政黨を作り大膽に政治家としての十分の活動を遂げて貰ひたいとさへ考へてゐる。若し夫れ上院の政黨が下院の政黨に對して如何の關係にあるべきやに至ては、今は詳しく說かないが、兩者互に密接の連絡を取るのが當然で又望ましい事なる旨を一言しておくに止める。

●●●●●●●● 貴族院議員の特殊の使命　さうすると貴族院議員は何等下院議員と異る所なく、折角の二院制度も無意味になるといふ人があらう。二院制度の可否についての根本論にも私に一說あるが、之は姑く別論として、今日の二院制度を基礎として考ふるに、そが上院議員に對して特別の期待を置くといふことは我輩と雖も之を認めるものである。そは何かといふに、任期が長く解散がないといふ點にある。貴族院が貴族院として下院を牽制するといふのは間違つてゐるけれども、同じ政黨員でも之を上院におくものは、右の理由により、下院のそれよりも自ら別個の觀點から事物を評價する地位に在りといふのが即ち特殊の期待を置かるゝ點である。彼等も亦こゝから貴族院議員としての特殊の使命を政界につくし得るのである。故に貴族院が政黨化しても二院制度は決して無意義とはならない。二院制度を無意義ならしめざらんが爲に政黨化を非とするは、卿見當違ひの論たるを免れぬ。(九・十二)

時事雜觀

政治は朝三暮四であつていゝ、又時としてさうなくてはならぬものだ。

例へば現内閣で公債を募らうと云ひ出したとする。すると曾て聲明した非募債主義はどうしたと詰る者がある。大事な方針を換へるには何等か重要の理由なくばあらずとて之を一應たゞさねるのは樞密院邊の問題なら當然な話だ。けれども社會の輿論が漫然政策の轉換を難ずるのは甚だ失當であると思ふ。

社會は活物だ。而して人智には限りがある。子供にいつまでも同じ着物はきせておけぬ。責任を重ずる醫者は病人の症狀に應じて時々處方箋をかへねばなるまい。本當の政治家に在て政策の朝三暮四は決して咎むべきではない。要はたゞ其の轉換の動機如何に在るのみだ。

× × × × ×

此間轉宅した一友人の述懷に曰く、引ッ越した先きは元の家と同じ町内の爲でもあらうか、役所から歸つて無心に足を運ぶと、きッと元の家の門へ手を掛ける、多年の習性は恐しいものだと。併し之には何も不思議なことはない。そして考へて見ると其處にいゝところもあるがまた困る所もある。無心で足を運んでも兎に角我家の近所まで來れるのが習性のお蔭だ。幾ら開けた積りでも古い思想か國訛りの取り切れぬ様に頭のどこかにこびりついて時々我々を困らすのも亦致方がない。

之を致方なしとして適當に取捨選擇に骨折るのが我々の修養だ。然るに一旦引ッ越した以上は再び元の家へ足が向ふなんて馬鹿なことはないと事實を枉げて言ひ爭ふ年少政治家があるかと思へば、元の家へ足が向ふのが正しいんだと頑張つて、今ま他人の家へ其儘上り込み傍若無人に振舞つて世間を困らせる厄介な守舊家も居る。世はさまざまだ。

× × × × ×

私の友達にこの春火事で丸燒になつた男がある。先年は地震で妻君を喪ひ今また澤山もない家財一切を灰にし意氣頗る銷沈してゐる。所へ亡妻――天主教の信者であつた――の懇意にして居た尼さん達（その多くは無論西洋人である）から手紙が來た。見るといろいろ同情の深い慰問の言葉があり、最後に私共は何か貴所に御見舞を上げやうと熟議を凝らしたが其結果頗る適切なるものが見附かつた、それを差上げたいから近いうち取りに來て下さらぬかとある。尼さんだけに親切なことだと感心して其日に往つて見た。すると多數の尼さんが寄て來て云ふことには「あなた！決して失望してはいけません。何事も神様の御思召です。家財はあなたの手を離れたけれども今は天國で貴所を待つてるのです。貴所も早く天國に往て手慣れた家財と一緒に御なりなさい」と。變なとを云ふとは思つたが深く意に留めず默つて聞いて居ると、其のさきの言葉が頗る振つてゐる

と云ふのである。「私共は重ね〲の貴所の御不幸に深く同情し、此際貴所に取て一番必要なものを差上げるときめました」といふので、大した額でもあるまいが金を呉れるのだと推察して先づ多少氣の毒に思つた。「この事は私共が數ケ月絶へず頭をしぼり皆と額をあはしては相談を遂げた揚句きめたのですから、其のお積りで御受け下さい」と馬鹿に勿體をつけるのにいさゝか閉口したが、「それは即ち神様です。私共は貴所に神様を差上げます。神様がなければ貴所は天國に行つて奥さんにも家財にも御遇ひすることは出來ません。貴所に取つて一番大切なものは神様です。之を差上ますから貴所は一日も早く洗禮を御受けなさい」と打明けられて、開いた口が塞がらなかつたといふ。

私は思はず人を馬鹿にしてゐると叫んだ。イヤ馬鹿にしてゐるどころか向ふは大眞面目なんだと友達は云ふ。尼さん達は又とない贈物をしたと自ら大得意であるばかりでなく、この已れも同じく大に滿足してゐる筈ときめてゐるらしかつたと友達は附け加へた。

つまり尼さん達は我々と全く別の世界に住で居るのである。併し斯うした別世界は今日の社會に到る處にある。我々が現代の社會を正直に見て正直に批判すると、飛んでもない意外の駁論に遇ふことがある。其度毎に私共は友達が尼さん達に見出したやうな別天地を見せつけられるのである。此種の浮世ばなれをした人間がなか〲多いのだから、社會改造論者などは相手を眞人間と思つて輕々しく向ッ腹を立てゝはいけない。

×　×　×　×　×

郊外の友人を訪ねた。馬鹿に暑い夏の日盛りに、鼻の先の見すぼらしいバラックから大きい聲の不揃の歌が押しつける様に流れて來る。閑靜だと聞いたのに案外騒々しいねと云つたら、勞働者住宅が出來てから朝な夕な革命歌をわざとらしく怒鳴られるんで近所一體大閉口だと云ふのであつた。斯んなのが勞働運動の獅子身中の蟲といふのであらう。

×　×　×　×

人に迷惑をかけることに依て自家の存在を示さうとするプロレタリアートは、人を漫罵することに依てのみ僅に其存在をつなぐ反動的評論家と共に、正直な世間の鼻摘みである。

×　×　×

我輩のやうな者にも高い位地に居る政治家の友達がある。これ〲の件につき西洋に其の例があるか、あるなら之に關係する諸法規を調べて呉れといふ。先方の滿足する丈けの材料を提供して、さて之を我國に實施するの利害は…と論じかけると、イヤそれは聞かなくてもいゝと云て怫然として歸つて行つた。

利害得失の本論は聞かなくツても分つて居るといふのか、西洋の先例さへあれば立派に用は辨するといふのか。こゝが問題だが、不幸にして未だつきとめ兼ねて居る。

昨今、社會主義は悪いもんだといふことを適切に書いた本はありませんかと、能く高等教育に從事してゐる人から聞かれるのと思ひ合して、眼の着け所の餘りに我々とかけ離れてゐるのに驚かされて居る。（九・一三）

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤鱗太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない。所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまづくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此效力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良其の他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

貴郎は

緊張を御感じになりませんか
若しお疲れでしたら
最非サナトーゲンを召上りなさい
すぐと身心がシャンとなさいます



興味津々たる小冊子御要求次第無代進呈

眞正の強壯食料品

サナトーゲン

貴郎は青年の元氣と精力とを消耗することを防ぐことは出來ぬと御考へになりますか、決して否らず、いくらでも之を豫防することが出來ます。青年期の奮鬪的生活に於て最も大切なるものは神經と頭腦とです。若しも貴郎がサナトーゲンを御常用になるならば、事業の成功を期すべき力と元氣とは絶えず貴郎の身邊に湧き出るでせう。サナトーゲンは心身の氣力を確實に增進する唯一の強壯食料品です。世界中幾百萬の人々が此を常用してをるといふの事實。及びその人人の中には最も著名なる人士を含んでをるといふことは、サムトーゲンの強壯食料品としての效果が眞に卓越してをるといふことを雄辯に物語る一つの確かなる事實であります。

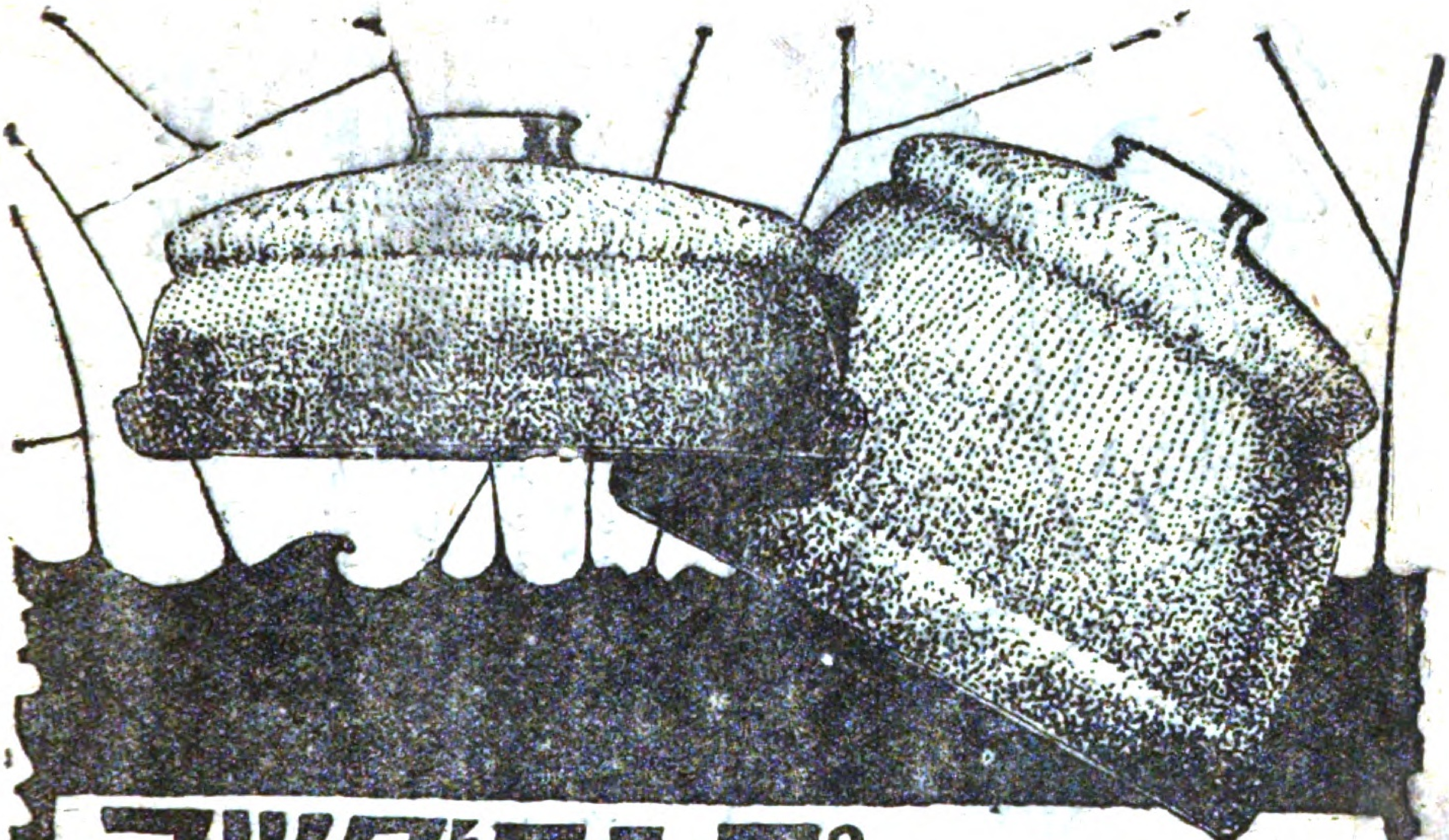
又、二萬四千人以上の醫家がサナトーゲンの效力を證明してをるといふの事實を御考へ下さい。每日規則正しくサナトーゲンを召上りになる御方は驚く可きほど精神の力と肉體の健康とを增進します。つまりサナトーゲンを召上りになれば直ぐと、無精な、疲れた心持を回復して活動的能力に無限の價値を賦與する元氣と忍耐力との源泉を創建いたします、サア、今サナハーゲンを召上つて、活動場裡に御出懸けなさい。

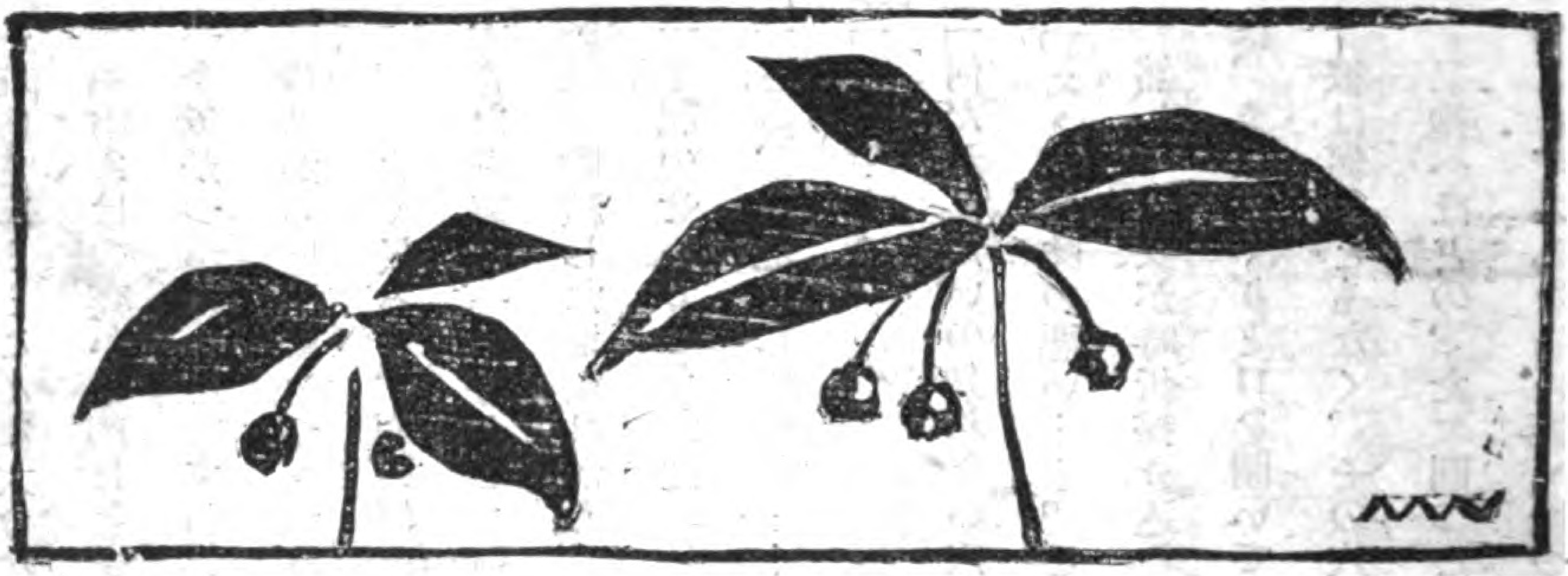
サナトーゲンは眞に強壯食料品として稀有の逸品です。

サナトーゲンが貴郎の心身を健やかにすることは云ふまでもありませんか、又貴郎の御兒樣や御家族の方々の御爲めにもなります。サナトーゲンは健康に且幸福なる家庭生活を建設するものであります。

◎全國到る處の藥店に販賣してゐます

サナトーゲン日本一手輸入元
神戸市海岸通一丁目英三番
ゼー、エル、タムソン株式會社
（神戸三宮郵便局私書函二十二號）





古井戸

豊島與志雄

一

初めは相當に拵へられたものらしいが、長く人の手がはいらないで、大小さまざまの植込が生ひ茂つてる、二十坪ばかりの薄暗い庭だつた。その奧の、隣家との境の板塀寄りに、圓い自然石が据つてゐた。

「今時、これほどの庭でもついてる借家はなかなかございませんよ。それですから、家は古くて汚いんですけれど、辛棒して住つてをりますの。」

「さうですね。手を入れないで茂るに任してあるところが却つて……。それに、あの奧の圓い石が一寸面白いですね。」

そんな風に、彼は主婦の房子と話したことがあつた。

その圓い自然石の側に、梅雨の頃、いつとはなしに、輕い地崩れがして穴があき、それが次第に大きくなつていつて、流れこむ雨水をどくどくと、底知れぬ深みへ吸ひ込んでるやうだつた。

「片山さん……こんな大きな穴が……。いつ出來たのでせう。」
梅雨あけの爽かな朝日を受けて、房子が箒片手に、こちらを振向いてゐた。
「今氣がつかれたんですか。呑氣ですね。」
椽側から庭下駄をつゝかけて、彼はわざわざやつて行つた。
が、よく見ると、石の側にぱくりと口を開いて、斜めに深くおりていつてる穴は、廣さはさほどでもないが、何だか大きな洞窟の一部分とでもいふやうな、測り知られぬ感じを持つてゐた。その上、穴の口から大きく半圓を描いて、二筋三筋斷續した地割れがしてゐた。
「土龍のせいでせうか。」
「さあ、土龍にしちやあ……。」
「では……。」
「何だかえたいの知れない穴ですね。」
「えゝ、氣味の悪い……。これからせつせと塵芥を掃きこんで、埋めてやりませう。」
然し、彼女が時折掃き込む塵芥では、なかなか埋まりさうもなかつた。一時口が塞つたかと思ふと、次の降雨の後には、またぱくりと口を開いてゐた。
彼は何故ともなく、その穴と穴の上の自然石とに、注意を惹かれていつた。
二抱へほどの、たゞ圓つこい普通の石だつたが、木石の配置上そこに据ゑられたものではなく、掘り出されたのか轉つてきたのかをそのまゝ投つてあるやうな、不自然な位置を占めてゐた。その石から一二尺離れて、半圓形に斷續の地

割れがして、その一端に、一尺足らずの細長い穴が、斜めに深く、横廣がりにあいてゐた。棒を突込むと、柔かな泥の感じですずるずるはいりこんで、それから先は石の壁のやうな固いものにつき當つた。穴の周圍を足で踏むと、石との間の地面だけが、五寸ばかり崩れ凹んだ。石の下深く、大きな洞窟にでもなつてるかのやうだつた。

「片山さん、何してるの。」

或る時、娘の光子が、家の中から見付けてやつて來た。

「あら。」

大きくなつた穴と彼の顔とを、ぢろぢろ見比べてゐたが、俄に眞面目な顔付になつた。

「そんなことすると、お父さんに叱られるわよ。」

「え、どうして。」

「危いんですつて。」

「なぜ。」

「なぜだか……この邊で悪戯をしちやいけないつて、お父さんがさう仰言つたの。」

「ぢやあ、この石の下に何かあるの。」

「知らないわ。」

光子は實際何にも知らないらしかつた。

彼は棒を投げすてゝ、首を傾げた。

二

——或るところで、古金銀貨幣、時價約三千圓ほどのものを、庭の隅から堀り出した。維新當時、壺に納めて埋めてあつたものらしい。

さういふ新聞記事を、彼は二階の室に寢そべつて、心の中で繰り返してゐた。馬鹿馬鹿しいが、それだけにまた空想を誘はれた。

ふと、半身を起して眺めると、檜葉や椿の茂みごしに、庭の奥の穴のところに、人影が動いてゐた。彼が幾度かなしたと同じやうに、棒切で穴の底をつゝいてみたり、穴のまはりを踏んでみたりしてゐる。それが、主人の松木庄作だつた。

はゝあ……といふ氣持と、太い奴だ……といふ氣持とで、彼はのつそり立上つて、階下の椽側へ降りていつた。

庭の植込の影から、松木は陰欝な顔付でやつて來た。朝早くから何處へともなく出かけて行き、夜分になつて歸つて來て、譯の分らない書類と睨めつこをしてる、いつもの通りの顔付だつた。

「今日はお出かけぢやないんですか。」

「えゝ。」

ぶつきら棒な返事だけで、椽側に來て腰をかけた。

「何でせう、あの向ふの穴は。」

「さあー、土龍か何か……。」

事もなげに答へて、彼の顔をちろりと見た。が暫くすると、ふいに口を開いた。
「あの分だと、上の石がめいり込んでしまふかも知れません。」
「いゝ石ですね。」
「何に使つたものですか……惜しい石ですよ。あれくらゐ大きな、自然に凹みのある石は、なかなか安かありません。惜しいものです。」
　そしてまた彼の顔をちろりと見た。その眼付が、いつぞや、格安の賣物だが知人に買手はないだらうかと、住宅の圖面を二三枚彼に見せた時のそれと、同じやうに底光りがしてゐた。
「ぢやあ、わきにどけたらどうでせう。」
　彼もちらと松木の顔を見返した。
「二人で動かせますかね。」
「大丈夫です、あれくらゐの石なら……。」
石が問題ぢやない、後が見物だ、と思つて、彼は勢よく跣足で飛び下りた。
鐵棒、荒繩、鍬、そんなものが用意された。
石は半ば土に埋つてゐるやうに見えたが、案外底が平らで、實は地面にのつかつてゐるだけだつた。深く掘る必要はなかつた。然し、鐵棒を挺にして押し動かさうとすると、そこの地面が崩れ落ちたり、足がめいり込んだりして、一寸困難だつた。がそれが却つて仕合せで、荒繩を下から通すことが出來て、二人で運び動かせた。
ほつと息をついて、見ると、思ひもよらない大きな穴が、宛も陷沒地のやうな風に、緣に一尺ばかりの斷層を作

て、そこに口を開いてゐた。
「一體何でせう、こゝは……。」
彼はちらと松木の顔を見やつた。
「池でも埋めた跡ですかな。」
松木はぞつぽを向いて、額の汗を拭いてゐた。
「それにしても……。」
方々を力足で踏んで見ると、陷沒の範圍が次第に大きくなつていつた。
「掘つてみませうか。」
「さあーうつかり手をつけて……。」
「なあに、御自分の庭ぢやありませんか。金魚池でも掘るつもりにすりやあ……。」
松木はぢろりと彼の顔を見た。
「なるほど、金魚池……。」一寸間を置いてから早口に云ひ初めた。「光子が金魚が好きでしてね、隨分買つてやつたものですが、何しろ硝子の容物でせう、ぢきに死んでしまうので、それきり一切金魚は止めましたが、こゝに池を掘つてやりやあ、そんなこともありますまい。なに譯はありませんよ。私一人で充分です。この通りもう崩れかゝつてる地面ですからね。……だが、まあ立合つてみて下さい。もし白骨でも出て來ると、厄介ですから……。實際えたいの知れない穴で……あなたが立合つてゐて下されば安心です。」
椽側の方へ小走りに馳けていつて、着物を脫ぎすてゝ、褌一つきりになつて戾つて來た。

彼は鐵棒を持つて、移し動かした石に腰をかけてゐた。

松木は穴の中に踏みこんで、その緣から次第に掘り擴げていつた。案外隆々とした筋肉の上に、茂みを洩れてくる日の光が、明るく躍りはねた。發掘は容易らしく、上層の固い地面以外は、みな柔かな黑土で、膝頭ほどの深さになつても、同じやうな土ばかりだつた。穴はどこへいつたか、掘り荒されて分らなかつたが、やがて、がちりと鍬の先に音がして、小石交りの層となつた。

「ほう、これは……。」

汗にまみれて、鍬の柄を杖につゝ立つた松木の眼は、異様に光つてゐた。

「いやに小石がつめてありますね。」

彼も思はず眼を光らして覗き込んだ。

「そしていやに固まつてるんで……。」

小石の層に添つて、松木は益々掘り進んでいつた。それが次第に固く、徑四五尺の圓となつた。周圍はみな小石がつまつて固く、中だけ新らしい黑土で柔かだつた。それを膝頭の上まで掘り下げた時、松木は穴から飛び出して、暫く首をひねつて考へた。

「これは……何ですよ、屹度、古井戸の跡ですよ。」

「え、古井戸。」

彼も立上つて穴を覗いた。

「古井戸を埋めた跡です。」

云はれてみれば、全くそれに違ひないらしかつた。

「ぢやあ、いくら堀つても駄目ですね。」

「駄目です。」

うつかり云つて顔を見合つた。瞬間に、松木はひどく兇悪な表情をしたが、次にはアハハと高笑ひをした。

「古井戸の上に金魚池を掘らうとしたところで、とても……。」

駄目だ、とはさすがに云ひかねたものか、ぶつりと口を噤んで、それから急に腹立つたらしく、掘り起した黒土を元通り直しにかゝつた。

土がすつかり元に直るまで、松木は一休みもしなかつた。朝日の光を受けてる、その脂ぎつた體力のよさを、彼は皮肉な眼で眺めてゐたが、何故だか、自分自身も一寸氣持が納まりかねた。

掘り返されたためか、土の不足も見せないで、地面は平らになつた。

「ついでに一寸手助つて頂きませうか。」

松木はいきなりさう云ひ被せて、彼に手傳はせながら、圓い自然石を庭の程よいところに据ゑた。それから更に不機嫌さうに、裏口の方へ行つてしまつた。

松木が手足を洗つて錢湯へ出かけた後まで、彼は縁側に腰掛けて、ぼんやり煙草を吹かしてゐた。

そこへ、房子がやつて來た。

「あの穴は、何だかお分りになりましたの。」

「え、松木さんは何とも仰言らなかつたんですか。」

「えゝ、宅はいつでも、何にも聞かしてはくれません し、わたしも別段……。」
「へえ――。不思議ですね。」
どこが不思議だといふやうな面持で、彼女はまた尋ねた。
「そして、あの穴は……。」
「古井戸を埋めた跡ださうです。」
「古井戸、」と一寸眼を見開いた。「さう分れば、安心ですわ。」
「安心ですつて。」
「えゝ、わたしはまた、お墓の跡でもあると困ると思つて……。」
善良さうな眼で庭の方を透し見てゐた。
クク、……と彼は突然笑ひ出した。
「あら、何を笑つてゐらつしやるの。」
千三や……と云つても、萬に三つも當るかどうか分らない松木が、寶を掘出しそこねて腹を立てたことゝ、何にも知らないでゐる細君が、古井戸の跡と聞いて安心したことゝが、妙に對照をなして、納まりかねてた彼の氣持を落付かした。
彼はまた、クク、……と獨笑ひをした。

三

ふうわりと土を被せた古井戸の跡は、降雨の度に少しづつ凹みながらも、もう穴を開くやうなことはなかつた。そして圓い自然石だけが、荒れた庭の眞中に、得意然と構へてゐた。

彼はいつしか、古井戸のことを忘れかけた。ところが、その秋の或る夜、怪しい夢をみた

——何處だか分らない、或る床の高い椽側に腰掛けてゐた。前は廣々とした庭で、築山や植込の模様から配石の工合まで、昔の大名の屋敷を思はせるものがあつた。その庭の眞中に、井戸があつた。おや、と思つて見たとたんに、井戸の眞上に、車卷の枠の上に、若い女が腰掛けてゐる。着物は分らなかつたが、高島田に結つた綺麗な女で、彼の方を見てにこにこ笑つてゐる。お轉婆な女だなと思つて、彼は二口三口からかひかけた。何と云つたのか文句は覺えてゐないが、女がなほにこにこしてゐるので、次第にひどい惡口を云ひ初めた。するうち、女は俄にきりつと眉を逆立てゝ「何を！」と男のやうな聲で怒鳴りつけて、井戸枠からするすると下りて、眞直にやつて來る。彼は逃げようとしたが、どうしても身體が動かない。もう女は眼の前にやつて來て、彼の着物の襟を掴んで、締めつけ初めた。馬鹿に大きな力で、大磐石にでも押へつけられたやうで　いくら踠いても、身動きさへも出來なかつた。女はなほも襟元をしめつけながら、ぐいぐいと押してくる。彼は椽側の柱に押しつけられ、息がつまり、身體がひしやげ、苦しさにむーとこらへた、とたんに、ほーとして眼が覺めた。

身體中にねつとり脂汗をかいて、手足が痺れてゐた。がそれよりも更に不思議なのは、夢に見た光景が一々、覗眼鏡でも見るやうに、實物以上の透き通つた明瞭さで、まざまざと頭の中に殘つてゐた。庭の有様、車井戸、井戸枠に腰掛けてる高島田の女、その女がすーつと下りてきて襟を締めつけたこと、それらが一々、陰影のない明るさで浮び上つてゐた。たゞ、庭以外のことゝ、女の首から下とだけは、何にも分らなかつた。

彼は怪しくぞーと寒けがして、起上つて電燈をつけた。室中がぱつと明るくなつたが、その光の屆かないどこか奥深い暗闇の中に、庭や車井戸や女のことが、くつきりと浮出してゐて消えなかつた。

それでも彼は、家の人達を呼び起すのも不甲斐ないと、不氣味なのをぢつと我慢して、とうとうその夜を明かしてしまつた。

いつものと違つた、餘りにはつきりしてるその夢が、長く彼の頭につきまとつた。庭の古井戸と結びつけて考へたりしたけれど、自分でも馬鹿馬鹿しくなつて、誰にも話さなかつたが、やはり頭の底に始終氣掛りなものが出來て、それからは電燈をつけたまゝ寢ることにした。

それが、忘れるともなく薄らいでいつた、年を越して春のこと、彼は二三の友人と芝居を觀に出かけた。番組の中に皿屋敷があつた。その一幕を見て、彼はまた夢のことをはつきり思ひ浮べた。

までは未だよかつたが、幕間に酒を飲みながら、話は皿屋敷の故實から、昔の大名の行跡にまで及んでいつた。その時、友人の一人が、變な話を彼に聞かした。

「……そんなら、丁度君の下宿のあたりだよ。あの邊に、昔或る旗本の屋敷があつてね、それがまた癇癖の強い亂暴な男だつたらしい。或る時、子供を守りして一人の女中が庭で遊んでゐた。そしてどうしたはづみか、その子供が、庭の井戸の中に落つこつて死んでしまつた。あの皿屋敷の井戸のやうなやつで、昔の廣い庭にはよくあつたものだ。さあ主人の立腹つたらない。女を縛り上げて、井戸の側に引き立てゝ、お前がこの中に子供を落したんだな、お前が落したんだな……と云ひながら、女の頭をむりやりに井戸の中にさしつけて、責めさいなんだ揚句、拔打にすぱーりと、その首を井戸の中に切り落した。それからは、その井戸に何か變異があるとか、僕の祖母が、僕がまだ小さい時、詳しく話し

てきかしたものだが、そんな他愛ない話は、祖母が死ぬと一緒に忘れてしまつた。然しとにかく、召使を手討にするなんか、昔の大名は平氣だつたらしいね。」

　彼はぎくりと胸にこたへて、暫く友人の顔を見守つてゐた。

「その、何とか云ふ旗本の屋敷は、僕の下宿のあたりにあつたのかい。」

「さあ、うろ覺えなんだが、祖母の話ではたしか、町名や番地など、どうもさうらしいよ。……何だい、變な顔をするぢやないか。何か出るのかい。」

「出やしないが……。」

「はゝゝ、出たらお慰みだ。皿屋敷なんかより、その方が本物で面白いわけだがね。」

　一笑に附されてしまつて、彼は夢のことを云ひ出しそびれた。然しそれがひどく氣にかゝつた。後の芝居は見る氣もなくぼんやり眼をやつてるだけで、しきりに夢のことや友人の話が考へめぐらされた。話を聞いてから夢にみることは、世にありさうだが、話をきかない前にそれと符合する夢をみることは、滅多にあるものではない。その上、いやにはつきりした不氣味な夢だつた。ばかりでなく、掘り返した古井戸の跡や、あの變な自然石など、考へれば考へるほど、怪しい糸がもつれていつた。

　そして、その晩も、翌日も、變挺な氣持で過した。庭の方を見ると、圓い自然石が、植込の茂みの葉裏のせいか、蒼と青白く光つてるやうだつた。そして古井戸の跡は、一面に四五寸ほども落ち凹んで、もう苔生して、くつきりと圓い形を現はしてゐた。

「何をぼんやり考へこんでゐらつしやるの。」

さう云つて、椽側に屈みこんでる彼の方を、房子が覗きこんできた。

その、眼の光の鈍い善良な顔付を見て、彼はふと、凡てを彼女に打明けてみる氣になつた。

「まあ―。」

呑氣さうな彼女の顔が一寸固くなつた。

「ですが、何處のことだかよくは分らない昔話と、たゞ一度の夢とだけですから、或は氣のせいかも知れません。」

「けれど、さう云へば、あの石だつて何だか變ですわね。……どうしてあんな石を、庭の眞中に据ゑる氣になつたのでせう。」

「いえ、あの石だけなら、面白いぢやありませんか。……いや屹度、氣のせいかも知れません。こんな話は誰にも内緒にしといて下さい。うつかり話して、人の笑ひ草になつちやつまりませんから。」

「えゝ、それはもう、どなたにも話しはしませんけれど……。」

「變な時に、お菊の芝居なんか、とんだものを見たものです。」

さう云つて、彼は初めて苦笑した。實際、彼女に打明けてしまつたので、胸が晴れたやうな氣持だつた。

四

それから二週間ばかりたつた午後、一人の男が階下に訪れてきた。松木が不在だつたので、房子が暫く應對をしてゐたが、やがて二人は庭に出て、古井戸のあたりで立話を初めた。黑つぽい銘仙の着流しに、古縮緬の兵兒帯をきつけた、ひよろ長い半白の老人だつた。

彼は二階で書物を讀んでゐたが、古井戸の邊の話聲に、何だか氣掛りになつてきて、それとなく様子を見に降りていつた。すると、椽側に腰掛けてた老人につかまつた。

老人は家作の差配人だといふことが、話の調子で彼にも分つた。初めは何氣なく彼に言葉をかけておいて、つまらないことで彼を引止めてから、遠廻しに除々と、古井戸の方へ話を向けていつた。その側で房子が、何だか落付かない様子で、しきりに彼へ目配せをしたが、彼はその意を察しかねて、いゝ加減の返辭をしてゐるうちに、ふと、意外なことが老人の口から洩らされた。娘の光子が、屢々惡夢にうなされるといふのだつた。

「え、何ですつて、光子さんがうなされるんですか。」

彼の喫驚した言葉に、房子ははつとして顏を伏せてしまつたが、老人は切れの長い眼で、彼の顏色をぢろりぢろり窺ひ初めた。

「いえ、なあに、古井戸の跡だときいて、一寸夢をごらんなすつたまでのことで、子供にはありがちのことですからなあ、御心配にも及びませんと、私から今もさう奥さんに申上げてるやうな次第で……。」

「さうです、何でもないことでせう。さう云やあ實は、私でさへ變な夢を見たことがあるくらゐですから。」

「ほう……してみますと何か、やはりその、古井戸のことで……。」

「えゝ、馬鹿げた夢です。」

そこで彼は、房子や老人に安心させるつもりで、夢の話をごくあつさりとしてきかした。女人の昔話なんかは勿論語らなかつた。

房子は始終默つてゐたが、老人は次第に膝をのり出して、首を傾げ初めた。そして彼が話し終つてから、暫くして、

結論めいた調子で云つた。

「なるほど、世の中には理外の理といふことゝもありますからな、何とか一つ考へてみませんければ……。」

「いえ、考へて氣にするから夢もみるんです。氣にさへしなけりや、古井戸の跡なんか、どこにだつてあることですし……。」

「云つてみればまあそんなものですが、奥さんも御心配でせうし、なるべくその……世間にぱつとしない方がお互の爲ですからな。」

話の調子が、初めとはまるで反對になつてゐた。その上、房子は始終下を向いて、時々ちらと彼の方へ目配せをした。彼は腑に落ちかねて、二階へ退いていつた。

階段を上らうとすると、茶の間の片隅に、光子がぼんやり坐つてゐた。彼はそれを二階へ連れて上つた。

「今聞いたんですが、何か、古井戸の夢をみるんですか。」

光子は彼の顔をぢつと眺めて默つてゐた。

「なぜ私に隱してゐたんです。え、どんな夢をみるんです。云つてごらん。え、どんな夢。」

光子は頭を振つた。

「ねえ、默つてゝは分らないから、本當のことを云つてごらんなさい。……え、どうしたの。」

光子は脅えたやうな顔をして、低い聲で云つた。

「夢なんか見ないの。」

「え、見ない。だつて、お母さんは、光子さんが夢でうなされるつて……。」

光子は一寸、呆けたやうな眼付を空に据ゑたが、いきなり彼の肩に飛びついてきて、囁くやうな調子で云ひ初めた。

「夢なんかみないのよ。でもね、お父さんが、恐い夢をみると云はなけりやいけないつて……。嫌だと云ふと、ひどく叱られたの。それであたし、一生懸命に云つてやつたわ。恐い夢をみて、ちつとも眠られないつて。するとあのお爺さんが、ぢいつとあたしの顔を見たの。あたし吃驚して、いろいろ恐い夢の話を、一生懸命に、教つた通り話したの。恐い夢の話を聞いて、その通り思ひこまなけりやいけないつて、さうお父さんに云はれたから、あたし、夢にみたんだ、夢にみたんだつて、しよつちゆう考へてたのよ。すると、何だか、本當にみたやうな氣もするの。あたし、恐いわ。」

彼女は眼をぎらぎら光らしてゐた。

「どんな夢です。」

それは馬鹿馬鹿しい夢だつた。廣い綺麗な庭の中に車井戸があつたり、庭の古井戸の跡に赤ん坊の泣聲がしたり、女の首がどこからか轉つてきたり、其他いろんなことだつた。然しどれもみな、彼が友人から聞いた昔話に基いてるものであることは、明かに見て取られた。

「そして、お母さんは……。」

「お母さんはね、あたしが叱られて泣いてると、お父さんと喧嘩をして、ひどく打たれたのよ。それからちつとも、あたしの味方をしてくれないの。」

「そして、夢をみたことは本當なんですね。」

「えゝないの。……だけど、恐いわ。」

彼は光子を抱きしめた。

「私がこれからついてあげるから、もう夢の話なんか考へちやいけません。ねえ、忘れてしまふんですよ。誰が何と聞いても、知らないと云つて、忘れてしまふんですよ。」

光子は彼の肩にすがりついてゐたが、しまひに泣き出してしまつた。

「泣くんぢやありきせん。」

さう云ひながら彼は、眉根を寄せ額に手をあてゝ、深く考へこんだ。

五

六七人の井戸掘人夫がやつて來て、庭の奥の古井戸の跡を、また元通り掘り初めた。

彼は一人憤慨しながら、その氣持を誰に持つて行きやうもなかつた。松木に向つては何とも云へなかつたし、また房子に對しても、光子が後で叱られはすまにかといふ恐れから、つきこんだ話をするわけにはいかなかつた。

そして彼は、折を見てはそれとなく房子の口から、大體の事情を探り出した。萬事が凡て、松木の考へから出たもので、その計劃通りになつたものらしかつた。松木は房子から、彼の夢の話と昔話とを聞き知つて、一狂言仕組んで、差配に談判した。それにうかと差配はのせられてしまつた。彼の素直な夢の話までが、却つて反對の意味に役立つことになつた。そして結局、怪談を内緒にするといふ條件で、家賃を向ふ六箇月の間多少減じて貰ひ、その上古井戸を掘り返して貰ふといふことになつたものらしかつた。

彼は時々庭に下りていつて、埋められた黒い土が掘り出され運び去られるのを、不思議な氣持で眺めやつた。差配の老人も時々見廻つて來た。

「あの圓い石が井戸跡にのつてゐたんですが……どうしたのでせう。」

云つてしまつてから彼は、俄かにはつと氣が咎めた。然し老人は、何にも氣付かないらしく、庭の眞中の石の方を見やつて答へた。

「それもやはり、埋めていけない井戸を埋めたので、そんなことをしたものでせうな。ですが、元通り掘つてしまへば、そんな石も必要がなくなるわけでして、へゝゝ、もう安心ですよ。……大體この、一度埋めたのをまた掘り返すといふのは、法にないことださうですが、初め埋めたのが惡いといふので、却つて法に戻すんだとか云ひましてな……。」

井戸は前の差配の折、十年ばかり前に、古び廢れてるのを埋めたものださうだつた。

そして新たに拵へ直されたものは、昔通りの車井戸だつた。

掘り初める時にやつて來たといふ神官が、再び白衣でやつて來て、井戸に向つて祈禱をした。榊の枝を飾つた簡單な供物机を据ゑ、御幣を打振つて祈禱の文句を唱へながら、鹽と神酒とを交る代る、幾度も井戸の中に振撒いた。

いつもの通り陰鬱な沒表情な顏をもつてる、日燒けのした淺黑い松木の顏を、彼は遠くから睥みつけてやつた。そして井戸には近寄らなかつた。

井戸はいろんなことに利用され初めた。ビールや西瓜や其他さまざまのものを吊して冷す、大きな笊が用意されたし、水は庭の撒水に使はれた。松木は毎朝井戸水で顏を洗つた。

松木は晝間不意に歸つてきて、背中の汗を井戸水で拭いて、また何處へともなく飛び出してゆくことがあつた。その姿を二階の椽側から認めると、彼は慌てゝ障子の影に隱れた。

大きな楓の木影が、ちらちらと日光の斑點を交へて落ちてる、新らしい井戸端で、胴のでつぶりした足の短い、猿股

一つの松木の身體が、冷かな井戸水を含んだ手拭で、きゆつきゆつと拭かれてゐるのを、樹葉の植込越しに見ると、彼は云ひ知れぬ憤慨の念を覺えた。松木の脂ぎつた汗が、楓の木影や新らしい井戸端を汚すもののやうに思へたばかりでなく、考へたくないいろんなことが、一時に頭へ上つてきた。

然し彼はどうすることも出來なかつた。松木の裸體を避けて、障子の影で一人憤慨した。

たゞ彼が多少心嬉しかつたことには、光子は少しも井戸に近寄らないで、一人離れて考へこんでゐることが多かつた。よく二階に上つてきて、彼の側に默つてついてゐることがあつた。彼はさうして彼女と二人で、話も遊びもしないで、ぼんやりしてゐることが好きになつた。

六

光子は次第に瘦せ細つてゆくやうだつた。殊に顏色が目立つて蒼ざめ、額から頰へかけた皮膚が總毛立つたやうになり、眼が黑ずんで變に光つてゐた。時折、動物園や植物園なんかに連れ出しても、餘り喜ばなかつた。

彼は心配して、加減でも惡いのかと度々尋ねた。然し彼女は默つて頭を振るばかりだつた。

「どこも何ともないわ。」

しまひにはさう云つて、淡い微笑を浮べた。

さういふ光子の樣子に、房子も心配し初めたらしかつた。そして或る時、どうも光子が夜中によく起きるらしいと、不思議さうに彼へ話した。

彼は驚いた。そしてなほよく尋ねたが、房子の話は更に要領を得なかつた。夜中に、ひよいと布團の上に坐ることが

あるけれど、それも夢中にするのらしく、またおとなしく寢てしまうのだと、たゞそれだけのことだつた。

「わたしがいくら聞いても、何とも云ひませんから、あなたから聞きたゞして頂けませんでせうか。」

「さうですね……。」

彼は曖昧な返事をしたが、しきりに氣掛りになつてきた。然し光子にいくら聞いても、はつきりした答は得られなかつた。

ところが、雨のしとしと降る或る夕方、光子は彼を階下の椽側でふいにつかまへた。

「あたし恐いわ。」

「え、何が。」

「あすこが開いてるから。」

彼女の指さす方を見ると、椽側の欄間の板に二三寸隙間が出來てゐた。

「寢てると、夜中にあすこから、外が見えるの。」

彼は初めてそれと悟つて、房子から木片を探し出して貰つて、欄間の隙間を塞いでやつた。

「これでいゝでせう。」

「えゝ。」

首肯いた光子を、彼は二階に連れて行つて、ゆつくりいろんなことを尋ね初めた。光子はぽつりぽつり話してきかした。やはり、夜中に變な夢をみるのださうだつた。

「何だか、井戸の邊から、眞黑なものがやつて來るやうなの。」

夢といふのはそれきりらしかつたが、その夢をみると、いつまでも眠れないさうだつた。

「なぜお母さんにさう云はないんですか。」

「だつて……。」

「そんな時には、お母さんを起すんですよ。」

「だつて……叱られるんですもの。」

「叱られたことがあるんですか。」

「えゝ、お父さんに。」

「どうして……。」

「あたし夢をみて、それから眠られなくなつて、布團の上に坐つてゐると、お父さんがふいに起き上つて、恐い目で睨みなすつたの。夢をみて眠られないからつて云ふと、もう夢なんかみなくつてもいゝから、さつさと寢ておしまひつて……こんどからそんなことをすると、ひどい目に逢はしてやるつて……。それであたしびつくりして、布團の中に頭からもぐりこんでしまつたの。」

「お父さんがそんなことを云はれたんですか。」

「えゝ。だからあたし、いくら夢をみて眠られないでも、ぢつと我慢してるの。」

「どうしてまた、早く私に云はなかつたんです。いくら聞いても隠してばかりゐて……。これから何でも云ふんですよ。」

「えゝ。だつて……。」

「なあに……。」
「お父さんが……。」
「何か仰言つたんですか。」
「え丶、あの、こないだ、お爺さんに云つたでせう、恐い夢をみるつて、嘘をついて……。あのことをあたしが云ひつけたつて、怒つてゐらしたの。そして、これから片山さんに何か云ひつけたら、ひどい目に逢はせるつて……。」
「でも、私に饒舌つたと、お父さんに云つたんですか。」
「い丶え。」
「ぢやあ、お母さんに……。」
「い丶え、誰にも云やしないわ。」
「それぢやあ、どうしてお父さんに分つたんだらう。私も云やしないし……。」
「何でも分るのよ。」
「え、なぜ。」
「なぜだか、何でも分るの。だからあたし、恐いわ。」
光子は眼を据えて、縋りつくやうに彼の顔を見入つてきた。彼は唇をかみしめた。
「これから、何でも私が引受けてあげます、ね。だから、みな打明けるんですよ。そして、お父さんに叱られるやうなことがあつたら、私のところへ逃げていらつしやい。」
「そんなことをして……。」

「構やしません。あんなひどい……。」

彼は愛に不氣味な氣持と憤ろしい氣持とを同時に感じた。

それをぢつと我慢して、いろいろ光子を慰めてやつてから、階下に降りてゆくと、房子が茶の間で針仕事をしてゐた。その善良な鈍感な顔を見て、彼はいきなりきめつけてやつた。

「光子さんはやはり、恐い夢をみて夜眠れないんです。それを今迄放つとくなつて、餘りひどいぢやありませんか。」

「まあー、夢をみて眠れないのですつて……。」

「さうです。それもあなた達が、差配をだますために、嘘を本當のやうに云はせようとしたからです。」

房子は彼の激しい調子に、きよとんとした顔付で呟いた。

「わたしは止めたんですが、宅が强ひて云ふものですから……。」

「松木さんがどんなことを云はれようと、あなたは母親ぢやありませんか。あくまでも庇つてやるのが本當です。」

「ですけれど……。」

「一體あなたは、餘り人が善すぎるからいけないんです。松木さんがどんな考へ方をして、どんなことをされてるか、あなたは御存じないのですか。」

「あの通り、何にも聞かしてはくれませんので……。」

「聞かうともなさらないんでせう。」

「聞いたところが、わたしには何にも分りませんし、男の仕事に女が口を出すものではないと云はれますと……。」

「よくそれであなたは、不安ぢやないんですね。」

「わたし、こんな性分なものですから……。」
「それでも、光子さんが可愛くはないんですか。」
「えゝ、それはもう……。」
「ぢやあ、せめて光子さんのことだけなりと、もつとしつかりなさらなくつちや……。」
「自分でもさう思ひますけれど……。」
「現に光子さんがどんな氣持でゐるか、お分りですか。」
「だからあなたに……。」
「聞いて貰ふと仰言るんですか、自分の娘のことを……。」
そんな風に、彼は房子を云ひこめてるうちに次第に氣持が白けてしまつて、口を噤んだ。馬鹿馬鹿しいのか腹が立つのか、自分でも分らなかつた。そこへ暫くしてから、房子はふいに云つた。
「わたしはもう、長年のことで、諦めてをりますの。」
溜息と共に彼女がふいに涙ぐんだので、彼は茫然としてしまつた。

七

何といふ變な人達ばかりの集まりだらう、と彼は考へた。そしてその考へはいつも、松木に對する憤りに落ちていつた。
然し彼は、松木に對してだけは、面と向ふと、少しも物が云へなかつた。庭の穴を掘り返してみた時以來、彼は殊々

松木と話をしたこともなかつた。そして影でたゞぢりぢりするだけだつた。

松木は相變らず千三の仕事に、一日中馳け廻つてるらしかつた。夜歸つてくると、茶の間でいつまでも煙草を吹かしたり、奥の坐敷で書類と睥めつこをしたりして、家族の者とも餘り口を利かずに默つてゐた。

彼も時々それと對抗するやうな氣で、蚊に刺されるのを我慢しいしい、階下の茶の間にぢつと坐つてることがあつた。

意識の全部が松木の方へねぢ向けられて、ぢりぢり苛ら立つていつた。

二十萬とか五十萬とか、いつも十萬のつく金額ばかりを口にしてる松木、困つてくると細君の着物まで質に持つて行く松木、十二三歳の自分の娘に危い狂言をさしてまで、差配を瞞着してしまつた松木、細君を頭から押し伏せて、馬鹿みたいになしてしまつてる松木、娘をおどかしつけて、始終恐れをのゝかしてる松木、碌に誰とも口を利かないで、而も何でもよく分るといふ松木、その松木全體の存在が、彼には堪へ難いものゝやうに思へてきた。

日に燒けた淺黒い、いつも陰欝な沒表情な額、さほどの年齢でもないのに、ぽつぽつ白いのゝ見える五分刈の荒い頭髪、時によつて妙に濁つたり鋭く光つたりする眼、頑丈さうな齒並と固い唇、太い頸筋、長い胴體、短い足、どこと云つて異常な點はないが、見れば見るほど憎々しいその身體全體が、彼には堪へ難かつた。

それが、そこに、電燈の光の下に、蟇蛙のやうにのつそりと構へこんでゐた。存在することだけで既に罪惡のやうだつた。

馬鹿馬鹿しいと思ひながらも、彼はやはりその方へばかり意識が向いていつた。手を動かし足を動かし、一寸身動きをすることまで、一々相手に反射するやうな氣持だつた。ぢつと我慢をしてゐると、額から脂汗がにぢみ出てきさうだ

つた。

何か機會があつたら、一寸したきつかけがあつたら、ぶつかつていつてやらうと思ふ、その思ひだけで、自分はどんなことを仕出來すか分らないといふ恐怖が湧いた。

房子も光子も隅の方にすくんでゐた。

その房子を松木は顎でさし招いて、晝間から井戸に冷しておいた西瓜を切らした。そしてそれを彼へも勸めた。

「一寸腹工合を惡くしてますから。」

やつとのことで彼はそれだけ云つて、默つて西瓜をかぢつてる松木の前から逃げるやうに、二階の室へ上つてしまつた。そして初めて安らかに息がつけた。

俺は一體何をしてるんだ、と自分で自分に云つてみても、松木の前に出ると、彼はどうにも出來なかつた。

松木が家にゐると、なぜか光子までが、二階にやつてくるのに足音を忍ばしてゐた。そして彼のところへ來て、ほつと息をつくらしかつた。

「やつぱり夢をみるんですか。」

「えゝ、時々よ。」

「ぢやあ、私がいゝものを借してあげませう。これを枕頭に置いて寢ると、惡い夢なんかちつとも見ないんです。いゝですか、さう思ひこんで、ぐつすり眠るんですよ。」

今迄躊躇してゐたが、彼は思ひきつて、一尺足らずの小さい短刀を取出して渡した。

「あら、これ刀ね。」

「えゝ。」
氣味惡さうに膝の前に置いて眺めてるのを、彼はしひて手に持たしてやつた。
「枕頭に置いて寢ると、決して惡い夢なんかみないんですよ。」
「だつて、見付るわ。」
「構やしません。私がむりに持たしたんだと、さう云つてごらんなさい。」
「叱られやしないかしら。」
「叱られたら、逃げていらつしやい。私が云ひ譯をしてあげるから。」
「さう、屹度ね。」
「えゝ。大丈夫。」
どんなことになつたつて構ふものか、と彼は變にびくびくしてる自分の胸に、自分と云ひきかしてやつた。

八

光子は惡夢をみることがないやうになつた。俄に元氣に活潑になつていつた。
「もう夢をみないでせう。」
「えゝ。」
「よく眠れますか。」
「えゝ。よく眠られるわ。」

にこにこして彼の顔を見てゐた。
「ぢやあ、もうあの刀はいゝでせう。」
光子は頭を振つた。
「え、どうして……。あんなものをいつまでも持つてるものぢやありません。」
「だつて、また夢をみると困るから。」
「その時はまた借してあげます。」
「いやよ、あれ、あたしに頂戴ね。」
「あんなものをどうするんです。」
「大事にしまつとくの。」
「そんなことをすると、本當に叱られますよ。」
「大丈夫。誰も知らないから。」
「でも、枕頭に置いて寢たんでせう。」
「いゝえ。」
「ではどうしたんです。」
「誰にも分らないやうに、あたし、抱いて寢たの。」
「え、刀を抱いて寢たんですか。」
「えゝ、毎晩抱いて寢て、朝になるとそつとしまつといたの。」

「どこに。」

「そこの、三疊の、あなたの押入の中に。」

嬉しさうな笑顔をして、眼をぱちぱちやつてみせた。

「そんなことをしたので、私が刀のことをきいても默つてたんですね。」

うそうそ笑ひながら、ふいに彼の首へ飛びついて來た。

「ねえ、あれあたしに頂戴ね。」

「上げてもいゝけれど……。」

「下さるの。嬉しい。」

彼の首をきゆーつと抱きしめて、それからひよいと飛びのいて、椽側の手摺を力一杯に掴つてゐた。

母親に似た顔立で、圓いくるくるとした輪廓だつたが、母親よりも口元が引緊つて、睫の長い眼が澄んで光つてゐた。耳の根本に小さな黒子があつた。

「あら、こゝから見ると、あの井戸は綺麗ね。」

いつもよく見てるくせに、初めて見るものゝやうに、眼を見張つた。

「あれからお化が出るんですよ。」

彼は初めて冗談を云つてみた。

「いやーだ。」

「だつて出たでせう。」

「嘘、嘘。」

彼のところへ飛んで來て口を押へた。

「あたし、これから勉强するの。分らないところ敎へて頂戴、ね。」

「えゝ。」

そんなことから、光子は始終二階にやつて來るやうになつた。そして呼ばれるまでは降りていかなかつた。どうかすると、呼ばれてもなかなか立上らうとしなかつた。

「叱られやしませんか。」

「いゝのよ。構やしないわ。」

快活になると共に、母親を馬鹿にするやうな素振を見せ出した。ばかりでなく、父親をも輕んじ初めたやうだつた。

彼は不思議な氣持で、その樣子を見守つてゐた。

松木は歸つて來て光子が見えないと、階下から大きな聲で呼び立てた。

「そら。」

皮肉な笑顔をして光子は降りていつたが、夜になるとまた、松木が茶の間に控へてゐる前をも平氣で、二階の方にやつて來ることがあつた。

「あたし、お父さんと喧嘩してやつたの。」

「お父さんと……。」

彼は驚いて、彼女の得意げな顏を見つめた。

「えゝ。だつてひどいんですもの。二階に上つちやいけないと云つたり、二階に上りつきりで降りてきちやいけないと云つたり……。あたし口惜しいから、井戸に飛びこんでやるつて、庭に駈け出してみせたの。」

「なんでまたそんな喧嘩をしたんです。」

「分らないわ。お前のやうな親不孝者はないつて、拳骨を振上げなすつたから、あたし井戸のところまで駈けていつてやつたの。」

彼は別に氣にもかけずに聞き流したが、光子が時々井戸に飛び込むと云つて駈け出すことがあるのを、房子から聞いて喫驚した。

「何か氣に入らないことがあると、ぢきにさうなんです。本當に飛び込みもしますまいけれど、それでも心配になりましてね。」

房子は大事な秘密をでも洩すもののやうに、聲をひそめてゐた。

ところが、或る晩、本當に騒ぎがもち上つた。

十時過ぎのことだつた。突然、階下で大きな人聲と物音とが起つた。それから一寸ひつそりしたかと思ふと、庭の方に慌しい足音がした。

彼はぎくりとして、駈け降りていつた。

奥の坐敷の眞中に、松木がつゝ立つてゐた。眼をぎろぎろさして、顔色を變へてゐた。

「どうしたんです。」

咄嗟に彼はさう尋ねかけたが、松木は返辭をしなかつた。そして、雨戸を一杯繰り開いて、庭へ下りていつた。彼も

後から續いた。

房子が、庭の中をあちらこちら物色してゐた。

「どうなすつたんです。」

「只今、光子が、井戸に飛びこむつて、裏口から驅けだしましてね……。」

後は云はないで、そこらをうろうろし初めた。

月の光りもなく、庭の中は眞暗だつた。坐敷からさしてる電燈の光が、雨戸一枚分だけの廣さにぱつと、植込みの茂みに流れかゝつてゐた。

井戸の中を覗いて見ても、茂みの中を透し見ても、光子の影らしいものは見當らなかつた。

初めの慌てた氣持が靜まつてくると、三人はぼんやり庭の中につゝ立つた。

「馬鹿な、すぐ井戸の中に飛び込むものか。」

突然響いた松木の腹立たしい聲が、彼の頭にぶつかつた。彼はかつとなつた。

「そんな……そんなことを云つてる場合ぢやありません。」

暗闇の中で、二人は顏をつき合してつゝ立つた。一秒……二秒……すぎた。彼はぶるぶると震へた。

「ふん、餘り逆上せきつて、圖々しいにも程がある。」

云ひすてゝ松木は、くるりと背を向けて、坐敷の方へ歩き出した。

彼は石のやうに固くなつた。聲が出なかつた。拳を握りしめてつゝ立つてゐた。

その袖を、房子が捉へた。

「あなた、どうか……。宅は今氣が立つてるところですから……。」

彼女のおどおどした樣子に、彼は夢からさめたやうに我に返つた。

「もう何にも仰言らないで……。それより光子の方が……。」

然し彼の頭は、俄にはつきりしてきて、松木から投げつけられた言葉が、胸一杯になつてゐた。

默つて足を返して、松木と反對に裏口の方からはいらうとすると、そこの板敷の上に小さな足跡が、黒い泥跡を殘してゐた。彼は立止つてぼんやりそれを眺めた。

後からついて來た房子も、殆んど同時に足跡に氣付いた。

「あ、これです、屹度。家にはいつたのでせう。」

彼は咄嗟に直覺した。いきなり駈け出して二階に上つてみると、そこの三疊の方の隅に、光子は小さくなつてゐた。

彼は悄然とつゝ立つた。その膝頭へ、光子はふいに泣き出して取縋つてきた。

そこへ房子もやつて來た。

「まあ！、お前は……。」

後は言葉がなかつた。

彼はがくりとそこに屈んで、光子の頭を撫でてやつた。

房子が光子をなだめすかして、無理に階下へ連れてゆくまで、彼は一言も口を利かなかつた。一人になると、押入を開いてみた。奥の方に、短刀は隱されたまゝになつてゐた。

彼はほつと息をして、六疊の方へ戻つて、机の上に兩肱をつき、頭をかゝへた。

松木から眞正面に投げつけられた言葉が、次第にはつきりした意味をとつてきた。彼は自分と光子との間柄を考へ廻して、自ら驚いて顔を擧げた。

眞暗な夜の空に、星が粗らに光つてゐた。

下宿を變らう、さう思ひついて、まだ決心したともしないとも分らないうちに、眼の中が熱く涙ぐんできた。そしてまた机の上に頭をかゝへた。

九

からりと晴れた初秋の麗かな朝日が、椽側一杯に當つてゐた。彼はそこに全身を投げ出して、今後の處置を思ひ煩つてゐた。

昨夜のことはけろりと忘れはてたやうな、晴れやかな顏をして、光子がとんとんと階段を上つて來た。が、彼女はすぐに彼の顏色を見てとつて、一寸立止つた。その立姿が、すつくと伸びて、まだ更に伸び上らうとしてるかのやうだつた。

「光子さん。」

さう彼は呼びかけながら、半身を起した。

「なあに。」

ぢつと見つめると、その敏感な眼付と耳の根本の黒子とが、今迄氣付かなかつた大人びた魅惑を持つてゐた。

「私は一寸都合があつて、よそへ越すかも知れませんが……。」

「え、なぜ。」

「なぜでも……。」

眼の光だけが機敏に働いて、其他は全く子供らしく、ひよいと彼の肩につかまつてきた。

「いや、越しちやいや。あたしいやよ。」

「そんな、むちやを云つたつて……。」

「いゝえ、いやよ。あたし一人になつてしまうんですもの。……お越しなさるなら、あたしもついていくわ。」

「ついて來てどうするんです。」

「だつて、あたし困るわ。一人つきりで……。」

「お父さんやお母さんがゐるぢやありませんか。」

「ゐたつて、やつぱり一人つきりよ。」

「そんなむちやな……。」

「いゝえ、いやよ。どうしたつていやよ。」

光子は彼の肩を搖ぶり初めた。

「いゝわ、そんならあたし、本當に井戸に飛びこんぢまうから。」

「そして二階の三疊に隠れるんでせう。」

「えゝ、さうよ。」

急に眞劍な語氣になつて、彼女は眼をぎらぎら光らして来た。

「どうしたんです。」

彼女は默つてゐた。

「怒つたんですか。」

「もういゝわ、あたし、本當に飛び込んぢまうから。」

眉根をぴりぴり動かしてるその様子を、彼は胸にぎくりと受けた。危いといふよりも、何だかえたいの知れないものが彼女のうちに渦卷いてゐるやうだつた。彼女は一心に思ひつめたやうに默つてゐた。

「あのね、いろいろ考へたけれど、どうしてもこゝの家にゐては悪いやうな氣がするんです。そんなこと、今に分るやうになります。ねえ、越したつて時々遊びに來るから、いゝでせう。」

「いやよ。」

きつぱり云つてのけて、彼女はまた默りこんでしまつた。

「ぢやあ、どうすればいゝんです。」

「家にゐるの、いつまでもゐるのよ。」

彼は吐息をついた。どうにも仕方がなかつた。と暫くして、光子はふいに泣聲になつた。

「いやよ、どうしたつていや。ねえ、あたし、悪いことがあつたら謝るわ。御免なさい。もう井戸に飛び込むなんて云はないわ。」

「だつて、お父さんが何か云つたでせう。」

「えゝ、ひどいことを云つたのよ。だからあたし、机を放り出して驅け出してやつたの。」

「どんなことを云はれたんです。」

「あたし達があんまり仲がよすぎるつて、そして……夫婦氣取りでゐるつて……。」

「え、そんなことを云はれたんですか。」

「えゝ。あたし、腹が立つてむちやくちやになつたけれど……もう平氣だわ。お父さんなんか何と云はうと、構やしないわ。」

何の恥らひの色もなく、ぢいつと見入つてきたその素純な眼付の前に、彼は次第に顔を伏せてしまつた。と、頭の中がぱつと明るくなつた。

「さうだ……越すのは止しませう。」

彼女はにつこりして、首肯（うなづ）いてみせた。

「私は馬鹿なことを考へてゐたんです。」

「何のこと。」

見入つてくる彼女を引寄せて、その額にそつと唇を押しあてた。彼女はぢつとしてゐた。

「どんなことがあつても平氣でゐませう。」

「えゝ、あたし平氣だわ。」

彼は晴れ晴れとした朝日の光を見やりながら、兩手の拳を握りしめた。

けれど、光子が階下に降りてゆくと、彼はまた不安な焦燥に驅られ初めた。光子が一緒にゐる間は、平然とした晴れやかな氣持だつたが、一人きりになると、凡てが陰鬱に曇つてきた。

彼は室の中をぐるぐる歩き廻りながら、我を忘れかけることが多かつた。

十

彼は騷ぎの夜以來、松木とは一言も言葉を交へなかつた。顏を合せることさへ出來るだけ避けた。房子とも餘り口を利かなかつた。房子の方も變に默つてゐた。

松木は晝間時々歸つてきては、やはり庭の井戸端で背中の汗を拭ふことがあつた。汗深いため殘暑になやんでるらしかつた。

さういふ松木の姿を見ることが、彼には一番堪へ難かつた。見まいとしても、二階からすぐに見下せた。彼はわざと障子を閉め切つて、反對の隅の方に寢そべつた。それでも、車井戸の音ははつきり聞えてきた。

俺は何でこんなに焦燥してるんだ、と自から尋ねかけても、はつきりした答は得られなかつた。

松木が光子の父であることがいけないのか……大惡人でも善人でもなく、たゞ小策ばかりの沒感情的や凡人であることがいけないのか……いや、彼の存在そのものが彼には堪へ難かつた。

さういふ憎しみはどこから來るか分らないものだつた。口論をしたり毆合ひをしたりした後の憎しみならば、まだどうとでもなるが、面と向つては口が利けない根本的の憎惡は、どうにも出來なかつた。

先夜、庭の暗がりで向き合つて立つた時、心のどこかに殺意が動きかけたことを、彼は後になつてはつきり思ひ出した。氣持が鬱積してくると、今にも何かゞ破裂するかも知れないやうな氣がした。夜分、松木が階下の室に控へてゐたり、同じ屋根の下に眠つてゐたりするのへ、意識が働きかけてゆくと、彼はぢつとしてをれない衝動を感じた。

さういふ危い氣持から逃れるために、彼はしきりと光子を求めた。何だかヒステリツクなそして晴れやかなものを持つてる光子に、彼は次第に深く囚へられていつた。戀愛でもなく、憐憫でもなく、譯の分らない感情だつた。

「お父さんを好きですか。」

「嫌いよ。」

「お母さんは。」

「好きでも嫌いでもないわ。」

そして眼をきらきらとさせる光子を、彼は膝の上に抱いてやつた。

「私がどこかへ行かうと云へば、どこへでもついて來ますか。」

「えゝ、いくわ。」

「どんなとこへでも。」

「えゝ。」

二人で遠くへ逃げ出すのが唯一の途かも知れない、などと彼は考へた。然しまた、松木に對する譯の分らない憎惡の念が、却つて彼を家の中に引止めた。

松木が生きてる以上は……と彼は齒をくひしばつた。

そして彼が自分一人の氣持に悶えてゐるうちに、光子は急に病氣になつて、寢ついてしまつた。

快活に晴れやかにしてたところに、俄の病氣なので、皆喫驚した。何の病氣とも分らなかつた。內部にはどこも故障はないと醫者は云つた。神經のせいかも知れないさうだつた。

食慾がなく、元氣がなく、頭を重く枕につけて、大きな眼をぱつちり見開いてゐた。どこが苦しいかと聞いても、どこも何ともないと答へた。精力がつきたやうになりながら、少しも眠らないで眼を見開いてゐた。眼瞼を閉すことがあつても、ふいに大きく見開くのだつた。

「元氣を出さなきやいけません。しつかりするんです。私がついてゝあげるから。」

彼がさう云ふと、彼女は弱々しい笑みを浮べて、枕の上で大きく首肯いてみせた。

そして彼が一寸でも坐を立つと、すぐにまた呼び寄せた。

「ついてゝ、ねえ。」

然し別に話はしたがらなかつた。何を云つても簡單な返辭をするきりで、默つて時々微笑むのだつた。彼は書物を持つてきて、彼女の近くに寢そべりながら讀んだ。

房子は呑氣に構へこんで、光子のことは彼に任せきりだつた。彼は腹立たしく思つたが、口に出しては云はなかつた。

二三日目から、松木がひどく不安げに沈み込んで、外へも餘り出なくなつた。初めは、彼が坐敷にゐる間は茶の間の方に避けてゐたが、やがては默つてはいり込んできて、彼と遠い隅の方に坐つて、煙草を吹かしたり書類を見たりした。然し絶えず光子の方に氣をとられてゐることは、その樣子で明かだつた。

それが彼には最もひどい苦痛だつた。光子は父親が來ると眼をちろりとさしたが、それからすぐに、全く無關心な樣子に返つていつた。然し彼が出て行つて暫くやつて來ないと、すぐに呼びたてた。彼は息をつめながら、松木が控へてる室にはいつて來なければならなかつた。そしていくら我慢をしても、松木の存在の方へ次第に意働がねぢ向けられて

いつた。ちりちりと汗がにぢみ出すやうな氣持だつた。どうしてさう松木の存在が氣になるか、どうしてさう惱まずにはゐられないか、自分でも分らなかつた。餘り苦しくなると、彼はわざと光子の方へ寄つていつて、話をしようとしたが、光子は口を利くのを喜ばない風だつた。時々見せる微笑も次第に消えて、天井ばかり見つめてゐて、それから眼瞼を閉ぢた。暫くたつと、大きな霧はな眼で、彼の方をぢつと眺めてゐた。彼が見返すと、微笑らしい影を頰に浮べた。

光子のために、松木の存在なんか無視してやれ、とさう彼は心の中で誓つた。然しやがてまた、ぢりぢりと氣持が鬱積してきて、どんなことになるか分らなくなつた。光子と親子だといふことが、堪へ難い壓迫となつてきた。

彼は光子の手を握つてやつて、表面に光の浮いた大きな奥深い眼を覗きこんで、その中に自分の心を溺らさうとした。

光子の容態は、良いとも悪いともつかず、何等の變化も見せなかつた。同じやうな晝と夜とが續いた。

五日目頃から、光子の顏は急に輝いたり曇つたりし初めた。長く笑顏を續けてるかと思ふと、また涙ぐんでゐたりした。

彼は心配しだした。夜遲くまでついてゐた。他に名醫を迎へたらどうかと、房子に云つてもみた。

「いや、氣力が出て來たのだ。心配のことはない。」

眉根を曇らしてる房子へ、松木は平然と云つた。それを聞くと彼はかつとなつた。

「然し何だか……。手後れになつても構はないんですか。」

「大丈夫です。」

彼は坐り直して、松木の方へ向き返つた。松木もぢつと彼の方を見てゐた。そして二人は長い間對坐してゐた。彼は

息苦しくなつて、我を忘れかけやうとしてはまたはつとした。しまひには何もかもぼんやりしてしまつた。眼に一杯涙が出てゐた。

「片山さん。」

呼びかけられて彼は顔を擧げた。松木が震へる手先に厚紙を持つて、彼につきつけてゐた。

「光子は大丈夫です。よくなつたら、あなたがどこかへ轉地にでもお連れなすつて下さい。私とはどうも、あなたも光子も性分が合はないやうです。これをあなたへお預けしておきますから……。」

松木の顔は、醜くどす黒く艶が失せて、眼ばかりぎよろりと光つてゐた。差出されたのは郵便貯金の通帳で、光子の名前で千圓近くになつてゐた。

彼は喉がつまつて言葉が出なかつた。振向くと、光子はきよとんとした眼付で、不思議さうに二人の樣子を見てゐた。

彼は坐に堪らなくなつて、貯金通帳を松木に投げつけながら、庭に出ていつた。泣きたいのか笑ひたいのか分らない、もやもやつとした茫とした氣持で、氣が遠くなりさうだつた。井戸のところへ行つて、水を汲み上げて、頭にぶつかけてやつた。



往來

宇野千代

1

百坪ほどの地面に、七坪の藁屋を建てて住んで居たが、田舍から妹が來たり、隣りからお婆さんが來たりして狹くなつたので、上の空き地へまた九坪の家を建てた。下には妹とお婆さんが居て、上には私たちが居る。

その妹は、亡父の十三周忌の手傳ひに、暫く田舍へ遣つてあつたが、二三日まへに戻つて來た。梅干、青海苔、蓬餅、干大根、それに、東京にはないだらうからと言つて、麥饅頭とを土産に持つて戻つたが、麥饅頭はうまくなかつた。私と妹とは、二人きりのとき田舍の話をした。

母の話しが多かつた。私は、幼いとき生母に死なれ、それからずつと今の母の手に育てられて來たので、自然、繼母と言ふ感じを持たないで居られたと思ふが、父の不幸な性格のために、この母に對して一つの暗示を受けて居た。父は死ぬ少し前、「俺が死んだら、母は貴樣のために學校の月謝を出し惜しむだらう。貴樣は孤獨に

なるだらう。」

　と言つた。私はそのときも父の言ふ通りに感じては居なかつたが、父を憐れて、父に父の言葉が杞憂に過ぎないと言ふことを示すのを憚つた。

　父の暗示は長い間に亘つて、私に働きかけた。私はこの母を、繼母と言ふ一つの違つた母に考へるやうになつた。母に對して氣の毒な記憶が澤山ある。長じて、母の地位を理解する事が出來るやうになつてから、私は懷しい悔をもつてその事を思ひ出した。けれども、私が田舍を出て長い時間が經つて居るので、さま〳〵な記憶はさきの世にあつたことのやうである。母の事は、如何言ふ意味でも私の氣持の負擔にならなかつた。妹から聞く母の噂を、私は樂しむことが出來た。

「お母(かあ)はさうお思ひるだらう。この苦しい中に家を建てたりせずに、少しでも送つて呉れれば好い。」

「そんなことがあるものか。」

　と、妹は鈍い表情をして遮つた。「お母はよう解つてお出でる。東京は田舍と違うて、出來るだけていさいをよう繕うて居らんと他人(ひと)が馬鹿にする。姉さまもたいていではあるまいとお言ひた。」

　私には、この妹が母の言葉を借りて居るのではなくて、私の肚を裏にしてものを言つて居るやうな氣がした。一ケ月くらゐ田舍に居た間に、田舍訛りが多くなり、貧しさにしみて戻つて來た妹は、笑ふときや何か言ひ出さうとして唇を動かすとき、はつと思ふほど母に似て居る。母と母の住んで居る家のにほひを運んで來たのである。

　夜になつて、私は手紙を書いたが、讀み返したくない氣がした。昔の話しに吊られて書いたので讀む人の感情を強いる調子が目立つて、不快な氣がした。一寸冷やかに考へると、手紙に書いた事は嘘に近い。私は自分でそれを疑つた。四十も過ぎて、眼がうすくなり、糸を取つてゐると涙が出て困るといふ母、その母に糸取り工場を止させないで、止さ

せようと思へばさう澤山でなくとも濟む負擔をはつきり覺悟する事が出來ないで、頻りに母の健康を氣遣ふことを書いて居るのであつた。

けれども、私はもう長い間、母にはこれと違つた調子の手紙を書いた事がなかつたので、母はそれに馴れ、私からの手紙にこの調子を期待して居るやうに思へた。私は自分でも嘘のやうな氣のするこの手紙が、ポストの底に落ちるたあんと言ふ音を聽いて、解放せられたやうな氣になつた。そして、母の事に就いての考へを拂ひのけるやうにしてうちへ歸ると、お婆さんの叩いてゐる木魚の音がして、ぼくぼくぼくとのどかである。

私は門のところに立ち止つて、山吹の花が重く枝がたわわになつてゐるのを透かして見た。そして、お婆さんが佛さまの花にそれを折りたがるのを思ひ出し、ふいに哀れな氣がしたのであつた。

2

淺い眠りが醒まされた。そとから、

「姉さま、姉さま。」

と呼び乍ら激しく咳いて居る聲で、私は直ぐ鴻が來たと思つた。咳嗽は、寒いまだ明けない朝と深い霧とを思はせる。私は枕から首を上げて、ここはどこなのかしらん、自分はどの方角に向いて寢たのか知らん、と思つた。ふいに起されたとき、私はいつでもさう思ふのであつた。そしてもう一度鴻の聲をはつきり感じるとともに、この家は一年前から住んでゐるあの自分の家だと解つた。私は夢のやうではなく喜んだ。扉をあけると、鴻がバスケットを持つて立つて居た。

夜行で來たから、眠くて腹が減つて仕方が無いと言つた。名古屋名產のもりぐちをバスケット一杯に持つて來た。この前逢つたときより、瘦せて背が高く、二十二になる鴻なのに、私は逢ふたびに、彼は聲がはりして大人になつたと思ふのであつた。

鴻は私の弟である。高商の試驗を受けに來たのだが、少しも準備して居ないといふから、自分でもあまり乘氣でないかも知れない。何か、私の眼に見えないやうな生活をして來たのではあるまいかと言ふ氣がする。私は前から用意して置いた水菓子屋の離れへ案內して、汽車の疲れがなくなるまで寢ておいでと言つて、別れて戾るとほつとした。

何だらう、と私は考へた。私は準備のない氣持の中に妹や母や鴻の事が續けさまに這入つて來たやうな氣がしたのである。寢不足のために自分に對しても不機嫌であつた私は、眼の前に現れた事は何事も拒むことのないずぼらな自分自身が不快なやうな、妹も鴻ももつと遠いところに居る方が好いやうな氣がした。そして、この氣持は隱さなければならないと思つた。鴻を置いて來た部屋も潮濕も蒸れて微臭かつたのを、私は思ひ出した。階下は物置になつて居るその階段を下りると、鴻の激しい咳嗽が聞えた。私は、自分が鴻をも妹をも母をも少しも愛して居ないやうな氣がしたり、私がずつと昔のころの母であつて、妹か鴻がその頃の私であつたなら、丁度いまの私が彼等に對して抱いてゐるやうな何となくぴつたりしない借り着のやうな愛情を持つ事であらうと思つたりした。

だが、その感じは直ぐになくなつた。午後になつて、たつぷり寢足りて還つて來た鴻は、庭へ出て、若者らしい樂しさうな樣子をして、もりぐちの箱を釘拔でこぢ開けた。キイキイ、と釘の鳴る音が高い晴れた空に響き渡つた。椎も欅ももつこくも、いま剝いた許りのやうな靑さをしてゆるぎ乍ら、鴻の白いシヤツを染めた。

もりぐちはうちのの好物である。鴻はそれのうまいことを自慢して、

「これは下宿の隣りの漬物屋の小父さんが呉れた。」

と言つた。そして、和のついたまゝを摘んで隣りへ挨拶をしに行つた。

軈て隣りの井戸端から、鴻の聲に混つて晴れやかな義兄の聲と嫂の笑ひ聲が聞えた。私は晴やかな氣持になつた。あの頃は、いま眼の前に見る通りな情景が到底望めないことであつた。私たちは不自然な結婚をしたので、他人の同情を買ひ、疑ひ深くなつて居た。お互の兄弟や親たちに對しても、相手の幸福のみはりをして居るやうな氣がして、そいころ偶に訪ねて來た義兄にも安らかな氣になれなかつた。子供のやうに思つて居た鴻でさへ、「そんな事をしては世間が沈默つて居ますまい。」と書いてよこした。誰に對しても絶望的な關係だつたのに、何時か隣りの地面へ義兄の家が建ち、お婆さんはうちへ來るやうになり、鴻は今、釘ぬきの音を立ててもりぐちの蓋を開けて居る。

「鴻、何かお婆さんに上げたの？」

鴻は、首を振つた。私は小さい聲で早口に言つた。

「一寸挨拶してお出で。お土産はなくとも好いから行つておいで。」

鴻は、木の枝から上着を取つて手を通し乍ら、家の中へ這入つて行つた。或る聯想から、私は、お婆さんのことを忘れて居る私自身の氣休めのために、鴻をそこへ遣つたのである。

3

お婆さんはこのごろ病氣が起らないので、薬屋の暗い二階にひとり寢起きして、小さな七輪で自分のものを作つては食べて居た。坐つて居ると子供くらゐしかないのに、散切りの濃い白髪が針金のやうに伸びて、見た刹那、別人のやう

である。

足がわるく、夏でも足袋を穿いて居るので、格子につかまり乍ら叩土の上を歩いて來ると少しも音がしなかつた。

「何かうまいものはないかの。」

ぎいと間の扉が開いて、その顔が出ると、

「お婆さん！まあ、吃驚するじやないの。」

私と嫂とは、裏口の扉のところに腰かけて、同じやうにお婆さんを白眼むやうな眞似をした。お婆さんはするさうに笑つて、私たちの顔から何もうまいものがないことを汲みとると、そのまま、また音を立てないで引き返して行つた。

私と嫂とは、合圖のやうに或る表情を浮べてお互の顔を見合せた。

「どこへも行くところはなし、何一つ樂しみはなし、あともう死ぬ許りなのに、私なら、ねえ、分つて居るではないの、私ならほんたうに如何かして了ふのに。」

と嫂は言つた。

分つて居るではないの、と言ふのは、一思ひに自分の命を斷つて了へば好いではないかと言ふ意味であつた。文字に書けば恐しいこの言葉を言ふとき、嫂はその小さなあどけない眼を耀かして笑つた。その笑ひは、私の氣持を固くした。私より一つ年下の嫂は、正直で單純な性格だつた。私はこの嫂が自分自身の感じと感情とでものを言ふやうな氣がしなかつたので、嫂の言ふ事には、何か私がさう言はせたいための意志表示をしたやうな氣が、微かにした。私はこの氣持に抵抗しなければならなかつたので、狼狽して次のやうに答へた。

「だけど、やつぱり死んだりしない方が好いことよ。この家の中から、知らない間にお婆さんの姿が見えなくなるのな

ら好いけれども、さあ死ぬつて言ふときには隨分氣持が切ないと思ふわ。あたし、誰でも死ぬところを見るのはとても堪らない。」

答へ乍ら、私は、嫂の言葉がほんたうのやうに聽えるのに反し、私の言葉が嘘のやうに響くのを感じた。私は嘘を言つたのではなかつたのに、何のためかこんな話しをするとき心が騷ぐのであつた。お婆さんはまだ隣りに居たとき二度許り死なうとした事があつた。私はそのときの事を嫂からもお婆さんの口からも聞いた。のちのときには、台所で瀨戸物の割れる大きな音がしたので、行つて見ると、お婆さんがひき窓の紐に首をかけて居た。眞暗な中にそれを見出したとき、義兄は大きな聲をあげて意味のない言葉を怒鳴り續けた。直ぐ、お婆さんのところまで行けなかつた。然し、紐が朽ちて居たので、大きな音がしてお婆さんの體は板の上へ落ちた。こめかみのところに少し傷をして居て、その僅かな血がお婆さんの顏を一種凄慘なものにして居た。そのときの事を話すとき、嫂は呼吸をはづませ憎惡をこめて言つた。

「ほんとうに死ぬ氣なら、晝間誰も居ないときに、大きな釘でも打ちつけて、しつかりした細引ででも遣れば好いぢやあないの。死ねないに決つてゐるやうな死に方をして、側に居る人の氣持を恥しくさせ、罰するやうにするのは酷い。」

さう言ふ意味の事を言つて、泣きさうにした。私は、お婆さんの不幸と嫂の不幸とを避け難いものに感じた。この一家のおちた運命は餘りに急激であつた。皆は、その急激な變化を理解する事が出來ないとき、それを自分ではない誰かのせいにしようとした。お互に罪人を探り出さうとし合つた。それに、お婆さんは七年も病氣であつた。治らない病氣だと言はれた。一ヶ月に一度くらゐ間歇的に發作が起つて、酷く苦しんだ。注射も出來ず、藥もないと言はれたので、今では醫者に見せる事もなく、苦しむに任せて發作の過ぎるのを待つより外はなかつた。その間、お婆さんは一番惡い心の狀態にあつた。自分には責任のないこの病氣のために酷い苦しみをしなければならぬ。今、この發作が過ぎても或

日時をへだてて、又同じ苦しみをしなければならぬ。そして、それは死ぬまで續くのだ。さう考へたとき、お婆さんはいつそ死んで遣らうと思つた。病氣の好いときに、木魚を叩いたり、お經を上げたりした自分のことが、愚かしく腹立しく、世の中の幸福は、皆おとしあなだと思はれた。

もう一つ悪いことには、病人自身には常に新しい苦痛をもつて初まるその發作が、そばに居る者には、一つ事の繰り返しにしか感じられなくなる事であつた。病人と同じ病苦を感じる事は出來なかつた。そばに居る者はお婆さんの呻り聲の聞えない、空氣のきれいなところへ逃げて行かうとした。だが、どこまでも呻り聲が聞えたとき、そばに居る者はその呻り聲が皆に病人と同じ病苦を感じさせる事を強いて居るやうに感じられた。その感じから、何時か皆は病人そのものを憎むやうになつた。こんなときには、そばに居る者も一番悪い心の狀態にあつた。お婆さんが死なうとしたりするとき、そばに居る者はお婆さんの不幸を感じる前に、自分たちが一番悪い心の狀態にあつた事を反省しなければならないやうに強いられたのだと思つた。これは、どこまで行つても、お婆さんが死んで居なくなるまではなくならない悪い心であつた。私はその事を思つた。若し、お婆さんが死んだなら、そばに居る者はさう言ふ悪い心の狀態から救はれるのであらうか。夜遅く、私は一日のつとめを終へた人のやうな安堵を感じ乍ら、寢床に這入りスタンドを寄せて本を讀んで居た。すると、植込の向ふでまぐれ犬のデベが、うわあぁ、あん、うわあぁ、あんと空に向いて長く引くやうな鳴き聲を上げて居るのが聞えた。それは、聞くものの心を刺す一種異様な聲だつた。デベはまぐれ犬であつたけれども、いつかうちの飼犬のやうになつて居る汚い犬であつた。雨のときは、長い縮れ毛が泥にまみれて醜かつた。そばへ寄つて來ると私は氣紛れに叱つた。喰べるものも遣らなかつた。寢るところも作つて遣らなかつたので、軒の濡れ土の上に轉がつて寢て居た。デベの鳴き聲は、私にこれらの事を思ひ出させた。私は不安な氣持をなくして、寢床から出ようか如何し

ようかと思つた。それでも、矢張りそのまま出ないで居た。微かな氣持ではあるが、人がこんな氣持にならないで濟むものであつたなら、不幸はなくなるだらうと言ふ氣がした。お婆さんが死ぬときの事を思ふと、デベのとき感じた、もつと大きな苦痛が待つて居るやうな、私は助らない氣がした。私には、お婆さんの死ぬときを出來るだけ さきに延して、それの來るまでに、そばに居るものの氣持をお婆さんの死によつて助からなくさせないやうに用意しなければならないと言ふ氣があつた。私はその氣持を簡單に嫂に話した。

　するとまた嫂が言つた。

「いいえ、辛いと思ふのは當座だけよ。ほれ、自分の好きだつた連れ合が亡くなつたとき、氣になるなんか言つて騷いで、直きに男を拵へたり墮落したりする女があるではないの。さうなんだもの、直ぐ忘れて了ふものよ。それに、不斷から困つて居たお婆さんが死ぬんですもの、あとで、どんなにせいせいするか分らないわ。」

　嫂はもと、義兄のその上の兄の妻であつたが、その兄の自殺した前後の事情がひどく悲劇的であつたために、悲しみに囚はれて、長い間、今の兄の妻になる話しを可厭がつた。さう言ふ話しを聞いた事がある。今はそれらの事もなかつた昔のやうに、他人の事のやうに話すけれども、氣になるなんか言つて騷いだと言ふのは嫂自身の事ではあるまいかといふ氣がした。

　私は急いで調子を合せた。だが、言葉で言ふほどお婆さんを可厭がつては居ないのに、或るみえのやうな氣持につきまとはれて、嫂に調子を合せて居る自分に對して、好い感じを持つ事は出來なかつた。若し、嫂もその言葉に言ふほどのお婆さんを憎んでは居ずに、ただ、憎んで居るであらうと思はれる私のために、調子を合せて居るだけであつたなら如何であらうと言ふ氣がした。

これは避けなければならない、と私は考へた。私と嫂とは交渉のない性格だつたので、何か二人の氣持の上に繋がりを持ちたいとき、習慣的にお婆さんの話しをした。言葉は繰り返されて居る中にその強い意味を失ひ、話す者は無反省に氣の無い調子に移つて行つた。私はあとで不快になつた。自分の妹や母や嫂に對しては一つ一つあとを逐つて行く氣持が、うちのの母であるお婆さんに對しては、ぴたりと動かなくなり批評的になる事は、何と言つてもやましい氣がした。ここで一跳びしたかつた。

赤ん坊の泣く聲がして嫂が歸つて行つたとき、私は何故か晴々した氣持になつて叩土の飛び石をぴよんぴよんと飛び乍ら、お婆さんの部屋へ行つた。そして、そこに腰を掛けて昨夜見て來た小さい佛壇の話しをして、この次金が出來たとき買つて上げようと約束した。

午から、板敷の上へ床をのべて午睡を試みた。短い午睡はあたまに好いと聞いたが、仲々眠れなかつた。夜更けて、なほさら眼が冴えて來るあの感じが續いて、いつか半覺醒の中に這入り、そのまま、白い（さう言ふ感じがした。）眼覺がこびりついたやうな狀態になつた。

私は眠つて居ると思つて居るのに眼をあけて居た。枕から白い壁が見える。壁の北側に、細長い同じかたちをした窓が二つ、屏風の張りまぜの短冊のやうにお互に適當な間をおいて上下に二三尺ずつては居るけれども、少しも違はない同じ二つの窓が見える。あの細長い窓は一つきりなかつたのだがな、と半覺醒の私は思つた。見ると、その窓の硝子をひらいて黒い着物を着た人が窓のそとの誰かに話しかけてでも居るやうに、少し體をのり出して居る。お婆さんである。可笑しいなと私は思つた。はりまぜの短冊のやうに間をおいてずつて居るもう一つの窓にも、同じかたちをしたお婆さんが居るのである。お婆さんは如何して這入つて來たのだらうと私は思つた。人が來て眠る邪魔をしないやうに。

私は扉に錠を下して置いたのにと思つた。すると同じ二人のお婆さんの黒い着物が、風に吹かれて揺れ動いた。私はもつとよく見るために眼を見開かうとすると、自分の頭蓋骨がへんに固くなつてしみるやうに痛いのを感じた。朝は明るい天氣であつた。大きな玻璃窓に青い空ともつと青い木の葉と下の家の藁屋根とが、一杯に初夏の日を浴び溢れたやうな鮮かさで映つて居た。私は床から疲れたあたまを上げて、その青い風景をいり見た。すると、その青い遠景を映したままの玻璃の上の方に、洗濯物を干して居る女の姿がぽつと映つて、空間に浮び上つて居るのだ。私は立ち上つて前やうしろを見廻した。光りと空氣のせいで、どこか遠いところにある影が映つたのだらうか。が、見える限りのどこにも、そんな女は居なかつた。私は半覺醒の中で朝のその事を思ひ出した。そして、もつと意識をはつきりさせれば眼が醒めるに違ひないと思つた。そのとき、弱い音がして、二つの窓の二人のお婆さんが一どきに、へなへなと窓の前の板敷の上にくづおれ、硝子戸は高い音を立てて内側に閉ぢた。

眼が醒めると、私は汗を掻いて居た。然し、眼が醒めたのが嬉しかつた。そして、今見た窓の方へ歩いて行き乍ら、その窓が一つしかないこと、お婆さんだと思つたのはうちのの黒い單衣であつたこと、それが窓から吹いた風で板敷に落ちたのであつたことなどが分つてほつとした。

私は風で締つた細長い窓をもう一度大きく開いた。今日は單衣ものを思ひ出すやうな日だつたので、氣紛れに、うちのがあれを着て見たのであつた。窓から首を出すと、青い空高く、地主の家の五月鯉が、きいきいと風に竿をきしませ乍ら、長閑に動いて居た。眼にしみるやうな空氣である。

夜、隣りへ赤ん坊をあやしに行つて、遅くなつて戻つて見ると、藥屋の方の部屋に客のとき使ふ明るい水色の電氣がついて居て、うちのの甲高い聲ともう一人の聽き馴れない低い聲とが、片びつこに縺れてそとまで聞えた。

私は臺所へ廻つて、妹に誰が來たのか訊いた。お婆さんは寢て居て、その足許の方にぼんやり坐つて居た妹は、私の顏を見て、沈默つて頭を振つた。誰だか知らないと言ふやうでもあり、聲を立てないでと言ふやうでもあつた。その顏つきがへんに眞面目だつたので、私は訊き返さずに外へ出た。しんと靜かな中をうちのの聲が昂つて甲高く、その聲が高ければ高いほど、何故か私にはうちのの顏が客の笑顏につれて遅ればせに笑ひ、愛嬌を隱して居るさまが眼に浮んで來るのであつた。好い客ではないのであらう。私は音のしないやうにその部屋の出窓のそばを通り抜けて、何か茶菓子になるものを買ひに行からと思ひついた。

裏口から露地へ出ると足もとが暗い。その暗い空氣の中を、近ごろ越して來たブリキ屋の夜なべ仕事が、かあん、かあんと響いて來る。こんなとき、私は如何して不安な氣持をなくするのであらう。自分に原因があつて不明な或ることが、いま發かれて居るやうな不安を感じるのである。何か分らない客が來て何か言つたとしても、過古の自分がして來たことは、何一つ變りはしないのだ。さう言ふいつもの幼い考へにも慰められなかつた。靜かな夜氣のせいで、ブリキ屋の音がこんなに近く聞えるのだ。これでは、近所で可厭がるのも無理ではないと思つたり、折角つくつた上の仕事部屋の窓がそのブリキ屋の方へ向いて開いて居るのは宜くなかつたと思つたり、私は强いてよその方へ考へを向け乍ら、通りの村道へ出た。一ところぱつと明るい。私は一寸立ち留まつた。

菓子にしようか、水菓子にしようか。

通りの左側はすつかり雨戸を閉して休んで居るのに、ブリキ屋だけが起きて、明るいのは、何燭光か知らないその土

間の當氣のせいだつた。夜なべの音は喧しくて遣り切れないけれども、斯うしんと更けて暗いところに一燈りついやうに明るいところをつくつて居るのは、こんな氣持のとき、ほつと氣が樂になる。ブリキを引き剝す音も氣にならなかつた。然し、その明るさは、おけひろげられた九尺間口から二間とは擴がつて居ないでぼうつと消えて居る。その照り返しのほの暗い中で、大人の男のふざけて居る聲がした。すかして見ると、のつぽの呑屋が自轉車の稽古をして居て、あとを誰かゞ押して居る。あの呑屋のお内儀さんは小さい女で、女だのに自轉車に乘つておかもちを運んで居るのを見たが、亭主の方は、いままで乘れなかつたのか知らん。私は稽古のところをよけて步いて行つた。

すると、行くての暗い中にぼんやり黑い影の動くのが見えた。牛と、肥し桶を積んだ車らしい。牛を曳いて居る人間の姿は見えない。私は困つたと思つた。餘り幅の廣くない一本道なのである。又もとの露地へ引返すか、誰も曳きてのない牛と摺れ違ふか。さう思ひ乍ら私は、危いものに近附いて行く氣持に惹かれて、立ち留りもせずに步いて行つた。

牛はのろ〳〵と車をひき乍ら遣つて來る。そして摺れ違つた。そのとき、私は、牛の大きな眼が人間の眼のやうな感じで、じろりと私を見たのを感じた。そして通り過ぎた。見ると、傍らの生垣に向いて一人の男がながながと小便をして居る。牛を曳いて居る百姓であつた。行き過ぎ乍らもう一ぺん振り返つたとき、私は、牛も車も小便をしてゐる百姓も先刻から同じところでじつと動かずに居たのを氣附いた。私には向ふから近いて來たやうに思へたのだ。私は如何かして居るのであらうか。だが、町はづれだと言つて、この夜更けに提灯のない牛車を曳いてゐるのは危いことだと思つた。

そのあたりから、一面に葱とほうれん草の畑で、直ぐ上に空がある。道は眞ん中を通つて居る。星も月もないのに、空のどこかうす明るいのは夜霧のせいかも知れない。家並に挾まれて居るところの暗さに比べて、道の馬糞が浮いて見

股引が風に揺れる。そして、遠い傭屋の雨戸が二尺くらゐあいて居て、軒に出した股引の干してあるのまで見える。ときどき、雨戸をあけて待つて居ても、このあたりでは夜あきなひはなからうと思はれる。

水菓子屋は起きて居た。頭に毛のないお婆さんが、

「お寒うムいます。」

と言つた。

「離れでは、まだ起きて居るでせうか。」

「さあ。」

と言つてお婆さんはかんじ袋を持つたまま軒端のところまで出て、見えもしない離れの方を見るやうにした。

歸り途に、裏の椋の木のある道の方へ廻ると、そこから二階の灯が見えた。立ち留つて自分の足音を靜めると、隣りの部屋の小竹さんの何か言つて居る聲と鴻の笑ひ聲とが聞えた。あはは、あはは、留度もなく笑つて居る。私は、今買つたバナナをここで喰べて了はうと思ひ乍ら、夜は離れへの拔け道のやうになつて居る生垣のこはれたところを潜つて中へ這入つた。濕つた草の中に、蜜柑のうんだやうな匂がぷうんとした。

鴻はトランプを疊の上にならべて獨り占をして居た。そして、つい今、あんなに笑つて居たのに、へんに眞面目な表情をして、ちらりと私の方を見上げた。

「なに？試驗のこと？」

「試驗は駄目に決つて居るが」

と言つて、鴻はにやにやした。すると、次の部屋から奥さんと一緒にこつちを見て居た小竹さんが、

「鴻さん、そんな事をするよりも、姉さんの機嫌を取る方が早いな。」

と揶揄ふやうに言つた。

鴻はなほにやにやして、

「姉さま、別嬪の寫眞を見せようか。」

と言つた。電氣のま近かで、鴻の口のまはりに薄い鬚が伸びて居るのが見えた。私は子供のころ、田舍のうちの格子につかまつて往還を見て居ると、中學校の制服を着て居るのに鬚が一ぱい生えて顏だけ大人になつて居るやうな感じのする若い男の通るのを見て、へんな氣持になつた事を思ひ出した。何だか、鴻がその中學生のやうな氣がした。

「如何？」

と鴻はまた言つた。すると今までの笑ひ顏がそのまま褪せたやうになつて、固い動かない面のやうな表情になつた。私は鴻の言ふ事がぼんやり分つた。來て初めての日に、何か私の眼に見えないやうな生活をして來たのではあるまいかと言ふ氣がしたが、それであつた。

寫眞には、荒い浴衣を着た若い女が二人でうつつて居た。立つてゐる方が腰をかけて居る方の肩に手を掛け、二人とも少しとゞみ加減に或る一つの表情を作つて、首を傾けて居た。前に綿でこしらへた犬が立ててある。私はその寫眞から、直ぐに、文章などを書いて地方から雜誌へ投書する若い女を思ひ出した。

「どつちの女？」

「姉さまはどつちが好え？」

どつちも餘り好きではなかつた。然し、こんな風にして打ち明けられることは宜くないやうな氣がし乍ら、そばに小

竹さんたちが居たりして、へんに陽氣だつたので、知らずにこの話しを面白がつて居たのだつた。こんなとき、同好の者が感じるぼんやりした嫉妬も感ぜず、何となく他人のことのやうな氣がしたり、その寫眞を見て居る中に、どこかで會つた人のやうな氣がしたりした。すると、教へられた方の女の、その大きな眼をぼんやりさせて居るところや、初め一つのしなのやうに見えたその顏の表情が酷く幼いところや、などに好意が持てるやうな氣がした。

小竹さんは、人づきあひの好いいつもの癖から、鴻の氣持をらくにひき出して私に説明するためのやうに言つた。

「鴻さん、競爭者はないのですか。」

「ありましたよ。同じ學校だけでも八人も居たのだから。」

鴻は無邪氣に得意さうにして言つた。すると、その顏がまるで、子供のときのやうな表情になつた。

「品行は宜くないの？この女は。」

「餘り宜くない。僕が知り合ひになる頃はどの男へも手紙を書いて居た。」

「そんなことは何でもないですよ。寫眞で見る感じで言ふと、若くて美しくて自由な境遇に居るために、極く自然な氣持でそんなことをして居たのでせう。明るい、隔てのない性格のやうではありませんか。」

小竹さんのこの人づきあひの好い輕い口振りは、如何かすると不快なときがあつたが、私はそのとき意識的にも明るくなりたいと思つて居たし、何となく弟の戀愛を明るい色にして遣りたい氣があつた。私は一とびに、その女が鴻の妻になつた場合を想像した。鴻は他人に律氣で妻に甘く、二人の列んだ顏が見えるやうな氣がして來た。その女が、自分より十以上も若いために、ままごとの女夫ごつことしか思ひ浮ばないのも私の氣持を明るくした。

私は、鴻の試驗の結果がわかつて名古屋へ歸るとき、一緒に先方の家へ話しに行つて遣らうと約束した。

客はもう居なかつた。遠くから藥屋の窓ガラスの光つてゐる鈍い色や、カーテンの下りて居るのが見えた。妹も寢たのだらう。私は少し坂になつた小道を上の家の方へ歩き乍ら、もう何時だらうと思つた。そして、何と言ふ事なしに、水菓子屋のお婆さんの顏を思ひ出した。このむうとした天氣に、如何してお寒うムいますと言つたのだらうと思つたのである。

うちのは、ひとりで板敷の上を歩いて居た。

「可笑しな奴が來たぞ。」

と言ひ乍ら、まだ歩くのを止めなかつた。「お前は井上と言ふ男を知つて居るか。北海道でお前のうちへよく遊びに行つた、」

うちのはだんだん、窓の一つある壁の方へ歩いて行つた。顏が見えないので、運動と言ふその歩き方が私を不安にさせた。半年ほど前、まへに良人であつた人の父が訪ねて來たことがあつた。私はある聯想から今夜の客のことを推察した。井上と言ふのはあの男の友達で、單純な性格の氣の好い世話やきであつた。

「そいつともう一人何とか言ふ奴とが、東京に來て居るのだ。」

「今のは井上ではないの？」

うちのは一廻りして、大きな硝子の出張りの方へ歩いて來た。そして、鉛筆で書いた一枚の名刺を私に見せた。

「何と讀むの？」

「ムツミ、」

「ムツミ？ああ解つた。わたし、山内先生のところで一ぺん會つた事がある。」

「顔と手がまるで別々な印象を與へるへんな男だ。お前は知つて居るか。色の黑い、骨ばかりのやうな痩せた手に一ぱい毛が生へて居る。そして、話しをして居る間中、その毛の生へた黑い痩せた指を絶えず動かすのだ。まるで、蜘蛛の感じだ。俺はへんな氣持になつて、急いでその手から眼を離して彼奴の顏を見た。すると、あの顏は子供のままなのだ。實に不快なことを言ひに來たのだが、あの顏を見て居ると、彼奴は自分の言葉が他人に與へる印象を考へるほど大人になつて居ないのだらうと思ふくらゐだ。自分の思つた通り、誰にでもうららかな同じ調子で話すやうな男なのかも知れない。」

半年ほど前、あの男の父が訪ねて來たとき、私は窓をあけ放してはたきを掛けて居た。すると、そのあけ放した窓のま向ひから坂になつて上つて居る石疊の小道を下つて來る、あのくなくなの帽子から眞新しい桐の日和下駄まで、はつと思ふ間に私はそれと感じたのであつた。そののろのろと不決斷な足音がこい私のところへ來るまでに、私はその老人の眼から逃れることが出來たのだ。それだのに私は、でくのやうになつてはたきを掛け續け、まつ直ぐにガラスの棧を見詰め乍ら、眼に見えないたくさんの自分の心と戰ひ乍ら、その日常の平安な仕事を續けることに依つて、自分の眼で見たことを信じまいとするやうに眞すぐに立つてゐるのであつた。私はいま、その時の氣持を思ひ浮べた。そして、ムツミと言ふ男の手の事をぼんやりと考へた。

「どんなことを言ひに來たの？」

「もう好い加減お互に飽きた時分だらうから、歸つて來ては如何かと言ふのだ。お前が居たときから比べると、このごろあの男の暮しがよくないやうに思はれる。お前が歸つた方があの男がよくなると思つたから、迎へに來たと言ふと言ふのだ。だから、俺はさう云つて遣つた。」

うちのは、吃らない一本調子な聲で續けた。「俺はあの男のこと許り考へて遣る事は出來ない。斯うなると、今の場合、俺とあの男とは立場がまへと反對になつたのだ。あの男が女房を奪られるとき戰はなかつたからと言つて、俺も戰はないで居ると言ふわけには行かない。」

私の心に、封じられて居たあの男の顏が或る一の表情をして私の方を見た。私は心の中でその視線を拂ひのけた。そして、自分の心に浮んで來る名狀し難い苦痛と戰ひ乍ら何か言はなければならないと言ふやうに口を動かした。そのとき、うちのは自分の手を伸べてその私を制するやうにし乍ら、

「すると、彼奴は手を斯うして。」

と、その手の指を大きくゆつくり動かした。「俺をさへぎつた。さうですよ、今更そんな馬鹿げたことを言ふなんて、向ふの奴が卑怯なんですよ。と言やあがつた。實に不快な奴だと思つて彼奴の顏を見ると、まるで腕白な子供のやうな眼をして笑つて居るのだ。」

「そんな馬鹿なことはないわ。」

私は自分の心を靜めるやうにして言つた。「だつて、あの男がおくさんを買つたと言ふのは嘘なのかしら？」

私は直ぐ、それが何の關係がある、と自分の心に言つた。うちのは、すがめのやうな眼をして、ちらりと私の顏を見た。

「そんなことを誰から聽いた。」

二三日まへ、私はそのことを妹から聽いたのであつた。私は長い間、それを聽くときのことを想像して居たので、妹が、「吉村のはええ嫁さんがお出でたげな。」と言つたとき、ふいには何の感情も動かず、「へえ、」と言つた。自分の表情が動くのを惧れ、妹がそれに氣附くのを惧れたのであつた。

「女學校の先生じやつたげな。山井の小父さまのところへ知らせがあつたげな。」

「山井へ知らせがあつたの?」

「うん、あそことは今もつて文通をおしるげな。そいじやけれども、今度お出でた女もたいがいな苦勞をおしることいの。」

妹はさう私を慰めるやうにして言つたのであつた。私は自分のために顏が赧くなつた。私は、吉村に居た間惡い生活をしたと思ふことに決めて居たのであらうか。私は自分の破れた感じをうちのに知られたくなかつた。それを知られる事に依つて、うちのの氣持を破りたくないと思つて居たのに、今になつてその用意も忘れた。私は、あの男に對してうちのが感じて居る假想的な敵對意識を、痛む心で見て居なければならない。そして、自分もうちのと同じやうにあの男を敵と思へたらどんなに仕合せであらうと思つてはならないのだ。私は眼があつくなつた。そして、自分を辱しめる澤山の言葉を用意して、自分を罵つた。お前はお前があの男にしたのと同じことをして見せて居るのを知つてゐるか。そして、前には何にもなかつたやうに澄まして居るのを知つてゐるか。ヘドの出るやうなそのさまは何と言ふことだ。新聞や雜誌にウンとエラさうな文章を書けよ。そしてエライ女流作家になれよ。すると、私の眼に鴻が名古屋から來た日の、あの青い空ともつと青い若葉とその色のしみるやうな鴻の白いシヤツとが、幻燈の影繪のやうな仄かさで浮んで來た。鴻は釘拔きでもりぐちの箱をあけた。私は渴へるやうな心でそのときの幸福を思ひ出したのであつた。日が經ち、雜事が重なり、私は何事もなかつたやうに、またはさきの世にあつたことのやうに思ふ瞬間があつた。それだのに、何も彼も過ぎ去つては居ず、あのときのままなのである。私は誰からも姿を見られず名も知られず、山の奧で蟲けらのやうに暮したいと思つた。

私はうちのの顏を見ないやうに眼を伏せた。そして、可哀さうな自分の肩に手をかけた。お立ち。そんなことはこの事の起る最初にすつかり解つて居たことではないか。お前はとうに決心して居た筈なのではないか。破壞の上に立つてゐる幸福だ。お前は、そんなところに立ち留つて背後を見たいと思つては不可ないのだ。さうだ。もう一度同じところへ立ち戻ることは出來ない。私は前の方へ歩き出さねばならない。

明け方近く寢に就き、私は鴻の幼い戀のために祈つた。

5

十日ほど經つた。

鴻は試驗が駄目に決つて、名古屋へ歸り夜學校の教師でもしようか、東京の郊外で小さな喫茶店でも遣らうかと迷つて居た。國の母から「十二日に、稻荷さまと妙見さまへ百度詣りをした。若し合格しなかつたのなら、合格しなかつたことが神樣の思召しなのであらう。氣を落さないやうに。」と言ふ手紙が來た。

ムツミと言ふ男も、北海道から二人來たと言ふ男たちも姿を見せなかつた。私たちは彼等のことを、面白半分に他人のところへ蠟燭の火を持ち廻る閑な人々だつたのかも知れないと思ふことがあつた。けれども、自分たちがその火を見て跳り上つたことを可笑しく思ひはしなかつた。時が經ち、心の緊張が去るにつれ、却つて鮮やかな夢を見たりした。吉村の父から手紙が來た。「陽一の骨壺の蓋がお前のところに隱してあるだらう。隱さずとあれを直ぐ返せ。小包で直ぐ送り返せ。」とあつた文句が、醒めてのちまではつきりと頭に殘つた。陽一と言ふのは、二年ほど前、八丈島で亡くなつたあの男の長兄で、その骨壺が長い間誰もひきとりてがなく白木綿に包んだまま、私の隱れて居た家の床の間に置いて

あつたのである。また或晩は吉村の母のことを夢に見た。私とその母とは山道を歩いて居た。小さい松の木が一ぱい生へて居て、その隙間から黄色い山の肌が見えるやうな小山で、細いうねうねした黄色い道である。そこを通つて、よく子供の私は生母の墓詣りに行つたことがあつた。

「千代さん、七十五錢お呉れえいの、」

と吉村の母は歩き乍ら言つた。私は、それを遣るのが可厭で仕方がなかつたので、沈默つて居た。するとまた言つた。私はそのとき、この母を殺して遣らうと思つて、一寸立ち留つた。山のてつぺんであつた。「やれやれ」と言つて母も立ち留つた。すると、母のすがつて居る杖が體の重みでたわわに曲つた。私は、はつと思つた。母の足もとの土がずずと落ちたのである。私の眼の前がぱあつと明るくなつたと思ふと、黄色い土煙を立てて、母の體は麓の方へ轉がり落ちた。私は眼が醒めた。何とも言へない暗い感じがした。頭の調子が不健康なせいもあると思つたので、そんな朝は新しい空氣の中へ散歩に出た。

地震のあと、このあたりもすつかり開けた。畑の中には幾つとなく新らしいトタンの家が建つた。百姓は氣が落ちつかず、馬鈴薯の植えつけも今年は遅れたと言ふことを聞いた。借り手を待つて居る空き地には、穗をもつた丈の高い草が一ぱいにはびこり、麥畑の角には馬込村第二耕地整理と書いた木札が立つて、脚袢をまいた技師が自轉車に乘つて往來した。土地を持つて居る百姓は鍬を洗つて、道端にしやがみながら煙草を吹かして居た。晴れた日はうちの中に居ても、トロツコの音が聞える。丘の斜面は裸になつて、その赫土が新しい道の方へ運ばれるのである。土がくづれないやうに、糸を引いて植えつけた道のへりのほし草が、風に吹かれてひよろひよろと動いた。私は歩き乍ら、その朝讀んだ「戰爭と平和」の或る一節を思ひ浮べた。露西亞遠征の最後にナポレオンは慘敗した。その原因に就いて書いてあつ

た。それは、ロシアの將軍クツウゾフの統帥宜しきを得たためでもなく、ナポレオンが拙い鼻カタルに犯されて、指揮をなほざりにしたためでもなく、またその朝、非常に寒かつたことや、從僕の不注意に依つてナポレオンが濕つた下着をとり替へなかつたためでもなかつた。それらの、どこか微妙な繋がりを持つた數知れない出來事を、同時につくつた或る見えない力のためであると書いてあつた。私は暮れの金を作るために東京へ出て來た。その金のことがうまく行かないで、長い間東京に居た。その日は雪が降つて居た。私は雪が止むまでと言はれて、西村と言ふ人の書齋でぼんやり坐つて待つて居たのだ。若しあの日に雪が降らなかつたら、と私はこの馬鹿々々しい論理を眞面目になつて考へ始めた。そして、さう考へさかのぼる事が、無意味などうどう巡りに過ぎないと感じ乍ら、長い間、運命と言ふ事に就いて考へた。運命に力を借すことは恐しい。鴻と一緒に名古屋へ行く事は止さう。私はさう考へた。

遠くから、洗ひ場で何か洗つて居る朝鮮人の女の白い着物が見えた。油で黒く光つてゐるその頭がてんたう蟲のやうに見える。丘の急な勾配から、はづみを喰つて凄じい勢でトロッコが下りて來た。洗ひ場のところで急に低くなり、そこから平坦な田圃の道の方へはげしく勢をはばまれるために、一寸の間、車はぶら下つたやうになつた。女はそのたびに立ち上つた。立ち上ると、胸のところまでしかない上衣と袴との間が、何か果物のはぢけるやうな感じで割れ、思ひがけなく裸の乳が現れるので、それが、酷く吃驚したやうに感ぜられる。トロッコに乘つて居るのは、皆同じ仲間なのであらう。下から車を押して行くとき、男たちは何か無駄口を利いた。その顏の眞上に日をうけ、笑つて居るのが遠くから感じられる。あの勢で、車が洗ひ場の中へ落ちたら如何だらう、と私は考へた。落ちないとも限らない。日日幾回となく上下して居て、もう馴れても好い時分だらうのに女はあの通り吃驚しては立ち上る。若し、あの車が逆立ちをしたら、そして、いま日をうけて笑つて居るあの男たちの一人が土の上で動かなくなつたら、私はその不幸な偶然の數知

れない黒い糸の一本をでも、動かすことを惧れなければならない筈であるのに、トロツコは裸になつた赫土の崖の上に隠れた。いま、下りて來るぞ。私は或る期待をもつてそれを待つて居るのである。だがまた、あの白い着物を着た女が飛び上り、車はぐいと彈みを支へて低い方へ曲つて行つた。私は何となく疲れてそこから眼を離した。

　すると今度は、土堤の片側道に小さく見える村役場の中から、誰か出て來て車に乘つたのが見えた。そこから里の方へ、白く乾き上つて伸びて居る國道を俥はいせいよく驅け出した。續いて、法被がけの男が二人、又そのあとを追つた。風に向つて走つて居ると見えて、走つて居る人も俥の上の人も片手で帽子を押へた、俥と人と、その足並にある緊張を感じ乍ら、私は子供のころ町へ賣りに來た廻り燈籠の影繪のことを思ひ出した。法被がけの一人が一寸立ち留つた。土堤から田圃の小道へおりる別れ路の所へ來たので、下りようか如何しようかと思つて居る様にして、やはり下へ下りて來た。私は草の中へ道をよけた。それは、昔角力であつたときの名前をそのまま吉田川と呼ばれて居る仕事師の親方であつた。

「いま備前屋の親爺さんが自動車に轢かれました。村長さんが知らせに行きました。」

と言つた。そしてまた走つて行つた。私は知らぬ間に、それを言つたときの吉田川の顏つきに支配され、急いで同じ方へ歩き出した。備前屋と言ふのはうちから表通りへ出るとりつきの家で、その男は村役場の書記か何かをして居て、留守の者は小商ひをして居た。家は見えないけれども、うちの裏と地續きになつてゐる地面には、一面に千兩が植ゑてあり、霜よけの簀の子の上に大きな柿の幹が五六本、空へ向いて脱け出て居るのが、私の部屋の窓から見える。その地面が耕地整理の道路にとられて、あとは細長い役に立たない地面になつて殘されると言ふ話しで、目標しの綱を張つた柵の中を、その男が、酷く亢奮して行つたり來たりして居るのを見たこともある。背の小さい男であつた。

　うちまで行くと、門のところに嫂や大工の内儀さんや地主のうちのお爺さんなどが一塊りになつて、備前屋の家の方

を見乍ら、その話しをして居た。前の日、役場の用で東京へ行つたきり歸つて來なかつたので留守の人たちが心配してゐたが、も早やそのときは佛になつて居たのだと言ふことや、セルの行燈袴を穿いて居たために、自動車と擦れ違ふ拍子にその袴の裾が風に吹かれて車輪の下に卷き込まれ、あはやと言ふ間に下敷になつたのだと言ふことなどを見て來たやうに話して居た。

夕方、庭に出て草を引いて居ると、ガソリンのけたたましい音がして、軈てぶぶぶぶと通りの同じところで小刻みな音が動かなくなつた。私はうちのと顏を見合せた。

「自動車よ。屍骸を運んで來たのよ。」

すると、夕方の、蟲の羽音さへ聞かれるやうな清澄な空氣の中を、備前屋の家の中の微かな物音が私の耳許まで傳はつて來るやうな氣がした。私は、薄暮の中に光つて居るやうに見えるうちのの顏をもう一度見た。靜かな愛情が私を捕へた。

「ねえ、――葬儀社の自動車にしては早いでせう。」

表の通りは、落合の火葬場へ行く道筋である。私は、他人の不幸と綯ひ交ぜになつて居る幸福のことを謙讓な氣持で考へた。

6

その夜、珍しくひとりだつたので所在なく板敷の上に寢て居た。枕許の灯を消すと、大きな硝子の出張りから見える外の方が明るいので、知らぬ間にその外から流れ込む仄明りの、霞の中に寢て居るやうな感じである。今まで少しも氣

附かなかつたが、露路向ひの家の窓から來る光りが、斜めに這つて出張りの棧を黒く浮かして居る。そして、よく見て居ると、丁度その硝子の上の方に、明るい障子が半分開いて居て蚊張の釣つてある座敷の模様が映つて居る。私は、頭が靜かになつて居たので直ぐそれに氣附き前のことを思ひ出した。不思議な光線と空氣と硝子のせいである。この部屋は三方に硝子の窓があつて、或る窓から光線に送られて來た映像は一ぺん白い壁につき當り、そこから折れてもう一つの窓の或る高さのところに、視野からは遮られてゐるそれを映し出すのであつた。少しも不思議はなかつた。今のは、丁度この北の眞後にある家の座敷が色刷りの繪葉書のやうに小さく映つて居るのである。いつかの晝、洗濯物を干して居る女の姿が映つたが、あれも同じ家の若い奧さんのであつたらう。ひとりで暗い中に寢て居る私の頭に、この映像から來る靜かな感じが浸みた。

　なかなか寢付けないので、私は枕の上から窓の外を見て居た。部屋の中の暗さに眼が馴れると、月も星もない外が晝のやうに明るくて、備前屋の地面の空に拔けて居る柿の木の黒い枝が一つ一つ數へられる。何となく、私の眼はその地面へ惹かれた。すると、そのとき露路の石疊を下りて來る下駄の音が聞えた。そして、ちやりんと音がした。ああ、誰か金を落した。私はさう思つた。また、ちやりんちやりんと音がした。そして、石疊の上を轉がる音がした。私の神經は次第に冴えて來た。――あの死んだ男は慾張りであつた。夜、誰にも姿を見られないほどの暗さをたのんで、自分の持ち分の地面を擴げるために、地境の石を動かしに來たと言ふ話しを聽いた。朝になつて、こちらの地主はその石をまたもとのところへ置き直した。するとあの男が、吃度、柿の木の蔭から出て來て聲を掛けた。少しも眼を反らさずに、村の何かのことを話し掛けた。さう言ふ話しを聽いたことがある。あの男は、その慾張りの心に少しの整理もしない中に、或る見えない力に依つて、ふいにその計算を斷たれたのだらうか。私は、あの男が幽靈になつてこの窓から見える

地境の石を動かしに來ることを想像した。すると、實に馬鹿げたことであるけれども、備前屋の地面の大きな柿の木の幹が、急にぼうと灰白くなつて或る近さのところまで私の眼に迫つて來た。私の眼は私の頭がはたらきに依つて、いろいろなものを見るやうになつた。こんなとき、幽靈でも見ようと思へば見えるに違ひない。

「おい、もう寢たか。」

外からうちの聲がした。

「一寸開けて呉れ。螢を捕つたから、紙か何か。」

私は手を伸して、枕許のスヰツチを捻つた。外は雨が降つて居るのか大きな番傘をさして、うちのと弼とが笑ひながら立つて居るのが見えた。

翌くる朝、朝の仕度をしに下りて行くと、流しの側にしやがんでお婆さんが義齒を洗つて居た。

「今朝、井戸の蓋が一尺くらゐずつて開いて居たが、何事もないかしらん。」

と言つた。聞いた時は何とも思はなかつたが、あとでその蓋の上にのつてゐた焜爐を下さうとすると、蓋の一ばん端の板が脆く欠けて井戸の中へ落ちた。じやぼん、と遠い微かな音がした。のろく、私の頭にその考へが浮んだ。備前屋の誰かゞ身投げをしたのではあるまいか。私は、死人の水で炊いた飯の中から長い髮の毛が出たと言ふ話しを思ひ出した。念のために蓋をすつかりとつて覗いて見ると、先刻、板切れを落したので小さな波こそあつたが、水は黒い油のやうに沈んで居る。

「如何かあつたか。」

後から、お婆さんが心配さうに聲を掛けた。備前屋の主人が死んだことを誰かがお婆さんに話したのであらうか。お婆さんは或る一つの考への周りを行つたり來たりして居る。何でもその事に結び合して考へる。夜、誰も寢靜まつたころになつて怖り氣にぽくぽくぽくぽくと木魚を叩いて居るお婆さん。そのあとで、巾着の中の僅かな小遣錢をちやりんちやりん音させながら數へて居るお婆さん。それがお婆さんの死と生に對する恐怖であると言ふことを、誰も知つては居ない。

「先刻、お番茶を買ひに行つたら本日休業と言ふ貼り紙がしてあつた。」

「備前屋へお出でになつたの。」

「ちつとも知らなかつたものだから。――――息子さんが蒼い顔をして坐つて居られた。」

居られたと言ふ言葉が重く私の耳に殘つた。老つて、生れ故郷の奥深い隱居所を追れ、殼を剝がれたかたつむりのやうに人を惧れて居るお婆さん。お婆さんの眼にはさまざまな人が居られるやうに見える。そして、その中には嫁であるべき私も居られるのだ。

「俥の音ですよ。こつちの露路へ這入つて來ましたよ。」

私は優しい聲で言つた。お婆さんは急いで義齒をはめた。そして耳を傾けるやうにして、「聞えない。」と言つた。

如何いふ譯かお婆さんの顔がぼうつと紅くなつた。私は長い間、お婆さんと話しをしなかつたやうな氣がした。爽やかな空氣の中に遠い飛行機の唸りが聞える。幌を掛けた俥が坂を踏みしめ乍ら、ゆるく下りて來た。そして、うちの門のところでぐいと梶棒を廻して、後向きに留つた。

「おや、地主さんの方へ留つたのですよ。」

地主と言ふのは百姓をして居る人づきあひの狹い家で、俥が留つたりすることはなかつた。私とお婆さんとは好奇心から、そこに立つて見て居た。黑い夏羽織を着た男が、お辭儀のやうに屈んで門を潜つて這入つた。俥夫は汗を拭き乍ら下の道へ下りて行つた。すると門の中から、客と入れ違ひに見たことのない若い男が出て來て、潜りの上に何か白い紙を貼つた。そして、一寸離れてそれを見て、また中へ這入つて行つた。

「何でせう。」

「何事かあるのか知らん。」

「鴻さん、鴻さん、」

と、私は聲を制へて呼んだ。丁度、手拭をぶら下げ乍ら遣つて來た鴻は、直ぐこつちへ向いた。「その貼り紙、何か書いてあるのか讀んで來て、」

近眼の鴻は、よく見えないと言ふ格好をしてすぐ側へ寄つて行つた。そして、こつちへ聽へるやうに聲を立てて讀んだ。

「約束外の新聞お斷り。」

「なあんだ。」

「はははは。」

お婆さんは子供のやうになつて笑つた。空氣が泡を立てて擴がるやうな感じである。

その日、備前屋の葬式が濟んだ。行列の一番うしろから、村長さんがシルクハットを冠つて俥にのつて行つた。私は

ほつとした。子供のとき、うちの格子に摑まつて書生芝居の町廻りを見たことを思ひ出した。じやぼん、じやぼんと銅鑼の音が遠ざかつて行く。村長さんは片足短いので、どこへ行くにも俥で行くと側の人が話して居る。のつぽの肴屋が店から出て來た。往來に立つて、行列を見送り乍ら大きな聲で言つた。

「人間は一生の中に三度、人から見られるんだ。如何も定りだから仕様がねえ。」

ひよいと後を見るとうちのお婆さんが立つて居た。髪が針金のやうにのびて亡者のやうに見える。あののつぽの肴屋はお婆さんの方へ向いてああ言つたのに違ひないと言ふ氣がした。すると、立つて葬式を見て居た人たちがみんなお婆さんの方を向いたやうな氣がした。私は腹が立つて來た。何で腹が立つのか解らなかつたが、それがお婆さんのせいのやうな氣がして、お婆さんは葬式なぞ見ることはいらないのだ。誰からも、何にも知らないよその人からも、死ぬのを待たれて居るやうな氣がしたいのか。さう思ふと、私はお婆さんの顔が見られなかつた。萎へた浴衣の上から背骨の見えるやうなそのか細さ、それが私には堪らないやうな氣がした。

うちへ歸つて、私は長い間机の上にうつ伏せになつて居た。露路の石疊をひとり下りて來るお婆さんの杖の音が聞える。私は今朝井戸端であつたことを思ひ出した。――あれは嘘だつたらうか。私はお婆さんを憎んで居る自分を隱すために、あんなに優しかつたのだらうか。私は、自分が醸し出す憎しみの空氣を吸はないでは生きて居られない。私はどこに居るときにも自分の居る直ぐ側に憎しみの對象を見出した。或るところで、十七になる女中を使つて居たことがあつた。私はその小娘を憎んで私の側に居られないやうにした。娘の親から葉書が來て、小娘は暇を取つて行つた。またこの邊を通りかかることがあつたらお寄り。別れるとき私は優しい聲をしてさう言つた。そして私の古い着物を遣つた。あのときと同じやうに、私はこの家の中でのお婆さんを憎んで居るのだらうか。さうだ。邪氣を知らない娘が私の

醸し出す空氣の中ではあんなに變つた。その嫂が、お婆さんを憎みお婆さんを呪ふのを聞いて、私はあんなに喜んだではないか。――――だが、これが私であらうか。私はこんな口の利き方をどこから見附けて來たのか。父が死ぬ前にさう言つたのだ。「お前はひとりぼつちになるだらう。あれは繼母だ。」私はあの母を少しも愛しはしなかつた。今でも愛しては居ない。私はそれを言ふのが恐しい許りに、優しい手紙を書いて居るのだ。眼を閉ぢると直ぐ現れる。父が椽側に立つて燒けた火箸を投げた。母は叫び聲を上げて身をかはした。そして、恐しい顔をして言つた。「早う死んだらええ。」私は長い間そのことを思ひ出さずに居たのだ。そして、上へ上へ繪の具を塗つて隠して居たのだ。或夜であつた。私たちがまだ戀し合つた許りの或夜であつた。うちのは私を膝の上にのせて搖すぶり乍ら、子供を守りするやうに、よいよい、よいよいと言つて抱いた。長い足を膝からはみ出し背中を猫のやうに縮めて隨分へんな格好なのに、私はふいに自分の子供のときの事を思ひ出した。すると、笑つて居る最中に、咽喉が詰つたやうになつて涙が溢れさうになつて來た。「私は子供のとき、誰からもこんなにして抱いて貰つた覺えがないのよ。私が生れたとき、眼を眠つたやうになつて冷くなつて居たから、父が一晩中、懐の中で暖めて居てやつと眼が開いたのだと言ふ話しを、よく聽いたけれども、あれは屹度嘘だらうと思ふの。私、誰からもこんなにして抱かれはしなかつたわ。」私はそれを自分に言ふやうにして言つた。うちのは、私の頭の上に顎をのせて居たので、私の顔が見えなかつたのだ。如何かした拍子に、兩手でぐいと私の足を折り曲げるやうにして、私の頭の方へ押しつけた。そして、「オイ、オイ、」と言つた。「棺桶の中へ入れるときは斯うするんだよ。」「いやあ、」私は、可厭と言ふほど力を入れて兩足を踏んばつた。何と言ふ寒い氣持であつたらう。足許をすくはれたやうな氣がしたのだ。あの瞬間、私の心はうちのの膝から辷り落ちた。膝の上は冷たかつた。「お前はひとりぼつちになるだらう。あれは繼母だ。」あの聲が霧のやうに下りて來て、私の心を包むのだ。――――

私は机から顔をあげた。長い時間が經つたやうであつた。悲しい淋しい氣持であつた。私はしよんぼりして、自分がお婆さんのやうな氣がして來た。お婆さんは他人の葬式を見乍ら自分の葬式の事を考へて居たのだ。自分の墓石の費用に當てるために這入つて居た保險の金を、少しづつ少しづつ借り出して、幾らも殘つて居ないことを考へて居たのだ。葬式や墓石や、そんな事にさへ慰さめを感じるお婆さん。私は靜かな氣持になつて、そのお婆さんと一緒に死の近くへ行つて見た。しかし、私とお婆さんはそこで顔を見合せる。そして、お婆さんは固くなつてそこに立ち留り、私はお婆さんひとりを置いて後すさりをし始めた。お婆さんの恐怖は、いつでも側に居るものの心に反射しないでは居ないのだ。誰か來い、誰か來い。私は後すさりをし乍ら他人を呼んだ。するとそのとき、下の藥屋の扉の外に、行商の肉屋が立つてこつちを見て居るのに氣が附いた。私は何となく嬉しかつた。肉屋はその赭い汚點のある顔に微笑を浮べてお辭儀をした。

肉屋にはせんに一圓借りてあつた。それを取りに來たのであつた。

「暫く見えなかつたのね。」

「はい。」

一言さう言つて、私から受け取つた金を長い縞の財布の中へ納ひ乍ら、背中の籠を揺すり上げた。眞田紐で吊したその籠には汚れた白布が掛けてある。かちりと籠の中で秤の分銅の鳴る音がした。

「肉の好いのがあるの。」

「肉はありません。」

「ないの。」

肉屋は下を向いた。そして、子供のするやうにゴム靴のさきで幾度も幾度も土をこすり乍ら、「肉は持つて歩いても賣れないし、」と言つて、また籠をゆすり上げた。「歩いて居る中に腐るし、當分の間止めようと思ひます。また秋になつたら持つて來ますからお願ひします。當分、揚げものでもして遣つて行かうと思ひます。」

春のころ、この男の來始めたころに私はよく、彼の商賣がよく行つて居るか如何か尋ねたことがあつた。「はい、お蔭さまで、」といつでも同じやうに答へた彼。せんの肉は堅かつたと言ふと、「さうでムいましたか。問屋では上肉だと申ましたのに、それでは私が欺されました。」と言つた彼。目方を計るとき、その入れ目のやうな二つの眼が動かなくなり、手が細かく〳〵顫へる彼。私はそれを思ひ出した。夏になつて、肉は持たなくなつたのだ。彼は暫く足で土をいぢつて居たが軈てさようならと言つて歸つて行つた。大きな椎樹の葉蔭から、籠を背負つた工合が老つた猿廻しのやうに見え隠れする。私は、彼の商賣がうまく行かなかつたことに説明し難い心の重さを感じた。

午後、鴻が來て、店を遣るのに決めたと言ふので、手頃な借家を探しに出かけた。畑は何時の間にか麥が刈られて、さつま芋の莖が伸びたり、南瓜の黄色い花が咲いて居たりした。夏の畑の青さは、見て居る間にもう一皮むけるのではないかと思はれるほどの生々しさである。私たちは谷中田圃へ出る新しい道を通つて行つた。その道はついこの間出來上つた許りで、まだ眞青い雜草が轍の下に深く喰ひ込んで居る。歩いて居ると、濕つた赭土のにほひがする。もとは急な曲りくねつた坂道であつたのを、ゆるく丸味を帶びた勾配に直して、幅廣く、眼を閉ぢて歩いてもひとりでに下りて行かれるやうになつた。歩くにつれて、電信柱のさきが一本一本現はれ、日をうけて電線のガラスのやうに光るところが丁度汽車から見るお月さまのやうにだんだんだんだん遠ざかつて行き、道を下りきつた右側にある深い木立のまつ黑な梢が少しづつ少しづつ頭を出して見え初めるとき、歩いて居たものは自分たちが長い長い旅行者であるやうな感じを

受けるので、その淡い感傷が通るものの氣持を靜かにする、そんな道の一つであつた。

「あれは、うちの地主の家のだらうがの、」

鴻は立ち止つて指さした。道につれてゆるい勾配のまま一面に續いた青い畑の盡きるところにその藁屋が見える。「如何して納はんのじやろうか。節句は二た月も前に濟んだのに、」

「ああ、あの幟の竿、」

竿のさきの丸い玉がこつちへ向いて鈍く光つて居るやうに見える。うちに居ると、もう長い間、眼の前に見て居乍ら、風のある日は生きたものの唸るやうにきいきいと軋む音を聽き乍ら、いつとはなく馴れて居たのだ。然し、こんな遠くから忘れられた幟竿を見ると、へんに、逃げて行く時間と言ふものを感じる。

谷中田圃は、空き地が殆んどなくなつた。坂から見ると海苔の干し場のやうにトタン屋根が續いて居る。その低い屋根の下のあちこちから、かんなを使ふ音が聽える。壁土を運ぶ車力が、新道の土をこね返して通り過ぎる。道の兩側には一面に貸家札を貼つた家が列び、ところどころ貧しい商品を列べて居る店があつて、裏に、一二三本委えたなすびが植ゑてあつたり、小さな金網の中からしやもが長い首を出して居たりした。私は歩いて居る中に憂鬱になつた。誰がこんなに家を建てるのだらう。建てるよ、建てるよと言つて居るやうに聽へる。そこは、地震でぺたぺたに崩れたところであるのに、地震の前と同じかたちをした新しい湯屋からは、えんとつの煙が上つて居た。

鴻は熱心に見て歩いた。ずんずん裏の方へ廻つて、中を覗いて見たりした。そして、とある二間間口の青ペンキで塗り立てた家の前に立ち留つて、頻りに、これが好いこれが好いと言つた。私は何となく意地悪い氣持になつて、その青ペンキの軒にレースの緣飾りをしたのれんを想像し、中からあの寫眞で見た娘が顏を出して居る有樣を想像した。する

と、鴻の顏が三十位の大人に見えた。

「こんなところへ、お茶など喫みに來るか知ら、」

「來いでか！」

鴻は聲を荒くして言つた。「初めは來いでも、今んこと、來るやうになる。大正十六年にはこの邊まで市内電車の終點が伸びるんでよ。」

私は沈默つて歩き出した。――夏の夜であつた。小さい子供の私と鴻とは、裸になつて挾み將棋をして居た。暗いランプがともつて居た。母は何か解きものをし乍ら、ときどき、ちらりと將棋盤の上を見た。私は敵意で一ぱいだつた。ちろちろと蛇の舌の樣に動く赤いものが絶えず私の頭に閃いて、母と鴻との眼に見えない心の交流を（悲しい調子のひがみがそれを感じて居た。）妨げようとした。私は勝つた。そして、盤の上に駒を集めて立ち上らうとした。そのとき、私の膝から一つの駒が疊の上へ落ちた。「こすいぞ！」鴻が叫んだ。母が顏を上げた。その視線がちらりと私の體を掠めた。私は或る見えない惧れに脅されて、椽側から跳び下りた。そして、まつ暗なみかん畑をつつきつて、隣りの家の黑い板塀にぺつたりと張りついた。裸の背中を寒いものが通り過ぎた。私は死んで遣らうと思つた。橋の方へ出る道を私はずんずん行つた。然し、歩いて居る中に、亢奮からさめてしくしく泣き出した。うちへ歸ると、ランプが消してあつて誰の姿も見えなかつた。私は、一枚外してある雨戸のところに立つて外を見乍ら、眼の前に起つたことのおそろしさを信じまいとした。軈て、母と鴻が提灯を持つて歸つて來た。鴻はちやんと着物を着て居た。そこに立つて居る私を見ると、母は電氣にかかつたやうな笑ひ顏をして見せた。そして、優しい聲をして何か言つた。――これは、私が私の兄弟を憎むとき、まるで惡魔の呼び子の笛が鳴つたやうに現はれて來るたゞ一つの思ひ出である。私は、私の直ぐ側に

列んで歩いて居る鴻の方をちらりと見乍ら、あのとき母がしたのと同じ笑ひが自分の頬に浮んで來るのを感じた。だが、私は少しも鴻を憎んでは居なかつたのである。私や鴻の生れた家が貧しく、學問をしようにも自分の手で、丁度今の鴻のやうにほんの二十二になつた許りで、こんな貧しい街並に青ぺんき塗りの喫茶店を開かうなぞと思ひつかなければならなかつたことに腹を立てたゞけであつた。鴻の顔は三十位に見えるのだ。私は味氣ない氣がしていつまでも沈默つて歩いた。

八景坂の上は靜かな邸町である。眞晝どき、通る人もなく深い植込の中から犬の吠える聲などがすると不思議に夜の更けた感じがする。坂を上つたとりつきの石垣に、一人の乞食が腰を掛けて、赤い塗り物で何か食べて居た。その背後に續いて居る長い生垣には、春のころ造り花のやうなぼけが咲いて居たが、今は眞つ青い葉の間に鋭いとげの光つて居るのが見える。私は、歩き乍らそのとげに眼を吸はれたやうな風をして、乞食の方を偸み見た。その拍子に、乞食はぎろりと大きな眼をして、飯を喰ふのはあたり前ぢやあないかと言ふやうに、私の顔を白眼みつけた。私は狼狽てて眼を外した。すると、つひ、乞食の足のぶら下つて居る、丸い自然石を積み重ねた石垣に日が一ぱいさして居て、その上を十匹くらゐの蟻が非常にゆつくり這つて居るのが不思議な感じで眼についた。私はこの乞食を知つて居る。或るとき、私はうちの井戸端に立つて蒸かした芋を喰べて居た。乞食とその妻とはいつもの通り一本の紐きれに繋がつて露路の勾配を下りて來たが、立つて居る私を見るとその方へ這入つて來さうにした。私は無意識に拒むやうな手つきをして、芋のはいつて居る蒸かし笊の蓋をした。然し、乞食はまつ直ぐに私の方へ歩いて來た。何か約束のものを取りにでも來るやうなそのむつつりさが、私を狼狽させたのだ。私は反射的に、芋を持つて居た片手を乞食の方へ差し出した。すると、乞食は一寸立ち留つて、後に居る妻に、「おい芋を喰ふか。」と訊いた。「喰ふ。」と妻が答へた。彼はまた私の方へ近附いて、

沈默つて私の手から半を取ると、そのまゝ妻の方へ引き返して行つた。そして、二人はまた、綴されの端しと端しに緊がつて見えなくなつて行つた。私はいま、あのときの氣ぶつせいな恥に似た感じを思ひ出した。すると、自分の方がこの乞食に何かもの乞ひをしたのでもあつたやうな感じになつて戻つて來た。

今日は朝から氣持のへんな事許りだ。この乞食は、若いときは近在のもの知りで通つて居たが、智恵に塊つて氣が可[redacted]私は、[redacted]て居る乞食を、田舍の町でも見たし、北海道のある街でも見たことがあつたやうな氣がする。一體、こんな變りものの乞食が、どこの町にでも居るものであらうか。若し居るものとしたら、それはどこの乞食でも自分たち仲間同志では使ひ古しになつて居る一つのてとして、同じことをして居るのかも知れない。田舍の町に居た、甚左衛と言ふ乞食乞は食にならない前、父と親しい友だちであつたと言ふことを他人から聽いて、子供の私は、それを話した人の意地悪な氣持を感じたことがある。ちよん髷を結つて、一本の箒を持つて歩いて居た。辻に立つて、その箒を三味線のやうにして、何か唄ひ乍ら彈くことはあつたが、人の門に立つて施しを乞ふところを見たものはなかつた。それだのに、彼は私が三年まへの春歸つたときにもまだ生きて居た。いまふと、私の胸に浮んだのは、父があの甚左衛と性格的に似て居たところがあつたのではあるまいかと言ふことであつた。甚左衛の風貌と奇行とはそのまま父の中にも隱れて居たものではなかつたかと言ふことであつた。

停車場の近くまで行つて、やつと家主の家を探し當て、敷金の手附を置いて私たちは直ぐ引き返した。

途中、同じところで先刻の乞食が一人の新聞配達と摑み合ひのやうな格好をして居るのに出合つた。新聞配達は、寧ろ乞食の汚さに辟易して居るやうなかたちで、如何かして乞食から自分の體を振りもぎらうとして居るやうに見えた。

と、ふいに、叫び聲をあげて乞食が逃げて行つた。手に一枚の新聞を持つて。新聞配達は一人になつても、ひい、と言ふやうに言つては頻りに首を縮めて居た。すると、彼の法被の下から五錢白銅が道の上へ落ちた。彼は、はははと言つて笑ひ出した。立つて見てゐた鴉は、そのとき自分も彼の笑ひに誘はれたやうにして、私には言はない東京辯で、

「如何したのですか。」

と訊いた。

新聞配達は乞食の行つた方を振り返つて、

「新聞を呉れと言ふものだから、一枚遣つたら幾らだと言つてきかないのですよ。乞食のくせに新聞を讀むのだから可笑しいでせう。金は好いと言ふと、無理やり僕を組み伏せて、首筋から入れて行きやあがつた。」

と明るい顔をして言つた。そして、自分の麻裏草履の下で卸りにその白銅をこすつて居たが、ひよいと拾つて、走つて行つた。

7

風の酷い日であつた。軒の雨樋から、頻りに白い羽のやうなものが落ちて舞ひ乍ら見えなくなつた。

「雀が巣喰つてるんだね。」

うちのが言つた。寢そべつて本を讀んで居て、ふいに細かい活字から眼を離すと、庭の植込の木がさかさに生へて居るやうに見える。風が下枝から梢の方へ吹き上げて、庭全體が大きな竹藪のやうな感じで揺れて居る。私は父が死んで二年ほどして、職を求めにひとりで旅に出たことがある。そのとき、汽車の窓から低い山の中腹に風に揺れて居る竹藪

を見て、何とも言へない悲しい氣持になつたことを思ひ出した。

小竹さんが遊びに來た。煎り豆でも噛り乍ら氣樂な話しをする積りで、それを買ひに通りまで行きかけると、坂道な、何が書いてある原稿紙が轉がり舞ひ上り乍ら風に飛んで居るのを、好奇心から、私は追つて行つて拾つた。半きれのその原稿紙には上海至誠堂謹製としてある。歩き乍ら私は讀んだ。

或る日、綠風はさう言つて自作の歌を岑子秋に示した。

「ふむ、お前は私を愛して居る、それはほんたうかね？きつとかね？」

岑子秋は笑ひ乍らさう言つて、南の方へ吹き流されて行く雲に見惚れて居た。「綠風、あれをごらん。空で、惡魔と正義の心に富んだ青年とが組打ちをして居るよ。」

「また兄さんはそんな嘘を言つて、私を瞞さうと思つて居るわ。」』

これでお了ひだつた。私は直ぐそのぎこちないペン字を思ひ出した。小竹さんもいま、この道を通つて來たに違ひない。そして、これを拾つて讀んだに違ひない。私は手の中で原稿を皺くちやにし乍ら歩いた。讀まなかつたかも知れない。讀めばこの特徴のある字を氣附かない筈がない。一枚だけ、如何してこんなところに飛んで居たのか分らなかつた。それは、小此木と言ふ支那から歸つて來た青年の原稿で、確かうちのが預つて居たものだつた。小此木は、支那に居る間、小竹さんのさきの妻君と親しくなつて、一緒に東京に歸り、今では夫婦のやうにして暮して居ると言ふことを、小竹さんも知つて居る。私の不幸は、自分の過去を他人の生活のどこかに見付け出さないでは置かない一つの考へ方にある。そして、一度見つけ出すとそれは迷信のやうになつて私の心にこびりつく。私は、一度か二度うちへも來たことのある小竹さんのさきの妻君の中に或る自分を見出すのだ。これは、不仕合せな常識である。私は、その中に現れ

た私自身を憎むためにあの女を憎んだ。同じやうに、小竹さんも私の中にあの女を見出すかも知れないと言ふ考へに脅されて、私は長い間、冗談を言ふときのほか小竹さんの顔を見たことがなかつた。

　だが、この感情だけが私と小竹さん、恐らくうちのと小竹さんをも結びつけた。私とうちのとは、或る見えないものに向つて一つの償ひを初めると言ふ考へに、無意識の間に支配された自分たちを見出した。私たちは、小竹さんと新しいそのおくさんとのために、一年前彼等が上京したとき今の住居と幾何かの臺所道具とを備へたり、僅かな小遣錢を割いて彼等の貧しい食卓を賑はしたりした。彼等の心持を勞り、併せて自分たちの心持を勞る事のために、凡ゆる細心を以て彼等にのぞむことを忘れなかつた。

　然し、彼等の住居と私たちの家とは一丁と離れて居なかつた。一日に一度或は二度の往復は私たち皆を結び合せたと同時に疲れさせた。長い間に、私たち、少くとも私は、私の不幸な迷信を疑ふ瞬間があつた。その迷信に反逆を企てたいと望む瞬間があつた。或日、私たち二夫婦は、退屈し乍ら五目列べをして遊んだことがあつた。組になつて、星取り表をつくり勝敗をしるした。退屈の間に、遊びの面白さが豆の蔓のやうに伸びて行つた。その夜この遊が糸になつて、私は夢を見た。私の遠縁にあたる行男と言ふ男がこの家へ遊びに來たのだ。聲を聽いて、玄關へ出て見ると然し行男の姿は見えないで、あの男が立つて居るのであつた。夢の中の私は、あの男を見乍ら心に激動を感じない自分を少しも怪しまうとはしなかつた。そして、うちのを呼んで三人で子供のするやうにして遊んだ。矢張り五目列べをして星取り表を作つた。しかし、その星取りを紙に書かず、皆は田舍の子供たちのやうに裸になつて遊んで居たのでその裸の體へじかに書いた。あの男はさんざん敗けて、黑星ばかり取つた。あとで見ると、兩手の端から端まで、頭から兩足の端まで一とならびにすつかり黑星におほはれて了つたので、私は面白がつて、その黑星の間を一つ一つ、いたづらをして

一本の線で貫いた。すると、あの男は疊の上へ大の字に寢て足をばたばたやつた。私の書いた線のために、彌次郎兵衞のやうに見えるその様子は何とも言へない滑稽さであつた。私は聲を立てて笑つた。彈けるやうに可笑しかつたのだ。夢の中の私は、少しも變らない笑ひの中に長い間自分を任した。醒めて、この夢をはつきり思ひ出したとき、私はあの男の黒星を書いた體をもはつきり想像した。そして、その事であれほどの無關心さで可笑しかつた自分自身に對しては、不思議に不快を感じなかつた。現實ではどこまでも追つかけて來るあの男に對する運命的な暗い感じが、夢の中では美事に裏切られて居る事にへんな愉快さをさへ感じた。

二

私は、この夢で見た明るさに囚へられないでは居なかつた。この明るさは自分を解放する。私はさう思つた。そして、その次の日小竹さんが遊びに來たとき、私は小竹さんに對する自分の不幸な迷信に反逆を企てようとして或ることをしたのである。いつものやうに私は番茶を焙じて、あの小此木が上海から女と一緒に歸つて來たとき土産に呉れた支那燒きの茶碗にそれを注いだ。これまで、うちのは私が小竹さんに茶をすゝめる毎に、どの茶碗へ注ぐのかと言ふやうに私の手許をちらりと見る、そして、私が他の茶碗に注ぐのを見ると、また前のやうに彼等の話しを續けるのであつた。(私とうちのとは、その茶碗について何も話したことはない。)それだのに私たちは、小此木に對する自分たちの無意識的な好意から、このこだはりのある茶碗を捨てなかつた。私はその茶碗を、そつと疊の上で押して小竹さんの前へすすめた。眼は彼の前にある將棋盤を見詰め乍ら、手を伸して、小竹さんはその茶碗を取つた。そして、他の事に關すると同じやうな彼の無關心さをもつて、うまさうにその一杯を啜つた。思ひもかけず、私の胸を固いものが下りた。私はこのことを、自然に、放心の中で行はなければならなかつたのだ。私は自分を吐き出すやうな不快な者に感じて、席を立つた。お前は解放を望むことは出來ない。お前の卑しい冒瀆を止めよ。私は自分にさう言つたときのことを思ひ出したの

である。いま、小此木の書いた原稿が、風に飛んでこんな道を轉がつて居る、これは偶然の放心の中に行はれたのではないか。それだのに私は、うちのが他人（ひと）から預つた原稿を叮嚀に箱に纏めてゐることを知つてゐる私は、この原稿の飛んでゐることを自分のせいのやうに感じた。だが、小竹さんは彼自身を救ふ一つの與へられたものとしてのあの無關心さで、これを讀みはしなかつたであらう。人に知られない偶然は澤山あるものだ。春の大掃除のときであつた。私は古い手紙の整理をして居た。私のすぐ側には小竹さんが坐つて話しをして居た。私は手紙の一束を取り上げた。すると、その一番上に、小竹さんのさきの妻君の差出し名を書いた手紙が出た。私は狼狽てて、もう一束取り上げた。また同じ差出し人のが現れた。もう一度、もう一度、三度も同じ或ることを避けるためにしたことが、三度とも避けられない同じ結果になると、私は迷信に取りつかれないでは居られない。私は惧れをもつて小竹さんの方を見た。だが、小竹さんの體は銅像のやうに動かず、何か熱心に話して居た。見逃された偶然は澤山ある。小竹さんはこの原稿を氣附きはしなかつたのだ。小此木とあの女とがこの家へ現はれ私たちと離れられない繋がりを持つて居ることを氣附きはしないのだ。そして、小竹さんはますます彼自身の無關心さの中に自分を疊み込み、嘗て昔の事を忘れて了ふであらう。私は知らぬ間に、前よりもつと、不可能な平穩、針を包んだ無事を望んで居る自分に氣附いたが、それさへ不幸とは思はないほど、私の迷信に疲れて居たのである。

　歸つて來ると、うちのと小竹さんは沈默つて將棋をさして居た。私も彼等のうしろへ小さく坐つた。そして、誰からも氣附かれない心安さから、私は小竹さんの首や肩を一しんに見た。私はそれを初めて見たやうな氣がしたのである。偶にものを言はないで居るのは好いものだ。私たちはこの一年の間、話しのありつたけを話し續けたのだ。而も、話さるべきことは少しも話されないで。上海の共同公園の瓦斯燈が、日暮れと夜明け前と、周圍のどよめきに連れて灯

の色が變ること、屠殺場から街々の飮食店へ、丸のままの豚肉を載せてまだ誰も通らない夜明けの路を一つ車の滑る微かな音。窓を明けるとその裸の豚の眞白さに、初めてのものは誰でも吃驚しないでは居られないこと、賭博場の賽に弄ばれる心のこと、私はそれらの同じ話しを三度も聞いた。私たちには話しのなくなることが不安だつた。なくなるとき、探ぐるやうな眼で、お互ひがほんたうに話したがつて居るのはもつとほかの事だと言ふことを知らなければならないのが不安だつたのだ。或日小竹さんが振り疊みの將棋盤と駒の這入つた箱とを持つて笑ひ乍ら這入つて來た。それから、毎日毎日、駒を放つ乾いた音がしんとした空氣の中に響くやうになつた。

私はいま、あくことなく、小竹さんの頸と肩とを見た。米屋の主人のやうに肥え太つて、ゆきの詰つた汚れた浴衣は玄米袋のやうに見える。薄い毛の透いて見える後頭部から襟もとに、赤ん坊の頸にあるやうなくりくりした皺が出來、その太い首が動くにつれて伸びたり深くなつたりした。見て居る中に、頸だけが一つの表情を作つてゐるやうな氣がして來た。そのとき、ぱちんと駒を置く大きな響がして、

「ああ、」

と小竹さんが叫んだ。同時に頸がかくつと仰向いたと思ふと、後手に二本の丸い手を頸へ組んで、大きな伸びをした。私の眼に、頸がそれをしたやうに見えた。

「敗けた。」

と、小竹さんが言つた。うちのは、はははははと大きな聲をして笑つた。私は狼狽てて、煎り豆の袋を鉢へあけた。

そこへ小竹さんの奥さんが來て、いきなり、

「私、いやになつて了つた。」

と言つて、扉のところへ手を掛けて、上らうとはしなかつた。
「如何した？」
小竹さんはいつもの癖で叱るやうに言つた。小さい奥さんは、髪をひつ詰めの櫛卷きにしてゐるので、子供のやうにも見え、年のいつた小母さんのやうにも見えた。
「中村屋のお婆さんが、あたしがお金をとつたやうに言ふのよ。」
「如何した？」
と、小竹さんはまた同じやうに言つた。
「あのね、」
奥さんは機嫌のよくない顏で笑つて見せて、「今朝、おあしが二十圓なくなつたの、それを、あたしに見なかつたかつて訊くのよ。」
「お前は如何言つた？」
「如何も言はないわよ。私が知つてる譯がないもの、」
「そんな馬鹿なことを如何して訊くんだ、」
「如何してだか、」
奥さんはさう言ひかけて、「デベ、デベ、デベ、」と美しい聲をして犬を呼んだ。天氣續きのせいで、デベの毛並に艶があり、顏つきも愛らしかつた。奥さんはしやかんで、「デベデベ、デベデベ、」と神經的に言つてヤケに頭を撫でた。デベは眠さうに眼を閉ぢたが、ふいにくるりとひ

つくり返つて白い腹を上に出し、前脚でもがくやうな格好をして嬉しがつた。

「おい、」

うちのが私を呼んだ。「お前行つて訊いて來い。」

私は歩き出し乍ら、へんにいらいらした。これは、うちのがいま呼んだ聲のせいだらうかと思つた。深い日覆のために、水菓子屋の店は暗かつた。お婆さんは奥の座敷に坐つて、長い煙管で頻りに煙草を喫つて居た。亢奮して蒼くなつて居る顔を空に向け、奥さんの言つたことを訊くと、こつちを見ないで「なに、いいえ、」と言ふだけだつた。

私はこの使ひを愚かに感じた。豫期しなかつたお婆さんの固い態度から、自分もこの間違ひに關係があるやうな氣がして來た。そして、ついこの店へ這入る前に感じた卑しい好奇心、他人の間違ひから生じた不幸を覗き見したい心、自分の手でなく誰か他の者の手に依つて黒星が描かれることを見たかつたのだと言ふ以上に惡意のある微かな感じが、心の表面に浮ばないで消えた。私は何となく所在なかつた。風が裏から座敷をぬけて吹くたびに、軒の日覆が帆かけ舟の帆のやうに膨らみ、風につれて、その隙間から洩れる日ざしが、さくらんぼの赤い粒の上を搖れた。はたはたと日覆が鳴つた。私は歸らうと思ひ、然し何となく待つ氣持で奥の方を見た。すると、その洞穴のやうな暗い中から、年のいつたそこの娘が出て來た。眉の濃い、眼の縁に陰のあるその娘を私は何となく好きでなかつた。奥で聽いて居たと見えて、私の方へ一寸眼で挨拶したのち、

「話した方が好いよ。おふくろさん、」

と言つた。そして、矢張り母へ話すやうにして、言葉の意味は私へ向けて言つた。「今朝、煙草屋が金取りに來たんだねえ。あそこにある簞笥の抽出しに、昨夜確かに數へて十圓札十枚しまつておいたんですよ。それを出しに、抽出しを

開けてお札を數へて居るところへ、お客さまがお豆腐を買ひに來たんですよ。そのとき、おふくろさんも締めて行けばよかつたのに、そのまま店へ下りてお客さまに品物を遣つて居たんだねえ。するとあの奥さんが何時の間にか裏から上つて、簞笥の前を通つて店の方へ見えたのですよ。そのとき、ああ、あの抽出しをあけつ放しにしておいたと思つたんだと言ひますよ。それで、あの奥さんに煮干をはかつて遣つて奥さんが裏へ行く直ぐ後から座敷へ上つて抽出しを見ると、もうそのときには二枚見えなくなつて居たんだねえ。だけど奥さん、これはここだけの事で厶いますよ。現在、そこを見た譯でなし、こつちが抽出しをあけつ放しにしておいたのが惡かつたんだから、」

すつかり盜られたことに決めて居ると思ふと、不快だつた。が、その不快とは少しも關係なしに、私は、金は直ぐ眼に附くやうな具合においてあつたんだらうかと思ひ、若しさうだつたとすると奥さんはそれを盜つたときのことを想像したかも知れないと思つた。そのときさう想像したと言ふとが、奥さんにあんな陰の多い表情をさせたのだらうと思つた。

私は何より自分のためにはつきり知りたかつた。然し誰れの氣持をも傷けずに知る事は出來ない。結局、愚かな使ひだ。うちへ歸ると、皆、私が出て行つたときの姿勢のまま口を利かないで居たやうであつた。私は面を脫ぐやうにして洋傘をすぼめた。

「如何だつた、」

と、うちのが訊いた。

「きつと間違ひよ。」

私は直ぐ答へた。「初め二十、足りなくなつたやうな氣がしたのでせう。すると今度は、自分の考へを信じ込みたいものだから、如何でも、盜られた盜られたと思つて居るのじやあないかと思ふのよ。よく、子供なんかにあるやうに、」

その感じは確ではなかつたが、私は話し乍ら、小竹さんの眼が私の言葉を追つて來るのを感じた。

「何時でもさうなのよ。あのお婆さん。」

と、奥さんが小さい眼を一寸白くして言つた。小竹さんは沈默つて盤の上の駒をこはしたり列べたりして居た。さうして居ると、小竹さんの體はなほ大きく感じられた。

半時間ほどして、うちのは、神田の寄席へ行かうと言ひ出した。皆、賛成した。奥さんは少しはしやいで、

「あたし、支度して來よう。」

と言つて走つて歸つた。

「如何も、彼奴が盗つたやうな氣がして仕方ないな。」

と暫くして、小竹さんが言つた。

「如何してだ。」

「君はさう思はないか。」

「僕が？では、なにかそんな様子があつたのか。」

小竹さんは、はつきりした事を言はなかつた。そこへ奥さんが戻つて來た。桃色の着物を着て、絹の日傘をさして、少し離れると十六くらゐにしか見えないその様子がよく似合つた。私は何故かこの若い奥さんを非常に可愛さうな氣がした。電車の中で、私と奥さんは列んで腰をかけた。外は昏くなりかけて居て、硝子窓が鏡の代りに二人の顔を映した。見て居ると、摑みどころのない影のやうに見え乍ら、ふいに大映しになつたやうな感じで迫つて來た。私の顔は疲れて元氣なく、どこか意地悪るな表情を浮べて居た。二人が餘り違ふので、私は自分の青春をいま吸ひ取られた許りで

あるやうな錯覺を感じる。それほど、奥さんは美しかつた。奥さんのさとは、青島で料理屋を營んで居ると言ふことを聞いた。色々な話しから、私はこの若い奥さんに、寄生的な遊惰な生活を美しいものに考へる氣持が多分にあるのを知つて居たが、いま、自分の美しさに滿足して居る奥さんの幼い樣子を見ると、何とも言へず好い感じがした。そして、臺の出來事を忘れた。

寄席から出たのは、十一時過ぎて居た。

「腹さへ減つてなければ好い寄席だつたがなあ、」

と冗談に言ふくらゐ、皆、腹がすきゝつて居たので、須田町の露路にある蕎麥屋へ這入つたが、そこで、或る感動すべき光景に出逢つた。

8

廣い叩土に打水がしてあつて、じかに、卓子と椅子が置いてあり卓子の上には針金に挾んだメニユウがある。そんな蕎麥屋であつた。私たちは中へんのところに席をとつた。

暫くして、四十くらゐの醉つた男が一人で這入つて來た。まつ直ぐに一番おくの卓子のところまで歩いて行つて、そこへ體をぶつゝけるやうにして腰をかけた。そして、一寸入り口の方を振り返るやうにしたが、そのまゝ、首をがつくり落すやうにして椅子にもたれた。頻りに、酒を呉れと言つて居た。そのときまで、入り口の蔭に立つて居たらしい連れらしい子供を負ぶつて女が這入つて來た。他の客の眼が一ぺんにその方へ向いた。女は一寸どぎまぎして、然し愛想の好い、好い笑顏になつて自分を見て居る眼の方へ輕いお辭儀をした。そして、その男の側へ近づくと、なだめるやうにして何か言つて居たが、軈て自分もその向ひへ腰をかけ、奥の方へ、「姐さん、お酒を、」と言つた。

丁度、活動などのはねる時間で、客が一ばいだつた。女は絶えず眼でお辭儀をして居た。すると、男はあの醉つぱらひの口調でわめいたり何か注文したりするので、女は直ぐ他へ遣つて居た視線を戻して、あの、子供を見て居る女親のやうな好い、眼つきをして男の方を見て居た。そして、男のした注文をもう一度取次いだ。二人は一緒に酒を呑んだ。女はときどき、起つて男の裸かつた胸を合せて遣つた。二人の前に何か丼が運ばれると、二人は野原に居るやうにして無心にそれを喰つた。女の背中から赤ん坊が伸び上るやうにして手を出した。見ると、くりくりした手がまるだしで、すつかり裸なのが分つた。よく暑いころ田舍の人がやるやうに母の體へじかに背負はれ、その上から母の着物と一くるみに、負ぶい紐で縛つてある。子供が伸び上るたびに、女の肌が、その汚れた顏に比べて實に好い艶をしたまつ白な肌が背中まで見えた。女は、おいおいと言ふやうな事を言つて、丼の中の肉のやうなものをより出しては、自分の肩越しに上手に赤ん坊の口へ入れて遣つた。丼がすむと、女は男の煙草に火をつけて遣り、その火で自分も一本吸つた。ゆつくり吸つて了つて、一寸眼を空に遣つた。幼い、靜かな表情であつた。私は何となく打たれて、眼を反らした。

軈て勘定をすまして、その財布を男の頸へかけて遣り、男の肩をかゝへるやうにして立ち上つた。露骨な好意のない眼が二人のあとを追つた。

外へ出て、私は暗いところで追ひつき、

「今の二人連れ、宜かつたでせう。」

と言つた。うちのは、ただ、「うん、」と答へた。

然し、誰も私ほどあの光景に打たれなかつたやうな氣がして、私は不思議だつた。自分はあの女のどこが宜かつたか。あの女には、田舍の飮食店などで見る女のやうなところがある。無知で、野卑で、――さうだ。然し、あの中に

粗野な愛情、原始的な愛情と言ふやうなものの充ちて居るのを感じるではないか。どこか恥を含んだ明るい愛情。私はそれに惹かれた。この女のことは、ながく私の記憶に殘ると思ふ。

電車を待つて居る間に、まばらな雨が降り出した。暗い道を行く二人の樣子が想像の中に浮んだ。女の白い裸の背中に雨が落ちるであらう。私は空を見て何となく首を縮めた。感じの上で非常に近くあの女を感じ、心が和むのを感じた。

歸るとぐつすり眠つた。好い疲れであつた。然し、眞夜中になつてふつと糸が斷れたやうに眼がさめた。私は何となく、もう寢れないなと言ふ氣がした。そして、はつきり眼をさました。何時の間にか雨は止んで、靜かな、水の中に居るやうな感じである。短い蟬の鳴き聲がして、飛び立つて行くのが聞えた。すると、また暫くして同じ聲がした。あれは蟬が小便したのだらう、私はそんなことを思つた。裏の備前屋の地面に昨日脫け殼が二つ三つ落ちて居るのを見た。

私は或る連想から田舍のうちの墓地の事を思ひ出して居た。そこの空き地のシキミの木によく蟬がとまつて居て、私たちが行くと、じいと短く鳴いて飛び立つて行つた。「あ、蟬がしよんべひつた。」小さい弟がさう言つた。私と母と弟とは、お盆まへになると草むしりに行つた。墓石の間から、大きな齒朶が生へて仲々拔けなかつた。うちの墓地は一間四方くらゐしかなく、周りに石が積んであつた。一番はしの小さいのが私の生母、次の少し大きいのが父、そしてもう一つか二つの墓が建てられるくらゐ空地があつた。そこに、あの小さいシキミの木が植ゑてあつたのである。私たちは墓石を清めて、簡單に拜んだ。子供の私は、父の墓の前では何となく「おとつさま。」と呼びたいやうな氣がしたが、生母のの前では何の感じもなかつた。この感じはいまも同じだ。私の母は私を生んで間もなく死んだので私は彼女に就いて何にも知つては居ないのである。私はさきに下の道まで下りそこで、長い間手を合せて拜んで居る母を待つて居た。その間私は立つて、あの石の下に死後の世界と言ふやうなものがあるだらうかとそんなことをぼんやり考へたものだ。さうだ。あの石の下に死後の世界と言ふやうなものがあるだらうか。私はいま、同じそのことを考へた。すると、私の想像の中で、生母と父とが夫婦になつて暮して居る有様が思ひ浮んだ。生母のことを少しも知らない私であるのに、それ

は、不思議に似合はしい夫婦であるやうに思へた。

私は今夜いまになつて、その事を氣附いたのだ。然し母は。私が國を出てから十年の間、母は一人で語りその事を考へなかつたであらうか。軈て自分の老い、あのシキミのある空き地に埋められ、あの石の下で始まる三人の新しい地位を考へなかつたであらうか。この考へは私を恐怖させた。これは私のことだ。――こゝで私の想像は凍りついた。これは私のことだ。世界中の男と女よ。あなた方はあの石の下に何かあると思ひますか。そこでのあなた方を、誰の妻か誰の良人かを躊躇なく信じることが出來ますか。そこでは自分のではない他の意志が、他の意志許りが働くのであつたとしたら如何しますか。――ガラス窓にカーテンがないので、暗い夜がみな見える。胡頽子の葉のうすい色が動いて居るのが見える。私は渇へるやうな氣持で朝を待つた。あの胡頽子はこの春うちの古外套と取り替えたのだが、そして、直ぐ次の日から植勝の爺さんはその外套を着て歩いて居たが、ついこの間、途中で出逢つたら頭に何かのせその上から手拭で縛りつけて居た。何だと訊ねたら氷だと言つた。頭が、があんとして何にも解らぬと言つた。顏が膨れて居たやうだつた。もう死んだかも知れない、私はそんなことを思つた。すると、私の直ぐ側で、少し不規則な呼吸が聞えた。うちのが寢て居るのである。

私は何となく、自分も一緒になつて呼吸をあはして見た。すると何だか自分の呼吸が苦しくなつて來た。誰でも眠つて居るときにはときどき早くなつたり、そしてまた普通のときのやうになつたりするのかも知れない。私は二年も一緒に暮して、いままでこの人の寢息を聞いたことがなかつたのを思ひ出した。私たちは同じやうに寢て同じやうに起きて居たのだ。この人は病氣なのかも知れない。私はそんな氣がした。明日になつたら醫者に訊いて見よう、さう思つた。そして、若し病氣だつたら、一緒にどこか遠いところへ旅行しよう。谷川の瀬の音が微かに聞えるやうな、大きなゐろりのある宿屋が一軒あるやうなところが好い。そんなことを考へた。

離れ去る者

谷崎精二

一

急に降り出した驟雨を避ける爲め、銀座通りを散歩して居た人たちは我れ勝ちに大きなデパアトメントストアの中へ馳け込んだ。五月の末の日曜で、少し時候外れに蒸し暑かつたが、朝から空は綺麗に晴れて居たので、雨具の用意をして家を出かけた者は殆ど無かつた。木暮と榮子も其の中だつた。二人は晝から家を出で、三越で買物をして乘合自動車で銀座迄來ると直ぐ俄雨に襲はれて、其のデパアトメントストアの中へ逃げ込んだ。

七階建ての大きな百貨店が殆ど人で埋まつてしまつた。悠々と陳列品を見て歩いて居る者もあれば、窓際に凭れて空模樣を頻りに仰ぎ見て居る者もあつた。雨はなか〳〵歇まなくつて烈しい雷鳴さへも加はつた。時々室内の無數の電燈が今にも消

えさうに光を弱めると、暗くなつた室内へ外から薄赤い電光が待ち兼ねた樣に闖入して來た。硝子窓には礫の樣にピシ〳〵音を立てゝ大粒の雨が飛び附いた。

木暮と榮子も多數の群集にまじつてぞろ〳〵歩き廻つた。普通の日のお客と違つて彼等は皆落着の無い樣子をして居た。かうして此の大きな建物の中にはいつて居れば雷雨は安全に防げるものゝ、驟雨が歇まない限り彼等は此處を出て行けないのだつた。仕樣が無しに彼等は一階から二階へ、二階から三階へと足を運んで行つた。中にはもう歩く元氣が無くつて、大きな階段の下の廊下へぴつたり腰を下してしまつた者もあつた。ごろごろと雷が響いて來る度に女たちは蒼白い顏を見合せた。

二階で木暮は蝶形の結びネクタイを一つ買つた。榮子はエプロンを買つた。

『どうする？もつと上へ昇つてみる？』

三階から四階へ上る階段の昇り口で木暮は榮子を見返つてから問うた。

『えゝ。』

彼の女は頷いて木暮と並びながら海老茶色の絨氈が敷きつめられた階段を昇り始めた。

上へ行く程混雜は減つて來たが、其れでも階段だけはやはり人が群がつて居た。階段の途中迄來た時、又烈しい雷鳴が響いて來たので、木暮は榮子の方を見返つた。並んで昇つて來た筈の榮子が側に居なかつた。

『おや？』

ちよいとうろたへて木暮はあたりを見廻した。榮子は五つばかりの小さな女の兒の手を引いて、彼と反對に階段を一つづゝ降りて居た。子供の好きな彼の女が途中で擦れ合つた其の女の兒に笑顏を向けてちよいと手を出したのを、女の兒

が其のまゝ提へて一緒に降りようとして居るらしかつた。其の女の兒の側には母親が附いて居たが、彼の女はもう一人三つばかりの男の兒を片手で抱いて、片手には風呂敷包みを持つて居るので、もう一人で歩ける、其の年上の兒の方には氣を配つて居ないらしかつた。

榮子は一段降りては子供の顔を覗き込んで、『はいちやい。』と云ひながら手を外さうとして居るらしかつたが、子供はひどく彼の女が好きになつたらしく、どうしても手を放さなかつた。到頭榮子は子供と一緒に最後の階段を降りた。そして其處であいて居る片手で子供の頭を撫でながらやつとの事で握られた手を振りもぎつた。子供の母親は始めて氣が付いたらしく、腰を屈めて慇懃に頭を下げた。

本尊は階段の欄干に凭れてぢつと其の樣子を見て居た。榮子の優しい心の一面に觸れた事が彼を喜ばせた。だが次ぎの瞬間、彼はもう半月も會はない彼自身の二人の子供の事を考へ出した。そして急に憂鬱な光を浮べた彼の眼色を窺ひながら、急いで榮子が昇つて來た。

『困つちまつたわ。あの兒が私の手を取つて放さないんですもの。』

『お母さんが側に附いて居て氣が付かないのかね？』

『えゝ。下へ降りる迄知らん顔をして居たわ。――あなたの二番目のお兒さん、丁度あの位でせう？』

『うん。』

『顔は似て居ない？』

『さあ、どうだか。僕は今の兒の顔をよく見なかつた。』

本尊は話を其處で打切つてすた〳〵歩き出した。彼が子煩悩である事をよく知つて居る榮子は、往來で小さな女の兒

を見かけると、（木暮の兒は二人共女だつた。）直ぐ彼に子供を思ひ出させる樣な事を何とか話しかけた。「いやがらせ。」と思はれる程、さうした場合の彼の女の質問は執拗だつた。木暮がどの位深く子供を思つて居るか、其れを測らうとする爲めかも知れなかつた。或ひは又腫物の根を抉んで膿を皆押し出してしまふ樣に、彼の心に巣食つて居る父親としての愛情を、機會がある毎に突ついて根絶やしてしまふつもりかも知れなかつた。だが結果はいつも二人が互に不機嫌になつてしまふだけだつた。どうにもならない事でありながら菜子は木暮のさうした子供に對する愛情に嫉妬を感じた。木暮は又彼の女の氣持を察しながらも二人の子供の事をしみ〴〵と考へ續けた。彼の居ない間冷たい心を持つた母親にいぢめられて、其の母の眼を避ける爲めに男の兒の樣に戶外へばかり出歩いて泥いぢりをして居る不憫な子供たちであつた…………

到頭七階迄昇り詰めて、それから二人はエレヴエータアで一階へ降りた。菜子が便所へ行つた間に木暮は空模樣を見る爲めに電車通りへ向いた正面の入口へ出てみた。

雨はまだ歇まなくつて、時々電車や自動車が走り過ぎる以外、往來には步いて居る人の姿はまるで見えなかつた。入口の廂の下にも數十人の男女が群がつて居た。其れは皆服裝の粗末な爲めに、此のデパアトメントストアの中へはいつてゆつくり雨宿りをするのを遠慮して居る樣な人たちだつた。木暮は其の群衆の中に小さな女の兒を背負ひ、もう一人の兒の手を取つて玄關の石の柱にぴつたり身體を押しつけて立つて居る若い母親の姿を見出した。彼の胸はどきんと鳴つた。其の女の橫顏が彼の妻に何處か似通つて居たからである。

だがよく見ると其れは人違ひだつた。彼の妻よりずつと小柄で、蒼白い顏をした病身らしい女だつた。彼の女は着物の裾を捲くつて濡れた細い脛を露はに見せて居た。低い駒下駄はびしよ濡れだつた。袂からは汚れた足袋の爪先がはみ

出て居た。

『だが天氣の好い日曜だから、案外うちの子供たちは母親と一緒に此の邊へ出て來て居るかも知れない。』

彼はさう考へ續けて再び濃い憂鬱に心を閉ぢこめられた。別だつたらカフエーへはいつてもいゝし、タクシーを傭つて家へ歸る事も出來る。だが子供連れの母親だつたら結局かうした處へでも馳け込むより外はあるまい。事によつたら此のデパアトメントストアの中に今現に彼の女たちがはいつて居るかも知れない。彼が三階に上つた時一階に居り、彼が四階へ上つた時三階を歩き廻つて居たかも知れない。そしてやつぱりエレヴエータアで一階へ降りて、丁度今彼と同じ様に天氣模樣を見に玄關へ出かゝつて居るかも知れない。彼の妻は何とも云はずに冷たい魚の樣な眼を彼に向けるだけだらう。其れがいつもの彼の女の振舞だ。だが二人の子供たちは『お父さん！』と叫びながら左右から彼の身體に飛び着くに違ひない。さうしたら？さうしたら彼も何の躊躇なく子供を抱き寄せて頰擦りをしてやらなければならない。榮子が其れを見てどんなに怒つても止むを得ない。彼は子供たちを半月も放つて置いて、早くも此の世の中の淋しさと不仕合せとを彼の女たちに感ぜさせた悪い父親だつたから。

『これは皆あなたの計略です。此處でかうして私の眼の前で子供を抱き寄せて、私よりも子供をずつと好いて居ると云ふ事を見せつけた上で私と別れようとするんでせう。ようござんす、別れますとも。』

[redacted]彼の女は泣き喚くだらう、癲を起して倒れるだらう。そして彼の妻はやつぱり鋭い憎惡の籠つた眼で無言のまゝ其の樣子を見つめて居るだらう……

いつの間にか木暮の後には十數人の男女が押しかけて居た。そして其の向ふに榮子の姿が現れた。人込みを分けるのが面倒なので彼の女は強いて木暮の側へ近づかうとせず、

『雨はまだ歇まなくつて？』と云ふ様に遠くふらちよいと其の小さな、淋しい顔を傾げてみせた。

『人込みへ、人込みへ。雜踏の中へ立ちまじつて居れば、どんな人に出會つたつてわからないで濟む。』

彼はさう思つて又榮子を促し立て、人で埋つた一階の陳列場をあちこちと歩き廻つた。子供好きの榮子が又擦れ違つた兒に笑ひかけたり、手を差出したりする暇が無い様に、彼は反物だの、化粧品だの、藥品だのを指さしてやたらに彼の女に話しかけた。若しかして偶然彼の二人の娘が母親に伴はれて通りかゝり、先刻の樣に榮子と手を握り合せたりしはしまいかと思ふと彼は氣が氣でなかつた。どんな人間の、どんな些細な場合にもちやんと意地惡るく手を廻して居て、出來るだけ有効に其の場の道具建てを使はうとする『運命』を彼は頻りに怖れた。

二

雨は一時間ばかりして降り歇んだので、二人はタキシイを傭つてＫ町の家へ歸つた。

平家建の四間ばかりの小さな家だつた。空は晴れて夕燒の美しさが歸りの自動車の中からちよいと仰がれたが、家の中はもう暗くなつて居た。家の周りに日光を遮ぎる様な大きな建物や樹立は無かつたのだが、間取りが惡いためか、どの部屋も日中からいつも薄黑くつて、雨の降る日などは緣先へ出なければ新聞も讀めない位だつた。人に賴んで其の家を探して貰つた二人は、碌に家の樣子も見ずに越して來てからひどく後悔した。

『何だか陰氣な家ね。私氣味が惡いわ。』

榮子は越して來た晩にさう云つた。木幕は直ぐ近所の電球屋へ行つて五十燭光の電球を買つて來て、前の借家人が置いて行つた十六燭光の電球と取り代へたが、榮子は夜中に恐ろしい夢を見たと云つて木幕を搖り起した。其の翌晩も同

樣だつた。

『此の家乾度人が殺されたかどうかしたのよ。家賃も安いし、何だか變だわ。早く越してしまひませうよ。』

彼の女はさう云つて頻りに氣に病んだ。木暮は彼の女の危懼を一笑に附して居たが、三日目の晩、今度は彼の方が魘されて悲鳴を揚げた。

『そら御覽なさい、あなたゞつて魘されるでせう。此の家、乾度何かゞ祟つて居るのよ。』

榮子は彼を揺り起して眼を醒させてから云つた。

『そんな事があるものか。少し暗いだけで、家賃の安いのも其の所爲だよ。』

木暮は何處迄も無頓着な風をしてから答へた。祟られて居るのは此の家ではなくつて、二人の身の上だ。妻子を捨て情人と同棲して居る彼自身だ。日のさゝない、暗い家は丁度自分の境遇に適して居る――彼はそんな風に考へた。そして引越して來てから今日で三個月程たつ中に、どうやら彼も、榮子も、此の暗い家に馴ついて、もう夜も魘されない樣になつた。

榮子は着物を着替へると直ぐ臺所で女中を相手に晩飯の支度を始めた。木暮は茶の間に寢轉んでお膳の出るのを待つた。床の間の前に置かれた机の上には彼が會社から持つて來た急ぎの調べ物の書類が載つて居たが、彼は其れを手に執らうともしなかつた。郊外のS町に住んで居る二人の子供の事が先刻銀座のデパアトメントストアで考へた時よりもつと氣懸りになつた。もつと彼の心を締めつけて來た。いつ別れるともなく彼は其の子供たちと遠ざかつて、此の頃では滅多に子供の側へ歸らない樣になつた。會社へも此の家から通つて居た。榮子はさうした彼の父親としての惱みを察しなかつた。いや、察したが故に、彼がさうした惱みからともすれば沈んだ顏つきをするが故に、彼の女は彼に當り散ら

した。

『好きならば何故俺をそんなに苦しめるのだらう?』

木暮はよくさう思つた。だが彼が無言の中に子供の事を思ふ事によつて、やはり絶えず彼の女を苦しめて居るのだつた。そして相手を苦しめる事によつて益々愛情を募らせて行くのが二人の生活だつた。榮子か子か、どつちかを捨てなければ、木暮は破滅するより外は無かつた。だが現在の彼はどつちを捨てゝもやはり破滅に瀕するに違ひなかつた。二つの愛情が彼の心の中で烈しく戰つて、どつちかを斃すか、それでなければ彼の心を食ひ破るか、さうした結果をぢつと待つて居るより外手の出し樣が無かつた。榮子は絶えず彼に肉迫して來るだけに彼の態度を用心深くさせた。だが又子供たちは離れて居ても彼の愛を疑はないだけに飽足りなかつた。彼の妻が優しい、愛情の深い女性だつたら、彼は安んじて子供の一生を彼の女に托しただらう。だがさうでないが故に、子供たちが不憫であつた。榮子が彼の愛情の全部を奪はうと努めて居るに對し、子供たちは決して彼に何物をも求めようと迫らなかつた。奪はれても奪はれても、追はれても追はれても、直ぐ又彼の心の底に浮び出て來る父親としての愛情の表示を不斷に信じて居るに違ひなかつた。其れ故に、離れても離れられない事が確かであるが故に、子供たちを一時見捨てゝいゝとも云へるし、又いけないとも云へるのだつた。半年前、まだかうして榮子と一緒に家を持たなかつた頃、子供たちの側で寢て居ながらふと深夜中に眼を醒して榮子の事を考へ出すと、木暮はいつも『榮子!榮子!』と口の中で呟いてみた。だが今は反對に、榮子が側に居ない時は折々彼は子供たちの名を空しい部屋の空間に向つて呼びかけてみたりした。

『一人で何をしていらしつたの?』

榮子がお膳を持つて部屋へはいつて來た。彼の女はぢつと考へ込んで居る木暮を見る事を好きなかつた。其の時彼の

太い眉の間にいつも八の字が浮び出て居ると彼の女は云ふのだつた。そして其れは子供の事を思ひ續けて居るのだと云ふのが彼の女の推測で、彼の女は其の推測が過つて居ない事を確信して居た。

『何もして居ない。くたびれたから横になつて居たんだ。』

木暮は起き上りながらさう答へて、若し額に八の字が出て居たら其れを消す樣にと、あわてゝ眉を張つた。

烈しい憂鬱症の榮子はどんなに機嫌が良い時でもはしやぎ立つ事はなかつた。稍々微笑を浮べながら話し續ける位なもので、其れも此の頃は稀だつた。藝者だつた彼の女は木暮と戀に落ちて、自ら進んで勤めをひき、かうした不自然な世帶を構へる事になつたのだけれど、やつぱり現在の境遇に滿足出來ないのだつた。無論木暮が完全に妻子を捨てゝしまはないのが、其の不滿の原因であるに違ひなかつた。

『別れませう、ね、本當に別れませう。』

晩飯が濟んでから妙に不機嫌に默り込んで居た榮子は、突然顏を上げて木暮を見ながらかう云つた。『又八の字が額に出て來たわ。でも其れを怒るのは私が無理なんです、其れより綺麗に別れませう。さうすればあなただつてもつと陽氣な顏になれるわ。』

又かと云ふ樣に木暮は苦笑した。今度こそは本當に彼の額に八の字が現れたらしかつた。此の頃一日の中で屹度一度は別れ話を持ち出すのが彼の女の癖だつた。其れで居て、彼の女は決して本當に別れるつもりはないのだつた。木暮の額の『八の字』に對する一種の面あてだつた。

『僕は決して額に八の字なんか寄せて居やしないよ。若しそんな物が顏に出るとすれば、其れは君が別れませうと云ひ出す時だけだ。そんな話さへ持出してくれなければ、僕は額を顰めたりする事は決してないんだ。』

彼はさう辯解したが、榮子は承知しなかつた。

『でもあなたは此の頃いつも私の前で浮かない顔ばかりして居るわ。去年あたりはさうぢやなかつたんだけれど。男つて、別れたくなつても決して別れてくれとは云はない者ね。女の方で云ひ出すのを待つて居るんだわ。先のYがやつぱりさうだつたから、私の方で家を飛出して來たの。義理で一緒になつて居る位いやな事は無いんですもの。』

彼の女はさう云ひ續けた。Yと云ふのは榮子の先の夫の名だつた。ブルジョアの青年である其のYに愛されて、彼の女は廿一歲の時Yと結婚し、一昨年の春迄六年間同棲して居たが、Yが又遊蕩を始めたのを怒つて彼の女はYの家を飛び出してしまつたのだつた。其のYから榮子に與へた二三通の手紙を木暮は此の頃讀んだ。箪笥の抽出の隅にしまつてあつたのを、榮子が彼の前に取り出して見せたのだつた。其の手紙はかなり眞情の溢れた物で、家を出た榮子に是非再び歸つて來る樣にと切に賴み込む氣持が十分認められた。無論Yの方では榮子と別れる氣などは無いのだつたが、夫に他に愛人が出來たと云ふ事が榮子には我慢がならなかつたのだつた。

『私みたいなヒステリイはもういやになつたでせう。今度もつと優しい、何を云つても怒らない人を探すといゝわ。——爪の恰好だつて、こんなのではなく、もつと平べつたい、普通の爪の方が屹度あなたには氣に入るわ。』

榮子は今度は自分の指先を揃へて、爪の形をぢつと見つめながら呟いた。

彼の女の爪の恰好はさう珍らしいと云ふのではないけれども、ひどく細長くつて、半圓形にくるりと丸まつて居た。去年、まだ彼の女が藝者で居た頃、彼の女に熱中して妻子を捨てゝ同棲するからと云ふ條件で彼の女に身を任せてくれる樣に望んだ或る男が、『好きになると爪の恰好迄好きになる。』と云つたと云ふ話を、彼の女が其の頃木暮に傳へた時、木暮は『僕は爪の恰好なんか餘り好いと思はない。』と答へたのを覺えて居て、榮子は今彼に當てつけたのであつた。

『僕が倦きて別れたいと云ふ氣になつた時ならそんな事を云ふのもいゝか知れない。だが今の僕にそんな事をがみ〳〵云ふのはひどい。倦きるどころか、僕はかうして始終君の側に居るぢやあないか。さう邪推を廻されたり、ヒステリイを起されたりしちやあたまらない。Yさんの場合だつて、いつかの手紙を讀むと、Yさんは決して君に別れようとは思つて居なかつたのだぜ。』

木暮は榮子の視線の上をなぞる樣にして、其の細長い爪の恰好をぢつと見つめながら答へた。

『Yの辯護なんかあなたが今更しなくつたつていゝの。其れが第一をかしいぢやありませんか。あなたがYみたいに氣が變つた證據です。今に私と別れてから何處かでYに會つて、一緒に私の惡口でも云ふつもりでせう。』

氣がむしやくしやした時、榮子は何でもいゝから木暮を同じ樣に怒らせようとする樣に、理不盡な推測やら皮肉やらを彼に投げかけるのだつた。木暮はそんな時、唯下手に出て彼の女を宥めるより外は無かつた。ヒステリイが嵩じて來ると、彼の女は乾度癪を起して倒れるのだつたから。

倦きて居るのなら考へ込んだり、苦しんだりする譯が無い。苦しんで居るのは彼の女を愛して居て、どうかして彼の女を幸福な境遇に置かうとあせつて居る證據だと思はなければならない、さうした意味の事を木暮は努めて穩かな言葉で說いて聞かせたが、榮子は耳に入れなかつた。どうしても彼が倦きて居る。其れがはつきり感ぜられると云ひ張つた。

『私を此の上苦しめないで下さい。どうか別れて私を樂にして下さい。さうでなければ私死んでしまひます。今直ぐ一人で此の家を出て行きます。』

榮子は蒼白い顏をしてさう云ひながら、今にも立ち上つて外へ馳け出しさうな氣勢を示した。

『別れるよ。それぢやあ別れてもいゝからもつと落着いて。』

仕様事無しに木暮がさう答へると、榮子は彼の顏を睨みながら、『そうれごらんなさい。やつぱり別れたいんでせう。私の口から別れようと云はせたので、うまく行つたと思つて居るんでせう。』と憎々しげに叫んだ。

『あべこべだよ。君の方で無理に僕に同意させたのぢやないか。』

木暮はさすがに腹に据ゑかねて、怒鳴り返した。

『怒つたわ。到頭怒つたわ。』

榮子は笑ひ出さうとしたらしかつたが、顏面はひきつゝて、唇の間から上下の白い齒の列が次第に強く食ひ締められて行くのが見えた。

『又癲だ！』

さう悟ると木暮は直ぐ馳け寄つて彼の女の上半身を抱き、舌を嚙まない様にあわてゝ手巾の端を齒の間へ押し込んだ。其の時榮子はもう眼を半ば閉ぢ、今迄の憎々しさうな表情がすつかり影を潜めた、蒼白い無感覺な顏を電燈の下に曝しながら、がつくりと後頭部を木暮の腕に托した。

榮子は生れつき癇が强かつたが、其れでも癲と云ふ物は最近迄知らなかつた。木暮と戀に落ちてから始めて彼の女は癲と云ふ癖が附いた。去年の秋、始めて彼の女が癲を起して倒れた時、無意識になりながら頻りに舌を嚙まうとしたので、木暮は自殺を謀つたのだと思ひ込んですつかり狼狽し、あわてゝ人を走らせて醫者を呼んだ。だが其後頻々と同じ様な發作に襲はれるので、此の頃ではすつかり彼は癲の手當に馴れてしまつた。そつと彼の女の身體を床の上へ横たへ、着物を緩めて、背筋を押してやると、三十分か一時間で意識が恢復し、堅く結んだ唇や、食ひ縛つた齒が次第に解

けて來るのだつた。

いつもの樣に其の晩も一時間ばかり立つと發作が納まつて、硬直した全身の筋肉が徐々に弛んで來た。食ひ縛つた齒が解けて、手巾が唇の外へ落ちかゝつた。ふと彼の女は小聲で呟いた。

『やつぱり駄目だ。自業自得だ。』

木暮は彼の女の顏を覗き込みながらはつきり其の言葉を捉へる事が出來た。其れは妻子がある彼と戀に落ちて、彼を專有しようとする努力に疲れ果てた彼の女自身を嘲る言葉に違ひなかつた。木暮はつい先刻の、彼の女のがむしやらな非難に對する反感が一時にすうつと消えて、深い哀憐の情で心が潤ほつて來るのを感じた。

やがて榮子はぱつちり眼を醒した。齒を食ひ縛るのでいつも口の中が粘ばつく事を知つて居る木暮は、直ぐ冷たい茶を彼の女の口に注いでやつた。

『あなた、まだ居たの。別れた筈ぢやなくつて?』

そんな事を云ひながらも彼の女の語調はずつと優しかつた。眼には詫びる樣な弱々しい光があつた。開かれた二つの掌を重ねて、あの細長い、半圓形に摘くれた爪の附いた指先を、彼の女は柔かく揉み合せた。

『さあ、もう遲いから寢間着に着替へて其のまゝ直ぐ寢るといゝ。』

和やかになつた榮子の氣持に反映されて、木暮もほツと一息つきながらさう云つた。

時計が十一時を打つた。木暮は榮子と枕を並べて床に就いた。榮子は仰向きになつてぼんやり頭上の電燈を見上げて居た。眠むさうな眼ざしだつたので、木暮は安心して自分も眼を閉ぢた。

うと／＼と眼蕩んで居た彼は暫くしてふと眼を醒した。葉子の寝床が空だつた。そして枕許に人の動く氣勢が感ぜられた。頭を擡げると、簞笥の側の衣桁に掛けられたメリンスの蔽ひが取り除けられて、鏡の中に蒼白い葉子の顔が映つて居るのが見出された。暗くした電燈の加減で其の顔は遠い距離に置かれた物の樣にひどく小さく、朦朧として浮んで居た。そして彼の女の右の手には何か冷たく光る物が添へられてあつた。

木幕はあわてゝ飛び起きて鏡の前に坐した葉子の背後に迫つた。彼の女は西洋剃刀を拔いて手に握りながら、猶でも剃る時の樣にぢつと鏡に向つて其の顔と、近づけた剃刀の距離とを見定めて居た。

『何をするの？馬鹿な眞似をしちや困る。』

木幕はさう怒鳴つて彼の女の手を捻ぢ上げた。

『さあ、剃刀をお寄越し。寄越さなけりや聲を立てゝ女中を呼ぶよ。』

木幕は彼の女の手から剃刀を奪はうとあせつた。葉子はさう烈しく抵抗せずに其れを彼の手に渡した。

『何故そんな無茶な事をするの？』

『でも先刻別れ話を決めたんでせう。別れゝば私生きて居ないんですよ。』

『先刻は別れなけりや死んでしまふと云つたぢやないか。ぢやあ今度は先刻と反對なんだね。』

木幕は愚痴とも皮肉ともつかない語調で呟いた。葉子の行動がだん／＼常軌を逸して行くのが彼には悲しかつた。そして彼の女のさうした狂熱的な態度に全然壓倒されて、絶對の感激に溺れる事が出來ない彼自身を顧みると、其處にもつと悲しい物があつた。葉子の一身を氣遣ふと同時に、彼自身の安全を謀らうとする利己的の氣持が彼の態度を硬くさせた。別れるとか別れないとか云ふ目先の問題ではなく、彼のさうした情熱の不足が葉子の根本の不滿である事は木幕

けもわかつて居た。

決して別れないと云ふ事を彼は改めて榮子の前で誓つてから、彼の女を再び床に寢かしつけた。奪ひ取つた剃刀を最初懷中へ納めたが、眠つて居る中に轉げ出さうで不安なので、彼は其れを寢床の下へ入れた。

『だが明日から餘程氣をつけなくつちやならない。剃刀を取り上げても臺所には庖丁がある。庖丁を納ひ込んだつて、自殺する方法はいくらもある。』

そんな風に考へ續けると彼はひどく不安になつて來た。榮子が案外素直に剃刀を彼に渡したところを見ると一種の狂言だと云はれない事も無かつたが、さうした狂言を演ずると云ふのが既に普通の精神狀態から外れて居る事だつた。おまけに狂言にしても其れを繰返して居る中にはつひ深入りをし過ぎて飛んだ事になるかも知れなかつた。自殺と云ふ樣な異常な行動に於ては、狂言と實行との相違はほんの一歩だつた。そして自分の爲めに一人の人間を殺す事の豫想は、どんな事情の下に於ても最大の恐怖であるに違ひなかつた。

『祟られた家！呪はれた生活！』

彼は暗い電燈の光に照された室内を見廻しながら心の中でさう呟いた。榮子の云ふ通り二人が最近めつきり陰氣臭くなつたのは全く此の家の祟りであつてくれゝばいゝ。早く明るい家へ引越して、彼の女の氣持がすつかり快活になつてくれゝばいゝ――そんな風に思つても見た。

三

月末になつたので木萩は一度妻子の許へ歸らなければならなかつた。

『今日は會社の歸りにちよいと家へ行つて來る。』

或る日勤めに出がけに彼は榮子にさう云つた。

『さう。ぢやあ何時頃に戻つていらつしやるの？』

『いろ〳〵用があるから遲くなるかも知れない。餘り遲くなつたら泊つて來る。』

木暮の言葉に對して榮子はちよいと不興氣な顏を見せたが、彼は其れに拘はるまいとした。もう廿日餘りも會はない二人の子供を家へ歸つたら直ぐ抱き上げて、ほんの一時間でも二時間でも、彼の女たちに對して良き父親の務めを果さうとする願ひを、彼は自分で正當な物と認めようとした。

朝八時から夕方迄、彼は丸の内の大きなビルデイングの中にある會社の事務室で机に向つて執務して居た。榮子と一緒に家を持つてから、毎日會社へ出るのが彼にはひどく億劫になつて來た。だが會社で仕事をするのは彼に執つて一種の救ひだつた。其れは榮子と子供たちとの間の中立地帶で、額に八の字を寄せても、默つて考へ込んでも、此處では全く安全だつた。そして仕事の合間に煙草を燻ゆらせながら彼はゆつくりと榮子や子供達の事を考へ、兩方へ繋がつた彼の愛着の重みを比べる事が出來た。

『俺の樣な生活をして居る者も世間に例の無い事は無いんだ。さう云ふ人はさう云ふ人で、案外自分の生活を享樂して居るに違ひない。何故俺に其れが出來ないんだらう？　結局俺にはかう云ふ生活が向かないんだ。』

彼はそんな風に考へ續ける。そして彼に向かない樣な現在の生活に彼を陷れた原因を、どうかして自分以外の者に見出さうと彼はあせり始める。妻を責めてみたり、榮子を詰つてみたりするが、何の落着きも得られなくつて、結局皆が不憫になつて來る。いくら考へてみたところで、唯考へる事によつては何の解決も得られない事が明瞭になつて來

る。

「一度にかう何もかも考へる事がいけないんだ。其れが俺を憂鬱にさせ、額に八の字を寄せる樣にさせるのだ。子供たちの側へ行つたら、唯子供たちの事しか思ふまい。そして其の氣持が續く限り、子供たちと一緒に居れば樂しいんだ。」

彼は結局さう考へて、久しぶりで郊外の妻子の許へと足を向ける省線電車をN驛で降りて途中で二人の子供のために玩具を買ひ、彼は夕暮の往來を我が家の方へと歩いて行つた。だが彼の心は少しも明るまなかつた。彼はもう、いや、ずつと先から榮子の事を考へて居た。榮子が彼が居ないのでヒステリイを募らせて居やしまいか。又癪を起して倒れて居やしまいか。女中一人で、手當が出來なくつてうろ／＼して居るかも知れない。事によつたら女中が氣が付く前、あの薄暗い茶の間で舌を嚙み切つて死んでしまふかも知れない。さう思ふと一刻も猶豫がならない氣がして來た。さう云ふ不安な氣持で妻子の許へ歸つても何の役に立たない事が感ぜられて來た。

『あゝ、重い、重い。』

彼は肩を搖るがせながらさう呟いた。自ら背負ひ込んだ心の重荷で憂鬱に堪へられなくなると、彼はよくさう呟いてみるのだつた。

どうせ家へ歸つても晩飯の支度は出來て居ないのだと氣が付いて、彼は路傍の小さなレストランへはいつて簡單な晩飯を濟ませた。外へ出るともう日は暮れて、賑かだが何處か人の氣勢の薄い郊外の街の景色が彼の眼に悲しく染みて來た。兩側の商店の店先に坐つて居る、見覺えのあるかみさんの顏などをちらと眼に留めたりすると、何と云ふ事もなく彼は首を竦めた。

表通りから靜かな住宅が並んだ横町へ曲つて、我が家の前で彼は足を留めた。
家の中からは子供の聲がひそ〳〵聞えて來た。ベルのついた格子を開けて彼が中へはいると、妻が茶の間の唐紙を開けて玄關へ出て來た。二人の子供が其の後ろからそつと顏を出した。

『お父さんだ。お父さんだ。』

次女の町子が先づさう叫んだ。だが次ぎの瞬間長女の縫子が『お父さんの馬鹿！』と怒鳴つて彼を驚かせた。

『お父さんの馬鹿！』

町子も直ぐ聲を合せた。然し其れは唱歌の樣な浮々した語調だつた。そして町子はいきなり木暮の身體に飛び着いて來た。無論憎しみからではなく、嬉しさからだつた。父を馬鹿と呼んでも決して彼に怒られないだらうと云ふ確信を持つた安らかさからだつた。そして彼の反感は皮肉な微笑を浮べた妻に對して向けられた。大好きな父親を馬鹿と呼ばなければならない子供たちに對しては唯限り無き不憫さを感じた。

『そら、玩具だ。玩具を買つて來たぞ。』

木暮はボール箱に納めた玩具を振り翳して、楯の樣に其の陰に身體を隱さうとした。だが子供たちには玩具よりも父親の姿の方がずつと嬉しかつた。長女の縫子も玩具の包みには眼もくれず、妹と同じ樣に父の腕にしがみ着いた。

『お父さん、どうしたの？隨分歸つて來なかつたのね。』

縫子はたつた今父を馬鹿と呼んだ事などはすつかり忘れてしまひ、懐しさうに彼の顏を見上げた。

『うん、お父さんはね、御用があつたんだ。』

彼は子供の頭を撫でながらそつと妻の方を見やつた。妻はもう其の時茶の間の長火鉢の前へ坐り込んで、後向になつ

たまゝ木暮の方を見返らうとしなかつた。

『さあ、綺麗な玩具を買つて來てあげたから二人してお遊び。』

木暮がさう云つて玩具の包みを子供に渡して二階の居間へ上つて行くと、子供たちは直ぐ後から其の包みを持つて父に附いて來た。

『お父さん、何の玩具？』

縫子は包みを開けながら問ひかけた。

『臺所道具だよ。又喧嘩するといけないから二人共同じ物を買つて來た。』

『さう一緒にお父さんも飯事をして遊ばない？』

縫子はボール箱の中から小さなお膳だの、お鉢だの、鼠入らずだのを取出して並べ始めた。其の間に木暮は机の上に載せてある、留守の間に來た五六本の手紙を封を切つて讀んだ。

『よくつて、お父さんがお客様で、町ちやんは子供よ。私お母さんになるわ。』

縫子はお釜からお鉢に御飯を移したり、お膳立をしたりする眞似をし始めた。久しぶりで歸つて來た父親と直ぐさうして一緒になつて嬉しさうに飯事を始めた子供たちの様子を、彼はぢつと見守つた。大まかな感情を持つた縫子に比べて、ずつと神經質な町子は、姉に指揮されて玩具道具の世帶で働きながら、時々父の心を探る様にそつと彼の顏を偸み見た。

『おはまはどうしたの？』

ふと下坐敷が靜かで、女中の姿が見えない樣なので、彼はかう問うた。

『おはまは歸つちやつたわ。』

縫子が答へた。

『其れで代りの女中は來ないの？』

『まだ來ないわ。だからお母さんが寢坊をすると、私朝學校へ行くのに御飯が間に合はないの。』

『ぢやあ冷飯を食べて行くのかい？』

『冷飯はまづくつて私嫌ひだわ。——昨日も今日も食べずに行つたの。隨分お腹が減るわ。』

縫子の言葉を聞いて木暮はひどく子供たちが不憫になつて來た。どんな貧しい家庭の子供たちでも朝飯は食べさせられる。だのに彼の娘は朝飯も食べずに學校へ行くのだ。一時間か卅分早く起きれば十分御飯が炊けるのに、妻は何故それだけの事をしてやれないのだらう？　彼は考へ込んだ。彼は憂鬱になつた。家へ歸つて來た事が少しも彼を樂しくさせなかつた。

『お父さん馬鹿ぢやないわね。お父さんが歸つて來たら馬鹿つてさう云つておやりつて母ちやんが云つたのよ。』

町子は彼が何を考へ耽つて居るかを察して、父の意を迎へる樣な優しい語調で話しかけた。彼は可憐な町子に輕く領き返した。お菓子が無いので紙片を小さく切つてお皿や茶碗の中へ並べ、もうすつかり飯事遊びに夢中になつて居る單純な長女の縫子も、幼ない癖に姉よりずつとよく氣が廻つて、飯事などは其方除けにしてどうかして久しぶりで家へ歸つた父の心に交渉を求めようと努めて居るませた次女の町子も、どつちも同じ樣に彼には慈しまれた。

一時間ばかり彼は子供たちを相手に飯事をして遊んだ。子供は少し倦きて來た。彼はその前からK町の家に淋しく彼の歸りを待つて居る榮子の事が頻りに氣に懸つた。子供たちはどんなに永く彼が家をあけても彼を飽く迄も信じて居る。だが榮子は片時も彼が側に居なければ氣が濟まないのだ。そして彼を恨み、彼を疑ふ心が次第に彼の女の健康を害

ねて行く。木暮が彼の女を全然見捨てゝ顧みないつもりにたらない以上、其れは堪へられない事だつた。

『さあ、もう九時だから皆おやすみ。お父さんが今夜パンを買つて置いてあげるから、明日御飯が間に合はなかつたら、繼子はパンを食べて學校へ行きなさい。』

彼はさう云つて子供たちを階下の寢床へ連れて行き、自分はパンを買ふ爲めに外へ出た。停車場の近くの大きなパン屋でなければ新しい、柔かなパンを賣つて居なかつた。靜かな夜路の砂利を踏みながら彼は停車場前の大通りへ出た。

パン屋の店先に立つて彼がパンを買つて居ると、ふと往來を男の樣に懷手をしながら俯むきがちに歩いて行く小柄な女の姿が眼に着いた。歩きながらさうして懷手をするのは榮子の癖だつた。そして其の後姿が確かに彼の女らしく思はれた。

木暮は急いで代を拂ひ、パンの包みを抱へて女の後を追つた。大通りから暗い横町へ曲る角で、彼は其の女に追ひ着いた。髷無しの七三に結つて、子供の樣な小さな、愛らしい顎を袢纏の襟に埋めた横顔が軒燈の光で横から照し出された。

『どうしたの！　何處へ行くの？』

木暮は榮子の肩を背後から輕く叩いて、息を彈ませながら聲をかけた。

榮子はびつくりして振向いた。

『あら、何處へいらしつたの？買物？』

『僕の事なんかどうでもいゝ。君は何だつてわざ〳〵こんな處へ出て來たの？』

木暮の語調はとげ〳〵しかつた。

『私、あなたのお宅へ伺はうと思つて來たんです。』

葉子は或る決心を見せた昂奮した態度で、其の眼を彼の顏に向けた。

『僕の家へ來てどうするつもりなんだ。そんな譯のわからない事を云つたつて困るぢやないか。僕は直ぐ歸ると云つたぢやないか。子供にパンを買つてやつて、其れから歸るつもりだつたのだよ。』

『いーえ、あなたに會ふためぢやありません。私奧さんにお眼にかゝりたいんです。』

『會つてどうするつもりなの?』

『私今日も朝から一人でつく〴〵いろんな事を考へてみました。私やつぱりどうしても今の樣な生活を我慢出來ないんです。だから奧さんにお眼にかゝつて、よく奧さんのお考へを聞かうと決心したんです。あなたの奧さんがあなたを本當に愛していらつしやるかどうか、其れをはつきり伺ひたいと思ふんです。そして其の上で私の執る途を考へますわ。』

『君の執る途つてどう云ふ事?』

木暮はすつかり狼狽しながらも彼の女の前に立ち塞がつて、歩みを妨げた。

『つまりあなたの奧さんが本當にあなたを愛していらつしやるなら、私もう諦めてあなたと別れますわ。だけれど奧さんがあなたを愛して居なくつて、あなたを放つてお置きになるなら、私奧さんにあなたと今日限りきつぱり緣を切つて頂きますわ。三人がめい〳〵苦しみ續けるより、早くどつちとも決めてしまふ方が良いんですもの。』

木暮は暫く無言で葉子の蒼白い顏を見つめた。いつも〳〵重苦しい思案の陰がさした、彼の女の大きな二つの眼が、今宵はあらゆる疑惑や反省を底深く沈めて、其の上に大きく凝り固まつた一つの強い觀念から彼を突き刺すやうに鋭く

輝いて居た。そして其の觀念に一つの方向を指し示されて、彼の女の狂ほしげな情熱が捌け口を見出さうと心の中で沸つて居る樣子が木暮に感ぜられた。

『何と云ふ奇嬌な行動だらう。簡單な論理だらう。だが榮子はたしかに其れが出來る女だ。』

彼はさう思つた。先夫のYと同棲して居た頃、Yに愛人が出來た事を知つた榮子は其の愛人を訪れ、巧みな計略で夫と彼の女とを落合はせ、其處へ自分も姿を現して夫に自分と其の新しい愛人とどつちを執るかを宣告をさせた。夫は榮子の意氣込みに怖れをなして、即坐に新しい愛人と別れてしまつたと云ふ話を、木暮は榮子から聞いて居た。彼の女は今、其の場合と同じく木暮を是れか彼れかの一つを選ぶべきの退引きならない破目に立たせようと企てたのだつた。

『事情によつては成程其れも一種の解決法かも知れない。だが術の場合には其れは無理だ。そんな簡單な方法で解決がつく物ぢやあない。人は互に愛して居ても別れなければならない場合がある。愛して居なくとも容易に別れられない場合がある。』

木暮はそんな風に考へた。榮子が彼の愛情を自分が獨占して居る事を信じて、強ひて妻を彼の家庭から追ひ退けようと企てたのか、それとも彼の愛情が尙多分に妻の方へ注がれて居ると疑つて、嫉妬からかうした態度に出たのか、どつちとも彼には見當がつかなかつた。

『いけない。そんな事は絕對にいけない。』

木暮は頭を振りながら榮子を押し戻さうとした。

『どうしていけないんです？』

『どうしてつて、そんな簡單な事で話がつく筈が無いぢやあないか。僕に對する愛情の問題で萬事を解決しようと云ふ

のたら、子供も口を出す權利がある。だが皆集つて勝手な事を云ひ合つたら、唯喧嘩になるだけぢやないか。――こんな事をされちや僕が困る。』

木暮は榮子の手を捉へて彼の女を宥めようとしたが、榮子は其れを振り切つた。

『あなたは卑怯です。奥さんに私を會はせるのを怖れていらつしやるのは、つまり私より奥さんが好きだからです。奥さんを苦しめまい。だが私はどんなに苦しんでも平氣で放つて置かうと云ふんです。ようござんす。あなたの氣持はそれでわかりました。』

榮子は行手に立ち塞がつた木暮を睨みつけ、くるりと踵を廻らせてすた〳〵歩き出した。

子供のために買つたパンの包みを木暮は家へ持つて歸りたかつたが、今の場合そんな事をしては居られないので、直ぐ榮子の後を追つた。

榮子は木暮が後からついて來たのを知つて足を早めた。殆ど駈ける樣な早さだつた。そして停車場の方へ行かずに、大通りから向側の狹い露地へ曲つた。

『何處へ行くの？』

木暮が聲をかけても榮子は見向きもしなかつた。まるで案内を知らない此の邊の露地を彼の女は足に任せて滅茶々々に走り拔けた。一度木暮は追ひ縋つて彼の女の手を捉へたが、彼の女は邪慳に其れを振りもぎり、再び一散に駈け出した。

家並が盡きると小さな溝があつて、其の向ふは鐵道線路だつた。榮子は溝を飛び越して鐵道線路の上へ跳り出た。

『待たないかつたら、こんな處へ出てどうするつもりなんだ。』

木暮は逃がさない樣に榮子の兩腕を後ろからしかと抱き締めた。彼の女の小さな胸の中で心臟がどき〳〵跳つて居るのが感ぜられた。

『放して下さい。私は死ぬんです。此處で死んでしまふんです。』

榮子はさう叫んで木暮の強い腕から身體を脫しようともがいた。上半身が自由にならないのを悟ると、彼の女は膝を折つて線路の上へ横たはらうと試みた。

『馬鹿な事をしちやいけない。さあ、早く彼方へ行きなさい。電車が來たらどうする？』

木暮は必死になつて榮子の身體を線路の外へ引摺り出した。暗い夜で、空はどんより曇つて居た。遠くの停車場の構内の高い柱の上に揭げられた赤い信號燈が柱の色を闇に隱されて、宙に浮いた樣にしよんぼり輝いて居た。ぢつと耳を澄ますと、遠くで車輪の軋る音が聞えて、二本のレールが二人の足の下で微かに盪く樣に思はれた。木暮の腕を押し退けようとして居た榮子の肘の力が緩んだ。『死ねたい。』彼の女はさう感じたらしかつた。

『さあ、こんな處を誰かに見られたらどうする？恥ぢを知らないか。』

木暮はさう怒鳴つて一氣に榮子の身體を引き立てた。

『私恥ぢを知つて居ます。だから死ぬんです。』

彼の女はをろ〳〵聲で答へたが、急に力が拔けた樣に線路の側へぱつたり腰を下してしまつた。

木暮は彼の女を抱き起して鐵道用地の柵に凭せかけた。息苦しさうに喘ぎながら、榮子は其處で又蹲んでしまつた。

車輪の響が近づいた。

『電車が來るな。』

さう思つて木暮は弱んだ栄子の肩先を抑へた。だが彼の女はもう立ち上る元氣も無ささうだつた。二人は默つてところ〳〵錆び、ところ〳〵光つた眼の前のレールを見つめた。遠い旅に出た時の様な大きな淋しさがふと二人の心を襲つた。やがて烈しい震動を大地に與へながら電車が走つて來た。二人が今爭つて居た眼の前の線路の上を、黑い、大きな幾つかの車輪が滑かに走り去つた。明るい電燈がともつて、樂しげな乘客の顔が窓の外に覗き出た其の電車の前面が、側面が、そして赤い尾燈が掲げられた最後の車の後部が、幻影の様に二人の眼の前にちらついて消えた。

『御免なさい。御免なさい。』

突然栄子は聲高くさう叫んで木暮の手を握りしめ、烈しい啜泣きを續けた。

四

栄子の健康の惡い日が其れから幾日か續いた。夜も殆ど眠られず、三度の食事も木暮が無理に口を開けて押し込む様にしてやらなければ自分では容易に執らなかつた。そして寢不足な、赤く血走つた眼をきよとんとさせて、彼の女は終日居間の長火鉢の前でぢつと考へ込んで居た。

『何をそんなに考へて居るの？』

木暮がさう問うても、彼の女は『え。』と一人で頷いて居るだけだつた。どんな話題も、どんな興味も、即坐に彈ねつけてしまふ様な一克さが彼の女の態度にあつた。

自殺の計畫を怖れて木暮はかなり栄子の身邊に氣を配らなければならなかつた。剃刀やナイフは皆彼の女に知れない處へ隱してしまひ、女中には台所の庖丁を栄子に貸さない様に、そして又晝間彼が會社へ行つて居る間は、時々そつと

榮子の居間を覗いてみる樣に注意した。何故彼の女が死なねばならないのか、木暮にはわかる樣で結局わからなかつた。彼が思ひきつて妻子を振り棄てない事が彼の女を惱らせたのは確かだつたが、彼が彼の女に不實な、冷酷な態度を示したのでない限り、榮子が自殺を企てる原因は無い筈だつた。一切は彼の女の病的な神經の昂奮からだつた。だがそんなになつても彼の女は木暮の爲めには今迄通り親切に立ち働いた。夕方家へ歸つて來ると、屹度彼の好きなお茶が膳の上に載せられてあつた。終日茶の間にぢつと蹲つて居る榮子が、立ち上つて働くのは唯木暮の爲めにお膳立をする時だけだつた。そして其の時は如何にも働きがひがある樣に機嫌好く台所から茶の間へと動き廻つた。

もう木暮は今迄の樣に妻子の事などは考へて居る暇が無かつた。會社で働いて居ても絕えず榮子の事が氣懸りになつた。そして四時打つて一日の勤めが終ると、飛ぶ樣にして彼は榮子の許へ歸つた。

或る夕方、彼がいつもの樣に家へ歸ると、榮子は格子口に彼を出迎へて、訝かしさうに『今日は何處へいらしつたの？』と問ひかけた。

『何處つて決つて居るぢやないか。會社だよ。』

木暮はさう答へた。

『だつて今日は日曜でせう。奥さんの處へいらしつたんですね。早かつたわね。』

彼の女は少しも皮肉を交へない、穩かな語調で言葉を續けた。

『困るね、考へ違ひをしちや。今日は火曜だよ。――ほら。』

木暮はカレンダアを指した。几帳面な榮子は毎朝起きると忘れずに一枚づゝカレンダアの紙を剝がして居た。そして黑インキで印刷された、火曜日の日附が其處に現れて居た。

『をかしいわね。今日は確かに日曜の筈なんだが。――あなた勝手に暦を剝がしたんぢやなくつて？』

『そんな馬鹿な事をするもんか。君が毎朝自分で一枚づゝ取つて居るんぢやないか。ぢやあ新聞を見るといゝ。新聞にもちやんと火曜日と書いてあるよ。』

木暮は簞笥の上に載せてあつた朝刊の新聞を取り上げて菜子に示した。

『それ見給へ。ちやんと火曜日としてあるぢやないか。一昨日が日曜で、僕は會社へ行かなかつた事を覺えて居るだらう。』

『變だわ。新聞迄嘘を書いてあるんだわ。』

菜子は新聞の欄の上を見て不審さうに首を捻つた。

『どうかして居る。』

木暮はさう呟いた。飽く迄不審さうに考へ込んで居る菜子の樣子が、彼には急に不氣味になつて來た。

晩飯を食べてから木暮は横になつて夕刊を讀んだ。卅分ばかり立つて彼がふと顏を揚げると、先刻からぢつと彼の横顏を覗き込んで居たらしい菜子は徐ろに口を開いた。

『奥さんどうなすつて？　どんなお話をなすつたの？』

『何がさ？　一體いつの事さ？』

びつくりして木暮は問ひ返した。

『だつて先刻お家へいらしつたんでせう？』

『まだそんな事を疑つて居るのかい？　家へなんか行きはしないつたら。君は少し頭がどうかしたね。今日は火曜日な

のに日曜だと云ひ張つたりして。』

『奥さん、今夜此處へいらつしやるんでせう。そんな事をわざ〳〵しなくつたつて、私いつでもちやんと別れますわ。』

榮子は木暮の言葉には答へないで、眼をぢつと見据ゑたまゝ妙に空虚（うつろ）な聲で呟いた。

『困つちまふよ。一體どうしてそんな邪推を廻すんだらう。そんな馬鹿な事を云ふもんぢやない。君は寢が足りないので、頭が變になつたんだよ。』

木暮は起き上つて蒼白い榮子の顔をそつと覗き込んだ。大變な事になつてしまつた、彼はさう思つた。身體が悚（すく）んで行く様な恐ろしさが彼の上に蔽ひ被さつて來た。

『あなたのやり方はずるいわね。何にも云はないで相手に自分の氣持を察しさせるんですもの。だけど、私だから良い様なものゝ、外の人だつたらさう何もかも直ぐ察してはくれないわ。――其れに今朝だつて、私が姉さんの處へ出さうと思つて、机の上へ載せて置いた手紙を默つて取つてしまふなんて、隨分卑怯だわ。』

だが木暮はそんな手紙を無論知らなかつた。其の朝寢坊をしたゝめ、彼は起きると直ぐ朝飯を掻つ込んで會社へ出勤したので、机の上に榮子が認めた手紙が置いてあつたかどうかさへ氣が付かなかつた。

『何故そんな變な事ばかり云ふの？　もう少し氣を靜めて考へてみなくつちやいけない。僕は手紙が机のうへにあつた事さへ知らないんだ。姉さんへ君が出す手紙を僕が取つてどうするの、そんな事をすれば直ぐわかるぢやないか。』

『出がけにちよいとあなたは机の方へ振り向いたでせう。あの時そつと手紙を取つて洋服のポケットへ入れてしまつたのね。』

『そんな事をする筈が無いと云つたら！』

『手紙は會社で開けて讀んだのですか、もう破いてしまつたでせう。』

菜子は木暮の辯解を一切聞き入れず、きよとんとした眼をしながら譫言の樣に云ひ續けた。

『本當に其の手紙を書いて机の上に置いたのなら何處かにある筈だ。』

さう思つて彼は立ち上り、机の周りを熱心に探してみたが、何處にも其れらしい物は見當らなかつた。菜子は默つて、自分に關係の無い事の樣に外方(そつぽ)を向いたまゝだつた。木暮は苛立つて來た。悲しくなつた。そんなでたらめを云ふ程菜子の頭がもう狂つてしまつたかと思ふと、彼はどうしていゝかわからなくなつた。

『さあ、後生だから氣を落着けておくれ。』彼は菜子の手を執り、氣が遠くなつた人間の意識を呼び醒す樣に耳許に口を近づけて、一語一語に力を籠めて云つた。『しつかりしてくれなければ困るよ。君にそんな變な事ばかり云はれると僕はとても悲しい。そんなに頭の調子が狂ふ程僕が君を心配させたのだと思ふと、何と詫びていゝかわからない。だが僕の顏が見え、僕の言葉が聞えるなら、どうか僕を信じてくれ。今日が日曜で、僕が會社に行く振りをして家へ歸つたとか、君が姉さんへ出すつもりで書いた手紙を僕が取つてしまつたとか、そんな事は皆噓だ。僕が辯解する迄もなく、ゆつくり氣を靜めて考へてくれゝば屹度わかる事なんだから。』

彼は醫師が患者を見る樣な眼で、彼の言葉に對する理解が菜子の顏色にどんな反應を與へるかをぢつと見守つて居た。だが彼の眼は直きに熱い涙で曇つて來た。彼の心は忽ち烈しい情緒で擾亂された。物音に驚いた小鳥の樣に首を傾げながら、靜かに、流れる樣に彼の方へ寄つて來た、黑い、つやゝかな菜子の二つの眼には、そんなにも彼を昂奮させる、懷しい數々の思ひ出が繫がつて居るのだつた。そして彼の女の、其の二つのつやゝかな眼からも、今靜かな涙がぽた、ぽた、ぽたと落ちて來た。

五

睡眠劑を少し餘分に飲ませたが、榮子は其の晩も碌に眠られなかつた。翌日木暮は會社を休んで終日彼の女の側に附添つて居た。

木暮に對して榮子は極めて從順だつた。いつもの樣に彼の好きなお茶を造へる爲めに臺所で働いたりした。だが時々立つて居ると眩暈を催して倒れかゝつた。

『私、もう直き死ぬかもしれないわ。』

心配さうに側に附いてゐる木暮の顏を見返つて、榮子はそんな事を呟いた。其の晩も彼の女は熟睡出來なくつて、翌朝床を出た時は物を云ふ氣力も無い程精神が朦朧として居た。

木暮は朝飯の代りに牛乳と玉子を無理に榮子の口へ入れたが、胸がむか〳〵すると云つて、彼の女は直ぐ其れを吐き出してしまつた。

蒲團を敷いて彼の女は又其の上に横になつた。木暮はぢつと其の側に附添つてゐた。どうしたらいゝか、彼には全く思案に餘つた。榮子の身の上が氣懸りで、二晩も彼はおち〳〵眠れなかつた爲め、ひどく疲れてしまつた。時々細く眼瞼を開けて又閉ぢしまふ彼の女の蒼ざめた顏を見やりながら、壁に凭れて彼もうと〳〵と居眠りを續けた。

日が暮れかゝつた頃、榮子は立ち上つていきなり戸外へ出ようとした。

『どうしたの！何處へ行くつもり？』

あわてゝ木暮は彼の女の抱き留めた。

『變な人が外で家の中の樣子を窺つてゐるらしいのよ。私乾度殺されるわ。』

『そんな馬鹿な事はないよ。何の爲めに君を殺しに來るのだ？』

『何の爲めだか知れないけれど、先刻から外でひそ〳〵話をして居る聲が聞えるわ。』

木暮は唯悲しさうな顏を示した。そして彼の女を安心させる爲めに格子を開けて外へ出てみたが、無論家の前には誰も姿が見えなかつた。

『誰も居やしないよ。安心おし。』

『ぢやあ逃げて行つてしまつたのね。乾度夜中にやつて來るわ。』

言葉で彼の女をどう說き伏せても無益だと思つたので、木暮は榮子の氣を變へさせる爲めに、努めてのんきさうに他の話を初めた。そして普通の話になると、彼の女の應答には別して怪しい節も無かつた。唯時々興味が無いのだか、其れともよく理解出來ないのだか、ぽかんとした顏つきをして返事が少し遲れた。

『氣持はどう？何か食べられさうかね？』

晚飯の時刻になつたので、木暮はかう問うた。

榮子は鮨が少し食べてみたいと云ひ出した。女中に買ひにやつて彼の女に勸めると、朝から何も食べて居ないのだつたが、たつた三つばかりしか口へ入れなかつた。

『もう澤山。』

お茶を飲んで、榮子は又ぐつたり疊の上に橫になつた。

九時頃に彼の女は又起き上り、戶外へ誰か忍び寄つたと云つて騷ぎ立てた。

『誰も居やしないよ。さあ、落着いておくれ。後生だから氣を靜めておくれ。』

木暮は彼の女の身體を抱き締め、『殺されるんだわ。私、今夜殺されるんだわ。』と喚いて居る彼の女を必死になつて抑へつけた。重苦しい、えたいの知れぬ恐怖が蔽ひ被さつて來て、彼も同じ樣に頭が變になつて行くのを感じた。

其れから二日目の朝、東北のN市から榮子の姉夫妻が急電に接して上京した時、木暮は疲れきつて榮子と枕を並べて倒れて居た。姉夫妻の顏を見ると安心して、彼は睡眠劑を飮んでぐつすりと眠つた。幾日さうして氣が狂つた榮子のに附添つてあらゆる心勞を重ねたかわからなくなつた程、彼の頭腦の働きは混亂して居た。

姉の夫はN市で相當堅實な營業を續けて居る商人だつた。五個月程前、木暮は始めて彼に會つた。姉夫婦は榮子がさうして木暮と不自然な世帶を持つのに不贊成で、彼の女の決心を飜へさせる爲めに其の時わざ〳〵上京したのだつたけれど、結局榮子の堅い決心と熱情とに負かされ、あべこべに家を持つ手傳ひをして歸つて行つたのだつた。

木暮から手短かに事情を聞いた二人は、彼と心を協せて榮子の昂奮を取り靜めるためにいろ〳〵努めたが、彼の女精神の異狀は容易に直らなかつた。

『皆で私をいぢめてばかり居て困るわ。休まして、ね、少し休まして。』

三人して彼の女を說き諭さうとすると、榮子は顏を顰めてそんな事を云つた。姉夫妻が來てから少し心丈夫になつたと見えて、彼の女は眠れる樣になつた。木暮も姉夫婦に留守を托し、痛む頭を抱へる樣にして會社へ通つた。

『木暮さん、今日も晝間いろ〳〵話をしてみたのですが、やつぱり駄目でござんす。どうも話が變で。』

夕方、木暮が會社から歸つて來ると、姉の夫はそんな風に其の日の榮子の行動やら、語つた言葉やらを彼に報告し

た。

『あなた、別れませう。私姉さんの家へ連れて行つて貰ひます。其の方がいゝわ。』

木暮と二人で向ひ合つて居る時、榮子はふとさう云ふのだつた。

『姉さんの家へ行つてどうする？ そんな事より先づ身體を直さなければ駄目だよ。』

『身體なんか何ともないわよ。唯私を殺さうとして附き纏つて居る人があるだけだわ。』

『又始まつたね。其れが病氣なんだよ。一體誰が君を殺さうと云ふんだ？』

『あなたの廻し者でせう。此の頃では姉さんや、兄さん迄あなたとぐるになつて居る樣だけれど、どうせ殺されるんなら、私、姉さんの側で死にたいわ。』

そして榮子は又えたいの知れぬ恐怖を潛めた不氣味な眼を凝らし、木暮は又憂はしげに眉を顰め、話は其れで中絶されてしまふのだつた。

姉夫妻は十日餘り榮子の家に滯在して居たが、彼の女の病狀は少しも快方に赴かなかつた。商賣を捨てゝいつ迄も上京して居られないので、二人は榮子を連れてN市へ歸る事になつた。N市の大學で診察を受け、都合によつたら入院させる樣に木暮は彼の女の處置を姉夫婦に托した。

出發の日、木暮は朝から會社を休み、姉夫妻と運送屋の人夫を指揮して荷造りをした。茶箪笥、長火鉢、机、下駄箱、家を持つた當坐、彼が榮子と二人で近所へ散歩に出てはぼつ／＼買ひ集めたさうした世帶道具が順々に布や莚に包まれて縛り上げられた。細かい物は屑屋にでも賣り拂つてしまふ樣に木暮は義兄に頼んだのだけれど、彼は榮子が病氣が直つて又木暮と世帶を持つ時の用意にと、鍋、釜、俎板の類迄悉く荷造りを一先づN市の家へ送る手筈をした。

十時の夜行に乘る爲め、榮子と姉夫妻は九時少し前に家を出た。木暮は近所の出入商人の家を二三軒廻つて勘定を濟ませ、其れから直ぐ上野へ行つた。

十時十分程前だつたけれど、榮子たちはもう列車に乘り込んだらしく、改札口の前の廣場に姿が見えなかつた。木暮は入場券を買つてプラットフォームへはいらうとしたが、入場券は賣つて居なかつた。震災後、プラットフォームの混雜を恐れて一切入場券を賣らず、從つて誰もプラットフォーム内へ入場を許さないと云ふ事だつた。

木暮はひどく狼狽した。つい一時間前別れた榮子であつたけれど、もう一眼是非此處で會つてしみ〴〵別れを惜しみたかつた。頭が變になつた榮子であつたが故に、生きて再び會へるかどうかわからない榮子であつたが故に――

改札口に立つた若い驛員に入場の便宜を計つてくれる樣に頼んだが駄目だつた。

『ぢやあ驛長に合はして貰ひたい。』

木暮はさう云つて驛長室へ馳け込んだ。赭ら顏をした中年の助役がテーブルに身體を載せかけて頻りに電話を聞いて居た。木暮は默つて其の電話の濟むのを待つた。發車時刻が迫つて來るので、彼は氣が氣でなかつた。

『ちよい見送りをしたいんですが、プラットフォームへ行つてはいけないでせうか？』

助役が受話器をフックへ掛けた途端に木暮は帽子を取つてお辭儀をしながら云つた。

『さあ！震災後入場は出來ない事になつて居るんですよ。まあ、普通の見送りなら見合せて貰ふんですた。』

事務的な語調で助役は答へた。

『普通の見送りぢやないんです。病人なんです。一眼會つて力を附けてやりたいんです。かあいさうな病人なので………』

彼の聲は顫へた。眼はぽつと潤んで來た。

『ぢやあ、まあ、折角此處迄來たんだからちよいと行つてらつしやい。』

助役は暫く木幕の顔を見つめた後でさう云つた。前と同じ様に事務的な、だが何處か溫情の籠つた聲だつた。

『有難うございます。』

木幕は禮を云つて直ぐプラットフォームへ馳けつけた。長い列車を最後部の車室から順々に覗いて行く中に、姉と並んで蒼白い横顔を硝子窓に映して居る榮子の姿が直き見出された。木幕は彼の女の名をプラットフォームから呼び立て、途中で買つた果物の籠を其の手に渡した。

『なあに、ぢきに直りますよ。つまり此の人が餘りあなたを好きになり過ぎて、氣が變になつちやつたんです。』

人の好い義兄は窓際に首を出し、木幕を慰める様にさう云つた。

直るだらうか、本當に直るだらうか、彼の女が早くよくなつてくれる事を切に祈る思ひは胸に充ちて居たが、必ず直ると云ふ確信が彼に與へられてなかつた。若し榮子の精神の異狀が一生直らなかつたら、若し彼の女が自殺したら、彼はどうしたらいゝだらう。彼がもつと早く、もつと無造作に、彼の女の欲するまゝの生活にはいつたら、彼の女は氣が狂はないで濟んだかも知れない。だが彼の女が彼を連れて行かうとするのは浮世の外だ。凡ての義理と絆とを絶した世界だ。氣が狂つた事は榮子の不幸だつた。だが氣が狂はない事は彼の不幸だつた。榮子と別れてから彼は一生癒えない心の痛手に惱まされねばならないのだ。此の世の中の何物も、彼があんなに愛し、其の愛に溺れて居る子供たちも、彼の此の痛手を癒やすには何の力も持つて居ない……

ふと木幕はいつか彼の愛情を疑つて責めた榮子の爲めに一生涯彼の女に對する愛は決して變らないと云ふ古風な證文

を聾かされた事を思ひ出した。

『こんな物、何枚書いて貰つたつて氣持が變れば何にもならないわ。』

さう云ひながらも彼の女は其の時、其の證文を疊んで簞笥の抽斗へ納めた。

『あの證文を後で誰かゞ見たら俺を嗤ふだらう。』木暮はさう考へた。『いや、嗤はれたつて構はない。俺は名も無い會社員だ。そして俺が榮子を愛した事は本當なんだ。今だつてあの證文を書いた時とちつとも變らずに愛して居る！』

汽笛が鳴つて列車は徐々に動き出した。

『ぢやあ左樣なら。』

其れ迄默り込んで居た榮子が窓の緣から小さな、白い顏を覗かせながらさう挨拶した。

木暮はふと榮子の仲の善い友人が結婚して後夫に死別れた時、夫が臨終の床で『左樣なら、』と枕邊を取卷いた人たちに挨拶すると、父母や姉たちは皆泣き崩れて一言も物が云へなかつたのに、其の妻である榮子の友達だけがはつきり『左樣なら。』と返事をした。後で父母や姉があんな悲しい時には物が云へるものではない。其れを左樣ならと平氣で返事をしたのは薄情者だと云つて嫁を非難したと云ふ話を思ひ出した。其の話を彼に傳へた時、榮子は本當に愛して居ればこそ、『左樣なら。』と返事が出來たのだと云ふ解釋をして、其の友達を辯護した。

『左樣なら！たつしやでね。』

木暮は『左樣なら』と云ふ言葉から其の逸話を思ひ浮べながら、あわてゝ自分も同じ言葉を繰返した。二人が今迄同じ深い愛情を持ち續けた事はやつぱり二人の幸福だつた——彼は帽子を取つて頭を下げた。急に身體中の力が拔けた樣な氣がして、眼頭が熱く滲んで來た。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區新右衛門町　大東館
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛社
京都市七條停車場前　共盛社
同　新町通七條南入　大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◉定價金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれは一ケ年分御の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割とども頁數の都合にて變更することあるへし。

次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豐國通信社　日本廣告社
信賴社　金蘭社　一星社

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むへし
一振替貯金 口座番號は東京三三四番　長野三二〇五番なり
一郵劵代用 は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすへし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれは雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢
　（集金委托料及送料共）
一中央公論及婦人公論 代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ
一受領證請求 は必す返信料を要す

大正十四年九月廿一日印刷納本
大正十四年十月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 長丸ノ內三〇二一（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

東京小石川研精社印刷